「選ばれる青森」への挑戦

青森県の希少な野生生物

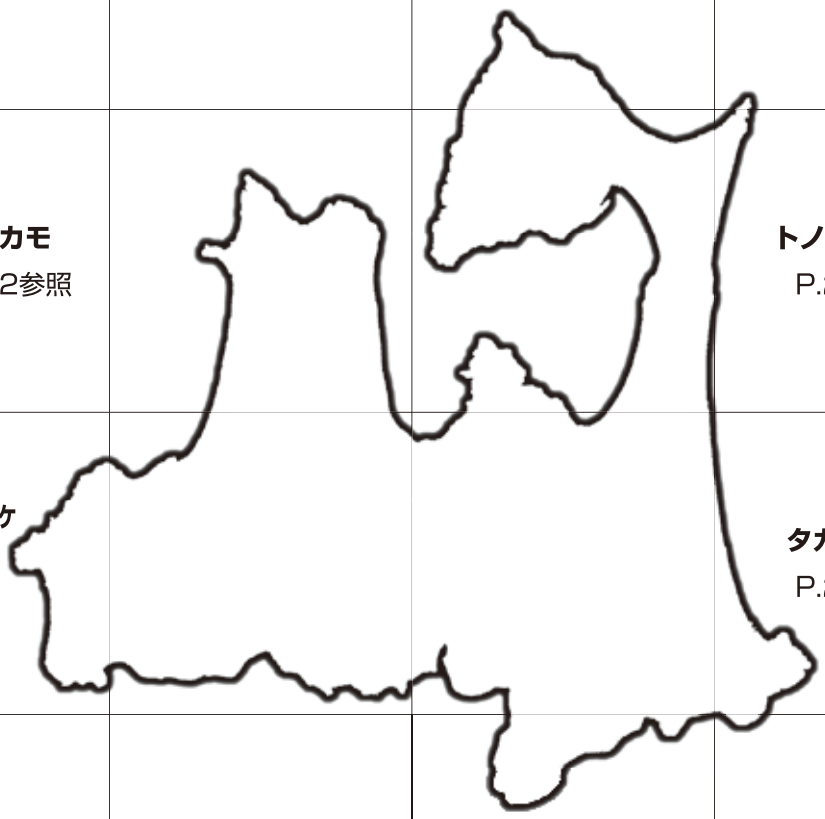
―青森県レッドデータブック（2020年版）―

２０２０年３月

青　森　県

■表紙写真説明

コクガン 口絵７、P.215参照	**マリモ（ヒメマリモ型）** 口絵５、P.135参照	**ヤマトオサガニ** 口絵12、P.364参照	**ササオカゴケ** 口絵４、P.122参照
チトセバイカモ 口絵２、P.42参照			**トノサマガエル** P.232参照
オオウラヒダイワタケ 口絵５、 P.142参照			**タカチホヘビ** P.227参照
ホンサナエ 口絵９、P.257参照	**ヤチヒロヒダタケ** 口絵５、P.151参照	**キタノメダカ** 口絵８、P.240参照	**コヤマコウモリ** 口絵６、P.179参照



青森県の希少な野生生物

―青森県レッドデータブック（2020年版）―

２０２０年3月

青　森　県

発　刊　に　あ　た　っ　て

私たちが暮らす青森県は、世界自然遺産白神山地をはじめ、十和田八幡平及び三陸復興国立公園、下北半島及び津軽国定公園、ラムサール条約登録湿地「仏沼」など、四季の彩り美しい優れた自然環境に恵まれています。また、県内には希少価値の高い種や他地域では見られない特異な生態を有する野生生物が多種多様に生息・生育しています。これらの希少な野生生物を保護・保全し、かけがえのない自然を次世代へ引き継いでいくことは、現代を生きている私たちの大切な使命です。

このため、県では、県政運営の基本方針である「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」に基づき、野生動植物の生息・生育環境の保全や外来生物による生態系への影響の防止など、生物多様性を守るための取組を推進しているところです。

今年、2020年は、自然と共生する世界の実現をめざして、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）で採択された世界目標である「愛知目標」の目標年に当たります。希少な野生生物を含む生物多様性の保全を推進し、本県の豊かな自然を守り、しっかりと未来につないでいきたいと考えています。

本書は、本県の豊かな自然環境の状況を示す指標となる希少な野生生物の現状を把握し、種の希少性や保護の重要性などについての普及啓発を図るために取りまとめたものです。

本書により、多くの県民や関係者の皆様が、本県の希少野生生物についての認識を一層深め、本県の自然環境が将来にわたり保護・保全されていくことを願っています。

結びに、本書の作成に御協力いただいた「青森県レッドデータブック改訂検討会」の委員の方々をはじめ、調査、研究、執筆、編集等に携われた関係者の皆様、資料や写真の提供をいただいた方々に厚く御礼申し上げます。

2020年３月

青森県知事　三　村　申　吾

維管束植物

イブリハナワラビ（A）P.22参照
2016年，三沢市，須藤智道

アカハナワラビ（A）P.23参照
2016年，三沢市，須藤智道

チャセンシダ（A）P.23参照
2016年，東通村，須藤智道

ネムロコウホネ（A）P.24参照
2018年，十和田市，須藤智道

クロミノコジマエンレイソウ（A）P.27参照
2011年，つがる市，木村啓

ヤチラン（A）P.32参照
2018年，十和田市，須藤智道

クリイロスゲ（A）P.35参照
2016年，東通村，須藤智道

アオバスゲ（A）P.36参照
2018年，五所川原市，木村啓

口絵 1

イトナルコスゲ（A）P.37参照
2017年，東通村，須藤智道

チャボイ（A）P.39参照
2017年，六ヶ所村，須藤智道

エゾキケマン（A）P.41参照
2017年，東通村，須藤智道

オキナグサ（A）P.42参照
2017年，八戸市，須藤智道

チトセバイカモ（A）P.42参照
2018年，十和田市，須藤智道

ベニバナヤマシャクヤク（A）P.43参照
2017年，階上町，須藤智道

エゾノウワミズザクラ（A）P.44参照
2002年，五所川原市，木村啓

ホロムイイチゴ（A）P.45参照
1975年，五所川原市，木村啓

口絵 2

ホザキシモツケ（A）P.45参照
2016年，階上町，須藤智道

クロビイタヤ（A）P.48参照
2016年，八戸市，須藤智道

ミドリアカザ（A）P.51参照
2018年，八戸市，須藤智道

サクラソウ（A）P.52参照
2016年，八戸市，須藤智道

ムラサキセンブリ（A）P.54参照
2016年，八戸市，須藤智道

コカモメヅル（A）P.55参照
2016年，階上町，須藤智道

スギナモ（A）P.56参照
2018年，青森市，須藤智道

ヒナノウスツボ（A）P.57参照
2016年，八戸市，須藤智道

口絵 3

ムシャリンドウ（A）P.58参照
1999年，深浦町，木村啓

エゾノリュウキンカ（B）P.80参照
2019年，東通村，須藤智道

アナマスミレ（B）P.87参照
2008年，深浦町，木村啓

ハチノヘトウヒレン（B）P.99参照
2018年，八戸市，須藤智道

ハナビゼリ（B）P.100参照
2016年，八戸市，須藤智道

蘚苔類

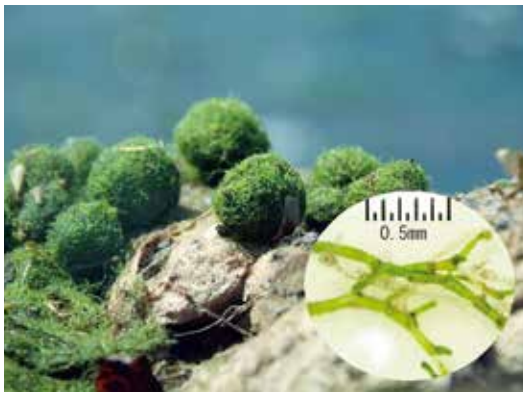
ハッコウダゴケ（A）P.120参照
2001年，青森市，太田正文

ササオカゴケ（B）P.122参照
2017年，青森市，太田正文

コムチゴケ（B）P.124参照
2013年，むつ市，太田正文

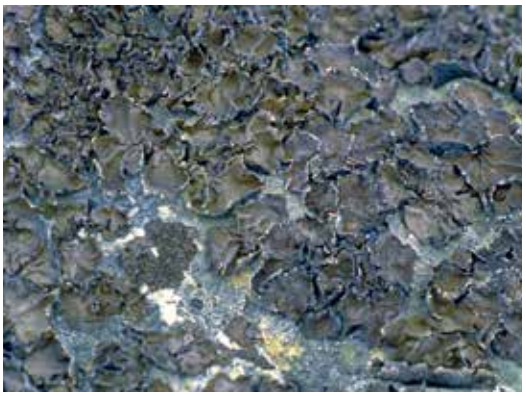
口絵 4

淡水藻類



マリモ（ヒメマリモ型）（A）P.135参照
2008年，三沢市小川原湖野口，安藤一次

地衣類



オオウラヒダイワタケ（A）P.142参照
1987年，佐井村，柿崎敬一

菌類

アカハナビラタケ（A）P.151参照
2004年，青森市月見野，工藤伸一

タネサシヒメシロウラベニタケ（A）P.151参照
1999年，八戸市種差，工藤伸一

ヤチヒロヒダタケ（A）P.151参照
2001年，青森市桑原，工藤伸一

コカンバタケ（A）P.152参照
2010年，十和田市蔦，工藤伸一

ナガミノクロサラタケ（B）P.153参照
2009年，青森市田代平，工藤伸一

クロムラサキハナビラタケ（B）P.154参照
2013年，十和田市蔦，工藤伸一

口絵 5

ナナイロヌメリタケ（B）P.155参照
2004年，十和田市増沢，工藤伸一

ミヤマシメジ（B）P.155参照
2007年，十和田市増沢，工藤伸一

ヤマドリタケ（B）P.156参照
2003年，青森市田代平，工藤伸一

哺乳類

コヤマコウモリ（A）P.179参照
2001年，鰺ヶ沢町，向山満

オコジョ（D）P.185参照
2010年，西目屋村，飛鳥和弘

ニホンモモンガ（D）P.185参照
1982年，平内町，山口典昭

鳥類

タンチョウ（Ex）P.193参照
2012年，つがる市，松原一男

シマクイナ（A）P.195参照
2010年，三沢市，宮彰男

ケイマフリ（A）P.197参照
2011年，東通村，宮彰男

イヌワシ（A）P.198参照
2016年，西目屋村，飛鳥和弘

クマゲラ（A）P.199参照
2008年，白神山地，山田兼博

オオセッカ（A）P.200参照
2010年，三沢市，宮彰男

オジロワシ（A）P.197参照
2012年，東北町，宮彰男

シノリガモ（B）P.201参照
2004年，むつ市，宮彰男

ハヤブサ（B）P.211参照
2017年，八戸市，関下斉

コクガン（C）P.215参照
2010年，八戸市，宮彰男

口絵７

爬虫類

シロマダラ（D）P.227参照
2008年，弘前市久渡寺，笹森耕二

両生類

ツチガエル（C）P.232参照
2018年，平内町，笹森耕二

汽水・淡水魚類

シナイモツゴ（A）P.237参照
2006年，青森市，五十嵐正俊

ハナカジカ（A）P.238参照
2016年，田子町，佐原雄二

キタノメダカ（B）P.240参照
1999年，青森市，佐原雄二

トミヨ属淡水型（B）P.241参照
2006年，弘前市（旧岩木町），渡邊仁咲

カジカ大卵型（C）P.243参照
2007年，弘前市，佐原雄二

昆虫類

カトリヤンマ（Ex）P.252参照
1963年，弘前市，奈良岡弘治

メガネサナエ（Ex）P.252参照
1962年，青森市浪岡，奈良岡弘治

トラフトンボ（Ex）P.252参照
2012年，岩手県，高橋克成

ムツアカネ（Ex）P.253参照
2010年，秋田県，高橋克成

ヤマキチョウ（Ex）P.253参照
1959年，五戸町，室谷洋司所蔵

オオルリシジミ（Ex）P.253参照
1978年，岩木山，工藤忠

オオウラギンヒョウモン（Ex）P.254参照
1985年，田子町，一戸清志

オオセスジイトトンボ（A）P.256参照
2008年，つがる市，奈良岡弘治

ホンサナエ（A）P.257参照
2008年，東通村，奈良岡弘治

ミツモンケンモン（A）P.261参照
2005年，五戸町，室谷洋司

ウスバカマキリ（B）P.264参照
2002年，五所川原市（旧市浦村），市田忠夫

タイワンナガマキバサシガメ（B）P.264参照
2002年，六ヶ所村，市田忠夫

イカリアオカメノコハムシ（B）P.269参照
2014年，八甲田山，古木誠

ヒメギフチョウ（B）P.273参照
2008年，夏泊半島，工藤誠也

スジボソヤマキチョウ（B）P.273参照
2018年，青森市，室谷洋司

キタアカシジミ（B）P.274参照
2008年，つがる市，工藤忠

カバイロシジミ（B）P.274参照
2006年，今別町，工藤誠也

オオゴマシジミ（B）P.274参照
2007年，七戸町，工藤誠也

シラカミナガチビゴミムシ（C）P.285参照
1993年，深浦町白神岳，山内智

オソレヤマミズギワゴミムシ（C）P.285参照
1995年，むつ市恐山，山内智

オオチャイロハナムグリ（C）P.292参照
1998年，十和田市八甲田山地，山内智

チビヒサゴコメツキ本州亜種（C）P.293参照
1992年，弘前市岩木山，山内智

ルイヨウマダラテントウ（C）P.294参照
2016年，十和田市蔦，山内智

モンスズメバチ（C）P.303参照
1997年，弘前市弥生，山田雅輝

ニッポンハナダカバチ（C）P.303参照
2004年，つがる市，山内智

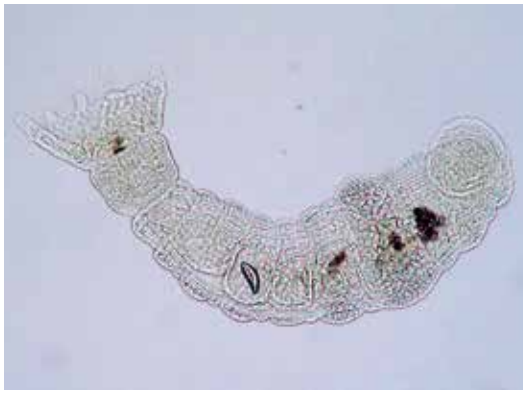
シモヤマギングチ（C）P.304参照
1997年，八甲田山，山田雅輝

シロアシクサレダマバチ（C）P.305参照
2007年，弘前市岩木山，山田雅輝

昆虫類以外の無脊椎動物

ホウザワイソギンチャク（B）P.357参照
2010年，むつ市，武田哲

ウミニナの殻上に付着するツボミガイ（B）P.357参照
2010年，むつ市，武田哲



イワキザリガニミミズ（B）P.359参照
2014年，弘前市，大高明史

ヌカエビ（C）P.364参照
2001年，深浦町，大高明史

ヤマトオサガニ（C）P.364参照
2010年，平内町，武田哲

ウミカニムシ（C）P.365参照
2005年，むつ市芦崎，三上春文

―目　次―

表紙写真説明
発刊にあたって
口絵

１　総論
（１）青森県レッドデータブック（2020年版）作成の経緯と目的 …… 1
（２）検討・執筆体制 …… 2
（３）青森県レッドデータブック（2020年版）カテゴリー定義 …… 3
（４）選定結果 …… 4
（５）凡　　例 ……15

２　各論
（１）青森県の野生生物の概要 ……17
（２）植物
１）維管束植物
①概説 ……19
②本文 ……20
③引用文献 …… 117
２）蘚苔類
①概説 …… 119
②本文 …… 120
③引用文献 …… 132
３）淡水藻類
①概説 …… 134
②本文 …… 135
③引用文献 …… 140
４）地衣類
①概説 …… 141
②本文 …… 142
③引用文献 …… 149
５）菌類
①概説 …… 150
②本文 …… 151
③引用文献 …… 174
（３）脊椎動物
１）哺乳類
①概説…… 175
②本文…… 177
③引用文献 …… 188

２）鳥類
①概説 …… 192
②本文 …… 193
③引用文献 …… 225
３）爬虫類
①概説 …… 226
②本文 …… 227
③引用文献 …… 228
４）両生類
①概説 …… 229
②本文 …… 231
③引用文献 …… 233
５）汽水・淡水魚類
①概説 …… 234
②本文 …… 236
③引用文献 …… 248
（４）無脊椎動物
１）昆虫類
①概説 …… 250
②本文 …… 252
③引用文献 …… 335
２）昆虫類以外の無脊椎動物
①概説 …… 354
②本文 …… 355
③引用文献 …… 371
（５）青森県レッドデータブック（2010年改訂版）からの変更点一覧
１）植物 …… 375
２）脊椎動物 …… 379
３）無脊椎動物 …… 381
（６）青森県レッドデータブック（2010年改訂版）からの和名変更一覧 …… 385

３　索引
青森県レッドデータブック（2020年版）選定種一覧 …… 387

あ　と　が　き …… 397

1　総　　論

（１）青森県レッドデータブック（2020年版）作成の経緯と目的

県は、平成12年３月・本県に生息・生育する希少な種について取りまとめ、「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－」（以下、県ＲＤＢという。）として発刊し、続いて、県ＲＤＢを補完するため平成18年３月に「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－維管束植物以外編－」（以下、県ＲＤＢ維管束以外編という。）、「青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－」（以下、県ＲＬという。）を発刊し、平成22年３月には県ＲＤＢの改訂を行ない、「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－」（以下、県ＲＤＢ2010年版という。）を発刊しました。

県ＲＤＢ2010年版では、916種の希少野生生物を選定しており、各種行政機関や教育・研究機関、県民への普及啓発等に活用されているところですが、現在の選定種及びカテゴリーについては、県ＲＤＢ2010年版作成後に得られた新たな知見や生息・生育環境の変化等により、現況を必ずしも反映しておらず、見直す必要がありました。

そこで、県では、県内の野生生物の専門家を中心に構成された「青森県レッドデータブック改訂検討会」を平成28年４月に設置し、３分科会に分かれて現状の精査や現状に沿った形での再検討を行い、「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2020年版）－」（以下、県ＲＤＢ2020年版という。）として今般取りまとめました。

自然環境や生態系は、一度壊されてしまうと復元するのは非常に困難です。ＲＤＢ、ＲＬに選定されている希少野生生物は、県内にこれら良好な自然環境が保全されているかを判断する指標ともされるべき種であり、各種開発行為や採取・捕獲等においても事業主体や県民一人ひとりの配慮が必要であると考えます。

（2）検討・執筆体制

県内の野生生物の専門家により「青森県レッドデータブック改訂検討会」を組織し、調査及び選定・執筆作業を行いました。さらに、検討会委員以外の研究者及び専門家の方々にも情報収集や選定作業等について、御協力をいただきました。

○対象分野

維管束植物、蘚苔類、淡水藻類、地衣類、菌類
哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、汽水・淡水魚類
昆虫類、昆虫類以外の無脊椎動物

○青森県レッドデータブック改訂検討会（敬称略）

【会長】
佐原　雄二

【植物分科会】

（維管束植物）	木村　啓、齋藤　信夫、須藤　智道
（蘚苔類、地衣類）	太田　正文
（淡水藻類）	原田　幸雄
（菌　類）	原田　幸雄、工藤　伸一

【脊椎動物分科会】

（哺乳類）	峰下　耕、笹森　耕二
（鳥　類）	関下　斉
（爬虫類、両生類）	笹森　耕二
（汽水・淡水魚類）	佐原　雄二、大八木　昭

【無脊椎動物分科会】

（昆虫類）	奈良岡　弘治、室谷　洋司、山内　智
（昆虫類以外の無脊椎動物）	大高　明史、大八木　昭、山内　智

○青森県レッドデータブック執筆協力者（五十音順、敬称略）

（淡水藻類）	安藤　一次、石戸谷　芳子
（哺乳類）	磯山　隆幸、岡田　あゆみ、和田　久
（昆虫類）	市田　忠夫、櫛田　俊明、工藤　周二、工藤　忠、今　純一、佐藤　隆志、佐藤　博、須摩　靖彦、古木　誠
（昆虫類以外の無脊椎動物）	石田　幸子、鶴崎　展巨、武田　哲

（3）青森県レッドデータブック（2020年版）カテゴリー定義

カテゴリーについては、１）環境省版レッドリストと比較が出来ること、２）よりわかりやすい表現であること等を踏まえ、「青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－」と同じものを採用しました。

カテゴリー定義

区　　分	基本概念	要　　件	対応する 環境省カテゴリー
絶滅野生生物 ＥＸランク	県内では、すでに絶滅したと考えられる野生生物	過去の記録・標本等において生息・生育が確認されているが、現在は県内で確認できない種	絶滅　ＥＸ 野生絶滅　ＥＷ
最重要希少野生生物 Ａランク	県内では、絶滅の危機に瀕している野生生物	生息・生育数がきわめて少なく、または生息・生育環境も制限される種で、近い将来県内での絶滅が危惧される種	絶滅危惧ＩＡ類 ＣＲ 絶滅危惧ＩＢ類 ＥＮ
重要希少野生生物 Ｂランク	県内では、絶滅の危機が増大している野生生物	生息・生育数がかなり少なく、または、生息・生育環境もかなり限られた種で、将来県内での絶滅が危惧される種	絶滅危惧Ⅱ類 ＶＵ
希少野生生物 Ｃランク	県内では、生息・生育を存続する基盤が脆弱な野生生物	生息・生育数が少なく、生息・生育環境も限られた種で、現地点では直ちに絶滅危惧とする程ではないが、環境の変化によっては個体数の更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される種	準絶滅危惧　ＮＴ
要調査野生生物 Ｄランク	県内では、生息・生育情報が不足している野生生物	限定された生息・生育環境や低生息密度などから注目される種であるが、県内での確認例がきわめて少なく、生息・生育実態等が不明なため評価が保留されている種	情報不足　ＤＤ
地域限定希少 野生生物 ＬＰランク	県内では、地域内に孤立している個体群で、地域レベルでの絶滅のおそれが高い野生生物	生息・生育状況・学術的価値・生物地理学的観点から特に保護に留意するべき、地域個体群	絶滅のおそれのある 地域個体群 ＬＰ

（4）選定結果

青森県の希少な野生生物として、今回のレッドデータブック見直しにより選定された種の内訳及び一覧は次のとおりです。

選定種総括表

分類群＼カテゴリー	ＥＸ	Ａ	Ｂ	Ｃ	Ｄ	ＬＰ	合　計
植　物　合　計	6	138	139	114	89	3	489
維管束植物計	6	132	112	52	16	0	318
維管束植物以外計	0	6	27	62	73	3	171
蘚　苔　類	0	0	12	14	8	2	36
淡　水　藻　類	0	1	0	0	13	1	15
地　衣　類	0	1	3	8	15	0	27
菌　類	0	4	12	40	37	0	93
動　物　合　計	12	54	94	222	150	11	543
脊椎動物計	5	30	47	57	24	7	170
哺　乳　類	2	4	7	2	10	3	28
鳥　類	2	19	35	42	4	0	102
爬　虫　類	0	0	0	0	3	0	3
両　生　類	0	0	0	5	0	0	5
汽水・淡水魚類	1	7	5	8	7	4	32
無脊椎動物計	7	24	47	165	126	4	373
昆　虫　類	7	19	34	152	108	0	320
昆虫類以外の無脊椎動物	0	5	13	13	18	4	53

選定種結果の推移

分類群＼カテゴリー	ＥＸ	Ａ	Ｂ	Ｃ	Ｄ	ＬＰ	合計
県レッドデータブック2020年版（2020.3）	18	192	233	336	239	14	1,032
県レッドデータブック改訂版（2010.3）	16	182	216	257	229	16	916
県レッドリスト改訂増補版（2006.3）	16	161	205	237	253	16	888
県レッドデータブック（2000.3）	17	116	144	156	178	13	624

（注）県ＲＤＢ（2000.3）には、維管束植物以外（蘚苔類、淡水藻類、地衣類、菌類）は含まれていません。

選定種一覧（網掛けは青森県レッドデータブック（2010年改訂版）後の新規追加）

植物

【維管束植物】

《ＥＸ》

トウゴクヘラオモダカ
タチガヤツリ
カンエンガヤツリ
ヤナギタウコギ
ヒメヒゴタイ
ハナヒョウタンボク

《Ａ》

スギラン
チシマヒカゲノカズラ
イブリハナワラビ
アカハナワラビ
キジノオシダ
チャセンシダ
ネムロコウホネ
ヒンジモ
トチカガミ
イトトリゲモ
ホソバノシバナ
ガシャモク
ツツイトモ
ササエビモ
カワツルモ
ウラゲキヌガサソウ
クロミノコジマエンレイソウ
ヒメユリ
フジチドリ
ミスズラン
サルメンエビネ
ヒメホテイラン
モイワラン
トケンラン
アツモリソウ
ベニシュスラン
ヒロハツリシュスラン
ヒメミズトンボ
クシロチドリ
フガクスズムシソウ
ヤチラン
サカネラン
タカネトンボ
イイヌマムカゴ
ヒオウギ
シロウマアサツキ
カラフトホシクサ
ミクリゼキショウ
タルマイスゲ
ジョウロウスゲ
クリイロスゲ
オクタマツリスゲ
アオバスゲ
クジュウツリスゲ
ハタベスゲ
イトナルコスゲ
ホソバオゼヌマスゲ
クグスゲ
ウシオスゲ
イッポンスゲ
マシケスゲモドキ
ヒメウシオスゲ
チシママツバイ
チャボイ
スジヌマハリイ
ヒメワタスゲ
ザラツキヒナガリヤス
エゾカモジグサ
オオトボシガラ
タチイチゴツナギ
エゾキケマン
オサバグサ
オキナグサ
シコタンキンポウゲ
チトセバイカモ
ベニバナヤマシャクヤク
チチッパベンケイソウ
レブンイワレンゲ
アズマツメクサ
ミヤマダイコンソウ
エゾノウワミズザクラ
ホロムイイチゴ
エゾシモツケ
ホザキシモツケ
スズメウリ
キバナノコマノツメ
エイザンスミレ
マツバニンジン
ケゴンアカバナ
アシボソアカバナ
ヒメアカバナ
クロビイタヤ
タカネグンバイ
ヤナギヌカボ
コガネギシギシ
クシロワチガイソウ
チシマツメクサ
エンビセンノウ
イトハコベ
エゾハコベ
ミドリアカザ
エゾハナシノブ
サクラソウ
チシマツガザクラ
エゾノツガザクラ
カラフトイチヤクソウ
キバナシャクナゲ
バイカツツジ
ムラサキセンブリ
アイナエ
バシクルモン
コカモメヅル
ムラサキ
ツルカメバソウ

マルバノサワトウガラシ
スギナモ
キクモ
ヒシモドキ
クワガタソウ
ヒナノウスツボ
カイジンドウ
ルリハッカ
ムシャリンドウ
ヒメハッカ
エゾナミキソウ
イヌニガクサ
ミミカキグサ
フサタヌキモ
オオタヌキモ
ヤチコタヌキモ
モイワシャジン
バアソブ
ヒメガンクビソウ
ムカシヨモギ
アキノハハコグサ
ナガバキタアザミ
エゾトウヒレン
ハゴロモニワトコ
エゾヒョウタンボク
ケヨノミ
ベニバナヒョウタンボク
マツムシソウ

《B》

デンジソウ
サンショウモ
リシリシノブ
イチョウシダ
オオエゾデンダ
ネズミサシ
ハンゲショウ
ヒメカイウ
マルバオモダカ
アギナシ
イトイバラモ
コアマモ
イトモ
コバノヒルムシロ
リュウノヒゲモ
イトクズモ
ホソバノアマナ
コアニチドリ
キンセイラン
ナツエビネ
ユウシュンラン
キンラン
クゲヌマラン
コアツモリソウ
クマガイソウ
サワラン
ハマカキラン
ミズトンボ
ガッサンチドリ
トキソウ
ウチョウラン
カキツバタ
エゾミクリ
ヤマトミクリ
タマミクリ
ヒメミクリ
ネムロホシクサ
エゾホシクサ
ネムロスゲ
ホロムイクグ
オオクグ
ヌイオスゲ
タカネクロスゲ
ナンブソウ
トガクシソウ
オオレイジンソウ
センウズモドキ
アズマレイジンソウ
ミチノクフクジュソウ
フクジュソウ
エゾノリュウキンカ
ハンショウヅル
コキツネノボタン
イワカラマツ
ノカラマツ
ヤマシャクヤク
シコタンソウ
ツガルミセバヤ
フジカンゾウ
シロバナノヘビイチゴ
カラフトダイコンソウ
ミチノクナシ
オオタカネバラ
ホザキナナカマド
クロツリバナ
マルミノウルシ
ヤマアイ
イイギリ
オオバタチツボスミレ
アナマスミレ
アイヌタチツボスミレ
タチフウロ
ホソバアカバナ
エゾイヌナズナ
ミヤマツチトリモチ
ヌカボタデ
アオモリマンテマ
ミチノクコザクラ
ユキワリコザクラ
ユキワリソウ
オオサクラソウ
ヒナザクラ
ナガバツガザクラ
フタバムグラ
ホソバツルリンドウ
チョウジソウ
スズサイコ
ヒヨドリジョウゴ
エチゴトラノオ
シラガミクワガタ
キセワタ

ヤマジソ
ミヤマウツボグサ
デワノタツナミソウ
オニシオガマ
タヌキモ
ヒメタヌキモ
ムラサキミミカキグサ
キキョウ
アサザ
オニオトコヨモギ
アサギリソウ
クモマニガナ
タカサゴソウ
ウスユキソウ
ムツトウヒレン
ハチノヘトウヒレン
リンネソウ
ウコンウツギ
カノコソウ
ツルカノコソウ
ハナビゼリ

《C》

ヒメミズニラ
ミズニラ
イワヒバ
コウライイヌワラビ
ミチノクサイシン
シバナ
エビネ
ハクウンラン
ノカンゾウ
ミクリ
ナガエミクリ
セキショウイ
エゾサワスゲ
ミチノクホタルイ
ヒメキンポウゲ
オオウマノアシガタ
ヤシャビシャク
コモチレンゲ
ハコダテキリンソウ
タコノアシ
タチモ
ヒロハノカワラサイコ
ツルキジムシロ
コガネイチゴ
ノウルシ
シナノタイゲキ
アリアケスミレ
イソスミレ
ゲンジスミレ
エゾオトギリ
チシマフウロ
ハクサンハタザオ
オオユリワサビ
ノダイオウ
タチハコベ
アオモリミミナグサ
ナガバツメクサ
ハイハマボッス
オオウメガサソウ
フナバラソウ
タチガシワ
オオマルバノホロシ
ビロードトラノオ
テイネニガクサ
ハマゴウ
ハマウツボ
イヌタヌキモ
ホロマンノコギリソウ
オオバヨモギ
ミチノクヤマタバコ
オオニガナ
ハクサンサイコ

《D》

マルミスブタ
ヒロハトリゲモ
オオトリゲモ
スゲアマモ
タチアマモ
ネジリカワツルモ
シラオイエンレイソウ
オオミズトンボ
シテンクモキリ
ミズアオイ
アカミノルイヨウショウマ
ザリコミ
ミズキカシグサ
ヤマホロシ
タカサブロウ
コオニタビラコ

【蘚苔類】

《A》

ハッコウダゴケ

《B》

オオミズゴケ
クロカワゴケ
カワゴケ
ササオカゴケ
マッカリタケナガゴケ
トガリカイガラゴケ
コマチゴケ
イチョウウキゴケ
ニセヤハズゴケ
シフネルゴケ
コムチゴケ

《C》

アオゴケ
マユハケゴケ
ヒロスジツリバリゴケ
シロシラガゴケ
ホソバゴケ
カサゴケモドキ
カサゴケ
オオヒモゴケ
コシノヤバネゴケ
ササバゴケ
ヤリノホゴケ
モミシノブゴケ
ナガスジハリゴケ

ホソバツヤゴケ
ミヤマミズゼニゴケ
《D》
ホソベリミズゴケ
シマオバナゴケ
オオサナダゴケ
ウキウキゴケ
オソレヤマヤバネゴケ
ケスジヤバネゴケ
トワダツボミゴケ
マルバツボミゴケ
《ＬＰ》
コロンビアミズゼニゴケ
【淡水藻類】
《A》
マリモ
（ヒメマリモ型、フジマリモ型を含む）
《D》
ケナガシャジクモ
シャジクモ
カタシャジクモ
ハダシシャジクモ
ヒメフラスコモ
オトメフラスコモ
イシカワモズク
カワモズク
アオカワモズク
ユタカカワモズク
ホソカワモズク
チャイロカワモズク
オオイシソウ
《ＬＰ》
ウイットロキエラサリナ
【地衣類】
《A》
オオウラヒダイワタケ
《B》
オオイワブスマ
シワイワタケ
イワタケ
《C》
マキバエイランタイ
ミヤマクグラ
バンダイキノリ
オオサビイボゴケ
コウヤクゴケ
チヂレウラミゴケ
ヘリトリツメゴケ
ヤスデゴケモドキ
《D》
ウチキウメノキゴケ
シナノウメノキゴケ
ニセカラタチゴケ
ツヅレカラタチゴケモドキ
フォーリザクロゴケ
チャザクロゴケ
キゴケ
ヤマトキゴケ
ムクムクキゴケモドキ
ニセチャハシゴケ
アカツメゴケ
モクズゴケ
カワホリゴケ
ヤマトカワホリゴケ
アオキノリ
【菌類】
《A》
アカハナビラタケ
タネサシヒメシロウラベニタケ
ヤチヒロヒダタケ
コカンバタケ
《B》
チョレイマイタケ
フサハリタケ
ナガミノクロサラタケ
クロムラサキハナビラタケ
オオミノミミブサタケ
イボセイヨウショウロ
イマイオオボタンタケ
ナナイロヌメリタケ
ミヤマシメジ
ヤマドリタケ
ドクヤマドリ
カバノアナタケ
《C》
ツバキキンカクチャワンタケ
トガリフカアミガサタケ
オオズキンカブリ
スナヤマチャワンタケ
シロキツネノサカズキ
ミミブサタケ
キツネノサカズキ
カエンタケ
シワカラカサモドキ
コササクレシロオニタケ
ニカワウロコタケ
ウスムラサキガサ
ダイダイヌメリガサ
アケボノタケ
トガリワカクサタケ
シロタモギタケ
ホンシメジ
ヒメムラサキシメジ
オドタケ
キノボリツエタケ
ホシアンズタケ
ツバヒラタケ
キヌオオフクロタケ
ツノシメジ
バカマツタケ
アカジコウ
ムラサキヤマドリタケ
アカエノキンチャヤマイグチ
フサクギタケ
アイゾメイグチ
キヌメリイグチ
ヒメヌメリイグチ
ホウキタケ
ニクウスキコブタケ
アカダマキヌガサタケ

カンバタケ
ツガノマンネンタケ
ニオイカワキタケ
ニンギョウタケ
シロキクラゲ

《D》

クロカワ
イモタケ
テンガイカブリ
クビナガクチキムシタケ
トワダミドリクチキムシタケ
トゲホコリタケ
カブラテングタケ
オニテングタケ
オオモミタケ
オオツガタケ
カンゾウタケ
クロキツネタケ
カワリワカクサタケ
ナガエノヤグラタケ
ニセシジミタケ
ヌメリツバタケ
スギノタマバリタケ
アラゲカワキタケ
シモコシ
マツタケ
シロマツタケモドキ
マツタケモドキ
アシナガイグチ
コゲチャヒロハアンズタケ
ホンショウロ
アミハナイグチ
アクイロウスタケ
ツヤナシマンネンタケ
シロマイタケ
ダイダイヒメアミタケ
カワキタケ
タマチョレイタケ
アカハツモドキ
アカモミタケ
ウスベニオシロイタケ
マツバハリタケ
シシタケ

脊椎動物

【哺乳類】

《ＥＸ》

オオカミ
カワウソ

《A》

クロホオヒゲコウモリ
ノレンコウモリ
モリアブラコウモリ
コヤマコウモリ

《B》

フジホオヒゲコウモリ
カグヤコウモリ
ヤマコウモリ
ヒナコウモリ
ニホンウサギコウモリ
ユビナガコウモリ
テングコウモリ

《C》

コテングコウモリ
ムササビ

《D》

イノシシ
ニホンジカ
ミズラモグラ
カワネズミ
オコジョ
イイズナ
ニホンモモンガ
クロオオアブラコウモリ
ヒメヒナコウモリ
チチブコウモリ

《ＬＰ》

ニホンザル（下北半島）
ニホンザル（津軽半島）
ツキノワグマ

【鳥類】

《ＥＸ》

トキ
タンチョウ

《A》

ウズラ
コシジロウミツバメ
サンカノゴイ
オオヨシゴイ
ミゾゴイ
シマクイナ
ヒメクイナ
ヒクイナ
ヘラシギ
コアジサシ
ケイマフリ
オジロワシ
イヌワシ
クマタカ
コノハズク
クマゲラ
チゴモズ
アカモズ
オオセッカ

《B》

シノリガモ
ヨシゴイ
クロサギ
クイナ
ヨタカ
ケリ
イカルチドリ
セイタカシギ
ヤマシギ
アオシギ
オオジシギ
ダイシャクシギ
ホウロクシギ
アカアシシギ
サルハマシギ

キリアイ
ツバメチドリ
ミサゴ
オオワシ
チュウヒ
ハイイロチュウヒ
ツミ
ハイタカ
オオタカ
サシバ
ケアシノスリ
オオコノハズク
アオバズク
アカショウビン
ブッポウソウ
ハヤブサ
サンショウクイ
サンコウチョウ
コジュリン
オオジュリン

《C》

ヤマドリ
オオヒシクイ
ヒシクイ
ヨシガモ
ハシビロガモ
シマアジ
トモエガモ
コオリガモ
カンムリカイツブリ
アオバト
マガン
コクガン
バン
ジュウイチ
タゲリ
オグロシギ
ソリハシシギ
オバシギ
コオバシギ
オジロトウネン
ヒバリシギ
ウズラシギ
オカヨシガモ
ハチクマ
フクロウ
トラフズク
ヤマセミ
アリスイ
オオアカゲラ
チョウゲンボウ
コチョウゲンボウ
チゴハヤブサ
ホシガラス
キバシリ
マミジロ
クロツグミ
ビロードキンクロ
コマドリ
カヤクグリ
セグロセキレイ
ノジコ
クロジ

《D》

ヒメウ
セッカ
シマアオジ
イスカ

【爬虫類】

《D》

タカチホヘビ
ヒバカリ
シロマダラ

【両生類】

《C》

クロサンショウウオ
トウホクサンショウウオ
アカハライモリ
ツチガエル
トノサマガエル

【汽水・淡水魚類】

《ＥＸ》

イトウ

《A》

シナイモツゴ
ヤリタナゴ
タナゴ
ギバチ
ハナカジカ
ニホンウナギ
ニホンイトヨ

《B》

スナヤツメ類
キタノメダカ
トミヨ属淡水型
カジカ小卵型
カジカ中卵型

《C》

カワヤツメ
エゾウグイ
シロウオ
ヒモハゼ
ジュズカケハゼ
カンキョウカジカ
カジカ大卵型
エゾホトケドジョウ

《D》

キンブナ
ジュウサンウグイ
キタドジョウ
アカオビシマハゼ
チチブ
カマキリ
クルメサヨリ

《ＬＰ》

ニシン
サクラマス
アブラハヤ
ウグイ

無脊椎動物

【昆虫類】

《ＥＸ》

カトリヤンマ
メガネサナエ
トラフトンボ
ムツアカネ
ヤマキチョウ
オオルリシジミ
オオウラギンヒョウモン

《Ａ》

コバネアオイトンボ
アオハダトンボ
カラカネイトトンボ
オオセスジイトトンボ
ヤブヤンマ
ヒメサナエ
ホンサナエ
ハネビロエゾトンボ
モリトンボ
ハッチョウトンボ
タガメ
マルコガタノゲンゴロウ
ナミルリモンハナバチ
チャマダラセセリ
ホシチャバネセセリ
クロシジミ
ツマジロウラジャノメ
ミツモンケンモン
ノシメコヤガ

《Ｂ》

キイトトンボ
ミヤマサナエ
コシボソヤンマ
コノシメトンボ
マイコアカネ
オオキトンボ
ウスバカマキリ
タイコウチ
タイワンナガマキバサシガメ
キバネツノトンボ
マークオサムシ本州亜種
イワキメクラチビゴミムシ
カワラハンミョウ
ホソハンミョウ
ヒメハンミョウ海浜型
サロベツナガケシゲンゴロウ
エゾヒラタヒメゲンゴロウ
オオシマゲンゴロウ
ゲンゴロウモドキ
ホソガムシ
クロスジカメノコハムシ
イカリアオカメノコハムシ
ウマノオバチ
ヤマトルリジガバチ
フタイロオオメハシリバエ
ルリハダホソクロバ
ベニモンマダラ道南亜種
ギンイチモンジセセリ
ヒメギフチョウ
スジボソヤマキチョウ
キタアカシジミ
カバイロシジミ
オオゴマシジミ
クビグロケンモン

《Ｃ》

ルリイトトンボ
モートンイトトンボ
ハグロトンボ
サラサヤンマ
オナガサナエ
ウチワヤンマ
コヤマトンボ
ハラビロトンボ
オオシオカラトンボ
ショウジョウトンボ
ヒメアカネ
カオジロトンボ
オオゴキブリ
ヤスマツトビナナフシ
ニトベツノゼミ
コオイムシ
ミズムシ
エサキナガレカタビロアメンボ
ババアメンボ
キタヒメアメンボ
ヒメミズギワカメムシ
モンキカスミカメ
オオマキバサシガメ
ツマグロマキバサシガメ
ゴミアシナガサシガメ
ヤセオオヒラタカメムシ
ナミハンミョウ
コハンミョウ
セアカオサムシ
ヒメクロオサムシ東北地方亜種
アカガネオサムシ本州亜種
ワタラセハンミョウモドキ
イワキナガチビゴミムシ
シラカミナガチビゴミムシ
シラカミメクラチビゴミムシ
オオワニメクラチビゴミムシ
オソレヤマミズギワゴミムシ
スナハラゴミムシ
イグチケブカゴミムシ
クマガイクロアオゴミムシ
エチゴトックリゴミムシ
ヒゲブトコツブゲンゴロウ
ヒメケシゲンゴロウ
ケシゲンゴロウ
ナガケシゲンゴロウ
コウベツブゲンゴロウ
ルイスツブゲンゴロウ
キベリクロヒメゲンゴロウ
シマゲンゴロウ
マルガタゲンゴロウ
クロゲンゴロウ
ゲンゴロウ
エゾゲンゴロウモドキ
オオミズスマシ

ミズスマシ
ヒメミズスマシ
ガムシ
エゾコガムシ
ツガルホソシデムシ
オオクワガタ
ダイコクコガネ
ミヤマダイコクコガネ
オオチャイロハナムグリ
キベリマルヒサゴコメツキ本州亜種
シモヤマミヤマヒサゴコメツキ
チビヒサゴコメツキ本州亜種
ミチノクシモフリコメツキ
エゾクロツヤミズギワコメツキ本州亜種
ゲンジボタル
ルイヨウマダラテントウ
ホクチチビハナカマキリ
ヒゲブトハナカミキリ
ヤマトキモンハナカミキリ
イガブチヒゲハナカミキリ
オオハナカミキリ
コウヤホソハナカミキリ
オニホソコバネカミキリ
ヒゲシロホソコバネカミキリ
ヨコヤマヒメカミキリ
ツシマアメイロカミキリ本土亜種
ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ
オダヒゲナガコバネカミキリ
ムモンベニカミキリ
ハセガワトラカミキリ
トウホクトラカミキリ
ヒトオビチビカミキリ
ケマダラカミキリ本州亜種
アカガネカミキリ本州亜種
ヒメビロウドカミキリ
ヨコヤマヒゲナガカミキリ
シロオビドイカミキリ
トホシカミキリ
ヤツボシカミキリ
オオヨモギハムシ
キアシネクイハムシ
オオルリハムシ
キイロカメノコハムシ
ベニカメノコハムシ
スジキイロカメノコハムシ
オナガアシブトコバチ
エゾアカヤマアリ
モンスズメバチ
ニッポンハナダカバチ
シモヤマギングチ
ササキリギングチ
ニトベギングチ
エチゼンヒメハナバチ
シロアシクサレダマバチ
トワダオオカ
ヤホシホソマダラ
ミチノクスカシバ
ソトシロスジミズメイガ
ムナカタミズメイガ
アオバセセリ
スジグロチャバネセセリ
オオチャバネセセリ
ミヤマチャバネセセリ
ヒメシロチョウ
ウラナミアカシジミ
ウラジロミドリシジミ
ハヤシミドリシジミ
ミヤマカラスシジミ
ゴマシジミ
ヒメシジミ
テングチョウ
ヒョウモンチョウ
ウラギンスジヒョウモン
オオミスジ
ホシミスジ
オオムラサキ
ヒカゲチョウ
クロフカバシャク
フチグロトゲエダシャク
チャホシホソバナミシャク
エゾヤエナミシャク
シロマダラカバナミシャク
オナガミズアオ
シロホソバ
ミカボコブガ
カギモンハナオイアツバ
ヨスジカバイロアツバ
ミヤマキシタバ
ヒメシロシタバ
マガリスジコヤガ
ウスジロケンモン
オオチャバネヨトウ
キスジウスキヨトウ
ガマヨトウ
ウスミミモンキリガ
ミスジキリガ
オイワケクロヨトウ
ダイセツヤガ

《D》

エビガラトビムシ
エサキウミトビムシ
キボシアオイボトビムシ
コシダカマルトビムシ
ミツワマルトビムシ
エゾエンマコオロギ
カヤコオロギ
トゲヒシバッタ
セグロバッタ
ショウリョウバッタモドキ
カワラバッタ
ガロアムシ
ミゾナシミズムシ
ハマベナガカメムシ
シロヘリツチカメムシ
ウスバセンブリ
オオヒョウタンゴミムシ
ミツメナガチビゴミムシ
シモキタメクラチビゴミムシ
フトクチヒゲヒラタゴミムシ
オオトックリゴミムシ

ニセモンキマメゲンゴロウ
アカマダラハナムグリ
ハヤチネベニコメツキ
ババアカコメツキ
トワダアカコメツキ
ツガルアカコメツキ
カタアカチビオオキノコ
ババヒメテントウ
ムナグロチャイロテントウ
アカガネネクイハムシ
キンイロネクイハムシ
オオナギナタハバチ
オキナワシリアゲコバチ
オオセイボウ
ミヤマツヤセイボウ
ツノアカヤマアリ
テラニシクサアリ
ミヤマアメイロケアリ
イワタツツクモバチ
フタモンクモバチ
オオハムシドロバチ
ミカドジガバチ
ハクトウアワフキバチ
ガロアギングチ
キユビギングチ
アギトギングチ
キスケギングチ
コシジロギングチ
ヤマトコトガタバチ
コウノスジガバチモドキ
シモヤマジガバチモドキ
エゾアリマキバチ
マエダテツチスガリ
ヤスマツコンボウハナバチ
シロスジフデアシハナバチ
クズハキリバチ
カグヤキマダラハナバチ
オカモトキマダラハナバチ
ニセハイイロマルハナバチ
ハイイロヒゲナガハナバチ
カエルキンバエ
ハイイロボクトウ
ヒメキテンシロツトガ
モリオカツトガ
マンレイカギバ
ナガトガリバ
ヒメウラベニエダシャク
ヨツモンマエジロアオシャク
シラナミナミシャク
ギフウスキナミシャク
キジマソトグロナミシャク
トビスジトガリナミシャク
ホソスジハイイロナミシャク
カバシャク
コウチスズメ
スキバホウジャク
イブキスズメ
ヒメスズメ
ミスジビロードスズメ
ヘリスジシャチホコ
アマギシャチホコ
スゲドクガ
キタオオコブガ
ウゴウンモンツマキリアツバ
ハスオビアツバ
カサイヌマアツバ
フシキシタバ
アルプスギンウワバ
オオモリケンモン
タテスジケンモン
ウスハイイロケンモン
ネジロシマケンモン
ハマセダカモクメ
ギンモンセダカモクメ
ヘリボシキノコヨトウ
ヌマベウスキヨトウ
ヒメシロテンアオヨトウ
セブトモクメヨトウ
ウスクモヨトウ
シロミミチビヨトウ
ヨコスジヨトウ
ウスキモンヨトウ
ホソバウスキヨトウ
エゾスジヨトウ
ハイイロヨトウ
シロオビヨトウ
オオシラホシヤガ

【昆虫類以外の無脊椎動物】

《A》

エゾマイマイ
コガタカワシンジュガイ
タカホコシラトリ
ツガルザリガニミミズ
キタホウネンエビ

《B》

ホウザワイソギンチャク
ツボミガイ
クビキレガイモドキ
トクナガヤドリニナ
オカマメタニシ
ハマグリ
アオモリザリガニミミズ
イワキザリガニミミズ
ニホンザリガニ
コメツキガニ
アシハラガニ
イソコモリグモ
ミズグモ

《C》

トウホクコガタウズムシ
キタシロウズムシ
ハコダテヤマキサゴ
エゾコギセル
ミチノクマイマイ
カワシンジュガイ
スジホシムシ
スジホシムシモドキ
ヌカエビ
サワガニ
ヤマトオサガニ

ウミカニムシ
ミサキギボシムシ

《D》

エゾマメタニシ
ミズシタダミ
ニホンミズシタダミ
エゾミズゴマツボ
コシタカヒメモノアラガイ
ヒダリマキモノアラガイ
カワネジガイ
ミズコハクガイ
ナガナタネガイ
ナタネキバサナギガイ
エゾドブシジミ
アリアケモドキ
キタクダヒゲガニ
オオナガザトウムシ
ヒトハリザトウムシ
フタコブザトウムシ
アユミコケムシ
ウチワイカリナマコ

《ＬＰ》

シモキタシブキツボ
ナンブマイマイ
ササミケマイマイ
トウホクスベザトウムシ

（５）凡例

１）構成

分野ごとに概説、各選定種を解説した本文、引用文献で構成されています。

また、平成22年（2010年）に発刊した青森県レッドリストと比較して、新規追加した種及び変更があった種については、２（５）にある変更点一覧に簡潔にその理由を掲載するとともに、新規追加された種については、１（４）及び３にある選定種一覧にも網掛けで表示しました。なお、本文中の敬称は省略しました。

２）本文の項目

対象野生生物名　：科名・和名・学名を記述した。

カテゴリー　　：青森県カテゴリー及び環境省カテゴリーを記載した。
なお、環境省のカテゴリーについては、「環境省レッドリスト2018」（平成30年公表）に該当になるものを記述した。

形態的特徴　　：選定種の形態の特徴について記述した。

選定の理由　　：対象種として選定した理由について記述した。

分布と生態の概要：分布と生態について概要を記述した。

生存に対する脅威と保存対策：想定される圧迫要因と保存対策について記述した。

特記事項　　：上記以外で特に記載すべき点について記述した。

執筆者名　　：執筆者名を記載した。

なお、情報量が少ない等の理由により、記述が不可能なものについては項目を省略したものもあります。

３）写真

口絵に使用した写真は、撮影場所及び採取場所、撮影年並びに撮影者について記しています。

2　各　　論

（１）青森県の野生生物の概要

本州の北端に位置する青森県は津軽海峡をはさんで北海道と対峙する。この海峡は狭いところでは20㎞ほどの距離しかないが、新生代第四紀の初期に陥没によって形成されたといわれており、生物の移動拡散には大きな障壁になってきたと考えられる。

平野部の地形は傾斜０～３度の平坦地が県土面積の17.3%をしめており、わが国の平均14.0%を上回る。山地部は、中央に八甲田山地・十和田山地など、奥羽山脈につらなる山地群があって県を東西に二分している。また東側には下北山地・田子山地などが、西側には出羽山地からの延長にあたる白神山地や岩木山、津軽半島山地などがあって地形を複雑なものにしている。これらの山地は、岩木山の標高1,625mを最高に1,000m前後のものが多いが、緯度が高いので高山性の生物が頻繁に現われる。

生物の生活に大きく影響する気候は、大別するとオホーツク気団による太平洋側気候区とシベリア気団による日本海側気候区の二つの気候型が複合している特徴がある。具体的には、太平洋側は春季から夏季に低温多湿な偏東風（俗称やませ）の影響をうけて比較的冷涼、冬季は小雪、晴天が多いのに対し、日本海側は比較的に温暖、冬季は季節風が強く、多雪で曇天が多い。

本県の陸水環境は多様である。まず湖沼では、本県は十三湖と小川原湖という大きな汽水湖を抱えており、さらに、小川原湖に近接した鷹架沼や尾駮沼などの汽水性の湖沼群もある。その一方、淡水湖の十和田湖もあるし、宇曾利湖は酸性湖沼で独自性が高い。また、津軽半島や下北半島には、成因的に珍しい砂丘湖が数多く分布する。これらに加えて県内には大小の溜池も多数あるが、その多くは津軽平野に集中している。中でも廻堰大溜池や狄ヶ館溜池は大きな池だが、いずれも17世紀に築堤され、300年以上の歴史を持っている。河川では、一級水系は岩木川水系、馬淵川水系、高瀬川水系の3つだけだが、むしろ多数の二級水系を擁することが特徴である。これは、面する海域が太平洋、日本海、陸奥湾、津軽海峡と4つにわたる本県の地理・地形的に複雑な状況を反映している。このように多様な湖沼・河川は本県の陸水生物に豊かな生息環境を提供している。

植物分布上、青森県はブナやミズナラを主体とする落葉広葉樹林帯（ブナ帯ともいう）に位置している。本県のブナは今では山地帯に限ってみられるが、かつては海岸地域にも生育していた。例をあげると、太平洋側東通村海岸に広がる猿ヶ森周辺のクロマツ林は往時ブナ林であったとされているし、日本海側つがる市のベンセ海岸には約1,400年前のブナ生育を証明する花粉分析の結果が報告されている。これら平地のブナ林は人間生活の営みと共に次第に伐採が進み、その結果、現在残っているブナ林は多くが奥山の山地帯に限られ、大部分が国有林として管理されている。青森県の森林面積は約64万haであるが、そのうちブナ林は10万ha余におよび、世界自然遺産に指定された白神山地の一部も含まれる。ブナ林の中に生育している木本・草本類は、太平洋側と日本海側では主としてその気候環境の違いから大きく異なっている。とりわけ林床に生えるササの種類に違いがみられ、太平洋側ではスズタケやチマキザサがまばらに見られるだけなのに、日本海側ではチシマザサが圧倒的に多い。しかも、チシマザサと同じように多雪環境に適応したほふく型の常緑の低木であるハイイヌガヤやヒメアオキ・エゾユズリハなどが多く、混交している針葉樹もヒバ（ヒノキアスナロ）などで、太平洋側にみられるマツ科木本より弾力性があり、雪に対する適応性がみられる。

消雪直後から若葉が芽吹くころのブナ・ミズナラ林の林床は非常に明るい。このわずかの期間に地上に届く光を最大限に活用して生きているのがカタクリやキクザキイチリンソウなど、北国の早春を象徴する植物群である。

ブナ林と並んで８万９千haの生育面積をもつヒバ林も青森を代表する樹木で、県の木に指定されている。全国の80%が本県に生育しており、下北・津軽両半島にその90%が分布している。陰湿な林床はヒメホテイランなどの希少種を育む環境となっている。なんといっても多いのは20万haにおよぶスギ林で、そのほとん

どは人工林である。生育状況によってことなるが、混交または下生する植生は比較的単純である。

変化に富んだ植生を背景に、動物相も多様である。北海道とつながっていた寒い時代に南下した動物の一部は、本州北端の高標高地などにとどまって生息しているし、津軽海峡の成立にはばまれて本県を北限の生息地として落ちついた種類も多い。津軽海峡は英人ブレーキストンによって提唱された動物地理学上の一つの境界線として知られ、ブレーキストン線（ブラキストン線）とよばれる。主として哺乳類と鳥類の分布から唱えられたといわれるが、ほかの動物群についても適用されるケースが多く、本県の動物分布を論じるときには無視できない学説となっている。ヒト以外の霊長類の世界の北限になっているニホンザルなどは、その最たるものであろう。

哺乳類と同様に、昆虫類をはじめとして陸域で生活する無脊椎動物にとっても、津軽海峡は北方へ分布を拡大する際の大きな障壁になっている。青森県が日本での本来の分布北限になっている無脊椎動物はたいへん多く、昆虫類のゲンジボタルやカブトムシ、甲殻類のサワガニやヌカエビなど、よく知られた種類を多数含んでいる。これらの中には、人為的な移入によって、現在は北海道でも見られるようになっている種類も多い。一方で、青森県の冷涼な気候は八甲田山のような山地だけでなく津軽半島や下北半島では平地でも寒冷地に特有なミズゴケ湿原を作り、北方系の生物の生息を支えている。キタシロカズメウズムシやニホンザリガニのような、青森県が分布南限かそれに近い分布をしている生物には北海道との共通種が多く、分布を決める要因には気候の影響が大きいと考えられている。

本県周辺の海は、本来北の海で、特に冬季に温度が下がる潮間帯は寒海性の生物の住み場になっている。しかし、日本海側や下北半島の西海岸、陸奥湾の一部では、対馬暖流の影響を受けるため、暖海性の生き物と寒海性の生きものが混じり合った複雑な生物相が見られる。潮汐の小さな日本海側には干潟が発達しないが、陸奥湾の小湊浅所とむつ市芦崎、それに太平洋側の高瀬川河口部には干潟があり、青森県が分布北限のアカテガニやアリアケモドキ、魚類ではヒモハゼなど、多くの特徴的な海浜生物が生息している。

本県における近代的な野生生物研究の流れをみると、1934年和田干蔵が初代会長となって青森県博物研究会（事務局は青森県師範学校博物学教室）が設立され、「青森博物研究会会報」、「青森博物研究会時報」を発行して1940年ころまで本県の生物調査に重要な役割を果たした。戦後、1956年郡場寛を初代会長に青森県生物学会が設立された。この会は事務局を弘前大学文理学部生物学教室に置き、「青森県生物学会誌」を28巻まで発行したが、その後自然閉会した。青森県立郷土館は1973年に創立され、自然・民族・考古・歴史の各部門において幅広い調査・研究活動を展開して「青森県立郷土館調査研究年報」（2009年の33号から「青森県立郷土館研究紀要」）を毎年刊行し、自然部門関係では県内の動植物相・分布にかかわる数多くの報告がある。1995年福田進を初代会長に青森自然誌研究会が設立され、事務局は青森県立郷土館学芸課に置かれている。会誌「青森自然誌研究」は2019年には第24号に達している。2004年、牧田肇を初代会長に白神研究会（事務局は弘前大学農学生命科学部内）が結成され、会誌「白神研究」は2018年には第13号を迎えた。これらの組織だった活動母体のほかに、地域ごとあるいは専門分野ごとに研究会・同好会などがあって会報発行や情報交換を行っている。

現代は地球史上、6番目の生物大量絶滅期と言われている。過去5度あった大絶滅期とは異なり、現在進行中の大絶滅の主要因には、生息地破壊や乱獲、温暖化、外来種問題など様々あげられているが、いずれも人間自身が引き起こしたものである。野生生物の生息状況が急速に変化しつつある現状を鑑み、今回、2020年版の青森県レッドデータブックを作成した。レッドリストに掲載されていることが、ただちに保護されていることを意味するのではない。希少生物保護のためには行政の取組が不可欠であるとともに、希少種も含めて野生生物たちの生活と現状への県民の理解が欠かせない。自然教育・環境教育の大切さはいくら強調しても十分すぎることはない。青森県は、様々な野生生物たちとの共存をどう作り上げていくかという大きな課題を背負っていると言えよう。本書が課題解決のために役立つことを願ってやまない。　**（佐原雄二・原田幸雄・大高明史）**

（2）植　物

1）維管束植物

①概説

生物の分布は環境に規制されている。特に植物の場合は根を下ろすやいなや、その場所以外へ移動できる確率は低下し、多くの場合、その場で一生を終えるのが常である。環境という規制は、降水量、気温、受光量、土壌の理化学的性質、他の個体との関係、人間によるインパクトなど様々である。それらの諸々の規制要因に縛られながら生育し続けることから、種としての分布はたえず変化する。

分布には水平分布と垂直分布がある。水平分布は緯度の側面から、垂直分布は高度の側面から分布を捉えた見方である。いずれも、気温や降水量の差が表れている。結果として、生育環境幅の広い種は広域に分布し、狭い種は局部的に分布することになる。レッドデータブックに扱われる種の多くは、元来、後者のグループに入り込む種が多いのだろうが、ただ、最近は自然環境に対する人間による攪乱の度合いや規模の増大により、本来は広域に分布していたはずの種がレッドデータブックに取り上げられるようになったケースも多々ある。

ところで、維管束植物とは体内に水分や養分を運ぶ組織を持っている植物の仲間で、種子植物とシダ植物が相当する。今回のレッドデータブックに取り上げられた維管束植物は総計318種である。内訳はシダ植物15種、種子植物303種となる。この種数は2010年度版と比べると種子植物で８種の増加である。レベルの変更や新加入種をカテゴリーのＥＸ、Ａ～Ｄ、ＬＰなどの６つのランクから捉えると、ヒメヒゴタイはＡからＥＸに、ヒシモドキやフサタヌキモはＥＸからＡに、さらに、アイナエ、キクモはＢからＡに、ザラツキヒナガリヤスやイトナルコスゲはＤからＡにそれぞれ移行した。また、カノコソウはＣからＢへ、アリアケスミレとエビネはＢからＣへ移行した。新たな種としてはアオバスゲ、ハゴロモニワトコ、ガシャモクがＡに、ムツトウヒレン、ハチノヘトウヒレンはＢに、ハマウツボはＣに、そして、ザリコミ、シテンクモキリはＤにそれぞれ加わった。レベルは情報量の多少により大きく変動する。すなわち、観察者の増加や情報収集範囲の拡大がレベルの変更をもたらすことになる。今回のレベル変更はその例と言える。

2010年度版のレッドデータブック発行後、維管束植物の分類の観点は大きく変化してきている。それは、DNAの塩基解析の成果を盛り込んだAPG（Angiosperm Phylogeny Group）分類体系が採用されるようになってきているからだ。これは時代の流れともいえよう。そのため、これまで多く使用されてきたエングラーやクロンキストなどの旧分類体系に慣れ親しんできていた者には、分類基準の一部に不慣れさが生じている。たとえば、旧分類体系でユキノシタ科に含まれていたウメバチソウはAPG分類体系ではニシキギ科、同様にカエデ科に含まれていたカエデの仲間やトチノキ科の代表樹種であるトチノキはムクロジ科などと、驚愕の部分もある。APG分類体系は今後さらに確立されていくと思われることから、2020年度版のレッドデータブックの学名はAPG分類体系に合わせることにした。

青森県内の植物フロラ研究は、細井幸兵衛氏の原稿をもとに取りまとめられた「新青森県植物目録」（弘前大学白神自然研究所，2018）で新たな基準ができた。この目録は被子植物についてはAPG分類体系に従っており、自生種2,304種、帰化・逸出・栽培種673種が取り上げられている。今後の本県の植物フロラ研究はその目録をもとに進むことは間違いないであろう。

このレッドデータブックに取り上げられた種を含み、これからも県内外の多くの専門家・研究者・同好会会員などが、青森県の植物フロラの解明調査を継続していくであろう。その際、レッドデータブックに記載された種の分布域の拡大・縮小、あるいは量的な増加・減少、消滅などの情報が、より広く、より多くの人々の手元に届くような組織づくり、連絡網づくりが大切である。それは、本書に掲載された種の実態把握と種の保存・保全、及び絶滅回避に大きく貢献すると信じるからである。　**（齋藤信夫）**

②本文

被子植物オモダカ目　オモダカ科 **ＥＸ**

和名　トウゴクヘラオモダカ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Alisma rariflorum* Sam.

［形態的特徴］　細井（2010）は薄葉（1986）による本種の形態的特徴を次のように紹介している。すなわち、花期は７～９月で１日の開花数は１株当たり通常２～５個で多くとも10個以内（ヘラオモダカは10～30個）、開花時間は14～19時で午前中には咲かない（ヘラオモダカ11～16時）、花弁は大きく６～７㎜、弁の辺縁に粗大鋸歯がある（ヘラオモダカは半分位で鋸歯は目立たない）、花序の第一節目の枝数は通常２本（ヘラオモダカ３本）と差がある。
［選定理由］　フォーリーが1898年に八戸で採った標本以外の記録はなく、絶滅したと考える（細井, 2010）。
［分布と生態の概要］　日本の水生植物（waterplants.web.fc2.com/menu_about.html）では本種は谷津田の奥などの水源地の近くにも生育できるが、普通種のヘラオモダカはそのような場所にはみられないとされる。分布は本州・九州。
［特記事項］　日本固有で関東に分布の中心があり、本県が北限であるが、フォーリー以外いまだに採集記録がない。
　日本の水生植物（waterplants.web.fc2.com/menu_about.html）にはトウゴクヘラオモダカの特徴として「葯の色は褐色、花弁を欠如、株あたりの花の数が少ない、草体が小さい、花茎第一分岐が２または３だが、５つの型があり、同一株でも様々である」と記されている。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **ＥＸ**

和名　タチガヤツリ　**環境省：絶滅**
学名　*Cyperus diaphanus* Schrad. ex Roem. et Schult.

［形態的特徴］　茎の高さは10～40㎝の一年草。似たような立地に生えるカワラスガナによく似ていて外形だけでは区別しにくいため、同定には果実の表面の細胞配列を確認することが必要である。すなわち、カワラスガナではやや円い六角形だが、タチガヤツリは縦長に短冊状である。花期は８～９月。
［選定理由］　フォーリーが青森で採った古い標本以外の記録はない。
［分布と生態の概要］　本州･小笠原､朝鮮･中国（東北）･アムールに分布する。池沼の畔や湿地に生育する。
［特記事項］　細井（2010）は「大井（1943）は京都大学のフォーリー採集標本中に青森産のものを見出し発表した。それにはAomori（Faurie sin.num.）とあり､標本番号と採集年月日不明である。大井は青森と小笠原にまれに生えるとしたが､後に栃木県で見つかっている。」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **ＥＸ**

和名　カンエンガヤツリ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cyperus exaltatus* Retz. var. *iwasakii* (Makino) T.Koyama

［形態的特徴］　湖沼の畔や川岸の湿地に生える一年草。大きな群落を作り、草丈が１mにも達し、叢生する。葉の幅は８～15㎜。花序は大型で長さ幅ともに10～30㎝。種子は９～10月に熟す。
［選定理由］　井上（1971）が記録して以降、確認できていない。
［分布と生態の概要］　細井（2010）は「基本種はインドからインドネシア、オーストラリアに分布域を持ち、国内のカンエンガヤツリはその変種と考えられ、元は朝鮮から持ち込まれたものらしい。本州の北中部に分布し、関東に産地が多い」と記している。攪乱された場所に突然大きな群落を形成したり、突然見られなくなったりする。
［特記事項］　細井（2010）は「古瀬（栃木市）は上野の国立科学博物館主催の第20回腊葉公開陳列会（1954）につがる市（旧木造町）館岡で採集した標本を出品し、東京・埼玉・茨城に次いで青森県が第４の分布地として知られるようになった。古瀬は、つがる市（旧車力村）の田光沼の岸に生えていて、古老の話によればこれで筵をあんだとしてある（私信）。井上（1971）も「……昔はどんどんこの植物をふやし、この茎でゴザを編んだものだ……」と述べている。つがる市館岡の田圃のあぜ道には1980年頃まであったようである。」と記している。和名は江戸時代末期の本草学者、岩崎灌園にちなむという。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **ＥＸ**

和名　ヤナギタウコギ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Bidens cernua* L.

［形態的特徴］　北地の湿地に生える１年草。葉は披針形で対生し、長さは８～17㎝。葉の先端は鋭尖頭、基部は次第に狭くなる。葉縁にはまばらに微凸鋸歯がある。茎の高さは25～90㎝。花は８～９月頃に咲く。頭花には不稔性の舌状花と稔性の筒状花があり、舌状花の花冠は黄色で長さは12㎜、筒状花は長さ３㎜。

［選定理由］　細井（2010）は「佐藤耕次郎（1943）の大正年代の採集記録以降には不明となり、多産地であった尾上町（現平川市）の猿賀池は改変されて絶滅したと見られる」と述べている。

［分布と生態の概要］　本州（青森）・北海道・北半球北部に分布する。北海道でも胆振・石狩・釧路・根室などと分布域は限られている。

［特記事項］　細井（2010）は「岩川友太郎が平川市（旧尾上町）猿賀神社の池でとった標本（Aug.22.1880）が東京大学に残されている。これを松村（1886）が取り上げ、中井（1939）も引用した。佐藤耕次郎は着色写生図を残し、これは県立郷土館に入っている」と記載している。タウコギに似るが、葉がシダレヤナギの葉のようだということで命名されたという。

（齋藤信夫）

被子植物キク目　キク科 **ＥＸ**

和名　ヒメヒゴタイ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Saussurea pulchella* (Fisch. ex Hornem.) Fisch.

［形態的特徴］　草丈１ｍほどの多年草で、一見アザミを思わせる。茎は直立し、上部で幾つにも分枝して多数の頭花をつける。頭花は紅紫色でよく目立ち、総苞片の先端には円形で膜質の付属物がある。この付属物は類似種には見られない形状なので、種類の特定が容易である。

［選定理由］　10年間に渡って県内全域に足を運び、実地調査と情報収集を行ったが、全く確認出来ず、分布情報も全く無い。また、本年の夏～秋には、以前に自生を確認している３地点へ赴き、丹念に調べたが確認することが出来なかった。そのため、県内では絶滅したと判断した。

［分布と生態の概要］　50年前には、津軽西海岸の黒崎草原や岩木山麓の長平高原、大鰐スキー場高原などで確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生育環境となる向陽山地草原が殆ど無くなっている。このような生育環境を意識して残存させることが望まれる。

［特記事項］　津軽植物の会では「絶滅種探索チーム」を組織して継続調査をしている。　**（木村啓）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **ＥＸ**

和名　ハナヒョウタンボク **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Lonicera maackii* (Rupr.) Maxim.

［形態的特徴］　山地に生える落葉小高木。他のヒョウタンボク類は低木であるので見分けられる。樹皮は縦裂してはがれる。葉は長さ５～８㎝、卵状長楕円形で、先は鋭くとがる。花はスイカズラに似ており、白色から橙黄色に変わる。花期６月上旬。果実は球形、２個合着せず、赤熟する。

［選定理由］　県内唯一の産地階上町に隣接する岩手県洋野町・軽米町に小群が残っており、その生育環境を参考に調査を行ってきたが、開田やスギ植林地化などで生育適地はほとんど残っていない。発見から100年以上報告がないことから絶滅したものと考える。

［分布と生態の概要］　本州（青森・岩手・群馬・長野）、朝鮮・中国（北部）・アムール・ウスリーに分布する。県内では階上町階上岳に産することが知られていた。牧野富太郎が山崎良甫の採集した標本に基づいて、1903年（明治36年）日本に産することを初めて発表したものである。生育地は明るい谷川のほとりから谷頭の落葉広葉樹林である（青森県, 2007）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

ヒカゲノカズラ類ヒカゲノカズラ目　ヒカゲノカズラ科 **A**

和名　スギラン　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Huperzia cryptomerina* (Maxim.) Dixit

［形態的特徴］　主に樹上に着生する常緑性シダ。生育地では落葉広葉樹上にスギの小枝が突き刺さっているように見える。茎は叉状に分岐し、県内のものは全長10～20㎝くらいの個体が多い。葉は密生し、線状披針形、長さ１～２㎝。胞子のうは枝端近くにつき、胞子葉は栄養葉よりも少し小さい。

［選定理由］　本種は全国的にも珍しい種であること、また、着生に適する落葉広葉樹の伐採が深山にまで及び、急激に減少していることから、生育地の確認や保護策に緊急を要する種である。

［分布と生態の概要］　北海道（東部）から屋久島、朝鮮（済州島）・台湾・インドに分布する。県内では津軽半島・白神山地他のブナ帯のトチノキ・サワグルミ・ブナなどの落葉広葉樹の大木に着生していることが多い。空中湿度、着生木の樹皮の状態他の微妙な生態的条件が分布を左右しているようで、県内での報告例はきわめて少ない。近年の山岳域の大規模な伐採が本種の分布に大きなダメージを与えている。

［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採がそのまま生存地の消滅に直結する。伐採前の生育確認と保全策の検討が必要。　**（齋藤信夫）**

ヒカゲノカズラ類ヒカゲノカズラ目　ヒカゲノカズラ科 **A**

和名　チシマヒカゲノカズラ　**環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Lycopodium alpinum* L.

［形態的特徴］　高山帯のコケが生えている陽光地の斜面に生える小型の常緑性シダ植物。茎は地上や落葉の下を這う匍匐茎と地上から立ち上がる直立茎に区別できる。直立茎は高さ３～15㎝ほどになり、３～４回叉状に分岐し、葉は４列に並び２形で、腹面の葉は背面の葉より短い（類似種タカネヒカゲノカズラは同形の葉が５列に並ぶ）。胞子のう穂は頂生する。

［選定理由］　希産で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（福井県以東）、ロシア（極東）、中央アジア、朝鮮、中国、モンゴル、ヨーロッパ、北米（北部）などの北半球の温帯に広く分布する。県内では八甲田山と岩木山に産する。

［特記事項］　岩槻（1992）は側葉が小枝と基部で合着して上半部が内曲し、小枝の裏側へかけて横に巻く程度の低いものをミヤマヒカゲノカズラとして区別すれば、日本のものはほとんどこの型になるが、明確に区別できるものではないと記している。　**（齋藤信夫）**

大葉シダ植物ハナヤスリ目　ハナヤスリ科 **A**

和名　イブリハナワラビ　**環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Botrychium microphyllum* (Sahashi) M.Kato

［形態的特徴］　アカハナワラビによく似た小型の冬緑性シダ植物。アカハナワラビのように冬季に葉が著しく紅変することはない。葉身の先端が細く伸び鋭頭となる。裂片の縁に微鋸歯がある。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）に分布する。県内では六ヶ所村・三沢市に生育する。

［生存に対する脅威と保存対策］　開発・採取等の危険性がある。

［特記事項］　北海道南部の胆振地方で発見され、その名がある。日本固有種である。従来は青森県が分布南限種であったが、近年、宮城県で生息が確認された（岡, 2019）。　**（須藤智道）**

大葉シダ植物ハナヤスリ目　ハナヤスリ科 **A**

和名　**アカハナワラビ**　**環境省：該当なし**
学名　*Botrychium nipponicum* Makino var. *nipponicum*

［形態的特徴］　陽当たりの良い林下に生育する小型の冬緑性シダ植物。栄養葉は長い柄を持ち、葉は３回羽状に分岐し、裂片の縁には鋭鋸歯（フユノハナワラビは鈍鋸歯）がある。冬季に葉が著しく紅変するので、アカハナワラビと名付けられた。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では三沢市六川目・浜三沢・平畑に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　採取の防止が必要である。
［特記事項］　県内で、ホノオハナワラビ（アカハナワラビ×エゾフユノハナワラビ）・ムツハナワラビ（アカハナワラビ×イブリハナワラビ）・ミチノクハナワラビ（アカハナワラビ×ヤマハナワラビ）などの雑種が記録されている。　**（須藤智道）**

大葉シダ植物ヘゴ目　キジノオシダ科 **A**

和名　**キジノオシダ**　**環境省：該当なし**
学名　*Plagiogyria japonica* Nakai

［形態的特徴］　地上生の常緑シダ。葉は単羽状でそう生し、栄養葉の葉身長は30～50cm、幅15cmほど。胞子葉は栄養葉より長く、羽片は線形となる。
［選定理由］　東北地方では極めて少なく本県が北限分布種。1936年“西郡”分布の記録があるが、長らく確認できず“不明種”とされていた。58年後の1994年１月に西郡深浦町黒崎地区で確認されたが、個体数は極めて少ない。その後、同地区の他地点でも記録されたが、個体数が少なく、生育環境も厳しい。
［分布と生態の概要］　本県の分布は西津軽郡深浦町黒崎地区だけで、スギ植林地でミズナラ・トチノキが混生する林床に少数株が生育している。
［生存に対する脅威と保存対策］　日本分布の最北限地で、スギ植林地の一角に僅かに生育している。個体数が極めて少なく減少傾向にあり、生育環境も大変きびしい。
［特記事項］　本県が北限の植物。標本は津軽植物の会植物標本庫に収納。　**（木村啓）**

大葉シダ植物ウラボシ目　チャセンシダ科 **A**

和名　**チャセンシダ**　**環境省：該当なし**
学名　*Asplenium trichomanes* L.

［形態的特徴］　岩の割れ目や村落の石垣などに生える常緑性シダ植物。枯れた葉の葉柄と生きた葉を多数叢生する。葉は単羽状で20対以上つく。葉柄は光沢のある紫褐色。葉が枯れても細い葉柄が沢山残るので、茶筅（せん）シダと名付けられた。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。乱獲により激減している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・関東地方以西）・四国・九州、世界の温帯から暖帯に広く分布する。東北地方では本県だけに産し、東通村尻屋の石灰岩地に生育する。
［生存に対する脅威と保存対策］　乱獲の防止が必要である。　**（須藤智道）**

被子植物スイレン目　スイレン科 **A**

和名　ネムロコウホネ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Nuphar pumila* (Timm) DC. var. *pumila*

［形態的特徴］　池沼に生える多年草の水草である。根茎は肥厚して太く、泥の中を這う。水上葉は根茎の先から出て、長い葉柄があり、水面に浮かぶ。花期は７～８月、径２～３㎝の黄色の花をつける。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道（東部）・本州（北部）の山地、沼池中に生える。国外では欧州・シベリアに分布する。県内では南八甲田の黄瀬菡（細井, 2010）に生息する。また、須藤（2018, 私信）は田型菡の池沼で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　水環境及び自然遷移の変化に注意するとともに、園芸採取の防止が急務である。　**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　サトイモ科 **A**

和名　ヒンジモ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Lemna trisulca* L.

［形態的特徴］　池沼などに生える沈水性の浮遊植物。葉状体は卵状長楕円形で、長さ７～10㎜、細長い柄で連なる。水面上に３個ずつ「品」字形を描いて連なる様子から和名がきている。

［選定理由］　希産種で水質悪化等により生育地が失われる恐れがある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州、南米以外の全大陸に分布する。県内ではフォーリーの採集した標本等で記録されていたが、その後消息不明となっていた。2000年に今らにより小川原湖・仏沼に生育していることが確認された。

［生存に対する脅威と保存対策］　仏沼の生育地は停滞水状で良好と思われないが、水質条件の研究が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査で三沢市仏沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物オモダカ目　トチカガミ科 **A**

和名　トチカガミ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hydrocharis dubia* (Blume) Backer

［形態的特徴］　湖沼・ため池や用水路などに生える浮遊性の多年草。走出葉が水底を横に這い、その先端から新しい株が形成される。葉は円形で基部心形、直径４～７㎝、裏面中央には盛り上がった部分がある。浮葉には３～15㎝の長い柄がある。雌株と雄株がある。花弁は３個で白色、長さ１～1.5㎝。花期は８～10月。

［選定理由］　生育地が失われ個体数が激減している。

［分布と生態の概要］　国内では本州・四国・九州、国外では東南アジア・オーストラリアに分布する。細井（2010）は「県内では終戦後しばらく農薬があまり使われていない頃は水田地帯には広く分布していたが、いまでは激減して見つけることが難しくなった」と述べている。石戸谷（2017, 私信）はつがる市で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　農薬や生活廃水等による水質悪化を防止する。　**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　トチカガミ科 **A**

和名　イトトリゲモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Najas gracillima* (A.Braun ex Engelm.) Magnus

［形態的特徴］　ため池や水路、水田などに生育する沈水性の１年草。全長は10～30㎝。茎は細く、よく分岐する。葉は長さ1.5㎝、幅0.2㎜、各節に５個ずつ輪生する。トリゲモ類のうちでもっとも葉が細い。雌雄同株で、各節に１個の雄花と２個の雌花がつく。果実は常に２個並んでつく。
［選定理由］　生育地が失われ個体数が激減している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。細井（2010）は「県内では全域に産したが、今では自然度の高い池沼にしか残っていない」と述べている。石戸谷（2017, 私信）は弘前市やつがる市で確認している。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　農薬や生活廃水等による水質悪化を防止する。

（齋藤信夫）

被子植物オモダカ目　シバナ科 **A**

和名　ホソバノシバナ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Triglochin palustris* L.

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。根茎は短く、走出枝を出す。葉は細かく幅約１㎜。花期７～８月。果実は長さ９㎜、線形で下部が細まり、直立する。同じ仲間のオオシバナは塩性湿地に生え、果実は長さ３～５㎜で、長楕円形から卵形である。
［選定理由］　目立たないが産地の限られた種で、高山のものは保護状態にあるが、低地では湿原開発・護岸工事などで減少が進行している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（関東以北）、北半球に広く分布する。県内では八甲田山および太平洋側の海岸や湖沼周辺の湿原に点在する。高瀬川河口部などの塩性湿地にオオシバナと混生することもある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で十和田市谷地湿原・青森市田代湿原で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **A**

和名　ガシャモク **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Potamogeton lucens* L. subsp. *sinicus* (Migo) H.Hara var. *teganumensis* Makino

［形態的特徴］　湖沼やため池に生育する多年生の沈水植物。草丈は20～50㎝、葉は互生する。葉身は狭長楕円形で長さ５～12㎝、幅1.2～2.5㎝、先端は棒状突起となる。葉面の凹凸が明らか。葉縁は微鋸歯縁で波立つ。葉柄はほとんどないか、あっても短い。葉の基部は茎を抱く。茎は匍匐茎のように伸び、発根する。花柄の長さは４～９㎝、花穂は長さ２～５㎝。冬は地下茎の先端に殖芽を形成する。日本固有種。花期は６～９月。
［選定理由］　本県で生育確認されるまでは、全国で唯一の自生地は福岡県のお糸池だけと言われていた。
［分布と生態の概要］　昔は利根川水系・琵琶湖・九州に分布し、特に関東地方では肥料に使われるほど生育していたとされていたが、水質汚濁などにより生育地が激減し、福岡県北九州南部のお糸池だけが自生地とされていた。殖芽は環境悪化に強く、条件が良くなると芽を出すという。中国にも分布するという。本県ではつがる市の沼で確認されている（Shutoh *et al*., 2019）。
［生存に対する脅威と保存対策］　福岡県の場合、池底への微細な泥土の堆積、水位の不安定さ、池周辺の樹木の繁茂及びそれに伴うリター供給量の増加や池内への透過日射量の減少などが生存に対する脅威として挙げられていることから、本県においてもそれらを参考に早急な対応策を講じることが必要と思われる。
［特記事項］　福岡県のお糸池では地元の小学校が保護活動を行っている。本県でも遺伝子保存の観点から分散栽培と、行政やボランティア団体、及び学校教育活動などとの連携した保護活動が必要と思われる。 **（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **A**

和名　ツツイトモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Potamogeton pusillus* L.

［形態的特徴］　湖沼、河川、水路などに生育する繊細な沈水植物。葉には柄がなく、線形で長さ２～５㎝、幅0.5～１㎜。イトモに似ているが、托葉の両側が合着して筒状になる。花茎は長さ1.5～２㎝、花は離れて上下２段に付く。角野（1994）は本種の同定は「托葉が筒状であることを確認するより、花の付き方または殖芽の形態に着目した方が容易である」と述べている。
［選定理由］　開発によって生育地が失われてきている。
［分布と生態の概要］　北半球に広く分布し、県内では津軽地方の限られた沼や小川原湖・鷹架沼・尾駮沼に産する。石戸谷（2017, 私信）は五所川原市の十三湖・つがる市のガシャ沼で確認している。Shutohらもつがる市の沼で確認している（Shutoh *et al*., 2019）。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。 **（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **A**

和名　ササエビモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Potamogeton* × *nitens* Weber

［形態的特徴］　冷涼地の湖沼や河川に生育する多年生の沈水植物で、エゾノヒルムシロに似ているが、浮葉がないことで区別される。上部の葉は短い柄を持つことがあるが、下部の葉はやや茎を抱く。葉身は倒披針形～狭長楕円形、長さ2.5～８㎝、幅５～15㎜。花期は７～９月。
［選定理由］　産地が限られ水質悪化等により減少している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州に分布し、北半球に広くみられる。県内では十和田湖、小川原湖に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　水質悪化の防止が必要である。 **（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　カワツルモ科 **A**

和名　カワツルモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ruppia maritima* L.

［形態的特徴］　海岸の潮だまり（タイドプール）や湖沼など、淡水と海水の混ざる所に生える多年生の沈水植物。細い地下茎が横に延び、各節から水中茎が伸びる。茎の上方は分岐する。葉は針状で長さ５～10㎝、互生する（花序の出る節は対生）。葉腋から伸びた花柄の先に２個の花をつける。花期は６～８月。
［選定理由］　生育地が次第に失われており、残った所でも個体数が減少している。
［分布と生態の概要］　世界中に広く分布しているといわれるコスモポリタン種（広布種）であるが、各地で産地は失われつつある。植物体は細く、密生する。県内では八戸市鮫町・小川原湖に生育するほか、須藤（2017, 私信）は六ヶ所村で、石戸谷（2016, 私信）は五所川原市で、それぞれ確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　タイドプールは海岸でも多くはない。海岸地帯の生育環境の改変が一番のリスクといえることから海岸での防波堤や消波ブロックなどの設置には十分な配慮が必要である。
［特記事項］　細井（2010）は「小川原湖には花が咲いても果実が熟さない群落もあり花梗が緩く巻く。ネジリカワツルモとの関係は不明である」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ユリ目　シュロソウ科 **A**

和名　ウラゲキヌガサソウ **環境省：該当なし**

学名　*Kinugasa japonica* (Franch. et Sav.) Tatew. et C.Sutô var. *tomentosa* Miyabe et Tatew.

［形態的特徴］　茎頂に大きい葉が８～10枚輪生する多年草。外花被片は黄白色で８枚ほど輪状となり、輪生葉の中心から立ち上がる。和名のように、葉裏に毛がある。

［選定理由］　秋田県境に近い弘前市相馬地区の雑木林床に小群落で見られ、本県唯一の自生地である。生育現場は、急斜面谷地のミズナラやトチノキやホオノキを中心とした雑木林であり、崩壊や伐採による環境悪化や消滅が心配される。

［分布と生態の概要］　当該種が発見されて以来、生育環境が類似している県内各地へ足を運び、分布の確認を行っているが確認することが出来ない。分布の情報も全く無い。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地への道のりは、複雑で厳しく容易に到達出来ないが、花も葉も大きく見事な美しさなので、採取されて絶滅に至る心配が大きい。生育地への進入禁止と定期的な監視体制が必要である。

［特記事項］　日本固有種。本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被被子植物ユリ目　シュロソウ科 **A**

和名　クロミノコジマエンレイソウ **環境省：該当なし**

学名　*Trillium smallii* Maxim. var. *atropurpureocarpum* J.Samej.

［形態的特徴］　草丈10～30㎝の多年草。茎の頂に３枚の葉を輪生させる。葉は広卵円形で、茎頂から花柄を伸ばし１個の花をつける。花には３枚の萼と紫色の花弁がある。花弁の数は１～３枚で、形状も小～大、狭～広があり、一定していない。果実は球形の液果で黒紫色となる。

［選定理由］　コジマエンレイソウの変種で、2010年５月17日に、つがる市屏風山で群落が発見され分布上注目されている。本州唯一の北限群落であるが、生育環境は極めて厳しく、絶滅が心配される。

［分布と生態の概要］　近年、弘前市大和沢川流域と南郡大鰐町自然公園でも発見され、内陸での分布が確認された。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地はクロマツ・エゾイタヤ・ウワミズザクラを中心とした雑木林の林床で、伐採や開発などによる消滅の危険を感じる。発見から10年近く経っているが、生育地の伐採が一度行われ、林床の株数が減少したように思われる。

［特記事項］　本県が南限の植物。標本は東京大学と弘前大学と津軽植物の会に収納されている。

（木村啓）

被子植物ユリ目　ユリ科 **A**

和名　ヒメユリ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**

学名　*Lilium concolor* Salisb. var. *portheneion* (Siebold et Vriese) Baker

［形態的特徴］　草地に生える多年草。茎は高さ30～80㎝。葉は線形。花は朱赤色、小型で上向きに咲く。花期７月中旬。変異が多く、産地などで園芸上区別されることがあり、土地ではミチノクヒメユリ・ナンブヒメユリ・エゾアカヒメユリなどの呼び名がある。

［選定理由］　産地が限られており、環境変化により最近ほとんど確認されていない。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では太平洋側の南部町から五戸町にいたる丘陵地の草地や林縁にみられる。戦後自生地の採草地やカヤ刈場が中止されるとともにヒメユリも減少に転じた。1980年代にはススキ草原から転じたアカマツ林縁にやっと見出される程度になり、今ではアカマツ林伐採跡地にも出現を見ない。かつては切り花のほとんどが自生品であったといわれる。ススキ草原の刈り取り・火入れにより生存が保たれてきたもので、減少の要因は採取よりも時代の流れによる植生の変化にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　フジチドリ　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Amitostigma fujisanense* Sugim.

［形態的特徴］　山地の苔むした古木の樹幹上に着生する小型の多年草。茎は斜上し高さ６～８㎝。葉は根元近くに１枚つき、披針状楕円形、長さ４～５㎝。花は３～５個まばらにつき、淡紅色、長さ５～６㎜。唇弁は舌状で、小さな側裂片がある。花期７月。

［選定理由］　希産種であり個体数も少ない。深山の森林伐採の進行、マニアによる盗掘などで激減している。

［分布と生態の概要］　本州（青森・秋田・岩手・神奈川・静岡）に隔離分布する。県内では奥羽山系と白神山地に希産する。深山の大木の樹幹および枝上にコケ類やシダ植物とともに着生する。空中湿度がある程度保たれている場所に生育する傾向がある。

［生存に対する脅威と保存対策］　古木の保存と園芸採取の防止が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ミスズラン　**環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Androcorys pusillus* (Ohwi et Fukuy.) Masam.

［形態的特徴］　亜高山帯の針葉樹林下に生える。茎は高さ7.5～９㎝、地下に塊根があり、基部は鞘葉に包まれる。葉は１個つき倒披針状楕円形、長さ２～３㎝。花は淡緑色で穂状に数個つく。花期は６～７月。

［選定理由］　希少種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　本州（青森・栃木・群馬・長野・静岡）に分布する。細井（2010）は「県内では八甲田山のアオモリトドマツ林下に生育が確認された」と記している。成田（2017, 私信）は「八甲田山の自生地は消滅、その後の確認記録は今のところない」と述べている。

［生存に対する脅威と保存対策］　登山者による踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　サルメンエビネ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Calanthe tricarinata* Lindl.

［形態的特徴］　草丈30～50㎝の多年草。葉は２～４枚束生して立ち、束生葉の中心から花茎を直立させる。花茎の上方に花を８～10個の総状につける。花色は、萼片と側花弁は黄緑色、唇弁は朱紅褐色。唇弁の朱紅褐色が、猿面を思わせるのが特徴である。

［選定理由］　50年ほど前までは、各地の里山落葉樹林下に普通に見られたが、急激に減少が続いている。その原因の多くは、観賞用や販売のために人為的に採取されたことである。また、生育地となっている樹林が伐採されたことにも原因がある。現在は、個体数の回復傾向にあるが、まだまだ少ない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・中国・インド北部。日本の分布は北海道・本州・四国・九州でブナ帯の落葉樹林下。本県分布は津軽と下北を中心とし、越冬時は長大な緑葉を横伏している。

［生存に対する脅威と保存対策］　当該種の花が美しいので栽培観賞のため採取されている。また、生育に適した樹林が減少している。採取禁止と里山樹林の保存対策が必要である。

［特記事項］　日本固有種。本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ヒメホテイラン　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Calypso bulbosa* (L.) Oakes var. *bulbosa*

［形態的特徴］　針葉樹林下に生える多年草。葉は１枚、長さ2.5～4.5cmほどの卵状楕円形、裏面は紫色を帯びる。花茎は10cm前後、先端に紅紫色の花を１個咲かせる。花を正面から見た時に２裂した距の先端が唇弁より下に突き出ないことでホテイランと区別される。花期５月上旬。
［選定理由］　ヒバ林の伐採が進んで生育地が次第に失われるとともに、盗掘のため激減している。
［分布と生態の概要］　北海道（西南部）・本州（青森）、世界的にはシベリア・ヨーロッパ・北アメリカなどに広く分布する。日本での分布域は狭い。県内ではヒバ林にしばしば産するが、かつてのような群生はみられなくなっている。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び登山者による踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　モイワラン　**環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Cremastra aphylla* T.Yukawa

［形態的特徴］　サイハイランに似ているが、根が肥厚してサンゴ状に分枝し、葉がなくて暗紫色の花茎を伸ばして花を咲かせる。花は花茎より明るい色である。花期は５～６月。
［選定理由］　希少種であり、乱獲が心配される。
［分布と生態の概要］　これまでサイハイランと混同されていたこともあり、分布・生態についてはまだ十分解明されていない。成田（2017, 私信）は下北半島・深浦町・平川市などで確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。
［特記事項］　細井（2010）は「学名は佐井村産の生品に基づき、新種として発表されたものである」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　トケンラン　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cremastra unguiculata* (Finet) Finet

［形態的特徴］　草丈30～40cmの多年草。葉は根元から２枚出て、地面に伏している。花茎は直立し、上方に６～12個の花を総状につける。花被片は線状で半開し、黄色で淡褐色を帯び、紫色の斑点を散布している。
［選定理由］　深山の落葉樹林下に生育しているが、10年ほど前からは姿を見ることが困難となっている。県内の数地点に、僅かに見られるのみである。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国の落葉樹林下に生育するが、普通には見ることが出来ない。本県にあっては、八甲田地区と深浦地区の分布が知られている。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育場所が限られ、個体数も少ない。また、花姿が美しく魅力的で、観賞用としての価値が高く採取されることもある。絶滅が迫っているように思われるので、生育地点の確認と保護対策が必要である。
［特記事項］　日本固有種。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　アツモリソウ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Cypripedium macranthum* Sw.var.*speciosum* (Rolfe) Koidz.

［形態的特徴］　山地に生える多年草。茎は高さ20～40㎝。葉は互生し長楕円形、長さ８～20㎝。花は茎頂に１個つき淡紅色、径３～５㎝。側萼片は２枚合着する。唇弁は袋状で球形。花期６月。

［選定理由］　草地の減少により生育地が失われるとともに、乱獲が加わって激減した。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北）、朝鮮・中国に分布する。県内に散在していたが現状はほとんど消息不明である。原因は遷移進行・採取もあるが、かつてしばしばみられた山の斜面の採草地・放牧地および疎林地が、戦後馬の飼育が行われなくなって放置化されるにいたり、格好の生育適地が失われたものと考える。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

（須藤智道）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ベニシュスラン　**環境省：該当なし**

学名　*Goodyera biflora* (Lindl.) Hook.f.

［形態的特徴］　常緑の樹林下に生える草丈８㎝ほどの多年草。茎の基部は地表を這い、上部は斜上する。葉は卵形～長卵形で３～４個互生し、葉面には白い網状の模様がある。茎の先端に淡紅色で筒状の大型花を１～２個つける。花の形状は蟹のハサミを思わせる。

［選定理由］　暖地系の植物で、本県には分布記録が無かったのを1980年６月14日に十二湖で発見された。以後、津軽植物の会では県内各地に足を運び、分布調査を行っているが十二湖以外では認める事が出来ない。十二湖の特定地点だけに僅かに見られ、増加する傾向は無い。

［分布と生態の概要］　世界的分布は朝鮮半島と日本。日本分布は本州の関東以西～九州であったが、秋田県の文献記録もある。十二湖の場合はヒバ林床に僅かに見られるのみ。

［生存に対する脅威と保存対策］　個体数が数株と少ないので、僅かな環境変化で消滅する心配がある。立ち入り禁止が必要と思われる。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ヒロハツリシュスラン　**環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**

学名　*Goodyera pendula* Maxim. f. *brachyphylla* (F.Maek.) Masam. et Satomi

［形態的特徴］　深山の苔むした古木の樹幹などに着生する。茎は下垂する。葉は狭卵形または卵形、ツリシェスランより短くて幅が広いところから和名がきている。花は白色で一方にかたよって多数つく。

［選定理由］　希産種で森林の伐採や採取により減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）に分布する。県内では津軽半島・下北半島・十和田山系に産する。成田（2017, 私信）は十和田湖周辺で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　古木の保存と園芸採取の防止が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ヒメミズトンボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Habenaria linearitolia* Maxim. var. *brachycenta* H.Hara

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。よく似たミズトンボより小型で高さ20～40㎝。花もひとまわり小さい。唇弁は十字型で、側裂片が水平かやや下向き、中裂片と側裂片がほぼ同長（ミズトンボでは側裂片が湾曲して斜上し、中裂片が長い）。花期６～７月でミズトンボより少し早い。

［選定理由］　産地が限られ個体数も少ない。現在生育地は原子力発電所の敷地内にあり、生存に対して配慮されているが、湿原の富栄養化・木本類の進出等による減少の危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・群馬・新潟）・千島に分布する。県内では東通村に産し、生育地は海岸後背地の湿原で、戦後付近に入植が行われたが、開墾までに至らなかった所で、寒冷地湿原植物群落が残っている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で東通村小田野沢南通で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　クシロチドリ **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Herminium monorchis* (L.) R.Br.

［形態的特徴］　トンボソウに似ているが、地下に塊根がある。茎は高さ10～15㎝。葉は狭長楕円形で茎の下部にふつう２枚つく。花は穂状につき淡緑色で小さい。唇弁は全緑で距がない。花期７月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、朝鮮・中国・ヒマラヤ・シベリア・ヨーロッパに分布する。県内では東通村の石灰岩地のやや湿った草地に希産する。

［生存に対する脅威と保存対策］　北海道の釧路では乱獲にあって絶滅したという（細井, 2010）。花が人目をひかない地味なものがかえってマニアに好まれる傾向があるので、乱獲の防止が必要である（細井, 2010）。成田（2017, 私信）によると東通村の自生地では盗掘と思われる場所が多くあり、減少しているという。園芸採取及び踏圧をはじめ環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　フガクスズムシソウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Liparis fujisanensis* F.Maek. ex F.Konta et S.Matsumoto

［形態的特徴］　主として苔むした古木の樹幹上に着生する。全体がきわめて小さく、高さ３～10㎝、葉の長さ1.5～５㎝位である。スズムシソウとクモキリソウの自然雑種と考えられる。花期６～７月。

［選定理由］　園芸採取により産地・個体数が激減している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州に分布する。県内では奥羽山系・白神山地・津軽半島・下北半島・十和田湖周辺に産する。成田（2017, 私信）は本種が十和田湖周辺のブナなどの大木の苔むした幹に着生していることを確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　戦後のブナの大規模伐採とその後の乱獲が減少要因である（細井, 2010）。園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。
（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　ヤチラン **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Malaxis paludosa* (L.) Sw.

［形態的特徴］　高層湿原のミズゴケの中に生える。茎は高さ５～10㎝。葉は２～３枚つき、花後先端にムカゴをつける。花は淡緑色で径約３㎜。他のランと違い唇弁が上側にあって直立するのが特徴である。花期７～８月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道、本州（中部以北）、国外では南千島・樺太・シベリア・ヨーロッパ・北アメリカなどの、主として北半球の温帯に分布する。細井（2010）は八甲田山の限られた湿原に産するとする。須藤（2018, 私信）は十和田市の湿原で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿原への立ち入りを禁止するとともに、自然遷移を注意深く見守る必要がある。

（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　サカネラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Neottia nidus-avis* (L.) Rich. var. *mandshurica* Kom.

［形態的特徴］　草丈20～30㎝の多年生腐生植物で、光合成をして栄養をつくることは無く、植物体は汚れた黄白色をしている。茎は太く多肉質で直立し、下部には数個の鞘状葉を互生し、上部には密生した多数の花を総状につける。根茎は地中に直立し、肉質で先が上向する根を束生する。根が下向するのが普通であるが、当該種は逆に上へ向かうので、和名の由来となった。

［選定理由］　自然度の高い落葉樹林下に見られる腐生植物であるが、目にすることは極めて少ない。探して見つかるというものではなく、偶然に遭遇するというのが一般的である。

［分布と生態の概要］　世界的分布は中国東北部・朝鮮半島・サハリン・シベリア東部。日本の分布は北海道・本州中部以北・九州の落葉樹林下。本県分布は全域であるが確認地点の報告は限られている。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生確認場所は県内各地であるが、出会うことは殆ど無い。生育地点を確認し、地域全体の保護対策が必要である。

［特記事項］　2018年９月９日に津軽植物の会で、岩木山弥生登山道において当該種を確認した。

（木村啓）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　タカネトンボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Platanthera chorisiana* (Cham.) Reichb.f.

［形態的特徴］　高山帯の草地や湿地に生える。茎は高さ８～15㎝。葉は深緑色で地表近くにつき、広楕円形、２枚接近し長さ２～６㎝で厚くて光沢がある。花は黄緑色で径３～４㎜、10個内外つく。花期７～８月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャンに分布する。県内では八甲田山・岩木山に産する。成田（2016, 私信）は八甲田山で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **A**

和名　イイヌマムカゴ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Platanthera iinumae* (Makino) Makino

［形態的特徴］　山地の針葉樹の林床に生える。茎は高さ30㎝内外。茎の中ほどにやや接近して長さ８～15㎝の長楕円形の葉を２～３枚つけ、その上方に数個の披針形の鱗片葉がつく。葉の縁はやや波打つ。花は穂状に多数つき、小さくて黄緑色。花期７～８月。
［選定理由］　産地・個体数が少なく、森林伐採による減少が考えられる。
［分布と生態の概要］　北海道（渡島）・本州・四国・九州に分布する。成田（2016, 私信）は大鰐町・弘前市のスギ林で確認している。生育環境や生育地など不明な点が多い。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び伐採による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目　アヤメ科 **A**

和名　ヒオウギ **環境省：該当なし**
学名　*Iris domestica* (L.) Goldblatt et Mabb.

［形態的特徴］　山地の草地に生える多年草。茎は高さ60～100㎝。葉は剣状でやや粉白色を帯びる。花は放射相称、径３～４㎝。花被片は同形同大、橙色で暗赤色の斑点がある。花期７月下旬～８月。種子は黒色で光沢があり「うば玉」、「ぬば玉」と呼ばれる。観賞用とされる。
［選定理由］　産地が限られており、個体数がきわめて少ない。採取や自然災害等により消滅の危険性がある。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州・沖縄、朝鮮・中国・インドに分布する。県内では鰺ヶ沢町と八戸市南郷に希産する。日当たりの岩場の草地に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市南郷区島守で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キジカクシ目　ヒガンバナ科 **A**

和名　シロウマアサツキ **環境省：該当なし**
学名　*Allium schoenoprasum* L.var.*orientale* Regel

［形態的特徴］　高山の岩場に生える多年草。アサツキによく似ており、高さ15～50㎝。葉は円筒形、径３～５㎜。花は淡紅紫色、花被片は長さ６～８㎜（アサツキは８～10㎜）。雄しべは花被片とほぼ同長（アサツキの雄しべは花被片よりずっと短い）。花期７～８月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。高山生であるが山地にみられる点で貴重である。植生遷移・自然災害により減少の恐れがある。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（中部以北）、国外では朝鮮・サハリン・シベリア（東部）に分布する。県内では白神山地に産する。岩場の岩隙や草地に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地の自然遷移や攪乱に注意する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を主に引用） **（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　ホシクサ科 **A**

和名　カラフトホシクサ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Eriocaulon sachalinense* Miyabe et Nakai

［形態的特徴］　高層湿原に生える無茎で小型の１年草。葉は線形で、長さ４～５㎝、幅１㎜。花茎は５～10㎝。頭花は小さく径２㎜ぐらい、黒藍色。花は２数性で萼片・花弁・子房・花柱は各２個。雄芯は４個。
［選定理由］　希産種で個体数は少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）・サハリンに分布する。県内では八甲田山に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地の自然遷移や攪乱に注意する必要がある。
［特記事項］　最近の研究では八甲田山の本種はクシロホシクサに含まれる可能性が提示されている。ホシクサ属の分類はまだ不明確な部分があることから、ここでは従来の見解にしたがった。

（齋藤信夫）

被子植物イネ目　イグサ科 **A**

和名　ミクリゼキショウ　**環境省：該当なし**
学名　*Juncus ensifolius* Wikstr

［形態的特徴］　亜高山帯の湿原や流れのほとりに生える多年草。根茎は横に這う。茎は高さ30～50㎝。茎と葉は扁平。葉は幅３～６㎜。小頭花は普通２個つき、球形で径７～10㎜。花期は８～９月。
［選定理由］　高山生の希産種で個体数は少ない。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（中部以北）、国外では千島・北アメリカ北西部に分布する。県内では南八甲田に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

（齋藤信夫）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　タルマイスゲ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex buxbaumii* Wahlenb

［形態的特徴］　高層湿原に生える多年草。地下に長い匐枝がある。花茎がまばらに出て高さ30～50㎝。小穂は３～４個。上部に集まってつき、頂小穂だけ雌雄性で他は雌性。花期は６～７月。
［選定理由］　希産種で、確認された生育地は干拓により消息不明となっている（細井, 2010）。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（青森・長野）、国外では千島・シベリア・中央アジア・ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・オーストラリアに分布する。細井（2010）は「県内では三沢市仏沼（西村, June 8, 1959）に産する」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　攪乱や自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

（齋藤信夫）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ジョウロウスゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex capricornis* Meinsh. ex Maxim

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。叢生し、茎は高さ40～70㎝。葉は幅４～６㎜で硬い。小穂は茎の上方に集まってつき、長さ1.5～３㎝。果胞は反り返り、狭長披針形、長い嘴の先が２裂して反曲するのが特徴。花期６～７月。

［選定理由］　湿地開発により減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内に点在するが、太平洋側の六ヶ所湖沼群・小川原湖周辺に比較的産地が多い。湖沼・湿原の干拓・埋め立て等の土木工事や水害などによる撹乱地に先駆的に出現することもある。姿を消しても条件が整えば出現し消息がつかみにくい。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でつがる市山田川・三沢市仏沼・小田内沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　クリイロスゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex diandra* Schrank

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。茎は高さ50～80㎝。小穂は茎頂に密に集まってつく。果胞は長さ３㎜、卵円形で縁辺に小刺があり、革質で熟すと栗褐色となり光沢がある。花期６月。類似種ミノボロスゲ・オオカワズスゲは果胞が４～５㎜と大きいので見分けられる。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。生育地周辺の森林伐採・牧草地化等による土砂の流入・水質悪化が生育に影響を及ぼしている。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・秋田・長野・新潟）、北半球北部に広く分布する。県内では東通村荒沼に産し、湿原にツルスゲ・ムジナスゲ・ミツガシワ・タチギボウシなどと共に生育する。八戸市北沼のものは開発により1960年代に消滅した。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村荒沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　オクタマツリスゲ **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Carex filipes* Franch.et Savat.var.*kuzakaiensis* (M.Kikuchi) T.Koyama

［形態的特徴］　山地に生える多年草。タマツリスゲの変種とされる。茎は高さ30～60㎝。根茎は短く、葉は一部は越年して残る。果胞の嘴が短いのが特徴である。

［選定理由］　希少種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　本州（東北地方）に分布する。岩手県区界の標本に基づいて記録された（細井, 2010）。岩手県では宮古市・花巻市・滝沢市で記録されている。細井（2010）は「本県では川内町で大きい株が一度見つかっただけで詳しいことは解っていない。適潤な明るい林床に生える」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　登山者による踏圧、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　アオバスゲ **環境省：該当なし**

学名　*Carex insaniae* Koidz. var. *papillaticulmis* (Ohwi) Ohwi

［形態的特徴］　葉は細長く常緑でやや硬い多年草。葉長は19～30㎝、葉幅は２～５㎜。匐枝は無く、疎らに叢生する。有花茎は葉と同長かやや長い。雄小穂は棍棒状で、花茎先端に１個つき、鱗片は褐色。雌小穂は２～３個が離れてつく。果胞には明瞭な脈が多数あり、毛が密生している。

［選定理由］　これまでの分布は関東地方以西であったが、2009年５月５日に五所川原市神山地区で採集し、６年間に渡って研究調査を重ね2015年６月11日に新分布の発表をした。本県初発見で、東北地方初記録でもある。自生地は頻繁に崩落があり、20株より残存していない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は南千島。日本分布は本州の関東以西・四国・九州。本県分布は五所川原市。山地の尾根岩場や林縁などの崩落地に生育する。

［生存に対する脅威と保存対策］　山地林道の崩落地にだけ生育し、毎年の崩落により株数が年々少なくなっている。崩落防止の対策が必要である。

［特記事項］　標本は岡山理科大学星野研究室と津軽植物の会の標本庫に収納。本県が北限の植物。

（木村啓）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　クジュウツリスゲ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Carex kujuzana* Ohwi

［形態的特徴］　草地や明るい林内に生える多年草。根茎は横に這い、茎は疎生して高さ30～60㎝。基部の鞘は濃赤紫色であるのが特徴。葉はやや軟らかく、白緑色、幅３～５㎜。雌小穂は垂れ下がり、果胞をまばらにつける。果胞は長さ６㎜、広倒卵形で、長い嘴がある。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。1960年代頃から草地の減少により生育地が次第に失われ、最近は落葉広葉樹林に潜在していたのが、伐採跡地に出現するのを見るだけである。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北）・九州（北部）、朝鮮（南部）に分布する。県内では八戸市に希産する。生育地は採草地・放牧地（1960年）、落葉広葉樹林縁（1975年）、落葉広葉樹林伐採跡地（1996年）と変遷している。分布域は太平洋側の岩手県北にかけて藩政時代に馬の放牧が行われていた範囲である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

（須藤智道）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ハタベスゲ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**

学名　*Carex latisquamea* Kom.

［形態的特徴］　湿り気のある所に生える多年草。全体に毛のあるのが特徴。やや叢生し高さ40～70㎝。基部の鞘は赤褐色。葉は幅３～６㎜。果胞は硬い膜質、卵形で長さ５～６㎜、脈があり、無毛、先は嘴となる。

［選定理由］　希産種で個体数も少ない。1960年代頃から生育地の牧野・採草地が放置され遷移が進んで減少し、さらに養鶏場・養豚場の進出により沢沿いのものは消息不明となっている。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）・九州、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では太平洋側の八戸市・三沢市に産する。湿地周辺や流れのほとりに生育する。分布域はクジュウツリスゲと同じく、かつて牧野の展開していた範囲である。1978年に同じ分布域の岩手県洋野町の放牧地でサクラソウとともに小群をなしているのを見たが、今はそこも落葉広葉樹林に遷移し、わずかに残るだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

（須藤智道）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　イトナルコスゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex laxa* Wahlenb.

［形態的特徴］　高層湿原に生育する多年草。細い匐枝があり疎生する。茎は高さ20～40㎝。頂小穂は雄性で長さ１～２㎝、側小穂は雌性で長さ0.5～１㎝、長い柄があって垂れ下がる。果胞は微細な乳頭状突起を密布して灰青色。

［選定理由］　希産種で本県唯一の生育地である。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・栃木）、朝鮮・中国（東北部）・千島・シベリア・ヨーロッパ北部の周北極地域に分布する。県内では東通村小田野沢南通の湿原にサギスゲ・ミツガシワ・ヤチスゲ・トキソウなどと共に生育する。

［特記事項］　以前に三沢市仏沼（菊地政雄, June 15, 1959）で記録されてから報告がなく、絶滅が危惧されていた。根市益三が小田野沢南通の湿原で採集し（July 16, 2015）、県内で唯一の生育地が確認された。 **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ホソバオゼヌマスゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carex nemurensis* Franch.

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。密に叢生し、茎は高さ40～70㎝。葉は濃緑色で幅２～３㎜。小穂は長さ５～７㎜、やや離れてつき、栗褐色でやや光沢があるのが特徴。花期は６～７月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。細井（2010）は「県内ではつがる市（旧車力村牛潟）で井上守が採集した（June 2, 1970）以外に記録はない」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地の開発、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　クグスゲ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Carex pseudocyperus* L.

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。叢生し、茎は高さ40～70㎝。雌小穂は長さ２～５㎝、幅６～８㎜、点頭する。果胞は長さ４～５㎜、熟すと反曲し、口部は２深裂し、裂片は真っすぐでジョウロウスゲのように反曲することはない。花期７月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。水質悪化等の環境変化により危険性が増大している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・群馬・長野）、シベリア・ヨーロッパ・北アメリカに分布する。県内では東通村荒沼と三沢市小田内沼に産し、沼の岸辺に生育する。

［生存に対する脅威と保存対策］　荒沼は付近に原子力発電関係の開発が進行している。寒冷地湿原植物の希少な生育地として全体の保存を考える必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村荒沼・三沢市小田内沼で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ウシオスゲ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Carex raminskii* Kom.

［形態的特徴］　塩湿地に生える多年草。横走する根茎がある。茎は高さ30～50㎝。基部の鞘は赤紫色。小穂は３～５個直立してつく。雌花鱗片は紫褐色で中肋が淡緑色。果胞は卵形で凸レンズ状、灰緑色。

［選定理由］　本州唯一の生育地で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャッカ・アリューシャン・アラスカに分布する。三沢市天ヶ森射爆撃場の海水が流入する塩湿地に産する。

［生存に対する脅威と保存対策］　塩湿地の攪乱、自然遷移を注意深く見守る。

［特記事項］　細井（2010）は「この地の1998年と1999年の調査の際にアゼスゲに似た形態のスゲを得た。後日北海道大学所蔵の、カナダ産の標本と比較しウシオスゲと同定した。本州では初記録である」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　イッポンスゲ **環境省：該当なし**
学名　*Carex tenuiflora* Wahlenb.

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。茎は高さ20～60㎝、まばらに叢生する。葉は細く、幅１～1.5㎜、灰緑色。茎頂に２、３個密に集まった小穂をつける。小穂は長さ３～６㎜、雌雄性で基部に雄花がつく。果胞は長さ３～3.5㎜、灰緑色、多数の細脈がある。

［選定理由］　産地が限られており、個体数はきわめて少ない。生育地の湿原にはハンノキなどの木本類の進入が目立ち、消滅の危険性が増大している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・栃木・長野）、北半球に広く分布する。県内では三沢市仏沼に産する。仏沼は干拓されてしまったが、かつて周辺に発達していた湿原がわずかに残っている。イッポンスゲはそのミズゴケ湿原にツルコケモモと一緒に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　マシケスゲモドキ **環境省：該当なし**
学名　*Carex scitaeformis* Kük.

［形態的特徴］　山地の水湿斜面に生える多年草。タヌキランに似ているが、小穂は楕円状円柱形で幅７～８㎜。果胞は狭卵形で長さ４～５㎜、短い柄がある。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北）に分布する。県内では鰺ヶ沢町芦萢付近の河岸で採集されたのみで藤原陸夫の同定による（細井, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　自然遷移を注意深く見守る。

［特記事項］　細井（2010）は「オオタヌキランとも呼ばれる。勝山（2005）はタヌキランとアズマナルコかナガエスゲの雑種と推定している」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ヒメウシオスゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carex subspathacea* Wormsk.

［形態的特徴］　塩湿地に生える多年草。地下茎は横走し群生する。茎は高さ５～20㎝。葉は茎より高く伸び、やわらかで幅１～２㎜。雌小穂は無柄で直立する。果胞は卵形で灰緑色。
［選定理由］　本州唯一の産地である。開発による危険性が増大している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、千島・サハリン・ヨーロッパ北部・北アメリカ北部に分布する。県内では太平洋側の六ヶ所村と三沢の高瀬川河口部の塩湿地に産する。ウミミドリ・ヒメキンポウゲ・エゾツルキンバイ・イヌイなどと混生あるいは小群をなして生育する。北岸では干潟公園建設や護岸工事で一部消滅したが、生育状況から踏み付け・車輌立入り・ゴミの堆積がなければ保存可能と考えられる。南岸部は米軍天ヶ森射爆撃場内にあり立入禁止区域となって保存されている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で六ヶ所村尾駮沼・高瀬川河口で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　チシママツバイ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Eleocharis acicularis* (L.) Roem. et Schult. var. *acicularis*

［形態的特徴］　水田などに生育する普通のマツバイによく似ており、外観では区別できないが、刺針が１～３個で果より短い（マツバイは刺針が３～４個で果より長い）。細井（2010）は「マツバイの母種になっているが、進化上はマツバイから変わったものであろう」と述べている。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国、北半球の暖帯から温帯に広く分布する。細井（2010）は「県内では六ヶ所村市柳沼で確認されただけであるが、精査すれば他にも発見される可能性がある」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地の開発、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　チャボイ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Eleocharis parvula* (Roem. et Schult.) Link ex Bluff, Nees et Schauer

［形態的特徴］　海水の出入りする辺りに生える小型の多年草。マツバイによく似ているが、茎は高さ３～５㎝、やや太くてやわらかい。
［選定理由］　海岸開発により生育地が失われてきている。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、ヨーロッパ・シベリア・北アメリカ・南アメリカ・北アフリカに分布する。県内では尾駮沼・鷹架沼・高瀬川流出口付近に産する。満潮時に海水に浸り、干潮時には露出する平坦な砂泥地に小群で生育する。
［生存に対する脅威と保存対策］　目立たない植物であるが、産地の限られた貴重種であることを啓発し、開発にあたって十分注意する。
［特記事項］　1999年尾駮橋の上流部のチャボイの群生地が浚渫されていた。ここは国内で最も確実な産地である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）
　今回の調査で六ヶ所村尾駮沼のツルヒキノカサ - ウミミドリ群集の裸地で生育が確認できた。
（須藤智道）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　スジヌマハリイ（ヒゲヌマハリイ） **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Eleocharis equisetiformis* (Meinsh.) B.Fedtch.

［形態的特徴］　湖沼などの湿地に生える多年草。匍匐する根茎がある。茎は叢生し、高さ30～50㎝やや硬くてトクサのような縦すじがある。equisetiformis（トクサの型をした）はそこから命名された。小穂は１個頂生する。
［選定理由］　産地が限られ開発等により減少している。
［分布と生態の概要］　本州（中部以北）・九州（北部）、朝鮮・中国東北部・中央アジアに分布する。細井（2010）によると「県内では小川原湖・姉沼周辺に産する。やや砂質の湿地に小群で生育する。休耕田に見られることもある」という。石戸谷（2017, 私信）はつがる市で確認している。Shutohらはつがる市の沼で確認している（Shutoh *et al.*, 2019）。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地の開発には充分注意すべきである。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **A**

和名　ヒメワタスゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Trichophorum alpinum* (L.) Pers.

［形態的特徴］　稈は高さ10～30㎝、小穂は長さ５～７㎜、刺針は６個、糸状で花後は白色で著しく伸び、小穂から飛び出して風になびくため、糸くずのように見える。花期は６～７月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（北部）、朝鮮北部・千島・北半球の北部全般に分布することから、周極要素と呼ばれるグループに入る。県内では八甲田山に産する。自然遷移を注意深く見守る。
［生存に対する脅威と保存対策］　登山者による踏圧、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　イネ科 **A**

和名　ザラツキヒナガリヤス **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Calamagrostis nana* Takeda subsp. *hayachinensis* (Ohwi) Tateoka

［形態的特徴］　高山帯の岩場に生育する多年草。本州中部以北の高山に生育するヒナガリヤスに似ているが、花序の枝や小穂柄がざらつく点で区別される。茎は高さ40㎝以下、芒は短く小穂の外に伸び出さない。
［選定理由］　希産種で本県唯一の生育地である。
［分布と生態の概要］　岩手（早池峰山）・山梨（北岳）に産する。県内では佐井村縫道石山（626m）の岩石地で発見された（根市, 1989, 未発表）。高山生の植物が低山地で生育しており、貴重である。
［生存に対する脅威と保存対策］　付近は特殊植物群落として国の天然記念物に指定されている。
［特記事項］　青森県北限種で日本固有種である。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　イネ科 **A**

和名　エゾカモジグサ **環境省：該当なし**
学名　*Elymus pendulinus* (Nevski) Tzvelev var. *yezoense* (Honda) Tzvelev

［形態的特徴］　山地の林内に生える多年草。他のカモジグサ類に比べて茎は繊細で、高さ50～100㎝。花穂は細く、弯曲して先が垂れる。小花の基盤に短毛があるのが特徴。花期６～７月。
［選定理由］　産地が限られており個体数が少ない。県内の生育地は地形・地質から土砂崩壊等の自然災害の危険性がある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・長野）、朝鮮（北部）・中国（北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では太平洋側の南部町・三戸町に希産する。生育地は馬淵川に面した砂岩地斜面の落葉広葉樹林の林縁である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で南部町諏訪ノ平で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　イネ科 **A**

和名　オオトボシガラ **環境省：該当なし**
学名　*Festuca extremiorientalis* Ohwi

［形態的特徴］　山地に生える多年草。ウシノケグサ類としては大型で高さ70～100㎝。地下茎を伸ばし単生または疎生する。葉は幅５～12㎜。花序は大きく散開し、まばらに小穂をつけて垂れ下がる。護穎には長さ４～７㎜の芒がある。花期６～７月。
［選定理由］　希産種で個体数も少ない。同属の外来種オニウシノケグサとは生態が違い競合は考えられないが、森林の伐採や落葉広葉樹林のスギ植林地化により生育地が失われてきている。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、朝鮮（北部）・中国（北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では南部町名久井岳に希産し、谷間の林内に生える。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　イネ科 **A**

和名　タチイチゴツナギ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Poa nemoralis* L.

［形態的特徴］　深山に生える多年草。高さ40～60㎝。葉は幅１～2.5㎜、最上部の茎葉の葉身は葉鞘の３～４倍長い点で同属の他種と区別される。葉舌は微小である。株は作らない。
［選定理由］　希産種で個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州、北半球に分布する。国内での分布はよく分かっていない。細井（2010）は「県内では南八甲田の路傍の石礫地と十和田湖畔の岩上に生育する」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　花は目立たないが、開発に当たっては注意すべきである。
［特記事項］　館岡亜緒の同定による（細井, 2010）。　**（齋藤信夫）**

被子植物キンポウゲ目　ケシ科 **A**

和名　エゾキケマン **環境省：該当なし**
学名　*Corydalis speciosa* Maxim.

［形態的特徴］　ミヤマキケマンと外見はよく似ており、区別しにくい。種子の表面はミヤマキケマンでは小さい円錐状に尖って隆起しているが、本種は全く尖らず小疣状の突起を有する（凹点とみるのは誤り）。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手）、シベリア東部・サハリン・中国・朝鮮に分布する。県内では東通村尻屋の海岸部に小群がある。生態はミヤマキケマンと変わらない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）
　今回の調査で東通村尻屋で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　ケシ科 **A**

和名　オサバグサ **環境省：該当なし**
学名　*Pteridophyllum racemosum* Sieb.et Zucc.

［形態的特徴］　草丈20～40㎝の多年草。葉は根出し櫛状で、シダ植物のシシガシラの葉に似ている。花は白色４弁で花茎の先に、総状につく。
［選定理由］　全国的な希産種で、本県では津軽半島と下北半島に僅かに残存しているのみであったが、2017年５月７日に津軽西海岸深浦町で発見された。しかし、生育範囲が極限され個体数も少ない。新産地も含め、生育範囲も個体数も極限されている。
［分布と生態の概要］　現在のところ、津軽半島も下北半島も深浦海岸も生育場所を伏せているので、採取されていない。
［生存に対する脅威と保存対策］　新産地は、畑地や風力発電敷地と隣接している雑木地で、開発による消滅が心配される。加えて、採取による絶滅も考えられる。
［特記事項］　以前、大群落を形成していた津軽半島算用師峠のオサバグサが採取され、現在は絶滅してしまった。本県が北限の植物。１属１種の日本固有種。　**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **A**

和名　オキナグサ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Pulsatilla cernua* (Thunb.) Berchtold et J.Presl

［形態的特徴］　草丈10cmほどの多年草。全体に白長毛を密生し、葉は深く裂け、根生葉には柄がある。根は太く真っ直ぐに伸びる。花は暗赤紫色の鐘形で、包葉の中心から抜き出た花茎の先に一個を下向きにつける。花後、白い毛をつけた果実が毛槍を思わせる。

［選定理由］　2010年改訂版で触れたように、減少傾向が現在も続いている。そのため、自生現場に出会うことは極めて困難である。近年の自生種確認地点は、黒石市黒森山や岩木山麓弥生、八戸市糠塚など、極限され、個体数も極めて少ない。

［分布と生態の概要］　黒森山・岩木山麓・糠塚の個体数は数株に過ぎない。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生生育の条件となる自然状態の向陽原野が殆ど無くなっており、姿を見ることが困難となっている。自然向陽原野を回復するためには、昔ながらの野焼きや草刈を定期的に行って、原野を維持する方法が必要と思われる。

［特記事項］　本県が北限の植物。万葉集に詠われる「根都古草（ねつこぐさ）」は本種。　**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **A**

和名　シコタンキンポウゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ranunculus grandis* Honda var. *austrokurilensis* (Tatew.)H.Hara

［形態的特徴］　海岸の草地に生える多年草。地下に走出枝を出す。茎は高さ30～60cm。茎や葉柄の毛はねていて少ない。染色体数は2n＝28の４倍体である。花期６月。よく似たウマノアシガタ（キンポウゲ）は地下に走出枝を出さず、2n＝14である。

［選定理由］　本州唯一の産地であり、環境変化のいかんによっては生存の危険が考えられる。現在シコタンキンポウゲの生育する草地は寒立馬などの放牧地となっているが、幸いウマノアシガタ・シコタンキンポウゲを食草としないので、むしろ生育状態は良好である。しかし、今後馬の減少に伴って自然の牧野が放置されたり、牧草地化されることになればシコタンキンポウゲは急激に減少すると考えられる。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、千島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では東通村尻屋崎の海岸草地に産し、南限である。桑畑山産アイヌキンポウゲ（菊地, 1961）も同種と考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋崎で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **A**

和名　チトセバイカモ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Ranunculus yesoensis* Nakai

［形態的特徴］　バイカモに似ているが、托葉、花床、そう果にはまったく毛がない。葉は水中に展開する。水中の葉腋から伸びる花茎の先に５枚の花弁を持つ直径６～８㎜の白い花を水上に咲かせる。根は水底に張り、茎は水の流れに揺らしながら伸ばしており、40cmほどになる。花期は７～８月。

［選定理由］　産地が限られており、水質悪化・開発等により減少している。

［分布と生態の概要］　北海道や東北地方北部の浅い清流や湖沼に生育する沈水植物。北海道の千歳川で初めて確認された。細井（2010）は「県内では小川原湖と奥入瀬川流域に確認されているが、角野（1994）は津軽半島・深浦町（十二湖・驫木）を記録している」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　水質汚染に弱く、農薬や生活用水の流入が生育地の水環境の変化に大きな影響を与えている。　**（齋藤信夫）**

被子植物ユキノシタ目　ボタン科 **A**

和名　**ベニバナヤマシャクヤク** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Paeonia obovata* Maxim.

［形態的特徴］　林下に生える多年草。形態はヤマシャクヤクに似ており、茎は高さ30～50㎝。葉は裏面に軟毛がある（毛のないものをケナシベニバナヤマシャクヤクという）。花は淡紅色、雌しべの柱頭は長く、外に巻くように曲がる（ヤマシャクヤクの柱頭は短く少し曲がる）。花期５～６月。
［選定理由］　ヤマシャクヤクより個体数はずっと少ない。落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化および園芸採取などにより著しく減少している。生育地の保存と採取の防止が必要である。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・サハリンに分布する。落葉広葉樹林内に生え、石灰岩を好む傾向がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で階上町寺下で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **A**

和名　**チチッパベンケイソウ** **環境省：該当なし**
学名　*Hylotelephium sordidum* (Maxim.) H.Ohba

［形態的特徴］　山地の岩上まれに樹上にはえる多年草。葉は長さ2.5～4.5㎝で、互生あるいは対生し、普通は汚赤紫色で、葉形は卵形、広卵形、卵円形と変化がある。葉縁は波状またはまばらに低い鈍鋸歯がある。花茎は斜上し長さ10～40㎝で、花序は散房状で、花弁は５数性で白色～薄黄緑色。花期は９～10月。
［選定理由］　産地が非常に少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州中・北部（長野・新潟・山形・福島・宮城・岩手・青森各県の山地と岩手県の海岸）の多雪地帯に分布する日本の固有種である。県内では十和田湖畔の岩上や十二湖崩山に産する。一般に明るい岩上に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取の防止が必要。
［特記事項］　細井（2010）は「チチッパは上州の方言で葉の汚れた感じのくすんだ色からきている。しかし、県内産は淡い緑色でくすんではいない」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **A**

和名　**レブンイワレンゲ** **環境省：該当なし**
学名　*Orostachys furusei* Ohwi

［形態的特徴］　岩上に生える多肉質の多年草。全体粉白を帯びた緑色。葯は黄色。よく似たコイワレンゲは帯粉せず緑色で、葯は赤紫色である。
［選定理由］　北海道の海岸にやや広く分布しているが、本州では八戸市の海岸以外に見られず、減少傾向にある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）に分布する。県内では八戸市の海岸の岩上や岩隙に生える。しばしばコイワレンゲと混生することもある。
［生存に対する脅威と保存対策］　マニアの乱獲を防止する必要がある。
［特記事項］　本種の研究の歴史は八戸海岸の材料が最初であった。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・中須賀・白浜・深久保・大久喜・金浜で生育が確認できた。
（須藤智道）

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **A**

和名　アズマツメクサ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Tillaea aquatica* L.

［形態的特徴］　草丈５㎝ほどの一年草で、茎葉は肉質。茎は単一あるいは分枝し、薄緑色をしているが紅を帯びることもある。葉は柄がなく対生し、線状で先が尖る。対生する２枚の葉の基部は連結している。花は小形白色４弁で左右の葉腋に交互して１個ずつ付く。

［選定理由］　北海道と本州の海浜泥地などに希に見られる種類で、本県では1975年６月22日に六ヶ所村尾駮沼で発見された。翌年、開発による環境変化で尾駮沼の個体は消滅した。しかし、2007年８月16日に東通村尻屋地区で30余年振りに再発見され、現在に至っている。県内から一度消えた種類が30余年ぶりに別地点で再発見され、県内唯一の自生地となっている。

［生存に対する脅威と保存対策］　個体数が少なく、生育環境も極めて厳しい。生育地が開発されれば、一瞬にして消滅してしまう状況にある。

［特記事項］　尾駮沼の標本は東京大学に収納され、尻屋地区の標本は津軽植物の会に保存されている。ナデシコ科のツメクサを思わせる草姿をしている。　**（木村啓）**

被子植物バラ目　バラ科 **A**

和名　ミヤマダイコンソウ　**環境省：該当なし**
学名　*Geum calthifolium* Menzies ex Sm. var. *nipponicum* (F.Bolle) Ohwi

［形態的特徴］　亜高山帯から高山帯の岩場に生える多年草。高さ10～30㎝。茎や葉柄に黄褐色の剛毛がある。根生葉の頂小葉は円形で大きく、側小葉はごく小さい。花は黄色で、径２～2.5㎝。花柱はまっすぐ（他のダイコンソウ類のようにかぎ状に曲がらない）、長さ10㎜内外。花期は６～７月。

［選定理由］　県内の生育地は１か所だけで、個体数も少ない。高山生の植物であるのに高度の低い所にみられるのは特殊で貴重である。生育環境の保全と採取の防止が必要である。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）・四国（愛媛）、千島に分布する。県内では佐井村縫道石山（626m）に産する。風衝地の岩隙や岩礫地に生息する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物バラ目　バラ科 **A**

和名　エゾノウワミズザクラ　**環境省：該当なし**
学名　*Padus avium* Mill.

［形態的特徴］　ウワミズザクラに類似するが、花が大きく疎らに着くので、一見して違いが分かる。落葉高木であるが、本県自生の個体は生育地が岩木川氾濫地という環境の関係で大きくない。

［選定理由］　北海道のみの分布であったが、1977年５月13日つがる市木造地区の岩木川河川敷で発見され、本県はもちろん本州初記録となった。その後、稲垣地区や藻川地区や板柳地区で記録された。本県では、岩木川中流部の河川敷に限って自生分布している。

［分布と生態の概要］　岩木川河川敷の自生地の他に、内陸に本種生育の情報がある。調べてみたら、北海道からの移植株であることが分かった。交雑を避けたい。

［生存に対する脅威と保存対策］　岩木川河川敷の本種は、何れの地点も繁殖力が旺盛である。そのため、自然状態での絶滅の心配は無いと思われる。但し、河川改修などで自生地が改修されたり樹木が伐採されると、絶滅へ向かう心配がある。

［特記事項］　本県が南限の植物。　**（木村啓）**

被子植物バラ目　バラ科 **A**

和名　ホロムイイチゴ **環境省：該当なし**
学名　*Rubus chamaemorus* L.

［形態的特徴］　草丈10～20㎝で、トゲの無い雌雄異株の多年草。花は白色５弁であるが４弁も見られ、花径２㎝ほど。果実は黄赤色に熟し、長楕円形で長さ２㎝ほどである。

［選定理由］　北海道と本州北部に分布し、本県では1973年６月16日に五所川原市長富溜池の浮島で初発見された。その後、小川原湖地区でも記録されている。高層湿原を生育環境とするので、県内各地の同環境地域を長年に渡って津軽植物の会が調査しているが、上記２地点以外での確認も情報も無い。

［分布と生態の概要］　長富溜池の場合は、健全な状態で生育し、個体の増加が見られる。

［生存に対する脅威と保存対策］　高層湿原の良好なミズゴケ層に生育するので、微妙な環境変化により消滅が心配される。長富浮島の場合は他から運んできた小舟でないと辿りつけないので、人間の進入は全く無い。加えて、長富溜池全体が五所川原市指定の自然保護地ともなっている。

［特記事項］　長富溜池のホロムイイチゴ群落は、五所川原市の天然記念物指定を受けている。標本は東京大学植物標本庫に収納されている。　**（木村啓）**

被子植物バラ目　バラ科 **A**

和名　エゾシモツケ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Spiraea media* F.W.Schmidt var. *sericea* (Turcz.) Regel ex Maxim.

［形態的特徴］　山地の岩石地に生える落葉低木。高さ１ｍ内外。若枝は赤褐色で軟毛がある。葉は長さ２～３㎝、長楕円形、鈍頭、先にだけ少数の鋸歯がある。枝先に散房花序をつけ、花は白色、径５～６㎜。花期５月中～下旬。他のシモツケ類とは葉の形で見分けられる。

［選定理由］　産地が限られ個体数も少ない。生育地は崩壊斜面で、自然災害の危険性があり、また、高木類の進出による環境変化で消滅する恐れもある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、アジア東北部に分布する。県内では東通村尻屋に産する。石灰岩地の日当たりの崩壊斜面に、他の低木類と一緒に小面積で生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市宇曽利山湖で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物バラ目　バラ科 **A**

和名　ホザキシモツケ **環境省：該当なし**
学名　*Spiraea salicifolia* L.

［形態的特徴］　湿地周辺に生える落葉低木。高さ１～２ｍ。茎にやや稜がある。葉は互生し、長さ６～10㎝、狭長楕円形、鋭鋸歯がある。花は淡紅色、枝先に円錐花序につき、花弁は長さ２～３㎜。花期は６～８月。

［選定理由］　本州では産地の限られた種である。県内の生育地は１か所だけで、付近では開発が進行している。開発はともすれば湿地優先となりやすいので、保存を計る必要がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・栃木・長野）、北半球北部に分布する。県内では階上町に産する。八戸－久慈道建設に伴う調査（2001年）で小群が確認された。生育地はかつての牧野の凹地に残された沼沢地状の場所である。日当たりのよい湿地周辺に生え、地下茎を伸ばして繁殖する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で階上町蒼前平で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物ウリ科　ウリ科 **A**

和名　スズメウリ **環境省：該当なし**
学名　*Zehneria japonica* (Thunb.) H.Y.Liu

［形態的特徴］　蔓性の１年草。茎は細長く、巻髭で他物に絡み延長する。葉は卵円形で薄く、頭部が鋭く尖り表面はざらつく。花冠は白色で５裂し、径５㎜ほど。果実は径１～２㎝の球形で、糸状の柄に下垂している。

［選定理由］　暖地系植物で、九州・四国・本州に分布するが本県での記録は無かった。それを1966年９月４日に深浦町吾妻川下流部で発見され、北限種となった。繁殖力が低いようである。その後の継続調査で、深浦町の他地点でも確認されたが、拡散されることはなく深浦町に留まっている。

［分布と生態の概要］　一年草であるためか、生育地の環境変化で発芽しないこともあるようで、姿が見られない年もある。また、近隣地に突然群落を形成したこともある。詳細な生態観察が必要である。

［生存に対する脅威と保存対策］　吾妻川下流部の河川側帯にみられるので、河川改修や河川整備が行われると、消滅する心配がある。河川域全体の保存が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **A**

和名　キバナノコマノツメ **環境省：該当なし**
学名　*Viola biflora* L.

［形態的特徴］　葉の表裏の縁や裏面脈状に毛を散生する。茎は斜めに立ち、高さ５～20㎝。まばらに３～４個の葉がつく。葉は全体が明るい緑色で、長さ１～２㎝、幅1.5～3.5㎝、円腎形、先が円く、基部は深い心形、葉柄は長さ葉の２～６倍で２～10㎝。根出葉は少数。花期は６～７月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）・四国・九州（屋久島）に分布する。北半球の亜寒帯に広く分布する。県内では南八甲田乗鞍岳・横岳に産する（細井, 2010）。須藤（2018, 私信）は南八甲田乗鞍岳で再確認した。高山の湿った草地や砂礫地に生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地の保存と園芸採取の防止が必要。　**（齋藤信夫）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **A**

和名　エイザンスミレ **環境省：該当なし**
学名　*Viola eizanensis* (Makino) Makino.

［形態的特徴］　草丈10㎝ほどで、葉が深く３裂しているのが基本の多年草。葉が深裂しているスミレ属は本県には本種だけなので、誤認することは無い。花は淡紅色であるが、濃かったり薄かったりの差がある。側弁の基部に毛を備えている。

［選定理由］　県内では太平洋側の低山地を生育域としているが、八戸地区と五戸地区の２地域だけでしか確認されていない。個体数が少なく、道端を生育場所としているので、道路の拡張や整備などの工事が行われると、一瞬にしての消滅が心配される。

［分布と生態の概要］　長年に渡って、当該種の分布調査をしているが上記２地点以外での生育は認められず、分布情報も無い。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生地点の五戸町手倉橋も階上町赤保内も株数が限られ、増加する傾向は認められず、辛うじて生き延びている状況である。地域指定の保護対策が必要と思われる。

［特記事項］　日本固有種。本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　アマ科 **A**

和名　マツバニンジン　**環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Linum stelleroides* Planch.

［形態的特徴］　日当たりのよい草地に生える１年草。茎の高さは40～60㎝。枝分かれした茎の先に淡紫色で径約１㎝の花をつける。花弁は５枚。花はしぼむことなく、咲いたその日の午後に落花する。葉は狭長楕円形で幅２～４㎜、３脈がある。葉茎はやや粉っぽい淡緑色。花期は８～９月。
［選定理由］　1960年代から激減し消息不明となっている。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、東アジアに分布する。県内では、かつて全域の草地に分布していたが、戦後牧野がなくなるに従って影を潜めるようになった。最近三沢市の米軍基地内で見つかっているが、今は代わって形態がよく似て花が黄色の外来種キバナノマツバニンジンが進出してきている（細井, 2010）。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取を防止する必要がある。人間の生活様式の変化と自然遷移に伴う適地の減少が著しい。　**（齋藤信夫）**

被子植物フトモモ目　アカバナ科 **A**

和名　ケゴンアカバナ　**環境省：該当なし**
学名　*Epilobium amurense* Hausskn.

［形態的特徴］　イワアカバナに似ているが、茎は低く６～40㎝、２列の稜線上に伏毛がある点で区別される多年草。葉は長楕円形～卵状披針形。花弁は淡紅色、倒卵形、茎上部の葉腋からでる。柱頭は頭状。花期は７～８月。
［選定理由］　最近報告もなく消息不明となっている。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国、アムール・ウスリー・中国（東北）・台湾・朝鮮北部・樺太・オホーツク・カムチャツカに分布する。県内では八甲田大岳の石礫地で原寛によって確認されたが、その後見つかっていない（細井, 2010）。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。
［特記事項］　細井（2010）は「アカバナ類は分類が難しいので、引用標本がない過去の記録は再確認が難しい。最近「Flora of Japan」では県内に広く分布しているイワアカバナは本種の亜種 *E.amurense* subsp.*cephalostigma*（Hasskn.）Chen et al.として取扱われている」と記している。
（齋藤信夫）

被子植物フトモモ目　アカバナ科 **A**

和名　アシボソアカバナ　**環境省：該当なし**
学名　*Epilobium anagallidifolium* Lam.

［形態的特徴］　高山の礫地や草地に生える小さな多年草。茎は高さ３～15㎝、しばしば株状になる。葉は下部では対生、上部では互生し、長楕円形～卵状披針形、縁に低鋸歯がある。花は淡紅色。柱頭は棍棒状。花期は７～８月。
［選定理由］　希産種で個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（中部以北）、国外では南千島、北半球の周極地域に広く分布する。細井（2010）によると県内では八甲田大岳噴火口のあたりに見られる。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。**（齋藤信夫）**

被子植物フトモモ目　アカバナ科 **A**

和名　ヒメアカバナ　**環境省：該当なし**
学名　*Epilobium fauriei* Lév.

［形態的特徴］　亜高山帯の砂礫地や岩場に生える小型の多年草。茎は高さ３～20cmで稜線はない。全体に短毛があり、ほとんど枝分かれしない。葉は線形～線状長楕円形、縁に１～４対の鋸歯がある。花弁は淡紅色。柱頭は棍棒状。花期は７～９月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北、鳥取大山が南限）、千島に分布する。県内では岩木山に産し、山頂の岩石地にみられる。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。**（齋藤信夫）**

被子植物ムクロジ目　ムクロジ科 **A**

和名　クロビイタヤ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Acer miyabei* Maxim.

［形態的特徴］　山地に生える落葉高木。高さ15～20m。樹皮は灰黒色、縦に不規則に裂ける。葉は掌状に５中裂し、裂片に鈍歯牙があり、先は尾状に伸び鈍端（他のイタヤカエデ類は鋭先頭）。花は淡黄色。花期５月。翼果は水平に開く。
［選定理由］　産地・個体数が少ない。生育適地の谷沿いの開田・植林が進んで著しく減少した。今は渓流のほとりにわずかに残るだけである。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・秋田・長野）に分布し、日本固有。県内では八戸市南郷と平川市碇ヶ関に産する。本州北部では北上山地が分布の中心で、八戸市南郷ではその北端部に相当する。岩手県北部ではしばしば小群がみられる。谷川沿いに生育することが多い。エゾイタヤなどと同等に扱われて伐採されるおそれがあるので、貴重種であることを啓発する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市南郷区島守相畑・平川市葛川で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物アブラナ目　アブラナ科 **A**

和名　タカネグンバイ　**環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Noccaea cochleariformis* (DC.) A. et D.Löve

［形態的特徴］　草丈15cmほどの小型多年草。根生葉は有柄で楕円形、茎葉は卵形で茎を抱き左右が矢尻形に張り出している。花は白色４弁で果実は軍配形となる。
［選定理由］　日本特産で北海道だけに分布するとされていたが、1996年７月９日に西津軽郡深浦町の吾妻川の上流で発見され、本州初記録となった。その後、津軽植物の会が現在まで県内全域を巡り確認調査をしているが、他地点での確認は全く無い。また、他県からの分布情報も無く、本州唯一の産地となっている。
［分布と生態の概要］　生育範囲は極めて狭く個体数も極めて少ない。そして、小規模な崩壊が毎年認められていて、一部の生育個体が埋まったり、流されたりしている。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点は深山渓谷の断崖礫地で岩礫や砂礫の崩落が見られる。大きい崩落があると一瞬にして絶滅する危険がある。絶滅をふせぐために崩落防止などの対策が必要である。
［特記事項］　本県が南限の植物。**（木村啓）**

被子植物ナデシコ目　タデ科 **A**

和名　ヤナギヌカボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Persicaria foliosa* (H.Lindb.) Kitag. var. *paludicola* (Makino) H.Hara

［形態的特徴］　水に浸された湿地に生える一年草。茎は下部は斜めに倒れ、上部は斜上して枝を分け、高さは30～60㎝。葉は披針形～長卵形で葉の裏には多くの腺点がある。腺点は出っ張っている。花は９～10月に咲く。

［選定理由］　個体数が減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州、ヨーロッパ・シベリヤ・アムール・ウスリー・中国（東北）に分布する。細井（2010）は本種の生態を先人の記録を引用して次のように紹介している。すなわち、県内では佐藤（1943）が写生図を残し「山野ノ沼沢地、溜池ノ底、水湿路傍、湿潤ノ畑地等ニ発生。溜池ニ発生スルモノハ長期間水中ニ沈生スルモヨク生存ス。貯水池雑草ノ著シキモノナリ」とある。攪乱を受けている陽光地の湿地、沼畔、休耕田などに稀に生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地の環境維持を計る。

［特記事項］　細井（2010）は本種の確認経緯について次のように紹介している。すなわち、村井（1936）・菊地（1967）・Mizushima & Mori（1958）が記録している。その後、各地で見出された。本種の等価基準標本Sept.1903 TI-Syntypeは木梨延太郎が青森で採ったものである。近年は低湿地の生育池が開発で激減している。青森市大野の標本（Oct.24, 1955）の生育地は消失したが、ここの個体は下半分が倒伏して上半分が立ち上がり高さ15～20㎝で分枝しない。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　タデ科 **A**

和名　コガネギシギシ **環境省：該当なし**

学名　*Rumex maritimus* L. var. *ochotskius* (Rech.f.) Kitag

［形態的特徴］　海岸や内陸の砂地に生える１年草または越年草。茎は直立、高さ20～30㎝、上部は分岐する。花は７～８月に咲く。果実には翼の長い刺とこぶのような突起が目立つ。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、ヨーロッパ・シベリア・モンゴル・中国北部・ロシア（東部地域）に分布する。本県での分布の確認経緯について細井（2010）は次のように記している。すなわち、本州では八戸のみであったが、最近むつ小川原港建設に伴う堀削残土堆積地に出現し数年で消滅した。しかし、米倉浩司（2000）が六ヶ所村尾鮫沼付近で見出し、県内で確実な産地が確認された。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生態は不明部分が多いことから、生態を明らかにしたうえでの対応策を考える必要がある。

［特記事項］　細井（2010）は「松村（1912）はMutsuの産と記録しているが、詳しいことは分からない。八戸市鮫海岸で山田玄太郎が1912年（明治45年）に採集した標本が岩手大学農学部に残されていることを菊地（1965）が記録したが、その後佐藤耕次郎が津軽雑草図説に本種の果の図を残している」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **A**

和名　クシロワチガイソウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Pseudostellaria sylvatica* (Maxim.) Pax

［形態的特徴］　山地の林下に生える多年草で、紡錘状の根がある。茎は細長く、高さ５～25㎝で、多くの枝を分ける。葉は線形～線状披針形で対生し、葉柄はない。５～６月に花を咲かせる。花弁は５枚で、白く倒卵形、先は２つに切れ込みが入る。閉鎖花をつける。外観はエゾフスマに似る。

［選定理由］　特殊な限られた環境に分布し、希産である。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「北海道のほか本州では栃木県と岩手県北上山地にも産することが知られている。朝鮮・中国（東北）・アムール・ウスリー・ウダに分布する。県内では白神山地の尾根すじの半陽地に生育し、数は少ない。青森・岩手両県では花崗岩類の風化土にのみ分布する」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　乱獲を防ぐ。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **A**

和名　チシマツメクサ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Sagina saginoides* (L.) Karst.

［形態的特徴］　全体無毛、肉質で、寒地、高山に生える越年草あるいは多年草。茎は株状で多くの枝を張る。高さは３～５㎝。葉は長さ0.5～1.5㎝、細い線形で先が尖る。根出葉はロゼット状である。花期は５～９月。花は５数性で直径３㎜、茎上に単生、時に腋生。小花柄は糸状で、花後に曲がるが、果時には再び直立する。

［選定理由］　国内では北アルプスと北海道に離れて分布していて、途中に岩木山だけで杉本（1965）によって記録されている（細井, 2010）。

［分布と生態の概要］　北海道・本州中部以北に稀に見られ、ヨーロッパ・カフカス・中央アジア・シベリア・中国（東北）・朝鮮・樺太・千島・カムチャツカ・北アメリカに分布する。

［生存に対する脅威と保存対策］　踏圧を受けやすい場所に生える。目立つ花でないが、マニアの乱獲から守りたい。

［特記事項］　細井（2010）は「杉本（1965）の記録以来、岩木山頂一帯から再確認の報告がない」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **A**

和名　エンビセンノウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Silene wilfordii* (Regel) H.Ohashi et H.Nakai

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。茎は高さ50～80cm。葉は対生し、狭長卵形。花は緋赤色で、花弁の先は燕尾状に細裂する。花期は８月上旬。類似種フシグロセンノウは林縁などに生え、花が大きくてくすんだ朱赤色、花弁は裂けない。

［選定理由］　生育地は現在陸・海上自衛隊の基地となっている。かつての生育地であった辺りには木本類の進出が目立ち、2003年の立入り調査では植生遷移が進行し、個体数がきわめて少なくなっている。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・埼玉・山梨・長野）、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では八戸市北沼に産することが古くから知られ、八太郎雑記（小井川, 1973）に明治の頃の状況が記されている。沼の周辺、背後の段丘および斜面の湿地に、サワギキョウ・タチギボウシなどと共に生育していたが、現在は段丘状の湿地にわずかに残っているだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査では陸上自衛隊八戸駐屯地の協力が得られず現地調査を実施することができなかったが、生育している可能性があるのでこのままのランクとする。　**（須藤智道）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **A**

和名　イトハコベ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Stellaria filicaulis* Makino

［形態的特徴］　茎は四角で細く、そう生し、糸のように伸び、高さ30～80㎝。葉は対生し、線形で長く尖り、長さ１～４㎝。幅１～３㎜。葉質は薄く、無毛。花は白色５弁で長さ６～８㎜、深く２裂し、花柄の頂につく。花弁は萼の１倍半長。萼は披針形で先は鋭頭。

［選定理由］　本州の宮城県仙台平野と関東平野の低湿地に希に見られる種類であったが、1976年６月13日に、つがる市車力地区の低湿地で発見され、日本最北限種となった。発見以来、現在まで全県調査を継続しているが、他地点では確認されず、分布情報も全くない。

［分布と生態の概要］　生育地への進入道は無く、熟練した案内人がなければ辿り着くことが出来ない。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点の低湿地環境が、発見時に比べて乾燥化が極端に進んでおり、当時の群落状態が見られなくなっている。

［特記事項］　発見時の標本は、東京大学に収納されている。2017年３月31日発行の『北東北維管束植物分布図』には文献記録として、当該地が印されている。　**（木村啓）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **A**

和名　エゾハコベ　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Stellaria humifusa* Rottb.

［形態的特徴］　塩性湿地に生える多年草。茎は基部が這い、直立して高さ５～10㎝。葉は狭長楕円形で鋭頭、質やや厚くて無毛。花は葉腋につき、花柄の長さ１～３㎝。花期６月下旬～７月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。生育地の尾駮沼周辺は、近年原子力関連の開発が進んでおり、海岸・湿原開発のいかんによっては消滅の危険性が大きい。現在の生育状況から、環境が維持されれば繁殖の可能性もある。本州では貴重な北方塩性湿地植物群落全体の保存を考える必要がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、北半球北部に分布する。県内では六ヶ所村尾駮沼河口部南岸に発達したウミミドリ・ヒメキンポウゲ・エゾツルキンバイ・オオシバナ・ヒライなどからなる塩性湿地植物群落中に、局所的に小面積で生育している。本州唯一の産地で南限である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋崎・六ヶ所村尾駮沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物ナデシコ目　ヒユ科 **A**

和名　ミドリアカザ　**環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Chenopodium bryoniifolium* Bunge ex Trautv.

［形態的特徴］　山野の林縁などの半日陰に生える一年草。茎は細く、高さ60㎝ほどになる。葉は長い柄があり、三角状卵形、菱状卵形などで葉先は鋭形、基部は広いくさび型～切形。花期は８～９月。花序はまばらに花をつける。花期は８～９月。

［選定理由］　限られた環境で、希産種。開発により減少している。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、アジア東北部に分布する。全国的に希産である。県内では三戸町目時に産する。八戸市南郷区の新井田川沿いにも見られたが、ダム建設により水没した。イワアカザともよばれ川沿いの岩石地に生える（細井, 2010）。須藤（2018, 私信）は八戸市櫛引で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　一年草であることから、種子形成・散布時期を的確にとらえながら、管理していく必要がある。開発に当たっては十分留意すべきである。　**（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　ハナシノブ科 **A**

和名　エゾハナシノブ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Polemonium caeruleum* L. subsp. *yezoense* (Miyabe et Kudô) H.Hara var. *yezoense* Miyabe et Kudô

［形態的特徴］　高山または山地の岩場や草原に生える多年草で日本の固有種。茎にはわずかに稜線がある。葉はシダ植物のシノブのように分かれ、奇数羽状複葉で、小葉は８～12対ある。茎は高さ30～80㎝。青紫色の花を茎の上部に散房状に咲かせる。花冠は青紫色で５裂し、径３㎝ぐらい。花期は５～８月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）に分布する。県内では白神山地の一部に産する。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び踏み付けの防止が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **A**

和名　**サクラソウ** **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Primula sieboldii* E.Morren

［形態的特徴］　湿り気の多い所に生える多年草。全体にちぢれた毛がある。葉は長さ４～10㎝。長卵形から楕円形、しわが多い。花茎は15～40㎝。花は先端に７～10個散形につき紅紫色、径２～３㎝。花期５月。栽培され多くの園芸品種がある。

［選定理由］　草地の減少、遷移の進行、落葉広葉樹林の伐採および外来種との競合などにより著しく減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州、朝鮮・中国（東北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では太平洋側に偏った分布を示す。かつては海岸草原から内陸部の牧野・採草地の湿地周辺に広く分布していたものと考えられる。今は七戸町・三沢市以南にややまれに産するだけである。日当たりの湿地周辺に生えるが、川岸の春日光のよく差し込む落葉広葉樹林内にも見られる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市鮫町中須賀・松館蟹沢・大久保金吹沢、階上町追越で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **A**

和名　**チシマツガザクラ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Bryanthus gmelinii* D.Don

［形態的特徴］　高山帯の岩石地に生える常緑の小低木。茎は分岐しながら地面を這いマット状に広がる。葉は互生し、線形で厚い。概形がガンコウラン（ツツジ科）に似ている。枝先に花茎を伸ばし、上部に２～10個の淡紅色の花をつける。花冠は離弁性で径５～７㎜。花弁は４個。花期は７～８月。

［選定理由］　希産種である。盗掘により激減している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手）、千島・カムチャッカに分布する。県内では南八甲田山に産する（細井, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　盗掘の防止と生育地の保存が必要である。 **（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **A**

和名　**エゾノツガザクラ** **環境省：該当なし**

学名　*Phyllodoce caerulea* (L.) Bab.

［形態的特徴］　高山に生える常緑の小低木。高さは10～15㎝、茎はよく分枝する。葉は線形で互生し、縁に微小な鋸歯がある。外観はアオノツガザクラに似る。花冠は壷状で紅紫色。蒴果に残る花柱は果体より長い。花柄、萼、花冠の表面などに腺毛がある。花期は７～８月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・山形）、北半球北部に分布する。県内では岩木山だけに産する。雪田の周辺の草地や礫地に生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取、乱獲を防止する必要がある。

［特記事項］　細井（2010）は「岩木山のものは典型的なエゾノツガザクラと異なり、一集団があるのみである」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **A**

和名　カラフトイチヤクソウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Pyrola faurieana* Andres

［形態的特徴］　葉は根生し、葉柄は長さ1.5～3.5cmで狭い翼がある。葉身は長さ2.5～４cm、幅２～３cmで、広い楕円形である。葉縁には小さな鋸歯がある。葉の間から長さ10～20cmの花茎を伸ばし10～20個の赤みを帯びた白色の花を下向きに咲かせる。花弁はあまり開かない。花柱がやや短く湾曲しない。総状花序である。花期は７～８月。

［選定理由］　県内では非常にまれである。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（東北地方）、国外では千島列島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では八甲田大岳、赤倉岳ほかに産する。亜高山帯から高山帯の常緑の小低木が覆う場所や、草地・砂礫地などに生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。**（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **A**

和名　キバナシャクナゲ **環境省：該当なし**
学名　*Rhododendron aureum* Georgi

［形態的特徴］　高山に生える常緑低木。茎は普通横に這い、枝は斜上して高さ20～100cm。葉は枝の先に集まり、柄があり基部は楔形。花は黄色、枝の先に集まってつき、径３cm前後。花期は７月頃。県内に広く分布するハクサンシャクナゲは、葉の基部が円いか浅く心形になることで区別される。

［選定理由］　本県ではきわめて珍しい植物で、盗掘のため自生地ではほとんど確認できなくなっている。マニアの採取を防止する必要がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン以北の寒帯に分布する。高山のハイマツ林や礫地に生える。県内では、かつて、白神山地・八甲田山・岩木山などで生育が確認されているが、その後の報告がきわめて少ない。花期には花の色で分かるが、花のない時期は葉の形態で判断するしかない。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取・登山者の踏み付けを防止する必要がある。**（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **A**

和名　バイカツツジ **環境省：該当なし**
学名　*Rhododendron semibarbatum* Maxim.

［形態的特徴］　高さ２mほどになる落葉低木で、若い枝や葉柄には長く開出した腺毛と短い毛がある。葉は互生。葉身は楕円形で長さ2.5～５cm、幅１～２cm、基部は円い。葉柄は長さ５～10mmほどである。葉の表面には毛が散在し、裏面の葉脈には長い腺毛が生える。花冠は白色、大きさは２cm前後で、枝先の葉芽の下に１～数個咲く。花期は６～７月。

［選定理由］　県内ではきわめてまれである。

［分布と生態の概要］　北海道（南部）・本州・四国・九州に分布する。県内では深浦町（旧岩崎村）の山地に産するが、詳しいことは分かっていない（細井, 2010）。日本の固有種で、山地の林縁などに生育する。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取を防止する必要がある。**（齋藤信夫）**

被子植物リンドウ目　リンドウ科 **A**

和名　ムラサキセンブリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Swertia pseudochinensis* H.Hara

［形態的特徴］　草地に生える１年草または越年草。茎は高さ10～50㎝、暗紫色を帯びる。葉は対生し長さ２～４㎝、線上披針形。花は青紫色で、濃紫色の脈がある。花冠裂片の密腺溝の毛に乳頭突起がある（類似種センブリの毛は平滑）。花期９月下旬～10月。

［選定理由］　生育環境が狭められ著しく減少している。「青森県レッドデータブック」（2000年３月）で絶滅ＥＸとされたが、2000年10月に八戸市のアカマツ林伐採造成地に発見され、普及版（2001年）ではカテゴリーＥＸからＡに変更された。その後八戸－久慈道建設調査（2001年）で、最近では2007年に東通村野牛の新設道路脇で三上により発見されている。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・アムールに分布する。県内では太平洋側に希産する。かつては牧野のススキ草地などに生育していたが、1960年代から消息不明となっていた。最近、以前の生育地であった辺りの撹乱地にまれに出現することが分かった（青森県, 2007）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村猿ヶ森・八戸市鮫町大須賀で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物リンドウ目　マチン科 **A**

和名　アイナエ **環境省：該当なし**
学名　*Mitrasacme pygmaea* R. Br.

［形態的特徴］　草丈５㎝ほどの矮小な１年草で葉は２～４対が対生する。花は細い花梗の先につき、白色鐘形で先端が４裂する。

［選定理由］　県内唯一の自生地である五所川原市の湿気のある原野の植生遷移が進み、個体数が減少傾向にある。このままでは絶滅することが明らかなので、ランクをＢからＡへ上げ、緊張感を持って見守ることにした。

［分布と生態の概要］　世界的分布は、東南アジア・中国・朝鮮半島・日本。日本では本州・四国・九州に分布。県内分布は五所川原市狼野長根自然公園のみである。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生地は、五所川原市が管理する自然公園になっており、定期的に除草が行われ、生育環境が辛うじて保たれている。定期的除草が止まれば、絶滅するものと思われる。津軽植物の会では、自生地に毎年足を運び生育状態を見守っている。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **A**

和名　バシクルモン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Apocynum venetum* L. var. *basikurumon* (H. Hara) H. Hara

［形態的特徴］　海岸の草地に生える。茎は帯赤色、高さ40～80㎝で枝分かれが多い。葉は長さ２～５㎝、幅７～15㎜で対生するが、主幹部分では互生する。茎葉ともに無毛。花冠は鐘形で淡紅紫色、長さ６～７㎜。花期は７月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道（西南部）・本州（青森から新潟までの日本海側）、国外では南欧・ロシア・モンゴル・中国東北部・朝鮮に分布する。県内では夏泊半島だけに産する。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

［特記事項］　宮部（1949）はアイヌ語で「Paskuru-mun」（長い地下茎を出す草）からきており、これは驚くべき長い地下茎を以てはびこる草の意であるとしている（細井, 2010）。　**（齋藤信夫）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **A**

和名　**コカモメヅル** **環境省：該当なし**
学名　*Tylophora floribunda* Miq.

［形態的特徴］　山野に生えるつる性の多年草。葉は対生し、卵状披針形、基部心形、長さ３～６cm、幅１～３cm。花は暗紫色。
［選定理由］　希産種で個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では原田幸雄が南部町（旧名川町）で採取した標本（Aug 11, 1975）が１点あるだけで、以来同方面で注意して見たが未だに再確認できていない。北限種である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）
　今回の調査で階上町茨島のヨシ低層湿地で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ムラサキ目　ムラサキ科 **A**

和名　**ムラサキ** **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Lithospermum erythrorhizon* Siebold et Zucc.

［形態的特徴］　山地の草原に生える多年草。全体に粗毛が多い。茎は高さ40～70cm。葉は披針形、表面にへこんだ平行脈が目立つ。花は白色で径４mm、喉部に黄味を帯びた突起がある。花期７月。分果は白色で平滑。
［選定理由］　生育地である草地の減少・遷移進行・外来種との競合などにより、産地・個体数の減少が著しい。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・アムールに分布する。県内では全域に分布するがまれである。かつては草地にまれでなかったが、牧野・採草地の廃止と共に1960年代頃から激減した。日当たりの排水のよい土壌を好むので、石灰岩地が適合し、今でも東通村尻屋および八戸市・階上町の石灰岩地でみられる。
［特記事項］　根は昔から紫根染めに用いられ、かつては各地で栽培が行われ、南部地方のものは特に「南部紫」として有名であった。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で深浦町松神・鰺ヶ沢町山田野・五所川原市前田野目・東通村尻屋で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ムラサキ目　ムラサキ科 **A**

和名　**ツルカメバソウ** **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Trigonotis iinumae* (Maxim.) Makino

［形態的特徴］　林下の湿り気のある所に生える多年草。茎は高さ10～20cm。花が終る頃葉腋から走出枝を長く伸ばし新苗を生じる。葉は卵形、下部のものには長柄がある。花は淡青色から白色、直径１cmぐらい。花期５月下旬～６月。類似種タチカメバソウは山地生で走出枝を出さない。
［選定理由］　生育地はむしろ里山の範囲にあり、これまで開田や環境改変で失われてきたものと考えられ、開発等により減少は進行している。
［分布と生態の概要］　本州（中部以北）に分布する。日本固有。県内では太平洋側南部の八戸市・階上町に産し、北限である。丘陵地の沢沿いの林下や流れのほとりに小群で点在する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市沢里・松館蟹沢で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **A**

和名　**マルバノサワトウガラシ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Deinostema adenocaulum* (Maxim.) T.Yamaz.

［形態的特徴］　湿地に生える１年草。サワトウガラシによく似ているが、葉は卵円形で柄がなく、長さ４～10㎜、幅３～５㎜、明瞭な５～７脈がある。茎は下部で分岐し、直立したり斜上し、高さ10～18㎝。花は上部の葉腋につき長さ４㎜。正常花と閉鎖花がある。同じ部位に正常花と閉鎖花がある場合には正常花のほうが結実が早い。花期は８～９月。

［選定理由］　湿地の埋立て、耕地整理、除草剤散布で激減している（細井, 2010）。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮南部に分布する。細井（2010）は「県内では鶴田町の休耕田とつがる市平滝沼に産するが、他にも精査を要する」と記している。葛西（2018）は青森市で群生を確認している。また、八戸市でも確認報告があるという。

［生存に対する脅威と保存対策］　花が小さく目立たないので、採取の心配はないが、保護していくべきである。 **（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **A**

和名　**スギナモ** **環境省：該当なし**

学名　*Hippuris vulgaris* L.

［形態的特徴］　湖沼や池塘に生育する沈水～抽水の多年草。流水中では流れになびき、止水中では茎の上部が気中に立つ。直立茎で分枝せず、高さ30㎝ほどで葉が多数輪生。花は葉腋につき、雄蕊１本雌蕊１本から構成。花被片は退化して目立たない。果実は先がやや尖った卵形で、大きさは２～３㎜。

［選定理由］　全国的に分布が限られており、県内では八甲田田代地区の一地点だけで確認されているのみである。津軽植物の会では、長年に渡って県内各地の類似環境地点に足を運んで調査しているが、当該種の確認は無く、分布情報も無い。

［分布と生態の概要］　世界的には周北極地域に分布する。日本では北海道と本州中部以北に見られる。県内では、八甲田田代地区に生育しているのみである。

［生存に対する脅威と保存対策］　湧水環境の清流に生育しているので、微妙な環境変化により、絶滅へ進むことが心配される。生育地の環境保全が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。日本では１属１種、世界では１属３種が知られている。**（木村啓）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **A**

和名　**キクモ** **環境省：該当なし**

学名　*Limnophila sessiliflora* (Vahl) Blume

［形態的特徴］　水中葉と水上葉を持つ多年草で浅い沼や池などに生育する。水中葉は柔らかく水になびくような茎と葉を持ち、水上葉は堅く肉質でごわごわした感じである。水上葉は秋に薄紫色の小さな花を咲かせるが、水中葉は閉鎖花をつけて結実する。水上葉は５～８個が輪生し、羽根状に深く裂ける。水中葉は糸状に裂ける。

［選定理由］　県内各地に見られてもいい筈だが、つがる市の２地点だけで知られるのみである。しかも、生育環境が悪化し、個体の減少傾向にある。このままでは、絶滅へと急速に進むと判断し、ランクをＢからＡへと変更して見守ることにした。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本を含むアジア。日本分布は本州～沖縄。本県ではつがる市。

［生存に対する脅威と保存対策］　水湿地の水位が以前のように良好でなく、水没期間が長くなっているようで、当該種の姿が少なくなっている。生育に適した水管理が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。 **（木村啓）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **A**

和名　ヒシモドキ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Trapella sinensis* Oliv.

［形態的特徴］　池や沼に生える多年生の水草。茎は細長く水中を伸び、節から根や葉を出す。水中葉と水上葉を持つ。細井（2010）は「日本水生植物図鑑」（大滝・石戸, 1980）22頁に線画があると紹介している。

［選定理由］　2012年８月、青森県学校教育センターが同センターの奈良岡隆樹指導主事が津軽地方の池で発見したと発表した。そのことからランクＥＸからＡに変更した。

［分布と生態の概要］　北限種。本州（青森県・秋田県・宮城県・山形県他）・九州、朝鮮・中国に分布する。

［特記事項］　細井（2010）は「県内では栃木県の古瀬義（フルセ ヨシミ）がつがる市（旧木造町）武田の田光沼（タッピヌマ）で採集した標本を国立科学博物館主催の第20回おしば展（1956）に出品した。長尾（1978）は花期が７～９月として記録している。「秋田県植物分布図2000」では、八郎潟の南の潟上市（旧昭和町）付近に１か所記録されている」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **A**

和名　クワガタソウ **環境省：該当なし**
学名　*Veronica miqueliana* Nakai

［形態的特徴］　明るく湿った林縁や林床に生える多年草。短い地下茎から数本の茎が直立あるいは斜上し、高さは10～20㎝。茎に曲がった毛が散生する。葉は卵型で対生し、長さ１～５㎝、幅0.7～2.5㎝。茎上部の葉腋から花序をだし花をつける。花は淡紅色で紅紫色の条がある。花期は５～６月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　東北地方から関東地方・中部地方の太平洋側や紀伊半島に分布する。県内では八戸市南郷区の市民の森に産する。日本の固有種。

［生存に対する脅威と保存対策］　採取を防止する。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　ゴマノハグサ科 **A**

和名　ヒナノウスツボ **環境省：該当なし**
学名　*Scrophularia duplicatoserrata* (Miq.) Makino

［形態的特徴］　山地の谷間に生える多年草。茎の高さは40～100㎝、４稜がある。葉は膜質で柔らかい、鋸歯は粗くやや重鋸歯。円錐花序は花柄がやや長く、まばらに多くの花をつける。花冠は暗赤紫色。雌しべ先熟。花期６～８月。

［選定理由］　希産種で個体数は少ない。生育地の新井田川流域は北上山地の北端部に相当し、たかの巣渓流と呼ばれる景勝地であったが、1950年代に渓流沿いに道路が開通してからは採石場が林立するようになり、道路工事で生育地が失われた所もあり、採石場の拡張で消滅の恐れがある。

［分布と生態の概要］本州・四国・九州に分布する。県内では太平側南部の八戸市の新井田川流域に希産する。北限である。渓流沿いの林縁のやや湿った場所に生育する。付近には北限種のハナビゼリもみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市南郷区巻ノ下で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　カイジンドウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Ajuga ciliata* Bunge var. *villosior* A.Gray ex Nakai

［形態的特徴］　林縁や明るい林内に生える多年草。全体に白い毛がある。茎は直立して高さ30～40㎝、下部は帯紫色。葉は狭卵形で、しばしば帯赤紫色、あらい鈍鋸歯がある。花は紫色で上部に集まってつく。花冠の上唇は２裂してごく短い。花期６～７月。

［選定理由］　もともと個体数の少ない種であったが、生育地である落葉広葉樹林の減少、開発および外来種との競合などにより産地・個体数が激減している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州に分布する。日本固有。県内では太平洋側に希産する。やや乾いた落葉広葉樹林内や林縁に生育する。個体数が少なく目立たない植物であるが、落葉広葉樹林の伐採跡地に出現することもあるので注意したい。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

（須藤智道）

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　ルリハッカ **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**

学名　*Amethystea caerulea* L.

［形態的特徴］　日当たりの良い草地や林床に生える１年草。茎は四角形で高さ40～80㎝、上部は分岐する。葉には長さ１～２㎝の葉柄があり、葉身は普通３全裂するが、下部の大きな葉では５全裂することもある。花冠はルリ色で小さな花が多数つく。花期は９～10月である。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・トルコに分布する。細井（2010）は「県内では八戸市南郷区に産することが1999年に確認されたが、その後ダム建設（青葉湖）により生育地は水没した。乾いた裸地状の環境に最大90cmの株を含めて数株生育していた。全国的にも産地がまれな種類で、岩手県に割合産地が多く、南郷区も隣接しているので再確認を期待する」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

（齋藤信夫）

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　ムシャリンドウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Dracocephalum argunense* Fisch. ex Link

［形態的特徴］　草丈15～40㎝の多年草。茎は直立し四角形で葉は対生。葉は細長く２～５㎝、幅２～５㎜、葉質はやや厚く表面は光っている。花は大きく茎の頂に数個つけ、青紫色で唇形をしている。一見、リンドウ科のリンドウの花を思わせる。

［選定理由］　自生場所である向陽原野が殆どなくなり、絶滅が心配される。深浦町の自生株を追跡調査しているが、増加することはなく、減少傾向にある。県内の他地区の自生地でも同じ傾向となっている。

［分布と生態の概要］　世界的分布は、日本・朝鮮・中国東北部・東シベリアである。日本では北海道～本州中部まで見られる。生育場所は、日当たりのよい原野なので、原野の減少に比例して当該種の姿も少なくなっている。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育環境である向陽原野が年々少なくなっている。加えて、採取の痕跡も見られる。生育地の保存と当該種の管理も必要と思われる。

［特記事項］　深浦町では、当該種の自生原野を守るために、火入れや刈り払いを行って経過観察をした。

（木村啓）

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　ヒメハッカ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Mentha japonica* (Miq.) Makino

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。細長い地下茎がある。茎は直立し高さ20～40㎝。節に短い軟毛があるほかは全体はほとんど無毛。葉は卵状長楕円形で長さ１～２㎝、幅３～８㎜、葉柄はほとんどない。花は枝先に集まって咲き、淡紅紫色または白色。ハッカと同じ芳香がある。花期は８～10月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「北海道・本州（中部以北）の主に太平洋側に分布し、県内では東通村の湿地で確認したがその後の記録はない。東通村にあった小群生地は道路整備で失われた」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地の乾燥化や開発に注意が必要。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　エゾナミキソウ **環境省：該当なし**
学名　*Scutellaria yezoensis* Kudo

［形態的特徴］　湿地に生える多年草。茎は高さ30～60㎝、４稜があり、稜上にちぢれ毛がある。葉は長卵形～長楕円状披針形、先はややとがる。花は淡青紫色。花期７～８月。類似種ナミキソウは海岸の砂地や草地に生え、全体やや小さく、葉は長楕円形で先は丸い。

［選定理由］　六ヶ所・東通原子力関連開発等で生育地の湿原が次第に失われている。残された所も開発や植生遷移の進行等により危険が増大している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・長野・岐阜）、朝鮮・千島・サハリンに分布する。県内では海岸部の湿原から湖沼周辺・河岸等の湿地にみられる。太平洋側に産地が多い。陽性の湿地に生えるがハンノキ林内にも生育する。溜池周辺や水路脇に見出されることもあり、これまで開田により失われた所も多いと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村鷹架沼・三沢市仏沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物シソ目　シソ科 **A**

和名　イヌニガクサ **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**
学名　*Teucrium veronicoides* Maxim. var. *brachytrichum* Ohwi

［形態的特徴］　母種のエゾニガクサに似ているが、開出毛が短くて少なく、葉の鋸歯が粗大である（細井, 2010）。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　本州（東北地方）に分布する。県内では青森市合子沢（木村悦子, July 26, 1998）・八戸市尻内町張田（細井幸兵衛, July 28, 2000）で採集されている（細井, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

（齋藤信夫）

被子植物シソ目　タヌキモ科 **A**

和名　ミミカキグサ **環境省：該当なし**
学名　*Utricularia bifida* L.

［形態的特徴］　水位の変化がある溜池などの縁に見られる多年生の食虫植物。浅い地中に白色で糸状の地下茎を延ばし、補虫嚢をつける。７～９月にかけて、高さ10cmほどの花茎を伸ばし、先端に黄色い花を数個つける。花は唇形で、基部には真下に向いた距がある。

［選定理由］　水位変化のある浅い溜池が少なくなり、つがる市平滝沼など、ごく一部の溜池でしか生育が確認されていない。生育しているどの溜池も生育環境が悪化し、絶滅が心配される。

［分布と生態の概要］　津軽植物の会では、長年に渡って県内各地に足を運び分布調査をしているが、新しい生育地を確認していない。また、分布情報も無い。

［生存に対する脅威と保存対策］　つがる市平滝沼では、生育溜池への進入が容易で、車両や人々の踏跡が常時見られ、当該種や多くの貴重な湿生植物が踏み付けられている。このままの状態が続くと、間もなく絶滅してしまうと思われる。進入禁止の保護対策が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物シソ目　タヌキモ科 **A**

和名　フサタヌキモ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Utricularia dimorphantha* Makino

［形態的特徴］　水中に浮遊する。植物体の一部が泥に埋もれたとしても地中葉を分化することはない。水中葉は毛のような裂片に細かく分裂する。水中葉の裂片の先には２～３本の刺があるが、縁にはない。捕虫のうは小さく、少ない。花軸の基部や軸のところどころに閉鎖花をつける。花期は７～８月。

［選定理由］　2016年12月14日、弘前市みどりの協会臨時職員渡辺宏巳氏が弘前市のため池で同年７月に発見したことを発表した。そのことからランクＥＸからＡに変更した。

［分布と生態の概要］　日本特産である。上記の発表を報じた2016年12月15日の東奥日報では、同定をされた神戸大学の角野康郎教授のコメントとして「フサタヌキモは全国的に生息が厳しく危機的水準にある。青森県は北限の自生地として特に興味のある地域となるので守り続けてほしい」との談話を掲載している。細井（2010）はかつて「小宮（1995）は全国の詳細な分布を調べたが、現存しているのは２～３か所であると述べている。角野（1994）も分布図を出しているが、いずれも本県は抜けている」と記載していたことなどから、貴重な発見といえる。

［特記事項］　細井（2010）は「杉本（1965）は「…本州（青森～近畿）池沼…」と青森県を記録しているが県内のどこかは分からない。標本の所在も確認できない。鈴木（1978）は「同定自信なし」と断ってあるが、「革秀寺の池で採集した植物の立派な線画を残し、貴重な記録である」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　タヌキモ科 **A**

和名　オオタヌキモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Utricularia macrorhiza* Le Conte

［形態的特徴］　浅い池沼などに生え、根がなく浮遊水生をする多年生の食虫植物。長さは１ｍ以上にもなる。水中葉の裂片は基部で大小２つに分かれる。捕虫嚢は中型～大型で多数。長さ10～40cmの花茎を伸ばし黄色の花を多数つける。距は下唇よりも長く、先がやや上を向いて尖る。花期は７～９月。

［選定理由］　生育地である池沼の減少、水質の悪化などにより減少している。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（青森・秋田）、国外ではサハリン・アムール・シベリア・カムチャツカ・モンゴル・中国（北部）・北アメリカ（中部以北）に分布する。細井（2010）によると、県内では小宮ら（2001）はつがる市（旧木造町）の９か所の標本を記録した。また、細井の標本には東北町向山の小川原湖（July 25, 1992花あり）とつがる市（旧森田村）（Aug 7, 1990花なし）の２点が含まれているという。石戸谷（2017, 私信）はつがる市と東通村で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　タヌキモ科 **A**

和名　ヤチコタヌキモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Utricularia ochroleuca* R. Hartm.

［形態的特徴］　浅い池沼などに生え、根がなく浮遊水生をする多年生の食虫植物。コタヌキモに似ているが水中茎の葉が捕虫嚢を持つことや、葉裂片の先端が鋭頭であることで区別できるとされる。水中葉には１～２個の捕虫嚢をつける。葉の全体形は扇型。黄色の花をつける。花茎の長さは５～15㎝。花期は６月～９月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州に、国外では朝鮮・千島・北半球北部に分布する。県内では八甲田山の湿原に産する。石戸谷（2017, 私信）は青森市で確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　分布は水深や水質に左右され、自然遷移や乾燥化、水質悪化などへの対策が必要である。 **（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キキョウ科 **A**

和名　モイワシャジン **環境省：該当なし**
学名　*Adenophora pereskiifolia* (Fisch. ex Roem. et Schult.) Fisch. ex Loudon

［形態的特徴］　山地の岩場に生える多年草。茎は高さ30～60㎝。根生葉は卵心形で長柄がある。茎葉は互生から輪生、長さ２～８㎝、披針形から卵形。花は総状花序につき、花冠は鐘形、青紫色から白色、花盤は高さよりも幅が広いか同長。花期７～９月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。減少傾向にあり、採取の防止等が必要である。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・宮城）に分布する。日本固有。県内では下北半島と白神山地に産する。山地から高山の岩場に生育し変異が多い。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で東通村尻屋で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キク目　キキョウ科 **A**

和名　バアソブ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Codonopsis ussuriensis* (Rupr. et Maxim.) Hemsl.

［形態的特徴］　林縁などに生えるつる性の多年草。ツルニンジン（ジイソブ）に似ているが全体小型で、葉裏に毛が多い。花冠は鐘形で長さ２～2.5㎝（ツルニンジンは2.5～3.5㎝）。花期８～９月。種子は黒褐色で翼がない（ツルニンジンは淡褐色で翼がある）。
［選定理由］　産地・個体数がきわめて少ない。もともとまれな種であったが、森林伐採・開発等により最近見掛けなくなっている。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、中国（東北部）・ウスリー・アムールに分布する。県内ではごくまれで、分布状況は明確でない。ツルニンジンによく似ているので見過ごされていることもある。林縁や林内に生息するが、落葉広葉樹林の伐採跡に出現することもあるので注意したい。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で鶴田町富士見湖で生息が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **A**

和名　ヒメガンクビソウ **環境省：該当なし**
学名　*Carpesium rosulatum* Miq.

［形態的特徴］　やや乾いた山林内に生える多年草。茎は細く高さ15～45㎝、軟毛を密生し、上部で枝を分ける。枝先に５㎜ほどの頭花を１個ずつ点頭する。根出葉は花時にも存在し、葉縁に不揃いな波状の鋸歯がある。茎葉はまばらである。
［選定理由］　希産種で個体数も少ない。
［分布と生態の概要］　国内では本州・四国・九州、国外では朝鮮半島の済州島に分布する。細井（2010）は「県内では日本海側の低山地に希産し、深浦町十二湖のヒバ広葉樹混交林下・小泊村のヒバ林下・今別町のスギ人工林下などに生育が確認されている」と述べている。
［生存に対する脅威と保存対策］　開発等による減少の危険性がある。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **A**

和名　ムカシヨモギ **環境省：該当なし**
学名　*Erigeron acris* L. var. *kamtschaticus* (DC.) Herder

［形態的特徴］　山地の岩石地に生える多年草。茎は高さ30～60㎝。葉は倒披針形～長披針形。緩い散房状～円錐状の花序で多数の頭花をつける。花には尾花と雌花があるが、雌花には舌状花と筒状花の二形が見られる。頭花は白色で径約1.5㎝。総苞片に粉状の細毛がある（よく似たエゾムカシヨモギの総苞片には剛毛がある）。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（中部以北）、国外では朝鮮・千島・サハリン・カムチャッカ・アラスカに分布する。細井（2010）によると「県内では青森市東岳で豊田剛により採集されている。古くは村井（1936）の記録がある」という。
［生存に対する脅威と保存対策］　開発等による減少の危険性がある。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **A**

和名　アキノハハコグサ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Pseudognaphalium hypoleucum* (DC.) Hilliard et B.L.Burtt

［形態的特徴］　山野のやや乾いた所に生える１年草。茎は高さ30～60㎝、上部で分枝し、白い綿毛がある。葉は披針形、表面緑色で裏は白綿毛が密にある。花は散房状につき、頭花は黄色、外片は短い。花期９～10月。
［選定理由］　産地・個体数がきわめて少ない。環境変化により生育適地が失われてきている。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮・中国・東南アジア・インドに分布する。県内ではまれに産するが、分布状況は明らかでない。八戸市で2004年に道路新設と既設道路の遊歩道化に伴って７㎞隔てて複数の場所で出現している。いずれも撹乱地の境界付近で、在来の植物が残っていてすぐには外来種１年草の進入しにくい場所である。先駆植物で２～３年で消息不明となることが多い。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **A**

和名　ナガバキタアザミ **環境省：該当なし**
学名　*Saussurea riederii* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam.

［形態的特徴］　高さ15～40㎝の多年草。葉は３角状卵形で質がやや厚く、茎の上部でも小さくならない。総苞片の先は尾状に伸びる。
［選定理由］　産地が限られ個体数は少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手）に分布する。細井（2010）は「県内では東通村尻屋に産する（細井, 1994）。生育地は石灰岩の崩壊斜面草地である（一般には亜高山帯から高山帯に生える）」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　岩石の崩落など自然災害による危険性がある。
［特記事項］　細井（2010）は「本州では古くから早池峰山にのみ分布していることが知られていた」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **A**

和名　エゾトウヒレン **環境省：該当なし**
学名　*Saussurea riederii* Herder subsp. *yezoensis* (Maxim.) Kitam. var. elongata Kitam.

［形態的特徴］　海岸の草地に生える多年草。高さ30㎝内外。ナガバキタアザミに似ているが、総苞片は尾状に伸びず鋭頭である。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）に分布する。細井（2010）は「県内では下北半島の大間町の海岸近くに１か所の産地がある。ここでは北海道産よりも小形であり、今のところ南限産地である」と記している。
［特記事項］　細井（2010）は「Flora of JapanⅢb（Iwatsuki *et al.* 1994）ではカラフトアザミ *S.acuminata* Trucz. subsp. *sachalinensis*（F. Schmidt）Kitam.にあてられている」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物マツムシソウ目　レンブクソウ科 **A**

和名　ハゴロモニワトコ **環境省：該当なし**
学名　*Sambucus racemosa* L. subsp. *kamtschatica* (E.Wolf) Hultén f. *lacera* (Nakai) H.Hara

［形態的特徴］　日当たりの良い場所に生える落葉低木。母種のエゾニワトコは奇数羽状複葉であるが、当該種は羽状となっている各小葉が更に深裂して、羽衣状となっている。
［選定理由］　2011年９月23日、つがる市屏風山地区で発見された。エゾニワトコの品種で葉身が羽衣状に深裂している。分布の記録は北海道だけなので、県内初記録種となる。発見以来、７年間に渡って県内全域調査と県外情報収集を行っているが、実物確認も分布情報も無い。本州唯一の産地でもある。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけで、日本分布は北海道と本県。本県の分布はつがる市屏風山の１地点である。
［生存に対する脅威と保存対策］　屏風山のカシワやエゾニワトコやハリギリやヤマウルシを中心とした林中に自生している。ここの屏風山林は定期的に伐採されるという情報があるので、地元の管理者に頼んで保護管理をしてもらっている。
［特記事項］　別和名はハゴロモエゾニワトコ。本県が南限の植物。　**（木村啓）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **A**

和名　エゾヒョウタンボク **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Lonicera alpigena* L. subsp. *glehnii* (Fr.Schm.) H.Hara

［形態的特徴］　山地に生える落葉低木。高さ２～３ｍ。若い枝は茶褐色で４稜がある。葉は長さ５～14㎝、卵形から卵状長楕円形、先は鋭くとがり、表裏面に毛や腺毛がある。葉腋から３～5.5㎝の花柄を伸ばし、淡黄緑色または赤紫色を帯びた花を２個つける。花期５～６月。果実は液果で赤熟し、２個合着する。
［選定理由］　目立たないが分布の限られたきわめて珍しい植物である。風穴という特殊環境に生育し、周辺の環境変化に敏感であることから、生育地周辺の植生の保全が必要である。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、南千島・サハリンに分布する。県内では黒石市黒森山に産し、白神岳、釜臥山にも報告がある。山地の岩塊の堆積した風穴周辺に生育する。近年、下北半島でも確認された。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。
（齋藤信夫）

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **A**

和名　ケヨノミ　**環境省：該当なし**

学名　*Lonicera caerulea* L. subsp. *edulis* (Regel) Hultén

［形態的特徴］　亜高山帯に生える落葉低木。高さ１ｍ内外。毛が多いものから少ないものまで変異があり、毛のきわめてすくないものをクロミノウグイスカグラとして区別することもある。葉は長さ2.5～６㎝、楕円形で鈍頭。花は葉腋に２個ずつ下向きにつき、黄白色。花冠は５裂し、長さ11～13㎜。花期は５～６月。果実は液果で黒紫色に熟す。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。生育地が登山道近くで立入り等により植生が変わると消滅の危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、北半球に分布する。県内では新郷村戸来岳に希産する。上部のミヤマヤナギ・マルバシモツケ・チシマザサなどの低木林中に生息する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で新郷村戸来岳で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **A**

和名　ベニバナヒョウタンボク　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Lonicera sachalinensis* (F.Schmidt) Nakai

［形態的特徴］　亜高山帯に生える落葉低木。その名のように紅色の花を咲かせるヒョウタンボクの一種である。樹高は２～３ｍ、枝は鈍４角形で無毛、中実である。葉は卵形～長楕円形で先端がとがり、対生、長さ３～7.5㎝、幅1.5～４㎝、葉縁と裏面にやや長い毛が散生する。枝先の葉腋に長さ３～５㎜の葉柄を伸ばし、先端に２花をつける。果実は球形で半ば以上合着し、８～９月に赤熟する。花期は６～７月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（青森）、国外では南千島・サハリンに分布する。県内では八甲田山群の一部に希産する。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然遷移による消滅防止への対策が必要である。

［特記事項］　細井（2010）は「北海道では高さが２～３ｍになるが、本県では１ｍ以下である。山形県西置賜郡高畠町小湯山（コヨウザン）で大高滋・山田實爾の両氏によって発見されたウゼンベニバナヒョウタンボク *L.uzenensis* Kadotaとの関係について検討を要する」と記している。

（齋藤信夫）

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **A**

和名　マツムシソウ　**環境省：該当なし**

学名　*Scabiosa japonica* Miq.

［形態的特徴］　山地の草原に生える越年草。茎は高さ60～90㎝で直立し分枝する。葉は対生し有毛、中部や下部の葉は羽裂する。裂片の先は鈍頭。花は長い花柄の先につき、淡青紫色。多くの花が集まった頭状花序で、直径４㎝前後。中心部の花は筒状、周辺部の花の花冠の先端は５つに分かれる。花期は８～10月。

［選定理由］　産地が少なく開発等により激減している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州に分布する日本の固有種。細井（2010）は「県内では三沢市に産する。その生育地は現在三沢米軍基地となっている。津軽半島竜飛崎の風衝地にはエゾマツムシソウが知られているが、これも減少傾向にある」と述べている。

［特記事項］　裂片の先が鋭くとがるものをエゾマツムシソウ（トウマツムシソウ）という（細井, 2010）。　**（齋藤信夫）**

大葉シダ植物サンショウモ目　デンジソウ科　B

和名　デンジソウ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Marsilea quadrifolia* L.

［形態的特徴］　冬には地上部が枯れてしまう夏緑性で多年性のシダ植物。細い根茎から下ろした根を泥の中にはると共に、根茎から長さ５～30cmほど伸びた葉柄の先に四つ葉のクローバーを小さくしたような葉をつける。葉は水面上に出ることが多いが、水中にも展開する。果柄の一部が葉柄と合着する。夏から秋にかけて、葉柄の基部から胞子をつける器管が出る。

［選定理由］　県内では水田やため池などに生育していたが、農薬が多量に使用されるようになってから急激に減少し、現在では生育の確認が難しくなっている。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州・四国・九州・沖縄、国外では東アジア・インド（北部）・ヨーロッパに分布する。　**（齋藤信夫）**

大葉シダ植物サンショウモ目　サンショウモ科　B

和名　サンショウモ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Salvinia natans* (L.) All.

［形態的特徴］　水生の１年草で水面に浮かぶ。葉は３輪生するが、２枚は浮かび１枚は沈んでいる。浮葉は楕円形で表面に突起や毛があり、沈葉は細長く細かく裂けている。この沈葉は根のように見えるが、真の根は無い。秋に沈葉の基部に球形の胞子嚢をつける。

［選定理由］　50年ほど前までは、県内各地の沼や田圃の水路などに普通に見られたが、現在は殆どみることが出来ない。見られても、個体が少なく絶滅が心配される。

［分布と生態の概要］　世界的分布はアジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ。日本分布は本州・四国・九州。県内分布は西郡・北郡。南郡・東郡・三戸郡の記録があるが、現時点では黒石市・つがる市だけの確認である。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育場となっている沼や水路が整備されたり無くなったり、農薬の影響などで、生育環境が悪化してしまっている。この環境変化が消滅の原因と考えられる。少ない個体を維持し、増加させるためには、生育地全体の水環境を健全なものにする必要がある。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

大葉シダ植物ウラボシ目　イノモトソウ科　B

和名　リシリシノブ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cryptogramma crispa* (L.) R.Br. ex Richards. subsp. *acrostichoides* (R.Br. ex Richards.) Hultén

［形態的特徴］　根茎は短く、株をつくり、葉は叢生する落葉多年草。葉長は20cmほど、栄養葉よりも胞子葉が２倍近くも長い。葉身は２～３回羽状に分裂して細く長楕円形。胞子嚢群は裂片の縁につく。胞子嚢の形状は長楕円形である。

［選定理由］　白神山地と津軽半島の１地点だけに確認されている。株数の増加は無い。県内各地の類似環境地を調査しているが確認することが出来なかった。植物研究者からの分布情報も無い。

［分布と生態の概要］　日本を含む世界的分布はアジアの温帯・北アメリカ・ヨーロッパの高山帯。日本分布は北海道・本州中部以北。県内分布は向白神岳と津軽半島三厩地区。

［生存に対する脅威と保存対策］　人が近づくことが困難な岩場に生育するので、人為的な消滅の心配は少ない。しかし、生育地点の崩落が考えられるので、定期的な確認調査が必要である。

［特記事項］　県内分布は向白神岳も津軽半島三厩地区の現場も、容易に辿りつける場所ではなく、危険を伴うので、要注意である。　**（木村啓）**

大葉シダ植物ウラボシ目　チャセンシダ科　B

和名　イチョウシダ　　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Asplenium ruta-muraria* L.

［形態的特徴］　石灰岩地の岩隙に生える小型の常緑性シダ植物。葉は1～2回羽状に分岐し、側羽片は倒卵形から楕円形で、イチョウの葉を小さくしたような形から銀杏（いちょう）シダと名付けられた。
［選定理由］　石灰岩地にしか生育しないので、生育地が限られ個体数も少ない。石灰岩の採掘により生育地が次第に失われている。また、他県では小型で葉のおもしろい形が好まれて、園芸採取され絶滅した産地もある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、ロシア・朝鮮・中国・中央アジア・台湾・南アジア・南西アジア・ヨーロッパ・北米（東部）と北半球に広く分布する。県内では東通村桑畑山・階上町金山沢の石灰岩地に希産する。　**（須藤智道）**

大葉シダ植物ウラボシ目　ウラボシ科　B

和名　オオエゾデンダ　　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Polypodium vulgare* L.

［形態的特徴］　岩上などに着生する常緑性シダ植物。根茎は灰色、鱗片は卵状披針形で淡褐色。葉身は三角状長楕円形で、羽状に全裂する。胞子嚢群は円形で裂片の中肋と縁辺の中間からやや中肋寄りにつく。
［選定理由］　開発・環境変化により減少している。八戸市では道路工事で消滅したところもある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・（青森・秋田・鳥取・島根隠岐）、ロシア・朝鮮・中国・ヨーロッパに分布する。北欧では路傍にも生える普通種とされているが、日本では産地が限られ個体数も少ない。県内では東通村桑畑山と八戸市鮫町の海岸部に点在する。　**（須藤智道）**

裸子植物ヒノキ目　ヒノキ科　B

和名　ネズミサシ　　**環境省：該当なし**
学名　*Juniperus rigida* Sieb. et Zucc.

［形態的特徴］　葉は鋭い針葉のみからなり３輪生する。常緑の大低木～小高木、雌雄異株。
［選定理由］　本県では分布のまれな針葉樹である。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮北部に分布する。県内では下北半島大間町屏風立岩・むつ市（旧大畑町）燧岳・深浦町見入山観音・鰺ヶ沢町然ヶ岳に産し北限である。丘陵地や山地の尾根や岩場に生える。いずれも強い日照を受けている立地である。本県では大きくなれず、２ｍ以下である（細井, 2010）。
［生存に対する脅威と保存対策］　開発および自然災害などによる生育地の攪乱の危険性がある。
（齋藤信夫）

被子植物コショウ目　ドクダミ科　B

和名　ハンゲショウ　　**環境省：該当なし**
学名　*Saururus chinensis* (Lour.) Baill.

［形態的特徴］　草丈50～100㎝の多年草。葉には柄があり互生し、長卵形で先端が尖り、基部が頭耳状心形。葉表面は淡緑色で滑らかで５本の葉脈が目立っている。初夏には葉の表面が白くなり、白面に向き合って穂状の白色小花を多数咲かせる。根茎は白色で泥の中を横に延びている。
［選定理由］　県内分布地点は少なく個体数も限られている。加えて、生育地の環境悪化も認められ、急速に絶滅へ進むことが予想される。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国・フィリピン。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は、つがる市森田・つがる市車力・小川原湖など。低湿地を生育地としている。
［生存に対する脅威と保存対策］　本来、群生状態で生育しているものであるが、数株のみの生育である。この要因は、生育地の湿潤地帯が畑地拡張などで狭められているためと思われる。生育している湿潤地帯の確保と個体保護の対策が望まれる。
［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物オモダカ目　サトイモ科 **B**

和名　ヒメカイウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Calla palustris* L.

［形態的特徴］　水辺に生える多年草。根茎は太くて長く這う。葉身は心形、長さ幅ともに７～14cm。葉柄は10～25cm。花序は長さ1.5～３cm。仏炎苞は長さ４～６cm、白色で、果時に緑色となり残る。花期６～７月。液果は赤く熟す。

［選定理由］　分布が限られ､個体数も少ない。低地の生育地は開発が進んで消滅する危険性がある。

［分布と生態の概要］北海道・本州（中部以北)、北半球に広く分布する。県内ではむつ市宇曽利山湖・東通村に産する。山地の湖岸および湿原の流れのほとりに生育する。(青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でむつ市宇曽利山湖・東通村小田野沢で生育が確認できたが、小田野沢では乾燥化が進んでいる。 **（須藤智道）**

被子植物オモダカ目　オモダカ科 **B**

和名　マルバオモダカ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Caldesia parnassiifolia* (Bassi. ex L.) Parl.

［形態的特徴］　水中に生える１年草。葉は根生し葉柄がある。葉柄の長さは生育している水深により異なり、長いものでは70cmにもなる。葉形は腎臓形が普通であるが、初期の浮葉は卵形になっている。夏には長さ80cmほどの花茎を水上に伸ばし、枝を３個ずつ輪生する円錐花序をつくる。各枝は３～５個ずつ花を輪生する。花は両性で白色の花弁を３個つける。花弁は卵形で縁に微鋸歯がある。

［選定理由］　県内分布は、西津軽郡の屏風山地区の池沼に限られ、株数は減少傾向にある。生育している池沼が少なくなっている。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・中国・インド・オーストラリア・マダカスカル。日本分布は本州・四国・九州・奄美大島。本県の分布はつがる市屏風山の池沼７か所。水深のある池沼を生育地としている。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育している池沼の環境悪化が進み、個体の増加は見られない。生育池沼の保全対策が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。 **（木村啓）**

被子植物オモダカ目　オモダカ科 **B**

和名　アギナシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sagittaria aginashi* Makino

［形態的特徴］　水田や浅い池に生える草丈60cmほどの多年草。地下に走出枝をつくらず、秋に葉柄基部の内側に多数の小珠芽をつける。葉は根出し、長い柄があり、葉身は基部が２つに裂けた矢じり形で、上部は尖がり、下部の２つの裂片は尖らず丸まっている。

［選定理由］　酷似種のホソバオモダカは普通に見られるが、アギナシの分布地点は極めて限られていて、容易に対面することが出来ない。また、生育株が年々少なくなっている傾向にある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布はつがる市屏風山の出来島２号溜池・下北郡東道村の荒沼。生育環境に極めて敏感な種類と思われる。

［生存に対する脅威と保存対策］　水田に生育していた個体は見られなくなってしまった。これは、農薬の影響と思われる。農薬の影響がない生育地を確保したい。

［特記事項］　同科同属で近似種のオモダカの品種であるホソバオモダカと酷似するので、見分けを慎重に行うことである。 **（木村啓）**

被子植物オモダカ目　トチカガミ科 **B**

和名　イトイバラモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Najas yezoensis* Miyabe

［形態的特徴］　湖沼やため池に生える沈水性の一年草。茎はよく分枝し長さ10～30㎝。葉は輪生し、線形で長さ1.5～3.5㎝、縁に細かい鋸歯がある。葉鞘の先はとがらない（類似種ホッスモの葉鞘の先は耳状に突き出る）。種子表面の模様は縦長短柵状になる。植物体は全体的に柔らかい。

［選定理由］　産地が限られ水質汚染等により減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・秋田・群馬）に分布する。県内では田茂木沼・鷹架沼・十和田湖他に産する（細井, 2010）。石戸谷（2017, 私信）はつがる市ガシャ沼で確認している。Shutohらはつがる市の他の沼でも確認している（Shutoh *et al.*, 2019）。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である　**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　アマモ科 **B**

和名　コアマモ **環境省：該当なし**
学名　*Zostera japonica* Asch. et Graebn.

［形態的特徴］　河口などの干潮時に露出することのある砂泥地に生える多年草。根茎は細くて横に這い、節から根と枝を出す。枝は葉だけを出すのと、葉と花序を出すのとがある。葉は糸状で、長さ10～40㎝、幅1.5～２㎜で、花序は長さ約２㎝で、仏炎苞の葉鞘に包まれる。花期７～８月。

［選定理由］　産地が少なく、海岸開発・護岸工事および水質悪化などにより、生育地が失われる危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道から沖縄、東アジアの亜寒帯から熱帯に広く分布する。県内では日本海側は十三湖の前潟、太平洋側は尾駮沼・鷹架沼・高瀬川の河口部に産することが知られている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村尾駮沼・鷹架沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **B**

和名　イトモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Potamogeton berchtoldii* Fieber

［形態的特徴］　池沼・水路などに生える沈水性の多年草。茎は細長くて分岐する。葉は線形、幅0.7～1.5㎜、長さ２～６㎝。花序は長さ４～５㎝。花柄の長さ１～2.5㎝、花穂は長さ３～５㎜。花期７～８月。秋に枝の先端が1.5～2.5㎝の殖芽となり、水底に沈んで越冬する（角野, 1994）。

［選定理由］　環境変化に応じて消長があり、生育場所の定まらない植物で、減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、全世界に広く分布する。県内では全域に産し、ため池・水路などの浅水で水流が緩やかな場所にみられる。開発や自然災害でできた水溜りにも出現する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

つがる市の沼で確認されている（Shutoh *et al.*, 2019）。今回の調査でむつ市田名部赤川、六ヶ所村尾駮沼・鷹架沼、八戸市長根で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **B**

和名　コバノヒルムシロ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Potamogeton cristatus* Regel et Maack

［形態的特徴］　湖沼・ため池・水路に生息する小型の浮葉植物。葉は長楕円形の浮葉と線形の沈水葉の２種類がある。浮葉は明るい黄緑色。ミズヒキモに似ているが、瘦果の背中側に突起があり、雌しべの花柱が長く突き出ていることで区別できる。花期は６～９月。
［選定理由］　希産種で水質汚染や開発により消滅の危険性がある。
［分布と生態の概要］　国内では本州から琉球列島まで、国外ではウスリー・中国・朝鮮に分布する。県内では青森市油川に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地の富栄養化の進行が急減の理由とされていることから、計画的・継続的な水質のチェックが必要である。
［特記事項］　細井（2010）は「大滝末男氏の同定による。青森・秋田県方面の湖沼の水草はまだまだよくわかっていない。コバノヒルムシロは裏日本に多いようなので、青森県にあっても不思議はない（大滝末男氏, 私信）」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **B**

和名　リュウノヒゲモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Potamogeton pectinatus* L.

［形態的特徴］　湖沼、ため池、河川などに生育する多年生の沈水植物。普通、淡水または川口の近くなどの淡水と海水が混ざり合う所に生えているが、内陸部に生育することもある。葉はすべて沈水葉だけで狭線形、長さ２～10㎝、幅1/2～１㎜、全縁で鋭頭である。花期は７～９月。
［選定理由］　開発や水質汚染等により減少している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、欧亜大陸・北米・アフリカ・オーストラリアに分布する。県内では太平洋側の湖沼と十和田湖の記録があるが、全県的な分布はまだはっきりしない。石戸谷（2017, 私信）は五所川原市明神沼で確認している。また、須藤（2018, 私信）は六ヶ所村や三沢市で確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　沈水であることから河川整備や清掃などで除去されやすい。また、土地造成・海岸開発などの様々な開発による生育地の攪乱が減少の原因となる。モニタリング調査が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　ヒルムシロ科 **B**

和名　イトクズモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Zannichellia palustris* L.

［形態的特徴］　沿海地の湖沼や塩湿地に分布する一年草または越年草。完全な沈水植物で水中で開花受粉結実する。花柄は伸びる。果実は三日月状で葉腋に直接付くのでミカヅキイトモの別名がある。
［選定理由］　開発によって激減している。
［分布と生態の概要］　国内では北海道から琉球列島まで、国外では南北両半球の冷温帯に分布する。細井（2010）は「県内では尾駮沼・鷹架沼及び五所川原市（旧市浦村）前潟（土屋和三 Aug 28, 1982 KYO.TI）である」と記している。須藤（2018, 私信）は六ヶ所村で確認している。
［生存に対する脅威と保存対策］　沿岸地の護岸整備や埋め立て、水質汚染などについての情報収集及びモニタリング調査体制の確立が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物ユリ目　ユリ科 **B**

和名　ホソバノアマナ **環境省：該当なし**
学名　*Lloydia triflora* (Ledeb.) Baker

［形態的特徴］　山地の草地や渓畔に生える多年草。根生葉と花茎は１個、高さ10～25㎝。葉は幅1.5～３㎜。花茎には１～３個の葉がつく。花は１～数個つき、花被片は６個で、長さ１～1.5㎝、白色で緑条がある。花期５～６月。
［選定理由］　産地・個体数が少なく、開発などにより人知れず姿を消してしまう恐れがある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・千島・サハリン・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では全域に産するが、ややまれである。花期でないと見逃してしまう目立たない植物である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で深浦町大間越・南部町名久井岳で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　コアニチドリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Amitostigma kinoshitae* (Makino) Schltr.

［形態的特徴］　山地の湿った岩場や低地の湿原に生える多年草。小型で茎は高さ10～20㎝。葉は茎の中ほどから下に１、２個つき、白色から紅色、唇弁の基部近くに紅紫色の斑紋がある。花後に茎頂に数個のむかごをつける。花期６～７月。
［選定理由］　産地・個体数が少なく、園芸採取・湿原開発等により減少している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、南千島に分布する。積雪１ｍ以上の地域に分布するとされている。県内では山地に点在し、低地の湿原にもまれに産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　キンセイラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Calanthe nipponica* Makino

［形態的特徴］　エビネに似ている多年草。葉は３～５個つき、長さ15～30㎝、幅1.5～3.5㎝無毛。花茎は高さ30～60㎝で子房と共に短毛がある。花は６～７月、まばらに５～12個つき、色は淡黄緑色である。
［選定理由］　最近、愛好家の乱獲により生育数が少なくなった。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州の山中にややまれに産す。県内ではヒバ林に生える。成田（2017, 私信）は大鰐町、深浦町で確認しており、生育場所の基本はヒバ林で、スギ植林地でも確認できるという。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採や開発などによる環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ナツエビネ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Calanthe puberula* Lindl. var. *reflexa* (Maxim.) M.Hiroe

［形態的特徴］　草丈40㎝ほどの多年草。葉は３～５枚束生し、長さ10～30㎝、幅３～６㎝の狭長楕円形で先端は鋭く尖り、表面の横皺が多く目立つ。花茎は基部の葉腋から直立し、長さ30㎝ほどで、10～20個ほどの淡紫色の花を総状につけ、下から上へ順に咲いていく。
［選定理由］　県内分布域は限られており、生育個体も少ない。加えて、エビネ類の花色としては異国的なので、採取されることが多く、消滅してしまった生育地点もある。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮の済州島・台湾・中国南部。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は黒石市中野もみじ山遊歩道・西津軽郡深浦町十二湖王池・津軽半島小泊・津軽半島蟹田。やや湿気のある落葉樹林下やヒバ林下に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　十二湖では群落で生育していたが、現在は殆ど見られなくなっている。これまで記録の無かった黒石市中野もみじ山で、津軽植物の会の観察調査会で確認した。
［特記事項］　北海道奥尻島でも記録されて北限が本県よりも北上した。 **（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ユウシュンラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cephalanthera erecta* (Thunb.) Blume var. *subaphylla* (Miyabe et Kudo) Ohwi

［形態的特徴］　草丈10～30㎝の多年草。ギンランの変種で、葉が退化して鱗片状になっている個体。もし葉があっても、小型で２㎝以下となっている。また、花被片と花被片の間に少し隙間が見える。

［選定理由］　県内分布は、全域であるが確認地も確認株も極めて少ない。どの生育地点でも株数が少なく、増える傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・九州。本県分布は全域であるが、生育地点は極めて少ない。落葉樹林下の林道端や歩道に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　黒石市の田代山林道で１株を確認したが、小さく弱々しかった。その後の追跡調査では確認できなかった。生育地を確認したら、詳細な位置の特定をして、追跡調査が出来るように、記録を残して置きたいものだ。生育地点が人為的に攪乱されたりすると、個体の消滅が考えられるので、進入禁止などの保存対策も必要である。

［特記事項］　和名は植物分類学者工藤祐舜に由来。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　キンラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cephalanthera falcate* (Thunb.) Blume

［形態的特徴］　草丈20～40㎝の多年草。葉は互生して５～８個をつける。葉の形は広い披針形で、長さ８～15㎝、幅２～４㎝、先端は鋭く尖がり基部は茎を抱いている。茎の先に金色の花を数個つけ、花は全開することはなく、半開きのままで終わる。

［選定理由］　つがる市や大鰐町での自生記録もあったが、現在は確認することは出来ない。今でも自生確認ができるのは深浦町の数地点だけである。しかし、見られる個体数は限られている。また、生育地の植生遷移が進み、生育株が減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町岡町・深浦町十二湖・深浦町松神。丘陵や林下の比較的乾燥した場所に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　当該種は同属のギンランやササバギンランに比べ、生育できる環境の幅が狭いようで、里山の荒廃に伴って姿を消している。昔ながらの、里山環境を維持することである。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　クゲヌマラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cephalanthera longifolia* (L.) Fritsch

［形態的特徴］　海岸近くの林下に生える多年草。高さ10～40㎝。全体的な姿はギンランに似ているが、もっとも違う点は、唇弁の距がほとんど突出しないことである。茎の先に長さ１㎝程度の白色の花を数個つけ、平開することはない。花期６月。

［選定理由］　海岸クロマツ砂防林の普及に伴って産地も増えてきたが、植林も一段落し、今後はクロマツの老齢化により林床環境が変化して、生育に影響を及ぼす恐れがある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国の主として太平洋側に分布する。県内では太平洋側に多いが、日本海側にも産する。海岸のクロマツ林に生えることが多いが、落葉広葉樹林にみられることもある。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　コアツモリソウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cypripedium debile* Reichb. f.

［形態的特徴］　草丈15cmほどの多年草。茎頂に光沢のある広卵形の葉を２枚対生し、葉の中心から花柄を伸ばし、垂れさがった１花を咲かせる。花は黄緑色をした袋状で、淡紫色をした何本もの縦筋が目立つ。根茎は短く横に這っている。

［選定理由］　県内分布は、西津軽郡・北津軽郡・南津軽郡・下北郡と広域に渡っているが、生育している個体数は少ない。更に、生育地の環境変化で株が消失してしまっている。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡深浦町岩崎地区の白神山地・南津軽郡大鰐町早瀬野など。深山の落葉樹林下を生育場所としているが、環境変化に極めて敏感なようである。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育を確認して、数年後に訪ねると見当たらないことが多い。植生遷移による消失と思われる。個体の保存対策が必要である。

［特記事項］　同属のアツモリソウに比べ、著しく小型である。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　クマガイソウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cypripedium japonicum* Thunb.

［形態的特徴］　草丈20～40cmの多年草。根茎は地中を横に這い、節から少数の太い根を出す。地上茎は直立し先端部に扇子状の葉を対生させる。葉の中心から花柄を直立させ、先端に卵形状の１花をつける。茎は有毛で、葉には放射状の多数の脈があり、縦皺が目立っている。

［選定理由］　県内全域に渡って分布するが生育地点は限られている。花が美しく群落で生育しているので、採取による消滅が目立つ。また、生育地の環境変化で株が激減している。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域に渡っているが生育地点は限られている。里山の落葉林下や杉林下に群落を形成する。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点が広く知られると、訪れる人が多くなり、踏み付けや採取などで個体減少が続く。生育地の保護対策が必要である。

［特記事項］　和名は鎌倉時代の武将熊谷直実が背負っていた母衣（ほろ）に由来している。同属のアツモリソウは平敦盛に由来する。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　サワラン **環境省：該当なし**
学名　*Eleorchis japonica* (A.Gray) F.Maek.

［形態的特徴］　草丈20～30cmの多年草。偽鱗茎は緑色で球形、ここから直立した花茎を出す。花茎の基部には少数の鞘状葉をつけ、その上方には線状披針形の葉を１枚つける。葉の基部は鞘となり花茎を包んでいる。先端には紅紫色で６花弁の花を１個つける。花は全開するととはなく、横向きになって紅紫色を強調している。

［選定理由］　山中のミズゴケ湿地に限ってみられるが、生育個体は年々減少傾向にある。これは、湿地が乾燥化へ向かっているためと思われるので、絶滅危惧指定にして追跡調査が必要である。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・千島列島南部。日本分布は北海道・本州中部以北。本県分布は全域に渡っているが生育地点は少ない。山地に形成されている良好なミズゴケ湿地に生育し、微妙な湿地環境の変化が生育状態を左右するようだ。

［生存に対する脅威と保存対策］　トキソウと同じ湿地に生えるが、トキソウに比べて個体数は断然少ない。湿地環境変化に、より敏感な種類だと思われる。湿地環境保全の諸対策をとりたい。

［特記事項］　白花個体の品種をシロバナサワラン（白花沢蘭）と呼ぶ。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ハマカキラン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Epipactis papillosa* Franch.et Savat. var. *sayekiana* (Makino) T.Koyama et Y.Asai

［形態的特徴］　海岸のクロマツ林下に生える多年草。落葉広葉樹林に生えるエゾスズランの変種とされている。茎は高さ50～70㎝。葉は卵状楕円形から広披針形。花は萼片が帯黄緑色、唇弁が白色から黄緑色である。エゾスズランは萼片・唇弁共に淡緑色である。花期７月。

［選定理由］　今後クロマツ林の林床変化による競合や間伐・更新等が影響し、減少に向かうと考えられる。

［分布と生態の概要］　本州（青森～愛知）の太平洋側に分布する。県内では太平洋側のクロマツ砂防林下にまれならず産し、津軽海峡東部海岸までみられる。クロマツ砂防植林の普及により北上してきた種である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で六ヶ所村尾駮で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ミズトンボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Habenaria sagittifera* Reichb. f.

［形態的特徴］　草丈30～50㎝の多年草。茎は直立し縦に溝があり中部以下に２～３葉をつけ、上部には総状を出し10個ほどの花をつける。葉は線形で先端は次第に尖り、下部は長い葉鞘となる。花は緑白色で、唇弁はずば抜けて大きく十字形となり、距は長く垂れる。

［選定理由］　つがる市ベンセ湿原や三沢市仏沼などで、継続観察しているが個体数の増加はみられない。更に、生育環境が年々厳しくなって、個体減少の傾向にある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・東津軽郡・上北郡・下北郡。日当たりのよい低湿地を生育地としている。

［生存に対する脅威と保存対策］　日当りのよい湿地に生育しているが、このような湿地環境が減少している。個体保護ばかりでなく、生育環境全体の保全が必要である。

［特記事項］　本県産のミズトンボ属には当該種の他に、オオミズトンボ（別名サワトンボ）とヒメミズトンボ（別名オゼノサワトンボ）がある。 **（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ガッサンチドリ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**

学名　*Platanthera takedae* Makino subsp. *uzenensis* (Ohwi) K.Inoue

［形態的特徴］　茎は直立し、高さ20～25㎝、ミヤマチドリによく似ているが、萼片と唇弁の長さが３～４㎜と短い。距は肉質で太い。花期は７～８月。

［選定理由］　本州ではきわめてまれである。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「日本特産で北海道から本州の日本海側高山を石川県の白山三峯までのブナ林下に希産する。県内では八甲田山で確認され、いずれも単生状できわめてまれである」と記している。成田（2017, 私信）によると最近の確認記録はないという。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　トキソウ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Pogonia japonica* Reichb. f.

［形態的特徴］　草丈10～30㎝の多年草。根茎は横走して堅いので根のように見える。茎はその根茎から出て直立し、基部には膜質鱗片葉を中央部には線状長楕円形の葉を１枚、先端には紅紫色の花を１個つける。花は６弁から成り半開し、唇弁は円頭で内面に肉質突起を密生する。
［選定理由］　県内分布は、全域に渡り生育地点も多いが、個体の増加傾向にはない。生育地の環境悪化が進み、個体数は確実に減少している。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域に渡っている。日当たりのよい湿地を生育地としている。
［生存に対する脅威と保存対策］　50年前までの群落が次第に見られなくなり、現在は点在株となっている。原因の１つは、湿地の乾燥化であるように思われる。湿地の保全が必要である。
［特記事項］　本県産で同属別種にヤマトキソウがある。トキソウが湿地に生えるのに対してヤマトキソウは日当たりのよい丘陵草地にみられる。　**（木村啓）**

被子植物キジカクシ目　ラン科 **B**

和名　ウチョウラン　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Ponerorchis graminifolia* Rchb. f.

［形態的特徴］　山地の湿った岩場に生える多年草。小型で茎は高さ10～20㎝。葉は茎の中程に３、４個つき、線形から広線形、長さ７～12㎝。花は紅紫色まれに白色で、一方に傾いて数個つく。唇弁は３深裂し、濃紅紫色の斑紋がある。距は前の方に湾曲し、長さ１～1.5㎜。花期６～８月。
［選定理由］　自生地では手の届く範囲はすべて盗掘され尽くし、上部にわずかに残るのみである。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮に分布する。県内では白神山地や津軽半島の湿性岩壁にみられ、北限である。地域的な変異があり、山草として人気が高く、多くの園芸品種がつくられている。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　アヤメ科 **B**

和名　カキツバタ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Iris laevigata* Fisch.

［形態的特徴］　水辺や湿地に生える多年草。茎は高さ40～70㎝。葉は長さ40～70㎝、幅２～３㎝、中脈ははっきりしない（ノハナショウブの中脈は目立つ）。外花被片はたれ下がり、長さ５～７㎝、中央から爪部は白色から淡黄色。内花被片は直立し、倒披針形、長さ６㎝。花期５～６月。
［選定理由］　湿地開発・水質悪化・外来種キショウブとの競合などにより減少している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国（東北部）・シベリア（東部）に分布する。県内では全域に産する。池沼・水路などの水辺、湿原の水位の高い所に生え、ノハナショウブより生育地は限られている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査でつがる市ベンセ湿原・東通村加藤沢沼・小田野沢南通・横浜町中吹越・三沢市新堂湿地・八戸市南部山で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　ガマ科 **B**

和名　エゾミクリ **環境省：該当なし**
学名　*Sparganium emersum* Rehm.

［形態的特徴］　池沼・河川・水路などに生育する多年生の抽水・浮遊・沈水植物。タマミクリに似ているが雌花の花柱と柱頭の長さが３～４㎜でタマミクリの倍近くある。雄性頭花はタマミクリが１～２個に対し４個以上付く。開花した雌性頭花は、針状の突起が密生したように見える。花期は７～９月。

［選定理由］　従来､タマミクリその他と混同されて分布状況がよく解っていなかった希産種である。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州（中部以北)、国外では北半球の北極を取り巻いて広く分布する。県内では青森市・つがる市（旧木造町）・蔦温泉に分布する。石戸谷（2017, 私信）はつがる市ガシャ沼で確認している。Shutohらはつがる市の他の沼でも確認している（Shutoh *et al*., 2019)。

［生存に対する脅威と保存対策］　生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　ガマ科 **B**

和名　ヤマトミクリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sparganium fallax* Graebn.

［形態的特徴］　池沼、ため池や河川などに生える多年性の抽水植物。地下茎により群生する。花茎は分岐せず直立する。雌雄同種。雄性頭花は上部に５～９個離れてつく。下部の雌性頭花は柄の全部または一部が主軸に合着する（腋上生)。雌性頭花と雄性頭花は１㎝以上離れる。花期は５～９月。

［選定理由］　東北地方ではきわめて希で、県内ではフォーリー hachinohe 1913（KYO）が唯一の記録であったが1994年七戸町（旧天間林村）坪川で確認した。80年ぶりである。北限種（細井, 2010)。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、アジア東部に分布する。

［生存に対する脅威と保存対策］　生活廃水の流入や開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。　**（齋藤信夫）**

被子植物イネ科　ガマ科 **B**

和名　タマミクリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sparganium glomeratum* (Beurl. ex Laest.) L.M.Newman

［形態的特徴］　池沼や溝などの浅い水中に生える多年草。茎は高さ20～60㎝、分枝しない。葉は幅６～12㎜、茎より高く裏面に稜がある。雄性頭花は少数で茎頂に１、２個つく。雌性頭花は３～６個、上部で密につき腋生、下部では離れてつき、柄があり、柄の基部が茎に合着し腋上生。花期７～８月。

［選定理由］　開発・遷移進行・自然災害等による減少の危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北)、北半球に広く分布する。県内では全域に産し、低地から山地まで見られるが、ミクリより小型で、花が葉の蔭になり目立たないこともあって、確認地は少ない。(青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用)

今回の調査でむつ市金谷沢・青森市田代平・八戸市大久保金吹沢・階上町赤保内で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　ガマ科 **B**

和名　ヒメミクリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Sparganium subglobosum* Morong

［形態的特徴］　池沼・ため池の周辺や湿原に生える多年草。茎は高さ30～60㎝、枝は１、２本。葉は茎より高く、幅３～５㎜、裏に稜がある。雄性頭花は茎の上部に２～７個まばらにつく。雌性頭花は下部に１～３個つき、柄はない。花期６～８月。

［選定理由］　最近では湿原開発・護岸工事および植生遷移の進行によりさらに減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州・沖縄、東アジア・インド・オーストラリア・ニュージーランドに分布する。県内では全域に点在する。かつての開田ブームとそれに続く牧野の放棄で湿原が減少し、生育地も次第に失われてきた。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村尻屋崎・加藤沢沼・むつ市一里小屋・三沢市仏沼で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物イネ目　ホシクサ科 **B**

和名　ネムロホシクサ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Eriocaulon atrum* Nakai

［形態的特徴］　湿地に生える無茎の１年草。葉は線形で長さ５～７㎝、幅５～８㎜。花が同じ黒藍色のクロイヌノヒゲに似ているが、種子の表面が無毛で、雌花内面に長毛がなく、縁に白短毛がないこと、葉の幅が広く３～５㎜で、花茎が４稜であることで区別できる。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「北海道根室を基準産地として発表され、特産と考えられていたが、太平洋岸を函館まで、本州では本県の下北郡、上北郡の低湿地、一部は日本海岸に至る」と記している。

［生存に対する脅威と保存対策］　海岸沿いの低湿地は本種に限らず希産種が多いので、開発に当たって特に留意すること。

［特記事項］　ホシクサ属は肉眼で区別しにくい。細井（2010）は「本種については高田順（秋田県）の精査によって判明した」と記している。

（齋藤信夫）

被子植物イネ目　ホシクサ科 **B**

和名　エゾホシクサ **環境省：該当なし**
学名　*Eriocaulon monococcon* Nakai

［形態的特徴］　湿地に生える無茎の１年草。葉は線形で長さ７～14㎝、幅１～２㎜。花茎は高さ８～25㎝。苞片は頭花より著しく長く、鋭頭。子房が１室あるのが特徴。花期８～９月。

［選定理由］　希産種で個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州に分布する。県内では東通村で採集されている。今後の精査が望まれる（細井, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　開発などによる水質汚染が生育を脅かしている。継続的なモニタリング調査が必要である。

［特記事項］　高田（2018）は青森県産のホシクサ属について７分類群を認めた。その分類群のほかに、標本の所在が明らかでない分類群や雑種あるいは変異種の存在など、多くの点で多面的な切り口からの調査が必要であることを提言している。

（齋藤信夫）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **B**

和名　ネムロスゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carex gmelinii* Hook.et Arn.

［形態的特徴］　海岸の草地や岩上に生える多年草。叢生し匐枝はない。茎は高さ20～40㎝。小穂は茎の上方に数個集まり点頭する。頂小穂は雌雄性。果胞は楕円形、長さ４～５㎜、扁平で有脈。
［選定理由］　産地が限られ、個体数が少ない。最近多くなった漂着ゴミの堆積による影響や釣り人・観光客の踏みつけにより減少が進行している。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手）、朝鮮（北部）・千島・サハリン・カムチャツカ・アラスカ・北アメリカ（西北部）に分布する。県内では八戸市・平内町に産し、海岸砂礫質湿地や潮風にさらされる岩上に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **B**

和名　ホロムイクグ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex oligosperma* Michx. subsp. *tsuishikarensis* (Koidz. et Ohwi) T.Koyama et Calder

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。地下に匐枝がある。茎は高さ25～50㎝で平滑。葉は幅1.5～２㎜で、断面やや三角形。果胞は長さ５～６㎜、硬くて光沢があり無毛。混生することのあるムジナスゲは果胞に毛を密生する。
［選定理由］　鷹架沼の生育地はむつ小川原開発地域内にあり、開発の及ぶ恐れがある。加藤沢沼は水位の変動・水質悪化・遷移進行などの環境変化により消滅の恐れがある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森・岩手・長野）・南千島・北アメリカ東部に分布する。県内では六ヶ所村鷹架沼・東通村加藤沢沼周辺の湿原に産する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用） **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **B**

和名　オオクグ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carex rugulosa* Kük.

［形態的特徴］　河口部や海岸近くの湿地に生える多年草。地下に太い匐枝がある。全体やや硬い。茎は高さ40～70㎝。基部の鞘は濃赤褐色。葉は幅４～10㎜。果胞は長さ６～７㎜、木質で無毛。
［選定理由］　高瀬川河口部では護岸工事で一部消滅した所もある。最近多くなった漂着ゴミの堆積による影響も大きく、減少傾向にある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州、朝鮮・中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では八戸市・三沢市・六ヶ所村・風間浦村などに産する。鷹架沼・高瀬川河口部に群生地がある。八戸市では海岸の砂礫地から背後の斜面湿地にみられる。ヤラメスゲ群落と同所のことが多い。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査でむつ市金谷沢・六ヶ所村鷹架沼・高瀬川河口・三沢市小川原湖・八戸市鮫町小舟渡平・大久喜で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **B**

和名　ヌイオスゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carex vanheurckii* Müll. Arg.

［形態的特徴］　高山の日当たりのよい、やや乾いた岩礫地や草地に生える多年草。ヒメスゲに似ているが、雄小穂は雌小穂より著しく長い（ヒメスゲは雄小穂と雌小穂は同長）。高さは10～40㎝。果胞は上から見てまるい。花期は７～８月。
［選定理由］　希産種で個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・カムチャッカ・アムール・東シベリア・中国東北部に分布する。県内では八甲田山に産する（細井, 2010；須藤, 2018, 私信）。
［生存に対する脅威と保存対策］　登山者による踏圧や乱獲に注意すべきである。 **（齋藤信夫）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **B**

和名　タカネクロスゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Scirpus maximowiczii* C.B.Clarke

［形態的特徴］　高山の湿った草地に生える多年草。匐枝はない。茎は高さ15～40cmで１～３節がある。花序は散房状で頂生し、やや一方に傾く。小穂は黒灰色で長さ７～10mm。果実は倒卵形で扁三稜形。花期は７～８月。
［選定理由］　希産種で限られた場所に分布する。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・樺太・ウスリー・オホーツク・朝鮮・満州に分布する。県内では南八甲田の湿潤な低草地に希産する（細井, 2010；須藤, 2018, 私信）。
［生存に対する脅威と保存対策］　登山者による踏圧や乱獲に注意すべきである。　**（齋藤信夫）**

被子植物キンポウゲ目　メギ科 **B**

和名　ナンブソウ **環境省：該当なし**
学名　*Achlys japonica* Maxim.

［形態的特徴］　草丈30cmほどで全体無毛の多年草。葉には、根生葉と側生葉がある。根生葉には長い柄があり扇形の３小葉をつける。花茎は直立し、葉柄の２倍もの長さで先端に白色の花穂をつける。花には花弁がなく、雄蕊と雌蕊だけである。
［選定理由］　県内分布は、黒石市黒森山と下北恐山だけで、個体数が極めて少なく、減少している傾向にある。津軽植物の会では、県内各地の類似環境の地点へ足を運び、新産地を探しているが個体確認は出来ない。そして分布情報も全く無い。
［分布と生態の概要］　世界的分布は中国・日本。日本分布は北海道・本州北部。県内分布は黒石市黒森山・下北郡恐山。ミズナラの林床に生育しているが土壌安定地帯ではない。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点は岩礫や砂礫の崩落が続き、個体の生育に大きな負荷を与えているようだ。生育地の崩落防止などの保存対策が必要。
［特記事項］　和名由来は南部（岩手県）で見出されたから。　**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　メギ科 **B**

和名　トガクシソウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ranzania japonica* (T.Itô ex Maxim.) T.Itô

［形態的特徴］　草丈30～50cmの多年草。茎の基部には根出葉はなく鱗片葉で、茎の先には長い柄を持つ茎葉が対生し、葉身は３出複葉。小葉は円形で尖頭心脚、柄が長い。花は９枚の萼と６枚の花弁からなり、外萼３枚は小さく、内側６枚は紫色で大きく花弁のように見える。本当の花弁は更に内側に６個集り鐘状で小さい。
［選定理由］　西津軽郡の赤石川上流部・追良瀬川上流部・笹内川上流部にだけ見られ、個体数も極めて少ない。津軽植物の会では、県内各地の類似環境地点に足を運び調査しているが確認出来ない。分布情報も無い。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけである。日本分布は本州中部と北部の多雪地帯。本県分布は西津軽郡の赤石川上流部・追良瀬川上流部・笹内川上流部。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育環境は湿り気のある落葉樹林下であり、生育地の伐採や崩壊などで、個体の消滅が心配される。また、採取による減少も考えられる。保護対策が必要である。
［特記事項］　日本固有種。１属１種の植物。本県が北限の植物。ハモンソウ（破門草）の別名がある。日本人により最初に学名がつけられた植物。　**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　オオレイジンソウ **環境省：該当なし**
学名　*Aconitum iinumae* Kadota.

［形態的特徴］　茎は直立し、草丈１ｍほどの多年草。茎の上部や花柄には曲がった毛が生える、長い柄がある根出葉は大型で７～９中裂し、裂片は更に浅く裂けて先は尖る。茎先に長さ30cmほどの細長い総状花序をつけ、淡黄色花を多数つける。総状花序の花は下から上へ順に咲いて行く。１個の花の外形は兜状であるが、これは５枚の萼片から構成されている。花弁は頂萼片の内部に隠れている。花弁には距があり、距の先端は著しく内側に曲がっている。母種エゾノレイジンソウの距先端は真っ直ぐで内側に曲がらないので区別が出来る。

［選定理由］　南八甲田と白神山地の一部に自生しているのみである。分布の広がりと個体増加の傾向は、殆ど見られない。

［分布と生態の概要］　日本分布は北海道・本州中部以北。県内分布は八甲田横沼地区と白神山地笹内地区。

［生存に対する脅威と保存対策］　個体数が少なく、深山渓谷の湿気のある斜面に生育し、渓谷の崩壊などが発生すれば、消滅へと進む心配がある。生育地の定期巡回などを行い保護対策が必要である。

［特記事項］　トリカブト属でありながら根茎が塊根をつくらず垂直に伸びる。　**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　センウズモドキ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Aconitum jaluense* Kom. subsp. *iwatekense* (Nakai) Kadota

［形態的特徴］　林下に生える多年草。葉は５角形状で３深～全裂する。花は紫色から白色まで変化がある。花期９～10月。花柄に真っすぐな開出毛を密生するのが特徴。類似種オクトリカブト・ツクバトリカブトの花柄には曲がった屈毛が密生する。開出毛と屈毛の混生する雑種の方がむしろ多い。

［選定理由］　落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化で生育地が失われてきている。現在の生育地では雑種の繁殖が目立ち、両親共まれにしか見られなくなっている。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北の太平洋側）に分布する。県内では太平洋側南部の馬渕川流域以南に産する。*A.fauriei*（木梨が1900年青森で採集）も本種とされる（門田, 1987）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で階上町階上岳で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　アズマレイジンソウ **環境省：該当なし**
学名　*Aconitum pterocaule* Koidz. var. *pterocule*

［形態的特徴］　林下のやや湿った所に生える多年草。茎は高さ0.8～1.5mで、上部はややつる状になる。葉は腎円形で５～７中裂する。花は淡紅紫色で、えぼし形の頂萼片上部が細まる点で、他のトリカブト類と区別できる。花期８～９月。

［選定理由］　産地・個体数が少なく、橋の架け替え工事で消滅した所もあり、開発等による危険性が大きい。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北）の主として日本海側に分布する。県内では八戸市の新井田川流域にごくまれに産する。北限である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　ミチノクフクジュソウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Adonis multiflora* Nishikawa et Ko. Ito

［形態的特徴］　草地や明るい林内に生える多年草。茎は中空。萼片は５、６枚で、長さは花弁の1/2～1/3、外面は緑色。花期４月中旬～５月上旬。よく似たフクジュソウは、茎が中実。萼片が６～10枚で、花弁と同長からやや短い、外面紫色から暗紫色。花期３～４月（西川, 1989）。

［選定理由］　フクジュソウより産地・個体数は格段に少ない。草地・落葉広葉樹林の減少や園芸採取が危険要因である。

［分布と生態の概要］　本州（中部以北）・九州、朝鮮に分布する。県内では太平洋側南部に局所的に産する。海岸から丘陵地の草地や落葉広葉樹林下に生え、フクジュソウと混生することもある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で十和田市藤島・清瀬、八戸市小舟渡平・松館蟹沢・高舘で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　フクジュソウ **環境省：該当なし**
学名　*Adonis ramosa* Franch.

［形態的特徴］　草丈15～25cmになる多年草。花は黄金色で早春に咲く。根はひげ根で多数出す。葉は互生して、３～４回羽状に細かく裂ける。黄金色の花は、萼と花弁から構成され、下部の数枚は萼で、上部の20～30枚は花弁である。

［選定理由］　県内全域に見られ、群落を形成していることが多い。しかし、生育地が年々減少し、個体も少なくなっている。生育地の消滅と個体の減少が確実に進んでいる。

［分布と生態の概要］　世界的分布は朝鮮半島・中国東北部・シベリア東部。日本分布は北海道～九州まで点在するが、西日本には少ない。県内分布は全域に渡っている。津軽西海岸・津軽半島・弘前市相馬地区・三八地区の自生地はよく知られている。

［生存に対する脅威と保存対策］　春一番に咲く美しく目出度い花なので、観賞用に採取が行われる。そのため、個体の減少が進んでいる。採取を禁じ、生育地の保存が必要。保存対策として、記念物指定が有効と思われる。

［特記事項］　同属の別種で、酷似するミチノクフクジュソウが種差海岸などに見られる。**（木村啓）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　エゾノリュウキンカ **環境省：該当なし**
学名　*Caltha fistulosa* Schipcz.

［形態的特徴］　春はやく黄金色の大きな５弁花を咲かせる多年草。草丈50～80cmで、根生葉は腎円形で大きくアキタブキを思わせる。葉には光沢があり軟らかい。花柄は、直立し高さ70cmほどで、上部に少数の茎葉をつける。茎頂及び茎葉腋に花をつける。

［選定理由］　深山の水湿地に生育しているが、株が増加する傾向にはなく、自生地の消滅も見られる。津軽植物の会では毎年、県内各地の自生地調査をしているが新産地は殆ど無く、消滅した自生場所もある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は千島列島・サハリン・朝鮮半島北部。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は深浦地区・鰺ヶ沢地区・黒石地区・八甲田地区・三八地区。深山水湿地が生育場所である。

［生存に対する脅威と保存対策］　深山の開発が進み、林道の設置などで湿地自生地の消滅も見られる。開発時には、植生調査を行って、絶滅を防ぐことが必要である。

［特記事項］　当該種を本県ではヤチブキ（谷地蕗）と呼び、花・葉・茎・葉柄の全てを食べる。キンポウゲ科植物としてはニリンソウ（本県俗称フクベラ）と並び食用にできる例外種である。

（木村啓）

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　ハンショウヅル **環境省：該当なし**
学名　*Clematis japonica* Thunb.

［形態的特徴］　林縁や林内に生える木質のつる植物。ミヤマハンショウヅルに似て葉は１回３出複葉で対生、花は紫褐色で下垂し、質が厚く縁に白細毛が密生する（細井, 2010）。花期は５～６月。
［選定理由］　県内では特異な隔離分布をしている。
［分布と生態の概要］　細井（2010）は「岩手・秋田・宮城・山形の４県からは正確な分布は知られておらず、それより南に広く分布することが知られている。一種の隔離分布で津軽・下北両半島に分布している。林縁もしくは明るい林内に希産する」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　マニアの乱獲を防止する。
［特記事項］　葉が似ているトリガタハンショウヅルは県内には分布しない（細井, 2010）。

（齋藤信夫）

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　コキツネノボタン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Ranunculus chinensis* Bunge

［形態的特徴］　日当たりのよい湿地に生える越年草。キツネノボタンに似ているが、全体に開出毛が多い。集合果は長楕円形（キツネノボタンは球形）。花期６～７月。
［選定理由］　自然度の高い湿地にみられる。八戸市の馬淵川河川敷を利用したサーキットパークにも生育していたが、河川敷整備により消滅した。それまでは毎年定期的な草刈りが行われ、レース以外は人の立ち入りのない好適な環境で、エゾナミキソウ・ミクリ・ミコシガヤなども生育していた。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・シベリアに分布する。県内では太平洋側八戸市・階上町に産し、ややまれである。キツネノボタンと混同されていることも考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で八戸市河原木馬淵川原で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　イワカラマツ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Thalictrum sekimotoanum* Honda

［形態的特徴］　山地の日当たりの岩場に生える多年草。全体に腺毛が多いのを特徴とする。類似種のアキカラマツ・オオカラマツは全体無毛か、またはわずかに腺毛がでる。花期は６～７月。アキカラマツは通常８月で遅い（岩場に生えて花期の早いものもある）。
［選定理由］　産地が限られ個体数も少ない。道路工事・岩石採掘および植生の変化で減少している。
［分布と生態の概要］　本州（中部以北）に分布する。県内では局所的に岩場に小群でみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で南部町諏訪ノ平・階上町金山沢で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **B**

和名　ノカラマツ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Thalictrum simplex* L. var. *brevipes* H.Hara

［形態的特徴］　日当たりの草地に生える多年草。楔形の小葉が特徴。花びらはない。アキカラマツより花序も茎葉も狭く着き、茎は稜がはっきりしている。
［選定理由］　全国的にも希産であり、開発等により減少している。
［分布と生態の概要］　細井（2010）は「学名上の母種はヨーロッパに産し、他の変種はシベリア東部・北中支・朝鮮に分布しており、ノカラマツは南朝鮮と九州の阿蘇火山帯と本州では関東平野・井沢・蓼科に知られる。県内では佐井村・おいらせ町（旧下田町）・小川原湖畔・高瀬川に分布することが分かっており、湿った場所が多い」と記している。
［生存に対する脅威と保存対策］　草地の開発や、放棄による自然遷移などが脅威となる。園芸採取の防止が望まれる。 **（齋藤信夫）**

被子植物ユキノシタ目　ボタン科 **B**

和名　ヤマシャクヤク **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Paeonia japonica* (Makino) Miyabe et Takeda

［形態的特徴］　草丈40㎝ほどの多年草。茎は直立し有柄の２回３出複葉を互生する。小葉は楕円形で先端は尖り基部は楔形となり、葉表は緑色で光沢があり、葉裏は白色を帯びる。茎の先端に大きい白色花を１個つける。花弁は５～７枚で萼片は３枚。果実は袋果で、秋に裂開すると不稔の紅色種子と結実の黒色種子が現れる。
［選定理由］　県内各地に生育しているが、株数は少なく増加する傾向にはない。津軽植物の会では県内各地に足を運び調査しているが新産地は少なく、株数も限られている。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は県内全域。低山地の落葉樹林下や杉林床に見られる。
［生存に対する脅威と保存対策］　生育地は杉林や落葉樹の林床であるが、畑地開墾や開発工事などで、生育地が少なくなっている。加えて、花が美しいので観賞用に、根は薬用になるので、採取されてもいる。
［特記事項］　同じ県産種として、同科同属近似種のベニバナヤマシャクヤク（紅花山芍薬）があり、本県絶滅危惧種のＡランクに入っている。 **（木村啓）**

被子植物ユキノシタ目　ユキノシタ科 **B**

和名　シコタンソウ **環境省：該当なし**
学名　*Saxifraga bronchialis* L. subsp. *funstonii* (Small) Hultén var. *rebunshirensis* (Engl. et Irmsch.) H.Hara

［形態的特徴］　山地から高山の岩礫地、砂礫地、岩場に生える多年草。根茎はよく分枝して株状になる。無花茎は短く、帯紅紫色。葉はやや肉質で、へら状披針形、長さ６～15㎜、縁に剛毛がある。花茎は３～12㎝。花弁は長さ４～７㎜で、黄色と紅色の小さな斑点がある。花期６～７月。
［選定理由］　開発は考えられないが、草姿や花の魅力から盗掘の危険性が大きい。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内では白神山地と津軽半島に希産する。本州では普通高山生と考えられている植物が山地でみられ貴重である。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び周辺の環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を主に引用） **（齋藤信夫）**

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **B**

和名　ツガルミセバヤ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Hylotelephium ussuriense* (Kom.) H.Ohba var. *tsugaruense* (H.Hara) H.Ohba

［形態的特徴］　山地の岩上や砂礫地や母岩が露出した崩壊斜面などに生える多年草。花茎は高さ20～30㎝になり斜上する。葉は帯粉し白緑色、無柄で卵形から楕円形が多く、緩やかな鋸歯があり、対生・互生・輪生など変化に富む。花期は10月頃、乳白色の花を散房状につける。
［選定理由］　深山まで林道が開設されるようになって、立ち入りにより生育地がせばめられている。
［分布と生態の概要］　本州（青森・秋田）に分布する。白神山地から初めて報告された植物である。県内では白神山地のほか、津軽半島北端や青森市の山中に生育することが分かっている。

（齋藤信夫）

被子植物マメ目　マメ科 **B**

和名　フジカンゾウ **環境省：該当なし**
学名　*Hylodesmum oldhamii* (Oliv.) H.Ohashi et R.R.Mill

［形態的特徴］　草丈80㎝ほどのヌスビトハギに類似した多年草。葉は互生し、５～７小葉からなる羽状奇数複葉で頂小葉も側小葉も長楕円形。葉柄基部には線形の托葉がある。花は長い総状花序で淡紅色の蝶形花を多数つける。果実は三角形の２節果でサングラスの形状を思わせる。三角形小節果には、全面に短い鉤毛が密生し、動物や被服に付着して散布される。
［選定理由］　限られた地域にだけ見られ、個体数も少ない。生育地点は低山地の林下路傍で、増加する傾向は見られない。分布域が狭く、津軽地区の一部に限られている。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国東北部。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は津軽西海岸・大鰐早瀬野地区。低山地の林下路傍に僅かに生育している。
［生存に対する脅威と保存対策］　西津軽郡鰺ヶ沢町赤石川上流部の山道端で確認しているが、近年は南津軽郡大鰐地区の山道でも記録した。道路改修や刈り払いの作業時には注意を要する。
［特記事項］　本県が北限の植物。 **（木村啓）**

被子植物バラ目　バラ科 **B**

和名　シロバナノヘビイチゴ **環境省：該当なし**
学名　*Fragaria nipponica* Makino

［形態的特徴］　山地に生える多年草。花弁は５枚で白色。花期６月。北海道のものは全体に毛が多く、エゾクサイチゴとして区別することもある。県内産も毛が多いが区別しないことにした。同じ山地生のノウゴウイチゴは花弁が７、８枚で、幅が狭い。栽培種オランダイチゴも同属である。
［選定理由］　産地・個体数が少なく、自然災害による崩落・埋没等の危険性がある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・九州（屋久島）、千島・サハリン・朝鮮（済州島）に分布する。県内では津軽半島に希産し、岩場下部の草地にツルキジムシロ・ミヤマウツボグサなどと一緒に小群でみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）
　今回の調査で外ヶ浜町鏑泊で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物バラ目　バラ科 **B**

和名　カラフトダイコンソウ **環境省：該当なし**
学名　*Geum macrophyllum* Willd. var. *sachalinense* (Koidz.) H.Hara

［形態的特徴］　山地の湿り気のある林下に生える多年草。全体に黄褐色の長い剛毛がある。茎は高さ30～60㎝。根生葉の頂小葉は円形で大きい。茎葉の托葉は小さく、全縁であることが多い。花柱には腺毛がある。花期６～８月。

［選定理由］　各産地とも個体数は少ない。開発や水質悪化等の間接的な影響による減少の危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内では散発的に産するが、同属のダイコンソウやオオダイコンソウより細作りで目立たないので、まだ潜在していると考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で五所川原市飯詰・六ヶ所村田面木沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物バラ目　バラ科 **B**

和名　ミチノクナシ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Pyrus ussuriensis* Maxim. var. *ussuriensis*

［形態的特徴］　野生のナシの１種である。若い葉には褐色の毛が密なものから薄いものまで変異がある。果実は径３㎝ぐらいで、黄緑色または褐色で、頂部に萼片が残る（類似種ヤマナシは萼片が脱落）。

［選定理由］　戦後激減し今では自生株が少ない。

［分布と生態の概要］　本州に分布し、県内では低山地や低地に見られる。花は良く咲くが、果実は虫がつきやすい。時々芳香を発するものもある。かつては民家周辺にしばしば植えられていた。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び周辺の環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

［特記事項］　細井（2010）は「別名イワテヤマナシ。岩手県の北上山地の高原には牛馬が長い間放牧されていて、そこの野生ナシはイワテヤマナシと呼ばれていた。今ではそれと同じものであると分かってミチノクナシと統合された。幹の太い株が少ないのは伐採されて家具などに利用されてきたためであろう」と記している。池谷ら（2010）は「ミチノクナシでは、北上山地の野生個体の一部は独自の単一な集団に由来すると推定されましたが、これ以外の北東北地方の個体は、ニホンナシと交雑していることが判明しました」と述べている。　**（齋藤信夫）**

被子植物バラ目　バラ科 **B**

和名　オオタカネバラ **環境省：該当なし**
学名　*Rosa acicularis* Lindl.

［形態的特徴］　落葉低木で樹高１ｍほど。枝はよく分枝し、白色を帯びた鋭い刺を多生する。葉は互生し、奇数複葉で５～７個の小葉からなる。頂小葉の先端は尖り、側小葉の先端はやや円い。葉縁には粗い鋸歯があり、葉の羽軸には腺と小刺がある。花は小枝の先端に１～２個つき、紅紫色の５弁。５弁の中心部には多数の雄蕊があり葯は黄色。果実は倒卵状で狭紡錘形となり黄赤色に熟す。

［選定理由］　県内の分布域は限られており、個体数も少ない。新産地の報告は無く、生育している環境も厳しい。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島北部・中国東北部・サハリン・シベリア・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州中北部の日本海側。本県分布は一部の高山や山地冷地で、津軽半島・黒石市黒森山・八甲田ぐだり沼・下北半島恐山など。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育場所が植生遷移などで変化がみられ、個体の生育が厳しくなっている。生育地域の保存指定が必要である。

［特記事項］　別和名はオオタカネイバラ（大高嶺茨）。　**（木村啓）**

被子植物バラ目　バラ科 **B**

和名　ホザキナナカマド **環境省：該当なし**
学名　*Sorbaria sorbifolia* (L.) A.Braun var. *stellipila* Maxim.

［形態的特徴］　山地に生える落葉低木。高さ２ｍ内外で株立ちになる。枝の先に大きな円錐花序を出し、多数の小花をつける。花期７～８月。果実は袋果である。高木のナナカマドとは別属である。よく似た庭木のニワナナカマドは中国原産で同属である

［選定理由］　植生遷移・自然災害・森林の伐採・立ち入り等による減少の危険性がある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（青森）、朝鮮・中国（東北部）に分布し、日本では分布の限られた種である。県内では佐井村・むつ市（旧川内町、旧脇野沢村）に産する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で佐井村縫道石山で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ニシシギ目　ニシシギ科 **B**

和名　クロツリバナ **環境省：該当なし**
学名　*Euonymus tricarpus* Koidz.

［形態的特徴］　亜高山帯の林縁に生える無毛の落葉低木。樹高は２～３ｍ。葉の両面とも無毛でしわがある。表面の葉脈はくぼみ、裏で隆起する。花は５数性で暗紫色。径約８㎜。果は３裂する。花期は６～７月。

［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、サハリンに分布する。細井（2010）は「県内では岩木山と八甲田山に産するが、精査を要する」と記している。林縁に分布する。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び周辺の環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。 **（齋藤信夫）**

被子植物キントラノオ目　トウダイグサ科 **B**

和名　マルミノウルシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Euphorbia ebracteolata* Hayata

［形態的特徴］　林下や草地に生える多年草。全体紅色を帯びる。茎は高さ40～50㎝、傷つけると白い乳液を出す。茎葉は白い中脈が目立つ。花期４～５月。腺体は腎円形。雄花の基部に小苞がない。果実は平滑である。類似種ノウルシの果実はいぼ状の突起があり、ナツトウダイの腺体は三日月形である。

［選定理由］　落葉広葉樹林の伐採、スギ植林地化などにより減少している。スギ林でも植林密度を下げることによって、本種のような春植物の生育が可能と考えられる。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市・階上町に産し、海岸や丘陵地の斜面下部にみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・松館蟹沢で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キントラノオ目　トウダイグサ科 **B**

和名　ヤマアイ **環境省：該当なし**
学名　*Mercurialis leiocarpa* Sieb.et Zucc.

［形態的特徴］　草丈20～30cmの多年草。地上茎は直立し４稜があり、葉は有柄の長楕円形で対生する。地下茎にも４稜があり横に這い、繰り返し分枝を続けて群落を形成する。雌雄異株で、雄花序も雌花序も穂状花序となり、早春に開花する。
［選定理由］　本県唯一の深浦町の自生地であっても、増加傾向はなく限界の生育状況である。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国大陸・台湾・インドシナ。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は西津軽郡深浦町松神地区・深浦町十二湖地区。低山地の林床に群生する。
［生存に対する脅威と保存対策］　深浦町松神の自生群落地は、生育地全体が保存されて、減少傾向には無い。しかし、他地点の群生地は森林伐採により全滅してしまった。
［特記事項］　本県が北限の植物。日本で最も古くから用いられた染料で、生の葉を布に擦りつけて染色した。万葉集や源氏物語にも当該種の名前が出てくる。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　ヤナギ科 **B**

和名　イイギリ **環境省：該当なし**
学名　*Idesia polycarpa* Maxim.

［形態的特徴］　雌雄異株の樹高８～20mの落葉高木。樹皮は滑らかな灰緑色。葉は互生し枝先に束生する。葉は大きく広円形で縁に粗い鋸歯があり鋭頭で心脚。葉柄は30～40cmと長くて赤色で、先端部に花外蜜腺がある。花は小さく黄緑色で、香気があり、葡萄房状に垂れ下がっている。花弁は無く萼片は５枚前後。果実は液果で熟すと赤色となり、落葉後の冬でも残存し、遠目でもよく目立つ。
［選定理由］　県内の限られた地区にだけ自生し、株数も少なく減少傾向にある。津軽植物の会では長年に渡って県内各地に足を運び調査をしているが新産地は見つかっていない。確認情報も無い。
［分布と生態の概要］　世界的分布は朝鮮半島・中国大陸・台湾。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町岩崎地区・津軽半島小泊地区・八戸市南郷地区。
［生存に対する脅威と保存対策］　人里に近い落葉樹林内に生育しているが株数が少なく、伐採も心配される。当該樹木の保護指定が必要である。
［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **B**

和名　オオバタチツボスミレ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Viola langsdorfii* Fisch. ex DC. subsp. *sachalinensis* W.Becker

［形態的特徴］　地上茎のある大型のスミレで、草丈30cmほどになる多年草。葉は円心形で大きく、明るい緑色で、葉脈は引っ込んでいる。葉の基部は深い心形で、先端は凸出して軟らかく、波打っている。托葉は櫛歯状。花は淡い紫色で大きく、唇弁の筋目立ち、側弁に毛が密生し、距が白色である。
［選定理由］　県内分布は津軽半島・八甲田・六ヶ所村と限られ、生育環境も厳しくなっている。どの生育地点も環境悪化の傾向にあり、株の減少が心配される。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・サハリン・千島列島・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は中泊町高根地区・八甲田田代地区・六ヶ所村。
［生存に対する脅威と保存対策］　一部の地点では、生育地の水湿地が乾燥化や整備などがみられ、株数の減少が認められる。生育地点の環境保全対策が必要である。
［特記事項］　オオバタチツボスミレは湿地を生育場所としていることなどから、系統的にはオオタチツボスミレやタチツボスミレよりもニョイスミレに近いとされている。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **B**

和名　アナマスミレ **環境省：該当なし**
学名　*Viola mandshurica* W.Becker f. *crassa* (Tatew.) F.Maek.

［形態的特徴］　海岸に適応したスミレの品種。そのため、一見すると原野や路傍に生育しているスミレと思ってしまう。しかし、葉に光沢があり厚いことで気づく。詳しく観察すると、側弁に毛があり、葉は鉾形で、草丈が低く、叢生して花柄を多数伸ばし、濃い紫色で小形の花を咲かせている。

［選定理由］　県内分布は津軽西海岸など数地点と限られ、株数も多くない。生育現場は海水に洗われることもあり、株の消失も見られる。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州の日本海側（新潟県まで）。本県分布は津軽西海岸・津軽半島小泊地区。生育環境は海岸砂礫地で海風が強く吹き、波飛沫も被る。

［生存に対する脅威と保存対策］　自然状態の海岸砂礫地に生育しているが、護岸工事などで生育地の消失が見られる。深浦海岸と小泊海岸では、砂礫崩落に耐えて数株が残存しているのみである。また、歩行可能でもあるので、侵入禁止や柵などを作っての保存対策が必要である。

［特記事項］　日本固有種。和名は北海道礼文島のアナマ岩に由来する。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **B**

和名　アイヌタチツボスミレ **環境省：該当なし**
学名　*Viola sacchalinensis* H.Boissieu

［形態的特徴］　一見普通種のタチツボスミレを思わせる多年草。違いのポイントは、距が白色である、托葉の切れ込みが浅い、側弁基部に毛がある、花柱上部に突起毛があることなど。また、花を咲かせる時期が２週間ほど遅れることである。

［選定理由］　分布地が数個所と少なく、生育している株数も少ない。加えて、生育環境が厳しく、個体数増加は見られず、減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・千島列島南部・サハリン・カムチャッカ半島。日本分布は北海道・本州北部と長野県。本県分布は黒石市黒森山・岩木山九合目・七戸町八幡岳・下北郡大間町・東津軽郡平内町。高山や高地など生育環境の厳しい崩落地などに見られる。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育場所は、岩場の崩落地で個体が流失している状況にもある。そのため、生育場所の保護対策が必要である。

［特記事項］　和名は、北海道に多産しタチツボスミレに類似することに拠る。　**（木村啓）**

被子植物フウロソウ目　フウロソウ科 **B**

和名　タチフウロ **環境省：該当なし**
学名　*Geranium krameri* Franch. et Sav.

［形態的特徴］　草地に生える多年草。茎は高さ50～80㎝、下向きの毛がある。葉は両面に粗い毛がある。托葉はやや草質で離生し、狭３角形、長さ４㎜。花は淡紅紫色で濃紫色の脈が目立ち、径2.5～３㎝。類似種にエゾフウロ・ハマフウロ・チシマフウロなどがある。花期８月。

［選定理由］　産地・個体数が少なく、植生遷移の進行・環境改変による減少の危険性がある。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、朝鮮・アムール・中国（東北部）に分布する。県内では八戸市に産し北限である。生育地は現在陸上自衛隊の基地内にあり、ススキ草原状となっている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で南部町福地で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物フトモモ目　アカバナ科 **B**

和名　ホソバアカバナ　**環境省：該当なし**
学名　*Epilobium palustre* L.

［形態的特徴］　湿原に生える多年草。地下に細長い匍匐枝を伸ばす。普通、茎は単一で分枝せず、高さ10～80cm。葉は柄がなく線形または線状披針形、巾３～５㎜が多く、時には７～８㎜のものもある。柱頭はこん棒状。屏風山では分枝して大きい株となるものもある。花期は６～９月。

［選定理由］　周極植物の一種で北半球の北極圏を取り巻いて広く分布しているが、日本では希少植物である（細井, 2010）。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「国内では中部以北の亜高山帯の湿原に分布している。国外ではユーラシア、北アメリカの温帯に分布する。県内では南八甲田の湿原に分布している他に、津軽半島の屏風山の湿地にも希産している。そこは日本海に近いので国内では最も特異な環境である」と述べている。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び周辺の環境変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

［特記事項］　別名はヤナギアカバナともいう。　**（齋藤信夫）**

被子植物アブラナ目　アブラナ科 **B**

和名　エゾイヌナズナ　**環境省：該当なし**
学名　*Drada borealis* DC.

［形態的特徴］　海岸岩上に叢生する草丈15cmほどの多年草。全草に毛が多く、根出葉は倒卵形、茎葉は広楕円形。茎の先端に白色４弁花10～20個を総状につける。花弁は倒卵形で先が窪む。果実は長楕円形でねじれている。

［選定理由］　津軽半島２地点と下北半島１地点に確認されているのみで、生育環境が極めて厳しい。どの生育地点でも株の増加傾向はみられない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・ロシア極東地方。日本分布は北海道・本州北部（青森県）。本県分布は津軽半島先端部・下北半島佐井地区。海岸の岩場という特殊環境に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　進入困難な断崖絶壁などに生育しているので、採取による消滅の心配は無いが、生育地の崩壊などによる絶滅が考えられる。崩落防止などの保存対策が必要である。

［特記事項］　本県が南限の植物。別名はシロイヌナズナ。県産種として同科同属近似種のイヌナズナがあり、黄色花を咲かせ内陸平地に分布している。　**（木村啓）**

被子植物ビャクダン目　ツチトリモチ科 **B**

和名　ミヤマツチトリモチ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Balanophora nipponica* Makino

［形態的特徴］　樹木の根に寄生する多肉質で無毛の多年草。高さ８～15cm。花序は卵状円柱形、または狭卵形、帯橙黄色、ときには赤色を帯びる。雌雄異株であるが、雄株はまだ発見されていないという。花期は７月下旬～８月中旬。

［選定理由］　県内の産地はまれである。個体数は少ない。

［分布と生態の概要］　本州（北部、中部）・九州の山地に生え、イタヤカエデやウリハダカエデなどのカエデの仲間ほかの落葉樹の根に寄生する。

［生存に対する脅威と保存対策］　森林伐採が生育を左右する。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　タデ科 **B**

和名　ヌカボタデ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Persicaria taquetii* (H.Lév.) Koidz.

［形態的特徴］　水田や池の畔に生える１年草。葉は軟弱である。下部の茎は地を這い、根をだし、枝を分ける。上部は直立する。花序はまばらで細長く花穂の花は小さい。花期は９～10月。
［選定理由］　希少種である。
［分布と生態の概要］　細井（2010）は「全国的に分布しているが、現在では希産である。水辺や湿地に生える。県内では岩木川河口周辺、三八地方のみ」と記している。国外では朝鮮に分布する。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地の保護と生活環境の解明が必要である。
［特記事項］　細井（2010）は「佐藤耕次郎（1943）は原野ノ水辺、沼沢地、溜池ノ底、湿潤ノ畑地等ニ多ク見ユと記録しているが、今日では希産である」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **B**

和名　アオモリマンテマ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Silene aomorensis* M.Mizush.

［形態的特徴］　山地の岩場に生える多年草。茎は叢生し高さ10～25㎝。根生葉はヤナギのような細い葉で、先は尖り、基部は細くなりほとんど柄がなく、長さ８㎝くらい。茎葉は根生葉より小さく、対生する。茎の先端に３㎝前後の白色の花を数個咲かせる。花期は６月。萼は鐘形で膨らみ、10脈があり、産地により腺毛のあるのと無いものがある。
［選定理由］　本種が生育する場所は日当たりのよい岩場で、花が大きく、非常に目立つことから人目を引く。そのため盗掘が進み、個体数はきわめて少なくなっている。
［分布と生態の概要］　本州（青森・秋田）に分布。白神山地から初めて報告された植物である。県内では日本海側南西部の山地に局所的に産する。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び伐採による岩場周辺の環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **B**

和名　ミチノクコザクラ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Primula cuneifolia* Ledeb. var. *heterodonta* (Franch.) Makino

［形態的特徴］　草丈10～20㎝の多年草。根際より４～５枚の葉をそう生させ、その中心から花柄直立させ、先端部に高杯状で紅紫色での花を１～６個つける。葉は倒卵状くさび形で、下部の方が次第に細くなり、長さ３～15㎝、幅２～３㎝。葉縁の上部には不揃いの深い鋸歯が多数ある。
［選定理由］　県内分布は岩木山のみで、９合目の谷筋や窪地などに群生する。開花の季節には登山をしながら鑑賞する人が多く、踏み付けなどで個体減少が心配される。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は本県と秋田県。本県分布は岩木山。高山帯の岩地や岩礫地や草湿性地に群生する。
［生存に対する脅威と保存対策］　９合目からの登山道にも普通に生育しているので、踏み付けによる消滅が見られる。踏みつけ注意などの保護対策が必要である。
［特記事項］　日本固有植物。岩木山が基準産地で、白花をつける個体はシロバナミチノクコザクラと呼ぶ品種である。岩木山の他に秋田県田代岳でも発見された。　**（木村啓）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **B**

和名　ユキワリコザクラ **環境省：該当なし**

学名　*Primula farinosa* L. subsp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *fauriei* (Franch.) Miyabe

［形態的特徴］　草丈５～10㎝の多年草。葉は根際に集まってつき、その中心部から花柄を出す。花柄の先端部に３～６個の淡紅色で高杯状の花をつける。花喉部は黄白色で、筒部は６㎜ほどの長さで、萼の1.5倍はある。基変種のユキワリソウと酷似するが、本変種は葉裏が著しく外曲するので区別が出来る。

［選定理由］　県内分布は八甲田山系と白神岳で、個体数も極めて少ない。生育する環境は、岩場で株数の増加は見られない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は深浦町白神岳・南八甲田赤倉岳・七戸町八幡岳。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育している岩場地帯の崩落壊が見られ、株数も減少している。崩落防止などの保護対策が必要である。白神岳の当該種を50年ほど前に実見しているが、近年の確認情報は無い。

［特記事項］　日本固有種。同属の酷似種にユキワリソウ（雪割草）があり、県内での分布域を異にしている。 **（木村啓）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **B**

和名　ユキワリソウ **環境省：該当なし**

学名　*Primula farinosa* L. subsp. *modesta* (Bisset et S.Moore) Pax var. *modesta* (Bisset et S.Moore) Makino ex T.Yamaz.

［形態的特徴］　草丈５～10㎝の多年草。葉は根際に集まってつき、その中心部から花柄を出す。花柄の先端部に３～６個の淡紅色で高杯状の花をつける。花喉部は黄白色、筒部は６㎜ほどの長さで、萼の1.5倍はある。ユキワリコザクラと酷似するが、本基変種は葉裏に黄色粉状物を密付するので区別が出来る。

［選定理由］　県内分布は下北半島の一部のみで、個体数も極めて少ない。生育する環境が岩場の湿潤地で、株数の増加は見られない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は下北郡大間町奥戸川上流部の２地点。深山渓谷の岩場を生育地としている。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点の岩場崩壊が見られ、年々個体数が減少している。崩落防止の方策を講じて、経過観察をしたい。また、進入禁止などの保存対策も必要である。

［特記事項］　日本固有種。同属の酷似種にユキワリコザクラ（雪割小桜）があり、県内での分布域を異にしている。 **（木村啓）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **B**

和名　オオサクラソウ **環境省：該当なし**

学名　*Primula jesoana* Miq. var. *jesoana*

［形態的特徴］　草丈20～40㎝の多年草。長い柄のある掌状の根生葉を５～６枚出し、その中心から花茎を真っ直ぐに伸ばす。花茎の先端に紫紅色で高杯状の大きな花を輪状に５～６個つける。群落の中に、白花株も認められることがある。これは、品種のシロバナオオサクラソウである。

［選定理由］　県内各地に見られるが、フクジュソウに次いで春に咲く美しい野生花なので、観賞用に採取されることが多い。自生地では年々個体数が少なくなっている。このままでは絶滅してしまう。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道西南部・本州中部以北。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・中津軽郡・南津軽郡・東津軽郡・下北郡。深山の谷地や湿った草地に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　花が美しいので、どの生育地でも採取があり、絶滅へと進むように思われる。生育地の保護指定と監視活動が必要と思われる。

［特記事項］　日本固有植物。津軽半島先端部に当該種の自生群落があったが、採取が続いたために絶滅してしまった例がある。 **（木村啓）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **B**

和名　ヒナザクラ **環境省：該当なし**
学名　*Primula nipponica* Yatabe

［形態的特徴］　草丈10cmほどの多年草。葉は肉質の倒卵形で小さく、根際から多数集まって出る。集まった葉の中から、15cmほどの花茎を伸ばし、先端に２～８個の花を散形につける。花は白色で小さく高杯状をして、花弁は５深裂し、花弁の先端が更に浅く裂ける。

［選定理由］　県内分布は八甲田山系のみで、北八甲田と南八甲田の湿原に群生している。生育地の湿原の踏み付けなどで、個体の消失も見られる。厳しい環境に生育している種類なので見守りたい。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は本州の東北地方だけ。本県分布は北八甲田の湿原・南八甲田の湿原。

［生存に対する脅威と保存対策］　雪が消えると乾燥する高山の湿生地にも生育するため、踏み付けによる個体減少が心配される。進入禁止などの保護対策が必要である。

［特記事項］　日本固有種。本県が北限の植物。当該種は白花株のみとされているが、北八甲田の大岳直下で紅紫色株を確認している。　**（木村啓）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **B**

和名　ナガバツガザクラ **環境省：該当なし**
学名　*Phyllodoce nipponica* Makino subsp. *tsugifolia* (Nakai) Toyok.

［形態的特徴］　背丈15cmほどの常緑低木で、枝をよく分枝し、葉を密生する。葉は線形で長さ８～12mmでツガザクラの仲間としては長い。花は釣鐘状で淡い紅色をして下を向いている。本県産のツガザクラ属には、他にアオノツガザクラ、エゾノツガザクラがあり、共に高山帯に生育している。

［選定理由］　県内分布は岩木山の１地点のみで、株数も多くない。高山の岩場地帯に僅かに生育している。雪害などで絶滅することも考えられる。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は岩木山。高山帯の岩場や岩礫地に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育地点への進入は極めて困難なので、採取による消失は考えられないが、植生変化や地形変化で衰退も考えられる。生育地点を保護区域に指定し、定期的な保護観察も必要である。

［特記事項］　日本固有植物。ツガザクラ（栂桜）の亜種で、別名をエゾノナガバツガザクラ（蝦夷長葉栂桜）という。　**（木村啓）**

被子植物リンドウ目　アカネ科 **B**

和名　フタバムグラ **環境省：該当なし**
学名　*Oldenlandia brachypoda* DC.

［形態的特徴］　草丈15cmほどの１年草。茎は円柱形で細く、基部から枝分かれし、斜上または横に広がっている。葉は線形で長さ３cm、幅３mmほどで、縁がざらつき、葉先は尖り基部は細くなり、殆ど柄が無く、対生している。花は白色筒状で先端が４裂し、葉腋につく。雄蕊は４本、雌蕊は１本、子房下位で２室に分かれている。

［選定理由］　県内分布は限られて、西津軽の低湿地に僅かに見られるのみである。生育地の湿地環境は厳しく、個体の増加傾向はみられない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・東アジア・熱帯アジア。日本分布は本州・四国・九州・沖縄。本県分布は、つがる市六沢溜池・西津軽郡深浦町切明沼。低湿地であるが、生育地点は極めて限られている。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育場所である低湿地の植生遷移が進み、本種の株数が減少している。環境保全が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物リンドウ目　リンドウ科 **B**

和名　ホソバツルリンドウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Pterygocalyx volubilis* Maxim.

［形態的特徴］　山地の林縁などに生える多年草。ツルリンドウのように紫色を帯びることはなく、やや繊細である。葉は披針形で先は長く尖る。花は４数性で、花冠の先は４裂し、副片がない。花期10月。果実は朔果。よく似たツルリンドウの花は５数性。果実は液化である。

［選定理由］　もともと産地・個体数の少ない植物で、環境改変・採取等によりさらに減少が進行している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、中国（東北部）・ウスリーに分布する。県内では全域に散発的にしか発見されなかったが、最近道路脇ののり面に出現することがあり、生態的な研究が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で東通村桑畑山・猿ヶ森・八戸市十日市で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **B**

和名　チョウジソウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Amsonia elliptica* (Thunb.) Roem. et Schult.

［形態的特徴］　川岸や林内などのやや湿った草地に生える多年草。茎は高さ60㎝内外。葉は披針形で先は鋭くとがり、互生から一部対生。茎の先に青紫色の花をつける。花冠は筒状で、先が５裂して平開する。花期５～６月。

［選定理由］　開発および遷移進行により消滅の危険性がある。護岸工事等に際しては自然に配慮し、開発による水質悪化・水位変動の防止が必要である。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内ではつがる市・鶴田町に希産する。近年の開田で生育地が減少し、今はため池の周辺などに残るだけである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査でつがる市稲垣・木造・鶴田町富士見湖で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **B**

和名　スズサイコ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Vincetoxicum pycnostelma* Kitag.

［形態的特徴］　日当たりのよい草地に生える多年草。茎は細くて直立し、高さ40～100㎝。葉は長披針形から線状長楕円形、やや厚い。上部の葉腋に集散状のわん曲した花序を出し、黄褐色の花をまばらにつける。花は早朝に開き、日が当たると閉じる。花期７月。

［選定理由］　もともと広く分布するが個体数の少なかった種で、自然の牧野・採草地がなくなり、外来種の進出が多くなるとともに急激に減少した。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・ダフリアに分布する。県内では全域に点在し、自然度の高い草地にみられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で三沢市仏沼で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物ナス目　ナス科 **B**

和名　ヒヨドリジョウゴ **環境省：該当なし**
学名　*Solanum lyratum* Thunb.

［形態的特徴］　つる状の多年草で、新しい枝が細長く伸び、葉柄で他物にからみつく。葉は互生し、卵形で深い切れ込みがあり、表面にも裏面にも短軟毛が密生する。花は集散花序に多数つき、花冠は白色で５深裂して裂片は反り返る。雄蕊は５個で葯が黄色でよく目立つ。雌蕊は１個で飛び出している。果実は、球形の液果で赤熟し、多数の種子が入っている。

［選定理由］　県内分布は津軽西海岸深浦地区で確認され、株数は極めて少ない。分布地点はそれぞれ孤立して、株の増加傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国・インドシナ。日本分布は北海道・本州・四国・九州・沖縄。本県分布は西津軽郡深浦町。人里の林縁や路傍の藪地に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　生育環境は、林縁の藪地などで単独株である。藪地の刈り払いが行われれば消失する可能性が大きい。保護対策が必要である。

［特記事項］　和名は果実をヒヨドリが好んで食べることに由来。果実は有毒。　**（木村啓）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **B**

和名　エチゴトラノオ **環境省：該当なし**
学名　*Veronica ovata* Nakai subsp. *maritima* (Nakai) Albach

［形態的特徴］　草丈１ｍほどの多年草。茎は直立し先端に長い穂になった花序を出し、淡紫色の小花を密につける。小花は筒状で先端が深く４裂し、雄蕊２本と雌蕊１本が飛び出している。長穂に密に着いている小花は下方から上方へ順に開花していく。葉は対生し、披針形で長さ８㎝ほどの無毛葉をつける。葉の質は堅く、葉縁は浅い尖鋸歯で尖頭楔脚となる。

［選定理由］　県内分布は、津軽西海岸深浦地区の海岸草地で、株数は限られている。生育地点を継続調査しているが、株数が増加する傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は本州東北地方の日本海沿岸部で福井県～青森県。本県分布は西津軽郡深浦町艫作海岸～風合瀬海岸。海岸草地に生育しているが生育環境は極めて厳しい。

［生存に対する脅威と保存対策］　一部の生育地が道路に面し、草地が刈払われて当該種の姿が見られなくなった。進入禁止などの保存対策が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **B**

和名　シラガミクワガタ **環境省：該当なし**
学名　*Veronica schmidtiana* Regel subsp. *senanensis* (Maxim.) Kitam. et Murata var. *shiragamiensis* (T.Yamaz.) Albach

［形態的特徴］　山地の岩場に生える多年草。地下茎から数本の茎が伸び、高さ20㎝前後になる。葉は長柄があり根ぎわに多くつく。茎の先に青紫色の花を咲かせ、花弁の紫条が目立つ。東北地方に産するミチノククワガタとは、花が大きく、葉縁の鋸歯が規則的である点で区別される。花期は６～７月。

［選定理由］　白神山地の入山規制が実地されているが、採取などにより急激に減少している。

［分布と生態の概要］　本州（青森・秋田）。白神山地特産種である。ミヤマクワガタの仲間は通常ブナ帯以上の山地から高山の砂礫地に生えるが、本種はブナ帯の岩場や渓流沿いの岩場で確認されている。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　シソ科 **B**

和名　キセワタ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Leonurus macranthus* Maxim. var. *japonica*

［形態的特徴］　山地の草地や林縁に生える多年草。茎は直立し、高さ60～100㎝。葉は卵形から狭卵形、欠刻状のあらい鋸歯があり、長さ５～９㎝。花は上部の葉腋に輪状につき、花冠は紅紫色、外面は密に白毛があり、和名の通り綿を着せたようである。花期８～９月。

［選定理由］　もともと広く分布するが個体数の少なかった植物で、草地の減少および外来種の進出により、さらに生育地が失われてきている。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国・ウスリーに分布する。県内では全域の草地に産するが、まれである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

（須藤智道）

被子植物シソ目　シソ科 **B**

和名　ヤマジソ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Mosla japonica* (Benth. ex Oliv.) Maxim.

［形態的特徴］　山地の日当たりのよい草地や裸地に生える小型の１年草。茎は高さ５～15㎝、４角形で白毛がある。葉は卵形から狭卵形、長さ１～３㎝。苞は卵形から広卵形で、長さ３～５㎜、下部のものは萼より長い。花冠は淡紅色、長さ３㎜で小さい。花期９月。

［選定理由］　牧野の牧草地化・森林化などで出現の機会もなくなり減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮（南部）に分布する。県内では外ヶ浜町矢形石山・弘前市屏風岩・階上町階上岳・八戸市などで確認されている。山地の裸地や平地の造成地などに先駆的に出現し、植生遷移が進むと影を潜める。撹乱地依存の植物である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で外ヶ浜町矢形石山・八戸市鮫町小舟渡平・大久保金吹沢で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物シソ目　シソ科 **B**

和名　ミヤマウツボグサ **環境省：該当なし**

学名　*Prunella vulgaris* L. var. *aleutica* Fernald

［形態的特徴］　山地の草地に生える多年草。茎は高さ10～30㎝。全体ウツボグサに似ているが、茎の基部から匐枝を出さない点で区別される。花冠は紫色で、長さ1.5～２㎝。花期６～７月。

［選定理由］　産地・個体数が少ないので、立ち入りや自然災害等により失われる危険性が大きい。

［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、千島・ウスリー・カムチャツカ・アリューシャンに分布する。県内では津軽半島北部の岩場の草地に希産する。本州では高山生の植物であるが、低山地に生育している。北海道では海岸部から見られる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で外ヶ浜町鐇泊で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物シソ目　シソ科 **B**

和名　デワノタツナミソウ　**環境省：該当なし**
学名　*Scutellaria muramatsui* H.Hara

［形態的特徴］　草丈20cmほどの多年草。茎は長く這った地下茎から立ち上がり、卵状形で柄のある葉を対生させる。茎は四角柱、葉は円頭、葉縁は波形鋸歯、茎や葉には微毛がある。花は紫色の唇形で、下唇には紫斑が無いのが最大特徴。

［選定理由］　県内分布は津軽西海岸岩崎地区の湿生林地で、株数が少ない。生育環境は薄暗い流水域で、増加している傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は本州の近畿以北。本県分布は西津軽郡深浦町の山地谷川地帯で厳しい生育環境にある。

［生存に対する脅威と保存対策］　林内の流水域に生育しているので、増水などにより流失する心配がある。流失防止などの保存対策が必要である。

［特記事項］　本県が北限の植物。本県産のシソ科タツナミソウ属には、ヒメナミキ・デワノタツナミソウ・ヤマタツナミソウ・エゾタツナミソウ・ハマナミキソウ、エゾナミキソウの６種がある。

（木村啓）

被子植物シソ目　ハマウツボ科 **B**

和名　オニシオガマ　**環境省：該当なし**
学名　*Pedicularis nipponica* Makino

［形態的特徴］　草丈40～100cmの多年草。茎は直立し、葉とともに白色の軟毛を密生する。葉には茎につく対生葉と根元から出る根生葉がある。根生葉は大形の長楕円形で羽状に全裂し、裂片は深く裂ける。茎葉は小形で羽裂せず、上部の葉は苞となる。茎の先に花穂をつくり、まばらに花をつける。花は桃色の唇形で、長さ15cmほど幅６cmぐらいと大きく目立つ。

［選定理由］　県内分布は、津軽西海岸の河川上流部と岩木山麓の一地点で、株数は限られている。どの生育地点でも、株が増加する傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は本州石川県～青森県までの日本海側。本県分布は津軽西海岸の追良瀬川・吾妻川・笹内川の上流と弘前市湯段地区黒沢林道で何れも湿った谷間である。

［生存に対する脅威と保存対策］　河川沿いの湿気のある山道端にみられるが、崖崩れなどで埋没し、消失する心配がある。保護対策が必要である。

［特記事項］　日本固有種。本県が北限の植物。　**（木村啓）**

被子植物シソ目　タヌキモ科 **B**

和名　タヌキモ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Utricularia japonica* Makino

［形態的特徴］　多年生の水生食虫植物。植物体は柔らかく、葉は糸状裂片に細かく分かれ、所々に補虫嚢をつける。夏になると水上に直立する花軸を出して、上部に数個の花をまばらにつける。花は黄色で仮面状をして短い距をつける。

［選定理由］　県内分布は、全域に渡っている。沼や池などの浅い水中に浮遊しているが減少傾向にある。生育域を拡大する様子は見られない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・中国東北部・サハリン・南千島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・東津軽郡・南津軽郡・中津軽郡・上北郡・下北郡・三戸郡。

［生存に対する脅威と保存対策］　一部の生育地では、池沼の乾燥化削除がみられる。また、開発による沼地の消滅もみられる。生育地保存の対策が望まれる。

［特記事項］　本県産タヌキモ属には、イヌタヌキモ・ミミカキグサ・フサタヌキモ・コタヌキモ・タヌキモ・オオタヌキモ・ヒメタヌキモ・ヤチコタヌキモ・ムラサキミミカキグサの９種がある。

（木村啓）

被子植物シソ目　タヌキモ科 **B**

和名　ヒメタヌキモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Utricularia minor* L.

［形態的特徴］　浅い池沼に生える多年生の水生食虫植物。軸は水底の沈殿物の中に伸び、所々に地中葉を泥中に出して固着する。水中葉は３～４回分枝し、まばらに補虫嚢をつける。裂片の先には１～３本の刺がある。地中葉にも補虫嚢がつく。夏に10cmほどの花軸を出して黄緑色花をつける。花はタヌキモより小さい。

［選定理由］　県内分布は、全域に渡っている。湿地や池沼のごく浅いところにみられ、減少傾向にある。生育域を拡大する様子は見られない。

［分布と生態の概要］　世界的分布はアジア・北アメリカ・ヨーロッパ等の周北地域。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布はつがる市屏風山の治右ェ門沼と出来島２号溜池・上北郡小川原湖・下北郡尻屋崎。貧栄養な沼地や溜池や湿地に生育。

［生存に対する脅威と保存対策］　タヌキモと異なって、土中にも茎を伸ばして土壌微生物を捕食している。湿地土壌の乾燥化が進んでいるので、保護対策が必要である。

［特記事項］　冬に越冬芽をつくって本体は枯れる。　**（木村啓）**

被子植物シソ目　タヌキモ科 **B**

和名　ムラサキミミカキグサ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Utricularia uliginosa* Vahl

［形態的特徴］　湿地に生える多年生の食虫植物。地下茎は白色糸状で地中を浅く這い、まばらに捕虫嚢をつける。葉は細いへら形で、地下茎の所々から地上に出る。夏には、細長い花柄を地上に直立させ、上部に総状花序をつけ、まばらに淡紫色の花を数個つける。花冠は上下に２裂して仮面状となる。

［選定理由］　県内分布地点は限られており、個体数も極めて少ない。そして、生育地の湿地帯は乾燥化や破壊などが見られ、株数増加の傾向にはない。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道・本州・四国・九州・沖縄。本県分布はつがる市屏風山・五所川原市長富・上北郡野辺地町・八甲田地区・小川原湖・六ヶ所村・東通村。貧栄養の湿地帯に生育し、環境変化に敏感である。

［生存に対する脅威と保存対策］　最近、五所川原市と野辺地町で確認されたが、生育個体は少なく自然消滅も心配される。環境改善などの保護対策が必要である。

［特記事項］　日本固有種。　**（木村啓）**

被子植物キク目　キキョウ科 **B**

和名　キキョウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Platycodon grandiflorum* (Jacq.) A.DC.

［形態的特徴］　日当たりのよい草原に生える多年草。太い根茎が地に深く入る。茎は高さ50～100cm。葉は互生し、長卵形から広披針形。花は茎の先に数個つき、青紫色、まれに白色、径４～５cm。雄しべ先熟の代表的な植物で、雄しべが熟して倒れてから、雌しべの柱頭が５裂して開く。花期８～９月。

［選定理由］　最近では残された草地も外来種の侵出などにより自然度が低下し、まれな植物となっている。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州・沖縄、朝鮮・中国・ウスリーに分布する。県内では全域に産する。かつてはオミナエシなどと共に初秋の草原を彩ったが、草地の減少により1960年代頃から急激に影を潜めてしまった。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び放棄による環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　ミツガシワ科 **B**

和名　アサザ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Nymphoides peltata* (S.G.Gmel.) Kuntze

［形態的特徴］　湖沼やため池、河川の流れがよどむ場所、水路に生育する多年生の浮葉植物。地下茎を伸ばして生長する。葉は水面に浮かびヒツジグサに似て盾形、縁に浅い波状の鋸歯がある。黄色い花を咲かせる。花期は６～９月。

［選定理由］　開発や水質汚染で激減している。

［分布と生態の概要］　細井（2010）は「国内では北海道石狩を北限として本州・四国・九州に分布しているが、近年はまれになってきた。国外では北半球に広く分布する。県内では東津軽郡、西津軽郡にも知られていたが、東津軽郡では見当たらなくなったし、西津軽郡でもきわめてまれである。小川原湖はまだ目につくが少ない」と記している。近年、石戸谷（2017, 私信）はつがる市で確認している。

［生存に対する脅威と保存対策］　池沼や水路の護岸工事や水質汚染、さらに農薬に弱いため、現状を把握するための計画的なモニタリング調査を継続しつつ、随時、見直しと修正をしながら管理することが必要である。 **（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　オニオトコヨモギ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Artemisia congesta* Kitam.

［形態的特徴］　海岸岩石地に生えて、ハマオトコヨモギやオトコヨモギに似るが、全体は強壮であり、頭花も大きい。葉の裂片の切れ込みには個体差がある。

［選定理由］　基準産地は大間町弁天島である。分布域は下北半島の大間町・佐井村・道南。

［分布と生態の概要］　本種は上述のように、国内でも限られた分布域に産する固有種で、海岸の岩石地に生えるが、津軽半島からは見つかっていない（細井, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。

［特記事項］　細井（2010）は「昭和９年（1934）に村井三郎が田代善太郎を案内して大間町の弁天島に渡って採集した標本が基となった植物で、多分にハマオトコヨモギから分化した種のように思われる」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　アサギリソウ **環境省：該当なし**
学名　*Artemisia schmidtiana* Maxim.

［形態的特徴］　草丈15～50㎝の多年草。全体が銀白色の絹毛で被われている。枝は多数に分かれ、花の重みで垂れ下がっている。茎葉は互生して２回羽状に全裂し、裂片は細くて１㎜ほどの幅。頭花は多数総状円錐花序につき、頭花には舌状花は無く筒状花ばかりである。

［選定理由］　県内分布は、城ヶ倉と追良瀬川と津軽半島であるが、生育株は極めて少ない。自生株は限られ、減少傾向にある。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・サハリン・千島列島南部。日本分布は北海道・本州の東北地方と北陸地方。本県分布は青森市城ヶ倉渓谷・深浦町追良瀬川上流など。深山渓谷の岩場などの厳しい環境を生育場所としている。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生地は、何れも河川上流の急斜面で、崩落による消失が認められる。生育地の保護対策が望まれる。

［特記事項］　和名は、草姿と色彩が朝霧状況を思わせることによる。 **（木村啓）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　クモマニガナ **環境省：該当なし**
学名　*Ixeridium dentatum* (Thunb.) Tzvelev subsp. *kimuranum* (Kitam.) J.H.Pak et Kawano

［形態的特徴］　亜高山帯から高山帯に生える多年草。高さ７～35㎝。根生葉は楕円形で幅１～2.5㎝。
［選定理由］　八甲田山大岳が基準産地の希産種である。
［分布と生態の概要］　北海道・本州に分布する。細井（2010）は「県内では八甲田山井戸岳・赤倉岳の噴火口の石礫地帯によく見られ、他に下北半島の釜臥山・朝比奈岳にもあるのに岩木山や白神山地にはない」と記している。須藤（2018, 私信）は八甲田山の大岳で確認した。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然災害などの環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。
［特記事項］　細井（2010）は「白花品シロバナクモマニガナ form. *albescens* Kitam.もまれに見られ、基準産地は富山県立山である」と記している。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　タカサゴソウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Ixeris chinensis* (Thunb.) Nakai subsp. *strigosa* (H.Lév.et Van.) Kitam.

［形態的特徴］　日当たりのよい草地に生える多年草。茎は高さ20～40㎝。根生葉が多く、葉縁は羽状に裂けるものから全縁まで変化がある。茎葉は少ない。花は淡紫色を帯びた白色、径２～2.5㎝、小花は23～27個（よく似たシロバナニガナは８～11個）。花期６～７月。
［選定理由］　かつて馬の放牧が行われていた頃の牧野や採草地にやや普通にみられたが、1960年代頃から草地の減少と自然度の低下により、急に影を潜めてしまった。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州・朝鮮に分布する。県内では全域に産したが、今はごくまれである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）　**（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　ウスユキソウ **環境省：該当なし**
学名　*Leontopodium japonicum* Miq.

［形態的特徴］　山地から亜高山の岩場や礫地に生える多年草。茎は高さ20～50㎝。根生葉は花時にない。茎葉は披針形から狭楕円形、裏面に白綿毛がある。茎頂に数本の枝を出し、中心部の枝に雄性頭花、周辺部に雌性頭花をつける。その下の苞葉は白綿毛をかぶり目立つ。花期７～８月。
［選定理由］　産地・個体数が少なく、自然災害等により失なわれる危険性がある。
［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、中国に分布する。県内では八甲田山・白神山地に希産する。沢沿いの雪崩斜面の中程の岩石地に生育する。
［生存に対する脅威と保存対策］　園芸採取及び自然災害などの環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　ムツトウヒレン **環境省：該当なし**
学名　*Saussurea hosoiana* Kadota

［形態的特徴］　海岸草原に生育する茎の高さ30～40㎝の多年草。花期は９月。花期にも根生葉が生存する。風の強い海岸に生えるため葉が革質で光沢がある。茎は良く分枝して花序を多数つける。最上部には３～８個の頭花が集合している。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　本県の六ヶ所村泊物見崎のクロマツ林床に生育する。このクロマツ林は高さ５ｍほどで低木層を欠き、海からの強風をつよく受ける風衝地の環境である。また六ヶ所村泊中山崎・東通村尻屋に産する。
［特記事項］　門田裕一により2008年新種として発表された。　**（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **B**

和名　ハチノヘトウヒレン **環境省：該当なし**
学名　*Saussurea neichiana* Kadota

［形態的特徴］　海岸草原に生育する茎の高さ40～80㎝の多年草。花期は９月。他のトウヒレンから、総苞片は８列、総苞外片は長卵形で先端は鋭形となり尾状に長く伸長しない、茎には良く発達した翼があり鋸歯縁となることがある、また葉が革質となるなどの特徴で区別される。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　本県の八戸市周辺の海岸草原に生育する。鮫町小舟渡平～種差～金浜に分布する。
［特記事項］　門田裕一により2008年新種として発表された。　**（須藤智道）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **B**

和名　リンネソウ **環境省：該当なし**
学名　*Linnaea borealis* L.

［形態的特徴］　常緑小低木で、茎は長く地を這い、地下茎により個体群を維持していることが多いといわれる。長さ５～10㎝の花茎には腺毛があり、先端で二股に分かれ、淡紅色の花を下向きに２個開く。花冠は長さは約１㎝の漏斗状鐘形で先は５裂する。花期は７～８月。
［選定理由］　産地が限られ個体数が少ない。
［分布と生態の概要］　北海道・本州（中部以北）、北半球に分布する。亜高山帯から高山帯のハイマツ林下などに生える。県内では八甲田山の一部に産する（細井, 2010；須藤, 2018, 私信）。
［特記事項］　園芸採取及び環境の変化に注意するとともに、自然遷移を注意深く見守る。　**（齋藤信夫）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **B**

和名　ウコンウツギ **環境省：該当なし**
学名　*Macrodiervilla middendorffiana* (Carrière) Nakai

［形態的特徴］　樹高１ｍほどの落葉低木。葉は対生し、長楕円形で長さ５～10㎝、幅４～５㎝、鋭頭楔脚で、脈上に毛があり、柄は短い。花は、淡黄色のロート状唇形花冠で、上唇は３深裂、下唇は２深裂する。花筒内面の下部に橙色網紋がありよく目立つ。雄蕊５本で、花糸下部に毛が多い。
［選定理由］　県内分布は岩木山と弘前市久渡寺山であるが、岩木山では増加傾向は全く無く、久渡寺山では、近年の存在確認が出来ていない。
［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・千島列島・サハリン・オホーツク・アムール。日本分布は北海道・本州（東北地方）。本県分布は岩木山九合目風穴付近。一般的には、高山帯の岩場窪地などに群落を形成して生育しているのであるが、本県の場合は小塊群である。
［生存に対する脅威と保存対策］　岩木山での生育状況は厳しく、生育地点の崩落などの環境変化で絶滅も心配される。保全対策が必要である。
［特記事項］　県内他の高山帯では見られない岩木山の象徴植物の１つである。　**（木村啓）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **B**

和名　カノコソウ　**環境省：該当なし**
学名　*Valeriana fauriei* Briq.

［形態的特徴］　草丈40～80㎝の多年草。細長い地下茎を横走させ、節から太い根を多数出す。茎は直立し羽状葉を対生につけ、上部に散房花序の淡紅色花を密につける。花形は筒状で先端が５深裂し、雄蕊３本が花外に飛び出し、雌蕊は１本で先端が３裂している。雄蕊先熟なので、雄蕊の葯が出終わってから雌蕊が伸びてくる。果実が熟すと白色羽根状の冠毛が伸びてくる。

［選定理由］　確認している自生地４か所の継続調査をしているが、減少が続いているためランクをＣからＢにした。また、自生地の植生遷移が進み、生育範囲が狭まっている。

［分布と生態の概要］　世界的分布は日本・朝鮮半島・中国東北部・サハリン。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は竜飛崎・算用師峠・津軽半島青岩草原・尻屋崎草原。海岸に面した草原に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　自生地点の１か所は県道端で、道路拡張などにより、消滅も心配されるので留意が必要である。

［特記事項］　根が精神安定剤としての効用あるので採取される心配がある。　**（木村啓）**

被子植物マツムシソウ目　スイカズラ科 **B**

和名　ツルカノコソウ　**環境省：該当なし**
学名　*Valeriana flaccidissima* Maxim.

［形態的特徴］　林下の湿り気のある場所に生える多年草。全体軟弱で、茎は高さ20～50㎝。花後細長い走出枝を伸ばして新苗をつくる。葉は対生し、羽状に全裂する。花は散房花序につき、花冠は小さく２㎜内外、白色から淡紅色。花期５月。そう果に羽状の冠毛がある。

［選定理由］　人里にみられる植物で、開発等により次第に減少している。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州に分布する。県内では太平洋側南部に産し、北限である。八戸市新井田川流域にしばしば小群がみられる。水流と風散布に関係し、流域によって量的な差がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で五戸町又重・八戸市是川・南郷区島守巻での生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物セリ目　セリ科 **B**

和名　ハナビゼリ　**環境省：該当なし**
学名　*Angelica inaequalis* Maxim.

［形態的特徴］　山地の谷間に生える多年草。茎は高さ60～80㎝。葉は２、３回３出羽状、やや薄く、小葉は粗い鋭鋸歯がある。散形花序の大花柄は不同長。花弁は暗紫色を帯びる。花期９月。果実は広楕円形で著しい翼がある。

［選定理由］　産地・個体数が少なく、ダム建設により消滅した所もある。流域には採石場が多く、残された生育地にも進出する危険性がある。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州に分布する。日本固有。県内では八戸市の新井田川流域に数か所産する。北限である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）

今回の調査で八戸市南郷区島守巻で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目　ミズニラ科 **C**

和名　ヒメミズニラ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Isoetes asiatica* (Makino) Makino

山地から高地の池沼の底に生育する小型の夏緑性シダ植物。塊茎は径0.5～２㎝、一条の溝があって浅く２分している（ミズニラは３分）。葉は単葉で束生する。胞子嚢は葉のつけ根が白色に膨らんだ部分につく。

北海道・本州（中部以北）、ロシア（極東）・南千島に分布する。県内では東通村尻屋崎・八甲田山系・深浦町十二湖に産するが、個体数は少ない。

貧栄養の水中に生育する植物なので、開発や立ち入りによる水質悪化、自然災害や道路工事による土砂流入等に注意する必要がある。　**（須藤智道）**

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目　ミズニラ科 **C**

和名　ミズニラ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Isoetes japonica* A.Braun

夏緑性で鮮緑色の柔かい沈水性または抽水性の多年生のシダ植物である。細井（2010）は「県内での採集記録は２、３にとどまっているが、分布域はもっと広いと思われる。国内の分布は北海道（胆振）、本州・四国・九州。沼、池、川の底やまれに湿地にも生じる。生育地の埋め立てや生活排水の流入等により急激に減少した」と記している。　**（齋藤信夫）**

ヒカゲノカズラ類ミズニラ目　イワヒバ科 **C**

和名　イワヒバ　**環境省：該当なし**
学名　*Selaginella tamariscina* (P.Beauv.) Spring

山地の岩上に生育する常緑性シダ植物。根がからみあって仮幹をつくり、葉身状の枝を放射状に何十枚もつける。胞子嚢穂は小枝の先につける。乾燥に強く、乾燥してくると内側に巻き込み、湿度が上がると復元する。岩上に生育し、ヒノキの葉に似た分枝の形状によりイワヒバと名付けられた。

日本（全域）、ロシア（極東）・朝鮮・中国・台湾・インド（北部）・東南アジアに分布する。県内では白神山地・八甲田山系等に点在する。

江戸時代から観葉植物として栽培され、多くの園芸品種がある。県内では産地・個体数共少ないので、今後園芸採取の防止が必要である。　**（須藤智道）**

大葉シダ植物ウラボシ目　メシダ科 **C**

和名　コウライイヌワラビ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Deparia coreana* (Christ) M.Kato

葉身50㎝前後の中型の夏緑性シダ植物。オオメシダに似ているが、葉は小さく、羽片は狭く、葉柄や中軸も細い。胞子嚢群は円形から鉤形で小羽片の中肋と辺縁の中間からやや中肋寄りにつく。

高麗（朝鮮）で発見され、イヌワラビに似ているのでコウライイヌワラビと名付けられた。

北海道（胆振）・本州（新潟以東）・四国（愛媛）・九州（対馬）、朝鮮・中国に分布する。県内では八戸市・三沢市・十和田市・七戸町・五戸町・おいらせ町・東北町・深浦町などに点在する。いずれの生育地も個体数は少ない。戦前の記録がなく、戦後植林されたスギ林で発見する例が多いことから、最近の暖温帯シダ類の進出と同様に考えられることもあるが、森林の伐採・環境変化により減少傾向にある。　**（須藤智道）**

双子植物コショウ目　ウマノスズクサ科 **C**

和名　ミチノクサイシン　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Aristolochia fauriei* Franch. var. *fauriei*

湿り気のある林下に生える常緑の多年草。茎は地をはい節間が長い。葉は広卵形から腎円形、３cm内外。花は径１～1.5cm。萼筒は短い鐘形。花期４月中旬～５月。類似種のトウゴクサイシン・オクエゾサイシンは、夏緑性で、葉は大きくて卵心形である。

本州（東北地方・新潟・長野）に分布する。県内では低地のハンノキ林下に見出されることが多いが、山地のブナ林下にも産する。

過去の開田から最近の工業用地造成に伴う湿原開発がなければ、広範に分布していたものと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で五所川原市飯詰・鰺ヶ沢町シノブ谷地・むつ市大室平・六ヶ所村市柳沼・平沼・東北町浜台・六戸町金矢・八戸市尻内町で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物オモダカ目　シバナ科 **C**

和名　シバナ（オオシバナ）　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Triglochin asiatica* (Kitag.) A. et D.Löve

塩性湿地に生える多年草。茎は高さ15～50cm。叢生する。総状花序で密に花をつける。果実は楕円形で、長さ３～５mm。類似種ホソバノシバナは、果実が線形で、長さ約９mm。

北海道・本州（東北地方）、北半球の温帯に広く分布する。県内では全域の海岸に産する。太平洋側の尾駮沼・鷹架沼・高瀬川河口部に群生地がある。平坦な砂泥地や岩間の砂礫地で時折海水に浸る辺りに生育する。

海岸部の開発が進み減少している。現状ではまだ危機感は薄いが、今後の開発、護岸工事等により情勢は変わってくる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で六ヶ所村尾駮沼・鷹架沼・高瀬川河口・八戸市鮫町小舟渡平・階上町榊浜で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **C**

和名　エビネ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Calanthe discolor* Lindl.

草丈30～40cmの多年草。葉は長楕円形で束生し、長さ20cmほど。花は直立した花柄の上部に10個ほど着き、淡紫色をしている。地下茎は連球状である。県内各地のスギ林床に多く見られる。

近年の実地調査で、各地の林地に普通に見られるようになっている。以前のように、掘り取られることは殆ど無くなっていて、年々増加傾向にありＢからＣへのランク変更が適当である。

県内各地の植物調査でスギ林に入ると、必ずと言っていいほど確認している。以前に見られた、掘り取り形跡も無くなって、生育環境が良好に保たれている。

世界的分布は日本・朝鮮半島。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は全域。

（木村啓）

被子植物キジカクシ目　ラン科 **C**

和名　ハクウンラン　**環境省：該当なし**
学名　*Kuhlhasseltia nakaiana* (F.Maek.) Ormerod

ブナ林や特にヒバ（ヒノキアスナロ）林またはブナ・ヒバ混交林に生える。高さ５～15cmで茎先に白色の花を１～７個つける。花期は７～８月。県内各地の林内でみられるが、数は減少しており、将来絶滅が予想される。細井（2010）は「オオハクウンランとハクウンランを同一種とする人と、オオハクウンランの染色体がｎ＝20、ハクウンランの染色体がｎ＝13として別種とする人がある」と記している。成田（2016, 私信）は五所川原市・大鰐町・深浦町などの林下で確認している。

（齋藤信夫）

被子植物キジカクシ目　ススキノキ科 **C**

和名　ノカンゾウ　**環境省：該当なし**
学名　*Hemerocallis fulva* L. var. *disticha* (Donn ex Ker Gawl.) M.Hotta

葉は扁平であって、下方はやや内折し、長さ50～70㎝。花は橙赤色で長さ12㎝。花期は７～８月。
本州・四国・九州、国外では琉球・台湾・中国に分布する。県内での、記録は極めて少ない。
生育地が住宅地・道路・田・畑になり、生育地が狭くなりつつある。土地、道路の造成に際しては十分注意する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査で五所川原市前田野目・六ヶ所村尾駮で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　ガマ科 **C**

和名　ミクリ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sparganium erectum* L.

草丈50～100㎝で池や沼や溝に生える多年草。根茎は短く走出枝を出し、葉は叢生し茎よりも長く軟らかく線形で１本の稜がある。夏に葉の間から茎を直立させ、上部が分枝して花穂となる。花後には集合果球となり緑色の突起が多い。
生育地である水辺や溝がコンクリートなどで改良整備され、個体数が急激に減少している。整備にあたっては、水底や側面に土壌が残るなどの配慮した工法が必要である。
世界的分布は日本・アジア・ヨーロッパ・北アフリカ。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は西津軽郡・北津軽郡・東津軽郡・南津軽郡・中津軽郡・上北郡・三戸郡・下北郡。
（木村啓）

被子植物イネ目　ガマ科 **C**

和名　ナガエミクリ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sparganium japonicum* Rothert

茎は直立し、高さ40～70㎝。花序は単純で苞は通常花序より長い。雌性頭花は３～４個、下方の１～２個は多くは有梗、果時は径1.5～２㎝、５～10個の雄性頭花は互にやや離れてつく。
埋め立てなどで生育地が少なくなり、県内での絶滅が心配される。
本州・四国・九州の沼畔、池溝にはえる。朝鮮に分布する。
生育地の環境を変えぬよう注意する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査でむつ市田名部土手内・十和田市向切田で生育が確認できた。
（須藤智道）

被子植物イネ目　イグサ科 **C**

和名　セキショウイ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Juncus covillei* Piper

湿地に生える多年草。地下に長い匐枝がある。茎は高さ20～40㎝。葉は扁平でイネ科状、長さ10～30㎝、幅２～３㎜。頭花は３、４個、花被片は長さ3.5～４㎜。果実は花被片よりやや長く、楕円形で凹頭。
北海道・本州（青森・岩手）、千島・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では太平洋側の海岸部およびむつ湾東岸に点在し、六ヶ所村高瀬川河口部に小群がみられる。日当たりのよいやや砂質の湿地に生育する。原子力関連の開発により失われた所もあり、開発や植生遷移の進行により減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で東通村尻屋崎で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **C**

和名　エゾサワスゲ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carex viridula* Michx.

湿地に生える多年草。全体やや小型で硬質。茎は叢生し、高さ10～30㎝。匐枝はない。葉は直立し、幅1.5～2.5㎜。小穂は直立。最下の苞は葉状で、長くて開出し、短鞘がある。

北海道・本州（中部以北）、千島・サハリン・カムチャツカ・北アメリカに分布する。県内では太平洋側の三沢市から下北半島まで点在し、むつ湾岸にも産する。海岸部の日当たりの砂質湿地に生育することが多い。

原子力関連の湿原開発および遷移の進行により減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で東通村尻屋崎・横浜町吹越で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物イネ目　カヤツリグサ科 **C**

和名　ミチノクホタルイ **環境省：該当なし**
学名　*Schoenoplectus orthorhizomatus* (Kats.Arai et Miyam.) Hayas. et H.Ohashi

低山地から低地の湿地に生えているミヤマホタルイに似た種類で、地下茎が発達せず株立ちとなり、花序のところで針状苞が曲折する。

近年識別された種で、従来ミヤマホタルイと混同されていた。

北海道と本州北部に分布し、県内各地に分布しているが、調査が十分でないために詳しいことは解っていない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（細井, 2010）を引用）今回の調査でむつ市田名部赤川・青森市田代平・新郷村迷ケ岱で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **C**

和名　ヒメキンポウゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　Halerpestes *kawakamii* (Makino) Tamura

塩性湿地に生える多年草。小型で高さ５～12㎝。細長い匐枝を出して増える。花は径約６㎜。花期６～８月。

日本の特産種で、本州の太平洋側は青森県から千葉県（最近消息不明といわれる）まで、日本海側は秋田県まで分布する。県内では太平洋側に多く、尾駮沼流出部と高瀬川河口部に群生地があり、時折海水に浸る平坦な砂泥地に生育する。八戸海岸では岩間の湿地にみられる。

海岸開発・護岸工事・砂採掘および生活排水・産業排水の流入等により減少している。尾駮・高瀬川河口部の群生地は保存を考える必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で六ヶ所村老部川河口・尾駮沼・高瀬川河口・八戸市種差・階上町榊浜で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科 **C**

和名　オオウマノアシガタ **環境省：該当なし**
学名　*Ranunculus grandis* Honda var. *grandis*

湿り気のある林下や草原に生える多年草。ウマノアシガタに似ているが、全体大型で茎は高さ30～100㎝。地下に匐枝を出すのが特徴である。花期６月。

本州の岩手県と青森県だけに分布する北上山系固有種である（菊地, 1967）。県内では太平洋側南東部の北上山系北部に相当する地域に点在し、三沢市八幡が北限である。海岸草原や山間の流れのほとりなどに小群でみられる。

人里で発見されることがあり、環境適応性もあると考えられる。開発に合わなければ保存可能であるが、ウマノアシガタと混同しないよう注意が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で田子町堅田・南部町相内・三沢市八幡・八戸市南郷区島守巻ノ下・鮫町大須賀で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ユキノシタ目　スグリ科 **C**

和名　ヤシャビシャク **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ribes ambiguum* Maxim.

樹高30～50㎝の落葉低木でブナやミズナラの老木樹上に根をおろしている。葉は円腎臓形で長い柄がある。雌雄異株で、雌株は腺毛密生の球形果実をつける。

生育環境となる自然度の高い落葉樹林が減少し、それに伴って本種の姿が少なくなっている。本種が着生する老木が少なくなって、本種の絶滅が心配される。

自然度の高い落葉樹林の伐採が進み、同時に本種の着生木も少なくなっている。本種を津軽ではラショウと呼び、盆栽などに育て珍重している。

世界的分布は日本・中国。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は全域であるが個体は少ない。

（木村啓）

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **C**

和名　コモチレンゲ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Orostachys malacophylla* (Pall.) Fisch. var. *boehmeri* (Makino) H.Hara

細井（2010）は「青森県の岩石地海岸にはコイワレンゲに混じってよく見かけるし、時には純群落を作ることもある。牧野は“子持ち”の意を数㎝の若い茎を伸ばしてその先端に小苗をつける個体をさしてコモチと命名した。（大橋ら, 2008）」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ユキノシタ目　ベンケイソウ科 **C**

和名　ハコダテキリンソウ **環境省：該当なし**
学名　*Phedimus ellaconbeanus* (Praeger) 't Hart

細井（2010）は「キリンソウに似て秋には花の基部の葉腋に越冬芽をつけて枯れずに残る。鞘果は、キリンソウよりも広がって開裂する。北海道と本県に産し、北海道の函館山には普通に見られ、渡島半島の津軽海峡側と日本海側にも分布している。県内では下北半島と青森市浅虫海岸、夏泊半島にもある。キリンソウと同じ環境に生えるが、ずっと少なく、岩石地が多い。普通のキリンソウと似ているので、本種のみ乱獲される心配はないが、開発に当たっては注意したい」と記している。

（齋藤信夫）

被子植物ユキノシタ目　タコノアシ科 **C**

和名　タコノアシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Penthorum chinense* Pursh

湿地に生える多年草。茎は高さ30～80㎝、淡紅色を帯びることが多い。葉は互生し、狭披針形から長楕円形、細鋸歯がある。花序は放射状に出て多数の花をつける。花期７～８月。

本州・四国・九州、東アジアに広く分布する。県内では全域に産するが局所的である。河原や休耕田に先駆的に出現し、しばしば群生することもあるが、その後植生が変わるにつれて数年で影を潜めてしまう。出現の度合いは河川流域によって異なる。

最近休耕田が増え、出現の機会が巡ってきているが、水田や河岸の整備等により今後は減少に向かう可能性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でつがる市蝦夷ヶ館溜池・八戸市新井田松館・内舟渡馬淵川原・尻内町堤下で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物ユキノシタ目　アリノトウグサ科 **C**

和名　タチモ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Myriophyllum ussuriense* (Regel) Maxim.

沼や湿地に生える雌雄異株の多年生水草。水位に合わせて沈水形・抽水形・陸生形となり、多様な生育形態をみせる。地上では柱状の茎を直立させ10cmほどとなり、線状形～羽状形の葉をつける。茎の下部では対生、上部では輪生となる。水中の茎は50cmほどに伸びる。雄花の花弁は４個で淡紅色、雄蕊８個、雌花は萼筒先端に白毛密生の柱頭を４個つける。

環境変化に敏感で、急激に個体を減少させている生育地もある。湿地の乾燥化や開発を防ぎたい。世界的分布は日本・朝鮮半島・中国。日本分布は北海道・本州・四国・九州。本県分布は分布は県内全域であるが、生育地点は少ない。生育地である沼や湿地の環境悪化が進み個体の減少が見られる。

（木村啓）

被子植物バラ目　バラ科 **C**

和名　ヒロハノカワラサイコ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Potentilla niponica* Th.Wolf

日当たりの良い河原や砂地に生える多年草。萼片・副萼片・花柄・茎などに毛が多い。茎はよく分岐し地面を這うように四方に伸びる。葉は奇数羽状複葉。表面は緑色、裏面は白い綿毛が密生する。花は直径１～1.5cmで黄色。花期は６～８月。かつてはごく普通の野草だったが、採草地の減少、里山の放置などで生育環境が激変したことにより、オキナグサやキキョウなどとともに、身近な野草ではなくなっている。須藤（2017, 私信）は東通村・八戸市・階上町・六ヶ所村で本種を確認している。

（齋藤信夫）

被子植物バラ目　バラ科 **C**

和名　ツルキジムシロ　**環境省：該当なし**
学名　*Potentilla stolonifera* Lehm. ex Ledeb.

日当たりの砂礫質の草地に生える多年草。山野に普通なキジムシロによく似ているが、長い匍匐枝を伸ばして新苗を生じる。花期６月。

北海道・本州・四国・九州、朝鮮（済州島）・千島・サハリン・カムチャツカに分布する。県内では津軽半島に１か所小群で産する。本州産は北方のものより小型とされているが、東北地方では本県だけに分布し、北海道の分布域に入り、大きさはキジムシロとさして変わらない。

産地・個体数が少なく、生育地が岩場下部の草地で、崩壊・埋没等自然災害による危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で外ヶ浜町鐇泊で生育が確認できた。

（須藤智道）

被子植物バラ目　バラ科 **C**

和名　コガネイチゴ　**環境省：該当なし**
学名　*Rubus pedatus* Sm.

亜高山帯から高山帯の針葉樹林下に生える多年草。茎は地上を這い５～10cmの花茎を立てる。小葉は３～５裂し、鈍頭（類似種ゴヨウイチゴ・ヒメゴヨウイチゴの小葉は鋭尖頭）。県内では南八甲田の横岳のハイマツの下にまれに生えている他には未だに別の産地は知られていない（細井, 2010）。

（齋藤信夫）

被子植物キントラノオ目　トウダイグサ科 **C**

和名　ノウルシ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Euphorbia adenochlora* C.Morren et Decne.

湿地に生える多年草。茎は高さ30～60㎝、傷つけると白い乳液を出し、それにふれるとかぶれる。茎の先に５枚の輪生葉をつけ、散形状に枝を出して杯状花序をつける。鮮やかな黄色で目立つのは苞葉である。腺体は腎形。花期４～５月。果実はイボ状の突起がある。

北海道・本州・九州に分布する。県内では全域に点在し、河岸や湖沼周辺のヨシ湿原に群生することがある。

湿原開発により消滅した所もある。水質悪化などで減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でつがる市森田・むつ市金谷沢・横浜町向平・六ヶ所村高瀬川河口で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物キントラノオ目　トウダイグサ科 **C**

和名　シナノタイゲキ　**環境省：該当なし**
学名　*Euphorbia sinanensis* (Hurus.) T.Kuros. et H.Ohashi

茎は無毛または有毛。果実の突起は半球形。葉裏に毛が多く、子房に毛がない。落葉樹林の林床や林縁に生え、植物体の上部に葉を多くつける。葉は茎の下方では互生、頂部では５枚輪生する。外観はナツトウダイに似ているが苞が小さく、腺体はタカトウダイに似る。県内での分布は三八地方・十和田市・六ヶ所村の太平洋側。黒沢（1994）はシナノタイゲキとタカトウダイの種分化について述べている。まだ十分調査されていないが本州中北部に希産する。落葉樹林の伐採に十分留意する必要がある。　**（齋藤信夫）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **C**

和名　アリアケスミレ　**環境省：該当なし**
学名　*Viola betonicifolia* Sm. var. *albescens* (Nakai) F.Maek. et T.Hashim.

地上茎が無いスミレ属でシロスミレに酷似するので要注意。本県が北限の植物。

近年の継続調査で、津軽地方各地で多数の株が確認されるようになった。特に、つがる市森田地区の湖沼端には数千株の大群落を形成している。年を追う毎に、新しい生育地点確認と株数が多くなっているので、ＢからＣへのランク変更が適当と考えた。

生育地は、適度に攪乱された低湿潤地であるが、この条件の場所が多く見られるようになったので、青森市浪岡地区吉野田湧水池・つがる市森田地区狄ヶ館溜池・つがる市森田地区新小戸六ダム・つがる市平滝沼地区など、各地で記録されるようになった。　**（木村啓）**

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **C**

和名　イソスミレ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Viola grayi* Franch. et Sav.

草丈10㎝ほどの多年草。地下茎は木化し太くて硬く、砂中を長く這っている。茎はそう生し、円心臓形で厚く光沢のある葉をつける。花は淡紫色で距は白色、側弁は無毛である。

県産スミレ属は81種が記録されているが、唯一海岸砂地に適応した種である。県内各海岸の砂地に群落を形成して見られるが、生育環境は厳しい。砂地の移動や海辺の護岸などで姿を消している状況もある。生育している海岸砂地の保存が必要。

世界的分布は日本だけ。日本分布は北海道西南部・本州日本海側青森県～鳥取県・本州太平洋側八戸。本県分布は津軽西海岸・津軽半島小泊海岸・陸奥湾野辺地海岸・尻屋海岸。日本固有種。

（木村啓）

被子植物キントラノオ目　スミレ科 **C**

和名　ゲンジスミレ　**環境省：該当なし**
学名　*Viola variegata* Fisch. ex DC. var. *nipponica* Makino

明るい林下に生える多年草。地上茎はない。葉は広卵心形。花は淡紅紫白色。花期４月下旬～５月上旬。和名は全体紫色を帯びることから、紫式部と源氏物語にかけたものといわれる。基本種フイリゲンジスミレ（中国原産）は観賞用として栽培されている。

本州（北中部・岡山）・四国（愛媛）に隔離分布する。県内では太平洋側南部の丘陵地に点在し、岩手県北部と１つの分布域をなしている。落葉広葉樹林のやや乾燥した場所にみられる。

各産地とも個体数は少なく、落葉広葉樹林伐採・スギ植林地化などにより減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市櫛引・階上町平内で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物キントラノオ目　オトギリソウ科 **C**

和名　エゾオトギリ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Hypericum yezoense* Maxim.

日当たりの岩場に生える多年草。茎は高さ10～30㎝、２条の隆起線があり、その線上に黒点が並ぶことで他のオトギリソウ類と区別できる。葉は長楕円形で、明点が多く縁に黒点がある。花弁には明点と明線があり、縁に黒点がある。花期６～７月。

北海道・本州（北部）、千島・サハリンに分布する。県内では全域の岩場に点在する。

各産地共個体数は少ない。他のオトギリソウ類と混同されていることもあり、その消長ははっきりしない。採石場開発・自然災害による減少の危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で佐井村縫道石山・八戸市南郷区島守で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物フウロソウ目　フウロソウ科 **C**

和名　チシマフウロ　**環境省：該当なし**
学名　*Geranium erianthum* DC.

草丈30㎝ほどの多年草。茎や葉柄に下向きの圧毛が散生し、萼片には開出毛が密生するが腺毛は少ない。花は青紫色の５弁で、花弁の基部付近に開出毛がある。

本県分布は八甲田山系と白神山地の高山帯と津軽半島の高地草原であるが増加する傾向にはない。高山草地の環境変化により群落が貧弱になっている。特に、津軽半島の生育地では岩礫の崩落が続き、確実に少なくなっている。保存対策が必要である。

世界的分布は日本・シベリア東部・北アメリカ北部。日本分布は北海道・本州北部。本県分布は八甲田山系・白神山地の高山帯・津軽半島の高地草原。**（木村啓）**

被子植物アブラナ目　アブラナ科 **C**

和名　ハクサンハタザオ　**環境省：該当なし**
学名　*Arabidopsis halleri* (L.) O'Kane et Al-Shehbaz subsp. *gemmifera* (Matsum.) O'Kane et Al-Shehbaz var. *senanensis* (Matsum.) Yonek.

山地に生える多年草。茎は株状で高さ10～30㎝、花が終るころ倒伏して新苗を出す。根出葉は頭大羽状に分裂する。花期５～６月。角果はじゅず状にくびれる。

北海道・本州・四国（剣山）・九州（宮崎）に分布。県内では鰺ヶ沢町・深浦町・東通村に産する。本州では低地から亜高山帯まで広くみられるといわれるが、北部の本県ではまれである。やや日当たりの湿った場所に生える。よく似たミヤマハタザオはやや乾燥した所に生え、茎は倒伏せず、角果は棒状である。

産地・個体数が少なく、開発・自然災害により減少の危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で深浦町追良瀬川上流の岩場で生息が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物アブラナ目　アブラナ科 **C**

和名　オオユリワサビ **環境省：該当なし**
学名　*Eutrema okinosimense* Taken.

細井（2010）は「青森県で通称ユリワサビと呼ばれて食べられてきた植物は夏になると葉が全部枯れ、地下に残った葉柄基部が肥厚してユリの鱗茎状になる。秋に新葉を出して越冬し、ワサビと同じ４～５月に開花する。ところが、本種は本来のユリワサビとは異なり、福岡県の沖ノ島から竹内（1935）によってオオユリワサビとして発表されたものと同じであることが判明した。その後全国的に分布することが分かってきた。青森県にも点在するが、開発等により減少傾向にある（鳴橋ら, 2000）」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　タデ科 **C**

和名　ノダイオウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Rumex longifolius* DC.

山地や低山、河原や原野などに生える多年草。茎は直立し１～２ｍほどになる。葉は長卵状楕円形で幅は狭い。細井（2010）は「市販の図鑑や参考図書には葉裏脈上も無毛としているが、県内産を含む本州北部のものは葉裏脈上に短毛状突起を生ずる。果実を取りまく花被の中央部に瘤はなく全縁である。北半球に広く分布し、国内では北海道・本州、四国は高知県のみ。県内では低山地の沢沿いに分布している。葉の大きさや幅に変化があり、果穂がないとマダイオウと区別できない。県内ではところによっては希産ではないが、よく調べられていない。移植は簡単である」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ　ナデシコ科 **C**

和名　タチハコベ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Arenaria trinervia* L.

山地の沢沿いに生える１～２年草。花弁は萼より短く、一見花が終わったハコベのように見える。葉はやや３脈が目立ち、同属のオオヤマフスマに似ているが、オオヤマフスマの花弁は萼より長いので区別される。花期６月。

北海道・本州・四国・九州、北半球の温帯に分布する。県内では太平洋側に偏った分布を示し、南部の新井田川流域に産地が多い。通常岩陰などに生えるが、河畔林の砂質地にみられることもある。

目立たない植物であり、産地・個体数が少なく、開発・自然災害等の危険性があるので、注意を要する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で十和田市奥入瀬、南部町高屋敷、八戸市南郷区島守巻ノ下・南郷区不習・南郷区古里・松館蟹沢、階上町金山沢で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **C**

和名　アオモリミミナグサ **環境省：該当なし**
学名　*Cerastium arvense* L. subsp. *strictum* Gaudin var. *mitsumorense* (Miyabe et Tatew.) S.Akiyama

細井（2010）は「山地の岩石地に生じる。花茎基部に葉束がよく発達する。葉は狭長で無毛であるが花は大きくオオバナノミミナグサと似ている。県内では生育確認地が１か所よりなく、希産である。セイヨウミミナグサの日本固有の変種で、函館の三森山からミツモリミミナグサ、渡島の太平山からヒロハミツモリミミナグサとして発表されたものと同じで区別の要がないとされた。しかし、太平山の一部で観察した株とはかなり差があるので、同一に扱うことには抵抗を感じる」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物ナデシコ目　ナデシコ科 **C**

和名　ナガバツメクサ　**環境省：該当なし**
学名　*Stellaria longifolia* Muhl. ex Willd.

湿地に生える多年草。茎は細く、高さ20～40㎝、４稜形で、稜上に粒状の細突起がある。葉は広線形で、長さ1.5～2.5㎝。花弁は萼より長く、２深裂する。花期５月下旬～６月。

北海道・本州（青森）、北半球の温帯北部に分布する。県内では太平洋側の六ヶ所村市柳沼・三沢市姉沼・小川原湖および旧仏沼周辺のハンノキ - ミズバショウ群落中にみられる。

各産地とも小面積で個体数が少なく、植生遷移・水位の変化により減少傾向にあり、湿原開発等の危険性もある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で三沢市新堂湿地で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物ツツジ目　サクラソウ科 **C**

和名　ハイハマボッス　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Samolus parviflorus* Raf.

草丈10～20㎝の多年草。茎は細く斜めに立ち、葉は広楕円形で光沢があり、先端は円く、基部は細まって柄に流れ、全縁で、互生している。総状花序に10～20個の合弁白色花をまばらにつける。花は小さく径２～３㎜で、１～２㎝の花柄を持ち途中に１個の小苞がある。

県内分布は津軽・下北が中心であるが生育地点は少ない。平地や低山の湿生地に見られるが、個体数が少なく、増加傾向にはない。目に着きにくい小形植物なので、生育地を特定して保存指定が望まれる。

世界的分布は日本・北アメリカ。日本分布は北海道・本州。本県分布は津軽の屏風山・五所川原市原子・弘前市高照神社・下北脇野沢など。　**（木村啓）**

被子植物ツツジ目　ツツジ科 **C**

和名　オオウメガサソウ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Chimaphila umbellate* (L.) W.P.C.Barton

海岸近くのやや乾いた林下に生える常緑の多年草。地下茎は長く横走する。茎は高さ10～15㎝。葉は倒披針形、上半に粗い鋸歯がある。花は茎の先に散房状につき、淡紅色。花期７月。

北海道・本州（青森・岩手・茨城）、ヨーロッパ・北アメリカの亜寒帯に分布する。県内では日本海側・むつ湾岸にもみられるが、太平洋側の東通村から三沢市までの海岸クロマツ林下にしばしば群生する。まれに内陸にみられることもある。

クロマツ砂防林の普及に伴って分布を広げてきたが、最近はクロマツの成長に従って林床環境が変わり、陰湿化・競合などで減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でつがる市屏風山・東通村尻屋崎・猿ヶ森・横浜町吹越で生育が確認できた。　**（須藤智道）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **C**

和名　フナバラソウ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Vincetoxicum atratum* (Bunge) C.Morren et Decne.

草原に生える多年草。全体に密に軟毛がある。茎は直立し、高さ30～60㎝。葉は対生し、楕円形から卵形、長さ６～10㎝。上部の葉腋に濃紫褐色の花をやや密につける。花期６月。袋果は広披針形、長さ７～８㎝、和名の船腹草はこの果実の形からきているという。北海道・本州・四国・九州、朝鮮・中国に分布する。県内では全域の海岸草地や林縁に点在する。広く分布するが、個体数の少ない類に入る。山地草原の低木群落への移行・海岸草原のレジャー用地化などで自生地が失われている。　**（齋藤信夫）**

被子植物リンドウ目　キョウチクトウ科 **C**

和名　タチガシワ　**環境省：該当なし**
学名　*Vincetoxicum magnificum* (Nakai) Kitag.

山地の林下に生える多年草。茎は高さ30～60㎝。葉は茎の上部に集まってつき、卵円形、長さ10～15㎝。花は茎頂部に集まってやや密につき、緑褐色。花期５～６月。袋果は披針形で、長さ７～15㎝。

本州の主として太平洋側に分布する。県内では太平洋側南部の馬淵川以東にややまれに産し、北限である。自然度の高い落葉広葉樹林の斜面などに生育し、個体数は少ない。

森林の伐採により生育地が失われている。目立たない植物であるが分布の限られた貴重種である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市白浜・松館蟹沢・階上町階上岳で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物ナス目　ナス科 **C**

和名　オオマルバノホロシ　**環境省：該当なし**
学名　*Solanum megacarpum* Koidz.

湿原など湿り気の多い場所に生える多年草。茎はつる性。葉は卵形から狭卵形、葉身は長さ４～９㎝。集散花序。花は径１～1.5㎝、花冠は紫色で、５深裂し裂片は反り返る。花期７～８月。液果は楕円形で赤熟。

北海道・本州（中部以北）、千島・サハリンに分布する。県内では全域にややまれに産し、湖沼周辺・河畔の低湿地や湿原に見られるが、湿った林下にも生える。

各産地とも個体数は少ない。湿原開発等により生育地が狭められている。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で鶴田町富士見湖・東通村加藤沢沼・六ヶ所村市柳沼・三沢市仏沼・姉沼で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物シソ目　オオバコ科 **C**

和名　ビロードトラノオ　**環境省：該当なし**
学名　*Veronica ovata* Nakai subsp. *kiusiana* (Furumi) Albach var. *villosa* (Furumi) Albach

山地の日当たりの岩場に生える多年草。茎は高さ50～80㎝。葉は３角状披針形で、鋭尖頭・鋭鋸歯があり、両面に毛を密生する。茎頂に長い花序を出し、青紫色の花を蜜につける。花期７月。類似種に毛の少ないエゾルリトラノオ・ヤマルリトラノオ・無毛のエチゴトラノオがある。

本州（中部以北）に分布する。県内では八戸市南郷の岩場に小群でみられる。

産地・個体数が少ない。立ち入りや開発は考えられないが、植生の変化・自然災害等の危険性がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市南郷区島守で生育が確認できた。**（須藤智道）**

被子植物シソ目　シソ科 **C**

和名　テイネニガクサ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Teucrium teinense* Kudo

ツルニガクサに似る。しかし、ツルニガクサの萼には密に腺毛があるが、本種ではまばらに生えるのみ。山地の林下にまれに分布する。北海道と東北地方に分布し、県内では深山に希産するが、ツルニガクサより自然度が高い環境に見られる（細井, 2010）。**（齋藤信夫）**

被子植物シソ目　シソ科 **C**

和名　ハマゴウ **環境省：該当なし**
学名　*Vitex rotundifolia* L.f.

海岸砂地に生える落葉低木で、茎は砂上や砂中を長く這い根を下ろす。枝は四角柱で直立や斜上して広卵形の葉を対生。葉表は緑色、葉裏は軟毛の白色。夏に枝先に円錐花序をだし唇形青紫色花を多数つける。

生育地である海岸砂地が護岸設置などで消失したり狭まったりして個体数が激減している。海岸砂地の計画的な環境保全が必要である。

世界的分布は日本・朝鮮・中国・東南アジア・ポリネシア・オーストラリア。日本分布は本州・四国・九州。本県分布は深浦町風合瀬海岸・平内町夏泊半島大島・中泊町青岩海岸。

本県が北限の植物。江戸時代の紀行家菅江真澄の紀行文に登場する重要な歴史文化植物でもある。

（木村啓）

被子植物シソ目　ハマウツボ科 **C**

和名　ハマウツボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Orobanche coerulescens* Stephan ex Willd.

海岸や川原の砂地に生育する一年草。ヨモギ属、特にカワラヨモギの根に寄生する。茎は黄褐色で太く、直立して高さ10～25㎝、まばらに白軟毛が生える。茎の上部に淡紫色の花を密につける。花期は６月。

北海道～沖縄、中国・朝鮮・シベリア・ヨーロッパ東部に分布する。県内では全域の海岸草原に点在するが個体数は少ない。また近年、海岸草原が減少しているので自生地が失われつつある。

（須藤智道）

被子植物シソ目　シソ科 **C**

和名　イヌタヌキモ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Utricularia australis* R.Br.

貧栄養や腐植栄養の湖沼やため池、側溝などの流れのゆるい小川や低山地の沼に広く分布している、多年生の浮遊植物。細井(2010)は「三木茂が本種を新種 *U.tenuicaulis* Mikiとして発表したときに、Aomori（K.Kita Aug, 1934）の標本を引用している。これにより国内では早くから本種が青森県に分布することが知られていた」と記している。分布は北海道・本州・四国・九州。農薬や家庭排水などによる水質汚濁・低湿地の開発で生育地が激減している。石戸谷（2017, 私信）は弘前市・つがる市・青森市で確認している。Shutohらはつがる市の沼で確認している（Shutoh *et al*., 2019）。また、須藤（2017, 私信）はむつ市で確認している。 **（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **C**

和名　ホロマンノコギリソウ（キタノコギリソウ） **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Achillea alpina* L. subsp. *japonica* (Heim.) Kitam.

海岸の草原などに生える多年草。茎は高さ30～60㎝。葉は羽状に中裂から深裂する。花は茎頂に密な散房状につき、径１～1.5㎝、舌状花は６～８個、白色から淡紅色。花期７～９月。葉の切れ込みや花の大きさ・色など変異がある。よく似たノコギリソウと紛らわしい。

北海道・本州（中部以北）、南千島・サハリンに分布する。県内では全域の海岸および内陸の草地に産するが、ノコギリソウ類は変異が多く分布状況は明らかでない。

草地の減少や外来種との競合で減少は進行している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で深浦町深浦海岸・六ヶ所村尾駮沼・鷹架沼・三沢市仏沼・八戸市鮫町小舟渡平で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **C**

和名　オオバヨモギ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Artemisia koidzumii* Nakai var. *megaphylla* Kitam.

細井（2010）は「ヤマヨモギに似て葉は広く、若い時には葉の表面にクモ毛があって白く見える。頭花は綿毛が多く白くてヤマヨモギより少し大きい。大間町の弁天島が基準産地である。県内では弁天島の他に、大間港に希産し、尻屋にも分布する。母種は北海道産のヒロハウラジロヨモギで、その変種に当たる。北海道にもオオバヨモギに相当するものを立待岬と戸井漁港で確認した。いずれも海岸である」と記している。 **（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科 **C**

和名　ミチノクヤマタバコ **環境省：該当なし**
学名　*Ligularia fauriei* (Franch.) Koidz.

草地に生える多年草。全体粉白色を帯びる。茎は高さ60～150㎝。根生葉の葉身は卵状長楕円形。長さ10～25㎝。葉柄は翼があり、長さ15～17㎝。茎頂に長い総状花序を出す。総苞は筒状で、総苞片は離生。舌状花は２、３個。花期６月。

本州（東北地方・関東北部）に分布する。県内では太平洋側南部の八戸市に産し、北限である。分布の限られた種で、かつて八戸市から階上町までの海岸部に数か所の生育地があったが、現状は２か所ほどしか残っていない。

生育地周辺のオオイタドリや木本類および外来種の進出による競合等の危険性がある。

2009年にクロマツ林間伐により再現した所もあり保存対策の指針になる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で八戸市鮫町小舟渡平・中須賀で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物キク目　キク科 **C**

和名　オオニガナ **環境省：該当なし**
学名　*Nabalus tanakae* Franch. et Sav. ex Y.Tanaka et Ono

湿地に生える多年草。茎は高さ80～120㎝。茎葉は三角状矢羽形に中裂から深裂し、葉柄は長くて翼がある。花は黄白色で、径４㎝内外。花期９～10月。

本州（近畿以北）に分布する。日本固有種。県内では全域に産し、海岸から山間部までの湿地にみられ、北限である。

かつては湿地にやや普通にみられたが、開田ブームで減少し、戦後は牧野・採草地の放置で湿地はハンノキ林に遷移し、開発が加わって生育地が次第に失われてきた。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査でむつ市田名部赤川、東通村尻屋崎・荒沼、おいらせ町イチョウ公園で生育が確認できた。 **（須藤智道）**

被子植物セリ目　セリ科 **C**

和名　ハクサンサイコ **環境省：該当なし**
学名　*Bupleurum nipponicum* Koso-Pol.

草丈50㎝ほどの多年草。葉は互生し長楕円形で茎を抱く。葉表面は淡緑色で裏面は粉白色、縦に走った葉脈が目立つ。茎の頂に複散形花序をつけ、小さい淡黄色の５弁花をつける。県産で同属類似種のホタルサイコ・オオホタルサイコと似るが、小総苞片が大きく５個である。

県内では限られた地域だけに生育し、個体の増加は見られず、むしろ減少傾向にある。生育地全体の保存が必要である。白神山地区域で深浦町の追良瀬川上流にある自生地点を継続観察しているが、個体数は極めて少ない。加えて、自生場所の崩落もあり、姿を見せない年もあった。

世界分布は日本だけ。日本分布は本州北部と中部。本県分布は白神山地・津軽半島。日本固有種。

（木村啓）

被子植物オモダカ目　トチカガミ科　**D**

和名　マルミスブタ
学名　*Blyxa aubertii* Rich.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

水田やため池、水路などに生育する一年生の沈水植物。葉は根生し、線形で、長さ10～30㎝、幅３～９㎜。よく似ているスブタとの区別点は本種の種子には尾状突起が発達しないことである。細井（2010）は「東北地方では希産で本県が北限である。県内では村井（1939）の「スブタ畦溝水田（西郡）」の記録と鈴木（1978）の線画があり、角野（1994）には青森が図示されており、これはフォーリーのAomori 1904.10（KYO）の標本によった。角田充によれば青森市大谷、つがる市牛潟沼周辺にも産す由である。現存地の再確認をし、見つかった水域での水環境保全に充分注意すべきである」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　トチカガミ科　**D**

和名　ヒロハトリゲモ
学名　*Najas chinensis* N.Z.Wang
環境省：該当なし

ため池や水田などに生育する一年生の沈水植物。葉は長さ1.5～３㎝、幅0.3～0.6㎜、ホッスモやイトトリゲモに比べて全体が大きい。種子は長楕円形で長さ2.5～３㎜、表面に四～六角形の大きな網目模様がある。本州・四国・九州・沖縄、アジア東部に分布する。細井（2010）は「県内では八戸市の水田で採集されたもの以外の記録はない」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　トチカガミ科　**D**

和名　オオトリゲモ
学名　*Najas oguraensis* Miki
環境省：該当なし

湖沼・ため池、まれに水路などに生育する沈水植物で、本州・四国・九州に分布する日本固有種である。細井（2010）は「トリゲモとオオトリゲモの区別は難しく、現在は、葯室の数で区別している。オオトリゲモ４室、トリゲモ１室だが、時には不完全なので、たくさん標本を作っておくことが望まれる」と記している。石戸谷（2016, 私信）はつがる市のタテコ沼、作沼、ガシャ沼で確認している。**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　アマモ科　**D**

和名　スゲアマモ
学名　*Zostera caespitosa* Miki
環境省：準絶滅危惧

砂泥の海底に生える沈水植物。地下茎があるがアマモのように横に広がらず株となる。全国的に浅海の砂泥海底が少なくなって生育場が減っている。分布は北海道・本州の海岸。細井（2010）は「県内では各所にあるようだが、海中のことでもあり直接確認しにくい。佐井村・野辺地町・青森市その他の標本が記録されている」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　アマモ科　**D**

和名　タチアマモ
学名　*Zostera caulescens* Miki
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

砂質の浅い海底に生育する多年生の海草。アマモ科の中では最も長くなり、７ｍという報告もある。葉幅は１～1.5㎝でアマモ（３～６㎜）よりも広い。国内では北海道・本州（日本海沿岸、陸奥湾～相模湾）、国外では千島列島、朝鮮半島に分布する。**（齋藤信夫）**

被子植物オモダカ目　カワツルモ科　**D**

和名　ネジリカワツルモ
学名　*Ruppia cirrhosa* (Petagna) Grande
環境省：準絶滅危惧

カワツルモに似るが、受粉後果梗がいちじるしく伸長し、数回らせん状に湾曲する。水草である。葉端が鈍頭～切形。県内では小川原湖の採集記録がある。詳細な分布調査が必要である。**（齋藤信夫）**

被子植物ユリ目　シュロソウ科　**D**

和名　シラオイエンレイソウ
学名　*Trillium* × *hagae* Miyabe et Tatew.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

母親はミヤマエンレイソウで父親はオオバナエンレイソウの自然雑種。このことが、花の形状から伺われる。

一見オオバナエンレイソウを思わせるが、雌蕊と雄蕊を精査すると、ミヤマエンレイソウとオオバナエンレイソウの中間型である。

県内分布報告は僅かに七戸町と南部町だけである。更なる調査を要する。

確認した個体数は少なく、分類形態や生態を調査するためにも保全対策が必要である。

（木村啓）

被子植物キジカクシ目　ラン科　**D**

和名　オオミズトンボ
学名　*Habenaria linearifolia* Maxim.
環境省：絶滅危惧ⅠB類

陽光地の湿原に生育する多年草。花は唇弁以外が白色。花期は８～９月。唇弁は淡緑色十字形で、側裂片は水平または下向き（類似種ミズトンボの側裂片は上向きに反曲）。細井（2010）は「1933年（昭和８年）東京大学・原寛が八甲田より発表した。その後の記録はない。なお、変種のヒメミズトンボが東通村の湿原に知られている」と記している。北海道・本州（北部および関東北部）、朝鮮・中国・ウスリー・アムールに分布する。　**（齋藤信夫）**

被子植物キジカクシ目　ラン科　**D**

和名　シテンクモキリ
学名　*Liparis purpureovittata* Tsutsumi, Yukawa et M.Kato
環境省：該当なし

青森県内では成田・山岸(2018)がはじめて報告した。報告によると生育場所は湿地帯と低木帯との境界付近である。外部形態はクモキリソウに似ているが､唇弁の基部中央に赤紫色の点がある。種小名はそのことを表している。本種の唇弁はクモキリソウのように強くは巻き込まず、萼片・側花弁・花柄子房などが赤紫色を帯びるというが､稀に緑一色の個体もあることから､色だけで同定はできない。北海道～本州､四国から報告される｡分子情報と分類学の統合研究から明らかになった例として紹介される。　**（齋藤信夫）**

被子植物キンポウゲ目　キンポウゲ科　**D**

和名　アカミノルイヨウショウマ
学名　*Actaea erythrocarpa* (Turcz. ex Ledeb.) Fisch. ex Freyn
環境省：該当なし

ルイヨウショウマの果実は黒いが、本種は赤い。分布は北海道と本州北部、樺太・北アジア・欧州。県内では下北と八甲田の記録がある。細井（2010）は「従来岩手・山形県からの記録は間違いらしい。福島県西白河郡旭岳のみは確認されている。下北半島からは確認報告がない」と記している。花期は５～６月。　**（齋藤信夫）**

被子植物ツユクサ目　ミズアオイ科　**D**

和名　ミズアオイ
学名　*Monochoria korsakowii* Regel et Maack
環境省：準絶滅危惧

草丈30㎝ほどの水生１年草。花は青紫色で美しく、葉は卵状心臓形で整っている。

県内各地の水田や水路や池沼に普通に見られ、水田雑草として大量に除去されている。県内各地に普通に分布し生育量も多く、絶滅の心配は感じられないので、ランクをＤに変更して、更に見守りたい。

県内の水田農家では、昔から水田雑草として扱い、手作業で除去しているが、根絶することは無いようだ。　**（木村啓）**

被子植物ユキノシタ目　スグリ科　**D**

和名　ザリコミ
学名　*Ribes maximowiczianum* Kom.
環境省：該当なし

スグリ科の落葉低木で、ブナ林の林床に生育している。都道府県別のＲＤＢでは18都県において指定されている。青森県内ではむつ市からはじめて報告された（むつ市教育委員会, 2016）。立地は１ｍ前後の巨岩が積み重なる岩礫地で、重なる巨岩間には大きな空隙が確認できる。本種はそのような巨岩上に生える蘚苔類に混じって這うように生育する。土壌はほとんどみられない。幹は途中で途切れたりしているが、蘚苔類に接している地這部分は発根が見られる。樹皮は非常にはがれやすい。　**（齋藤信夫）**

被子植物フトモモ目　ミソハギ科　**D**

和名　ミズキカシグサ
学名　*Rotala rosea* (Poir.) C.D.K.Cook
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

水田地帯やその付近の湿地に生え、茎は直立し、葉は狭長である。茎の断面は円形で各葉腋から枝を分ける。よく似たキカシグサは本種よりも小型で、茎が斜上するか這う。本州・四国・九州、朝鮮に分布する。細井（2010）は「県内では十分調べられていない。青森市に生えていたが、近年は見当たらなくなった」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科　**D**

和名　タカサブロウ
学名　*Eclipta thermalis* Bunge.
環境省：該当なし

水田や湿地に生える一年草。茎や葉に剛毛があってざらつく。高さは20～70㎝。舌状花と頭状花があり、花色は白。北海道を除く国内に普通に分布するとされているが、県内では極めて少ない。細井（2010）は「1955年頃に日本海岸の深浦町の防波堤裏の水田湿地で一度だけ採集した。その後は県内で採集された情報もなく、きわめてまれになったものと思われる」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物ナス目　ナス科　**D**

和名　ヤマホロシ
学名　*Solanum japonense* Nakai
環境省：該当なし

林縁などに生えるやや無毛の蔓状の多年草。葉は３角状狭卵形。下部のものは３～５裂する。花は直径１㎝ほどで淡紫色。花期は７月～10月。細井（2010）は「県内では、採集の記録が少ない。生態など不明の点が多い」と記している。**（齋藤信夫）**

被子植物キク目　キク科　**D**

和名　コオニタビラコ
学名　*Lapsanastrum apogonoides* (Maxim.) J.H.Pak et K.Bremer
環境省：該当なし

水田などに生える２年草。春の七草のホトケノザは本種である。本州・四国・九州、朝鮮（済州島）・中国に分布する。本県が北限である。耕起前の水田などで開花するのが見られたが、1970年代から急激に減少し消息不明となっている。米の栽培様式の変化や農薬の使用等が原因と考えられる。舌状花は６～９個。花期４～５月。よく似たヤブタビラコは、花が小さく、舌状花が18～20個と多い。コオニタビラコに代わり進出している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（根市, 2010）を引用）今回の調査で五所川原市で生育が確認できた。**（須藤智道）**

③引用文献

青森県　2003. 青森県史自然編生物. 804pp.

海老原淳　2016. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅰ. 学研, 東京. 475pp.

海老原淳　2017. 日本産シダ植物標準図鑑Ⅱ. 学研, 東京. 507pp.

藤原陸夫・阿部裕紀子　2017. 北東北維管束植物分布図　秋田植生研究会, 秋田. 804pp.

八戸市　2005. 新編八戸市史別編自然編. 535pp.

細井幸兵衛　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 青森県. pp.20-23, pp.25-28, p30, pp.33-35, pp37-38, pp.40-42, pp44-49, pp.52-53, pp.55-58, pp61-64, p.67, pp.69-70, pp.75-76, p79, p82, pp.87-89, p.91-93, pp95-97, p.101, pp.103-105, pp.107-108, pp.111-112, pp115-118.

細井幸兵衛　2018. 新青森県植物目録. 弘前大学白神自然環境研究所. 弘前. XXI + 115 + 40pp.

岩槻邦男　1992. 日本野生植物シダ. 平凡社, 東京. 311pp.

角野康郎　1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京. 179pp.

柿崎敬一・高谷秦三郎・齋藤信夫・太田正文・神　真波　2005. 小川原湖周辺の植物(5). 青森県立郷土館調査研究年報, 29：5-10.

葛西直子　2008. 青森市でマルバノサワトウガラシの群落に遭遇. 月刊津軽植物, 55(11)：6-7.

葛西直子　2017. 行合崎でアナマスミレを確認. 月刊津軽植物, 54(9)：6-7.

木村　啓　1965. ヤマアイの大群落発見. 月刊津軽植物, 2(5)：3-4.

木村　啓　1965. 十二湖でクマガイソウの群を発見. 月刊津軽植物, 2(6)：4.

木村　啓　1966. 十二湖のクマガイソウその後. 月刊津軽植物, 3(8)：5-6.

木村　啓　1966. スズメウリ採集の記. 月刊津軽植物, 3(10)：4-6.

木村　啓　1968. 北限ヤマアイの分布について. 月刊津軽植物, 5(5)：1-6.

木村　啓　1968. 白神山系でオオサクラソウ採集される. 月刊津軽植物, 5(7)：6.

木村　啓　1968. 北限キンランの第三産地を発見. 月刊津軽植物, 5(7)：9.

木村　啓　1968. 写生図のページ（16）キンラン. 月刊津軽植物, 5(7)：10.

木村　啓　1970. 十二湖のクマガイソウ健在. 月刊津軽植物, 7(7)：1-3.

木村　啓　1972. 津軽種里でフジカンゾウの群落発見. 月刊津軽植物, 9(10)：1-3.

木村　啓　1974. サカネラン鰺ヶ沢町で発見さる. 月刊津軽植物, 11(9)：2.

木村　啓　1974. 八甲田山で紅花のヒナザクラを発見. 月刊津軽植物, 11(9)：1.

木村　啓　1974. 津軽半島小泊地区内のオサバグサを見る. 月刊津軽植物, 11(9)：3.

木村　啓　1975. 東京大学植物標本庫のホロムイイチゴ. 月刊津軽植物, 12(5)：5-7.

木村　啓　1975. 青森県でアズマツメクサ発見. 月刊津軽植物, 12(9)：2-3.

木村　啓　1976. 東京大学にあるアズマツメクサの標本. 月刊津軽植物, 13(5)：4.

木村　啓　1976. イトハコベ青森県初発見の記. 月刊津軽植物, 13(8)：2.

木村　啓　1976. 国立科学博物館標本庫のアズマツメクサ. 月刊津軽植物, 13(11)：2.

木村　啓　1977. 国立科学博物館のイトハコベ標本. 月刊津軽植物, 14(4)：3-4.

木村　啓　1977. イトハコベを屏風山の他湿原でも発見. 月刊津軽植物, 14(7)：6.

木村　啓　1977. エゾノウワミズザクラ本州初発見の記. 月刊津軽植物, 14(7)：7.

木村　啓　1978. 北海道大学のエゾノウワミズザクラ標本. 月刊津軽植物, 15(8)：2-4.

木村　啓　1982. 岩木山特産のミチノクコザクラが秋田県田代岳に群生するという. 月刊津軽植物, 19(1)：2-4.

木村　啓　2000. 津軽半島のエゾイヌナズナ絶滅危機. 月刊津軽植物, 37(6)：1.

木村　啓　2000. アギナシが見つかりました, 月刊津軽植物, 37(9)：2.

木村　啓　2001. 白神岳山頂で目にしたのはユキワリソウかユキワリコザクラか. 月刊津軽植物, 38(1)：8.

木村　啓　2001. イイギリを津軽半島で確認. 月刊津軽植物, 38(10)：2-8.

木村　啓　2002. 木造町平滝沼でアリアケスミレ発見. 月刊津軽植物, 39(1)：1-2.

木村　啓　2002. ベニシュスラン東北初発見の記録. 月刊津軽植物, 39(2)：1-3.

木村　啓　2002. 青森県内のエゾノウワミズザクラの生育地点. 月刊津軽植物, 39(6)：1-3.

木村　啓　2002. 森田村でハンゲショウを確認．月刊津軽植物．39(8)：2.
木村　啓　2003. 森田村でハイハマボッス群落発見．月刊津軽植物，40(10)：3-4.
木村　啓　2004. 津軽半島のチシマフウロ健在でした．月刊津軽植物，41(8)：3.
木村　啓　2004. 津軽半島竜飛崎にカノコソウ群落．月刊津軽植物，41(9)：3-4.
木村　啓　2004. 眺望山でハイハマボッス群落確認．月刊津軽植物，41(11)：7.
木村　啓　2005. エゾノウワミズザクラの雪中模索．月刊津軽植物，42(3)：7-8.
木村　啓　2007. アズマツメクサ33年振りに再発見．月刊津軽植物，44(9)：7-8.
木村　啓　2008. ヒヨドリジョウゴの果実観察．月刊津軽植物，45(2)：1-2.
木村　啓　2008. アリアケスミレの大群生を発見．月刊津軽植物，45(8)：1-2.
木村　啓　2008. 新小戸六ダム南面にアリアケスミレの大群生．月刊津軽植物，45(11)：6-8.
木村　啓　2010. クロミノコジマエンレイソウ果実の種子を数えた．月刊津軽植物，47(8)：6.
木村　啓　2011. 津軽屏風山で本州初のハゴロモエゾニワトコ発見．月刊津軽植物，48(11)：1-5.
木村　啓　2012. 深浦町でクロミノコジマエンレイソウ発見．月刊津軽植物，49(6)：4-5.
木村　啓　2012. 梵珠山系原子山でハイハマボッスの開花を確認．月刊津軽植物，49(9)：8.
木村　啓　2013. ハゴロモエゾニワトコが刈られずに残った．月刊津軽植物，50(11)：1-2.
木村　啓　2015. 名久井岳でシラオイエンレイソウ発見．月刊津軽植物，52(7)：1-3.
木村　啓　2015. アオバスゲ東北地方初発見．月刊津軽植物，52(8)：1-3.
木村　啓　2016. コジマエンレイソウの環境激変．月刊津軽植物，53(7)：1.
木村　啓　2016. 五所川原市でムラサキミミカキグサ確認．月刊津軽植物，53(11)：1-2.
木村　啓　2017. 青森県産スミレ属81種．月刊津軽植物，54(4)：2-4.
木村　啓　2018. 吉野田湧水池にアリアケスミレ多数．月刊津軽植物，55(1)：2.
木村　啓　2018. 津軽西海岸のオサバグサ．月刊津軽植物，55(7)：1-2.
小林範士　1975. オニシオガマ岳の湿原で発見．月刊津軽植物，12(1)：7.
黒沢高秀　1994. タカトウダイとシナノタイゲキの種分化．植物研究雑誌，69(1)：1-13.
葛谷　孝　1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(1)．月刊津軽植物，4(5)：6-7.
葛谷　孝　1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(2)．月刊津軽植物，4(6)：1.
葛谷　孝　1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(3)．月刊津軽植物，4(7)：2-3.
葛谷　孝　1967. ミチノクコザクラの歩んだみち(4)．月刊津軽植物，4(8)：4-6.
正木智美（編）　2018. 日本産スゲ属植物分布図集．すげの会，岡山．766pp.
むつ市教育委員会　2016. 釜臥山・障子山の自然調査報告（植物・哺乳動物）観察報告．むつ市文化財調査報告，44：94-98.
長尾キヨ　2004. モエギオクエゾサイシンとサカネラン確認．月刊津軽植物，41(8)：3.
奈良岡隆樹　2002. 板柳町でエゾノウワミズザクラ発見．月刊津軽植物，39(7)：1-2.
成田一哉・山岸洋貴　2018. 青森県におけるシテンクモキリの新産地．青森自然誌研究，23：61-62.
沼田俊三　1989. 青森県のラン．著者自刊，青森．207pp.
岡　武利　2019. ハナワラビ色いろ(3)．日本シダの会会報，4(31)：44-49.
佐藤石夫　2001. 岩崎村黒崎地区で幻の稀産キジノオシダと再会．月刊津軽植物，38(1)：2-3.
佐藤石夫　2001. 深浦町吾妻川のオニシオガマについて．月刊津軽植物，38(9)：2-4.
佐藤石夫　2004. 吾妻川のタカネグンバイの生育環境など．月刊津軽植物，41(4)：4-5.
佐藤石夫　2018. オサバグサの青森県新産地．月刊津軽植物，55(1)：2.
澤田　満　2005. 下北半島の屏風立岩と桑畑山にユキワリソウを確認．月刊津軽植物，42(7)：3-4.
Shutoh, K., T. Yamanouchi, S. Kato, H. Yamagishi, Y. Ueno, S. Hiramatsu, J. Nishihiro & T. Shiga 2019. The aquatic macrophyte flora of a small pond revealing high species richness in the Aomori Prefecture, Japan. Journal of Asia - Pacific Biodiversity, 12：448-458.
鈴木　恒　1977. 木造町にキンラン．月刊津軽植物，14(8)：2.
高田　順　2018. 青森県産ホシクサ属植物－フロラと分類の課題－．東北植物研究会2018年度青森県大会要旨．1p.
米倉浩司・梶田　忠　2003.「BG Plants 和名－学名インデックス」(YList)，http://ylist.info（2019年１月12日確認）.

２）蘚苔類

①概説

コケ植物（蘚苔類）は、セン類（セン植物門）、タイ類（タイ植物門）、ツノゴケ類（ツノゴケ植物門）の３つの門からなる植物群で（嶋村, 2012）、世界に約２万種が知られている。そのうち、日本にはセン類が1270種（Suzuki, 2016）、タイ類625種・ツノゴケ類17種（片桐・古木, 2012）が分布するとされる。

青森県に生育する種類数として柿崎（2010）は、セン類430種、タイ類183種、ツノゴケ類６種を挙げたが、その後の数年間で数が大幅に増えており、今のところセン類約480種、タイ類とツノゴケ類では約210種が把握されている（太田, 2019a）。種数が増えた理由は、もちろんコケ植物相の調査が進んだからであり、例えば神田（2014）は、2011年から古木達郎氏らと行った３か年の奥入瀬渓流での調査で、コケ植物297種を記録し、そのうち県内の初記録種は、セン類だけでも40種以上に及んでいる。つまり、これまではコケ植物の観察者数が少なすぎて、全体像の把握はできていないということだ。コケ植物相の解明が進まない中で、自然環境の悪化は容赦なく進行し、絶滅危惧種の把握はすこぶる困難な作業となっている。

コケ植物にとって最も危機的な生育場所は、他の多くの生物群と同様、水辺の環境である。人々の生活を安全かつ豊かにする治山・治水、あるいは農業における土地改良は、河川や湿地に生育する生物にとっては、生育・棲息環境を狭める脅威となった。コケ植物については、今回絶滅危惧種として扱った36種の内、水辺や湿地に生育するものは15種に及ぶ。カワゴケとクロカワゴケは、湧水から派生する小河川の源流部に生育することが多いが、周囲の環境も含めて生育が保持されているところは極めて少なく、クロカワゴケに至っては県内で確認できる場所はなくなった。カワゴケ科のもう一つの種であるコシノヤバネゴケは、水位が変動するような水辺の樹木基部に生じる種であるが、この数年で複数の新たな産地が見つかり、広い範囲に分布することが確認できたのでランクをＢからＣに変えたが、絶滅の危惧があることことに変わりはない。オオミズゴケ・ササオカゴケ・オオヒモゴケ・ササバゴケ・ヤリノホゴケなど低地の湿地に生育するものは、耕作地や宅地化で消えるほか、それに伴う水位の低下、放置による植生遷移の進行等により、消失したところが多いようだ。その中で、青森市を基準産地とするササオカゴケは、澤田満氏らの探索によって62年ぶりに青森市ほかで見つかったのは明るい話題である。

八甲田山や十和田湖のみで見つかっているハッコウダゴケ・マユハケゴケ・シロシラガゴケ・ホソバゴケ・ホソベリミズゴケ・ケスジヤバネゴケ・トワダツボミゴケ・マルバツボミゴケ・コロンビアミズゼニゴケは、いずれも40年以上前の主に中央からの研究者による記録であり、今後この方面での再確認の作業が必要である。

コマチゴケ・ニセヤハズゴケ・シフネルゴケ・コムチゴケ・カサゴケモドキは、最近の分布調査で新たに記録されたものであり、北限の産地となるものが多い。石灰岩との関連があるカサゴケモドキ、ナガスジハリゴケなどは、他の石灰岩地も調査する必要がある。また、今回情報不足のためＤランクとしたものが８種と多くあり、その実態解明のため、多くの目による継続した調査が望まれる。

（太田正文）

②本文

ツボミゴケ目　ミゾゴケ科　　**A**

和名　ハッコウダゴケ　　**環境省：絶滅危惧Ⅰ類**

学名　*Eremonotus myriocarpus* (Carrington) Lindenb. et Kaal. ex Pearson

［形態的特徴］　茎の長さは0.5～１㎝、茎葉体は緑褐色で鞭糸状である。葉は２裂して小さく、腹葉はない。葉腋際の茎の表皮細胞は他の細胞より著しく大型である。油体は球形（楕円体）で各細胞に２～３個、または散在する数個の油体細胞に大きな１個を含み、ほぼ均質である。

［選定理由］　分布が極めて局限される希少種である。

［分布と生態の概要］　北半球に広く分布し、本州の青森県と山梨県（南アルプス）、長野県（秩父山地・八ヶ岳）に分布する。高地（高山帯）の湿った崖や岩上に生育する。本県では八甲田山でのみ記録されている（岩月ら, 2001）。八甲田山系などの広域的な調査が望まれる。

［生存に対する脅威と保存対策］　岩石の崩落、水質・大気汚染による個体数の減少が危惧される。

（太田正文）

ミズゴケ目　ミズゴケ科 **B**

和名　オオミズゴケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sphagnum palustre* L.

［形態的特徴］　大形で茎の長さは10cmを超え、茎葉は舌形で先端はささくれる。枝葉は広楕円形で深くくぼみ鱗状につき、横断面では葉縁細胞は狭二等辺三角形で底辺は腹面側にある。茎の表皮細胞には螺旋状の肥厚がある。

［選定理由］　特に平地から中山間地においては生育地、個体数共に減少している。

［分布と生態の概要］　北海道から九州、世界各地に分布する。県内では津軽・下北両半島、八甲田山、岩木山など広範囲にみられ、低地から高地にいたる湿原の土上や腐植土上に生育する。

［生存に対する脅威と保存対策］　放牧地や宅地造成など土地開発による湿原の消滅や乾燥化、園芸材料としての採取が脅威。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）

（太田正文）

ハイゴケ目　カワゴケ科 **B**

和名　クロカワゴケ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Fontinalis antipyretica* Hedw.

［形態的特徴］　暗緑色で、茎は長く30cmを超えることもあり不規則に枝分かれする。葉は長さ３～８㎜で３列につき、中肋はないが中央でアヤメの葉のように二つ折りになる。

［選定理由］　産地が少なく、個体数の減少や絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　北海道から本州、北半球に分布する。県内では津軽・下北半島の数か所で生育が確認されている（斎藤, 1986；柿崎, 1987）が、その後はなされていない。きれいな水の流れる河川の水中や岸辺の杭などに着生する。

［生存に対する脅威と保存対策］　河川の護岸や水路改修による生育地の消滅、森林伐採に起因する水量の減少、水質汚染などによる生育環境の悪化が懸念される。

森林の保全、コンクリートを使用しない水路工事の推進やゴミ投棄の禁止など自然に配慮した河川環境の構築を図る必要がある。

（太田正文）

ハイゴケ目　カワゴケ科 **B**

和名　カワゴケ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Fontinalis hypnoides* Hartm.

［形態的特徴］　茎は長く、葉は５㎜前後でクロカワゴケよりまばらにつく。中肋はなく、卵状披針形で二つ折りにはならない。

［選定理由］　産地が少なく、個体数の減少や絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　北海道から本州、北半球に広く分布する。県内ではこれまで下北半島のみで記録されていた（柿崎, 1987；柿崎ら, 2006）が、最近になって津軽半島からも見つかった（太田, 2019b）。湧水などのある川や池沼の水底の岩上や倒木上に生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採、河川改修、道路の改修工事等による水量の減少や河谷の埋め立てなど生育地の破壊や水質の汚濁、汚染が懸念される。湧水等水量の確保をはじめとする生育環境の確保が求められる。

（太田正文）

ハイゴケ目　ヤナギゴケ科 **B**

和名　**ササオカゴケ（アオモリカギハイゴケ）** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Sasaokaea aomoriensis* (Broth. et Paris) Kanda

［形態的特徴］　大形で茎の長さは10㎝を超えることもある。羽状に枝分かれし、先の分かれた毛葉をつける。葉はまばらにつき長さ３～４㎜、卵状披針形でくぼむ。葉先近くの葉縁には小歯がある。中肋は１本で葉長の3/4以上に達する。
［選定理由］　産地、個体数の減少が危惧される。
［分布と生態の概要］　本州から九州、中国に分布する。県内では2016年に62年ぶりに青森市とつがる市で確認された（澤田ら, 2018）。低地の池沼の周辺にある湿地や休耕田・放棄水田などに生える。ヨシの生育が過密にならないような条件の湿地に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　土地造成に伴う湿地の埋め立てや水質汚染、乾燥化が脅威。
［特記事項］　Parisが1904年、フォーリー（U. Faurie, 1847-1915）が青森で採集した標本（Faurie2187）に基づき、アオモリカギハイゴケ *Hypnum aomoriense* Broth. et Parisとして記載した種である。
（太田正文）

ハイゴケ目　サナダゴケ科 **B**

和名　**マッカリタケナガゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Plagiothecium obtusissimum* Broth.

［形態的特徴］　小形で、葉は長さ１㎜内外、楕円状卵形で先端は円頭から鈍頭である。葉の翼部の細胞は薄壁透明で、基部の他の細胞から明瞭に区別される。蒴柄は長さ８～15㎜で赤褐色である。
［選定理由］　希産種とされる貴重な種である。
［分布と生態の概要］　北海道から本州、極東ロシアに分布する。県内では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981）。北方系の種で、日陰の岩上や土上、腐木上に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採等による空中湿度の低下や乾燥化、大気汚染など生育環境の悪化が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）
（太田正文）

ハイゴケ目　ネジレイトゴケ科 **B**

和名　**トガリカイガラゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Myurella tenerrima* (Brid.) Lindb.

［形態的特徴］　小形糸状で長さは10㎜前後、茎は葉を含めて0.5㎜程で這い、絡み合う。葉はあまり密につかず葉細胞の上端にパピラがある。
［選定理由］　全国的に希な種であり、個体数も少なく絶滅が危惧される。
［分布と生態の概要］　本州、中国・ロシア東部・欧州・アフリカに分布する。県内では白神山地（高谷ら, 1993）と弘前市（柿崎・太田, 2003）にそれぞれ１か所の産地が記録されている。ブナ林など森林内の土上や土に覆われた岩上に小群落を形成する。白神山地ではブナ・ミズナラなどの森林伐採地に隣接した地点で見られるが、林内の乾燥化が進行しているため個体数の減少が危惧される。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林伐採による乾燥化や生育環境の破壊が脅威。森林の保全が望まれる。
［特記事項］　弘前市で採集された標本は胞子体（蒴）をつけており注目される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）
（太田正文）

コマチゴケ目　コマチゴケ科 **B**

和名　コマチゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Haplomitrium mnioides* (Lindb.) R.M.Schust.

［形態的特徴］　全体緑色、地下茎が匍匐し, 地上茎は斜上して長さ約２㎝、幅は葉を含めて３～５㎜。仮根はない。側葉は２列あり円形～楕円形、背葉が１列あって側葉より小さい。
［選定理由］　生育地と個体数が局限される。
［分布と生態の概要］　本州～琉球、東アジアに分布する。おもに常緑樹林帯の湿った土上や倒木上に生育する。南方系である本種はこれまで秋田県の中部が北限であった（高橋, 1980）が、白神山地の低海抜地でも見つかり、新たな北限である（古木, 2004）。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採、森林の放置による林床の過密化が脅威。**（太田正文）**

ゼニゴケ目　ウキゴケ科 **B**

和名　イチョウウキゴケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ricciocarpos natans* (L.) Corda

［形態的特徴］　葉状体は緑色、秋になると赤紫色をおび、長さ１～1.5㎝で、二叉分岐の繰り返しによって全体としてイチョウの葉形になる。
［選定理由］　生育地・個体数共に減少傾向にある。
［分布と生態の概要］　全国、世界中に広く分布する。県内では下北半島（柿崎・太田, 2001）、三沢市（柿崎ら, 2006）、津軽地域（太田, 2003）で記録されている。水田や池・用水路などに浮遊するが湿土上にも生える。ウキウキゴケと混生することもある。
［生存に対する脅威と保存対策］　生活排水・農薬などによる水質汚染や土地造成、農地の転作等は生育に大きく関与する。生育地の保全と水環境の浄化を図る必要がある。**（太田正文）**

クモノスゴケ目　クモノスゴケ科 **B**

和名　ニセヤハズゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Pallavicinia levieri* Schiffn.

［形態的特徴］　クモノスゴケに似るが、葉状体の先が細くならず、雌包膜が杯形で、雄包膜が中肋上に多列に並ぶ。
［選定理由］　生育地が局限され、個体数がわずかである。
［分布と生態の概要］　海外では東アジア～ニューギニア・インド、国内では本州の千葉県以西～琉球に分布するとされていた（岩月ら, 2001）が、2012年に下北半島から記録され、分布の北限となっている（古木・太田, 2012）。生育地はブナ林とヒノキアスナロ林が隣接するところで、両者が混生する林床の土上に小さい群落を作っている。生育範囲は非常に狭く、周辺では確認できていない。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林伐採や間伐などによる生育地の減少、林内の乾燥化などを防ぐ必要がある。**（太田正文）**

ツボミゴケ目　ヤバネゴケ科 **B**

和名　シフネルゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Schiffneria hyalina* Steph.

［形態的特徴］　茎は背腹に扁平で葉状体のように見え、長さ２～３㎝、葉を含めて幅２～３㎜。葉はほぼ縦につきわずかに瓦状に重なり、半円形。腹葉はない（岩月ら, 2001）。

［選定理由］　生育地が局限され、個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　国内では本州～琉球、海外では東アジア～東南アジア、ヒマラヤに分布（岩月ら, 2001）。県内では2012年に下北半島で確認された（北限）のち、2017年に津軽半島からも見つかっている（太田, 2018）。常緑樹林の倒木上や樹木の根元に生育する（岩月ら, 2001）が、県内ではスギ、ヒノキアスナロ林の倒木上や根元、岩上に生育している。

［生存に対する脅威と保存対策］　森林伐採や間伐などによる生育地の減少、林内の乾燥化などが生育に影響すると考えられる。 **（太田正文）**

ツボミゴケ目　ムチゴケ科 **B**

和名　コムチゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Bazzania tridens* (Reinw., Blume et Nees) Trevis.

［形態的特徴］　植物体はやや褐色を帯び、長さ１～５㎝と小さく、腹葉は透明で白っぽく見える。葉身細胞のトリゴンはやや小さく、腹葉の先端は全縁～鈍波状である。

［選定理由］　生育地が局限され、個体数が減少している。

［分布と生態の概要］　本州～琉球・小笠原、東アジア～東南アジアに分布する。常緑樹林の林床、岩上、樹幹に生える。これまで分布の北限は秋田県であった（高橋, 2008）が、むつ市のヒノキアスナロ林で確認され（古木・太田, 2012）、新たな北限となった。しかし、2018年の探索では再確認が出来ていない。

［生存に対する脅威と保存対策］　森林伐採や間伐などによる生育地の減少、林内の乾燥化などが懸念される。 **（太田正文）**

シッポゴケ目　キンシゴケ科 **C**

和名　**アオゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Saelania glaucescens* (Hedw.) Broth.

小形で茎の長さは１～1.5㎝ほどで、青白色のカビを帯びたような特異な色相に見える。この色はある種の化学物質によるものとされている。北海道から本州、北米・欧州・アジア・ニュージーランド等に分布し、両極分布型を示す。中部地方以北の寒冷地で土上や岩上に生えるが、近畿地方以西では生育地が局限される。県内では八甲田山（Deguchi, 1981）、横浜町（柿崎・太田, 2001）、弘前市（太田, 2019a）、及び黒石市で記録されている。林道の開削や森林の伐採などによる生育地の荒廃により個体数の減少が懸念されている。 **（太田正文）**

シッポゴケ目　シッポゴケ科 **C**

和名　**マユハケゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Campylopus fragilis* (Brid.) Bruch et Schimp.

小形で茎の長さは1.2～２㎝、茎頂の葉腋短枝上に多くの無性芽を球状につける。本州・四国、東南アジア・欧州・北米・アフリカに分布する。山地帯から亜高山帯の沼沢地上に生える。県内では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981）。希産種で、国内では胞子体（蒴）は未知である（岩月ら, 2001）。遊歩道や排水溝などの敷設、改修による生育地の乾燥化等生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用） **（太田正文）**

シッポゴケ目　シッポゴケ科 **C**

和名　**ヒロスジツリバリゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Campylopus gracilis* (Mitt.) A.Jaeger

茎の長さは２～３㎝、茎葉の中肋は幅広く上部では全体を占め、先端には少数の歯があるが透明にはならない。中肋の背面には細胞の起きあがりによる凹凸がある。葉の先端が折れて無性的に繁殖する。本州から九州、朝鮮半島・中国・ミャンマー・タイ・ネパール・欧州・北米に分布する。県内では唯一青森市で記録されている（Takaki, 1967）。高地のやや日当たりの良い岩上や土上に生えるが、本産地は標高100m程の低山地であり注目される。生育地が局限され、希産種として知られる。都市公園整備のための道路の開削、これに伴う樹木の伐採などにより環境が著しく改変し、現時点ではこの産地での生育は確認できない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用） **（太田正文）**

シッポゴケ目　シラガゴケ科 **C**

和名　**シロシラガゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Leucobryum glaucum* (Hedw.) Åongstr.

コケ庭に利用されるホソバオキナゴケに似るが、大形で茎の長さは５㎝程になる。葉は披針形で長さ５～７㎜、葉身部の縁は弱く内曲する。葉基部の透明細胞は数層あって細胞膜はほとんどくびれない。北海道から本州、北半球に分布する。県内では十和田湖畔で記録されている（野口, 1959）。高層湿原周辺の木の根元などに塊状に生える。土地開発や樹木の伐採などによる湿原の消滅、乾燥化等、生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用） **（太田正文）**

マゴケ目　ハリガネゴケ科 **C**

和名　ホソバゴケ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Mielichhoferia japonica* Besch.

小形で茎の長さは３㎜以下。葉は茎に覆互状につき、長さ約１㎜の卵状披針形で先端近くには歯があり葉身細胞は薄壁で表面に微細な肥厚がある。外蒴歯はなく、内蒴歯は痕跡的である。北海道から本州・中国・極東ロシアに分布する。県内では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981）。火山地の湿岩上にマット状に生える希少種である。登山者の踏みつけによる剥離や大気汚染など生育環境の悪化により個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

マゴケ目　ハリガネゴケ科 **C**

和名　カサゴケモドキ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Rhodobryum ontariense* (Kindb.) Kindb.

オオカサゴケに似るがより小形、茎頂に20～50枚の葉を付け、湿ると横に展開して傘を広げたようになる。葉は一般に倒卵形～楕円形で長さ約10㎜。葉縁は中部以下で強く反曲し、葉先は広く尖る。中肋は葉先に届くか短く突出する。北海道～九州、北半球に分布し、石灰岩地を含む落葉樹林下の土上・岩上・腐木上に生えるが希である（岩月ら, 2001）。県内では、最近になって石灰岩地である八戸市の数か所から見つかった（太田, 2019b）が、いずれも狭い範囲の常緑針葉樹下に限られている。生育地の森林の保全や踏みつけ防止などを図る必要がある。**（太田正文）**

マゴケ目　ハリガネゴケ科 **C**

和名　カサゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Rhodobryum roseum* (Hedw.) Limpr.

カサゴケモドキに非常によく似るが、ふつう全体が小形で、傘の部分の葉の数が少ないこと（16～21枚）、葉はへら形～倒卵形で、葉縁は弱く反曲し、中肋はふつう葉先に達しないことなどで区別される。北海道から四国、ヒマラヤ・欧州・北米西部に分布し、多雪地帯の林下土上や腐植土上に生える希少種である。県内では、これまで岩木山のみで記録されていた（Horikawa, 1955）が、最近下北半島からも見つかっている（太田, 2019b）。林内遊歩道（登山道）の崩落や樹木の刈り払い、踏みつけなどによる生育地の破壊等で個体数が減少することが危惧される。**（太田正文）**

ヒノキゴケ目　ヒモゴケ科 **C**

和名　オオヒモゴケ **環境省：該当なし**
学名　*Aulacomnium palustre* (Hedw.) Schwägr.

茎は長さ10㎝近くにもなり、葉が茎に接するため径約1.5㎜のひも状となる。葉身細胞は厚角で中央に１個パピラがある。北海道から本州（中部地方以北）、世界各地に分布する。水田や沼沢地周辺の湿地上、湿岩上に生える。県内では八甲田山（Deguchi, 1981）、岩木山周辺（柿崎, 1987）、下北半島の太平洋岸（柿崎ら, 2006）で記録されていたが、そのうち下北半島太平洋岸の生育地は湿地のハンノキ林が拡大しており、生育の確認が出来なかった。土地開発に伴う湿原の埋め立てや水質汚染、植生の遷移による湿地の消失が生存の脅威となる。**（太田正文）**

ハイゴケ目　カワゴケ科 **C**

和名　**コシノヤバネゴケ** **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Dichelyma japonocum* Cardot

茎の長さは３～７㎝、葉は長さ４㎜ほどで狭卵状披針形、中肋部で二つ折りになり、先端に小歯があって葉縁は反曲する。中肋は葉先に達する。北海道、本州（中部地方以北）に分布し、県内では赤石川流域（斎藤, 1986）と津軽地方の２か所のみで知られていたが、最近下北半島を含めた県内の広い範囲で確認されている（太田, 2019a・2019b）。河川源流部や川、池沼の岸辺に生える木の根元、樹幹、倒木上などに着生する。もともと産地が少ないことに加え、河川、湖沼の護岸工事や森林伐採等による生育環境の消失、水量の減少などの環境悪化により生育地が減少している。　**（太田正文）**

ハイゴケ目　ヤナギゴケ科 **C**

和名　**ササバゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Calliergon cordifolium* (Hedw.) Kindb.

茎は長く、10～20㎝に達し、不規則に羽状に枝分かれする。茎葉は長さ２～３㎜、長い卵形で円頭である。葉基部は広く下延し細胞は大きく透明である。中肋は１本で葉先近くに達する。枝葉は小さく先端は尖ることがある。蒴柄はかなり長く５～９㎝である。北海道から本州・北半球・ニュージーランドに分布し、河川や沼沢地周辺の湿地に生える。県内では弘前市（太田・柿崎, 2003）、六ヶ所村（柿崎ら, 2006）、東通村（太田, 2019b）などで記録されている。開田や宅地造成など土地開発による生育地の消失と水質汚染などにより個体数が減少傾向にある。　**（太田正文）**

ハイゴケ目　ヤナギゴケ科 **C**

和名　**ヤリノホゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Calliergonella cuspidate* (Hedw.) Loeske

茎は10㎝ほどの長さとなり、横向きにまばらに枝を出し、葉はあまり展開せず、枝先は尖るので槍のような形になる。茎葉は卵形～楕円状卵形でくぼみ、葉先は円頭（短尖頭）、中肋は短くて２本（欠くこともある）。北海道から九州、世界各地に分布し、湿原や湿り気のある草地の土上に生える。県内では八甲田山（Kanda, 1978）、津軽半島（斎藤, 1986）、下北半島（柿崎ら, 2001）で記録されている。低地の産地では宅地や工業用地の造成、埋め立てなど土地開発による生育地の減少で個体数が減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ハイゴケ目　シノブゴケ科 **C**

和名　**モミシノブゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Abietinella abietina* (Hedw.) M.Fleisch.

大形で、茎は匍匐し長さ10㎝近くにもなる。規則正しく１回羽状に枝分かれし、方形で厚壁の細胞からなる多くの毛葉がある。茎葉は広卵形の下部から細く尖り、全周に小さい歯があり、中肋葉葉先近くに達する。葉身細胞の背面中央に１個のパピラがある。北海道から四国、北半球に分布し、高山の地上や岩上に群落を形成する。国内では蒴は見つかっていない。県内では下北半島で記録されており（柿崎・太田, 2001）、放牧地に開削された路崖の岩上に生育するが、生育規模は小さく、個体数も少ない。生育地の土地改変、乾燥化により生育環境が悪化しており、消失が危惧される。

（太田正文）

ハイゴケ目　シノブゴケ科 **C**

和名　ナガスジハリゴケ　**環境省：該当なし**
学名　*Claopodium prionophyllum* (Müll.Hall.) Broth.

繊細でやや羽状に枝分かれする。茎葉は長さ１～1.2㎜で広卵形の下部から細く伸び葉縁には微歯があり、中肋は葉先から長く突出する。枝葉は披針形で、葉身細胞は丸みのある方形から六角形で中央に１個のパピラがある。乾燥すると肉眼では細い糸くずが絡み合ったように見える。北海道から琉球・熱帯アジア・フィジー・ハワイに分布する。県内では下北半島東部で記録されている（柿崎, 1977；柿崎・太田, 2001）。石灰岩上に生えることから分布が局限される。周辺の森林伐採による風化の進行、岩石の崩落等による生育地の埋没によって個体数の減少・絶滅が危惧される。この記録によって我が国における本種の連続的な分布が明らかとなった。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ハイゴケ目　ツヤゴケ科 **C**

和名　ホソバツヤゴケ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Orthothecium rufescens* (Brid.) Schimp.

大形で茎は長く５～10㎝、黄緑色（褐色～紅色）でつやがある。枝葉は披針形で長さ２～４㎜、先端は細く尖り深い縦じわがある。葉身細胞は線形、厚膜、葉基部の細胞壁にはくびれがあり、中肋は不明瞭である。北海道から本州・中国・ロシア・欧州・北米に分布し、岩上に着生する。県内では津軽山地（太田, 2000）、白神山地で記録されている。林道や遊歩道の開削や森林伐採による生育地の環境悪化により個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ウロコゼニゴケ目　ミヤマミズゼニゴケ科 **C**

和名　ミヤマミズゼニゴケ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Calycularia laxa* Lindb. et Arnell

葉状体は不透明な緑褐色で長さ２～４㎝、幅５～７㎜、先端は二叉状に分岐する。葉縁は波状で中肋部はやや明瞭である。腹鱗片は線形で側縁に２～３本の長毛がある。油体は各細胞に20～40個でほぼ均質。偽花被は葉状体の中央部にあり、杯状、口部は裂片状に切れ込む。北海道から九州北部、東アジア・ヒマラヤ・メキシコに分布する。ブナ帯の古生層が存在する湿岩上に生え、県内では、弘前市郊外の大鰐山地で記録された（太田, 2002）。同所付近では、その後の生育も確認されている（太田, 2019a）が、生育範囲が局所的である。生育環境の保全が必要で、森林伐採やそれに伴う乾燥化が進行すればすぐに消滅する危険がある。　**（太田正文）**

ミズゴケ目　ミズゴケ科 **D**

和名　ホソベリミズゴケ
学名　*Sphagnum junghuhnianum* Dozy et Molk.
環境省：情報不足

淡緑色～黄緑色、茎の長さは５～10㎝。茎葉は二等辺三角形で長さ約1.2～1.6㎜、幅は0.7～１㎜程。また、先端は狭い切形で鋸歯があり、舷は基部で３～５細胞列でほとんど広がらない。枝葉背面中央部に縁の厚く肥厚した数個の孔があるが腹面にはない。本州～九州、台湾・中国・ヒマラヤに分布する種で、水のしみ出る岩壁面や岩棚などに生育する。県内では八甲田山で記録されている（村井, 1935）が、その後、発見されていない。今後の調査が望まれる。

（太田正文）

ハイゴケ目　サナダゴケ科 **D**

和名　オオサナダゴケ
学名　*Plagiothecium neckeroideum* Bruch et Schimp.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

黄緑色、葉は卵状披針形で非相称、扁平につき、上半部は強く波打ち長さは３～４㎜である。葉の先端は鋭頭で細胞は分化して幅広くなり、仮根や無性芽をつける。北海道から九州、中国、欧州に分布する。高地に多く見られ、岩上や腐植土上、地面、時には木の根元などに生える。県内では平内町（Bescherelle, 1893）と大鰐町（斎藤, 1986）で記録されている。樹木の伐採や土地開発などによって個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ツボミゴケ目　コヤバネゴケ科 **D**

和名　オソレヤマヤバネゴケ
学名　*Cephaloziella divaricate* (Sm.) Schiffn.
環境省：該当なし

茎の長さは数㎜で、葉の背面や茎の表面にしばしば多細胞性の突起があり、葉身細胞は薄壁からやや厚壁である。腹葉は大きい。北海道から本州・北半球・アフリカ・オーストラリアに分布し、高地の湿岩や崖上に生える。県内では下北半島で記録されている（Kitagawa, 1965）が、それ以降の記録はない。森林伐採や道路の開削などによって個体数の減少が危惧される。

（太田正文）

シッポゴケ目　シッポゴケ科 **D**

和名　シマオバナゴケ
学名　*Trematodon semitortidens* Sakurai
環境省：該当なし

小形で、茎の長さは３～６㎜である。葉は密につき、幅広い鞘部から急に針状に伸び、この部分は中肋で占められる。蒴柄は黄色で長さは１㎝以下、乾いた時は直立或いは多少くねる。日本固有種で、本州から九州に分布するが、産地は局限される。高山を流れる水路の岸辺などの湿土上に生え、県内では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981）が、他の記録はない。遊歩道の敷設、入山者の湿原への踏み込みなどにより個体数の減少が危惧される。　**（太田正文）**

ゼニゴケ目　ウキゴケ科 **D**

和名　ウキウキゴケ
学名　*Riccia fluitans* L.
環境省：該当なし

葉状体は淡緑色、長さは１～５㎝、幅0.5～１㎜で規則的に二叉分岐する。北海道から沖縄、全世界に分布し、池や水田、用水路などの水中や干上がった湿土上にみられる。本種は県内各地に普通であった（鈴木, 1969）が、生育地、個体数共に減少傾向にある。近年、下北半島（柿崎ら, 2006）、津軽半島（太田, 2002）、三沢市（柿崎ら, 2003）などで記録されているが、従来のウキゴケの中に *R.canaliculata* ミゾウキゴケ、*R.stenophylla* ホソバウキゴケ、*R.rhenana* オオウキゴケが含まれていることが指摘され（富永・古木, 2014）、これまでの記録を再検討する必要がある。従来の広義のウキゴケと区別する和名ウキウキゴケ（新称）が提案されている（片桐・古木, 2018）。　**（太田正文）**

ツボミゴケ目　コヤバネゴケ科 **D**

和名　ケスジヤバネゴケ
学名　*Cephaloziella elachista* (Gottsche et Rabenh.) Schiffn.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

植物体は長さ15㎜に達する茎葉体で、幅は葉を含めて0.2～0.3㎜。葉先の切れ込みは2/3以上で２裂し葉基部に長刺をつける。本州（青森県・福島県・京都府）、欧州、北米に分布し、湿原でミズゴケ類と混生する。県内では八甲田山でのみ記録されている（北川, 1978）が、他のミズゴケ湿原での調査が必要である。生育地は局限され、湿原の乾燥化や水質汚染による個体群の消失が危惧される。　**（太田正文）**

ツボミゴケ目　ツボミゴケ科　**D**

和名　**トワダツボミゴケ**
学名　*Jungermannia towadaensis* (S.Okamura.) S. Hatt.
環境省：該当なし

植物体は大形で長さ３～６㎝ときに８㎝になり、幅2.7～３㎜、暗オリーブ緑色。茎は黄褐色で厚さ0.3㎜、腹部葉腋からと茎頂から頻繁に鞭枝状の新枝を伸ばす。仮根は基部のみに付き透明。葉は離在、茎に対し斜めに付き広く開出し、卵形～舌形で長さ1.3～2.1㎜、幅１～1.7㎜、茎頂側の縁が内曲する。本種は *J.atrovirens* Dumort. エゾツボミゴケの異名とされているが、Bakalin（2014）によって十和田湖で採集された標本が *J. eucordifolia* Schljakovミズツボミゴケとして報告されており、検討が必要であるため、ここでは要調査野生生物（Ｄランク）として扱うこととする。*J.towadaensis* としてはOkamura（1915）によって、十和田湖御門石の水中６ｍの岩質上から得られたのが最初で、続いてJimbo, Takamatsu and Kuraishi（1955）によって、御倉半島の北岸沿いの水深20ｍの岸、そこにほど近い水深27ｍの水中からも得られている。近年の採集例はなく、本種の分類学的位置付けも含めた精査が必要だ。　**（太田正文）**

ツボミゴケ目　ソロイゴケ科　**D**

和名　**マルバツボミゴケ**
学名　*Solenostoma cyclops* (S. Hatt.) R.M.Schust.
環境省：該当なし

最内側の雌苞葉が造卵器とほぼ同じ高さにつき、花被の先は嘴状に尖る。葉は背縁と腹縁の基部が著しく長く下延する。葉は長さが幅より長く、仮根は束にならない。植物体は小さく、葉は幅1.3㎜以下。本州から九州のブナ帯に分布し、渓谷や崖などの水が滴る岩上に生育する。県内では八甲田山で記録がある（Kitagawa, 1978）が、他にはまだ記録がない。　**（太田正文）**

ミズゼニゴケ目　ミズゼニゴケ科　**LP**

和名　**コロンビアミズゼニゴケ（仮称）**　**環境省：該当なし**
学名　*Pellia columbiana* Krajina et Brayshaw

［形態的特徴］　本種は、エゾミズゼニゴケ *Pellia neesiana* に似るが、葉状体が密に集まり、立った縁が巻縮すること、細胞壁の肥厚が見られないこと、弾糸柄の発達が悪いこと、蒴内壁の細胞層が多数の半環状の帯を持つこと、胞子が大形で65～80×90～120μmであることなどで区別される。

［選定理由］　今のところ、国内の産地として八甲田山のみが報告されている。

［分布と生態の概要］　北米カナダのブリティッシュコロンビア州から報告された本種は片桐・古木（2018）のチェックリストには載せられていないが、同じものが北日本の高山帯で見つかっていて八甲田大岳が唯一の産地である。高山帯に残る雪渓のふちの湿った土や岩上に生育する（Kitagawa, 1978）。

［生存に対する脅威と保存対策］　人による踏みつけや雪渓や周囲の攪拌による雪解け水の混濁化、あるいは気候変動による雪渓の消失などが脅威となり得る。高山帯への立ち入り制限が必要である。

（太田正文）

③引用文献

Amakawa, T.　1960.　Family Jungermanniaceae of JapanⅡ. Journ. Hattori Bot. Lab., 22：1-90.

Bakalin, V.　2014.　The Revision of '*Jungermannia* s.l'. in the North Pacific : the Genera *Endogemma, Jungermannia* s.str., *Metasolenostoma*, *Plectocolea* and *Solenostoma* (Hepaticae). Botanica Pacifica,　3 (2)：55-128.

Bescherelle, E.　1893.　Nouveaux documents pour la flore bryologique du Japon. Ann. Sci. Nat. Bot. 7. Ser. Bot., 17：327-393.

Deguchi, H.　1981.　Mosses of Mts. Hakkoda, Northern Japan. Ecological Review, 19(4)：87-235.

古木達郎　2012.　コマチゴケが青森県で見つかる．蘚苔類研究．10(7)：226.

古木達郎･太田正文　2012.　コムチゴケが新たな分布の北限として青森県で見つかる．蘚苔類研究，10(9)：293.

古木達郎･太田正文　2012.　ニセヤハズゴケが新たな分布の北限として青森県で見つかる．蘚苔類研究，10(9)：293-294.

Horikawa, Y.　1955.　Distributional Studies of Bryophyte in Japan and Adjacent Regiona. Hikobia, Hiroshima. 152pp.

岩月善之助・出口博則・古木達郎　2001.　日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., pl.1-192.

岩月善之助・水谷正美　1972.　原色日本蘚苔類図鑑．保育社，大阪．405pp., pl.1-48.

Jimbo, T., M.Takamatsu and H.Kuraishi　1955.　Notes on the aquatic vegetation of Lake Towada. Ecol. Rev.　14(1)：1-9.

柿崎敬一　1977.　青森県産蘚類(2).　青森県立郷土館調査研究年報，3：109-112.

柿崎敬一　1987.　青森県産蘚類(4).　青森県立郷土館調査研究年報，11：65-76.

柿崎敬一　1988.　青森県産蘚類目録（予報）．青森県立郷土館調査研究年報，12：69-96.

柿崎敬一・太田正文　2001.　下北半島東部のコケ植物．青森県立郷土館調査研究年報，25：101-104.

柿崎敬一・高谷秦三郎・齋藤信夫・小林範士・太田正文　2003.　小川原湖周辺の植物(3).　青森県立郷土館調査研究年報，27：51-56.

柿崎敬一・高谷秦三郎・齋藤信夫・小林範士・太田正文・神　真波　2006.　小川原湖周辺の植物．青森県立郷土館調査研究年報，30：49-80.

柿崎敬一　2010.　蘚苔類．青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. pp.121-130.

Kanda, H.　1976.　A revision of family Amblystegiaceae of Japan　Ⅰ. Journ. Sci. Hiroshima Univ., ser. b. div. 2., 15(2)：201-276.

Kanda, H.　1978.　A revision of family Amblystegiaceae of Japan　Ⅱ. Journ. Sci. Hiroshima Univ., ser. b. div. 2., 16(1)：41-119.

片桐知之・古木達郎　2012.　日本産タイ類ツノゴケ類チェックリスト，2012.　蘚苔類研究，10：193-210.

片桐知之・古木達郎　2018.　日本産タイ類･ツノゴケ類チェックリスト，2018.　Hattoria, 9：53-102.

Kitagawa, N.　1965. A revision of the family Lohpoziaceae of Japan and its adjacent regions.Ⅰ. Journ. Hattori Bot. Lab., 28：239-291.

Kitagawa, N.　1966.　A revision of the family Lohpoziaceae of Japan and its adjacent regions.Ⅱ. Journ. Hattori Bot. Lab., 29：101-149.

北川尚史　1978. 日本新産 *Cephaloziella elachista*. Misc. Bryol. Lichenol., 8：9.
Kitagawa, N.　1978. Hepaticae of Mts. Hakkoda, northern Japan. Ecological Review, 19(1)：45-58.
村井三郎　1935. 十和田湖，八甲田山の蘚類目録. 十和田湖・八甲田山の植物. 青森営林局. pp.169-206.
野口　彰　1959. 十和田湖畔の蘚苔類植生. 生態学研究，15 : 53-64.
Noguchi, A.　1991. Illustrated moss flora of Japan. Part 4. Hattori Bot. Lab., pp.743-1012.
Noguchi, A.　1994. Illustrated moss flora of Japan. Part 5. Hattori Bot. Lab., pp.1013-1253.
Okamura, S.　1915. Contributiones novae ad floram bryophyton Japonicam, 1. Jour. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo，36(7)：1-15.
小野庄士　1987. 山形県産タイ類・ツノゴケ類リスト（1987）. 東北の自然 26：18-19.
小野庄士　1987. 山形県産タイ類・ツノゴケ類リスト（1987）. 東北の自然 27：16-20.
太田正文　2000. 梵珠山の蘚苔類. 青森県立郷土館調査研究年報，24：125-133.
太田正文　2002. 青森県西南部のタイ類(1). 青森県立郷土館調査研究年報，26：97-104.
太田正文・柿崎敬一　2003. 青森県立郷土館収蔵コケ植物標本(1)，福田均氏採集弘前市子供の森久渡寺山における蘚苔類. 青森県立郷土館調査研究年報，27：107-114.
太田正文　2003. 文献に基づく青森県産タイ類・ツノゴケ類チェックリスト. 青森県立郷土館調査研究年報，27：79-92.
太田正文　2018. 日吉神社のコケ植物タイ類のシフネルゴケについて. 津軽植物，55(12)：3-5.
太田正文　2019a. 青森県中南津軽地域のコケ植物調査(1). 青森県立郷土館研究紀要，43：55-65.
太田正文　2019b. 青森県コケ植物分布ノート(4). 青森県立郷土館研究紀要，43：65-68.
齋藤信夫　1986. 青森県産の蘚苔類 Ⅰ －手持ちの蘚苔類標本－. 東北植物研究，3：7-17.
佐藤靖夫･山田耕作　2002. 山形県産のタイ類とツノゴケ類チェックリスト. 自然環境科学研究，15：101-111.
澤田　満・石戸谷芳子・乗田利一・鵜沢美穂子　2018. 青森県つがる市と青森市で発見したササオカゴケについて. 蘚苔類研究，11(11)：313-314.
嶋村正樹　2012. コケ植物　新しい分類体系の捉え方. 新しい植物分類学Ⅱ. 講談社，東京. pp.1-12.
Suzuki, T.　2016. A revised new catalog of the mosses of Japan. Hattoria, 7：9-223.
高橋祥祐・山田耕作　2008. 秋田県産のタイ類とツノゴケ類のチェックリスト. 秋田自然史研究，54：1-15.
Takaki, N.　1967. A revision of Japanese Campylopus. Journ. Hattori Bot. Lab., 30：231-248.
高谷秦三郎・齋藤信夫・小林範士・柿崎敬一・太田正文　1993. 白神山地自然調査概要(2)　植物. 青森県立郷土館調査研究年報，17：11-29.
富永孝昭・古木達郎　2014. ウキゴケとその近縁種の分類学的研究. 蘚苔類研究，11：99-100

３）淡水藻類

①概説

藻類とは、水中あるいは水分の多い場所で生活する、根・茎・葉の分化がみられない、酸素発生型の光合成を営む独立栄養の生物の総称である。藻類は水界生態系の中では、一次栄養生産者として、従属栄養生物（動物など）の生活に深く関わっている。分類学的には11の分類群（門）に分けられ、綱の階級でよく知られたものに藍藻類、紅（色）藻類、緑藻類、シャジクモ藻類、珪藻類、褐藻類などがある（井上, 2000）。藻類と菌類を合わせて下等植物ということもあるが、菌類は光合成能を欠く点で藻類と根本的に異なる。

今回の藻類の絶滅危惧種の選定については、比較的隔離状態にある陸水圏に生育している身近な淡水藻に限定し、さらに比較的容易に形状を肉眼で識別できる緑藻（マリモ類）、車軸藻（シャジクモ類）、紅藻（カワモズク類など）に絞った。

県内で生育しているマリモ類は２種類とされてきた。ひとつはヒメマリモで1937年中島全二が左京沼で発見、1953年にマリモの変種として報告された（小林・岡田, 1953）。もう一つは小川原湖沼群の田面木沼などで昭和の初め頃まで網にかかり馬糞そうと呼ばれていたもので、青森県教育委員会（1972）の調査では往年の姿のものは発見されなかったが、マリモ様の藻体が採集され阪井與志雄氏によってフジマリモと同定された。フジマリモは富士五湖の一つ山中湖の採集品をもとにマリモの変種として報告されたものである（Okada, 1957）。現在、ヒメマリモ、フジマリモは多様な形態的および生態的変異をしめすマリモの異なった生活形と認識されている（Niiyama, 1989；羽生田・植田, 1999）。2008年晩秋、小川原湖東岸にマリモを思わせる球状の藻がたくさん打ち上げられたのを機に専門家による湖底の調査が行われ、「ヒメマリモ型」マリモの発見につながった（安藤, 2014）。また、マリモと近縁の *Wittrochiella salina* Chapmanが同湖で確認され、現在本邦唯一の生育地となっている（羽生田・若菜, 2004）。

シャジクモ類は湖沼・湧水・池などの水底に生育し、維管束の発達はないが外見上は根・茎・葉の区別ができ、中軸の節から６～８本の輪生枝を出すので、車軸藻と呼ばれ、形態や生育環境などから比較的識別しやすい藻類である（石戸谷, 2019b）。カワモズク類は紅藻類の一種で、清涼で温度変化の小さい湧水や清流の中の石や杭などに着生し１～数cmの団塊状の藻体で青から赤褐色の大きな細胞が中軸を形成し、節から多数の数珠状の輪生枝を出し、粘質に包まれている。海の褐藻類のモズク（水雲）類に似ているので川の水雲と呼ばれている。なお、登載種の選定は環境省第レッドリスト2019を参考にした。現地調査は一部だけでもっぱら文献などを参考にしたが、過去の文献・分布資料も少なく今後の調査研究に期するところが大きい。

（原田幸雄）

②本文

シオグサ目　アオミソウ科　　**A**

和名　マリモ（ヒメマリモ型、フジマリモ型を含む）　　**環境省：絶滅危惧Ⅰ類**

学名　*Aegagropila linnaei* Kuetzing

［形態的特徴］　藻体は礫に付着しているもの、糸くずのような状態で湖底を浮遊するもの、浮遊糸状体が波動で不規則に絡み合い球状に発達するものなど多様な形態をとる。小川原湖では礫に付着したフジマリモ型マリモや複数の藻体が絡み合い球状を形成している纏綿型のヒメマリモ型マリモが記録されている。藻体の形状や糸状体細胞の形態（円筒形あるいは棍棒状）、生態の多様性はおもに生育環境（着生基質・流動条件・塩分濃度など）の違いによる（安藤, 2014）。ヒメマリモ・フジマリモは当初それぞれマリモの新変種として記載されたが、最近の分子系統解析では遺伝的にマリモと区別できない（Boedeker *et al*., 2010）。

［選定の理由］　マリモは北～中欧に隔離分布している（阪井, 1991）。わが国での生育湖沼は限られ、阿寒湖は国指定特別天然記念物、富士五湖は山梨県指定天然記念物になっている。ヒメマリモは本県の左京沼（東通村）から初めて報告された（小林・岡田, 1953）。

［分布と生態の概要］　小川原湖では、2001年の国土交通省高瀬川河川事務所の調査で湖底の岩盤やカラス貝の殻上に付着したフジマリモ型マリモが発見され、2008年に安藤一次氏により球状の藻体が採集され、若菜勇氏の同定によって纏綿型のヒメマリモ型マリモの存在が明らかになっている（安藤, 2014）。

［生存に対する脅威と保存対策］　県内のマリモ生育湖沼は周辺部の開発などで水質が悪化しマリモの生育状況は良くない。また、ソウギョなどの外来魚繁殖の悪影響が考えられる（若菜, 2008）。絶滅の危険度が高い。

［特記事項］　最近科名がシオグサ科からアオミソウ科に変更された（Boedeker *et al*., 2012）。

（安藤一次・原田幸雄）

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**ケナガシャジクモ**
学名　*Chara fibrosa* C. Agardh ex Bruzelius subsp. *Benthamii* (A. Braun) Zaneveld
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

比較的浅い池沼（pH 6.4～7.8）に生育する体長40㎝位までの明緑色の輪藻。アフリカ・オーストラリア・アジアの熱帯および亜熱帯に広く分布し、日本の本州に達して本県の十三湖が北限とされている（Kasaki, 1964）。貧栄養水域適応種であるが、やや富栄養を好んで生育する傾向がある。和名は主軸の棘毛、托葉冠、小枝の苞などが長いことに由来する（大橋ら, 2008）。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**シャジクモ**
学名　*Chara braunii* C.C. Gmel.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

中くらいの深さ（約２～８ｍ）の湖・沼・池などに生育する体長40㎝位までの明緑色の輪藻。汎存種でわが国にもふつうに見られシャジクモ科植物の代表種とされるが（大橋ら, 2008）、形態上の変化も多い（Kasaki, 1964）。淡水域のほか汽水湖域にも発生する。本県では左京沼・市柳沼・田面木沼・小川原湖での記録がある。和名は車軸藻の意で、中軸より小枝が放射状に輪生する様子に由来する（大橋ら, 2008）。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**カタシャジクモ**
学名　*Chara globularis* Thuill. var. *globularis*
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

山地湖から低地の海岸湖沼、さらに汽水湖にまで生育する体長50㎝位までの暗緑あるいは灰緑色の輪藻。山地湖ではいわゆるシャジクモ帯の主要種となる（Kasaki, 1964）。本県では東通村の湖沼・十三湖・十二湖・鷹架沼・市柳沼・田面木沼・小川原湖・蔦沼・十和田湖に生育の記録がある（Kasaki, 1964）。和名は触れると堅い感じがすることに由来する（大橋ら, 2008）。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）。新たに鬼沼・タテコ沼・越水２号の奥溜池・冷水沼・野辺地町砂沼で生育が確認された（石戸谷, 2017b；石戸谷, 2018a）。　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**ハダシシャジクモ**
学名　*Chara zeylanica* Klein ex Willdenow
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

比較的浅い（約１～２ｍ）湖、池沼に生育する体長25㎝位までの灰緑色の輪藻。分布圏は北および南アメリカ・アフリカ・オーストラリアおよびアジアの熱帯から亜熱帯、そして日本の本州北部に及ぶ。淡水種として知られているが、汽水湖にも生育する。本県が分布北限。東通村の海跡湖沼・市柳沼・小川原湖に生育の記録がある（Kasaki, 1964）。小枝の最下節は常に皮層がなく裸である珍しい特徴をもつ（和名の由来と思われる）。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）
（石戸谷芳子・原田幸雄）

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**ヒメフラスコモ**
学名　*Nitella flexilis* (L.) *Agardh* var. *flexilis*.
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

水田・ため池・湖などに生育するフラスコモのなかまで、体長はふつう30㎝位である。比較的低温に適応した種で、わが国では本州中部から北海道にかけて分布する。本県では市柳沼・十和田湖のほか、弘前市（石戸谷, 2007）に生育記録がある。十和田湖では深い水底にシャジクモ帯を形成しており水深29ｍからの採集例は日本のシャジクモ類の生息地の最深記録となっている（Kasaki, 1964）。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）。新たに浪岡溜池・弘前市茂平堤水路、奈良寛溜池で生育が確認された（石戸谷, 2017a）。　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

シャジクモ目　シャジクモ科　**D**

和名　**オトメフラスコモ**
学名　*Nitella hyaline* (DC.) C. Agardh
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

おもに湖沼、ため池などの淡水から汽水域の浅いところに生育する輪藻。雌雄同株、藻体は明緑色で長さ30㎝に達し、茎は非常に細く節間の長さは小枝の長さの２～４倍。若い部分は寒天質に包まれている。副枝が輪生枝の上下に規則正しく２列にでている。最終細胞は円錐形で鋭く尖る。本県では小川原湖に生育の記録がある（Kasaki, 1964; 石戸谷, 2017）。
（石戸谷芳子・原田幸雄）

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**イシカワモズク**
学名　*Batrachospermum atrum* (Hudson) Harv
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

湧水からの小流中に生育する、ルーペで判断する程度の黄褐色または黒褐色の紅藻。藻体は不規則に密に分枝するが、節に輪生枝はほとんど発達しない、太さ0.1～0.2㎜、長さ３～６㎝、やや粘質である。欧州・韓国・日本に分布する。本県では東通村（加藤沢沼）のほか、七戸町で生育が確認された（石戸谷, 2007a）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）でヒメカワモズクとして扱った種の和名と学名を変更した）　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**カワモズク**
学名　*Batrachospermum gelatinosum* (L.) DC.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

平地の湧水などきれいな流水中に生育する茶褐色またはやや青味を帯びた紅藻。藻体はよく分枝し、節に輪生枝がそう生する、太さ0.5～0.8㎜、長さ２～12㎝、粘質が多い。欧州・北米・中央アジア・韓国・日本に分布する。本県では東通村（加藤沢沼）のほか、最近弘前市（大和沢地区ほか）（石戸谷, 2019b）で生育が確認された。　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**アオカワモズク**
学名　*Batrachospermum helminthosum* Bory
環境省：準絶滅危惧

平地の湧泉などの流水中、また多少丘陵性の渓流中に生育する青緑色または緑色の紅藻。藻体は不規則に分岐し、節から輪生枝がそう生する、太さは0.5～0.8㎜（雌株の方がやや太い）、長さ６～11㎝、粘質に富む。欧州・北米・日本に分布する。本県では東通村の湖沼流水域で生育が確認された。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用。但し、学名は変更した）　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**ユタカカワモズク**
学名　*Sirodotia yutakae* Kumano
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

貧栄養の山地性水域の日陰の場所に生育するカワモズク属に似た形態の紅藻であるが、造果器の形態と造胞糸発達の様子が異なり別属とされる（廣瀬・山岸, 1977）。欧州・北米・ニュージーランド・日本に分布する。本県では東通村（加藤沢沼）で生育が確認された。和名はこの種を初めて採集した福田裕の名に基づく。（以上青森県レッドデータブック2010年改訂版（平井・原田）を引用）　**（石戸谷芳子・原田幸雄）**

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**ホソカワモズク**
学名　*Batrachospermum turfosum* Bory
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

高山の池塘、低地の湿原の池塘などの止水域に生育する紅藻。生鮮時は緑色からオリーブがかった緑色で小石や枯れ枝に付着して生育する。藻体は雌雄同株、粘性は中位、やや硬い。太さ0.3～１㎜、高さ2.5～５㎝。輪生枝のうはよく発達する。本県では下毛無岱で２か所、横沼の奥の沼、平川市かも沼で確認された（石戸谷, 2008）。
（石戸谷芳子・原田幸雄）

カワモズク目　カワモズク科 **D**

和名　**チャイロカワモズク**
学名　*Batrachospermum arcuatum* Kylin
環境省：準絶滅危惧

平地の湧水の流入する水路の石や壁などの基物に着生する紅藻。雌雄異株、藻体は茶褐色、粘質でぬるぬるする。よく分枝し、太さ0.7～1.5㎜、長さ２～12㎝。外見上はカワモズクに似るが、本種では藻体の先端までよく分枝する。本県では中泊町上高根のため池、つがる市駒田の水路で確認された（石戸谷, 2018a）。
（石戸谷芳子・原田幸雄）

オオイシソウ目　オオイシソウ科　**D**

和名　**オオイシソウ**
学名　*Compsopogon caeruleus* (Balbis) Mont.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

富栄養の小流、河口などの汽水域の石上、水草上、枯枝上に着生する紅藻。藻体は暗藍緑色、紐状で直立、太さ１～1.5㎜、長さ７～８㎝、最長30㎝。糸状の藻体は基部近くで２、３回分枝する。和名は本種の発見者大石芳三の名に由来する。本県では弘前市大和沢・小沢の水路で生育が確認された（石戸谷, 2009）。

（石戸谷芳子・原田幸雄）

シオグサ目　アオミソウ科　　**ＬＰ（小川原湖）**

和名　**ウイットロキエラ　サリナ**　　**環境省：該当なし**

学名　*Wittrochiella salina* Chapman

［形態的特徴］　汽水域の環境に生育するマリモ属に近縁な緑藻である（Boedeker *et al.*, 2012）。藻体は複雑な分枝をもち仮根で岩などに付着してマット状（厚さ0.3～1.5cm）を呈するか、あるいは浮遊・集合して偏球状を呈する。分枝はマリモの分枝よりはるかに太く、特徴的に大小不ぞろいの細胞からなる。

［選定理由］　小川原湖が本種の国内唯一の生育地として知られる。また、北太平洋地域で１か所だけの隔離分布である。

［分布と生態の概要］　ニュージーランドのスタンモ―湾で最初に発見され、南部オーストラリアの沿岸に産地が多く知られている（Hoek *et al.*, 1984）。日本では高瀬川河川事務所による小川原湖の生物調査（2001年９月）において若菜勇氏らによってはじめて採集された。小川原湖の湖底岩盤上に発見された藻体はオーストラリア産の *Wittrockiella salina* と形態的に酷似していたほか、遺伝的に非常に僅かな違いしか認められず、同一種と同定された（羽生田・若菜, 2004）。ここではしばしばマリモと混生することが見いだされた。

［生存に対する脅威と保存対策］　マリモに準じる。最近の生息環境にかかわる情報は不明である。

［特記事項］　オーストラリアでは本種の球状の藻体が確認されているので、小川原湖においても球状藻体が生育している可能性がある。　**（安藤一次・原田幸雄）**

③引用文献

安藤一次　2014. 青森県のマリモ－特に小川原湖の球状マリモについて－. 青森自然誌研究, 19：45-51.

青森県教育委員会　1972. むつ小川原地域天然記念物調査報告書. 61pp.

Boedeker, C., A. Eggert, A. Immers & I. Wakana　2010. Biogeography of *Aegagropila linnaei* (Cladophoraceae, Chlorophyta): a widespread freshwater alga with low effective dispersal potential shows a glacial imprint in its distribution. J. Biogeogr., 37 : 1491-1503.

Boedeker, C., C. J. O' Kelly, W. Star & F. Leliaert　2012. Molecular phylogeny and taxonomy of the *Aegagropila* clade (Cladophorales, Ulvophyceae), including the description of *Aegagropilopsis* gen. nov. and *Pseudocladophora* gen. nov. J. Phycol., 48：808-825.

羽生田岳昭・植田邦彦　1999. マリモはどこから来たのか？　遺伝, 53(7)：39-44.

羽生田岳昭・若菜　勇　2004. 青森県小川原湖で発見された日本新産 *Wittrockiella* 属藻類の系統・分類学的位置について. 藻類, 52：49.

平井正和・原田幸雄　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 青森県. pp131-136.

廣瀬弘幸・山岸高旺　1977. 日本淡水藻類図鑑. 内田老鶴圃, 東京. 933 pp.

Hoek, C.van den, S.C.Ducker & H.B.S.Womersley　1984. *Wittrockiella salina* Chapman (Cladophorales, Chlorophyceae), a mat and ball forming alga. Phycologia, 23：39-46.

井上　勲　2000. 藻類の多様性　新たな世界が見えてきた. 国立科学博物館. 56 pp.

石戸谷芳子　2007. 弘前市大和沢でヒメフラスコモを確認. 月刊津軽植物, 44(5)：4-5.

石戸谷芳子　2007a. 七戸町でイシカワモズクを確認. 月刊津軽植物, 44(12)：2-3.

石戸谷芳子　2008. ホソカワモズクは青森県新産. 月刊津軽植物, 45(1)：5-6.

石戸谷芳子　2009. 弘前市で淡水藻絶滅危惧種オオイシソウを確認. 月刊津軽植物, 46(4)：5-8.

石戸谷芳子　2017. 小原湖産のオトメフラスコモを確認. 月刊津軽植物, 54(1)：2-3.

石戸谷芳子　2017a. 弘前市奈良寛溜池でヒメフラスコモを確認. 月刊津軽植物, 54(3)：5-6.

石戸谷芳子　2017b. カタシャジクモを屏風山湖沼群で確認. 月刊津軽植物, 54(9)：7.

石戸谷芳子　2018. 砂沼でカタシャジクモを再確認. 月刊津軽植物, 55(10)：2-3.

石戸谷芳子　2018a. チャイロカワモズクを中泊町とつがる市で確認. 月刊津軽植物, 55(9)：3-4.

石戸谷芳子　2019. 久渡寺でヒメフラスコモを見た. 月刊津軽植物, 56(1)：5.

石戸谷芳子　2019a. 青森県の車軸藻類分布. 月刊津軽植物, 56(1)：5-7.

石戸谷芳子　2019b. 弘前地区のカワモズク～2007年調査から. 月刊津軽植物, 56(3)：5-7.

Kasaki, H.　1964. The Charophya from the lakes of Japan. Journ. Hattori Bot. Lab., 27：217-314.

小林義雄・岡田喜一　1953. 本州で発見のマリモの一新変種に就いて. 国立科学博物館研究報告, 32：99-103.

Niiyama, Y.　1989. Morphology and classification of *Cladophora aegagropila* (L.) Rabenhorst (Cladophorales, Chlorophyta) in Japanese lakes. Phycologia, 28：70-76.

Okada, Y.　1957. On a new variety of *Aegagropila sauteri* found in Lake Yamanaka. Bull. Fac. Fish., Nagasaki University, 5：30-33.

大橋広好・邑田　仁・岩槻邦男　2008. 新牧野日本植物図鑑. 北隆館, 東京. 1458 pp.

阪井與志雄　1991. マリモの科学. 北大図書刊行会, 札幌. 202 pp.

若菜　勇　2008. 釧路湿原に代表される低湿地の湖沼における絶滅危惧種マリモの生育環境. 環境省委託業務報告書. 日本鳥類保護連盟. pp. 69-103.

４）地衣類

①概説

国内では1,906分類群の地衣類および関連菌類が記録されており（Ohmura・Kashiwadani, 2018）、県内からはおよそ300種が報告されている（山本, 2007）。

地衣類は、地上や岩上、樹上（樹皮、葉）などに生育し、生育形や生態がコケ植物（蘚苔類）と似ており、和名も「～ゴケ」となっている種が多いことから、両者が混同される傾向がある。しかし、地衣類は菌類（主として子嚢菌類）のうち緑藻類や藍藻類といった藻類と共生しているものを総称したものを指しており、蘚苔類とは全く異なる生物である。

地衣類は外見上布きれのように広がる葉状地衣、枝状で立ち上がったり垂れ下がったりする樹状地衣、いぼ状やかさぶた状に基物に着生する痂状地衣の３タイプに大きく分けられている。樹皮や岩石上に様々な模様をつけたように見えるのは痂状地衣によることが多い。

海岸（磯地帯）から高山風衝地帯まで広く生育するが平野部、特に市街地では種類数、量共に減少する。これは森林の伐採など開発による大気の乾燥化や排気ガスなどによる大気汚染に起因するものと考えられている。土地造成や都市開発に当たっては生育環境の保全に十分配慮する必要がある。

下北半島西部山地にある縫道石山は石英安山岩で構成される標高626mの岩峰で、この山頂には葉状地衣でイワタケ科のオオウラヒダイワタケ（Ａランク）が生育している。また、本種はこの山の南方に位置する縫道石にも生育しており、周辺にはミヤマダイコンソウやホザキナナカマドなどの氷河期の遺存植物も生えていることから1976年12月、「縫道石山・縫道石の特殊植物群落」として国の天然記念物に指定された。以前、縫道石山の絶壁はロッククライミングの訓練場となっていたが、登山家の理解と協力によって禁止されることとなった。国内では、ほかに北海道の芦別岳でも報告されているが生育の現状は不明とされている（環境庁, 2015）。

オオウラヒダイワタケと混生するイワタケ科のオオイワブスマ、シワイワタケ（共にＢランク）は人の踏みつけなどによって剥離を引き起こし個体数が減少している。入山者のモラルの向上が望まれる。

イワタケ科のイワタケ（Ｂランク）は食用とされることから広く知られる種である。県内では太平洋岸と八甲田山、大鰐山地で記録されているが産地は少ない。生育地周辺の樹木の伐採や開発によって個体数が激減している所もある。生育環境の保全に留意すべきである。

ブナやミズナラの樹幹に生える樹状地衣でウメノキゴケ科のバンダイキノリ（Ｃランク）は津軽地方の一部では「バンジャム」などと呼ばれ食用に供されたり、漢方薬のエキスとして利用されていた。採取範囲は限定され本種の生存には大きな影響を及ぼすことはないものと思われるが、ブナなどの着生樹木の伐採は基物の消滅となり絶滅が危惧される。

県内での地衣類に関する調査研究は不十分であり、地域的にも偏りがあって全県的には把握されていないのが現状である。したがって報文も限られており、下北半島についての黒川（1956）、Kurokawa（1957）、八甲田山系のKashiwadani＆Sasaki（1987）などがあるにすぎない。山本（2007）は、北海道と東北地方の地衣類チェックリストを発表したことから、北海道との分布関係が明らかになりつつある。今後の県内の広域的な調査研究の進展が待たれる。

なお、学名・和名はOhmura and Kashiwadani（2018）に従った。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）

（太田正文）

②本文

チャシブゴケ目　イワタケ科　**A**

和名　オオウラヒダイワタケ　**環境省：絶滅危惧Ⅰ類**

学名　*Umbilicaria muehlenbergii* (Ach.) Tuck

［形態的特徴］　地衣体は淡褐色の葉状地衣で、径３～12cmである。背面は裂芽や盛り上がったひだを欠き、平滑でやや光沢がある。縁部は全縁または不規則に波曲する。腹面には偽根の変形した多数の小さい板状体がある。子器は普通にみられる。乾燥すると折れ、破損しやすい。

［選定理由］　分布局限、個体数が激減傾向にある。

［分布と生態の概要］　シベリア、アラスカ、アリューシャン、北米東部に分布する。国内では北海道の芦別岳（環境庁, 2000）と下北半島西部に位置する縫道石山、縫道石で記録されている。山地の露岩上に生える。

［生存に対する脅威と保存対策］　踏みつけ等による剥離や大気汚染など生育環境の悪化。入山者に対する注意を喚起すると共に保護思想の啓蒙を図る。

［特記事項］　国指定天然記念物「縫道石山・縫道石の特殊植物群落」内に生育する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　イワタケ科 **B**

和名　オオイワブスマ **環境省：該当なし**
学名　*Lasallia pensylvanica* (Hoffm.) Llano

［形態的特徴］　地衣体は径1.5～10（～15）㎝の単葉で破損しやすい。背面には多数の類円形の突起があるが裂芽や粉芽はない。子器をよく付け、腹面は黒色である。
［選定理由］　個体数が減少傾向にある。
［分布と生態の概要］　北海道から本州（中部）、シベリア、北米、台湾に分布し、県内では下北半島の縫道石山で記録されている。高山の露岩上に着生する。
［生存に対する脅威と保存対策］　入山者の踏みつけによる個体の破損や剥離、生育環境の悪化。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　イワタケ科 **B**

和名　シワイワタケ **環境省：該当なし**
学名　*Umbilicaria caroliniana* Tuck

［形態的特徴］　地衣体は薄い葉状で裂片は丸みがあり、互いに押し合ってしわができる。腹面中央部に臍状体はないが、所々にある偽根で着生する。背面は暗褐色ないし黒褐色でいぼ状の突起が散在する。
［分布と生態の概要］　北海道から本州、シベリア、アラスカ、北米東部に分布する。県内では下北半島の縫道石山と八甲田山石倉岳で記録されている。北方系の種で高山の露岩上に生える。
［生存に対する脅威と保存対策］　入山者の踏みつけなどによる剥離、樹木の伐採など周囲の生育条件の悪化。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　イワタケ科 **B**

和名　イワタケ **環境省：該当なし**
学名　*Umbilicaria esculenta* (Miyoshi) Mink.

［形態的特徴］　地衣体は葉状、単葉で類円形に広がり径５～10㎝、時に30㎝内外に達する。背面は灰褐色、腹面には暗黒色から黒色の分岐した偽根をつけ、臍状体で着生する。
［選定理由］　産地、個体数共に減少している。
［分布と生態の概要］　北海道から九州、沿海地方、朝鮮半島に分布し、県内では八戸市種差海岸、大鰐山地（佐藤, 1958）・八甲田山等で記録されている。海岸や山地の岩壁に着生する。
［生存に対する脅威と保存対策］　森林の伐採等による生育環境の悪化、食用としての採取が脅威。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ウメノキゴケ科 **C**

和名　マキバエイランタイ　**環境省：該当なし**
学名　*Cetraria laevigata* (L.) Rassad.

地衣体は黒褐色で、その縁辺が著しく内側に巻いてほとんど管状になる。縁辺に沿って長い擬盃点があるが、その他の葉体背面にはない。北海道から四国、千島、サハリン、朝鮮半島、北米、欧州に分布する。県内では下北半島縫道石山、八甲田山大岳・石倉岳で記録されている。エイランタイは高山のやや湿った地上に生育するが、本種は比較的乾燥気味のハイマツ帯のミネズオウやコメバツガザクラなどの小灌木の根元に生える。希少種であり、登山者などによる踏みつけ、生育地の崩落や歩道敷設に伴う灌木類の伐採等による生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ウメノキゴケ科 **C**

和名　ミヤマクグラ　**環境省：該当なし**
学名　*Oropogon asiaticus* Asahina ex M.Sato

地衣体は樹状、分枝は中空で共生藻のある付近の髄層には黄色の色素がある。子器をよくつけ、子嚢中には暗褐色で石垣状多室の巨大胞子１個だけ入っている。北海道から本州に分布する。県内では下北半島の縫道石山と八甲田山猿倉温泉から乗鞍岳で記録されている。主として山地の樹皮上に着生する。分布が局限される種で、森林の伐採、刈り払いなど生育環境の悪化によって個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ウメノキゴケ科 **C**

和名　バンダイキノリ　**環境省：該当なし**
学名　*Sulcaria sulcata* (Lév) Bystrek ex Brodo et D.Hawksw.

灰白色からやや褐色の樹状地衣で長さ５～10㎝、茎部は３㎜内外の円柱状で上部は多少扁平となり縦に深い溝がある。北海道から九州、台湾、中国、ヒマラヤに分布する。県内では主としてブナ林内で広くみられ、ブナをはじめとする樹木（樹皮）に着生している。津軽地方の一部では「バンジャム」などと呼び食材や生薬の原料として利用されている（吉田, 1986）。ブナ、ミズナラ林などの森林伐採による着生木の消滅や大気汚染等が生存に対する脅威となる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ダイダイキノリ目　サビイボゴケ科 **C**

和名　オオサビイボゴケ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Brigantiaea nipponica* (M.Sato) Hafellner

地衣体は灰白色。子器は赤褐色、皿状で径２㎜前後、顕著な子器縁があり子器盤は粉霜で覆われる。胞子は石垣状多室である。本州（青森県下北半島・新潟県苗場山・長野県戸隠山・静岡県富士山の４か所で記録される）に分布する。県内では下北半島の恐山で記録されている。樹皮に固着する日本固有種で産地が局限される希産種である。大気汚染、森林の伐採による着生木の消滅など生育環境の悪化によって個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）　**（太田正文）**

ツメゴケ目　カブトゴケ科 **C**

和名　**コウヤクゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Sticta fulginosa* (Dicks.) Ach.

地衣体はやや大形の葉状で径５～８㎝、縁は浅く切れ込み、丸みのある裂片に分かれる。背面は黒褐色で淡黄色のトメンタに覆われ、所々に盃点がある。北海道から四国、温帯に広く分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山猿倉温泉・乗鞍岳で記録されている。山地の樹皮や岩上にコケと共に生育している。大気汚染、森林の伐採による着生木の消滅などにより個体数が減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

ツメゴケ目　ウラミゴケ科 **C**

和名　**チヂレウラミゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Nephroma helveticum* Ach. f.*caespitosum* Asahina

地衣体は小形で裂芽状の扁平な小裂片を多数つける。本州から四国に分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。低山地に多くみられ、コケに被われた樹幹に着生する。大気汚染や森林伐採による着生木の消滅によって個体数が減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

ツメゴケ目　ツメゴケ科 **C**

和名　**ヘリトリツメゴケ** **環境省：該当なし**
学名　*Peltigera collina* (Ach.) Schrad.

地衣体は緑色から灰褐色、径８～10㎝で背面の先端部はざらつき、しばしば白粉とトメンタがある。葉縁は背面に向かって巻き、粉芽をつける。腹面は淡褐色、脈は平坦であまり明瞭でないが黒くなる。偽根は散生する。北海道から本州、欧州、北米に分布する。県内では下北半島西部山地、八甲田山高田大岳で記録されている。林内の地上にはえる。希少種であり、大気汚染や森林伐採等による生育環境の悪化によって個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

リキナ目　リキナ科 **C**

和名　**ヤスデゴケモドキ** **環境省：該当なし**
学名　*Phylliscum japonicum* Zahlbr.

地衣体は暗赤褐色、ロゼット状で径２㎝内外である。臍状体で着生し、裂片は放射状で２、３分岐し、幅0.5～５㎜である。背面は平滑凸状で腹面はくぼみ、樋状になる。本州から四国、屋久島、朝鮮半島に分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山石倉岳で記録されている。山地の日当たりの良い珪質岩や火山岩の露面に着生する。入山者の踏みつけなどによる剥離や大気汚染等による生育環境の悪化により個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ウメノキゴケ科 **D**

和名　ウチキウメノキゴケ
学名　*Myelochroa irrugans* (Nyl.) Elix et Hale
環境省：該当なし

地衣体が径15㎝以上に達する中から大形の葉状地衣である。背面は平滑で皮層はほとんど脱落しない。粉芽も裂芽もつけない。北海道から本州、インドに分布する。県内では下北半島平野部、八甲田山仙人橋・赤沼・赤倉岳で記録されている。平地から山地のカラマツなどの樹皮や湿岩上に着生する。開発に伴う森林の伐採や大気汚染による個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ウメノキゴケ科 **D**

和名　シナノウメノキゴケ
学名　*Parmelia shinanoana* Zahlbr.
環境省：該当なし

地衣体は径20㎝に達し、多くの裂片に分かれる。裂片は幅３～５㎜で２、３叉分岐し、背面は淡褐色から暗褐色で縁部に沿って淡灰色に縁取られ、周辺部は掌状になる。北海道から四国、朝鮮半島に分布する。県内では下北半島縫道石山で記録されている。高山の岩石や砂礫上に着生する。入山者の踏みつけや森林の伐採、大気汚染等生育環境悪化による個体数減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　カラタチゴケ科 **D**

和名　ニセカラタチゴケ
学名　*Ramalina commixta* Asah.
環境省：該当なし

枝の主軸が扁平で短く、主軸と分枝に多少の円柱状小棘枝がある。本州から九州に分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。ブナやヒノキアスナロ林内の樹皮に着生する。森林伐採に伴う着生木の消滅や大気汚染等による個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　カラタチゴケ科 **D**

和名　ツヅレカラタチゴケモドキ
学名　*Ramalina pertusa* Kashiw.
環境省：該当なし

地衣体の分枝は中空で表面にやや大きな穿孔が数個連続して開口している。北海道から四国、台湾に分布する。県内では下北半島のむつ市や東通村平野部、八甲田山石倉岳・猿倉温泉・乗鞍岳・仙人橋・赤沼・赤倉岳で記録されている。樹皮に着生する。低地から高地にわたり広く分布する種であるが産地記録が少ない。開発に伴う森林伐採や大気汚染等によって個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　ザクロゴケ科 **D**

和名　フォーリザクロゴケ
学名　*Haematomma fauriei* Zahlbr.
環境省：該当なし

地衣体はいぼ状で子器盤は赤色である。子器は１～３㎜であり、柄は短い。本州に分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山猿倉温泉から乗鞍岳で記録されている。ブナなどの樹皮に固着する。着生木の伐採等による個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　チャシブゴケ科 **D**

和名　チャザクロゴケ
学名　*Loxospora ochrophaea* (Tuck.) R.C.Harris
環境省：該当なし

地衣体はいぼ状で子器盤は赤褐色または淡褐色である。北海道から四国、北米東部に分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。スギやアカマツなど針葉樹の樹皮に着生する。大気汚染や樹木の伐採よる着生木の消滅によって個体数が減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

チャシブゴケ目　キゴケ科 **D**

和名　キゴケ
学名　*Stereocaulon exutum* Nyl.
環境省：該当なし

子柄の長さ３～８㎝、最大部は径２～３㎜に達する。擬子柄を数本ずつ群生し、よく分枝して灌木状となる。棘枝は子柄の片側だけに密生する。北海道から九州に分布する。県内では下北半島西部山地のブナ・ヒノキアスナロ林内、八甲田山猿倉温泉・乗鞍岳で記録されている。山地の岩上に生える。大気汚染等によって個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）

（太田正文）

チャシブゴケ目　キゴケ科 **D**

和名　ムクムクキゴケモドキ
学名　*Stereocaulon paschale* (L.) Hoffm.
環境省：該当なし

擬子柄は高さ３～８㎝、主軸の中部以上で分枝し、棘枝は顆粒状またはサンゴ状で子柄の上部に密生する。北海道から本州（中部地方以北の高山）、北半球に広く分布する。県内では下北半島釜臥山で記録されている。寒地や高山の地上・腐植土上にコケと共に生育する。入山者の踏みつけや大気汚染、森林の伐採などにより個体数が減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）

（太田正文）

ツメゴケ目　ツメゴケ科 **D**

和名　アカツメゴケ
学名　*Peltigera rufescens* (J.C.Weiss.) Humb.
環境省：該当なし

地衣体は葉状で厚く腹面には白色の互いに交差する脈があり、縁部は斜上する。裂片は幅1.5㎝未満、背面にはトメンタをつける。北海道から四国、欧州・北米に分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山大岳で記録されている。森林内の地上などにコケと共に生育する。森林の伐採や大気汚染等による環境悪化によって個体数が減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）

（太田正文）

チャシブゴケ目　キゴケ科 **D**

和名　ヤマトキゴケ
学名　*Stereocaulon japonicum* Th.Fr.
環境省：該当なし

擬子柄は高さ１～３㎝、径は基部も頂部もあまり差はなく0.5㎜内外で少し分枝する。棘枝は短く円筒状からサンゴ状。本州から九州、台湾、中国、ジャワに分布する。県内では下北半島釜臥山・八甲田山猿倉温泉・乗鞍岳で記録されている。平地から低山地の岩上に生育し、古い石垣などにも生える。土地開発や大気汚染による環境悪化によって個体数の減少が危惧される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）

（太田正文）

チャシブゴケ目　サビイボゴケ科 **D**

和名　ニセチャハシゴケ
学名　*Calopadia subcoerulescens* (Zahlbr.) Vězda
環境省：該当なし

生葉上地衣。地衣体はかさぶた状で子嚢下層全部が青色味を帯びる。本州から九州、中国・ジャワ・ボルネオ・ニュージーランドに分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。ヒノキアスナロの葉上に着生する。希少種であり、森林伐採による着生木の消滅等によって個体数は減少傾向にある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）

（太田正文）

ツメゴケ目　ハナビラゴケ科 **D**

和名　モクズゴケ
学名　*Santessoniella grisea* (Hue) Henssen
環境省：該当なし

地衣体は灰黒色、綿屑状。裂片は円筒状、径0.07～0.1㎜、長さ0.5～0.8㎜で不規則に分岐する。胞子は無色である。北海道から九州に分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。樹皮上またはコケ上に生えることが多いが地上や岩上にもみられる。森林伐採による着生木の消滅やこれに伴う生育環境の悪化によって個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）

（太田正文）

ツメゴケ目　イワノリ科 **D**

和名　カワホリゴケ
学名　*Collema complanatum* Hue
環境省：該当なし

地衣体は葉状で径５～８㎜、背面は暗緑色から黒褐色、薄膜状でつまみ上げたような細いしわが中央部から周辺に向かって放射状に伸びる。北海道から九州に分布する。県内では下北半島西部山地で記録されている。平地から低山地の広葉樹林内で樹皮に着生する。森林の伐採による空中湿度の低下や大気汚染によって個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

ツメゴケ目　イワノリ科 **D**

和名　アオキノリ
学名　*Leptogium azureum* (Sw.) Mont.
環境省：該当なし

地衣体は青味を帯び、不透明で背面は平滑、裂芽を欠く。子器は0.2～2.5㎜である。北海道から九州、台湾・東南アジア・アフリカ・北米・中南米に分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山猿倉温泉・乗鞍岳・仙人橋・赤沼・赤倉岳で記録されている。樹上や岩上、崖面などに着生する。森林伐採による空中湿度の低下や着生木の消滅などによって個体数が減少している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用）**（太田正文）**

ツメゴケ目　イワノリ科 **D**

和名　ヤマトカワホリゴケ
学名　*Collema japonicum* (Müll.Arg.) Hue
環境省：該当なし

地衣体は淡黒緑色または黒褐色、薄膜状で円形に広がる。裂片は類円形で所々にヒダがある。裂芽も粉芽もなく、腹面は平滑である。北海道から九州に分布する。県内では下北半島西部山地・八甲田山仙人橋・赤沼・赤倉岳で記録されている。平地から山地の樹上や岩上に生える。森林の伐採による生育地の乾燥化・大気汚染等によって個体数の減少が懸念される。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（柿崎, 2010）を引用一部改変）**（太田正文）**

③引用文献

青森県　2006．地衣類．青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－維管植物以外編．pp.27-36.

環境省（編）　2014．レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－９植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）．ぎょうせい，東京．pp.390-465.

Kashiwadani, H. & K. Sasaki　1987．Lichens of Mt. Hakkoda Japan. Mem. Natn. Sci. Mus., ⑳：67-81.

黒川　逍　1956．下北半島田名部町・東通村の地衣類．資源科学研究所彙報，40：110-114.

Kurokawa, S.　1957．Lichens of Simokita Peninsula. 資源科学研究所彙報，43/44：12-21.

Ohmura, Y. & H. Kashiwadani.　2018．Checklist of Lichens and Allied Fungi of Japan. National Museum of Nature and Science Monographs. 49, 143pp.

佐藤正己　1958．イワタケの分布と生態．植物研究雑誌，33(4)：14-19.

山本好和　2007．都道府県別地衣類チェックリスト(2)北海道・東北地方．Lichenology, 6(1)：25-108.

吉田考造　1986．バンダイキノリは食べられている．ライケン，6(2)：3-4.

吉村　庸　1974．原色日本地衣植物図鑑．保育社，大阪．349pp., pls48.

５）菌類

①概説

菌類はより正確には真菌類と呼ばれ、①細胞壁を持つ真核生物である、②基本的生活体は多細胞の菌糸体である、③細胞は単核または多核性である、④栄養摂取は吸収性である、⑤有性的または無性的に形成された胞子によって増殖する、⑥従属栄養生物である（光合成能を欠く）、などの特徴を合わせ持つ点で、細菌類・放線菌類・変形菌類（粘菌類）・細胞性粘菌類など他の近縁の微生物から区別される。従来、真菌類はツボカビ（広義）・接合菌・グロムス菌・子のう菌・担子菌の５門と生活環の一部不明な不完全菌類に分類されていた（日本菌学会（編）, 2013）。しかし、最近の分子系統学的な成果を反映した分類ではツボカビ門（広義）は解体されツボカビ（狭義）・ネオカリマティクス・コウマクノウキンの３門に分類されている。接合菌門も解体されたが早くに門として独立したグロムス菌門を除いて所属する門は確立されていない。また、動物として取り扱われていた微胞子虫類が菌類であることが判明し門として新たに編入された。これらにより現在は従来の子のう菌・担子菌の２門を含めた７門が認識されている（国立科学博物館編, 2014）が、まだ未解明な部分も多く今後も分類体系の変更が想定される。

菌類の栄養吸収・生長をつかさどる生活体が菌糸（体）、繁殖・伝播の役割を担うのが胞子、その胞子の形成と分散のための器官が子実体である。子実体の形や大きさは菌類の分類群、さらに菌種によって大きく変わり、肉眼的なものから顕微鏡的なものまでさまざまである。そのうち、子実体が肉眼的にも顕著に認められるものをきのこ（大形菌類）、もっぱら顕微鏡観察に頼らざるを得ないものをかび（微小菌類）と総称している。ただ、両者の間に明確な区別はない。

菌類は自然界において生物体あるいは有機物の分解・還元者として重要な役割を果たしている。なかでも、植物由来の有機物の分解・還元過程にもっとも深く関わっている。菌類をその栄養摂取様式から腐生菌（死んだ有機物から栄養分をとる）、寄生菌（生きた植物や動物の体から一方的に栄養分をとる）、共生菌（他の生物と互いに栄養分の授受をおこなう）などに区分することもある。また、きのこ類を生態的な見地から菌根菌（地中で菌糸が生きた植物の根と共生関係をもつもの：バカマツタケ・ホンシメジ・ヤマドリタケほか）、木材腐朽菌（菌糸が落枝・倒木・立木の枝幹・根株などの腐敗や腐朽に関与しているもの：フサハリタケ・シロキツネノサカズキモドキ・シロタモギタケほか）、林内地上生（ホウキタケ・オオズキンカブリほか）、草地生（アケボノタケ・トガリフカアミガサタケほか）、地中生（地中に子実体を生じるもの：イボセイヨウショウロ・イモタケほか）などと便宜的に区分することもある。

本レッドデータブックでは主に高等菌類（きのこ類）を対象としており合計93種が選定された。2010年版から23種が増加しているが、これらは調査協力員らの協力の結果新たに絶滅の恐れがあると判明した種のほかに、環境省レッドリストにおいて選定されている種で県内にも生息している種であるが情報が不足しているもの（例えばマツ枯れ病を要因として選定されている種で近年の県内でのマツ枯れ病の発症に伴い情報収集が必要と考えられた種）など30種を追加したためである。また、2006年の初版における種選定時、県内で発行されている県産目録等により選定したが、その後、標本や文献、写真などの資料に基づいて執筆された青森県産きのこ図鑑（工藤, 2017）の出版に伴いその種の実体が不明とされているものや県内では広く分布し絶滅の恐れが無いと判断されたものなど７種について除外した。選定された種はいずれも自然環境の保全・評価上重要な指標になると考えられる。なお、微小菌類（かび・こうぼ）については一般からの生息情報が得られ難く、絶滅動向の把握が困難なため種選定の対象としていない。

（原田幸雄・工藤伸一）

②本文

チャワンタケ目　ピロネマキン科 **A**

和名　アカハナビラタケ **環境省：情報不足**
学名　*Ascosparassis shimizuensis* Kobayasi

［形態的特徴］　子実体は地中に埋まった塊状の菌組織から有柄の花びら状の子嚢盤を形成し、通常径15cm、高さ６cm位。子嚢盤は初め一つの基部から多数角状に枝分かれし、成熟して扁平不規則な直立した円筒形となり、先端部分は開いてケイトウの花びら様になる。

［選定理由］　青森市内のアカマツの枯木根際に発生しているのが唯一の生息場所として知られていたが、2006年にアカマツの腐食による倒壊後は発生が見られなくなった（工藤, 2017）。他の地域からの生息が確認されなければ消滅した可能性があり、近い将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は山形県から初めて見つかった種である（Kobayasi, 1960）が発生はきわめてまれである。本県では初夏および初秋に発生。1994年に青森市で初めて採集されたが、他の地域からの報告はない。ササとの関係が示唆されているが、本県ではアカマツ老木立ち木根際地面に発生する（工藤, 2017）。

［特記事項］　本種は *A. heinricheri*（Bres.）Pfister の異名とする意見もある（工藤, 2017）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　イッポンシメジ科 **A**

和名　タネサシヒメシロウラベニタケ **環境省：該当なし**
学名　*Clitopilus scyphoides* (Fr.) Singer f. *omphaliformis* (Joss.) Noordel.

［形態的特徴］　子実体はきわめて小型なカヤタケ型をしている。傘は通常10㎜以内、初めやや丸山形、のち開いて平らから漏斗状となる。表面は類白色でほぼ平滑であるが多少繊維状～微粉状を呈する。肉は薄く、白色。ひだは柄に垂生し、やや密、狭幅である。初め白色のちクリーム色、成熟すると多少ピンク色をおびる。柄は通常長さ１cm、幅１㎜位、中心生または偏心生で、下方に細まり、中実である。表面はやや繊維状で、白色。基部は白色菌糸に覆われる（工藤, 2017）。

［選定理由］　国内での発生地は県内の１か所に限定されているが、近年環境の悪化に伴い発生が極端に減少していることから、近い将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　1998年に本県太平洋側に所在する八戸市種差地区の芝生から初めて採集された（工藤, 2017）が、その後ほかの場所からの報告はない。初夏に芝生上に少数群生する。

［生存に対する脅威と保存対策］　場所は公共施設であるが施設利用者の歩行により生息地の芝の損傷が著しい。このことから歩行を制限するなどの対策を講じる必要がある。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　タマバリタケ科 **A**

和名　ヤチヒロヒダタケ **環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Desarmillaria ectypa* (Fr.) R.A. Koch et Aime

［形態的特徴］　中～やや大型なカヤタケ型からモリノカレバタケ型のきのこ。傘は淡黄土色で中央に微細な鱗片を密布するが、鱗片の発達は悪く、多少粘性がある。柄にはつばがない。

［選定理由］　本種は湿原などに発生する特異な性質を持っており、世界的に発生がまれで、学術的に極めて貴重なものである。本県では、湿地の減少や休耕田の宅地化など開発による生育環境の悪化で、近年発生が減少してきており、近い将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　国内とヨーロッパに分布し、ヨーロッパではアルプスの高山帯や北部高緯度地域の湿原に発生する。日本では群馬県尾瀬から報告されたが（Kobayasi, 1954）、現在、発生が確認されているのは本県と京都府だけである（工藤, 2009）。本県では秋、休耕田のようなヨシなどの茂る湿地や田の畦などに発生する（工藤・長沢, 2003）。

［特記事項］　類似種に同じくつばを欠くナラタケモドキ*Desarmillaria tabescens*（Fr.）R.A. Koch et Aimeがあるが、こちらは枯木などに生えることと、傘に粘性がないことで区別がつく。

（工藤伸一）

タマチョレイタケ目　ツガサルノコシカケ科 **A**

和名　コカンバタケ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Piptoporus quercinus* (Schrad.) Karst.

［形態的特徴］　枯木などの材に発生する中型の半円形～扇形をした褐色のきのこ。傘の裏は管孔状で白色である。地中に埋もれた基質から発生するものではしばしば極めて大型で円形の傘を形成し、中心に黒褐色の柄をつけることがある。

［選定理由］　本種は全国的に発生がまれであり。本県では２か所から見つかっているが、どちらもその後の発生は確認されていない。生育環境が限定されており、基質の老朽化により消滅するなど、近い将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本県以外では静岡県・鳥取県に採取記録がある（環境省, 2000）が、発生は極めてまれで、分布等の正確な情報は不明である。本県では初秋、ミズナラの枯木上およびクリの根際に発生し、1998年に田子町で初めて採集されたがその後の採集記録はない。また、2010年に新たに十和田市蔦の広葉樹倒木から採集された（工藤, 2018）が、その後の発生は確認されていない。

［特記事項］　本学名の菌は、今後分類学的検討が必要であるとされている（工藤, 2017）。

（工藤伸一）

タマチョレイタケ目　タマチョレイ科 **B**

和名　チョレイマイタケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Dendropolyporus umbellatus* (Pers.) Jülich

［形態的特徴］　本種はマイタケ型をした株状のきのこであり、複雑に枝分かれした柄の先端に浅い漏斗形の傘をつけ、大型になる。傘の表面は黄白色～淡きつね色で、黄褐色の鱗片を被り、裏は管孔状で柄に垂生する。柄は白色で、地中の柄の基部にはしばしば黒色、ショウガ根状の菌核をつくるが、立ち木上から発生し、地中に菌核を形成しないこともある。

［選定理由］　本種は発生環境が限定されており、発生が比較的まれな上に、菌核は乱獲されており、一旦採集されると子実体の発生が途絶えることから、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種はヨーロッパや北アメリカ、中国に分布する北方系の菌であり（今関・本郷, 1989）、国内では北海道や本州中部以北などの冷温帯地域に発生し、ややまれである（工藤, 2009）。本県では秋、ミズナラなどの樹下近くの地中の菌核または立ち木などから発生するが、採集例は比較的少ない（工藤, 2017）。

［特記事項］　菌核を猪苓（ちょれい）といい、漢方薬に用いられるため乱獲されている。

（工藤伸一）

ベニタケ目　サンゴハリタケ科 **B**

和名　フサハリタケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hericum cirrhatum* (Pers.) Nikol.

［形態的特徴］　本種は中型のハリタケ型をしたきのこである。傘は貝殻形で、通常数個の子実体が基部で癒着して重なり合う。傘の表面は粗毛状の突起で覆われ、白色～クリーム色、のち淡橙褐色を帯びる。傘裏は比較的長い針状である。

［選定理由］　八甲田と奥入瀬の渓畔林内など生息環境が限定されているが、発生がまれであり、近年温暖化など、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は北ヨーロッパやアメリカ西部などで発生が知られているが、世界的にも分布地域の限定された貴重種である。国内では本県以外ではこれまで北海道・宮城県・栃木県・埼玉県・大分県などで採集されているが、発生はまれである。本県では初秋、ブナやサワグルミなどの広葉樹の倒木などに発生し、1990年に八甲田から初めて採集されている（工藤ら, 1998）。

［特記事項］　本種は、国内では本県の八甲田から初めて採集された標本に基づいて1992年に日本新産種として報告された（長沢・工藤, 1992）。　**（工藤伸一）**

ビョウタケ目　ビョウタケ科 **B**

和名　ナガミノクロサラタケ **環境省：該当なし**
学名　*Holwaya mucida* (Schulzer) Korf et Abawi subsp. *nipponica* Korf et Abawi

［形態的特徴］　子実体は極めて小型の有柄皿状の子嚢盤を形成する。子嚢盤は肉質で初め椀形からのちほとんど平な皿型となり、通常径５㎜程度。縁は外側に屈曲する。多くは中央がくぼみ、全体帯緑黒色。柄は短く円筒形。

［選定理由］　本種は本県以外では北海道から知られているが、発生はまれである。本県では最初の採集以来発生が確認されていない。これは近年の温暖化による環境の悪化が一因と考えられ、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　北海道だけから発生が知られていた種であるが、本県では2009年の秋遅く、八甲田の田代平でブナの倒木上から初めて採集された（工藤, 2018）。北海道ではシナノキに発生するという。

［特記事項］　アメリカのKorfらによって、北海道産のものが*H. mucida*の亜種として報告されている。基本種は、胞子が短く、上下４本ずつ２束状に生じる（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

ズキンタケ目　所属科不明 **B**

和名　クロムラサキハナビラタケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ionomidotis irregularis* (Schw.) Durand

［形態的特徴］　本種は中型な花びら状をした黒褐色のきのこである。共通の短い柄と、それから発達する多数の花びら状の子嚢盤からなる。子実層面は黒褐色で、外面は暗茶褐色、粗面で細粒状。子嚢胞子は長楕円形、側糸は糸状で先端細胞が厚壁、ロケット形に膨らむ。

［選定理由］　ブナの朽ちた切り株や倒木上に発生するが、発生基質および発生環境が限定されており、近年、温暖化等により発生が減少してきているため、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　国内では鳥取県および茨城県のブナ林で発生が確認されており、北方系の種とされている（工藤, 2017）。本県では1997年に初めて十和田市（旧十和田湖町）で採集され（工藤ほか, 1998）、その後、八甲田からも見つかっている（工藤, 2018）。

［特記事項］　本種は国内では鳥取県の大山から採取された標本に基づきはじめて報告された（工藤ほか, 1994）。同属のクロハナビラタケ*I. frondosa*（Kobayasi）Korfに類似するが、同種は子嚢胞子が腸詰形、側糸は糸状で先端が鉤状である点で区別がつく（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

チャワンタケ目　ベニチャワンタケ科 **B**

和名　オオミノミミブサタケ **環境省：該当なし**
学名　*Wynnea macrospora* B. Liu et J.Z. Cao

［形態的特徴］　子実体は菌核から生じ、共通の柄から多数の縦に長いやや大型の椀状の子嚢盤を形成する。子嚢盤はウサギの耳状。盤内面は初め暗赤紫色～褐色、のち帯紫黒色。外面は顆粒状で初め暗赤褐色のち黒褐色。菌核は塊茎状、数個の塊に分かれ、表面にはいちじるしい凹凸がある。

［選定理由］　本県における生息地は観光地であり、近年の観光客の急激な増加に伴い、周辺は踏み荒らされて環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　国内では広く分布するが発生は比較的まれである。本県では初夏～初秋、ダケカンバやミズナラの樹下に発生することが知られている（工藤, 2017）。

［生存に対する脅威と保存対策］　遊歩道の整備により、環境の悪化を防ぐ対策が必要である。

［特記事項］　従来、オオミミブサタケには北米に産する*W. americana* Thaxterの学名があてられてきたが、同種は胞子がより短などの点で日本の菌とは異なり、中国から1987年に新種として報告された*W. macrospora*であるとされている（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

チャワンタケ目　セイヨウショウロ科 **B**

和名　イボセイヨウショウロ **環境省：該当なし**
学名　*Tuber indicum* Cooke et Massee

［形態的特徴］　本種は地中生で、子嚢果とよばれる小～中型をした類球形のきのこをつくる。子嚢果の表面は黒褐色で、ピラミッド型をした低い疣状の突起におおわれる。肉はかたくしまり、断面は初め類白色、のち黒色となり、大理石模様をあらわす。特有のにおいがある。

［選定理由］　本種は、本県ではクリ林から発生が確認されている。発生時期はクリ拾いの時期と一致することから、クリ拾いの一部の人たちにその存在が知られ一般に採取されるようになった。そのため、今後乱獲が進むことにより将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は秋に、ナラ林内に発生する（工藤, 2017）といわれている。本県では2016年に八戸市郊外のクリ林から採取されているが、現在確認されている発生場所はその１か所だけである。秋～初冬に発生するが、春にも越冬したと思われる子実体が見られる（工藤, 2018）。

［特記事項］　本種は欧州で三大珍味として珍重されているトリュフの一種で、いわゆる黒トリュフといわれているきのこの仲間のため、近年採取する人たちが増えている。　**（工藤伸一）**

ボタンタケ目　ボタンタケ科 **B**

和名　イマイオオボタンタケ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Hypocrea cerebriformis* Berk.

［形態的特徴］　子実体は小型の平たいクッション状の子座を形成し、裏面は一部で基物に付着する。子座は表面はほぼ平滑、淡褐色～橙色、成熟したものでは放出された胞子で白い粉状となる。裏面は放射状の皺があり褐色、ほぼ中央で円錐状に突き出して柄状になり、暗褐色。内部は赤褐色をおび、かたくしまった肉質。子嚢胞子は微細な突起で覆われ、初め８個の胞子をつくるが、成熟すると隔壁部で２つに別れ16胞子となる。

［選定理由］　近年発生していたブナの倒木は朽ちてその後は見つかっていない。生育環境が限定されており、近年の温暖化も一因と考えられ、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　国内では本県を含む北日本で知られているが、発生は比較的まれである。本県では秋に、十和田市（旧十和田湖町）のブナ倒木上から見つかっている（工藤, 2018）。

［特記事項］　オオボタンタケの和名は異なった２種に対して付けられていることから、本種にたいしては新たにイマイオオボタンタケが提唱されている（長澤, 2015）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　ヌメリガサ科 **B**

和名　ナナイロヌメリタケ **環境省：該当なし**
学名　*Gliophorus laetus* (Pers.) Herink

［形態的特徴］　本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこ。傘は初めまんじゅう形、のち開いて平たい丸山形、中央はくぼむ。表面は初め肌色またはピンク色にオリーブ色、黄色、灰紫色などを交える。湿時放射状の条線があり、著しい粘液に覆われる。ひだは垂生し、疎、ピンク色～肌色で、しばしば淡紫色～淡青色を交える。縁は粘性をおびる。柄は細長く、上下同幅、中空。表面は粘液に覆われ、上部はピンク色、淡紫色または淡青色。下部は帯黄色。

［選定理由］　本種は乾燥に弱く、近年の温暖・乾燥化によって発生が減少している。さらにスギ林の老朽化により環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　全国的に分布するが、発生はまれ。本県では秋に草地に発生し、2004年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて採集された（工藤, 2004）が、ほかからの報告はない。

［特記事項］　県内からは、2004年に本種に類似して全体が黄色のものが採集されているが、これはしばしば本種の変種として取り扱われている（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　ホウライタケ科 **B**

和名　ミヤマシメジ **環境省：該当なし**
学名　*Hydropus nigrita* (Berk. et Curt.) Sing.

［形態的特徴］　本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこ。傘は初め円錐形、のち開いて中高の円錐状丸山形、周辺は多少反り返る。表面は繊維状、灰色～帯褐灰色、触れたり老成すると黒く変色する。肉は薄く、淡灰色、のち黒く変色する。ひだはほぼ離生、やや疎、白色、傷つけると黒く変色する。柄は細長く、基部で多少膨らむ。表面は傘より淡色で、傘と同様に変色する。

［選定理由］　本種は生育環境が限定しており、乾燥に弱く、近年の温暖・乾燥化によって発生が減少している。さらにスギ林の老朽化により環境が悪化してきており、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　全国に広く分布するが発生は比較的まれ。本県では秋にスギの腐朽材上に発生し、2004年に十和田市（旧十和田湖町）のスギ林から初めて採集された（工藤, 2018）が、近年、発生が減少してきており、他の生息地も確認されていない。

［特記事項］　従来本菌に当てられていた学名*Lyophyllum nigrescens* Hongoは本種の異名。新分類体系では、ニセアシナガタケ属はホウライタケ科に置かれている（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **B**

和名　ヤマドリタケ **環境省：情報不足**
学名　*Boletus edulis* Bull.

［形態的特徴］　本種は中～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は栗褐色で無毛平滑、幼時から湿っているとき多少粘性がある。肉は厚く、緻密で極めて堅い。柄は太くて堅く、表面は淡色で、白色のやや細かい網目模様があるが、下方ではしばしば不明瞭。

［選定理由］　本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれで近年発生が見られなくなっていることから、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は夏～秋に、針葉樹（主にトウヒ属）の樹下に発生するといわれており、国内では本県以外に北海道から発生が知られている（工藤, 2009）。本県では1997年に八甲田のエゾマツ林から初めて採取された（工藤, 2017）が、近年発生が見られなくなってきた。

［特記事項］　本種に類似した種としてヤマドリタケモドキ*B. reticulatus* Schaeff.のほか数種が存在し、しばしばそれらと混同されている。 **（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **B**

和名　ドクヤマドリ **環境省：該当なし**
学名　*Boletus venenatus* Nagasawa

［形態的特徴］　本種は大～極めて大型のイグチ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で初め多少ビロード状を呈するが、のち湿っているとき多少粘性がある。肉に弱い青変性があり、切断すると肉が青く変わる性質がある。柄は汚黄色で赤褐色点状の染みがある。有毒種である。

［選定理由］　本種は、本県ではエゾマツ林だけから発生が確認されている。本県のエゾマツ林は分布が限定されていることから本種の発生地域も限定されており、発生も比較的まれで、近年発生が見られなくなってきたことから、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は国内では本州の亜高山地帯及び北海道のエゾマツやトドマツなどの針葉樹の樹下に発生することが知られている（Nagasawa, 1995）。本県では1996年に八甲田で初めて採集された（工藤, 2017）が、近年発生が見られなくなってきた。

［特記事項］　本種の形態的特徴の一つとして肉の青変性が挙げられているが、本県産の子実体では肉の青変性は極めて弱い。 **（工藤伸一）**

タバコウロコタケ目　タバコウロコタケ科 **B**

和名　カバノアナタケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Inonotus obliquus* (Ach.ex Pers.) Pilát

［形態的特徴］　本種は背着生の大型な多孔菌型をしたきのこである。黄褐色の子実体と黒い菌核からなるが、黒色の菌核が巨塊となって樹幹の樹皮を覆うため、見える部分は菌核部分である。子実体の表面は黄褐色～褐色、堅いコルク質、充実して重い。全面に管孔を密布し、暗褐色。

［選定理由］　本種は全国的に分布し、カンバ類の樹木に普通に発生が見られるが、生育環境が基質により限定されている上に、菌核が乱獲されているため減少してきている。本県でも同様に菌核が乱獲されており、将来県内での絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は主に高山地帯に分布するカンバ類の樹木に普通に発生し、全国的に見られる。本県ではダケカンバの立ち枯木や倒木上に発生するが、一般に採取されてしまうことから、なかなかその存在を把握できなかったものの、近年になってようやく確認された。

［特記事項］　堅くて食用に適さないが、菌核が漢方薬として利用されることから、菌核が採取対象とされているため、見つけるのは容易でない（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

ビョウタケ目　キンカクキン科 **C**

和名　ツバキキンカクチャワンタケ **環境省：該当なし**
学名　*Ciborinia camelliae* Kohn

本種は菌核から発生する小型な浅い椀形～皿形をしたきのこである。全体に淡褐色～褐色を帯び、短いあるいは長い柄をもつ。ツバキの病害菌の一つで、ツバキの花びらに本菌の胞子が付着して感染し、のちに落下した花の花弁は菌核化して土に埋まり、それから翌年の春に子嚢盤が生じることから、発生地域はツバキ林内に限定されている。県内のツバキの自生は夏泊半島が北限であり、そこのヤブツバキに発生するものが北限とされている（工藤, 2009）が、近年、発生が減少してきている。今後、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、早春、ヤブツバキの樹下に発生し、平内町と青森市の郊外で発生が知られている（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

チャワンタケ目　アミガサタケ科 **C**

和名　トガリフカアミガサタケ **環境省：情報不足**
学名　*Morchella patula* Pers. var. *semilibera* (DC.) S. Imai.

本種は中～やや大型な有柄傘状のきのこである。傘はほぼ卵形で頂端は尖り、下縁部は頭部の中央付近まで柄から離れる（帽子状型）。表面はオリーブ褐色をしており、網目状の隆起で覆われる。本種は全国的に発生がまれで本県でも採集例は青森市内から採集された１件だけであり、発生環境も限定されているため、開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は国内のほかに北アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリアに分布し、国内では北海道と本州に分布するといわれている（今関・本郷, 1989）が、採集記録は少ない。本県では、1990年に青森市内から初めて採集された（工藤, 2017）が、その後の採集例はない。 **（工藤伸一）**

チャワンタケ目　アミガサタケ科 **C**

和名　オオズキンカブリ **環境省：情報不足**
学名　*Ptychoverpa bohemica* (Krombh.) Boud.

本種は中～大型な有柄で深編笠形の傘をもつきのこである。傘は釣鐘形で柄に深くかぶさり、表面に著しい縦じわがあり、褐色。柄は長円筒形で白色である。従来北海道からしか報告がなかったが、近年、本県からも採集されている。発生場所が限られており、発生もまれであるため、温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では早春、ヤマザクラ等の雑木林内の地面に発生し（工藤, 2018）、1990年に青森市の山林から初めて採集されている（工藤ら, 1998）。その後、蟹田町からも採集されているものの、ほかからの報告はない（工藤, 2018）。本種は子嚢胞子が通常２個しか形成されない特異な性質を持つ。 **（工藤伸一）**

チャワンタケ目　チャワンタケ科 **C**

和名　スナヤマチャワンタケ **環境省：該当なし**
学名　*Peziza ammophila* Durieu et Montagne

子実体は大部分が砂に埋もれ、小～やや中型の有柄椀状の子嚢盤を形成する。子嚢盤は初め倒洋ナシ形、のち頂部が開口し、深い椀形、縁部は不規則で、しばしば切れこむ。椀の内側は淡褐橙色。外側はより淡色。柄は柱状。海岸の砂浜に埋もれて発生し、全国的に分布するが発生はまれである。近年の護岸工事の増加に伴い良好な砂浜が減少してきており、開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は国内では1981年に新潟県内の砂丘から初めて採集されているが、発生は比較的まれである。本県では秋～初冬、砂浜の波打ち際にほぼ砂に埋もれた状態で発生し、2007年に初めて三沢市海岸の砂浜から採集されている（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

チャワンタケ目　ベニチャワンタケ科 **C**

和名　シロキツネノサカズキ　**環境省：該当なし**
学名　*Microstoma floccosum* (Schw.) Raitviir

本種は小型のワイングラス形をしたきのこである。初め球形、のち頂部が開き、ついにはワイングラス形となる。内面は深紅色であるが、外面と柄は白い毛を密生する。発生地が限定されていることから、近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は全国的に分布するが、従来、類似のシロキツネノサカズキモドキ*Microstoma macrosporum*（Otani）Y. Hrada et S. Kudoと混同されてきており、正確な分布は不明である。本県では初夏、湿り気のある林内の落ち葉に半ば埋もれた落枝上に発生する（工藤, 2017）が、本県における採集記録は十和田市（旧十和田湖町）の山林における２例だけであり、その後の採集例はない（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

チャワンタケ目　ベニチャワンタケ科 **C**

和名　ミミブサタケ　**環境省：該当なし**
学名　*Wynnea gigantea* Berk. et M.A. Curtis

子実体は菌核から生じ、共通の柄から多数の縦に長いウサギの耳状の子嚢盤を形成する。子嚢盤の内側の子実層面は初め淡褐色～レンガ色のち暗赤褐色。外面は初め内側と同色、のち赤褐色、縦じわがある。柄の基部は土に埋まったショウガの根のような黒褐色の菌核につながる。里山二次林の雑木林に多く見られ全国的に分布するが、発生は比較的まれである。近年の温暖化や里山二次林の放置、開発による雑木林の伐採など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では春～秋、ミズナラなどの雑木林内の地面に発生するが、近年採集報告がない。ナラタケ類と密接な関係があるといわれている（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

チャワンタケ目　クロチャワンタケ科 **C**

和名　キツネノサカズキ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Galiella japonica* (Yasuda) Otani

本種は小～やや中型の黒色椀状のきのこである。短い柄をもち、初め黒色の洋梨形の状態から開いて椀形になり褐色の子実層面をあらわす。盤の縁はやや深く星形に裂ける。本種は発生がまれであり、発生環境も限定されているため開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は日本固有種で、岩手県から1918年に発見された標本に基づき新種記載された。その後、60年ぶりに鳥取県・新潟県から相次いで発見され（大谷, 1982）、石川県からも発生が確認されている。本県では初夏、アカマツ林内の地面に発生し、1991年に青森市内の郊外から初めて採集されたが、その後、東通村からも採集されている（工藤, 2018）。　**（工藤伸一）**

ボタンタケ目　ボタンタケ科 **C**

和名　カエンタケ　**環境省：該当なし**
学名　*Podostroma cornu-damae* (Pat.) Boedijn

本種は中～大型の棒状～角状あるいは鶏のとさか状をした子座を形成するきのこである。全体赤橙色で、肉質は堅い。極めて強い毒性をもつ。全国的に分布するが、発生は比較的まれである。発生環境が林相によって限定されているが、発生場所が限られ、発生も比較的まれである。近年のナラ枯病などにより環境が悪化してきており、環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、夏～初秋、ブナ・ミズナラなどの広葉樹林内の地面に発生し（工藤, 2017）、1992年に旧上北町で初めて採集されているが、その後同地区での採集報告はない。岩木山麓でも見つかっているとされているが、詳細は不明である（工藤ら, 1998）。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　ハラタケ科 **C**

和名　シワカラカサモドキ **環境省：該当なし**
学名　*Cystoderma neoamianthinum* Hongo

本種はやや中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は黄色で黄土色の粒状細鱗片を密生し、柄に幅が狭く脱落しやすいつばをつける。分布上学術的に貴重な種であるが、発生環境が限定され、発生はまれである。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生する（工藤, 2017）。本種は国内で新種報告された種で（今関・本郷, 1987）、少なくとも全国のブナ林に広く分布すると思われるが、ほかの類似種と間違って紹介されている例が見られ、正確な分布情報は不明である。本県では、これまで十和田市（旧十和田湖町）からの採集記録があるが、近年、採集例は減少している（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　テングタケ科 **C**

和名　コササクレシロオニタケ **環境省：情報不足**
学名　*Amanita squarrosa* Nagasawa et Hongo

本種は小～中型のウラベニガサ型をしたきのこ。全体白色で、傘の表面には柔らかい綿質で破片状～いぼ状の脱落しやすい鱗片を多数付ける。日本固有種で、国内では本県・滋賀県・鳥取県で発生が知られている（環境省, 2010）が発生はまれである。近年、雑木林の伐採や下草の放置などによって発生環境が悪化しており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、青森市郊外のミズナラ雑木林内での発生が確認されている（工藤, 2017）。ササクレシロオニタケ*A. eijii* Zhu L. Yaugに類似するが、同種はより大型で、傘の中央が褐色を帯びる点で異なる。

（工藤伸一）

ハラタケ目　フウリンタケ科 **C**

和名　ニカワウロコタケ **環境省：該当なし**
学名　*Gloeostereum incarnatum* S. Ito et S. Imai

本種は中～やや大型の多孔菌型をした膠質のきのこである。傘は半円形で短毛に覆われ淡鮭肉色。傘裏は細かいしわ状。生のときは軟らかく、乾けば収縮して軟骨状に堅くなる。本種は従来北海道だけに知られていたきのこであるが、その後、国内の亜高山地帯にも発生することが分かった（今関・本郷, 1989）。発生基質や発生環境が限定されており、本県では採集例は減少してきている。発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、ハルニレやイタヤカエデの枯れ木上に発生し（工藤, 2017）、十和田市（旧十和田湖町）の渓畔林から採集されている。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ヌメリガサ科 **C**

和名　ウスムラサキガサ **環境省：該当なし**
学名　*Hygrocybe canescens* (A.H. Smith et Hesler) P.D. Orton.

本種は小～やや中型のカヤタケ型をしたきのこである。全体帯紫淡灰色で、傘の表面はフェルト状。湿り気のあるスギ林など発生環境が限定されているが、国内では採集例が少なく、分布上学術的に貴重な種である。近年、スギの枝払い後の枝の放置のため枝が堆積するなど環境が悪化して発生が減少してきており、生息地の環境の変化によっては更なる減少が危惧されることから、県内での絶滅が心配される。本種はアメリカ及びヨーロッパ（イギリス・スウェーデン）に分布するが、ヨーロッパでは極めて発生がまれな種とされている。国内では、現在本県からのみ発生が知られており、県内では青森市郊外のスギ林内の草地に発生する（工藤, 2017）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ヌメリガサ科 **C**

和名　ダイダイヌメリガサ **環境省：該当なし**

学名　*Hygrophorus aureus* (Arrh.) Fr.

本種は小～中型のキシメジ型～カヤタケ型をしたきのこである。傘は粘液に覆われシモフリヌメリガサ*H. hypothejus* (Fr.) Fr.に類似するが、傘は橙色であることで異なる。比較的若いアカマツ林に発生するなど、発生環境が限定されており、マツ枯れ病による環境の変化によって減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種はヨーロッパなどで発生が知られているが、現在、国内からは本県以外正式な報告はない。この原因としては、類似種と混同されている可能性も否定できない。本県では晩秋～初冬、アカマツ林内の地面に発生し、八戸市および青森市郊外に発生することが知られている（工藤, 2018）が、近年、発生が見られなくなってきている。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　ヌメリガサ科 **C**

和名　アケボノタケ **環境省：該当なし**

学名　*Hygrocybe calyptriformis* (Berk.et Br.) Fayod.

本種は中型のクヌギタケ型で、淡いバラ色～ライラック色をしている綺麗なきのこである。傘は広円錐形、表面にはほとんど粘性がない。全国的に広く分布するが、発生は比較的まれである。本県では発生地が限定されており、発生は比較的まれで、乾燥に弱いため、近年の温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、林内のコケ類が繁殖しているような草地に発生する（工藤, 2017）。1995年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて確認され、その後、青森市郊外（工藤, 2018）や2018年の現況調査で八戸市郊外の芝生から見つかっているものの採集例が少なく、青森市郊外の生息地では年々発生が減少してきている。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　ヌメリガサ科 **C**

和名　トガリワカクサタケ **環境省：該当なし**

学名　*Hygrocybe olivaceoviridis* (Hongo) Hongo f. *olivaceoviridis*

本種は中型のクヌギタケ型で、傘が円錐形、しばしば中央に乳頭状突起がある。表面はオリーブ緑色で粘性なく、繊維状。ひだは柄に短く垂生し、橙黄色。柄には粘性はない。乾燥に弱いため、近年の温暖化による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県以外では滋賀県、香川県で知られている（今関・本郷, 1987）が、発生はまれである。本県では初秋、ブナ・ミズナラ林内に発生し、2016年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて見つかっているが、その後の採集例はない（工藤, 2018）。ワカクサタケ*H. psittacina* (Schaeff.) Wunscheは傘の色で類似するが、同種は傘・柄とも著しい粘性があることで区別ができる。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　シメジ科 **C**

和名　シロタモギタケ **環境省：情報不足**

学名　*Hypsizygus ulmarius* (Bull.) Redhead

本種は中～大型のキシメジ型～ヒラタケ型をしたきのこ。傘は淡黄褐色で表面は内生繊維状である。本種は主に渓畔林に発生するなど、発生環境が限定されているが、温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ハルニレやサワグルミなどの枯れ木または立ち木に発生し（工藤, 2017）、発生が確認されているのは現在青森市および五所川原市、十和田市（旧十和田湖町）の３か所である（工藤, 2018）。国内では本県以外に北海道と鳥取県から報告があるが、発生はまれである。従来ブナシメジ*H. marmoreus* (Peck) Bigelowと混同されてきた（長沢・有田, 1988）が、同種では傘に大理石模様があることで区別できる。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　シメジ科 **C**

和名　ホンシメジ **環境省：該当なし**
学名　*Lyophyllum shimeji* (Kawamura) Hongo

本種は中～大型で厚肉なキシメジ型をしたきのこである。傘は淡灰褐色または暗灰褐色、柄は太く白色で、しばしば株状に生える。全国的に広く分布し、古くから味シメジといわれ重宝されてきたが、生育環境が限定されているため発生は比較的まれである。本県では夏～秋、ミズナラ林またはアカマツ・ミズナラなどの混交林内に発生する（工藤, 2017）が、近年、発生が減少してきている。温暖化やミズナラ雑木林の伐採などにより良好な里山二次林が減少してきており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。傘の色により黒と白の２タイプがありどちらも同一種とされてきたが、近年の研究では２系統があることが報告されている（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　シメジ科 **C**

和名　ヒメムラサキシメジ **環境省：該当なし**
学名　*Rugosomyces ionides* (Bull.) Bon

本種は小型のキシメジ型をしたきのこである。傘および柄は紫色、ひだは密で白色、柄は繊維状でささくれる。本種は全国的に分布するが発生は比較的まれである。発生環境が限定されており、近年の温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、初秋、針葉樹林樹下の地面に発生する。1998年に八戸市郊外の針葉樹の樹下から初めて採集され、その後青森市郊外からも見つかったが、発生はまれであり（工藤, 2018）、最初に発見された八戸市郊外ではその後の発生は見られない。コムラサキシメジ*Lepista sordida* (Schumach.) Singerに類似するが、同種はひだも紫色をしていることで区別ができる（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　ホウライタケ科 **C**

和名　オドタケ **環境省：該当なし**
学名　*Clitocybula esculenta* Nagasawa et Redhead.

本種は中～大型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は粘土色で古くなると黒っぽくなる。柄は長く、束になって生える。本種は発生環境が渓畔林などに限定されており、発生も比較的まれで、温暖化や開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は1998年、本県産標本に基づき新種報告されたきのこであり（Nagasawa and Redhead, 1988）、国内では本県以外に北海道・長野県・栃木県・群馬県など発生地は広範囲に及ぶものの、発生は比較的まれである。本県では秋、ブナ・ミズナラ・ハルニレ・トチノキなどの腐朽材上に発生し、従来からオドタケの名前で食用に利用されていた（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　タマバリタケ科 **C**

和名　キノボリツエタケ **環境省：該当なし**
学名　*Ponticulomyces kedrovayae* R.H. Petersen

本種は中型のモリノカレバ型～多少キシメジ型。傘は初め丸山形、のちほぼ平らに開く。表面は帯茶褐色、平滑、湿時粘性がある。ひだは上生～多少湾生、淡黄白色。本種は全国的に発生がまれで、発生環境が限定され、分布上学術的に貴重な種である。近年の温暖化などの環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生し（工藤, 2017）、2003年に八甲田田代平で初めて採集されている（工藤, 2018）。その後、十和田市（旧十和田湖町）の渓畔林からも採集されたが、発生は比較的まれである。本種は胞子の大きさが15～21×10～12μmと大形であることで、他の種類とは区別がつきやすい。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　タマバリタケ科 **C**

和名　ホシアンズタケ **環境省：該当なし**
学名　*Rhodotus palmatus* (Bull.) R.Maire

本種は小～中型のキシメジ型をした全体が淡紅色のきのこである。傘の表面は初め網目状のしわをあらわし、柄に褐色の分泌物を付着する。本種は１属１種のきのこで、分布上学術的に貴重な種である。北海道だけから知られていたが、近年、本県ほか北日本各地でも見られるようになったものの、全国的には発生はまれ。発見例が少なくなってきており、発生環境が限定されているため温暖化など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、春および秋、ハルニレの枯れ木や倒木などの腐朽木上に発生する（工藤, 2017）。1989年に十和田市（旧十和田湖町）から初めて発見され、その後、五所川原市からも採集されている（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ヒラタケ科 **C**

和名　ツバヒラタケ **環境省：情報不足**
学名　*Pleurotus dryinus* (Pers.) Kummer

本種は大型で厚肉なヒラタケ型をしたきのこである。傘は淡黄褐灰色で、幼時、柄に薄い膜質のつばをもつ。国内では北海道だけから知られていた種（今関・本郷, 1987）であったが、近年、本県をはじめ各地で見つかっているものの発生はまれである。発生基質及び発生環境が限定されているため、温暖化などによる環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、渓畔林のハリギリなどの広葉樹の立ち木に発生し、1992年に旧十和田湖町から初めて採集されているが、その後、各地のりんご畑のリンゴの立木からもしばしば採集されている（工藤, 2018）。ヒラタケ属*Pleurotus*に所属するが、柄につばをもつという他の種とは異質な特徴がある。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ウラベニガサ科 **C**

和名　キヌオオフクロタケ **環境省：情報不足**
学名　*Volvariella bombycina* (Schaeff.) Sing.

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘の表面は類白色、絹糸状の毛で密に覆われ、柄の基部には黄褐色の膜質袋状の大きなつぼがある。本種は全国的に分布するが、発生は比較的まれで、分布上学術的に貴重な種である。発生環境が限定されており、発生はまれであることから、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、広葉樹の立ち木や枯木に発生する（工藤, 2017）。下北や十和田市（旧十和田湖町）の渓畔林で発生が知られているが、2005年に確認された十和田市（旧十和田湖町）では、その後の発生の情報はない（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　キシメジ科 **C**

和名　ツノシメジ **環境省：該当なし**
学名　*Leucopholiota decorosa* (Peck) O.K. Miller, Volk et Bessette

本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は褐色で全体ささくれ、特に中央は角状突起に覆われる。北方系の種で国内では本県のほかに、中部地方の山間部で発生が知られているが、比較的まれである。分布上学術的に貴重な種であり、温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、ブナの倒木上に発生する（工藤, 2017）。北アメリカなどに分布する種で、*Leucopholiota*（ツノシメジ）属の新組み合わせとして発表された（Miller *et al*., 1996）。国内では1989年に十和田市（旧十和田湖町）から県内で初めて採集されている（工藤, 2018）。

（工藤伸一）

ハラタケ目　キシメジ科 **C**

和名　バカマツタケ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Tricholoma bakamatsutake* Hongo

本種は中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は栗褐色でマツタケ*T. matsutake* (S. Ito et S. Imai) Sing. に酷似し、特有の香気をもつ。本種は全国的に広く分布し、環境の良いミズナラなどの里山二次林に見られるが、発生地はある程度限定され、発生も比較的まれである。本県では初秋、里山のミズナラ・カシワの雑木林内に菌輪をつくって発生する（工藤, 2017）が、近年の開発による雑木林の伐採や下草の放置などによって発生環境が悪化しており、また、本種はマツタケに極めて似ているところから、乱獲のため減少している。環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県産標本に基づき新種記載された種である（本郷, 1974）。 **（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **C**

和名　アカジコウ **環境省：該当なし**
学名　*Boletus speciosus* Frost

本種は大型のイグチ型をしたきのこである。傘はバラ紅色でときに青色の染みを生じ、平滑で湿っているとき多少粘性がある。肉には弱い青変性がある。傘裏は管孔状で淡黄色、傷を付けると青く変色する。柄は淡黄色で細かい網目に覆われる。全国的に広く分布し、里山二次林のミズナラなどの雑木林に多く見られるが、近年の里山二次林の放置や、開発による伐採で環境が悪化しており、今後の温暖化による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、里山のアカマツの交じったミズナラなどの雑木林に発生する（工藤, 2017）が、発生は比較的少なく、近年は発生が減少してきている（工藤, 2018）。 **（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **C**

和名　ムラサキヤマドリタケ **環境省：該当なし**
学名　*Boletus violaceofuscus* Chiu

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘、柄とも暗紫色を帯び、傘はしばしば黄色、オリーブ色、褐色などの斑紋を生じ、柄は網目模様で覆われる。本種は全国的に広く発生するが、本県を含め北日本では発生は比較的まれである。本県では発生地が限定されており、近年の温暖化や里山二次林のミズナラ雑木林の伐採などの環境の悪化により、近年発生減少の傾向が見られる。環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、アカマツが交じったミズナラ林に発生するが、発生は比較的まれである。なお、八甲田からは本種に類似して傘の色が淡色のウスムラサキヤマドリ*B. separans* Peckが知られている（工藤, 2017）。 **（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **C**

和名　アカエノキンチャヤマイグチ **環境省：該当なし**
学名　*Leccinum aurantiacum* (Bull.) S.F. Gray

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘は橙茶褐色で多少綿毛状。傘の縁には垂れ下がった縁膜片がある。柄の表面は汚黄白色の地に、淡茶褐色の粒状～ささくれ状の細鱗片を密生する。発生環境が限定されており、発生はまれで、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初夏に、ヤマナラシの樹下に発生する（工藤, 2017）が、本県以外での分布は不明。本県での採集記録は1989年に青森市郊外から採集された１例だけであり、その後の採集報告はない（工藤, 2018）。キンチャヤマイグチ*L. versipelle* (Fr.) Snellに類似するが、同種は傘がほぼ平滑で柄の鱗片は黒褐色である点で異なる。 **（工藤伸一）**

イグチ目　オウギタケ科 **C**

和名　フサクギタケ **環境省：該当なし**
学名　*Chroogomphus tomentosus* (Murr.) O.K. Miller

本種は小～中型のカヤタケ型をしたきのこである。クギタケ*Chroogomphus rutilus* (Schaeff.) O.K. Millerに類似するが、全体鈍い橙色または黄土色で傘の表面は軟毛で覆われる。本種はマツ属・モミ属・ツガ属などの針葉樹林に発生し（今関・本郷, 1987）、全国的に分布するものの、発生はまれである。分布上学術的に貴重な種であるが、発生がまれなため採集例が少なく、発生環境が限定されており、温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、アオモリトドマツ林内に発生し（工藤, 2017）、八甲田からの採集例が１例あるだけで、その後の採集報告はない（工藤, 2018）。 **（工藤伸一）**

ハラタケ目　クリイロイグチ科 **C**

和名　アイゾメイグチ **環境省：該当なし**
学名　*Gyroporus cyanescens* (Bull.) Quél.

本種は小～中型のイグチ型をしたきのこである。傷を受けると直ちに濃紺色に変色する。傘は淡黄色でフェルト状。本種は西日本で知られていたきのこであるが、近年、本県のほかにも報告されており、全国的に分布することが分かった。発生は比較的まれであり、分布上学術的に貴重な種であるが、近年、本県からの報告はない。温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、マツの交じった林内の地面に発生し（工藤, 2017）、1995年に青森市の郊外から初めて採集されているが、現在、発生が確認されている場所はこの１か所だけであり、ほかからの採集報告はない（工藤, 2018）。 **（工藤伸一）**

イグチ目　ヌメリイグチ科 **C**

和名　キヌメリイグチ **環境省：該当なし**
学名　*Suillus americanus* (Peck) Snell

本種は中～大型のイグチ型をしたきのこである。傘は円錐状まんじゅう形からほぼ平らに開く。表面は黄色～淡灰褐色、粘性があり、圧着した帯褐色の鱗片を散在する。傘の下面は淡黄色の膜で覆われるが、のち破れて縁に垂れ下がる。本種は５針葉マツと菌根関係にあり、発生環境が限定されている。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初秋、キタゴヨウマツの樹下に発生し、北海道だけから知られていたが、2009年に青森市郊外でも見つかった（工藤, 2017）。青森市の発生地では樹木の伐採により消滅した（工藤, 2017）が、2018年の現況調査により、八戸市の郊外でも発生が確認されている。 **（工藤伸一）**

イグチ目　ヌメリイグチ科 **C**

和名　ヒメヌメリイグチ **環境省：該当なし**
学名　*Suillus viscidipes* Hongo

本種は小型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は凹凸状、肉桂色で粘性があり、柄は細長く、早落性のつばをつける。管孔や肉等には変色性はない。本種は日本固有種とされ、里山二次林に多く見られ、分布上学術的に貴重な種である。里山二次林であるミズナラ雑木林の伐採や放置により減少してきており、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。国内では北海道から本州まで広く分布している（工藤, 2009）が、発生が比較的まれなため採集例も少ない。本県では夏～初秋、アカマツが交じったミズナラ雑木林内の地面に発生し、青森市の郊外で採集されている（工藤ら, 1998）。 **（工藤伸一）**

ラッパタケ目　ラッパタケ科 **C**

和名　ホウキタケ **環境省：該当なし**
学名　*Ramaria botrytis* (Pers.) Ricken

本種は中～大型のサンゴ型をしたきのこである。全体ワイン色で、太い白色の柄から上方に枝を分け、先端は淡紅紫色のハナヤサイ状となる。全国的に広く分布し、里山二次林の雑木林で多く見られるが、ミズナラ雑木林の伐採や放置による環境の悪化で発生減少の傾向が見られ、環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では秋、里山二次林のミズナラなどの雑木林に発生する（工藤, 2017）が、近年、発生が減少してきている。なお、近年の分類学的研究では国内で本種といわれている菌には複数の種が混同されている可能性があるとされており（工藤, 2017）、県内産も検討の必要がある。 **（工藤伸一）**

タバコウロコタケ目　タバコウロコタケ科 **C**

和名　ニクウスキコブタケ **環境省：該当なし**
学名　*Phellinus acontextus* Ryv.

本種は小～中型の多孔菌型をした多年生のきのこである。子実体は無柄。傘は半円形。表面は茶褐色、多数の環紋をあらわす。肉は極めて薄く木質。子実層托は管孔状で長く、傘の断面のほとんどを占める。ブナの立ち木の損傷部分に多数重なって発生するが、発生基質および発生環境が限定され、全国的にも発生はまれである。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本種は十和田市（旧十和田湖町）から採集された標本に基づき日本新産種として報告されている（工藤, 2017）が、本県で発生が知られているのはこの１例だけで、ほかからは見つかっていない（工藤, 2018）。 **（工藤伸一）**

スッポンタケ目　スッポンタケ科 **C**

和名　アカダマキヌガサタケ **環境省：該当なし**
学名　*Phallus rubrovolvatus* (M. Zang, D.G. Jia et X.X. Lin) Kroisel

本菌は幼時赤褐色の卵形で、成熟すると裂開して中から円柱状の先端に釣鐘形の頭部つけた白い柄をのばす大型のきのこである。頭部の表面は網目状で、暗緑色グレバをつけ、裏面から大きな網目のレース状の白いマントを柄の2/3程度まで垂らす。全国的に分布するが、発生環境が限定されており、発生は比較的まれである。本県では八戸市の郊外から初めて採集されたが、その後発生地は宅地化され消滅した。近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。初夏、笹の茂った林道脇に発生し（工藤, 2017）、八戸市で知られていた以外、ほかからの採集報告はない（工藤, 2018）。 **（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　ツガサルノコシカケ科 **C**

和名　カンバタケ **環境省：該当なし**
学名　*Piptoporus betulinus* (Bull.) Karst.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は腎臓形でくぼんだ位置に太くて短い柄をつけるが、ときに半円形で柄は痕跡的である。表面は淡褐色でなめし革のような感触があり、傘裏は微細な管孔状である。本種は全国的に分布し、亜高山のカバノキ林で発生が見られる（今関・本郷, 1989）が、本県では2004年に八甲田のダケカンバ林から初めて採集された（工藤, 2018）。発生基質および発生環境が限定されており、発生も比較的まれであることから、環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では夏～秋、ダケカンバの枯れ木または生木上に発生する（工藤, 2017）が、2018年の現況調査ではヤマザクラにも発生することが分かった。 **（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　タマチョレイタケ科 **C**

和名　ツガノマンネンタケ　**環境省：該当なし**
学名　*Ganoderma tsugae* Murrill

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は扇形～じん臓形で、表面は初め黄色、しだいに赤褐色からほとんど黒くなり、ニス状の光沢があり、環紋をあらわす。本種は山岳地帯や北方に多く分布し、モミ・ツガなどの針葉樹の枯木や倒木上に発生する。発生環境が限定され、比較的発生がまれであり、分布上学術的に貴重な種である。近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では夏～秋、アオモリトドマツの立ち木や倒木などに発生する（工藤, 2017）が、採集例は少ない。マンネンタケ*G. lucidum* (Leyss.) P. Karst.に類似するが、同種は広葉樹の根際に発生し長く発達した柄をつくることで区別ができる。　**（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　タマチョレイタケ科 **C**

和名　ニオイカワキタケ　**環境省：該当なし**
学名　*Lentinus suavissimus* Fr.

本種は小型のカヤタケ型をしたきのこである。子実体はサンショウに似た特有の香りをもつ。傘の表面は卵黄色で無毛平滑である。国内では本県のほかに、静岡県・鳥取県で発生が確認されている（今関・本郷, 1987）が、発生は極めてまれである。本県では初秋、ミズナラの枯木に発生する（工藤, 2017）。発生環境が限定されており、採集報告は極めて少ないことから、近年の温暖化など環境の変化によっては減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県ではこれまで青森市郊外の山林で発生が確認されているが、現在、他の地域からの採集例がない（工藤, 2018）。従来、ヒラタケ科カワキタケ属*Panus*に置かれていたが、近年、ケガワタケ属*Lentinus*に置かれている。

（工藤伸一）

ベニタケ目　ニンギョウタケモドキ科 **C**

和名　ニンギョウタケ　**環境省：情報不足**
学名　*Albatrellus confluens* (Alb. et Schw.) Kotl. et Pouz.

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。有柄で共通の根もとから肉質でクリーム色扇形の傘を多数生じ、傘裏は管孔状である。本種は全国的に分布し、アカマツやキタゴヨウマツまたはしばしばモミやトウヒなどの針葉樹に発生する（今関・本郷, 1989）。本県ではアカマツ林から採取されているが、発生はまれであり、近年の松枯れ病の拡大など環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では、秋、アカマツ林内の地面に発生し、2005年に大鰐町の山林から採集されるまでは長らく見つかっていなかったものである。その後の採集報告はなく、現在知られているのはそのときの１例だけである（工藤, 2018）。　**（工藤伸一）**

シロキクラゲ目　シロキクラゲ科 **C**

和名　シロキクラゲ　**環境省：該当なし**
学名　*Tremella fuciformis* Berk.

本種は中～やや大型で、重なり合った花弁状のきのこである。子実体は樹皮の裂け目から発生し、不規則なとさか状裂片の集まりとなる。肉はやや硬いゼラチン質で全体白色。全国的に分布するが本種は温帯、熱帯地方に広く分布するきのこで北方では発生が珍しい。分布上学術的に貴重な種であり、近年の温暖化や開発による環境の変化によっては更なる減少が危惧され、県内での絶滅が心配される。本県では初夏、広葉樹（おもにミズナラ）の枯れ木や倒木の樹皮の裂け目から発生する。本県では、2002年に八甲田で初めて採集された（工藤, 2018）が、その後の発生は見られない。県内には本種と類似した未記録の種が存在し（工藤, 2017）、同種と混同されている可能性がある。

（工藤伸一）

イボタケ目　マツバハリタケ科　**D**

和名　クロカワ
学名　*Boletopsis grisea* (Peck) Bondartsev et Singer
環境省：情報不足

本種は中～大型のイグチ型のきのこ。傘はまんじゅう形から平らに開く。表面は灰白色、中央で細かくひび割れてささくれ、暗灰褐色。縁はしばしば放射状に裂ける。肉は多少強靭。

本県では秋、アカマツ林に発生する。松枯れ病などの蔓延により環境省の情報不足に指定されており、県内においても今後調査が必要である。本菌には従来*B. leucomelaena* Pers.の学名があてられていたが、同種はトウヒ林に発生する種であり本種とは異なる（工藤, 2017）。

（工藤伸一）

チャワンタケ目 アミガサタケ科　**D**

和名　テンガイカブリ
学名　*Verpa digitaliformis* Pers.
環境省：該当なし

本種は中型で有柄、頭部が傘状のきのこである。傘は釣鐘形で柄にかぶさるように発達する。傘の表面はほぼ平滑で、黄土褐色～褐色。柄は円筒形で中空。表面は淡黄白色でうろこ様のしわがある。詳細な生態、分布等の情報については不明である。

本県では春、草原や雑木林内の地面に発生する（工藤, 2017）が、発生がまれであるため採集例が少なく、情報不足である。今後、生態や分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ボタンタケ目　ノムシタケ科　**D**

和名　トワダミドリクチキムシタケ
学名　*Metacordyceps pseudoatrovirens* (Kobayasi et Shimizu) Kepler, G.H. Sung et Spatafora
環境省：情報不足

本種は腐朽木中の甲虫の幼虫に発生するきのこであり、環境省の情報不足に指定されている（環境省, 2015）。

県内の十和田から採集され新種記載された種であるが、本県における生態や分布は不明であることから、今後生息情報の収集が必要である。

（工藤伸一）

チャワンタケ目　アミガサタケ科　**D**

和名　イモタケ
学名　*Imaia gigantea* (Imai) Trappe et Kovács
環境省：該当なし

本種は中～やや大型なジャガイモ様のきのこ。表面は淡黄～帯褐橙色、凹凸で大小の低い疣があり粗面である。肉は堅い。本州以北に分布する（今関・本郷, 1989）。

本県では秋、広葉樹雑木林内の林道脇など土が露出したところの地中に発生する（工藤, 2017）。近年青森市内から発生が確認された（工藤, 2018）ものの、地下生のきのこは採集例が少ないため調査が不十分であり、今後の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ボタンタケ目　オフィオコルジケプス科　**D**

和名　クビナガクチキムシタケ
学名　*Elaphocordyceps subsessilis* (Petch) G.H. Sung, J.M. Sung et Spatafora
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本菌は湿った朽木中のクチキカ類の幼虫から生じ、朽木の表面上に径2.5～4.5㎜、白色、綿質の円盤状のスービクルを形成し、その上に子嚢殻を半裸生する。

国内では山形県で初めて見つかった種で、その後青森県十和田市（旧十和田湖町）からも見つかっているが、現在本県以外の発生地は不明（環境省, 2015）。

本種は環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、県内においては生態等の情報が不足しているため今後調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　ハラタケ科　**D**

和名　トゲホコリタケ
学名　*Bovista yasudae* Lloyd
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は小型な団子形のきのこである。子実体は球形あるいは偏球形、外皮は淡褐色で暗褐色の刺を持つが、老時脱落して円痕となる。生態は不明であるが、日本特産種とされ、本県・北海道・宮城県に分布する（環境省, 2015）。

国の絶滅危惧種（VU）に選定されており、生息地に本県もあげられているが、本県ではほかに確実な発生記録がないため発生地等の情報が不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　テングタケ科 **D**

和名　カブラテングタケ
学名　*Amanita gymnopus* Corner et Bas
環境省：該当なし

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこ。傘はほぼ平らに開く。表面はクリーム色、黄土色膜質のいぼを付着する。ひだは黄色。柄は膜質、早落性のつばをつけ、基部は球根状に膨らむがつぼを欠く。主にブナ科の樹下に発生し、国内各地に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では2013年に下北から本県で初めて採集された（工藤, 2017）。分布等学術的に貴重なきのこであるが、詳細な採集記録はないことから生息情報の収集が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　テングタケ科 **D**

和名　オニテングタケ
学名　*Amanita perpasta* Corner et Bas
環境省：該当なし

本種は大型のウラベニガサ型をしたきのこである。傘は淡黄褐色で、表面に円錐形褐色のいぼを散布する。コジイ、アラカシなどの樹下に発生するが、まれとされている。国内では京都府・熊本県から知られている（今関・本郷, 1987）が詳細な分布等は不明である。

本県における記録は県立郷土館で行われたきのこ展示会に持ち込まれた１標本のみであり、分布や生態については不明である（工藤, 2018）ことから、今後、詳細な調査が必要である。

（工藤伸一）

ハラタケ目　モミタケ科 **D**

和名　オオモミタケ
学名　*Catathelasma imperiale* (Fr.) Sing.
環境省：該当なし

本種は大型のカヤタケ型をしたきのこ。傘は黄灰褐色のち褐色～オリーブ褐色で、中央付近に不明瞭な鱗片がある。柄は太く長く、根状に伸び、柄の上部には二重のつばをつける。本州ではアオモリトドマツなどの針葉樹の林内に発生するとされる（今関・本郷, 1987）。

本県では過去に採集記録がある（成田, 1990）ものの、詳細が不明でその後の採集報告もない。分布上貴重な種であり、今後、本県における分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　フウセンタケ科 **D**

和名　オオツガタケ
学名　*Cortinarius claricolor* (Fr.) Fr.
環境省：該当なし

本種は大型のキシメジ型をしたきのこである。傘は橙褐色で粘性があり、周辺には白色綿毛状の被膜の名残を付着する。

本県ではアオモリトドマツなどの亜高山帯の針葉樹またはブナの樹下に発生し（工藤, 2017）、2004年に採集されている（工藤, 2018）が、その後の採集報告もなく生態は不明である。本種は従来類似種の通称ツガタケと言われているきのこと混同されてきており（工藤, 2017）、今後、詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　カンゾウタケ科 **D**

和名　カンゾウタケ
学名　*Fistulina hepatica* (Schaeff.) with.
環境省：該当なし

本種は大型の多孔菌型をしたきのこである。傘は舌形で、表面は暗赤褐色、微細な粒状。肉は血紅色で赤白色の筋模様を表し、血液状の赤い汁を含んで柔軟。ブナ科の樹木の地際に発生し、日本全土に広く分布するとされているが、樹種は主にシイである（今関・本郷, 1989）ことから、温帯系のきのこと思われる。

本県では秋、広葉樹の樹幹の根際に発生する（成田, 1990）が、極めてまれで採集例が少なく、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ヒドナンギュウム科 **D**

和名　クロキツネタケ
学名　*Laccaria nigra* Hongo
環境省：該当なし

本種は小型のモリノカレバタケ型をしたきのこである。傘は灰～帯褐灰色で、中央部はほとんど黒色、湿時周辺に条線をあらわす。柄は細長く、繊維状で傘と同色。日本特産の可能性があるとされ、林内地上に発生し、国内では滋賀県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本県では初秋、草地地面に発生し、八戸市の郊外から確認されているが、詳細は不明（工藤, 2018）である。分布上貴重であるが、情報不足であり、今後、詳細な調査が必要である。

（工藤伸一）

ハラタケ目　ヌメリガサ科　**D**

和名　**カワリワカクサタケ**
学名　*Hygrocybe olivaceoviridis* f. *hirasanensis* (Hongo) Hongo
環境省：該当なし

本種は小型のクヌギタケ型をしたきのこ。傘は円錐状丸山形、しばしば中央に乳頭状突起がある。表面は粘性なく、繊維状、初めオリーブ暗灰褐色、のち全体に淡紅色を帯びる。ひだは橙色。柄は粘性なし。分布等の詳細は不明。

本県では秋、林内の地面に発生し、2010年に青森市郊外で初めて採集された（工藤, 2017）。乾燥に弱く、発生はまれで、近年の温暖化に伴い、発生が見られなくなっていることから、今後、発生情報の収集が必要である。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　クヌギタケ科　**D**

和名　**ニセシジミタケ**
学名　*Tectella patellaris* (Fr.) Murr.
環境省：該当なし

本種は小型のヒラタケ型をしたきのこである。傘は黄土白色～赤褐色で、柄はなく、幼時、傘の下は膜質類白色のつばに覆われる。発生がまれで、全国的な分布状況は不明である。

本県では秋、ブナの枯れ枝に発生し（工藤, 2017）、1998年に十和田市蔦から初めて見つかっている（工藤, 2018）が、発生基質および発生地域が限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧される。今後、分布等の詳細な調査が必要である。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　タマバリタケ科　**D**

和名　**スギノタマバリタケ**
学名　*Physalacria cryptomeriae* Berthier et Rogerson
環境省：該当なし

本種は傘をつくらず、球形～類球形の頭部と円柱状の柄からなる待ち針状のきのこ。頭部は通常１㎜。表面は白色～淡クリーム白色、極めて微細な毛を密生する。柄は通常長さ１㎜。国内に広く分布するが、採集例は少ない。

本県では梅雨時、スギの落枝の枯れた葉上に発生し、1998年に初めて採集された（工藤, 2017）。乾燥に弱く、近年発生が見られなくなっていることから、今後発生情報の収集が必要である。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　シメジ科　**D**

和名　**ナガエノヤグラタケ**
学名　*Asterophora parasitica* (Bull. ex Pers.) Singer
環境省：情報不足

本種は小型のキシメジ型のきのこ。傘は丸山形。表面は淡灰褐色～灰白色、絹状光沢があり、放射状に走る繊維で覆われる。ひだは灰褐色。柄は細長い。ひだ部に紡錘状、平滑な厚膜胞子をつくる。ベニタケ科の子実体に発生し、熊本県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本種は分布の実態等については不明であることから環境省の情報不足に指定されている。本県では過去に撮影記録がある（工藤, 2018）が、標本がないため今後調査が必要である。

（工藤伸一）

ハラタケ目　タマバリタケ科　**D**

和名　**ヌメリツバタケ**
学名　*Mucidula mucida* (Schrad.) Pat. var. *asiatica* R.H. Petersen
環境省：該当なし

本種は小～中型のモリノカレバタケ型のきのこ。傘は半球形～まんじゅう形。表面には著しい粘性があり、淡灰褐色。柄の上部に白色膜質のつばをもつ。ブナなどの枯れ木や倒木上に発生し、広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では大谷(1956)の採集報告以来採集例がないことから生息情報が必要である。近縁のヌメリツバタケモドキ*M. mucida* (Schrad.) Pat. var. *venosolamellata* (Imazeki et Toki) R.H. Petersen はひだが皺状であることで異なる。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　ヒラタケ科　**D**

和名　**アラゲカワキタケ**
学名　*Panus lecomtei* (Fr.) Corner
環境省：該当なし

本種は小～中型のカヤタケ型をしたきのこ。傘はまんじゅう形のち漏斗形となる。表面は初め褐紫色のち黄土褐色、粗い毛を密生する。肉は強靭。ひだは垂生し狭幅。ブナ科の樹木に発生し、広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では春～初夏、ブナの倒木などに発生する（工藤, 2017）が、近年採集例が減少していることから、発生情報の収集が必要である。近縁のカワキタケ*Panus torulosus* (Pers.) Fr.は傘の表面に粗毛がないことで異なる。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　キシメジ科 **D**

和名　シモコシ
学名　*Tricholoma auratum* (Paulet) Gillet
環境省：準絶滅危惧

本種は中型のキシメジ型をしたきのこ。傘はまんじゅう形から平らに開く。表面は湿時粘性があり、硫黄色、中央部は赤褐色で小鱗片状。ひだは硫黄色。マツ林ときに広葉樹林に発生し、国内に広く分布（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では初夏および秋やや遅く、海岸の砂地や山地のアカマツやクロマツの樹下に発生する（工藤, 2017）が、情報が不足しており、今後調査が必要である。

（工藤伸一）

ハラタケ目　キシメジ科 **D**

和名　マツタケ
学名　*Tricholoma matsutake* (S. Ito et S. Imai) Sing.
環境省：準絶滅危惧

本種は中～大型のキシメジ型をしたきのこ。傘は球形から平らに開く。表面は栗褐色の繊維状鱗片に覆われるが、のち放射状に裂ける。肉は緻密で特有の香気がある。マツ林に発生し、国内に広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋にアカマツやクロマツ林に広く発生する（工藤, 2017）が、発生地は管理されているところが多いため情報が不足しており、今後調査が必要。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　キシメジ科 **D**

和名　シロマツタケモドキ
学名　*Tricholoma radicans* Hongo
環境省：準絶滅危惧

本種は小～中型のキシメジ型をしたきのこである。傘は丸山形。ほぼ白色で表面はひび割れ鱗片状。肉はときに松脂臭がある。柄は白色、繊維状膜質のつばをもち、つばより下はささくれ状の鱗片に覆われる。マツ老齢林やときに広葉樹林などに発生（工藤, 2017）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋にマツ林などに発生するが、情報が不足しており、今後詳細な調査が必要である。**（工藤伸一）**

ハラタケ目　キシメジ科 **D**

和名　マツタケモドキ
学名　*Tricholoma robustum* (Alb. et Schwein.) Ricken
環境省：準絶滅危惧

本種は中型のキシメジ型をしたきのこ。傘は球形でのちほぼ平らに開く。表面は赤褐色で鱗片に覆われる。肉は白色で褐変性があり、においは温和。アカマツ林に発生し、国内に広く分布する（今関・本郷, 1987）。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の準絶滅危惧に指定されている。本県では秋遅く、海岸などのアカマツやクロマツ林内地面に発生するが、比較的まれ（工藤, 2017）なため情報が不足しており、今後調査が必要である。**（工藤伸一）**

イグチ目　イグチ科 **D**

和名　アシナガイグチ
学名　*Boletellus elatus* Nagasawa
環境省：該当なし

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘の表面は赤褐色～栗褐色で多少フェルト状。柄は細長く軟毛で覆われる。アカマツとコナラの混成林やシイ・カシ林に発生し、本州以南に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では、初秋、アカマツの交じったミズナラなどの雑木林内の地面に発生し（工藤ら, 1998）、1990年に青森市郊外で初めて確認された（工藤, 2018）が、その後の採集例がないため、今後、分布等の詳細な調査が必要である。

（工藤伸一）

イグチ目　ヒロハアンズタケ科 **D**

和名　コゲチャヒロハアンズタケ
学名　*Hygrophoropsis bicolor* Hongo
環境省：該当なし

本種は中型のカヤタケ型をしたきのこである。傘の表面は橙色をおびた暗褐色で、ビロード状。肉は特有のにおいがある。アカマツの腐朽材上に発生し、日本特産で、国内では滋賀県から知られている（今関・本郷, 1987）。

本県では採集記録（成田, 1990）があるものの、標本の所在及び発生場所等の生態は不明であり、その後の採集報告もない。

本県においては情報不足であり、今後、分布等の詳細な調査が必要である。**（工藤伸一）**

イグチ目　ショウロ科 **D**

和名　ホンショウロ
学名　*Rhizopogon luteolus* Fr. et Nordh.
環境省：情報不足

本種は小～やや中型の団子形をしたきのこで、半地中～地中生。表面は初め白色のち帯黄色で、地表に出ると黄褐色となり、傷をつけても赤く変色はしない。内部は初めから麦色で不快臭がある。国内における分布は不明。

本県では春および秋、クロマツの樹下に半分地中に埋もれて発生するが、発生地が確認されているのは青森市郊外の１か所だけであり（工藤, 2018）、その後の生息情報が不明であることから、今後、詳細な調査が必要である。

（工藤伸一）

アンズタケ目　アンズタケ科 **D**

和名　アクイロウスタケ
学名　*Cantharellus cinereus* (Pers.) Fr.
環境省：該当なし

本種は小型のラッパタケ型をしたきのこ。傘はやや不整円形で中央深くくぼむ。表面は暗褐色のち灰褐色。子実層托は灰白色。厚い明瞭な皺ひだを生じ、互いに連絡する。本州以北に分布し、発生はややまれ（今関・本郷, 1989）。

本県では2015年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて採集され（工藤, 2018）、2018年の現況調査で八甲田田代平でも採集されているが発生はまれで、十和田市ではその後の発生は見られず、発生情報の収集が必要である。**（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　マイタケ科 **D**

和名　シロマイタケ
学名　*Grifola albicans* Imaz.
環境省：該当なし

本種は全体白色で、多数の枝分かれした先に不規則な扇形の傘を生じて大きな株を作る。ミズナラの根際に発生し、日本特産とされている（今関・本郷, 1989）。

本種は下北半島の旧川内町で採取された標本に基づき新種記載された種（今関, 1943）。本州以北に分布し、本県では秋やや遅く、ミズナラの根際に発生する（工藤, 2017）。採集記録が少なく、マイタケの白色タイプと混同されていることもあり、正確な分布は不明である。

（工藤伸一）

イグチ目　ヌメリイグチ科 **D**

和名　アミハナイグチ
学名　*Suillus cavipes* (Opat.) A.H. Sm. et Thiers
環境省：該当なし

本種は中型のイグチ型をしたきのこである。傘および柄は黄褐色で繊維状の細鱗片に覆われる。管孔は黄色。カラマツ林の地上に発生し、全国に広く分布する（今関・本郷, 1989）。

本県では、初秋に発生する（工藤, 2017）が、発生がカラマツ林に限定されており、現在青森市の郊外及び五所川原市の山林から採集されているだけである（工藤, 2018）。県内には植林されたカラマツ林が広く分布しており、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

タバコウロコタケ目　タバコウロコタケ科 **D**

和名　ツヤナシマンネンタケ
学名　*Pyrrhoderma sendaiense* (Yasuda) Imaz.
環境省：該当なし

本種は中型の多孔菌型をした有柄のきのこである。傘は腎臓形で、表面は初め全体黒褐色であるが、乾くと淡褐色となる。傘裏は管孔状で灰白色。柄は直立性。国内に広く分布するが、発生はまれである（今関・本郷, 1989）。

本県では秋、ブナの枯れ木や切り株に発生する（工藤, 2017）が、発生環境および発生基質がブナに限定されており、環境の変化によっては絶滅が危惧されることから、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　マクカワタケ科 **D**

和名　ダイダイヒメアミタケ
学名　*Antrodiella aurantilaeta* (Corner) T. Hatt. et Ryvarden
環境省：該当なし

本菌は小～中型の多孔菌型のきのこ。子実体は無柄で楔形～丸山形または半背着生。傘は半円形、しばしば横に連なる。傘表面は黄橙色～オレンジ色、乾燥すると退色し、ビロード状～ほとんど無毛。子実層托は管孔状、鮮橙色。

本種は夏～秋、ブナなどの広葉樹の倒木や枯れ木上に発生（工藤, 2017）し、本県では2009年に十和田市（旧十和田湖町）で初めて採集されたが、発生はまれ（工藤, 2018）であり、今後生息情報の収集が必要である。　**（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　タマチョレイタケ科　**D**

和名　カワキタケ
学名　*Panus torulosus* (Pers.) Fr.
環境省：該当なし

本種は中～大型のヒラタケ型をしたきのこである。幼時、傘は紫褐色で幼時臼のような形をしているが、のちヘラ状となり、表面は黄褐色、無毛平滑となる。全国的に分布するが、発生は比較的まれである（今関・本郷, 1987）。

本県では夏～秋、ブナなどの広葉樹枯幹や切株に発生し（工藤, 2017）、十和田市蔦周辺で採集されているが、採集報告は極めて少ない（工藤, 2018）。今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ハラタケ目　ベニタケ科　**D**

和名　アカハツモドキ
学名　*Lactarius deterrimus* Gröger
環境省：該当なし

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は淡橙黄色で淡青緑色を帯び、環紋は不明瞭。乳液は橙色で、空気に触れると青緑色になる。全国的な分布は不明。

本県では秋、ドイツトウヒの樹下に発生し（工藤, 2017）、本県では青森市内から採集されているだけであった（工藤, 2018）が、その後2018年の現況調査で八戸市郊外でも発生していることが確認されており、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ベニタケ目　所属科未確定　**D**

和名　ウスベニオシロイタケ
学名　*Taiwanoporia roseotincta* T. Hatt.
環境省：該当なし

本種は中型の多孔菌型をしたきのこ。子実体は無柄～半背着生。初め柔軟で多汁な菌糸塊から傘を形成する。傘はほぼ円形から扇形、中央が浅く窪んだ丸山形。表面は初め白色で部分的に淡赤紫色をおび、のち淡褐色、ビロード状、中央にはしばしば粗毛をもつ。

本種は夏～秋、ブナの切り株上に発生し（工藤, 2017）、本県では2012年に八甲田田代平で初めて見つかったがその後の発生が見られない（工藤, 2018）ため、発生情報の収集が必要。　**（工藤伸一）**

タマチョレイタケ目　タマチョレイタケ科　**D**

和名　タマチョレイタケ
学名　*Polyporus tuberaster* (Jacq. ex Pers.) Fr.
環境省：該当なし

本種は中～大型で有柄の多孔菌型をしたきのこである。傘は浅い漏斗形をしており、表面は圧着した淡褐色の鱗片で覆われる。傘裏は管孔状である。柄は直立性。全国的に分布するが、発生は比較的まれである（今関・本郷, 1989）。

本県では、春～秋、ブナやミズナラの倒木や枯木上または地中の偽菌核から発生する（工藤, 2017）が、発生地が比較的限定されており、環境の変化によって絶滅が危惧されることから、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

ベニタケ目　ベニタケ科　**D**

和名　アカモミタケ
学名　*Lactarius laeticolorus* (Imai) Imazeki
環境省：該当なし

本種は中～大型のカヤタケ型をしたきのこである。傘は橙黄色で不明瞭な環紋があり、ひだは淡橙紅色。乳液は橙朱色で空気に触れても変色しない。モミ属の樹下に発生し、全国的に分布する（今関・本郷, 1987）。

本県では秋、アオモリトドマツの樹下に発生する（工藤, 2017）が、発生環境が自然林ではアオモリトドマツに限定され、環境の変化によっては絶滅が危惧される。発生が比較的稀で、今後、分布等の詳細な調査が必要である。　**（工藤伸一）**

イボタケ目　マツバハリタケ科　**D**

和名　マツバハリタケ
学名　*Bankera fuligineoalba* (J.C. Schmidt) Coker et Beers ex Pouzar
環境省：情報不足

本種は中型で有柄のハリタケ型のきのこ。傘は丸山形からほぼ平に開き、しばしば２、３が癒着する。表面は乾いて羊皮質の触感があるが鱗片はなく、淡肉桂色～材木色、周辺は白色。子実層托は針状で、初め白色のち材木色。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の情報不足に指定されているが、本県でも情報が不足しており、今後調査が必要である。秋、アカマツ林内の地面に発生するが比較的まれである（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

イボタケ目　マツバハリタケ科　**D**

和名　**シシタケ**
学名　*Sarcodon imbricatus* (L.) Karst.
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は大型で有柄のハリタケ型のきのこ。傘は漏斗形で、中心はくぼむ。表面は淡茶褐色、大形で強く反り返った角状の鱗片を密生する。子実層托は針状、柄に垂生、初め灰白色のち暗褐色。柄は太短い。

本種は松枯れ病などの蔓延により環境省の絶滅危惧Ⅱ類に指定されているが、本県では情報が不足しており、今後調査が必要である。本県では秋、エゾマツなどトウヒ属の林内の地面に発生する（工藤, 2017）。　**（工藤伸一）**

③引用文献

本郷次雄　1974. 日本産きのこ類の研究(21). 植物研究雑誌, 49：294-305.

今関六也　1943. まひたけ属*Grifola* S.F. Gray 東亜産さるのこしかけ科（其一）. 植物研究雑誌, 19：381-390.

今関六也・本郷次雄　1987. 原色日本新菌類図鑑Ⅰ. 保育社, 大阪. 325pp.

今関六也・本郷次雄　1989. 原色日本新菌類図鑑Ⅱ. 保育社, 大阪. 315pp.

環境庁　2000. 改定 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物　植物Ⅱ（維管束植物以外）. 自然環境研究センター. 429pp.

環境省　2010. 改定レッドリスト 付属説明資料　菌類. 28pp.

環境省　2015. レッドデータブック2014 日本の絶滅のおそれのある希少野生生物９　植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. ぎょうせい出版, 東京. 580pp.

Kobayasi, Y.　1954. Sphagnicolous Fungi found in Ozegahara Moor. Sci. Res. Ozegahara Moor, 558pp.

Kobayasi, Y.　1960. *Ascosparassis*, a New Genus of Discomycetes. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 46：43-46.

国立科学博物館　2014. 菌類の不思議　第２版　－　形とはたらきの脅威の多様性. 東海大学出版部, 神奈川. 223pp.

工藤伸一　2003. 菌類（キノコ・カビ）の多様性. 青森県史自然編生物. pp.101-144.

工藤伸一　2004. 八甲田ブナ帯の高等菌類について. 甲蕈塾菌蕈研究会研究報告. 30pp.

工藤伸一　2005. 青森県産アカヤマタケ属菌について. 甲蕈塾菌蕈研究会研究報告. 20pp.

工藤伸一　2009. 東北きのこ図鑑. 家の光協会, 東京. 272pp.

工藤伸一　2017. 青森県産きのこ図鑑. アクセス21出版, 青森. 535pp.

工藤伸一　2018. 青森県産きのこ目録 2017年版. 菌蕈研究「甲蕈塾」. 60pp.

工藤伸一・長沢栄史　2003. 青森県で再発見された *Armillaria ectypa* について. 菌蕈研究所研究報告, 41：26-34.

工藤伸一・大谷吉雄・長沢栄史　1994. 日本新産種 *Ionomidotis irregularis*（クロムラサキハナビラタケ）について. 日本菌学会第38回大会講演要旨集, p62.

工藤伸一・手塚豊・米内山宏　1998. 青森のきのこ. グラフ青森, 青森. 288pp.

Miller, O. K. Jr., J. Volk, & E. Bessette　1996. A new genus, *Leucopholiota*, in the Tricholomataceae (Agaricales) to accommodate an unusual taxon. Mycologia, 88：137-139.

Nagasawa, E.　1995. A new poisonous species of *Boletus* from Japan. Rept. Tottori Mycol. Inst., 33：1-6.

Nagasawa, E. & S.A. Readhead　1988. A new edible agaric from Japan : *Clitocybula esculenta*. Rept. Tottori Mycol. Inst., 26：1-5.

長沢栄史・有田郁夫　1988. *Hypsizygus ulmarius*（シロタモギタケ）および*H. marmoreus*（ブナシメジ）について. 菌蕈研究所研究報告, 26：71-78.

長沢栄史・工藤伸一　1992. 日本新産種 *Creolophus cirrhatus*（フサハリタケ - 新称）について. 菌蕈研究所研究報告, 30：69-74.

成田伝蔵　1990. 青森県産キノコ目録. 青森県生物学会誌, 27：1-25.

日本菌学会（編）　2013. 菌類の事典. 朝倉書店, 東京. 717pp.

大谷吉雄　1982. 興味深い日本産チャワンタケ２種について. 日本菌学会会報, 23：379-381.

（３）脊椎動物

１）哺乳類

①概説

青森県で生息が確認されている哺乳類は、モグラ目２科７種、コウモリ目２科19種、サル目１科１種、ウサギ目１科１種、ネズミ目６科１亜科19種、ウシ目１科３種（近年、生息域が北上し、青森県に分布を広げた種を含む）である。外来種はネコ目２科２種である。

青森県レッドデータブック2010年改訂版（2010）の哺乳類分野では、ＥＸに５種選定しているが、その中の海棲の哺乳類のアシカは、本県での海域での繁殖等の生態については調査不能なので、2020年版では対象外とした。

コウモリ目については、Ａランクにクロホオヒゲコウモリ、ノレンコウモリ、モリアブラコウモリ、コヤマコウモリの４種、Ｂランクにフジホオヒゲコウモリ、カグヤコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、ニホンウサギコウモリ、ユビナガコウモリ、テングコウモリの７種、Ｃランクにコテングコウモリの１種、Ｄランクにクロオオアブラコウモリ、ヒメヒナコウモリの２種を選出した他、大畑町で１個体が確認されたチチブコウモリ（峰下, 2017）がＤランクに追加された。現状では各種の確認状況において急激な減少や増加が確認されていないためランクの変更は無いが、近年急速に進められている風力発電施設の導入に伴い、すでに欧米では問題とされている、コウモリの大量衝突死（バットストライク）が懸念される。風力発電先進国に倣った、適切な現状の把握、適切な配慮が急務である。

Ｃランクの６種のうち、ヤマネについては調査記録や文献などから、ヤマネは山地から人里付近まで広く生息していることが推察される（笹森, 2017）ので対象外とした。ヤマネは環境省（2019）のレッドリストでも、対象外とされている。他のＣランクであったミズラモグラ、オコジョ、ニホンモモンガはＤランクにした。これらの種については、低山地から山地まで記録されている（笹森, 2019a, b；笹森・峰下, 2019）が、県内の分布域を把握するまでは至っていない。

ムササビの青森県の捕獲数は、1926年の約2,800頭が最高で、45年以降は少なく、58年に2,300頭を記録して、それ以降は減少し、70年以降は100頭程度（青森県, 1981a）。1994年には狩猟獣から除外されたことなどで狩猟圧がなくなったことや森林の復活などで生息域を広げていると推測されるが、県内では戦後に植栽されたスギ人工林の多くが本格的な伐採期を迎えている（東奥日報, 2018）ことから、本種の生息への影響が危惧されるのでＣランクのままで変更は無い。

カワネズミはＤランクに選定した。ＬＰ（津軽山地）であったカワネズミは、その後、蟹田川での捕獲記録（阿部, 2017）や梵珠山での目視記録（自然ふれあいセンターからの情報）が確認されたことにより、津軽半島での生息状況は確認されたものの、いずれも懐の深い原生的な自然林を有する山地では比較的豊富であるが、平野部での生息情報はほとんどない（小原, 1993, 1995, 1996, 1999, 2008）ことから、今後の調査による分布域の把握が求められるのでＤランクとした。

イイズナは、Ｄランクに選定した。これは津軽地方にくらべて八甲田連峰から東側の地域（小川原湖以南）のいわゆる南部地域では記録が極端に少ない（小原ら, 1997）ということで、ＬＰランク（南部地方）に指定されていた。しかし、これは津軽地方にくらべて南部地方では、イイズナの調査がほとんど行われていなかったことによると思われる。小川原湖の北の弥栄平と七鞍平（六ヶ所村）で、同一日に距離的に隔たった２地点で目撃（千代田デイムス・アンド・ムーア株式会社, 1987）の記録や小川原湖東岸の仏沼での複数の記録（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999；高橋ら, 2010）があり、南部地方でも今後の調査によって、分布域の解明がされることと思われる。

イノシシ、ニホンジカについては、それぞれ目撃情報が増加しているため、ＥＸからＤランクに変更した。

本県のツキノワグマの分布については、八甲田山系と津軽半島には生息していない（哺乳類分布調査研グループ, 1979；青森県, 1981c）とされていたが、これらの文献はクマ狩猟の伝統が消えた地域のアンケートや聞き込みのもので、ツキノワグマの生息情報があっても、他地域からたまたま入り込んだものとしている。また、現地調査も行われていないものである。八甲田山系や津軽半島では、爪跡や草本の食痕、糞等が多数記録されている（笹森・向山, 2009；笹森ら, 2014）。また、青森県自然保護課の2018年の資料によると、八甲田山系の東の南部地方では、各地で農産物の食害が多発して、有害駆除されている。下北半島のツキノワグマを継続してＬＰに指定したのは、津軽地方（西津軽郡、中弘南黒地区の各市町村）より遺伝的多様性が極めて低い（山本, 2013）ことと近年の有害駆除数が大変多いからである。

ニホンザルは、下北半島のニホンザルのＬＰは継続し、津軽半島地域個体群を新たにＬＰに追加した。ともに北限のサルとして注目していく必要がある。両地域とも、多数有害駆除されているが、有害駆除では解決策になっていない。

本県の外来種として、緊急対策外来種のアライグマ、重点対策外来種のハクビシン（環境省, 2015）、また、本県に北上して分布域を広げているニホンジカ、ニホンイノシシなどがある。農作物の食害が問題にされることが多いが、生態系への影響が大きいことが危惧される。農作物への対策だけでなく、生態系に配慮した対策が求められる。

なお、学名、和名については、「The Wild Mammals of Japen」(Ohdachi *et al*., 2015)によった。

（笹森耕二・峰下耕）

②本文

ネコ目　イヌ科 **EX**

和名　オオカミ **環境省：絶滅**
学名　*Canis lupus* Linnaeus

［形態的特徴］　外見はイヌと似ているが、頭骨などで区別できる（阿部ら, 2005）。
［選定理由］　県内にも広く生息していたが1890年代にむつ市における射殺を最後に絶滅した（平田, 1985）とされる。
［分布と生態の概要］　全国的にも絶滅したとされるので分布していない。かつては、本県の陸上生態系の頂点にあって草食動物の個体数調節の地位にあった。
［特記事項］　本州固有亜種で、北海道産はエゾオオカミ *Canis lupus hattai* とされる。全国的に現存するニホンオオカミの標本は少ないが、十和田市正法寺には百数十年前に土地の猟師によって射殺されたとされる足の一部が残っている（吉行, 1989；読売新聞（青森県版）, 1989）。
　藩政時代の県内には南部藩でも津軽藩でもオオカミが各地に出没し、住民が苦労した記録が残っている。普通種であったオオカミが明治時代になると狩猟の自由化や銃の性能がよくなったなどの理由で簡単に駆除できるようになって絶滅したものと考えられる。　**（峰下耕）**

ネコ目　イタチ科 **EX**

和名　カワウソ **環境省：絶滅**
学名　*Lutra lutra* Linnaeus

［形態的特徴］　他のイタチ科動物と似ているが、全長１ｍを越える大型であり、指の間に水かきがある、尾が太く円錐形であることなどから区別できる（阿部ら, 2005）。
［選定理由］　県内各地に残るカッパ伝説（青森県, 1998a, b；広瀬, 1999）のモデルは本種であり、かつては県内に広く生息していたと考えられる。青森県（1981）によると、1900～1980年代まで県内でカワウソを見たという人がいる。また、音喜多（1975）は年代がはっきりしないが、港町の古谷福蔵（当時86才）が新井田川で６、７歳頃（明治時代）にはカワウソを見かけたことを述べている。
［分布と生態の概要］　絶滅種であって本県には分布しない。かつては、河川・湖沼・沿岸部で水生動物を捕食していたと考えられる。
［特記事項］　本州以南固有亜種である。比較的新しい目撃情報は養殖ミンクの逃亡個体、もしくは、その野生化個体の可能性が高い。　**（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **A**

和名　クロホオヒゲコウモリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Myotis pruinosus* Yoshiyuki

［形態的特徴］　前腕長31㎜前後、体重４ｇ前後の小型種で、黒い体毛に先端が銀色の差し毛が目立つ。

［選定理由］　県内からは田子町・新郷村・七戸町・むつ市・外ヶ浜町・西目屋村・深浦町・中泊町・大畑町から記録されているが、いずれの地点も個体数が少なく繁殖確認がない。生息環境は自然度の高い樹林であって、今後の生息環境悪化が懸念される。

［分布と生態の概要］　自然度の高い樹林を周年の生息地とし、樹洞を日中のねぐらや冬眠・出産保育場所とする森林性コウモリと推測されるがこうした生息的知見は得られていない。他県の観察では橋下のスリットや洞穴内のねぐら利用観察例がある。

［特記事項］　日本固有種であり、日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。七戸町の生息確認地点では最近（2008年、2009年）は確認されなくなった。小型種で飛翔能力が低いと推測されることから生息樹林の面積減少や分断化は個体群の維持に直接大きな影響を与えると思われる。

（峰下耕）

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **A**

和名　ノレンコウモリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Myotis bombinus* Thomas

［形態的特徴］　前腕長40㎜前後、体重７ｇ前後の小型種で、暗褐色の体毛で被われている。腿間膜の後縁に細毛を列生する。大きな耳介と、細長く尖った耳珠を持つことが特徴である。

［選定理由］　三戸町・八戸市・六戸町・十和田市・むつ市・西目屋村・鰺ヶ沢町・深浦町から記録されているが繁殖地点を除くと、いずれの地点も個体数は少ない。繁殖地点と周辺の樹林減少が進んでいる。

［分布と生態の概要］　六戸町熊野神社奥の院に毎年100頭前後の雌が集まって出産保育繁殖集団を形成している。１頭１子である。雄や越冬場所に関する生態的知見は得られていない。ラジオテレメトリー調査によると繁殖場所からの移動距離は約1.3㎞～5.0㎞で、利用環境は樹林や林縁部を好み、畑や水田上などの開けた空間でないことが分かった（向山ら, 2007）。

［特記事項］　全国的に希少種で、記録がある都道府県は15しかない（阿部ら, 2005）。飛翔範囲が樹林内に限られ、行動圏が狭いことから連続する広い樹林の保全が大切である。　**（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **A**

和名　モリアブラコウモリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Pipistrellus endoi* Imaizumi

［形態的特徴］　前腕長32㎜前後、体重７ｇ前後の小型種で、市街地の民家などに生息するアブラコウモリに酷似するが上顎の犬歯が細く、後ろ側の突起が大きい。

［選定理由］　県内の既知確認場所は三戸町・むつ市・鰺ヶ沢町の３地点しかない。三戸町の生息は現在は消失、むつ市の既知生息地（町田ら, 1986）はその後の調査で確認されていない。

［分布と生態の概要］　良好な天然林を生息場所としている典型的な森林性コウモリであるが、採餌・休息・繁殖・冬眠などの詳しい生態は分かっていない。向山（1988）による三戸町の記録では伐採したブナの太い横枝にあった樹洞から数十頭の本種が飛び出している。飛翔できない幼獣が混じっていたことから繁殖集団であったと推定される。森林の樹洞を利用していることは確実であるが、その詳しい生態については不明である。

［特記事項］　日本固有種で本州と四国から知られている。日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。飛翔力の弱い小型種であることから広い樹林の保全が大切である。　**（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科　**A**

和名　**コヤマコウモリ**　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Nyctalus furvus* Imaizumi et Yoshiyuki

［形態的特徴］　前腕長50㎜前後、体重は20ｇ前後。暗褐色で長い体毛が密生している。

［選定理由］　新郷村（向山, 1989a, 1989b）と鰺ヶ沢町（向山, 2004a）の２か所しか記録がない希少種である。このうち新郷村の生息地である迷ヶ岱のブナ林は狭く、個体群維持が懸念される。

［分布と生態の概要］　全国的にも希少種で県外の記録は岩手県・福島県・長野県の３県しかない（山本ら, 2008）。県内の既知産地はいずれも良好なブナ林であることから典型的な森林性コウモリと思われるが、越冬や採餌・繁殖に関する生態的知見はない。

［特記事項］　中国・台湾にも生息する。日本哺乳類学会（1997）では危急種としている。本種の生息地である原生林的な広葉樹林の伐採は、繁殖・休息・冬眠などに使っていると推測される樹洞消失を伴うことから直接的脅威となる。本州産の森林性コウモリとしては中型種であることから、広大な面積の自然林でないと餌の昆虫を恒常的に供給できないと思われる。したがって、周辺部の伐採も脅威となりうる。個体数が少ないことから早急に県内分布の精査が必要である。

（峰下耕）

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　フジホオヒゲコウモリ（ヒメホオヒゲコウモリ） **環境省：該当なし**
学名　*Myotis fujiensis* Imaizumi (*Myotis ikonnilovi* Ognev)

［形態的特徴］　前腕長33㎜前後、体重６ｇ前後の小型種である。金属光沢のある黒褐色の長い体毛で被われている。飛翔初めの当歳獣と成獣、換毛時期による色彩変異の幅が広い。

［選定理由］　近年は津軽地方、南部地方とも広く確認されるようになったが、どこでも森林に限られ、個体数は少ない。小型で飛翔力が弱い種であることから森林面積の減少、分断化などが進むと本種の個体分維持が懸念される。

［分布と生態の概要］　県内においては捕獲事例があるだけで行動圏・ねぐら・越冬状況などの生態的知見はほとんど得られていない。８、９月の捕獲個体には明瞭な授乳痕がある雌と関節の骨化が不十分な当歳獣が混じるので、森林内における繁殖が推測される。

［特記事項］　ヒメホオヒゲコウモリ *Myotis ikonnikovi* の本州東部産亜種とする考えもある、本県において、かつてシナノホオヒゲコウモリ *Myotis hosonoi* と同定されていたコウモリは本種に該当すると考えられる。 **（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　カグヤコウモリ **環境省：該当なし**
学名　*Myotis frater* Allen

［形態的特徴］　前腕長37㎜前後、体重８ｇ前後の小型種で、黒褐色の体毛でヒメホオヒゲコウモリに似ているが、やや大型で下腿長が長く18㎜を越える。

［選定理由］　県内各地の森林で捕獲事例があるが、近年の記録は少なく、また、個体数はヒメホオヒゲコウモリより少ない。小型で飛翔力が弱い種であることから森林面積の減少、分断化が進むと個体群維持が懸念される。

［分布と生態の概要］　県内におけるねぐらや繁殖に関する生態的知見はない。県外においては森林以外に洞穴や家屋の利用例もある（阿部ら, 2005）。

［特記事項］　日本固有亜種で本州と北海道から知られている。もともとは青森県南津軽郡竹舘村葛川（現平川市）の竹林から採取された個体において新種記載された（Imaizumi, 1956）ことからカグヤコウモリと命名されている。哺乳類の中で本県が基産地となっている数少ない例である。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。 **（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　ヤマコウモリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Nyctalus aviator* Thomas

［形態的特徴］　前腕長60㎜前後、体重40ｇ前後の大型種で、光沢のある明るい茶色の長毛が密生していて美しい。

［選定理由］　全国的な分布をみると北海道から九州まで広く記録があるが、この30年間に限ると激減傾向にあるという（阿部ら, 2005）。県内では弘前市弘前公園・八戸市長者山の生息樹洞は消失し、他の既知繁殖コロニーでも個体数が減少している。

［分布と生態の概要］　白神山地ではクマゲラの掘った樹洞を利用している。八戸市長者山ではアカゲラの掘った穴を利用していた。他には腐朽進行でつくられた樹洞利用例もある。東北町のケヤキ樹洞では出産期まではヒナコウモリと供用している。下北半島では確認が１例しかない。

［特記事項］　本県産コウモリ類の中で最大種である。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。他の森林性コウモリも同様であるが、自力で穴を掘れないので樹洞確保が大切である。また、八戸市櫛引八幡宮ではミツバチに殺されて樹洞を乗っ取られた例がある。 **（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　ヒナコウモリ **環境省：該当なし**
学名　*Vespertilio sinensis* (Peters)

［形態的特徴］　前腕長48㎜前後、体重20ｇ前後の中型種で暗褐色の体毛に白っぽい長毛が混じって霜降り状に見える。しかし、夏季には明るい茶色の体毛に変わり、抜け替わって秋にはまた霜降り状になる。

［選定理由］　県内の繁殖集団は橋梁の隙間に形成されることが多いが、弘前市境橋・八戸市尻内橋においては架け替えで消失している。建物につくられる繁殖集団は建て替えや糞尿の衛生問題で追い出されることが多く長期的にみると安定していない。

［分布と生態の概要］　北海道から九州まで記録があるが、繁殖確認は少ない。県内では南部地方に多く、春に妊娠雌が集まって繁殖集団を形成し、２子を出産する。県内では通常は越冬しない。

［特記事項］　日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。七戸町天間館神社では本種の繁殖集団による拝殿汚染に苦しんできたが、30年ほど前に蝙蝠小舎建設と移住で世界的にも模範となる共生に成功している。八戸市尻内橋や東北町広沼大明神ではバットボックスで繁殖している。

（峰下耕）

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　ニホンウサギコウモリ **環境省：該当なし**
学名　*Plecotus sacrimontis* G.M.Allen

［形態的特徴］　前腕長40㎜前後、体重８ｇ前後の小型種で、灰褐色の体毛で被われるが腹面は白っぽくなる。ウサギの耳を連想させる大きく長い耳介が特徴である。

［選定理由］　県内では比較的広範囲に記録があるが、繁殖確認場所は少ない。本来は樹洞を住み家とする森林性コウモリと考えられるが、人家を利用することもあって、多くの場合は騒音や糞尿汚染で追い出されることが多い。

［分布と生態の概要］　県内の記録としては三戸町・田子町・新郷村・七戸町・十和田市・青森市・西目屋村・鰺ヶ沢町などがある。夏季には山間のトイレの天井を休息に使っていることがある。

［特記事項］　日本固有の亜種で北海道・本州・四国にかけて広く記録されているが、西日本ではとても珍しい。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。七戸町の繁殖集団におけるラジオテレメトリー調査によると、繁殖場所からの移動距離は約0.1㎞～2.9㎞しかなく、樹林内を選択して行動していることが分かっている（向山ら, 2007）。 **（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　ユビナガコウモリ **環境省：該当なし**
学名　*Miniopterus fuliginosus* (Hodgson)

［形態的特徴］　前腕長47㎜前後、体重13ｇ前後の小型種で、黒っぽい焦げ茶色の体毛で被われている。翼は高速長距離飛翔タイプで細長い。

［選定理由］　県内の集団生息地としては西目屋村津軽ダム建設予定地、深浦町北金ヶ沢の廃坑とガンガラ穴の３か所しかいない。生息地として古くから知られていた深浦町ガンガラ穴では、近年の調査によると激減傾向である（向山, 2004b）。繁殖確認は深浦町以外にない。

［分布と生態の概要］　本州から九州まで広く分布しているが、本県は北限になる。全国的に生息地では大集団を形成している。県内の集団生息地は津軽地方に限られ、南部地方からは１頭が保護された記録以外にない。

［特記事項］　国土交通省東北地方整備局津軽ダム工事事務所は本体着工で消失する本種の生息地の代替として人工洞窟のバットボックスを設置し、2009年１月に集団移転を行った。本種の大規模な保全対策として世界的にも注目される（津軽ダム工事事務所, 2009）。 **（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **B**

和名　テングコウモリ　**環境省：該当なし**

学名　*Murina hilgendorfi* (Peters)

［形態的特徴］　前腕長43㎜前後、体重12ｇ前後で、灰褐色の体毛で被われている。長い差し毛の先端が金属光沢のある銀色で美しい。腿間膜の上面全体も長い毛で被われ、後ろ縁にも長い毛があるので全身毛深く見える。第１指が長大で目立つ。

［選定理由］　津軽地方、南部地方とも記録されているが、個体数が少なく繁殖確認などの生態的知見はない。三戸地方の洞穴では冬眠個体数の変化から減少傾向が報告されている（工藤ら, 1999）。他地区も同様な傾向と思われる。

［分布と生態の概要］　捕獲事例はあるが多くは洞穴内の冬眠事例で活動期の記録は少ない。また、個体数が少なく繁殖状況などは不明である。ネズミ類調査などに使われる墜落缶内で見つかることがときどきあることから地上採餌の可能性が推測されている。

［特記事項］　日本固有種で、日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。鼻孔が長く突出していることから命名されているが、コテングコウモリほど突き出ていない。　**（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **C**

和名　コテングコウモリ **環境省：該当なし**
学名　*Murina ussuriensis* Ognev

前腕長30㎜前後、体重５ｇ前後の小型種で、明るい茶色の長い体毛が全身に生えている。腿間膜の上面と後縁に長い毛がある。鼻孔が長く管状に両側に突出する。日本固有種で北海道から九州まで記録されているが西日本では珍しい。日本哺乳類学会（1997）では希少種としている。県内では調査が進むにしたがって、津軽地方・南部地方とも広範囲に記録され、以前考えられていたほど珍しい種でなくなったが、新しい確認は少なく個体数も多くない。繁殖確認などの基本的生態知見もない。本来は森林性コウモリと考えられるが、夏から秋にかけてはオオイタドリ・クズ・アキタフキなどの枯葉内をねぐらとしている例が見つかる。 **（峰下耕）**

ネズミ目　リス科 **C**

和名　ムササビ **環境省：該当なし**
学名　*Petaurista leucogenys* (Temminck)

本州、四国、九州に分布する。頭胴長27～49㎝、尾長28～41㎝。飛膜が首から前肢・後肢・尾の間に発達する。背面は褐色系であるが色彩変異が大きい。腹面は白い低地から亜高山帯までの天然林、発達した二次林に生息する。夜行性で、樹上で活動する（阿部ら, 2005）。

県内各地の分布調査は進んでいないが、青森市周辺では、青森平野を取囲む山裾（集落そば）から山麓の神社等の境内のスギ林とそれにつながるスギ、広葉樹林等で生息が記録されている（笹森, 2013；笹森・山崎, 2018）。森林の復活と狩猟圧がなくなったことで生息数が増えていると推察されるが、スギ林の伐採が各地で行われるようになり、生息地の減少が危惧される。 **（笹森耕二）**

ウシ目　イノシシ科 **D**

和名　イノシシ
学名　*Sus scrofa leucomystax* Temminck
環境省：該当なし

古文書などの記録からかつて県内に生息していたことは確実であって（青森県, 1980）、平田（1985）によると1880年頃の東通村における捕獲を最後に絶滅したとされてきたが、県内分布の新しい記録として、環境庁（1993）では分布が確認された（1989年時点）県となっていて、さらに、環境庁自然保護局（1993）によると県内から８メッシュの報告がある他、近年では2017年８月23日に深浦町内で2018年８月５日に田子町で無人カメラによる確認、2018年10月23日に大鰐町でスマートフォンでの撮影が確認されている他、目撃情報は2018年12月末時点で、17年に８件、18年に13件報告されている。しかし、現在の青森県で野生繁殖している個体群の残存に必要な知見が少ない。今後の精査が必要である。 **（峰下耕）**

ウシ目　シカ科 **D**

和名　ニホンジカ
学名　*Cervus nippon* Temminck
環境省：該当なし

成獣の体重は雄50～130kg、雌25～80kg。夏毛には白斑がある。雄は角を持ち角は毎年生え変わる。国内では北海道から沖縄まで広く分布する（三浦, 2005）。青森県では1900年頃まで生息し、その後一度絶滅したが（青森県, 1986）、1990年代に再び存在が確認された。現在は県全域で目撃情報が得られている（青森県, 2018）。目撃数が増加していることから、生息数は増加傾向にあると推測される。 **（岡田あゆみ）**

モグラ目　モグラ科 **D**

和名　ミズラモグラ
学名　*Euroscaptor mizura* (Günther)
環境省：準絶滅危惧

本州の青森県から広島県まで分布する。頭胴長80～106.5㎜、尾長20～26㎜。毛の色は灰褐色から黒色まで、地域により、また、個体により変化する。低山地から高山帯に生息するが、生息数は多くない（阿部ら、2005）。

本県では、八甲田山系や岩木山等の標高の高い地域での生息記録が多いが、標高が低い地点での生息も記録（笹森, 2019b）されている。しかし、全県的には、まだ、記録が少ない。低山地を含めた分布域の把握のための調査が必要である。 **（笹森耕二）**

モグラ目　トガリネズミ科 **D**

和名　カワネズミ
学名　*Chimarrogale platycephalus* (Temminck)
環境省：該当なし

青森県内では下北郡大間町の奥戸川および同風間浦村の易国間川を北限に白神山地、八甲田十和田山地、恐山山地、津軽山地など懐の深い原生的な自然林を有する産地では、カワネズミの生息数は比較的豊富である。しかし、1930年代頃までは平野部の小川にも生息していた記録（和田, 1937）があるが、現在は山地渓流に限られ、平野部の河川での生息の情報はほとんどないことから今後の調査が必要である。 **（峰下耕）**

ネコ目　イタチ科 **D**

和名　**オコジョ**
学名　*Mustela erminea* Linnaeus
環境省：準絶滅危惧種

ユーラシア北部と北アメリカに広く分布。日本国内では、本州中部の北アルプス、中央アルプス以北の山岳地帯と北海道に生息する。北海道産はエゾオコジョ、本州産はホンドオコジョと亜種で区別されている。性的二型があり、雄は頭胴長18㎝、尾長６㎝、雌は頭胴長16㎝、尾長５㎝。夏毛は背面が濃い褐色で、腹面は白く、冬毛は全身白色となる。冬毛でも尾の先端部だけは黒毛が残る（阿部ら, 2005）。

本県では、八甲田山系や十和田山地（和田, 1937；奈良, 1976；笹森, 2019a）、白神岳（笹森, 2007）岩木山（小原, 2014, 2015）等で記録されている。何れも標高が高い山地が多いが、低山地での複数の記録（小原, 2015）もある。今後の調査で分布域や生態の解明がされることを期待したい。　**（笹森耕二）**

ネコ目　イタチ科 **D**

和名　**イイズナ**
学名　*Mustela nivalis* Linnaaeus
環境省：準絶滅危惧種

ヨーロッパから中国までのユーラシア北部全域に広く分布する。日本では、北海道と本州北部（青森・岩手・秋田）にのみ生息する。尾長２㎝、雄は頭胴長18㎝、雌は頭胴長15㎝、雄が大型の性的二型がはっきりしている（阿部ら, 2005）。北海道産（2n=42）と青森県産（2n=38）は染色体数も核型も大きく異なり、頭骨形態にも違いが見られる亜種の可能性がある（小原, 1991, 2000）。増田（2018）は本州産イイズナは、亜種 *M.n.mamiyei* に分類されると述べている。環境省（2019）では、ニホンイイズナ（本州亜種）*M.n.mamiyei* としている。

2010年改訂版では、青森県東部、特に南部地方では1970年以降記録がない（小原ら, 1997）ので Ｌ Ｐ（南部地方）とされていたが、これは津軽地方と比べて、南部地方ではイイズナの分布調査がほとんど行われなかったことによる。三沢市の仏沼付近で1993年、2009年に記録されている（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999；高橋ら, 2010）。　**（笹森耕二）**

ネズミ目　リス科 **D**

和名　**ニホンモモンガ**
学名　*Pteromys momonga* Temminck
環境省：該当なし

本州、四国、九州に分布する。頭胴長14～20㎝。目が大きく、前肢と後肢の間に飛膜がある。尾は扁平。背面は灰褐色から茶褐色、腹面は白色。山地帯から亜高山帯の森林に生息する。夜行性で、樹上で活動し、飛膜を使って木々の間を滑空する（阿部ら, 2005）。

本県では、県内各地の低山地から山地の森林の生息記録（笹森・峰下, 2019）があるが、確認記録は単発的なものである。糞調査や巣箱を利用した調査等による本種に特化した分布調査が求められる。　**（笹森耕二）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **D**

和名　**クロオオアブラコウモリ**
学名　*Hypsugo alaschanicus* (Bobrinskii)
環境省：情報不足

現在までに北海道から２頭、県内では青森市から１頭（吉行, 1974；吉行・木村, 1975）と黒石市から１頭（向山, 1996）ずつが確認されているだけの希少種で、評価に必要な知見が少ない。サイズがやや大きいが、外観は津軽地方に多いアブラコウモリに似る。黒石市での校舎内における死体拾得の記録以降、確認されていない、今後の精査が必要である。日本哺乳類学会（1997）では不能種としている。　**（峰下耕）**

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **D**

和名　ヒメヒナコウモリ
学名　*Vespertilio murinus* Linnaeus
環境省：情報不足

日本では2002年に北海道礼文島から初記録された希少種である（Sato & Maeda, 2003）。青森県からは2005年に発見された（河合ら, 2008）。河合私信（2008）によると採集場所は外ヶ浜町三厩で12月27日である。北海道と青森県以外にはまだ記録がない。南部地方には比較的多いヒナコウモリとよく似ているがいくぶんサイズが小さい。何らかの原因で大陸から迷い込んだとの見方がある。今後の精査が必要である。

（峰下耕）

コウモリ目　ヒナコウモリ科 **D**

和名　チチブコウモリ
学名　*Barbastella darjelinegensis* (Hodgson)
環境省：該当なし

北海道北部、東部、本州では岩手県、福島県、埼玉県、東京都、神奈川県、長野県、静岡県、愛知県、岐阜県、愛媛県、高知県で確認されているが、冬眠個体群の確認されている長野県以外では確認例は少ない。県内では大畑町で１個体の捕獲記録（峰下, 2017）のみであり、評価に必要な知見が少なく、確認された場所が下北半島北部に位置することから、何らかの原因で北海道から迷い込んだとの見方も否定できない。比較的新しい記録であることから今後の精査が必要である。環境省レッドリストでは本州のチチブコウモリが絶滅のおそれのある地域個体群としている。

（峰下耕）

サル目　オナガザル科　　**ＬＰ（下北半島）**

和名　二ホンザル　　**環境省：該当なし**

学名　*Macaca fuscata* (Blyth)

［形態的特徴］　頭胴長は雄53～60cm、雌47～55cmで雄の方がやや大きい。尾は数cm程度で短い。体毛は茶褐色ないし灰褐色で、腹部と前脚・後脚の内側はやや白く、春～夏と秋～冬に毛変わりする。顔と尻部は裸出して赤い。

［選定理由］　下北半島のニホンザル集団は1960年代で150～200頭とされていたが、2007年に1,635頭、2016年に2,577頭と増加の一途をたどっている（青森県, 2016）。また、下北半島頚部で飼育されていたタイワンザル（*Macaca cyclopis*）の逃亡個体との交雑が危惧された時期があったが、両者のサルが接触した情報はない（磯山, 1999）が、下北半島のニホンザルに関しては、特に他種との交雑による遺伝子移入等の遺伝子学観点より、留意すべき地域個体群として注目していく必要がある。

［分布と生態の概要］　下北半島のニホンザルの生息域はもともと半島西部に限られていたが、群れ数及び個体数の増加にともない、東に生息域が拡大し、むつ市近郊まで出没するようになっている。

［特記事項］　下北半島の集団は世界最北限の猿として国の天然記念物に指定されている。環境省のレッドリスト見直し（2007）で、ＬＰ（絶滅のおそれのある地域個体群）からはずされた。　**（磯山隆幸）**

サル目　オナガザル科　　**ＬＰ（津軽半島）**

和名　二ホンザル　　**環境省：該当なし**

学名　*Macaca fuscata* (Blyth)

［形態的特徴］　頭胴長は雄53～60cm、雌47～55cmで雄の方がやや大きい。尾は数cm程度で短い。体毛は茶褐色ないし灰褐色で、腹部と前脚・後脚の内側はやや白く、春～夏と秋～冬に毛変わりする。顔と尻部は裸出して赤い。

［選定理由］　津軽半島のニホンザルの生息頭数は1960年代には220～280頭であった（東, 1966）。その後の生息数についてはしばらくくわしい調査はなされていなかったが、2000年代になって青森県の調査で22群528頭+α（青森県2007-2008）、外ヶ浜町（2012, 2013）と今別町及び青森県の調査（2017中間報告）で30群682+α（外ヶ浜, 2013；今別町, 2018；青森県, 2018）と報告され、増加傾向にある。津軽半島のニホンザルに関しては、特に他種との交雑による遺伝子移入等の遺伝子学観点より、留意すべき地域個体群として注目していく必要がある。

［分布と生態の概要］　津軽半島のニホンザルの生息域はもともと半島北部から中部に限られていたが、群れ数及び個体数の増加にともない、徐々に南部に生息域が拡大している。

［特記事項］　青森県レッドリスト2006年改訂増補版で、ＬＰ（津軽半島）に追加指定された。**（磯山隆幸）**

ネコ目　クマ科　　**ＬＰ（下北半島）**

和名　ツキノワグマ　　**環境省：LP下北半島の二ホンツキノワグマ**

学名　*Ursus thibetanus* G.Cuver

［形態的特徴］　全身黒色で胸に白い三日月模様がある。頭胴長120～145cm、体重70～120kg。本州、四国に生息する日本最大の哺乳類である（阿部ら, 2005）。

［選定理由］　下北半島個体群の遺伝的多様性は、津軽地方（西海岸白神山地）の個体群と比べて極めて低い。下北半島の遺伝的多様性が低い要因として、他の地域との交流が極めて厳しい状況と近年の有駆除による個体数の減少に伴う多様性の減少が懸念される（山本, 2013）。また、青森県自然保護課の2018年の資料によると下北半島における近年の有害駆除数からも、下北個体群の維持が憂慮される。

［分布と生態の概要］　ヒマラヤの南側山麓部から東南アジア北部、中国東北部、ロシア北部、台湾、海南島、日本に分布する。国内では本州、四国の冷温帯落葉広葉樹（ブナ林）を中心に生息する。九州では絶滅した可能性が高く、四国でも絶滅が危惧されている（阿部ら, 2005）。ブナなどの若芽や草本類、ヤマグワやコクワ、ナラやクリなどの堅果、また、アリなどの昆虫類も採食する。県内では、低地の市街地や水田・畑作地帯を除く山地一帯が生息・行動域である（笹森・向山, 2009；笹森ら, 2014）。下北半島に生息するツキノワグマは100頭以下のレベル（自然環境センター, 1997）と考えられていた。しかし、青森県自然保護課の2018年の資料から、下北半島の最近の有害駆除数が平成27年度46頭、平成28年度65頭、平成29年度101頭、平成30年度40頭から、生息数が100頭以下とは考えられない。

［生存に対する脅威と保存対策］　遺伝的多様性が低い下北個体群は、現状のような有害駆除が継続されると、絶滅が憂慮される。専門委員会を設置して駆除の可否を判定し、予防捕殺を禁止することが保全対策として重要である。　**（和田久・笹森耕二）**

③引用文献

阿部　永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四雄・三浦慎悟・米田政明　2008. 日本の哺乳類（改訂２版）. 東海大学出版会, 東京. 195pp.

阿部　永・加藤　克　2017. 阿部永カワネズミ採集記録（2000年～2002年）. 札幌博物研究会誌, 1：1-15.

阿部　永・小林恒明　1968. 八甲田地域における小哺乳類の調査結果. JIPB主調査地八甲田山地域の動物調査報告. pp.5-15.

青森県　1978. 第２回自然環境保全基礎調査動物分布調査報告書（哺乳類）. 47pp.

青森県　1980. 青森県の鳥獣. 181pp.

青森県　1981a. 青森県鳥獣生息状況調査報告書（哺乳類）. 131pp.

青森県　1981b. ムササビ. 青森県鳥獣生息状況調査報告書（哺乳類）. pp.36-39.

青森県　1981c. ツキノワグマ. 青森県鳥獣生息状況調査報告書（哺乳類）. pp.42-67.

青森県　1986. 青森県のマタギ. 72pp.

青森県　1989. 市町村別鳥獣生息状況調査報告書. 161pp.

青森県　1998a. 青森県史叢書奥南新報「村の話」集成上. 青森県環境生活部県史編さん室. 284pp.

青森県　1998b. 青森県史叢書奥南新報「村の話」集成下. 青森県環境生活部県史編さん室. 265pp.

青森県　2006. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－. 113pp.

青森県　2009. 津軽半島地域ニホンザル生息数等調査報告書（2007～2008）. 46pp.

青森県　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.

青森県　2016. 2016年度下北半島ニホンザルモニタリング報告書. 41pp.

青森県　2018. 青森県ニホンジカ目撃情報等の現況（平成30年７月20日時点）. https://www.pref.aomori.lg.jp/release/2018/62388.html（2019年２月１日確認）

青森県　2018. 平成29年度津軽半島ニホンザルモニタリング報告書（中間報告）. 30pp.

青森県　2019. 青森県ニホンジカ目撃情報等の現況（平成30年７月20日時点）. https://www.pref.aomori.lg.jp/（2019年３月１日確認）

東　　滋　1966. 青森県のニホンザルの分布. 野猿, 25：22-25.

千代田デイムス・アンド・ムーア株式会社　1987. 大・中哺乳類. 六ヶ所地点共同調査のうち動物調査報告書. pp.30-57.

平田貞雄　1985. 青森県の動物たち－哺乳類の話－. 東奥日報社, 青森. 150pp.

広瀬　伸　1999. 水虎様への旅－農業土木文化の時空－. 青森県農林部農村計画課. 222pp.

哺乳類分布調査科研グループ　1979. ヒグマ・ツキノワグマの生息分布. 生物科学, 31(2)：96-36.

今別町　2018. 2017年度今別町ニホンザル生息状況調査報告書（中間報告）. 21pp.

Imaizumi, Y.　1956. A new speies of Myotis from Japan (Chiroptera). Bull. Nat. Sci. Mus., 3(1)：42-48.

今泉吉典　1960. 原色日本哺乳類図鑑. 保育社, 大阪. 196pp.

磯山隆幸　1999. 生息環境. 下北半島ニホンザル生息数等調査報告書. 青森県. P.4-8.

環境庁　1993. 日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－脊椎動物編. 自然環境研究センター. 80pp.

環境庁　1993. 第４回自然環境保全基礎調査動植物分布調査報告書（哺乳類）. 208pp.

環境省　2002. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－１　哺乳類. 自然環境研究センター. 177pp.
環境省　2007. 哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱのレッドリストの見直しについて（2007年８月３日公表）
環境省　2015. 別添資料２，我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト. 報道発表資料,「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止リスト）」公表について. 平成27年３月26日公表 https://www.env.jp/press/100775.html（2018年４月10日確認）
環境省　2019. 別添資料2，環境省レッドリスト2019. 報道発表資料，環境省レッドリストの公表について. 平成31年１月24日公表　https://www.env.go.jp/press/106383.html（2019年３月10日確認）
河合久仁子・福井　大・佐藤雅彦・原田正史・前田喜四雄　2008. 日本列島におけるヒメヒナコウモリ *Vespertilio murinus* Linnaeus, 1758 の発見. プログラム・講演要旨集，日本哺乳類学会. p.83.
川田伸一郎・岩佐真宏・福井　大・新宅勇太・天野雅男・下稲葉さやか・樽　創・柿崎智子・横畑泰志　2018. 世界哺乳類標準和名目録. 哺乳類科学，58 (Supplement)：1-53.
工藤正典・貝守幸悦・大久保秀映・沖田和馬・沖田浩一　1999. コウモリ類の冬眠状況から見た青森県三戸地方の自然度の低下. 第24回日本学生科学省作品集. pp.94-95.
町田和彦・斉藤　貴・大八木昭・井上茂樹・斉藤　健　1986. 青森県恐山の森林棲翼手類相(1). 哺乳動物学雑誌，11(3/4)：173-181.
増田隆一　2018. イイズナとオコジョ. 日本の食肉類. 東京大学出版会，東京. pp.112-132.
峰下　耕・大瀬将司・八木橋尚樹・高田隼人・山口義盛　2017. 青森県におけるチチブコウモリ. 東北のコウモリ，2 : 20-21.
三浦慎悟　2005. 偶蹄目. 日本の哺乳類. 東海大学出版会，秦野市. pp.108-114.
向山　満　1981. 三戸地方の食虫類. 青森県生物学会誌，19：15-21.
向山　満　1988. 青森県産翼手目の分布. 青森県立三戸高等学校研究紀要，18：20-27.
向山　満　1989a. 青森県初記録の翼手目２種. PAULOWNIA（青森県立三戸高等学校自然科学部），21：112.
向山　満　1989b. 青森県産翼手目の検討. 青森県生物学会誌，26：36.
向山　満　1996. 青森県2頭目のクロオオアブラコウモリ. 青森自然誌研究，1：34.
向山　満　2004a. 白神山地モニタリング調査手法確立のための調査(コウモリ類・両生類・爬虫類). 白神山地世界遺産地域の森林生態系保全のためのモニタリング手法の確立と外縁部の森林利用との調和を図るための森林管理法に関する研究報告書（平成10～14年度）. 環境省自然環境局東北地区自然保護事務所. pp.134-139.
向山　満　2004b. 青森県岩崎村ガンガラ穴のコウモリ類. 青森自然誌研究，9：18.
向山　満　2007. ニホンアシカ絶滅の経緯. 希少野生生物保護・保全対策報告書－青森県の希少野生生物の生息状況と保護・保全活動の事例－. 青森県. pp.17-19.
向山　満・小原良孝　2010. 哺乳類概説. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 青森県. p.166.
向山　満・鶴間亮一・麻田昌克・真木伸隆・鬼久保浩正・佐藤利奈　2007. 繁殖期におけるノレンコウモリとウサギコウモリの行動圏と利用環境. 日本哺乳類学会2007年度大会プログラム・講演要旨集. p.151.

奈良典明　1976. 奥入瀬地域の動物相［Ⅱ］. 国道102号自然環境調査－昭和51年度報告書. 青森県土木部道路建設課. pp.41-61.
奈良典明・小原良孝・向山満　1993. 南八甲田山地域の哺乳類相. 南八甲田山地総合学術調査報告書. 青森県環境保健部. pp.81-94.
日本哺乳類学会　1997. レッドデータ日本の哺乳類. 文一総合出版. 東京. 279pp.
Obara, Y.　1985. G-band homology and C-band variation in the Japanese mustelids, *Mustela erminea* nippon and *M. sibirica itatsi*. Genetica, 68：59-64.
小原良孝　1991. 進化と核型. 現代の哺乳類学（朝日　稔・川道武男編）. 朝倉書店, 東京. pp.23-44.
小原良孝　1993. 白神のけものと小動物たち. 白神山地（牧田　肇監修）. 青森銀行, 青森. p.111.
小原良孝　1995. 白神山地の食虫類・ネズミ類. 白神山地自然環境保全地域総合調査報告書. 国立公園協会, 東京. pp.309-323.
小原良孝　1996. 八甲田・十和田の哺乳類と両生類. 八甲田・十和田（牧田　肇監修）. 青森銀行, 青森. p154.
小原良孝　1999. 青森県におけるカワネズミの分布状況. 哺乳類科学, 39(2)：299-306.
小原良孝　2000. イイズナ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－. 青森県. p.118.
小原良孝　2004. 哺乳類. 白神山地の自然. 青森県. pp.49-65.
小原良孝　2008. 白神山地の渓流を自在に泳ぐカワネズミたち. 白神山地の魅力. 弘前大学農業生命科学部附属白神山地有用資源研究センター. pp.10-17.
小原良孝　2014. 岩木山の哺乳類－小哺乳類を中心に－. 岩木山を科学する.「岩木山を科学する」刊行委員会. pp130-149.
小原良孝　2015. 岩木山の稀少な哺乳類. 岩木山を科学する.「岩木山を科学する」刊行委員会. pp. 116-120.
小原良孝・笹森耕二・向山満　1997. 青森県におけるイイズナの生息記録と分布状況. 哺乳類科学, 37(1)：81-85.
オオセッカの生息環境研究グループ　1999. 北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究－三沢市仏沼－. 72pp.
音喜多富寿　1975. 南部くらし今昔. 北の街社, 青森. 304pp.
Ohdachi, S.D., Y. Ishibashi, M.A. Iwasa & T. Saitoh (eds.)　2009. The Wild Mammals of Japan. Shoukadoh Book Co., Kyoto, 544pp.
Ohdachi, S.D., Y. Isibashi, M.A. Iwasa, D. Fukui & T. Saitoh (eds.)　2015. The Wild Mammals of Japan (Second edition). Shoukadoh Book Co., Kyoto, 506pp.
笹森耕二　1994. 青森市雲谷周辺の自然. 青森市基幹公園ビジョン調査報告書. 青森. pp.121-130.
笹森耕二　2007. 青森県白神岳でのホンドオコジョの記録. 青森自然誌研究, 12：52.
笹森耕二　2013. 青森市のニッコウムササビの確認地. 青森自然誌研究, 18：33-34.
笹森耕二　2017. 青森県のヤマネ *Gliruslus joponicus* の新産地と文献. 青森自然誌研究, 22：95-102.
笹森耕二　2019a. 青森県におけるオコジョ Ermine の新産地と文献. 青森自然誌研究, 24：83-84.
笹森耕二　2019b. 青森県におけるミズラモグラ Japanese Mountain Mole の新産地と文献. 青森自然誌研究, 24：85-86.
笹森耕二・峰下耕　2019. 青森県におけるニホンモモンガ Japanese flying squirrel の新産地と文献. 青森自然誌研究, 24：94-96.

笹森耕二・向山満　2009．第Ⅱ部動物，第２章 哺乳類．新青森市史 別編４　自然．青森市史編集委員会．青森．pp.310-335.
笹森耕二・山崎竹春　2018．青森市のニッコウムササビの新産地．青森自然誌研究，23：110.
笹森耕二・山﨑竹春・大井　徹・根本　唯　2014．３モデル地区ごとでのクマ類の分布動向の解析，3-2津軽半島．ツキノワグマおよびヒグマの分布域拡縮の現況把握と軋轢防止および危機個体群回復のための支援事業報告書．ニホンクマネットワーク．pp.93-107.
Sato, K. & K. Maeda　2003．First record of *Vesperilio murinus* Linnaeus, 1758 (Vespertilionidae, Chiroptera) from Japan．Bulletin of the Asian Bat Research Institute，3：10-14.
関　哲郎　1992．岩木山の哺乳類．青森県立黒石高等学校研究紀要，3：16-33.
下泉重吉　1970．津軽半島の哺乳動物．津軽半島．岩木山自然公園学術報告．日本自然保護協会．pp.41-47.
自然環境研究センター　1997．平成８年度　下北半島ツキノワグマ生息調査報告書．青森県，95pp.
外ヶ浜町　2012．平成23年度ニホンザル生息数等調査報告書，33pp.
外ヶ浜町　2014．平成25年度ニホンザル生息数等調査報告書，26pp.
高橋雅雄・蛯名純一・宮　彰男・上田恵介　2010．本州産ニホンイイズナ *Mustela nivalis namiyei* による絶滅危惧鳥類オオセッカ *Locustella pryeri* のヒナの捕食．哺乳類科学，50(2)：209-213.
東奥日報　2018．青い森づくり推進機構 本間理事長に聞く．東奥日報．2018年２月17日掲載.
津軽ダム工事事務所　2009．津軽ダムの環境保全措置－その２世界初ユビナガコウモリ集団移転（最終移転）．津軽ダムだより，121：2-3.
和田干蔵　1937．青森県産哺乳類目録．青森博物研究会会報，5：1-11.
和田干蔵　1939．青森県博物総目録有脊椎動物編．青森博物研究会会報，8/9：1-28.
山口義盛　2017．フィールドで出会う哺乳動物観察ガイド．誠文堂新光社，東京．208pp.
山本俊昭　2013．日本の北限に生息するツキノワグマの遺伝的特性．BEARS JAPAN，14(2)：17-18.
山本輝正・佐藤顕義・勝田節子　2008．長野県におけるコヤマコウモリ *Nyctalus furvus* とクビワコウモリ *Eptesicus japonensis* の記録．哺乳類科学，48(2)：277-280.
読売新聞社　1989．十和田市正法寺の脚のミイラ、ニホンオオカミだった．読売新聞青森県版．1989年４月23日掲載.
吉行瑞子　1974．本州からオオアブラコウモリ発見される．国立科学博物館ニュース（1974年11月20日号），p.6.
吉行瑞子　1989．ニホンオオカミを鑑定する．どうぶつと動物園，41(9)：32.
吉行瑞子・木村帝一　1975．本州におけるクロオオアブラコウモリ *Pipistrellus savii velox* Ognev, 1927の新記録．哺乳動物学雑誌，6(3)：142-143.

２）鳥類

①概説

青森県の希少な野生生物に記載された鳥類は2000年に86種（青森県, 2000）、2006年に93種（青森県, 2006）、2010年は100種（青森県, 2010）であった。今回２種加えて102種となった。青森県で記録された野鳥は約350種であるから３割弱が本書掲載種である。

青森県は本州の北端に位置し、日本海・太平洋・陸奥湾と三方を海で囲まれ、山地・湖沼・河川・湿地と変化に富んだ自然環境である。繁殖種として地域に定住する留鳥・夏鳥、季節に応じて渡りをする冬鳥・旅鳥が生息し、まれに本来の生息地や渡りコースから外れた迷鳥が渡来する。種数の多さから本県は鳥類にとって豊かで安定した生態系が残っているものと考えがちであるが、本県が地理的に夏鳥・冬鳥・旅鳥などの移動経路にあたり出現種が多いだけである。鳥類にとって健全な環境が残されているかは個別の種ごとに判断しなければならない。

希少性の高い種では、クマゲラ（本州産クマゲラ研究会, 2004）・イヌワシ（青森県, 2004）・クマタカ（津軽ダム工事事務所, 2008）の繁殖状況は不安定である。オオセッカは、仏沼と周辺は横ばいである（高橋・宮, 2015）が、仏沼周辺と八戸市では休耕田に依存することから注意が必要である。岩木川下流部の生息数も横ばいである（小山私信, 2009）。

留鳥では、カワウ・カンムリカイツブリ・アオサギが増加傾向である。ノスリは平地での繁殖が増加し、水田地帯・農道・バイパス周辺で普通に見かけるようになった。チョウゲンボウは人工建造物で営巣するようになり定着した。ミサゴは明らかに個体数が増えている。オオバンは個体数が増え夏鳥であったのが留鳥となった。

夏鳥では、蕪島のウミネコは安定しているが周辺岩礁の繁殖地は非常に不安定である。ツバメ・バンなどは減少し、イワツバメは増加している。コノハズクは県内の広範囲に生息していたが激減し、うるさいほど鳴き声の聞こえていた南部町ではまったく聞かれなくなった。クロツグミ、ジュウイチ、サシバが増加傾向である。ゴイサギのコロニーは不安定で引っ越しが頻回に起こっている。水田の中干しが普及したことでドジョウの生息数が減ったことが影響しているかもしれない。チゴハヤブサは寺社林などでカラス対策として伐採が行われ営巣地が消失する傾向にある。

冬鳥では、ミヤマガラス・コクマルガラスは水田・畑作地帯に大群が見られる。ミヤマガラスは大群で行動していたが小さな群れに分散する傾向が見られ始めた。カシラダカの飛来数は減少傾向。コオリガモは見られなくなった。

旅鳥では、シギ・チドリ類が安定的に観察できる海岸・湿地・水田地帯が縮小・消滅し非常に不安定である。

一次産業との軋轢が懸念されるカワウ・カンムリカイツブリ・アオサギなどは増加傾向であるが、本書では種の選定に際し産業との軋轢は考慮しないことを申し合わせている。

今回の改訂に先立ち、県内の野鳥関係者から意見を聴取したが、個人所有の観察データーは多いが引用できる文献化が進んでいないことから判断材料に乏しいことを理由に前回掲載種を踏襲した。タンチョウは江戸時代に生息が確実であることを示す文献（遠藤, 1994）があったことから加えた。オジロワシは県内での複数繁殖が確認された（吉岡ら, 2017）ことからランクを変更した。

「学名、分布」は日本鳥類目録・改訂第７版（日本鳥学会, 2012）、「形態的特徴、生態」はフィールドガイド日本の野鳥・増補改訂新版（日本野鳥の会, 2015）に基づいた。

（関下斉）

②本文

ツル目　ツル科　　**ＥＸ**

和名　トキ　　**環境省：野生絶滅**

学名　*Nipponia nippon* (Temminck)

［形態的特徴］　全長76.5㎝。下に曲がった長い嘴を持ち、足は比較的短い。頭は白色で顔は赤く、後頭の羽毛が少し長くて冠羽となる。体も白いが冠羽・翼・尾などの羽毛は橙紅色を帯び、飛ぶと特に風切りが橙紅色に見える。繁殖期には東部・背・翼の上面が灰黒色となる。嘴は黒くて先端が赤く、足は赤い。

［選定理由］　八戸市史に「延宝七年六月二十九日、長苗代の代官から、水田の苗を踏むので毎年の通り鉄砲監察が欲しいとのこと、四丁の鉄砲を許す」（八戸市史編さん委員会, 1969）との記述があり、江戸時代には毎年トキの駆除が行われていたが現在は見られない。悪食であるため農薬で死んだドジョウや両生類を食べてしまうことがあるので絶えず危険にさらされている。餌となるドジョウや両生類が多く生息する水田地帯は極少ない。

［分布と生態の概要］　アジア北東部の温帯で繁殖。かつてはロシア沿海地方・満州・中国東部と日本で繁殖していた。国内では本州と佐渡でかつて繁殖し、現在は佐渡において導入繁殖しているが野生絶滅。北海道・本州・佐渡・隠岐・四国・九州・伊豆諸島・琉球諸島では野生絶滅。放鳥個体は本州北部と中部で確認されている。森林、水田、湿原に生息していた。“タァー”または“ゴァー”と鼻声で鳴く。

［特記事項］　特別天然記念物。国内希少野生動植物種。　**（関下斉）**

ツル目　ツル科　　**ＥＸ**

和名　タンチョウ　　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Grus japonensis* (Müller)

［形態的特徴］　全長140㎝。翼開長240㎝。大型のツルで、日本産鳥類の中でも最大級。体は白くて頭頂は赤色、目の前から喉・くび・後頸が黒く、目の後ろから後頸は白い。嘴は黄褐色で、足は黒い。若鳥は成鳥に似るが初列雨覆や初列風切の先が黒褐色。

［選定理由］　盛岡藩では江戸時代に毎年管理的に一定数の鶴を生け捕りあるいは撃っていた。多くは真鶴（マナヅル）であるが、七戸町で丹頂（タンチョウ）の捕獲記録があるほか、各地で鶴（タンチョウ）も捕獲されていた（遠藤, 1994）。また、正部家種康（私信）によると櫛引村（八戸市櫛引）にタンチョウの巣があったとの言い伝えがある。明治以降になると秋・春の渡りが絶え、本種は明治期に絶滅したと判断した。2002年５月４・５日仏沼（蛯名, 2007）、2012年４月２日つがる市に於いて記録された（菊地・松原, 2013）が迷鳥と判断した。

［分布と生態の概要］　モンゴル・アムール盆地・満州・ウスリランド・北海道東部・クリール島の湿原で繁殖している。国内では北海道東部で繁殖し、冬期は給餌場などに集まる。まれに本州以南に冬鳥として渡来する。“クルル”と響く声で鳴く。

［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

キジ目　キジ科 **A**

和名　ウズラ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Coturnix japonica* Temminck et Schlegel

［形態的特徴］　全長20㎝。丸い体つきで尾は短い。頭から体の上面は褐色で黒と淡黄色の黄斑と縦斑がある。眉斑は黄白色。胸から脇には赤茶色と黒の縦斑がある。雄夏羽の喉は赤茶色。
［選定理由］　生息地である原野や草原が減少し、ごく稀な出現となった。
［分布と生態の概要］　ロシア東南部・中国東部・日本（本州中部以北）で繁殖する。本州中部以北では夏鳥、本州中部以南では冬鳥であるが、生息数は極めて少ない。県内では、岩木山麓の草原、上北地域の牧野などに見られたが、近年では三沢市仏沼で継続的に記録され（高橋ら, 2017）、岩木山麓にも記録が見られる。
［生存に対する脅威と保存対策］　原野・荒れ地・草原の維持と保全が必要。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ミズナギドリ目　ウミツバメ科 **A**

和名　コシジロウミツバメ **環境省：該当なし**
学名　*Oceanodroma leucorhoa* (Vieillot)

［形態的特徴］　全長20.5㎝、翼開長48㎝。体は黒褐色で、腰の上部と側部は白い。腰の白色部の中央には細い黒線がある。尾の切れ込みは深い。翼の上面には淡色帯が出る。
［選定理由］　県内では下北半島の島嶼（とうしょ）で繁殖している（阿部, 2010）。ネズミやカモメ類による捕食圧の増加が懸念される。
［分布と生態の概要］　北太平洋沿岸の島々や孤島などで繁殖し、国内では北海道大黒島・岩手県三貫島などが主な繁殖地。その周辺の海上に見られる。他では稀な冬鳥・旅鳥。県内では、東通村弁天島で1995年に繁殖が確認された。
［生存に対する脅威と保存対策］　東通村弁天島は、セメント積み出し港となっていて一般人は立入禁止のため大きな環境変更は無いが、接岸する船から侵入したネズミやカモメ類による捕食圧への対策が必要である。
［特記事項］　日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日豪渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

ペリカン目　サギ科 **A**

和名　サンカノゴイ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Botaurus stellaris stellaris* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長70㎝。ずんぐりしていて首は短く見えるが、伸ばすと長い。頭頂は黒く、体はむぎわら色で黒い複雑な斑がある。嘴は黄色味を帯び、足は緑色味がある。
［選定理由］　生息数が少なく、県内では、三沢市仏沼で繁殖の可能性があり冬期の記録もある。県内の他地域では旅鳥としてごく稀に見られる。生息地である湿地環境の減少や消滅により絶滅が危惧される。
［分布と生態の概要］　ロシア・中国南東部・北海道などで繁殖し、冬にはアジア南部に移動する。県内では稀な旅鳥として観察され、三沢市仏沼周辺では通年見られる。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地やヨシ原などの生息地が減少している。また、仏沼地区では周辺休耕地を代用湿地として利用していたが急速な復田が進み生息環境が消失した。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ペリカン目　サギ科 **A**

和名　オオヨシゴイ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**

学名　*Ixobrychus eurhythmus* (Swinhoe)

［形態的特徴］　全長39㎝。雄の頭頂は黒く、背は栗色。雨覆いは黄灰色で、風切りは灰黒色。下面は白っぽく喉から胸の中央に一本の黒線がある。

［選定理由］　生息数が少なくかつて仏沼周辺ではよく見られたが、現在ではごく稀に見られるだけとなった。

［分布と生態の概要］　ロシア極東・中国南東部・日本（中部以北）で夏季に繁殖し、冬期は東南アジアに移動する。県内ではかつて岩木川下流部・三沢市仏沼周辺に生息したが現在ではほとんど見られない。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地環境の減少が脅威。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日米渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ペリカン目　サギ科 **A**

和名　ミゾゴイ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Gorsachius goisagi* (Temminck)

［形態的特徴］　全長49㎝。ゴイサギより小さく嘴は短い。顔は赤栗色、体の上面は暗栗褐色。雨覆いは栗色で風切羽が黒く、先端は栗色。体の下面はバフ色と栗色の縦縞で、中央に黒い縦斑がある。

［選定理由］　県内には局所的に少数生息する。かつて平川市猿賀神社で少数繁殖していたが現在はいない。

［分布と生態の概要］　夏鳥として主に本州中部以南で繁殖し、南西諸島で越冬するものもいる。県内では平川市で繁殖の記録がある。

［生存に対する脅威と保存対策］　繁殖適地である森林と湿原の組合せが失われつつある。局所的に分布する傾向があることから繁殖地を保全する必要がある。

［特記事項］　日米渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

ツル目　クイナ科 **A**

和名　シマクイナ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Coturnicops exquisitus* (Swinhoe)

［形態的特徴］　全長20㎝。頭から後頸は灰褐色、背と雨覆いはオリーブ褐色で黒褐色の縦斑がある。黒い過眼線の上下に白線がある。嘴は淡黄色で基部に赤い斑がある。足は黄緑色。

［選定理由］　個体数が少なく、繁殖期に生息が確認されたのは三沢市仏沼と周辺地域だけである。

［分布と生態の概要］　繁殖地はロシアのトランスバイカリア東部と中国東北部の局所。県内では下北郡尻屋崎（清棲, 1978b）と東津軽郡外ヶ浜町（成田, 1996）の記録がある。2003年に仏沼で繁殖期に少数生息していることが確認され繁殖の可能性が高いと考えられた（宮ら, 2007）。

［生存に対する脅威と保存対策］　特殊な湿原に生息する。このような湿地は海岸の後背湿地などに見られ、近年頻繁に起こる大雨による冠水や大時化時の砂の流入などで失われつつある。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ツル目　クイナ科 **A**

和名　ヒメクイナ **環境省：該当なし**

学名　*Porzana pusilla pusilla* (Pallas)

［形態的特徴］　全長19.5㎝。頭頂から体の上面、雨覆いと胸側はオリーブ褐色で、黒い縦斑があり、背には白斑がある。顔から胸は青灰褐色で褐色の過眼線があり、腹と脇は白と黒の横斑。

［選定理由］　ごく希な観察記録があるだけで個体数が少ないものと思われる。三沢市仏沼で数年連続して観察されたが現在では見られない。

［分布と生態の概要］　本州中部以北の水田や湿地に夏鳥として飛来する。県内では三沢市仏沼で1981年から数回だけ観察され（蛯名, 2007）、2003年に鳴き声が録音されてから（宮ら, 2005）、毎年少数が確認されたが現在では不明。背丈の低い湿地草原で“ギィ～ィ”と長く鳴くが姿を見ることは難しい。

［生存に対する脅威と保存対策］　個体数が少なく、生息する背丈の低い湿地環境はごく限定的である。生息する環境と生息可能な湿地の保全が必要である。

［特記事項］　日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ツル目　クイナ科 **A**

和名　ヒクイナ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Porzana fusca erythrothorax* (Temminck et Schlegel)

［形態的特徴］　全長22.5㎝。頭から後頸と上腹は赤茶色で、後頸・背・翼は暗緑褐色。脇・下腹・下尾筒は白と黒の横斑。嘴は青黒色で足は赤い。

［選定理由］　以前は水田や湿原でよく鳴き声を聞いたが近年ではごく稀となった。

［分布と生態の概要］　夏鳥として全国の水田や湿地に渡来する。県内では河川・水田・湖沼付近の湿地に見られたが近年は見られない。繁殖期は“キョッ　キョッ　キョキョキョキョ”と徐々に早くなる特徴のあるリズムで鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地や溜池に隣接する草地などの生息環境が減少。生息地の保全・再生が必要である。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **A**

和名　ヘラシギ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**

学名　*Eurynorhynchus pygmeus* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長15㎝。スプーン型の嘴。夏羽では、頭や体の上面は黒く赤茶色の羽縁を持つ。飛翔時は翼に細い白帯が出る。嘴と足は黒い。

［選定理由］　全国的に渡来数が少なく、県内の出現も稀である。

［分布と生態の概要］　繁殖地はロシアのチュクチ半島からカムチャツカ半島、ロシア北東部の沿岸のツンドラ地帯で、冬期は中国南部からインドシア半島の沿岸部に渡る。日本には、数少ない旅鳥として干潟や入江に渡来し特に春は稀。県内では太平洋側での記録が比較的に多く、津軽地方では水を落とした溜池などに見られることがある（小山, 2010）。ごく浅い水辺で嘴を水につけて採餌する。

［生存に対する脅威と保存対策］　干潟や水のある泥地の減少。

［特記事項］　国内希少野生動植物種指定種。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　カモメ科 **A**

和名　コアジサシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Sterna albifrons sinensis* Pallas

［形態的特徴］　全長25㎝。額が白く、頭頂から後頭にかけては黒い。背と翼の上面は淡青灰色で、腰・尾・体の下面は白い。嘴は黄色く先は黒く、足は橙黄色。冬羽では嘴は黒く、足は褐色。
［選定理由］　県内に繁殖地が複数あったが現在はない。飛来数は少なく、繁殖地となる砂浜や礫地の減少とレジャーなどの立ち入りが繁殖へのストレスになっている。
［分布と生態の概要］　温帯・熱帯地域に広く分布し、県内では八戸市や六ヶ所村の砂浜・埋立地にコロニーがあったが現在は失われている。海岸や河口、河川で飛びながら餌を探しダイビングして魚類を採る。
［生存に対する脅威と保存対策］　繁殖地となる砂浜や荒れ地、餌場となる河口環境が減少し定住が困難となっている。繁殖の兆しが観察された段階で人の立ち入りを制限するなどの保護が必要。
［特記事項］　日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日豪・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　ウミスズメ科 **A**

和名　ケイマフリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cepphus carbo* Pallas

［形態的特徴］　全長37㎝。夏羽は全身ほとんどが黒く、下面は少し褐色味を帯びる。目の周辺が白く、嘴の付け根の上下に小白斑がある。嘴は黒く、足は赤い。
［選定理由］　県内では下北半島の島嶼だけで繁殖し、生息数は100～150羽ほどと（阿部, 2010）少ない。ネズミやカモメ類の捕食が心配されている。
［分布と生態の概要］　オホーツク・サハリン・千島列島・北海道沿岸で繁殖。県内では東通村尻屋弁天島で繁殖する。海上で魚類を採餌する。
［生存に対する脅威と保存対策］　企業港内の立入禁止区域で繁殖するが、ネズミやカモメ類による捕食被害がみられる。港内に接岸する船からのネズミの侵入が考えられることから対策が必要である。
［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **A**

和名　オジロワシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Haliaeetus albicilla albicilla* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長雄84㎝・雌94㎝。翼開長199㎝～228㎝。翼は幅が広くて四角い。尾は短くて少しくさび形。体全体は褐色で、頭部は淡色の個体が多い。尾は白く、嘴と足は黄色い。幼鳥や若鳥の翼下面は下雨覆の縁に淡色線がある。
［選定理由］　個体数が少なく、繁殖場所も限られている。風力発電施設でのバードストライクに遭いやすい種である。
［分布と生態の概要］　北ヨーロッパからロシア東部の広い範囲で繁殖し、冬期には南下する。日本では主に冬鳥であったが、北海道での繁殖が増え（白木, 2013）、青森県でも繁殖が複数確認された（吉岡ら, 2017）。魚を主な餌とし他鳥類・哺乳類なども捕らえる。岩礁地帯や河川・湖沼などで見られ、サケの遡上を追いかけ上流部にも現れる。
［生存に対する脅威と保存対策］　冬鳥としては餌場・休憩になる岩礁地帯・湖沼・崖の樹林などの保全が必要。留鳥として営巣環境の保全とカメラマンなどのストレスがないよう啓蒙活動が必要。
［特記事項］　国の天然記念物・国内希少野生動植物種・日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約指定種。
（関下斉）

タカ目　タカ科 **A**

和名　イヌワシ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Aquila chrysaetos japonica* Severtzov

［形態的特徴］　全長雄81cm・雌89cm、翼開長170cm～213cm。尾は長くて丸尾。遠くから見るとほとんど黒く見える。体は黒褐色で、後頸が金褐色、尾羽は少し淡くて先が黒い。若鳥は成鳥よりも黒みが強く、風切羽の基部と尾羽の基部が白くて飛翔中によく目立つ。

［選定理由］　白神山地など繁殖地域が限定的。県内の生息数はごく少数である。

［分布と生態の概要］　亜種イヌワシは日本と朝鮮半島で留鳥として少数生息する。日本では限られた山岳地帯で希に繁殖する。県内では白神山地２か所で営巣（青森県, 2004）、一部は岩木山に飛来する。八甲田山系・下北半島・津軽半島・八戸市でも記録があるが安定的に生息するかは不明である。崖の岩棚や大径木に営巣する。山地の裸地・伐採跡地・森林周辺草地・林道などで採餌する。

［生存に対する脅威と保存対策］　個体数がごく少なく、繁殖や採餌の環境が限られている。繁殖に対する人的なストレス等に敏感であることから、保護対策が必要である。

［特記事項］　国の天然記念物、国内希少野生動植物種指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **A**

和名　クマタカ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Nisaetus nipalensis orientalis* Temminck et Schlegel

［形態的特徴］　全長雄72cm・雌80cm、翼開長140～165cm。大型のタカであるが翼は短いので、翼開長はトビと同じくらい。翼の幅は広くて先は指状に開き、後縁には膨らみがある。後頭の羽毛は少し長くて冠羽状になる。

［選定理由］　個体数が少なく広大な成熟した森林環境を必要とすることから。

［分布と生態の概要］　亜種クマタカは日本固有種で日本全土の森林地帯に留鳥として生息する。県内では平野部を除く森林地帯に見られるが、森林と海岸が隣接する場合は海岸部へも出現する（小山, 2010）。営巣は広葉樹・針葉樹問わず大径木を利用する。狩りは成熟した森林・伐採跡地・林道・農地などで行われる。

［生存に対する脅威と保存対策］　狩りに適した成熟した森林・伐採跡地・林道が減少している。繁殖は人的なストレスに敏感で適地が減少している。県内は風力発電施設が多数存在し、クマタカの行動に適した風の通り道が重なることが多くバードストライクの危険性が高まっている。

［特記事項］　国内希少野生動植物種指定種。　**（関下斉）**

フクロウ目　フクロウ科 **A**

和名　コノハズク **環境省：該当なし**

学名　*Otus sunia japonicus* (Temminck et Schlegel)

［形態的特徴］　全長18～21cm。全身は灰褐色で、褐色・黒色・灰色などの複雑な斑がある。目は黄色。翼の下面は灰白色で、風切りには黒色の横斑がある。赤色型は橙褐色を帯びる。

［選定理由］　主に深山の森林に生息し、南部町ではりんご園に多く生息していたが現在では見られない。繁殖地は少なく個体数も少ない。

［分布と生態の概要］　亜種コノハズクは夏鳥として日本国内に渡来し樹洞で繁殖する。冬期は南日本に移動し、台湾に渡ると考えられている。夜に“ブッキョッコー”と鳴くが、白神山地の深山では日中に聞くことがある（小山, 2010）。三戸町城山公園では巣箱に営巣した例がある（向山, 1978）。

［生存に対する脅威と保存対策］　南部町・三戸町ではりんご園で繁殖していたが、ネコによる被害によって生息しなくなったと予想される（向山, 未発表）。同時期に県南地方の広範囲でほとんど見られなくなった。樹洞で繁殖するが、樹洞のある木は危険木として伐採される例が急増しているので配慮が必要である。　**（関下斉）**

キツツキ目　キツツキ科 **A**

和名　クマゲラ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Dryocopus martius martius* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長45.5㎝。体は黒く、嘴は黄白色。雄は頭頂から後頭が赤く、雌は頭頂だけが赤い。

［選定理由］　ごく限られた環境に少数生息する。心無いカメラマンによる撮影ストレスによって営巣放棄された後、本県での記録は絶えている。

［分布と生態の概要］　亜種クマゲラは北海道・南千島・青森県・秋田県で少数繁殖する留鳥。広大なブナ林に生息しアリなど朽木の中の昆虫を採餌する。巣穴の出入り口は縦約15㎝、横約10㎝の楕円形。“ケーッ　ケーッ”とよく通る声で鳴く。朽木に残る食痕は大きく縦長。

［生存に対する脅威と保存対策］　広大なブナ林を必要とし、営巣に適した真っ直ぐな大径木は極めて少ない。カメラマンなどの人的なストレスが繁殖を阻害した例もあることから営巣環境の保全と並行して人的なストレスの排除が必要。このような方法で撮影された写真を第三者が使用することがないよう市民と保護意識を共有することが必要。

［特記事項］　国の天然記念物。　**（関下斉）**

スズメ目　モズ科 **A**

和名　チゴモズ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Lanius tigrinus* Drapiez

［形態的特徴］　全長18.5㎝。モズよりも嘴が太い。頭は青灰色、下面は白く、背と尾羽は赤褐色で黒い横斑がある。翼に白斑はない。過眼線は黒く、雌の目の前が白い。

［選定理由］　毎年繁殖していた場所は無くなり、極稀にしか見られなくなった。

［分布と生態の概要］　ロシアウスリー地方から中国東部、日本などで繁殖する夏鳥。冬期はマレー半島や大スンダ列島に渡る。県内では、やや開けた林や灌木、公園の林などで繁殖するが近年ではほとんど見られない。昆虫やカエルなどを捕食する。

［生存に対する脅威と保存対策］　種差海岸では植生保護の目的で崖の低木が伐採され同種とアカモズの営巣環境が消失した。低木やヤブの環境は邪魔者と考えられがちで消失する可能性が高い。一方、カメラマンに人気の種であることから繁殖地が知られることは保護上問題となることから、繁殖情報を秘匿せざるを得ないことが繁殖地消失の危険性を増大させている。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

スズメ目　モズ科 **A**

和名　アカモズ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Lanius cristatus superciliosus* Linnaeus

［形態的特徴］　全長20㎝。額は白く、頭から尾までが赤褐色。翼は黒褐色。眉斑は白く、過眼線は黒い。下面は白く脇は橙黄色を帯びる。翼に白斑はない。

［選定理由］　近年生息数が減少しまれにしか見られなくなった。

［分布と生態の概要］　亜種アカモズはサハリンと日本で繁殖する夏鳥。四国・九州では旅鳥。冬期は中国南部より南に移動する。明るい林や草原と灌木などの低木が混在する場所に生息する。灌木の茂みに営巣する。津軽地方ではりんご園や人家に営巣した例があり（小山, 2010）、昆虫・カエル・ネズミ・モグラなどを捕食する。

［生存に対する脅威と保存対策］　草原と灌木の組合せや藪は邪魔者と考えられがちで消失する可能性が高い。カメラマンに人気のある種であるため、繁殖情報を秘匿することで伐採などの危険性が高まっている。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

スズメ目　ウグイス科　　**A**

和名　オオセッカ　　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Locustella pryeri pryeri* (Seebohm)

［形態的特徴］　全長13㎝。尾が比較的に長い。体の上面は褐色で背には黒色縦斑があり、眉斑は淡褐色。下面は灰白色で脇はオリーブ褐色。

［選定理由］　三沢市仏沼地区、小川原湖湖沼群、岩木川河口、八戸市などの特殊な湿地環境に生息する。

［分布と生態の概要］　亜種オオセッカは日本固有種で、主に利根川・岩木川・仏沼で繁殖する。冬期は関東以南に移動するが詳しいことはわかっていない。ヨシ原に生息するイメージが強いが地面が見えないほど下草が繁茂する湿地を営巣地として選ぶ。太平洋側の休耕田は代用湿地としてオオセッカに適した植生となることがある。

［生存に対する脅威と保存対策］　岩木川と仏沼地区の生息数は安定的であるが、仏沼周辺の休耕田が復田され繁殖地が大規模に消失した。八戸の生息地は全て休耕田であることから継続することは難しい。

［特記事項］　国内希少野生動植物種指定種。　　**（関下斉）**

カモ目　カモ科 **B**

和名　シノリガモ **環境省：該当なし**
学名　*Histrionicus histrionicus* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長43㎝。雄は全体に紫黒色で頭頂と脇腹の赤栗色や顔・背・胸の白線・白斑が目立つ。雌は全体に灰黒褐色で顔の白斑が目立つ。嘴と足は青黒色。
［選定理由］　県内の限られた渓流で少数繁殖する。
［分布と生態の概要］　シベリア東部から北アメリカ北西部にかけて繁殖し、冬鳥として日本やカリフォルニアなどの岩礁地帯に生息する。国内では北海道や青森県で繁殖し、北日本でもまれに繁殖する。冬には本州中部地方以北の海岸に生息する。本県では白神山地・下北半島・八甲田山系などの渓流の石の隙間を利用して繁殖している。本県で繁殖したものは冬には海に出るが渡来のものと区別できない。国内の繁殖初認は1976年に白神山地赤石川である（三上, 1978）。
［生存に対する脅威と保存対策］　渓流の岩の隙間を利用することから、渓流内部や周辺地の岩も保全すべきである。海岸で越冬するものは釣り糸に絡まったものが多く見られることから、釣りのマナー向上が必要である。
［特記事項］　日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ペリカン目　サギ科 **B**

和名　ヨシゴイ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ixobrychus sinensis sinensis* (Gmelin)

［形態的特徴］　全長36.5㎝。日本のサギ科では最小。雄は頭頂が黒く、体は黄褐色。飛ぶと風切りが黒く、雨覆いは黄褐色。雌は頭が赤褐色で、下面に不明瞭な褐色縦斑がある。
［選定理由］　ヨシ原を伴う水辺の減少など生息環境が減少している。
［分布と生態の概要］　インド・スリランカ・東南アジア・中国・日本で繁殖。国内では北海道から九州に夏鳥として生息。冬期は九州以南の島々・沖縄・台湾などへ南下する。県内では夏鳥として湿地・河川・湖沼・水田・溜池などのヨシ原に生息・繁殖している。
［生存に対する脅威と保存対策］　生息・繁殖するためのヨシ原などの減少によって生息数が減少している。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日米渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ペリカン目　サギ科 **B**

和名　クロサギ **環境省：該当なし**
学名　*Egretta sacra sacra* (Gmelin)

［形態的特徴］　全長62.5㎝。足が比較的に短い。黒色型と白色型とがある。色には変化が多く、黒色と白色が交じる中間型もある。嘴は黒褐色または黄褐色。足は黄緑色または緑褐色で足指は黄色みが強く、飛ぶと足指の裏が黄色く目立つ。
［選定理由］　県内各地の海岸で見られるが生息数が少なくまれにしか見られない。
［分布と生態の概要］　韓国・台湾・東南アジア・オーストラリアに生息。国内では北海道から九州の海岸に生息。県内では夏鳥・留鳥・漂鳥として、海岸の岩礁地帯に黒色型が生息する。冬期には出現頻度が少ないことから温暖な地域に南下するものと考えられる（小山, 2010）。
［生存に対する脅威と保存対策］　釣りなどのレジャーによるストレスや岩礁地帯の減少。
［特記事項］　日米渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

ツル目　クイナ科 **B**

和名　クイナ **環境省：該当なし**
学名　*Rallus aquaticus indicus* Linnaeus

［形態的特徴］　全長29㎝。体の上面はオリーブ褐色で縦斑がある。首から胸は青灰褐色。嘴は比較的長く繁殖期にはほとんど赤く、秋冬には黒褐色で下嘴の基部は赤い。

［選定理由］　湿地や水田地帯の構造変化に伴い生息地が減っている。生息する湿地・水田は局所的である。

［分布と生態の概要］　中国南東部・朝鮮・日本で繁殖。冬期は東南アジアに渡る。日本では夏鳥として全国に広く分布・繁殖しているが個体数は少ない。本州南部では少数が越冬する。沼沢や湖沼のヨシ原・水田・湿地・河畔の草地などに生息する。県内では河川・水田・湖沼付近の湿地で少数生息し局所的に分布している。繁殖期には“ヴィー　ヴィー”のほか何種類かの特徴ある鳴き声が聞かれる。真夏の湿度の高い昼下がりに畦で羽繕いする。稲の背丈が腰丈に迫る頃になると雛が畦など見通しのよい場所に現れる。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ヨタカ目　ヨタカ科 **B**

和名　ヨタカ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Caprimulgus indicus jotaka* Latham

［形態的特徴］　全長29㎝。灰褐色・褐色・黒・白の複雑な模様。肩羽の灰白色が少し目立つ。雄は目の下・喉・翼の先・尾外側の先端近くに白斑がある。雌は尾外側先端近くの白斑はなく、翼や喉の白斑は不明瞭。

［選定理由］　夏鳥として各地に生息するが出現個体数はごく少ない。

［分布と生態の概要］　バイカル湖からアムール流域、ウスリー川地方から中国南部まで、朝鮮半島・日本で繁殖。冬期はインドネシア・マレーシアなどに渡る。日本では夏鳥として全国で繁殖する。林縁・伐採跡地・原野などに生息し、夕暮れ時・夜明けに“キョキョキョキョキョキョ”という長く連続した大きな声で鳴く。薄暗くなると飛び回りながら昆虫をとる。街灯に集まる昆虫を狙うことから街灯の上や電信柱の上に休む姿を見ることもある。

［生存に対する脅威と保存対策］　原野や明るい林縁などの減少が脅威。　**（関下斉）**

チドリ目　チドリ科 **B**

和名　ケリ **環境省：情報不足**
学名　*Vanellus cinereus* (Blyth)

［形態的特徴］　全長31.5㎝。額から後頭は黒くて長い冠羽がある。後頸から体の上面は黒く緑色や淡紅色の光沢がある。腰は白くて尾は黒い。胸に黒い帯がある。下尾筒はオレンジ色。

［選定理由］　湿地の減少や水田地帯の構造の変化にともない生息数が減少した。

［分布と生態の概要］　中国東北部と日本で繁殖。日本では本州北部など限られた地域で繁殖し本県が北限。日本中部以南では冬鳥・旅鳥である。つがる市の池沼湿地、岩木川下流域の湿地や水田などで少数繁殖している。太平洋側では十和田市・八戸市で不定期に繁殖しているようである。外敵が近づくと“ケリケリケリケリ”と飛びながら激しく鳴いて攻撃する。

［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　チドリ科 **B**

和名　イカルチドリ **環境省：該当なし**
学名　*Charadrius placidus* Gray et Gray

［形態的特徴］　全長20.5㎝。コチドリに似るがコチドリよりも大きく、嘴は長い。顔の斑紋・目の外縁・胸の帯・足の色はコチドリよりも淡い。
［選定理由］　河川敷・湖畔岸の礫の浜で繁殖していたが、河川・湖岸などの構造変化によって生息地が激減した。
［分布と生態の概要］　日本全国で繁殖している。北海道では夏鳥で冬期は南日本で越冬する。県内でも主に夏鳥だが一部留鳥である。川原の砂礫地・湖沼畔・ダム湖の砂泥地などに生息する。河川では中流以上の砂礫地で繁殖するものが多い。繁殖期はなわばり主張や求愛のため“ピオピオピッピッピッピッ”と鳴きながら飛び回るので、存在確認しやすい。繁殖時に外敵が接近すると、擬傷といわれる行動をする。親鳥は鳴きながら翼を引きずり怪我した仕草で外敵の注意を引きつけて遠くへ誘導する。 **（関下斉）**

チドリ目　セイタカシギ科 **B**

和名　セイタカシギ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Himantopus himantopus himantopus* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長37㎝。嘴はまっすぐで長くて細い。足は非常に長い。頭部と後頸が白い個体から黒い個体まで個体差が大きい。体上面は雄の夏羽は緑光沢のある黒、雌は褐色味がある。嘴は黒く、足は淡紅色。
［選定理由］　春秋の旅鳥として飛来するが、出現は少ない。
［分布と生態の概要］　ユーラシアの南部・中国北東部・日本の一部で繁殖し、冬は南部アジア・南半球に移動する。日本では主に旅鳥として春秋に水田・湿地・干拓地などに渡来するが多くない。本州で局所的に繁殖し、越冬するものもいる。県内では旅鳥として湿地・干潟・休耕田・河口などに少数が出現する。嘴を水につけ首を左右に振りながら採餌する。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地・干潟・水張り休耕田など生息地の減少。
［特記事項］　日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　ヤマシギ **環境省：該当なし**
学名　*Scolopax rusticola* Linnaeus

［形態的特徴］　全長34㎝。額が灰色で、頭頂から後頭に黒い横斑があり、体の上面や雨覆は赤褐色・黒・灰白色の複雑な斑紋で、背と肩羽の外側は灰白色の縦線となって見える。尾は黒く先は灰色。
［選定理由］　主に夏鳥として生息するが数が少なく、出現が希である。
［分布と生態の概要］　ヨーロッパ・アジア大陸の温帯地域、サハリン、日本で繁殖。冬期は地中海沿岸、北アフリカ、インド、中国南部、東南アジア、日本南部に渡る。国内では、伊豆諸島や本州中部以北の林で繁殖。北日本のものは冬期に暖かい地方へと移動するとされるが、一部越冬し林内の小さな流れなどで積雪期にも見られる。夜行性であることからあまり人目につかない。春の渡り移動時に公園や人家の庭に出現することがある。林地の湿地・林道などでミミズや昆虫、陸生貝などを食べている。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　アオシギ **環境省：該当なし**
学名　*Gallinago solitaria japonica* Hodgson

［形態的特徴］　全長30㎝。全体の斑紋は他のタシギ類よりも細かく密で、暗色に見える。頭部や体上面の縦斑は白い。背や翼は青灰色を帯び、下雨覆は斑紋がある。尾羽は16～28枚で20枚のものが多い。
［選定理由］　冬鳥として、山地の渓流などに生息するが出現がまれである。
［分布と生態の概要］　アジア大陸の中東部で繁殖し、冬には南アジア・日本に渡る。国内では、冬鳥として渓流畔や湿地に渡来するが多くない。下北半島・七戸町・弘前市などで出現記録がある。水中や泥の中に嘴をさし込んで、ミミズ・昆虫・陸上貝類などを採餌する。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　オオジシギ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Gallinago hardwickii* (Gray)

［形態的特徴］　全長31㎝。他のタシギ類よりも大きく淡色である。嘴は大きく細長い。次列風切先端の白線は目立たず、下雨覆には一面に黒斑がある。尾羽は14～19枚で、16枚と18枚が多い。
［選定理由］　生息地の環境変化によって、出現数が減少している。
［分布と生態の概要］　ウスリー川南東部、サハリン南部、日本で繁殖。冬期はニューギニア、オーストラリア、タスマニアに渡る。国内では夏鳥として主に本州中部の高原、東北地方の草原に渡来し枯れ枝や電柱によく止まる。県内では夏鳥として牧草地・湿地・水田・原野に渡来する。飛び立つときに“ゲッ”と鳴く。繁殖期には“ズビャーク ズビャーク”と鳴きながら飛び回り、ザザザザザザという大きな音を立てながら急降下するディスプレイフライトを繰り返す。ザザザザザという大きな音は尾羽を打ち鳴らしたもの。
［生存に対する脅威と保存対策］　原野や牧草地の減少や水田地帯の構造変換によって生息地が減少している。
［特記事項］　日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　ダイシャクシギ **環境省：該当なし**
学名　*Numenius arquata orientalis* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長60㎝。長くて下に曲がった嘴を持つ大型のシギ。頭から背は淡褐色で黒い横斑がある。下背・腰・上尾筒は白くて、尾は白地に黒い横斑がある。眉斑は白く、顔からクビと胸は淡褐色の地に縦斑がある。嘴は黒く下嘴の付け根は淡い紅色。足は青灰色。
［選定理由］　旅鳥として春・秋に渡来するがごく少ない。
［分布と生態の概要］　ロシア南東部・中国北東部で繁殖し、冬には南アジア・アフリカに渡る。国内では旅鳥・冬鳥して干潟に渡来し海岸近くの水田や干拓地の水たまりにも現れる。県内では旅鳥である。長い嘴で巧みにカニを捕らえ、カニの足をふるい落としてから飲み込む。群れで飛ぶときには編隊を組む。“カーリュー”や“ホーイ　ホーイ”と鳴く。
［生存に対する脅威と保存対策］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　ホウロクシギ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Numenius madagascariensis* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長61.5㎝。長くて下に曲がった嘴を持つ大型のシギ。ダイシャクシギよりも全体的に褐色味が強い。下背・腰・上尾筒は褐色地に黒色の斑がある。翼の下面には一様に黒色横斑があり黒っぽい。嘴は黒く下嘴の付け根は淡い紅色。足は青灰色。

［選定理由］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。

［分布と生態の概要］　ロシア東部・カムチャツカ・オホーツク沿岸・中国東北部・ウスリー地方で繁殖する。冬期には南アジア・ニューギニア・オーストラリアへ渡る。国内では旅鳥して干潟に渡来し海岸近くの水田や干拓地の水たまりにも現れる。県内では旅鳥である。ダイシャクシギと混群を作る。習性はダイシャクシギと似る。“コーリュー”や“ホーイ　ホーイ”、“ホイピピピピピ”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　アカアシシギ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Tringa totanus ussuriensis* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長27.5㎝。夏羽の頭は灰褐色で黒い縦斑がある。身体の上面は灰褐色で黒い軸斑と横斑、黄白色の羽縁がある。下背と腰は白く、尾は白地に黒の横斑。顔・くび・胸は白地に黒の縦斑が密にある。嘴は先が黒く基部が赤く、足は赤い。

［選定理由］　旅鳥として渡来するがごく少ない。

［分布と生態の概要］　アジア中央部からロシア東部・サハリン・北海道の湿原で繁殖し、冬期はアジア南部・東南アジアへ渡る。県内では干潟・入江・水田・港湾などに渡来する。“ピーチョイチョイ”や“ピークゥ　ピークゥ”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　サルハマシギ **環境省：該当なし**

学名　*Calidris ferruginea* (Pontoppidan)

［形態的特徴］　全長21.5㎝。夏羽では頭は暗紅褐色で黒い縦斑があり、体の上面は暗紅褐色で、羽毛の軸斑は黒く、先に白斑がある。腰は白い。顔・くび・胸・腹は暗褐色で、下尾筒は白い。嘴は黒く長めで下に曲がり、足は黒い。冬羽は頭や体の上面は灰褐色で不明瞭な軸版がある。

［選定理由］　旅鳥として渡来するがごく少ない。

［分布と生態の概要］　シベリア極北部・グリーンランドのツンドラ地帯で繁殖し、冬には南半球へ渡る。県内では旅鳥として春秋に海岸や河口干潟に渡来するが数はごく少ない。餌は貝・ゴカイ・昆虫・ミミズなどである。採食時、嘴は地面に対し斜めにすることが多い。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **B**

和名　キリアイ **環境省：該当なし**
学名　*Limicola falcinellus sibirica* (Pontoppidan)

［形態的特徴］　全長17㎝。小型のシギで、嘴は黒く、比較的長く、先がわずかに下に曲がっている。夏羽は頭が黒褐色で、白い頭側線と眉斑があるため、頭側が縞模様に見える。腹は白く、足は黒い。

［選定理由］　旅鳥として渡来するがごく少ない。

［分布と生態の概要］　ロシアの極北部で繁殖し、冬期は南アジア・オーストラリアまで渡る。国内では、おもに秋に渡ってくる旅鳥で、干潟・河口などに出現する。県内では秋に干潟・河口・砂浜・休耕田などに渡来する。ハマシギ・トウネンなどの小型のシギに混じることが多い。昆虫・甲殻類・ゴカイなどを食べる。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地帯・干潟の減少や海岸線・水田地帯の構造変化に伴い生息地が減少している。 **（関下斉）**

チドリ目　ツバメチドリ科 **B**

和名　ツバメチドリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Glareola maldivarum* Forster

［形態的特徴］　全長24.5㎝。ツバメを大きくしたような形。夏羽は頭から体の上面は暗灰褐色で、上尾筒は白く、尾は黒い。翼の下面は下雨覆が赤栗色で、腹と下尾筒は白い。

［選定理由］　旅鳥として希に見られる。仏沼地区での繁殖の可能性がある。

［分布と生態の概要］　モンゴル・中国東部・タイ・チベット・インド北部などで繁殖。日本南部でも局地的に少数が繁殖する。冬期は中国南部・マレー半島・ジャワ・ボルネオ・オーストラリアに渡る。国内では主に旅鳥として全国に少数が渡来し、畑・埋立地・川原・海岸など開けた場所に生息する。茨城・静岡・愛知・島根・福岡・宮崎などで局地的な繁殖記録がある。県内ではまれな旅鳥として太平洋岸の湖沼畔や海岸などで観察されていたが、近年では仏沼周辺に越夏する群れが確認されている。

［特記事項］　日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　ミサゴ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Pandion haliaetus haliaetus* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長雄58㎝・雌60㎝。翼開長147～169㎝。翼は細長くて尾は短い。頭部は白くて過眼線は黒い。体の上面は黒褐色、下面は白くて峰に黒褐色の帯がある。

［選定理由］　繁殖地が限られ、個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　亜種ミサゴはフィリピン・オーストラリア・北アメリカ・西インド諸島に広く分布し、冬期は温かい地方に移動する。国内でも北日本のものは冬期に南下する。県内では留鳥・漂鳥である。海食崖で繁殖するが森林地帯の大径木や人工構造物での繁殖も散見されるようになった。海・河口・湖沼・河川で魚を採餌する。小川原湖湖沼群では湖沼が結氷し、開放水面に大型の猛禽類が集まる。魚を運ぶ際に大型の海ワシ類に狙われることが多い。

［生存に対する脅威と保存対策］　海食崖の繁殖地は釣りや観光のストレスを受けている。人工建造物での繁殖はカラスの営巣と間違われて撤去される事例が発生しており、管理事業者などとの情報共有が必要である。

［特記事項］　日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　オオワシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Haliaeetus pelagicus* (Pallas)

［形態的特徴］　全長雄88cm・雌102cm。翼開長220～245cm。嘴は大きく鮮やかな黄色、尾は白色でくさび形。翼は飛翔時に後縁がふくらむ。全体に黒色で、翼の前縁と尾の白色が目立つ。

［選定理由］　渡来数が少なく、出現がまれ。

［分布と生態の概要］　オホーツク海沿岸・サハリン北部で繁殖し、日本・韓国で越冬する。国内では主に北日本に渡来し、本県では海食崖・小川原湖湖沼群・十三湖などに生息し、主に魚を餌とし、ハクチョウ・カモ類も捕らえる。

［生存に対する脅威と保存対策］　餌場となる湖沼や塒となる崖地の林の保全が必要である。

［特記事項］　国の天然記念物・国内希少野生動植物種・日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　チュウヒ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Circus spilonotus spilonotus* Kaup

［形態的特徴］　全長雄48cm・雌58cm。翼開長133～137cm。雄雌共に色彩には変異が大きい。雄成鳥は頭部が灰色で灰褐色の縦斑がある。年令によって目の色が変化し、成鳥では黄色をしたものが多いが、幼鳥では暗色をしている。

［選定理由］　県内で繁殖するが数はごく少ない。冬鳥として渡来するものもいるが少ない。

［分布と生態の概要］　ロシアのアムール川流域、サハリンで繁殖、冬期は日本・韓国・東南アジアへ渡る。日本では北海道と本州の一部で少数が繁殖しているが、大部分は冬鳥として各地のヨシ原などに出現する。県内では日本海側では屏風山地域や岩木川下流部のヨシ原、太平洋側では小川原湖を中心とする湖沼群・湿地のヨシ原で少数が繁殖している。一般にススキやヨシの株間に営巣するが、北海道ではササ原にも営巣する（樋口ら, 1999）。湖沼・河川・ヨシ原・耕地の低空を翼をV字形にして飛び、ネズミ・小鳥・カエル・昆虫などを食べる。天敵にイタチがある（西出, 1979）。

［生存に対する脅威と保存対策］　繁殖地となる広大な草原・湿地の消失・縮小。

［特記事項］　国内希少野生動植物種・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　ハイイロチュウヒ **環境省：該当なし**

学名　*Circus cyaneus cyaneus* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長雄45cm・雌51cm。翼開長90～124cm。翼と尾、足が長めの中型のタカ。雄は頭部と体の尾が明るい灰色で、胸と腹は白く、上尾筒も白い。飛翔中、翼の先の黒色が目立つ。雌は頭部や体は淡褐色の地に黒褐色の縦斑がある。尾の先の白い部分は狭い。

［選定理由］　冬鳥として渡来するがごく少ない。

［分布と生態の概要］　ユーラシア大陸北部、北アメリカ北部で繁殖、冬期はイラン・インド・中国・韓国・日本・東南アジアに渡る。国内では冬鳥として全国に出現。県内では秋から春に少数が広いヨシ湿原・河川敷・水田などに出現する。太平洋側では小川原湖や周辺湖沼付近のヨシ原・原野、日本海側では岩木川下流のヨシ原や水田で見られる。ヨシ原や水田の低空を翼をV字形にして飛び、ネズミや小鳥などを捕食する。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　ツミ **環境省：該当なし**

学名　*Accipiter gularis gularis* (Temminck et Schlegel)

［形態的特徴］　全長雄27㎝・雌30㎝。翼開長52～63㎝。雄の上面は暗青灰色、下面は白くて胸側から脇は黄赤褐色で、目は暗紅色。雌の上面は暗石版色で下面の横斑は太くて粗い。幼鳥の喉には中央に１本の黒線があるものが多い。目の外縁が黄色。

［選定理由］　県内で繁殖するが少ない。

［分布と生態の概要］　亜種ツミはサハリンと日本で繁殖し、冬期は中国南部や東南アジアに渡る。本県では主に低山帯から平地の林地に生息しているが少ない。小禽類・ネズミ・コウモリ・昆虫を餌にする。林内で行動することが多いことから人目にふれる機会が少ないが、果樹園・水田・畑地などでも狩りをすることから農地などの防鳥網の犠牲になる個体もある。春、秋の渡りの時期には他のタカ類に混じり、上空を旋回移動することがある。“ピョーピョピョピョ”と鳴く。

（関下斉）

タカ目　タカ科 **B**

和名　ハイタカ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Accipiter nisus nisosimilis* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長雄32㎝・雌39㎝。翼開長61～79㎝。雄はハト大。雄の上面は暗青灰色で、尾には黒帯がある。白い眉斑は小さくあまり目立たない。下面は白地に黄赤褐色の横斑があるが個体差がある。雌の上面は灰褐色で下面は白地に褐色の横斑がある。

［選定理由］　留鳥として県内で繁殖するが少ない。

［分布と生態の概要］　ロシア東部・エニセイ川からオホーツク沿岸まで、サハリン・日本・韓国と広範囲で繁殖。北部で繁殖したものはインド・東南アジア・中国南部に渡る。日本では本州以北で繁殖し留鳥、秋・冬は日本全体に分散する。県内では低山帯、人里に周年見られるが少ない。県南地方より津軽地方の生息密度が高い（小山, 2010）。夏期は農耕地付近の林に生息するものが多いが、冬期は河川敷の茂みや市街地の公園などで小鳥を追うのを見かける。ペットショップや鳩舎近くにはスズメなどの小鳥が集まるため出現頻度が高い。“キィーキィキィキィ”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　これまで注目されることがなかった雑木林などが、大規模ソーラー発電所の設置に伴い大規模な伐採が行われるようになった。

［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　オオタカ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Accipiter gentilis fujiyamae* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長雄50㎝・雌57㎝。翼開長106～131㎝。雄はハシボソガラス大、雌はハシブトガラス大。翼は幅広く短く、尾は長い。体の上面は暗青灰色で、尾には４本の黒帯がある。頬は青黒色で眉斑は明瞭。下面は白地に黒くて細い横斑が一面にある。目は黄色だが、雄には赤味が強いものもいる。腰の脇が白く見えることがある。

［選定理由］　営巣地である疎林が減少している。

［分布と生態の概要］　亜種オオタカはサハリンと日本で繁殖している。国内では北海道～九州の低山～産地の林で繁殖し、留鳥であるが山地に生息する個体は厳冬期に里へ移動する。県内では低山帯から市街地まで広い範囲で見られるが数は少ない。太平洋側より日本海側、特に津軽地方の中央部で比較的密度が高い（小山, 2010）。小鳥やカモ類を襲い捕食する。水面上で狩りをした際は、水鳥を水に沈めて溺死させ、翼を使い泳ぐようにして岸にたどり着く。“ケッケッケッケ”や“ピョー”などと鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　これまで注目されることがなかった雑木林などが、大規模ソーラー発電所の設置に伴い大規模な伐採が行われるようになった。

［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　サシバ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Butastur indicus* (Gmelin)

［形態的特徴］　全長雄47cm・雌51cm。翼開長103～115cm。ハシボソガラス大。体の上面は褐色で、白い眉斑がある。頬は灰色、喉は白く中央に黒い縦線がある。下面は白く胸と腹には褐色横斑がある。尾は灰褐色で数本の黒帯がある。
［選定理由］　渡来数が少なく、繁殖は少数。
［分布と生態の概要］　ロシア東南部・アムール川流域、中国北東部・韓国・日本で繁殖。冬期はマレー半島・インドシナ・フィリピン・モルッカ諸島・ニューギニア島に渡る。夏鳥として九州～本州に渡来するが南西諸島では越冬する。県内では渡り時に少数見られる他、白神山地・つがる市で繁殖するようになった。林縁部で採餌する。“ピックィー”と鳴く。
［生存に対する脅威と保存対策］　県内での繁殖確認は最近なので今後の推移を見守る必要がある。
［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

タカ目　タカ科 **B**

和名　ケアシノスリ **環境省：該当なし**
学名　*Buteo lagopus menzbieri* (Pontoppidan)

［形態的特徴］　全長雄56cm・雌59cm。翼開長124～143cm。翼は幅広く、尾は短くて丸い。頭部は灰白色で褐色の縦斑があり、体の上面は褐色で灰白色の羽縁がある。ノスリは喉が褐色だが、本種は灰白色。尾は白く先に褐色の帯が１本。
［選定理由］　冬鳥として渡来するがごく少ない。
［分布と生態の概要］　ロシア北部のエニセイ湾から東のチュクチ半島・カムチャツカ半島に至る地域で繁殖。冬は中国南部・韓国・日本に渡る。国内ではまれな冬鳥としておもに北日本や日本海側の草原・荒野・農耕地・干拓地などに渡来する。県内ではおいらせ町・三沢市などの農地に見られる。停空飛翔を頻繁に行い、ネズミ・小鳥を捕食する。“ピーェ”と鳴く。　**（関下斉）**

フクロウ目　フクロウ科 **B**

和名　オオコノハズク **環境省：該当なし**
学名　*Otus lempiji semitorques* (Horsfield)

［形態的特徴］　全長23.5～26cm。翼開長54～60cm。体には褐色・灰白色・黒色の複雑で細かい斑、後頸には灰白色の斑がある。目は橙色。翼の下面は淡褐色で、風切りには黒色横斑がある。足指に羽毛がある。
［選定理由］　留鳥として生息するがごく少ない。あるいは夜行性であり生態がよくわかっていない。
［分布と生態の概要］　サハリン・千島列島・日本・韓国で繁殖。国内では留鳥として全国的に分布し、低地・山地の林に住む。大木のある寺社に見られることがある。冬期には木の茂みや竹林などに数羽が集まることがある。“ウォッウォッ、ポッポッポッポ、ミャォ、キューリン”などと鳴く。
［生存に対する脅威と保存対策］　寺社林の減少、危険木として樹洞のある枯木の過度の伐採など。
［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

フクロウ目　フクロウ科　B

和名　アオバズク　**環境省：該当なし**
学名　*Ninox scutulata japonica* (Raffles)

［形態的特徴］　全長27～30.5㎝。翼開長66～70.5㎝。羽角はなく尾が長い。頭部から体の上面は一様に黒褐色で尾には黒帯がある。目は黄色。体の下面は白地に黒褐色の太い縦斑がある。翼の下面は淡くて黒褐色の横斑がある。

［分布と生態の概要］　日本・韓国で繁殖。冬期はマレー半島・フィリピン・大スンダ列島・スラウェシ島に渡る。国内では主に夏鳥として全国的に渡来。伊豆諸島など冬に見られる地域もある。低地～山地の林にいるが、樹洞に営巣することから寺社林などに見られることが多い。夕方から活動し、大型の昆虫を捕る。街灯に集まる昆虫を捕食することから、街灯付近を飛び回ることがある。“ホッホ ホッホ ホッホ”と連続して鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　寺社林の減少、危険木として樹洞のある枯木の過度の伐採など。

［特記事項］　日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

ブッポウソウ目　カワセミ科　B

和名　アカショウビン　**環境省：該当なし**
学名　*Halcyon coromanda major* (Latham)

［形態的特徴］　全長27.5㎝。体の大部分は黄褐色を帯びた赤で上面には紫色の光沢があり、腰にはるり色の羽毛がある。嘴は太くて赤く、足も赤い。

［選定理由］　夏鳥として渡来するが局所的で数は少ない。

［分布と生態の概要］　中国北東部・韓国・日本で繁殖。冬期はフィリピンやスラウェシ島に渡る。国内では夏鳥として全国的に渡来する。よく茂った林で繁殖する。県内では十二湖・白神山地・十和田八幡平国立公園・津軽半島・下北半島などの湖沼・渓流近くの大樹が茂る森林に生息。“キョロロロロロ”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　危険木として樹洞のある枯木の過度の伐採。カメラマンなどによるストレス。

［特記事項］　日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

ブッポウソウ目　ブッポウソウ科　B

和名　ブッポウソウ　**環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Eurystomus orientalis calonyx* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長29.5㎝。ハトより少し小さく翼は長い。頭部はすすけた黒、体は青緑色で、翼には白斑がある。嘴と足は赤い。

［選定理由］　夏鳥として渡来するが数が少ない。

［分布と生態の概要］　インド北部から中国・韓国・日本で繁殖。冬期は東南アジア等に渡る。国内では本州～九州の低地～山地の大きな杉の木などがある場所に渡来する。県内では夏鳥で白神山地・十和田八幡平国立公園などの山林に生息するが個体数は少ない。樹洞で営巣し、キツツキ類の古巣を利用することがある。“ゲゲゲ　ゲーゲゲ”などと鳴く。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

タカ目　ハヤブサ科　B

和名　ハヤブサ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Falco peregrinus japonensis* Tunstall

［形態的特徴］　全長雄41㎝・雌49㎝。翼開長84～120㎝。頭から後頸は石版黒色。背・翼・尾は暗青灰色で、尾は比較的短く黒帯がある。頬にはヒゲ状の黒斑が目立つ。下面は白くて腹は黄褐色を帯びる黒斑がある。幼鳥は上面が褐色、下面が淡黄褐色で胸から腹に黒褐色の縦斑がある。

［分布と生態の概要］　シベリア東北レナ川からアナディランド・チュクチ半島・カムチャツカ・サハリン・クリル・韓国・日本で繁殖。冬期はサハリン・中国・韓国・日本に移動し、ときに台湾・フィリピン・ボルネオに移動する。主に海岸などの断崖で繁殖するが、最近ではビルなどでの繁殖例もある。冬は全国の海岸・河口・湖畔・原野・農地などの開けた場所に住み、急降下して狩りを行う。“ケーケーケー”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　営巣場所の断崖の保全と、レジャーなどのストレスの軽減が必要。

［特記事項］　国内希少野生動植物種・日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

スズメ目　サンショウクイ科　B

和名　サンショウクイ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Pericrocotus divaricatus divaricatus* (Raffles)

［形態的特徴］　全長20㎝。体は細くて尾は長め。嘴の先は少しかぎ型に曲がる。雄は額が白く、頭頂から後頸と過眼線は黒い。背から腰は灰色で、中央尾羽が黒くて外側尾羽は白い。翼下面は飛翔中に白線が入る。

［選定理由］　旅鳥あるいは夏鳥として渡来するが少ない。

［分布と生態の概要］　中国北東部・日本で繁殖。冬は東南アジアなどに渡る。国内では本州以南の低地～山地の落葉広葉樹林に夏鳥として渡来。県内では深浦町岩崎、十二湖周辺ではよく見られる。太平洋側では旅鳥的な出現だったが夏鳥として見られる機会が増えている。高い木の枝に止まりよく鳴く。鳴きながら浅い波形を描いて飛ぶ。“ヒーリリ　ヒーリリ”と鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　広葉樹林の保全が必要。

［特記事項］　日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

スズメ目　カササギヒタキ科　B

和名　サンコウチョウ　**環境省：該当なし**
学名　*Terpsiphone atrocaudata atrocaudata* (Eyton)

［形態的特徴］　全長雄44.5㎝・雌17.5㎝。雄の中央尾羽はとても長い。雄は頭部と胸・脇が紫黒色で、背は紫黒褐色。嘴と目の外縁はコバルト色で、腹は白い。雌の尾は雄よりも短く、頭部の黒色や目の外縁のコバルト色も淡く、背と尾は橙紫褐色。雄の若鳥の尾は短い。

［選定理由］　夏鳥として渡来するが数は少ない。

［分布と生態の概要］　日本と韓国で繁殖し、冬期はマレーシア・インドネシアに移動する。国内では夏鳥として本州以南の低地～山地のよく茂った林に渡来する。県内では局所的に生息する。雄雌ともに“チーチョ　ホイホイホイ”と鳴く。鳴き声を「月日星」と聞きなししサンコウチョウ（三光鳥）と呼ばれるが、県内方言名サンコウ（三光）はイカルを示す。

［特記事項］　日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

スズメ目　ホオジロ科 **B**

和名　コジュリン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Emberiza yessoensis yessoensis* (Swinhoe)

［形態的特徴］　全長14.5㎝。雄の夏羽は頭部から喉が黒く、目の上に白斑を持つ個体がいる。後頸から胸側は赤茶色、背は赤褐色で黒い縦斑とバフ色の羽縁がある。雌の頭は黒褐色で、眉斑と頬線はバフ色。

［選定理由］　湿地付近の草地が減少し、生息個体数が少ない。

［分布と生態の概要］　満州南東・ウスリーランド・日本で繁殖する。冬期は国内南部、韓国、中国東部に移動する。国内では本州の中部と北部、九州の一部で繁殖するが局所的。冬期は本州中部以南のヨシ原や草地に移動する。県内では低地の湿原で繁殖し岩木川下流、山田川中流、鳥谷川下流、屏風山、小川原湖湖沼群湿地・草地に生息する。“チィ　チョ　チリ　チョ　チリ”などと優しげな声で鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　休耕田の増加に伴い数が増えたが耕作の有無に左右される数は不安定。 **（関下斉）**

スズメ目　ホオジロ科 **B**

和名　オオジュリン **環境省：該当なし**

学名　*Emberiza schoeniclus pyrrhulina* (Linnaeus)

［形態的特徴］　全長16㎝。雄の夏羽は黒い頭部と喉の間に白い頬線がある。後頸は白く、背は赤褐色に黒とバフ色の縦斑がある。雌はバフ色の眉斑と頬線がある。

［選定理由］　夏鳥として繁殖するものは少なく、局所的。

［分布と生態の概要］　カムチャツカ・千島列島・サハリン・アムール流域・ウスリー流域・北海道・本州北部で繁殖。国内では東北以北の湿原で繁殖。冬期は主に本州中部以南の低地のヨシ原にいる。県内では小川原湖湖沼群などの湿地・草原で繁殖する。冬期には大陸や北海道から移動してきた群れが見られる。ゆっくりとしたテンポで“ジュリ　チュリー”などと鳴く。

［生存に対する脅威と保存対策］　繁殖地となるヨシ原や草原の減少。

［特記事項］　日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

キジ目　キジ科 **C**

和名　ヤマドリ **環境省：該当なし**
学名　*Syrmaticus soemmerringii scintillans* (Temminck)

全長雄125㎝、雌50㎝。雄は赤銅色の体に褐色と白の縞模様の長い尾。雌は腹部が茶と白の鱗斑があり尾は雄より短い。日本特産種、日本に５亜種ある中で一番北に分布する亜種。関西以北に分布し本県が分布の北限。主に標高1,500m以下の山地に生息する。針葉樹林・落葉広葉樹林・混交林などに広く生息し、厳寒の頃には標高の低い人里にも出現する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　オオヒシクイ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Anser fabalis middendorffii* Severtzov

ヒシクイよりやや大形のガン。ヒシクイによく似ているが首が長く、嘴がほっそりし、黒い嘴先の黄色が特徴。“ガハハーン”と太く低い声で鳴く。アジア北部のタイガ地帯で繁殖し、日本には冬鳥として渡来、宮城県伊豆沼などで越冬する。 県内では越冬個体は少なく、春秋の渡り時に休息地、採餌場所として立ち寄るものが多い。マガンと同様、大湊湾や浅所海岸、各地の湖沼、溜池、湿原、水田、休耕田で休息、採餌する。警戒心が強く、休息、採餌には他のガン類と同様、見通しのよい場所を選ぶ。 採餌、休息、ねぐらとなる湖沼、溜池などの保全が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。国の天然記念物、日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　ヒシクイ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Anser fabalis serrirostris* (Latham)

全長85㎝、翼開長160㎝、大形のガンで黒褐色の体色、黒い嘴先の黄色が特徴。“ギャハハーン”と鳴く。ヨーロッパ・アジア北部のツンドラ地帯で繁殖し、日本には冬鳥として渡来する。県内では越冬個体は少なく、渡りの中継地、休息地として立ち寄るものが多い。マガンと同様、大湊湾や浅所海岸、各地の湖沼・溜池・湿原・水田・休耕田などで休息、採餌する。まれに山地のダム湖で休息する。春秋の渡り時には20～50羽の群が白神山地上空、市街地上空を編隊を組んで渡るのが見られる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。国の天然記念物、日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　ヨシガモ **環境省：該当なし**
学名　*Anas falcata* Georgi

全長48㎝、翼開長80㎝、中形のカモ。成鳥雄の頭部は紅紫色と緑色の光沢のある黒色で、ナポレオンの帽子のような後方に伸びる冠羽、のどの白と黒い横線が特徴。北海道以北で繁殖し、本州以南には冬鳥として渡来する。浅い海湾に多く、海岸の干潟・湖沼・池・水田・沼沢などにも生息する。県内では春期に見ることが多い。十三湖西の明神沼、小川原湖湖沼群など限られた水辺に出現するが個体数は少ない。狩猟鳥であるが生息数が減少しているため、青森県では捕獲の自粛を指導している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　ハシビロガモ **環境省：該当なし**
学名　*Anas clypeata* Linnaeus

全長雄51cm、雌43cm、翼開長雄84cm、中形のカモで大きく幅広で先がスコップ状の嘴が特徴。シベリア東北部で繁殖し、日本には冬鳥として渡来し、海湾・湖沼・河川などに生息する。県内では湾内、湖沼、河川、水田など広範な水辺に他のカモ類に混じり少数が出現する。狩猟鳥であるが生息数が減少しているため、青森県では捕獲の自粛を指導している。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日豪渡り鳥保護協定・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　シマアジ **環境省：該当なし**
学名　*Anas querquedula* Linnaeus

全長38cm、翼開長61cm、小形のカモで旅鳥。雄は赤褐色の顔に太く白い眉斑が目立つ。ヨーロッパ・アジア大陸中部で繁殖、冬期はアジア南部・アフリカ中部に渡る。日本には渡りの時期に湖沼・河川・海岸などの水辺に生息する。県内では春秋、少数が各地の湖沼、河川などに出現するが、春に繁殖羽となり雄の白い眉斑が目立つことから春期出現の記録が多い。三沢市仏沼で繁殖の記録がある。コガモの群れに混じることが多く、水面に浮かぶ植物質のものを採餌し、干潟では貝類を食べる（日本野鳥の会青森県支部・弘前支部, 2001）（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　トモエガモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Anas formosa* Georgi

全長40cm、翼開長67cm、小形のカモで、雄は顔の黒緑色とクリーム色のともえ模様が特徴。シベリア東部で繁殖し、日本には冬鳥として少数渡来し、湖沼、池、沼沢、湿地の草原、水田、河川、港湾などに生息する。県内では越冬個体はなく春秋の渡り時、他のカモ類と混じりまれに渡来する。大群のカモ類に混じり１羽で出現することが多く見逃される場合が多い。つがる市森田の狭ケ舘溜池では春の渡り時に数羽～数十羽の群で出現することがある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　コオリガモ **環境省：該当なし**
学名　*Clangula hyemalis* (Linnaeus)

雄は全体が白っぽく、長い尾羽のため全長は約60cm。雌は全体が黒褐色で約38cm。ユーラシア北部・北アメリカ北部等の極北部で繁殖、カムチャツカ半島から中国北東部沿岸・アリューシャン列島から北アメリカ西海岸・イギリスや北海沿岸等で越冬する。国内へは冬鳥として北海道と本州北部の海上や沿岸に渡来するが、本州北部では少ない。県内では、陸奥湾や太平洋沿岸の一部で１～数羽が見られる。かつてはごく少数が毎年渡来していたが、近年は出現頻度が減少した。沿岸部の開発等が生息環境に影響を及ぼす可能性があり、保護区等に指定し環境保全の必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カイツブリ目　カイツブリ科 **C**

和名　カンムリカイツブリ **環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（青森県）**
学名　*Podiceps cristatus cristatus* (Linnaeus)

全長56㎝、翼開長85㎝、首が長く前面が白、日本最大のカイツブリ。目先に嘴と結ぶ黒い線。夏羽は黒い冠羽と顔に赤褐色と先端の黒い飾り羽が特徴。冬羽では顔に飾り羽がなく、首前方の白と首後方の黒が目立つ。ヨーロッパからアジア東部まで広く分布、南半球のオーストラリア、ニュージーランドにも留鳥として生息する。日本では主に冬鳥として九州以北の湖沼、河川、海上などに渡来し、北日本の一部で繁殖している。県内では各地で繁殖し、特に津軽地方の湖沼、河川で個体数増加、生息分布域の拡大が著しい（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

ハト目　ハト科 **C**

和名　アオバト **環境省：該当なし**
学名　*Treron sieboldii sieboldii* (Temminck)

全長33㎝、翼開長55㎝、緑色のハト。雄は肩が栗茶色。日本全国の山深い森林地域に生息する。本州中部以南では留鳥、県内では夏鳥で冬は積雪の少ない南日本へ移動する。白神山地・津軽半島・十和田国立公園・下北半島など、ブナ・ミズナラなどの混じる各地の森林に広く生息しているが個体数は少ない。白神山地に含まれる西目屋村の目屋ダムとこれと関連する河川流域は出現頻度が高い。“アオー、アオー”と不気味な声でさえずり、森林中での生息確認はこの鳴き声が主である。海水を飲む習性があり、西海岸や下北半島などの海辺の岩礁地帯に20～50個体の群で出現する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　マガン **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Anser albifrons albifrons* (Scopoli)

全長72㎝、翼開長138㎝、中型のガンで暗褐色の体色、成鳥は桃橙色の嘴とそのつけ根の白が特徴。“カハハン、カハハン、クワワワ”と鳴く。北極圏の湿原で繁殖し、日本には冬鳥として渡来する。県内では越冬個体は少なく、春と秋の渡りの中継地、休息地として立ち寄るものが多い。海岸部では大湊湾や浅所海岸、内陸部では各地の湖沼、溜池、湿原、刈り取り後の水田、休耕田に出現し、休息、採餌する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。国の天然記念物。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　コクガン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Branta bernicla orientalis* (Linnaeus)

全長61㎝、翼開長115㎝、小形のガンで全体が黒い。白い首輪、腹部側面と下尾筒の白が特徴。北極圏のツンドラ地帯で繁殖し、日本には冬鳥として渡来し、北日本の限られた湾や内海に生息する。県内では陸奥湾のむつ市大湊海岸・青森市原別海岸・横浜町横浜海岸、八戸市種差海岸が主な生息地である。津軽半島上磯海岸、下北半島大畑海岸にも少数渡来し、日本海岸にも出現するがまれである。主として海上、海磯、海岸の荒磯、海岸の浅瀬に生息し、時に河川、湖沼や干潟などに飛来する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。国の天然記念物。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

ツル目　クイナ科 **C**

和名　バン　**環境省：該当なし**
学名　*Gallinula chloropus chloropus* (Linnaeus)

全長32㎝、翼開長52㎝、全体が黒く、下尾筒の白、嘴と額板の赤が特徴。水を泳ぐが水掻きがない。インド・スリランカからインドネシア・中国東部・朝鮮・日本で繁殖。冬期は中国南部、東南アジアへ渡る。日本全国に生息し、本州南部では留鳥、県内では夏鳥で冬は積雪の少ない地方へ移動する。湖沼、河川、水田、公園の壕など各地の水辺に生息繁殖している。近年個体数が減少し、公園の壕、町中や集落付近の水辺に出現することはまれとなった。公園の壕など町中の水辺からの退去は、環境整備による身を隠す水生植物の減少、営巣適地の減少とカラスの捕食圧によるものと考えられる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

カッコウ目　カッコウ科 **C**

和名　ジュウイチ　**環境省：該当なし**
学名　*Hierococcyx hyperythrus* (Gould)

全長32㎝、翼開長56㎝。頭と背が黒く、胸から腹が褐色で首の後に白斑。腹には横縞がない。“ジュウイチー・ジュウイチー・ジュウイチー、ジュクジュクジュク”と昼夜鳴く。ロシア東南部、中国東部、東南アジアに生息。日本全国に夏鳥として渡来、山林に生息し、冬は東南アジアに渡る。県内では５～７月各地の山林で鳴き声を聞くが、近年出現頻度が減少している。コルリ・オオルリ・コマドリ・ルリビタキ・キビタキ・ビンズイ・クロツグミ・アカハラ・コサメビタキなどに托卵することが知られている（清棲, 1978b）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　チドリ科 **C**

和名　タゲリ　**環境省：該当なし**
学名　*Vanellus vanellus* (Linnaeus)

全長32㎝、翼開長84㎝、頭に黒く後ろに伸びた冠毛と胸の太い黒帯が特徴。白、黒が目立つ幅広の翼でゆったりと飛ぶ。ヨーロッパからアジアに広く分布繁殖し、日本には冬鳥として渡来、雪の少ない地方の水田・河川、湖沼などの湿地で越冬する。北陸地方や関東北部で繁殖記録がある。県内には春と秋に旅鳥として出現し、各地の水田、休耕田、河川敷、湖沼の湿地に生息するが個体数は少ない。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　オグロシギ　**環境省：該当なし**
学名　*Limosa limosa melanuroides* (Linnaeus)

全長38㎝。夏羽では頭部から胸部が赤褐色で目立つ。嘴は太く長く淡い紅色で先は黒い。 足は黒く、尾羽は白く先は黒い。ユーラシアの中部から北部で繁殖、アフリカ・インド・オーストラリアで越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来するが多くない。県内では水田・湿地・干潟・河口等に渡来するが少ない。１～数羽で行動しゴカイ類・貝類・甲殻類などを採食する。生息地である水田・湿地・干潟等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。　**（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　ソリハシシギ **環境省：該当なし**
学名　*Xenus cinereus* (Güldenstädt)

全長23㎝。夏羽では頭部から上面が灰褐色になる。嘴は黒く長めで上に反り基部は橙黄色で、足は短めで橙黄色。ユーラシア北部で繁殖、アフリカ・東南アジア・オーストラリア等で越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来する。県内には水田・干潟・砂浜・河口等に渡来するが数は少ない。１～数羽で行動し、甲殻類や昆虫類などを採食する。生息地である水田・干潟・砂浜・河口等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　オバシギ **環境省：該当なし**
学名　*Calidris tenuirostris* (Horsfield)

全長約28㎝。夏羽は上面が黒褐色で肩には赤褐色の斑がある。胸部は黒褐色の縦斑がよく目立つ。冬羽は頭部・胸部・上面が灰褐色になる。嘴は黒色で足は暗緑黄色。シベリア東北部で繁殖、インド・東南アジア・オーストラリアで越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来する。県内では水田・河口・干潟・海岸等に少数が渡来する。小群で行動し貝類・ゴカイ類・甲殻類などを採食する。生息地である水田・河口・干潟・海岸などが開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　コオバシギ **環境省：該当なし**
学名　*Calidris canutus rogersi* (Linnaeus)

全長約24.5㎝。夏羽では顔から胸部まで赤褐色でよく目立つ。頭部から背面は赤褐色と黒と白の斑模様。嘴は黒く基部は太め、足は緑黄色。シベリア北部・北アメリカ北部等で繁殖、国内へは旅鳥として春と秋に渡来するが数は少ない。県内では水田・干潟・河口・海岸等にまれに渡来する。１～数羽で行動し、ゴカイ類や甲殻類などを採食する。生息地の水田・干潟・河口等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　オジロトウネン **環境省：該当なし**
学名　*Calidris temminckii* (Leisler)

全長約14㎝。夏羽では頭部から上面が灰褐色で黒い軸斑と淡橙色の羽縁が目立つ。冬羽は一様に灰褐色になる。嘴は黒く、足は黄緑色。ユーラシアの北部で繁殖、アフリカ東部・インド・東南アジアで越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来するが少ない。本州中部以南では越冬するものもある。県内では湿地・水田・湖沼の岸などにごく少数が渡来する。甲殻類や昆虫類などを採食する。生息地である湿地や湖沼の岸等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。

（関下斉）

チドリ目　シギ科 **C**

和名　ヒバリシギ **環境省：該当なし**
学名　*Calidris subminuta* (Middendorff)

全長約14㎝。夏羽では頭部と上面は茶褐色。胸部と脇は黒褐色の縦斑がある。冬羽は上面が灰褐色になる。嘴は細く黒い。足は黄緑色。シベリアからカムチャツカ半島で繁殖し、オーストラリアや東南アジアで越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来する。沖縄県では少数が越冬する。県内には水田･湿地･埋立地等にごく少数が渡来する。1～数羽で行動し、甲殻類や昆虫類を採食する。

生息地である湿地・水田等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定して、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

チドリ目　シギ科 **C**

和名　ウズラシギ **環境省：該当なし**
学名　*Calidris acuminata* (Horsfield)

全長約22㎝。夏羽では頭頂部の茶褐色が目立つ。冬羽は頭頂部の茶褐色が少し淡くなる。嘴は先部は黒く、基部は淡色。足は黄緑色。シベリア北部で繁殖、オーストラリア・ニュージーランド等で越冬する。国内へは旅鳥として春と秋に渡来するが多くない。県内には水田・湿地・池や沼等の湿泥地等に少数が渡来する。甲殻類・貝類・昆虫類などを採食する。生息地である水田や湿地等が開発等により減少したり消滅している。近年、出現頻度が減少している。保護区等に指定し、生息環境を保全する必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日米渡り鳥条約・日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定・日豪渡り鳥条約指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　オカヨシガモ **環境省：該当なし**
学名　*Anas strepera strepera* Linnaeus

全長50㎝、翼開長89㎝、中形の地味な色彩のカモ。雄は体が灰色で尻が黒い。雌雄とも飛んだとき次列風切の白色が特徴。ヨーロッパ・アジア・北アメリカ大陸の中部で繁殖し、日本には冬鳥として少数が渡来する。湖沼・沼沢・河川・水田・湿地に生息する。少数は北海道でも繁殖する。県内には主に春秋の渡り時に少数が出現する。八戸市の馬淵川・新井田川河口では毎年少数越冬することが知られている。その他各地の水辺に出現するが、目立たないため記録されないことが多いようである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

タカ目　タカ科 **C**

和名　ハチクマ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Pernis ptilorhynchus orientalis* (Temminck)

全長雄57㎝・雌61㎝、翼開長121～135㎝。トビより少し小さい。飛んでいる時首が長く見え、翼・尾に横の黒帯が目立つ。体色の変異が大きく暗色形、淡色形、中間形がある（森岡ら, 1995）。ロシア南部、エニセイ川からアムール流域・ウスリー地方・朝鮮・日本で繁殖。冬期は亜熱帯、熱帯地方に渡る。日本では夏鳥で各地の低山地帯に少数が生息する。県内では太平洋側より日本海側の山地に多く出現する。５月中下旬に渡来し繁殖期は他のタカ類より遅い。６月に求愛の波状飛行、両翼をＶ字状にした停空飛翔がよく見られる。クロスズメバチなどのハチやカエル・ネズミ・小鳥を食べる。ハチクマはハチを食べるクマタカの意である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

フクロウ目　フクロウ科 **C**

和名　フクロウ **環境省：該当なし**
学名　*Strix uralensis hondoensis* Pallas

全長48～52㎝、翼開長92～102㎝。羽角がなく雪だるまのような丸く大きな頭部、幅広く短い翼、たたんだ翼の先端より尾が長く出る。体の上面は灰褐色で黒色・褐色の斑紋がある。日本には４亜種が知られ、亜種フクロウは東北地方、栃木、新潟北部に分布し本県が北限。県内では山林、社寺林、老木のあるリンゴ園など広範に生息するが個体数は少ない。２月頃から「ゴロスケモッホ」と盛んに鳴き、４月下旬～５月下旬には雛が見られる。夜行性だが育雛期には昼でも餌運びをすることがある。樹洞に営巣、タカ類の巣や巣箱も利用する。ネズミや小鳥などを餌にする。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

フクロウ目　フクロウ科 **C**

和名　トラフズク **環境省：該当なし**
学名　*Asio otus otus* (Linnaeus)

全長35～40㎝、翼開長91～102㎝。耳の形をした羽角が長く、両目の内側に額から嘴にかけて白色の線が目立ち、一見リスを思わせる容貌。目は橙色である。ヨーロッパからアジア、北アメリカと生息分布が広い。我が国では北日本の林で繁殖し、冬期は本州以南で越冬する。県内では津軽地方に比較的多く、人里近くの林、社寺林に生息・繁殖している。巣はカラス、トビの古巣を利用することが多く、樹の穴にも営巣する。成鳥は繁殖期に“オーオー”と鳴き、巣立ち間もない幼鳥は夜通し“キーキー”とブランコがきしむように鳴く。餌はネズミを主食とし小鳥、昆虫も食べる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

ブッポウソウ目　カワセミ科 **C**

和名　ヤマセミ **環境省：該当なし**
学名　*Megaceryle lugubris lugubris* (Temminck)

全長38㎝、翼開67㎝。白黒斑で日本最大のカワセミ。頭部に白黒斑の冠羽がある。のどと腹部、翼の下面は白色で胸に帯状の斑点。飛ぶと翼下面の外周部と尾に白黒の帯が目立つ。日本に２亜種が生息し、亜種ヤマセミは本県が北限。各地の魚の多い渓流に少数生息。水面上を直線的に飛び“ケラ・ケララ”とよく鳴く。止まり場所や停空飛翔から水中に飛び込みイワナ・ヤマメ・ウグイなどを食べる。河川の土手に穴をあけて巣をつくり子育てをする。留鳥であるが、結氷期は河川の下流に移動する。まれに、市街地の河川や公園の堀に出現することがあるが、長期間は滞在しない。白黒の斑点があるため鹿子しょうびんの俗称がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

キツツキ目　キツツキ科 **C**

和名　アリスイ **環境省：該当なし**
学名　*Jynx torquilla japonica* Linnaeus

全長18㎝、翼開長28㎝。特異なキツツキ。尾は角形、体色が灰褐色で、頭が大きく一見モズを連想させる。頭から背の中央に黒色の線、顔と体下面、尾の横縞が特徴。日本全国に分布、中部日本以南では留鳥、県内では夏鳥で４～５月各地に少数が飛来する。渡来直後にはタカに似た声で“キィーキィキィキィ”とよく鳴く。直線的に飛び枝に普通の小鳥のように止まる。キツツキ類古巣や樹幹の裂目で営巣し、巣箱も利用する（清棲, 1978a）。チゴハヤブサに似た鳴き声を出すため、これと間違われることが多い。不吉な鳥とされ属名の Jynx はジンクスの語源（内田, 1983）。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日米渡り鳥等保護条約指定種。 **（関下斉）**

キツツキ目　キツツキ科 **C**

和名　オオアカゲラ **環境省：該当なし**
学名　*Dendrocopos leucotos stejnegeri* (Bechstein)

全長28㎝、翼開長49㎝。体色は白と黒が目立ち翼と尾に黒色の横縞がある。胸部の白色に黒の縦斑が特徴。成鳥雄は頭部の上部と下腹部が赤色、幼鳥の頭部も赤いが下腹部は白い。成鳥雌の頭部は黒色である。日本に４亜種が生息し、亜種オオアカゲラは本州中部、北部に分布する留鳥で、本県が北限である。低山帯から奥深い森林まで広い範囲で見られるが個体数は少ない。大樹の多い広面積の森林に比較的よく見られる。“キョキョキョ”と鳴き、主に朽木などの昆虫を食べるが、積雪期には里でカキを食べることがある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。

（関下斉）

ハヤブサ目　ハヤブサ科 **C**

和名　チョウゲンボウ **環境省：該当なし**
学名　*Falco tinnunculus interstinctus* Linnaeus

全長雄33㎝、雌39㎝。翼開長69～76㎝。小形のハヤブサで尾が長く数本の細い横縞と先端に黒い広い帯がある。ヒマラヤ地方・中国・朝鮮・日本・北ミャンマー・北インドネシアで繁殖、冬期はインド・マレー半島・北インドネシアに渡る。日本では近年、全国的に人工的建造物で繁殖する例が増え、県内でも同様である。県内では留鳥で各地の里山・耕地・河川・市街地に出現するが個体数は少ない。まれに岩木山等、標高の高い山地に出現し、上昇気流で吹き上げられた昆虫や尾根越えする小鳥をねらう。稲籾を貯蔵するカントリーエレベーター付近には年中見られ、農耕地や河川敷、農道やバイパス近くの電線・樹木・標識に止まり、上空を帆翔・停空飛翔する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

ハヤブサ目　ハヤブサ科 **C**

和名　コチョウゲンボウ **環境省：該当なし**
学名　*Falco columbarius insignis* Linnaeus

全長は、雄が約28㎝、雌が約32㎝。雄は頭部と背部の上面は青灰色で、胸部から下面は橙褐色で黒色の縦斑がある。雌は上面が灰褐色で、胸部は暗褐色である。北アメリカ北部・ユーラシア北部で繁殖し、アフリカ北部・インド・中国東南部・北アメリカ中南部で越冬する。国内へは冬鳥として渡来するが多くない。県内では河川敷・農耕地・干拓地等にごく少数が渡来する。おもに小鳥類を採食するが小型哺乳類や昆虫類も食べる。農耕地や河川敷等の開発や河川改修等の工事により環境悪化が進むと同時に、生息地が減少、消滅している。保護区等に指定したり、環境に配慮した工事等の対策が必要である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）。日露渡り鳥条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

ハヤブサ目　ハヤブサ科 **C**

和名　チゴハヤブサ **環境省：該当なし**
学名　*Falco subbuteo subbuteo* Linnaeus

全長34～35㎝、翼開長72～84㎝。ハト大の小型のハヤブサである。頬にひげ状の黒斑、後頸に２個の白い眼状紋、れんが色の足の付け根と腰が特徴。亜種チゴハヤブサは中国北部及び東部・北ミャンマー・北インドネシア・北日本で繁殖し、冬期は東南アジア、ジャワ島に渡る。県内では夏鳥で４月下旬から５月上旬に渡来、各地の集落、市街地の寺社林や公園の林・農耕地の防風林等で少数が繁殖している。独自の巣は作らず６月上旬頃からカラスやトビの古巣を利用して営巣、育雛し、10月下旬～11月上旬に渡去する。餌はスズメ、カワラヒワ、逃げた飼鳥インコ等の小鳥、コウモリ、昆虫などである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

スズメ目　カラス科 **C**

和名　**ホシガラス** **環境省：該当なし**
学名　*Nucifraga caryocatactes japonica* (Linnaeus)

全長35㎝、翼開長60㎝、黒褐色に白い斑点が特徴。尾羽の先が白い。亜種ホシガラスは留鳥として千島列島のウルップ島、北海道・本州・四国・九州のハイマツなどの生育する場所に生息する。県内では下北半島・津軽半島・白神山地・岩木山・八甲田山系など各地に生息しているが個体数は少ない。夏は標高の高い場所に多く、秋・冬は標高の低い林地にも漂行する。県民の森、梵珠山では秋ブナの実を食べる小群が出現する。春と秋、小泊岬から竜飛崎にかけ群で移動するものがあり、北海道との渡りの可能性もある。移動中の個体は林地ばかりでなく、崖・岩場・海岸などにも出現する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

スズメ目　キバシリ科 **C**

和名　**キバシリ** **環境省：該当なし**
学名　*Certhia familiaris japonica* Linnaeus

全長14㎝、翼開長20㎝、頭部から背は淡褐色で白の縦縞、目の上に白の眉斑。胸、腹は白い。嘴は細く、先が下に曲がる。種としてはヨーロッパからアジア、北アメリカ南部と分布が広い。日本には２亜種が知られ、亜種キバシリは本県が生息の北限である。留鳥として本州中部では亜高山帯の混交林に生息するが、県内では低山帯の山林でも少数が繁殖している。木の多いやや暗い林地に出現し、生息数も少ないことから目にふれることがまれである。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

スズメ目　ヒタキ科 **C**

和名　**マミジロ** **環境省：該当なし**
学名　*Zoothera sibirica davisoni* (Pallas)

全長24㎝、翼開長38㎝。雄は全身が黒色で白色の眉斑が特徴。雌はオリーブ褐色で白色の眉斑、喉が白く、腹部に淡褐色の横斑がある。飛翔時は雌雄とも翼の下面に白と黒の帯ができる。サハリン、日本で繁殖、夏鳥として日本全国の山地に生息、冬は東南アジアに渡る。県内では各地のブナ林、ミズナラ林に生息しているが個体数は少ない。白神山地の林道などでは夕方、峠や尾根近くの樹上で“チョボチー、キョロン・チー”とよく通る声で鳴いている。地上でミミズや昆虫を捕食し、サクラの実も食べる。マミジロは眉が白いの意である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

スズメ目　ヒタキ科 **C**

和名　**クロツグミ** **環境省：該当なし**
学名　*Turdus cardis* Temminck

全長22㎝、翼開長34㎝。雄は頭部・胸部・背・尾が黒色で、腹部は白色に黒色の三角斑が特徴。中国中部、日本全国で繁殖、冬期は中国南部で越冬。県内には夏鳥として４月に渡来、低山帯のやや暗い森林に生息する。各地の防風林、雑木林などで繁殖しているが、近年出現頻度が少なくなった。集落内のスギ林などにも生息し、早朝から木の梢で“キョロンキョロンキョコキョコキョッキョ”とよくさえずる。なわばり意識が強く、他の個体が接近すると“キョキョキョキョ・チー”と激しく鳴いて威嚇する。地上でミミズや昆虫などを食べる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

カモ目　カモ科 **C**

和名　ビロードキンクロ　**環境省：該当なし**
学名　*Melanitta fusca stejnegeri* (Linnaeus)

全長雄58㎝、雌50㎝、翼開長雄100㎝、黒いカモで次列風切が白く、雄は目の下にあるどすのきいた三日月形白斑が特徴。シベリア東北部で繁殖し、日本には冬鳥として渡来し、海洋・外海・海湾などに生息する。県内では主に太平洋沿岸に少数が出現、越冬している。日本海沿岸にも出現するがまれである。海ガモのクロガモと一緒にいることが多く、浅海で貝類を食べる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。

（関下斉）

スズメ目　ヒタキ科 **C**

和名　コマドリ　**環境省：該当なし**
学名　*Luscinia akahige akahige* (Temminck)

全長14㎝、翼開長21㎝。頭部・胸部・尾が橙赤褐色、背と翼はやや黒ずんだ赤褐色。腹部中央は白色で周囲が灰色。胸を反らし尾を立てて“ヒン　カラカラカラララ”と大声でさえずる。夏鳥として全国の山地に渡来し繁殖している。県内では白神山地、八甲田山系などに少数が生息している。高い木の梢に止まることはほとんどなく、茂みの地面や倒木・切株など地上の低い場所にいることが多い。春渡来直後は人家の植え込みや、低山帯の笹の多い小沢で見ることが多い。学名にあるアカヒゲは同属の異種和名である。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

スズメ目　イワヒバリ科 **C**

和名　カヤクグリ　**環境省：該当なし**
学名　*Prunella rubida* (Temminck et Schlegel)

全長14㎝、翼開長21㎝。一見全体が暗褐色に見える。胸部から腹部は暗灰褐色で、背・翼・腰・尾は茶褐色に黒褐色の縦線がある。足は橙色で後指の爪が長い。日本全国の亜高山地帯に広く生息している。県内では白神山地、岩木山、八甲田山系などの標高の高い場所に生息している。わい化密生した樹木などの茂みで生活し、人目にふれることは少ない。春、秋には標高の低い潅木林にも出現する。積雪期には見られないことから、雪の少ない地方に移動していることが考えられる。日本だけに生息繁殖している日本特産種。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約指定種。 **（関下斉）**

スズメ目　セキレイ科 **C**

和名　セグロセキレイ　**環境省：該当なし**
学名　*Motacilla grandis* Sharpe

全長21㎝、翼開長30㎝。頭部・胸部・背が黒色。目の上の眉斑と喉部分が白色。尾は長く大部分が黒色で外側が白色。腹部は白色である。嘴と足は黒色。日本全国に生息する留鳥。県内では近年生息数が減少し、出現地域も少なくなった。大きな河川の中上流部、山地の湖沼・河川で見られ、奥深い渓流では中流から下流部に出現する。渓流が海に注ぐ場所では海岸部にも見られる。冬期は平地の湖沼、市街地の河川にも飛来する。“ジュンジュン”と鳴きながら波状に飛ぶ。“チチージョイジョイジョイ”と美しい声でさえずる。昆虫を食べる。日本だけに生息繁殖している日本特産種。黒石市の鳥。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。 **（関下斉）**

スズメ目　ホオジロ科 **C**

和名　ノジコ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Emberiza sulphurata* Temminck et Schlegel

全長14㎝、翼開長21㎝、頭部は暗灰緑色で目のまわりが白いのが特徴。背は灰緑色と黒の縦縞があり、下面は硫黄色で脇にわずかに灰緑色の縦縞模様がある。日本特産種。本州に夏鳥として渡来、本州中部から北部の山地で繁殖、冬期は中国南部、台湾、フィリピンで越冬する。日本西南部でも越冬するものがある。本県は生息の北限で県内全域に出現繁殖するが個体数は少ない。繁殖期には低木混じりの草地、低山林地の林縁部、山地に近い河川敷などに出現、“チョンチョン、チョロリーチュチューチー”と澄んだ声でよくさえずる。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日中渡り鳥保護協定指定種。 **（関下斉）**

スズメ目　ホオジロ科 **C**

和名　クロジ **環境省：該当なし**

学名　*Emberiza variabilis* Temminck

全長17㎝、翼開長26㎝、雄は全体が暗青灰色、背に褐色の縦すじ。ホオジロの仲間に共通の尾外側の白色羽がない。分布は狭く、カムチャツカ、サハリン、日本である。本州中部以北で繁殖し、冬期は本州および本州南部で越冬する。県内では夏鳥としてやや標高の高いササの多い林地に少数が生息する。白神山地の秋田県境近くのブナ林には比較的多いが、樹木の多い暗い林地では姿を見ることは少なく、さえずりで生息を知ることが多い。春秋の移動の時期は平地の茂みにもよく出現する。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（小山, 2010）を引用）。日露渡り鳥等保護条約指定種。 **（関下斉）**

ペリカン目　ウ科　**D**

和名　ヒメウ
学名　*Phalacrocorax pelagicus pelagicus* Pallas
環境省：絶滅危惧ⅠB類

冬鳥として少数が渡来し、八戸市深久保にネグラがある（関下, 未発表）。県内では県南の太平洋側の外洋・港湾に少数見られ、陸奥湾ではほとんど確認されず、日本海側では毎年漁港などに少数が出現する。かつて陸奥湾弁天島で繁殖し（清棲, 1978d）、種差海岸では越夏個体が見られることもあるが、現在は県内繁殖地は確認されていない。日米渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定・日露渡り鳥等保護条約の指定種。
（関下斉）

スズメ目　ホオジロ科　**D**

和名　シマアオジ
学名　*Emberiza aureola ornata* Shulpin
環境省：絶滅危惧ⅠA類

国内では夏鳥として北海道内で少数繁殖し、県内では旅鳥として春と秋に観察される。下北半島（三上ら, 1977）や秋田での繁殖記録があることから県内では夏鳥として扱うこともある。渡来地である灌木のある湿原や草地が減少し生息環境は悪化している。国内希少野生動植物種・日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。
（関下斉）

スズメ目　ウグイス科　**D**

和名　セッカ
学名　*Cisticola juncidis brunniceps* (Temminck et Schlegel)
環境省：該当なし

全長が13㎝でスズメより小さい。草原や川原等に生息し昆虫類を採食する。

本種は青森県（1980）によると４月～10月に生息の記録がある。しかし、以後の情報については1990年前後に八戸地域で、1999年に三沢市で確認されているだけで、生息に関する情報が不足している。今後、検討に必要な情報を集める必要がある。（青森県レッドデータブック2010年改訂版（阿部, 2010）を引用）
（関下斉）

スズメ目　アトリ科　**D**

和名　イスカ
学名　*Loxia curvirostra japonica* Ridgway
環境省：該当なし

冬鳥として少数渡来するが、県内では周年見られる地域がある。釜沢（1953）など数例の国内繁殖記録があり、2008年１月に八戸市大須賀海岸の松林で抱卵が確認され（関下, 未発表）、下北半島でも松林において継続的に繁殖している（蛯名, 2012）。日露渡り鳥等保護条約・日中渡り鳥保護協定指定種。
（関下斉）

③引用文献

阿部誠一　2010. コシジロウミツバメ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2010年改訂版）－. p.182.

阿部誠一　2010. ケイマフリ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2010年改訂版）－. p.186.

青森県　2000. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－. 283pp.

青森県　2004. イヌワシ保護対策調査報告書. 67pp.

青森県　2006. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドリスト（2006年改訂増補版）－. 113pp.

青森県　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.

蛯名純一　2007. 仏沼鳥類目録. おおせっからんど年報, 3：2-11.

蛯名純一・三上かつら　2012. 青森県下北地方におけるイスカ *Loxia curvirostra* の換羽と体色変化. 日本鳥類標識協会誌, 24(2)：62-71.

遠藤公男　1994. 盛岡藩御狩り日記－江戸時代の野生動物誌. 講談社, 東京. 259pp.

樋口孝城・広川淳子・浜田　強　1999. 北海道石狩川下流域におけるチュウヒの繁殖状況. 山階鳥研報, 31：103-107.

本州産クマゲラ研究会　2004. 北東北のクマゲラ. 東奥日報社, 青森. 123pp.

釜沢忠夫　1953. イスカの営巣. 野鳥, 18(3)：30-31.

菊地弘保・松原一男　2013. ではったではった. 野鳥をたずねて四十八年. 日本野鳥の会弘前支部. p12.

清棲幸保　1978a. アリスイ. 増補新訂版日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京. pp.416-418.

清棲幸保　1978b. シマクイナ. 増補新訂版日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京. pp.697-698.

清棲幸保　1978c. ジュウイチ. 増補改訂版日本鳥類大図鑑II. 講談社, 東京, pp.482-484.

清棲幸保　1978d. ヒメウ. 増補新訂版日本鳥類大図鑑Ⅲ. 講談社, 東京. pp.949-950.

三上正光　1978. シノリガモの繁殖確認. 野鳥, 43：39.

三上直樹・杉山優子・扇谷照美・大八木昭　1977. 下北半島でシマアオジが繁殖. 野鳥, 38：49.

宮　彰男・三戸貞夫・蛯名純一・関下　斉　2005. 仏沼干拓地で繁殖期に観察されたシマクイナについて. 日本鳥学会誌, 54(2)：104-107.

向山　満　1978. 巣箱を利用したコノハズク. 野鳥, 38：40-43.

成田　徹　1996. 三厩村における珍鳥その１. 青森自然誌研究, 1：42-44.

日本鳥学会　2012. 日本鳥類目録（改定第７版）. 東京. 438pp,

西出　隆　1979. 八郎潟干拓地におけるチュウヒの繁殖記録. 山階鳥研報, 11(2)：109-120.

小山信行　2009. 2008津軽のオオセッカ. 野鳥をたずねて44年, 日本野鳥の会弘前支部. p.25.

小山信行　2010. クマタカ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.183.

小山信行　2010. ヘラシギ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.185.

小山信行　2010. コノハズク. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.186.

小山信行　2010. アカモズ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.187.

小山信行　2010. クロサギ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.188.

小山信行　2010. ハイタカ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.190.

小山信行　2010. オオタカ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.190.

白木彩子　2013. 北海道におけるオジロワシの繁殖の現状と保全上の課題. オホーツクの生態系とその保全（桜井泰憲・大島慶一郎・大泰司紀之 編著）, 北海道大学出版会, 札幌. pp.319-324.

高橋雅雄・長瀬京子・三国　孝・久保清子・久保益男・宮　彰男　2017. 青森県仏沼におけるウズラの繁殖. Strix, 33：199-204.

高橋雅雄・宮　彰男　2015. 仏沼における2010年から2014年のオオセッカの生息状況. おおせっからんど年報, 4：2-7.

高野伸二　1995. フィールドガイド日本の野鳥（増補版）. 日本野鳥の会, 東京. 343pp.

津軽ダム工事事務所　2008. 津軽ダムのクマタカ. 67pp.

吉岡俊朗・蛯名純一・高橋雅雄・宮　彰男・三戸貞夫・関下　斉　2017. 青森県東部におけるオジロワシ *Haliaeetus albicilla* の本州初の繁殖例. 日本鳥学会誌, 66(2)：187-190.

３）爬虫類

①概説

日本産の爬虫類は、カメ目（カメの仲間）と有鱗目（トカゲやヘビの仲間）がある。

カメ目のうち、海産のカメ類は、たまたま、魚網に誤捕獲されたり、漂着したりすることがあるだけである。また、陸産のカメ類は、ペットとして移入されたもので、県内で継続的に繁殖した記録は見られないので、「青森県レッドデータブック2020年改訂版」では、これらのカメ類は本県産の爬虫類の対象として取り扱わない。青森県のカメ類について、和田（1965）は、東北地方では稀で、青森県には天産しない、海産のカメは、海流にのって南方より本県近海に現われ、近海または汽水湖の魚網にかかってとらえられ、標本はアカウミガメが多く、オサガメも保蔵されていると述べており、また、陸産のカメ類については、青森県には緯度的に淡水カメ類は天産しない、愛玩用として飼育されているものは、イシガメとクサガメの２種類があると述べている。著者（笹森）は、クサガメ２頭を捕獲したことがあるが、いずれも甲羅に紐を通す穴が開けられており、ペットとして飼育されたものが放されるか、逃げたものである。

本県には、トカゲ目の４本肢があるニホンカナヘビとヒガシニホントカゲの２種と肢がないヘビの仲間が７種生息している。2010年改訂版（青森県, 2010）の爬虫類分野では、Ａランクにタカチホヘビ、Ｂランクにシロマダラ、ヒバカリが選定されている。

今回の2020年版では、青森県に分布する有鱗目の５科９種を対象として検討し、ヘビ類のタカチホヘビ、シロマダラ、ヒバカリをＤランクに選定した。2010年改訂版では、記録が少ないことと県内環境の変化を挙げていたが、記録が少なかったのは爬虫類を重点対象とした調査がほとんどなく、他調査時（両生類や哺乳類等）の観察を記録するだけであったと考えられる。爬虫類に特化した調査を行った記録（塚本, 2016）からも、記録が少ないから希少な種とするのでなく、十分な分布調査を行って判定することが重要であると思われる。

本県に生息するトカゲはヒガシニホントカゲで、本州の近畿以東と北海道に分布し、ニホントカゲは近畿以西に分布する。山野を踏査してよく観察されるのは、ニホンカナヘビで、ヒガシニホントカゲを観察するのは難しい。漠然と青森県では生息数が少ないと思っていたが、文献等を整理してみたら、県内各地での記録がある（笹森, 2014）。今後、未記録の地域で調査が進むことでくわしい分布域が解明されることを期待したい。ニホンヤモリについては、図鑑等の分布地図には本県も生息範囲に含まれていたり、分布に本州と記載されていたりしているものもある。しかし、本県ではニホンヤモリの生息が確認されたことはない。

環境の変化の影響については、水田の乾田化にともなって、水田に多い両生類が激減したため、カエルやオタマジャクシを採食するヤマカガシやシマヘビ、ヒバカリなどが水田でみられることが少なくなった。複数の農業者が、「圃場整備する前にはブッシュクリーナーで草刈をしていると蛇を切り殺すことがあったが、圃場整備後は、ほとんどない。」と話している。

一方、山地は、燃料を木材に依存していた時代から石油等の化石燃料に代わって、また、農業の機械化が進んで、薪炭林跡地や採草地には、広葉樹や植林されたスギが繁茂してきた。森林に生息する爬虫類にとっては生息環境が良好になってきたものと思われる。しかし、近年、風力発電や太陽光発電の設置が県内各地で行われており、それに伴う設置後の影響や環境保全については十分検討されているのか憂慮される。

本県の爬虫類の分布状況については、ほとんどの種のくわしい調査が不足している。詳細な分布調査が進められることにより、生態系の一員としての爬虫類の保全対策への取組ができるようになると思われる。

（笹森耕二）

②本文

トカゲ目　ヘビ科 **D**

和名　タカチホヘビ
学名　*Achalinus spinalis* Peters
環境省：該当なし

全長は30～60㎝、本州・四国・九州とその周辺の島嶼。体鱗はビーズのように丸く立体的に盛り上がり、つややかな光沢がある。鱗が重なることがなく乾燥にきわめて弱い。…背中線上の黒いラインがはっきりと尾端まで入る（内山ら, 2002）。

本県が北限。本県では岩崎村（現深浦町）十二湖の記録（秩父, 1950）だけであったが、近年、各地で記録されてきた（向山, 2009）。2010年以降では、爬虫類に特化した調査によって生息が確認されている（塚本, 2015；塚本・丹羽, 2016）。しかし、全県的には確認記録が少ない。今後の調査で分布と生態の把握に努めることが重要である。　**（笹森耕二）**

トカゲ目　ヘビ科 **D**

和名　シロマダラ
学名　*Dinodon orientale* (Hilgendorf)
環境省：該当なし

全長30～70㎝、北海道から沖縄の諸島まで広く分布している。背面は灰色もしくは白褐色で黒い横帯がバンド状に入る（内山ら, 2002）。

青森県ＲＤＢ2010年改訂版では、本県の確実な記録が少ない（向山, 2002）とされているが、2010年以降、低山地から山地まで記録されている。また、轢死体も数地点で記録されている（塚本, 2015；笹森, 2016, 2017a）。爬虫類に特化した調査で、分布と生態の把握に努める必要がある。

（笹森耕二）

トカゲ目　ヘビ科 **D**

和名　ヒバカリ
学名　*Hebius vibakari vibakari* (Boie)
環境省：該当なし

全長40～60㎝、本州・四国・九州・佐渡島等に分布。森林から平地まで幅広い環境に生息。背面は褐色または黒褐色。口角から後頭部にかけて、斜めに淡黄色の帯が入る（内山ら, 2002）。

本県が北限である。本県では、南八甲田山系の複数の記録（和田, 1965；デーリー東北, 2002；笹森, 2017b）。また、深浦町・下北半島（向山, 2010. 2012）、弘前市郊外や深浦町での調査（塚本, 2015）等、低山地から山地まで記録されている。しかし、本県全域での記録は、まだ少ない。今後の調査で分布と生態を把握することが求められる。　**（笹森耕二）**

③引用文献

青森県　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.

秩父志行　1950. 青森県のタカチホヘビ. 採集と飼育, 12(7)：211.

デーリー東北　2002. 幻のヘビ「ヒバカリ」, 2002年９月19日八甲田山・十和田を愛する会宮本健一氏写真. 東奥日報, 2002年10月３日掲載

向山　満　2002. 青森県西目屋村で拾得されたシロマダラ *Dinodon orientale* の記録. 青森自然誌研究, 7：78.

向山　満　2009. 青森県深浦町におけるタカチホヘビとヒバカリの記録. 青森自然誌研究, 14：75.

向山　満　2010. 青森県尻屋崎におけるヒバカリの記録. 青森自然誌研究, 15：22.

向山　満　2012. 青森県におけるヒバカリの新しい産地と同一地点での確認、青森自然誌研究, 17：14.

笹森耕二　2014. 青森県のヒガシニホントカゲ *Plestiodon finitimus* の記録. 青森自然誌研究, 19：30-32.

笹森耕二・大瀬将司　2016. 青森県のシロマダラ *Dinodon orientale* の新産地と文献. 青森自然誌研究, 21：91-93.

笹森耕二　2017a. 青森県のシロマダラ *Dinodon orientale* の新産地. 青森自然誌研究, 22：50.

笹森耕二　2017b. 青森県のヒバカリ *Hebius vibakari vibakari* の新産地. 青森自然誌研究, 22：42.

塚本誠太　2015. 青森県における希少蛇類の記録. 青森自然誌研究, 20：12-14.

塚本誠太・丹羽奎太　2016. 岩木川上流地帯の爬虫両生類相. 青森自然誌研究, 21：72-76.

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎　2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京. 335pp.

和田干蔵　1965. 青森県の爬虫相. 青森短期大学紀要, (3)：14-15.

４）両生類

①概説

青森県内に分布する両生類は２目６科13種である。

「青森県レッドデータブック2010年改訂版」（青森県, 2010）の両生類分野では、クロサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、アカハライモリの３種がＣランクに、Ｄランクにカジカガエルを選定されていたが、2020年版として、有尾目のクロサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、アカハライモリはＣランク、無尾目ではツチガエルとトノサマガエルの２種をＣランクに選定し、Ｄランクだったカジカガエルは削除した。

かつて低地の水田地帯で多数生息していたツチガエルとトノサマガエル、アカハライモリなどは、水田地帯の環境変化により激減している。1963年（昭和38年）、ほ場整備事業が制度化され（青森県土地改良史編纂委員会, 1989）、水田の改良がすすめられてきて、2018年度には圃場整備率は84.9％である（青森県農林水産部農村整備課, 2018）。

かつては一年中緩やかに流れる用水路が、三面コンクリートの用水路等になり、流れが速く繁殖し幼生が育つ場所が激減した。水田とその用水路（緩やかに流れる土水路）で繁殖、採食する種（トノサマガエル、ツチガエル、アカハライモリ等）は水田地帯ではどこでも多数みられたが、現在は、生息地を探すことが大変難しくなってきた。石井（2008）は「圃場整備が進んだ場所では他のカエル類が生息できず、ニホンアマガエルのみが生息可能である。」と記述している。なお、水田地帯で多数観察されるニホンアマガエルやシュレーゲルアオガエルが、周辺に草本や低木等が見られない青森平野等の広い水田地帯では、繁殖期の鳴き声の減少が見られるようになってきた。今後, 留意して調査するべきと考える。

カジカガエルは川原がある河川中流域で繁殖、幼生が育ち、変態後は河川周辺や森林地帯で生活している。ダム建設等で水流が安定し河川の撹乱が減少して、川原にヨシやヤナギ等が繁茂したため、本種の繁殖状況や幼生の観察ができにくくなっている所もある。河川の工事や森林伐採等による河川の撹乱の状況によって増減がみられるが、全県的には減少していない。

山地性の両生類にとっては、皆伐地や薪炭林跡地、採草地跡地等には広葉樹や植林されたスギが繁茂して、生息に良好な環境が増えてきた。特に目立つのはモリアオガエルで、繁殖期には河跡湖や山地の池沼、溜池跡、林道付近の水溜り等の樹上等に白い泡状の卵塊が見られる。

クロサンショウウオは、山地の池沼が繁殖地であり、津軽半島、八甲田山系、白神山地等で多く見られる。津軽半島の蟹田町蟹田川支流大川目沢や南沢流域、青森市の天田内川流域では大規模森林伐採や河川改修、道路造りによる土砂の流入などにより卵嚢数が激減している（笹森, 2006）。森林の回復により、徐々に産卵数が増えているが、森林伐採時に湿地池沼の保全に配慮が必要である。トウホクサンショウウオは、山麓から山地で繁殖が見られる。特に目立つのは、車道や林道沿いの水溜りや流れのない土の側溝であり、各地の山裾で卵嚢が観察される。しかし、危惧されるのは、県内では戦後に植栽されたスギ人工林の多くが本格的な伐採期を迎えている（東奥日報, 2018）ので、今後、各地で大規模な伐採が行われることが予想される。伐採、搬出のため林道改修時に林道沿いの湿地や小池沼が埋められたり、泥水が流入したりすることが多いので、本種を含む両生類の繁殖、幼生が育つ水場の破壊が心配される。

なお、アカハライモリは、山麓や山地の溜池跡や池沼では、かつてと同様に見られる。しかし、放置された溜池は、土砂で埋まったり、決壊したりすることが危惧される。動植物の水辺環境として保全が望まれる。

ウシガエルは特定外来生物に指定されている。「県内では、津軽平野や南部地域に移入され、分布している。」（笹森・木村, 2002）。ウシガエルは両生類や昆虫、小型哺乳類などを採食し、池沼の生態系への影響が大きいので、駆除する必要がある。

ニホンアカガエルについては、かつて和田干蔵が「三戸郡売市村（現八戸市売市）。」（和田, 1935）で記録している。また、鰺ヶ沢町での記録（小笠原, 1955）がある。しかし、和田干蔵は、後年には生息記録として取り上げていない（和田, 1969, 1970）。他に奈良典明による南八甲田山系での記録（奈良, 1965）があるが、奈良典明は、「ニホンアカガエルについては、同定の誤りと思われるので削除することとする。」（奈良, 1993）と訂正している。また、向山満は「生息情報がいくつかあったが、いずれも誤同定であった。」（向山, 私信）としている。

日本カエル図鑑における本種の分布図（前田・松井, 1986, 1999）では、本県の西南部から南八甲田山系が生息地に含まれていた。これは、小笠原（1955）と奈良（1965）の記録を基にしていたものと推測される。最近発行された日本カエル大鑑（松井・前田, 2018）では、青森県でのニホンアカガエルの分布域は削除されている。

秋田県や岩手県にはニホンアカガエルが分布しているので、青森県に生息していないと断定することは難しいが、確実な標本を基にした記録はまだない。

近年、風力発電や太陽光発電の設置が県内各地で行われている。尾根筋への作業道や風力発電機の設置による斜面の沢への影響が考えられる。また、斜面や沢沿いに設置する太陽光発電装置による水環境への影響はないだろうか。動植物への影響や土砂災害等の有無を継続してモニタリングする必要があると思われる。

（笹森耕二）

②本文

サンショウウオ目　サンショウウオ科 **C**

和名　クロサンショウウオ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hynobius nigrescens* Stejneger

本県が北限、東北地方では、トウホクサンショウウオと生息域が重なる。成体の全長は120～180㎜。体色は背面が暗褐色または緑っぽい黒褐色（内山ら, 2002）。産卵期は雪どけの頃からで、本県では低山地で３月末頃から、標高が高く雪解けが遅い地域では、６月頃である。卵嚢は乳白色でトウホクサンショウウオの卵嚢と区別できる。

本県では、津軽半島や八甲田山系と白神山地に多く分布し、十和田湖周辺や岩手県との県境でも記録されている。南部地域の太平洋側では、小川原湖東岸の根井沼のみで見られた（高田, 1971）が、根井沼の改修や周辺の伐採等でみられなくなった。下北半島では生息していない（笹森, 2006）。

森林伐採による林床の乾燥や道路改修等による池沼への泥の流入等の影響を受けやすいので、保全対策が求められる。

（笹森耕二）

サンショウウオ目　サンショウウオ科 **C**

和名　トウホクサンショウウオ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hynobius lichenatus* Boulenger

東北地方に広く分布。全長が90～140㎜。体色は背側が暗褐色または黒褐色で、多くは淡い色の斑点がある（内山ら, 2002）。クロサンショウウオと分布域がほとんど重なる。同所に卵嚢がみられることも珍しくないが、本種の卵嚢は透明なひも状で、卵がはっきり見える。

産卵は止水中であり, 山裾の車道沿いや林道の土の側溝の水溜り、また、山地の水深の浅い小池沼等や流れがほとんどない標高の高い源流でも見られる。

県内では戦後に植栽されたスギ人工林の多くが本格的な伐採期を迎えており（東奥日報, 2018）、森林伐採や林道改修等による山裾や林道沿いの繁殖、幼生が育つ繁殖地の湿地池沼への影響が危惧される。小規模な水場や湿地池沼の保全に配慮することが望まれる。 **（笹森耕二）**

サンショウウオ目　イモリ科 **C**

和名　アカハライモリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cynops pyrrhogaster* (Boie)

全長は７～13㎝位、背面は黒褐色で、腹面は赤く不規則な黒い斑紋がある。背中線が出る個体もある（内山ら, 2002）。

本県が北限で、かつては水田地帯で普通に見られたが、圃場整備により用水路の改良や水田の乾田化が進んで、激減した。だが、モリアオガエルが産卵する溜池跡や河跡湖、山地の池沼等ではよく見られる。溜池跡は、アカハライモリの繁殖や生息に適しているが、放置されたままでは、溜池の崩れや土砂の流入等で、本種の生息環境が悪化することが危惧される。また、山地の池沼は森林伐採等で土砂の流入が見られることが多く、本種の生息環境への悪影響が考えられるので保全の対策が求められる。 **（笹森耕二）**

カエル目　アカガエル科 **C**

和名　ツチガエル **環境省：該当なし**

学名　*Glandirana rugose* (Temminck et Schlegel)

37～53㎜（成体）。鳴き声は“ギュー、ギュー”。北海道西部・本州・四国・九州・佐渡島・隠岐島・壱岐島・五島列島などに分布する。体色は褐色で、背面に多数のいぼ状の隆状突起がある（内山ら, 2002）。

本県では、水田地帯で繁殖・採食して、幼生・成体が多数見られた本種は、1960年代から水田の圃場整備が進むにつれて、激減している。

特に、幼生が変態し陸へ上がるまで２年かかる本種は、水田の乾田化や放棄田が激減の原因である。山裾や山麓の溜池跡や湿地池沼では、本種の生息がまだ見られるが、溜池跡の崩壊や湿地池沼の減少が進むことで生息適地の減少が懸念される。 **（笹森耕二）**

カエル目　アカガエル科 **C**

和名　トノサマガエル **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Pelophylax nigromaculatus* (Hallowell)

本県が北限である。全長38～94㎝、繁殖期（初夏６月）の鳴き声は“グルル、グルル、ググゲ”。雄の体色は茶褐色から緑までさまざまであるが、メスは灰白色から暗灰色で、背面に連続した黒色斑紋を持つ。本州（関東平野・仙台平野を除く）、四国、九州、北海道の一部（人為移入）に分布（内田ら, 2002）。座った姿勢がよくトノサマ（殿様）の名がついている中型のカエルである。

本県では、かつて水田地帯で繁殖、採食して、多数見られた本種は、激減した。1960年代から水田の圃場整備が進むにつれて、繁殖地、幼生の生息地、成体の採食地であるゆったり流れる用水路が激減したためである。圃場整備の初期の水田地帯や圃場整備が行われていない水田ではまだ見られるが、年々繁殖・生息する水田や湿地池沼が少なくなりつつある。 **（笹森耕二）**

③引用文献

青森県　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. 335pp.

青森県農林水産部農村整備課　2018. 農村の概要(4), 農地の整備状況. あおもりの農村整備. p.33

青森県土地改良史編纂委員会　1989. 土地改良史. 青森県庁農林部. 1586pp.

石井　翔　2008. 津軽平野におけるカエル類の生息分布. 弘前大学大学院農学生命科学研究課修士論文, 16pp.

前田憲男・松井正文　1986. 日本カエル図鑑. 文一総合出版, 東京. 206pp.

前田憲男・松井正文　1999. 日本カエル図鑑 改訂版. 文一総合出版, 東京. 223pp.

松井正文・前田憲男　2018. 日本産カエル大鑑. 文一総合出版, 東京. 274pp.

奈良典明　1965. 南八甲田で採集した両生類. 青森県生物学会誌, 7(1/2)：12.

奈良典明　1993. 南八甲田山地域の爬虫・両生類相. 南八甲田山地総合学術調査報告書（青森県). pp.95-103.

小川原馨　1954. 鯵ヶ沢中心　哺乳類　爬虫類　両生類目録. 著者自刊. 5pp.

笹森耕二・木村　晟　2002. 青森県におけるウシガエルの生息地と移入経路について. 青森自然誌研究, 7：43-47.

笹森耕二　2006. 青森県におけるクロサンショウウオの産卵地および文献について. 青森自然誌研究, 11：59-63.

田高昭二　1971. 小川原湖と周辺の動物. 小川原湖の動物. 三沢市文化財シリーズ, 5：18-27.

東奥日報　2018. 青い森づくり推進機構 本間理事長に聞く. 東奥日報, 2018年２月17日掲載.

内山りゅう・前田憲男・沼田研児・関慎太郎　2002. 日本の両生爬虫類. 平凡社, 東京. 335pp.

和田干蔵　1935. 青森県に於ける両生類の分布. 青森県博物研究会会報, 2：40-43.

和田干蔵　1969. 青森県の両生類（中編). 青森短期大学紀要, 6：1-14.

和田干蔵　1970. 青森県の両生類（続中編). 青森短期大学紀要, 7：1-12.

5）汽水・淡水魚類

①概説

青森県には、岩木川と馬淵川という２つの大河川のほか、中小規模の河川が多数存在する。また十三湖や小川原湖、鷹架沼、尾駮沼など汽水の湖沼群を抱えているうえ、淡水の十和田湖もある。県内には多数の溜池もあるが、その多くは津軽地方に偏在している。さらに魚類の生息場所として見逃せないのが、水田とそれに付随する狭い水路である。水田・水路は、一部の魚類はじめ様々な生物の伝統的なすみ場・繁殖場となってきた。このように本県の陸水環境は多様で、豊かな生息環境を魚類に提供している。

しかし全国的に言えば、本県の汽水・淡水に生息する魚種は決して多くはない。それは、日本の汽水・淡水性の魚種の多くが関東以西とくに西日本に、とりわけ汽水性のものは南西諸島に偏って分布しているからである。本県にまで分布が北上・到達している魚種には、本県を北限とするものも多い。アブラハヤやキタノメダカ、シマドジョウ、タナゴ、ヤリタナゴ、ギバチほかの魚種がそれに該当する（竹内ら, 1985）。その一方、北方系の魚種で本県にも生息するハナカジカやカンキョウカジカ、エゾホトケドジョウなどもある。現在では北海道の北部・東部にだけ分布するイトウもかつては本県に生息していた（日下部, 1989）。全体として、本県は南方系・北方系の魚種の分布が交差する、特徴ある魚類相を備えているといえよう。

その、本県の汽水・淡水魚類の世界が、現在変化しつつある。国外・国内から新顔の魚が次々に持ち込まれる一方、様々な要因によって在来の魚種が危機的になりつつあるのだ。

汽水・淡水魚類の生息を危うくする主要因は一つではない。まず生息環境自体の劣化があげられる。その実状を河川、湖沼、水田・水路の各々について見ていこう。

まず河川では、コンクリート護岸などの河川改修、さらには落差工やダム・砂防堰堤などの横断構造物が問題となる。一方で、魚類の移動をなるべく妨げない魚道の整備など、魚が住みやすい河川を創り出す工夫もされてはいるが、とても十分とは言えない。

横断構造物による移動の阻害や、のっぺりしたコンクリート護岸が、なぜ魚類にとって生息環境の悪化につながるのか。生活史の中で海と河川とを往復する「通し回遊」を行う魚種では特に顕著なことだが、一般に魚類は、一生の間に多様なすみ場を必要としており、これは鳥類や哺乳類の場合と大きく異なる特徴である。このことは、卵から孵化してのち成魚にまで至る間に、体サイズが大きく変化することに関係している。適したエサも、捕食者のあり方も、その間に次々に変化する。これは、生活史のうえで違ったすみ場が次々に必要となることを意味する。魚類の生活のためには、それら一連のすみ場のセットが健全な状態で揃っていることが大事である。

川が海に流入する河口部は、概して人口が集中するところである。このような場所は往々にしてコンクリートで護岸され、河口に近いワンドは失われやすい。海から遡上して河口に近いところで繁殖するニホンイトヨや、河口部の汽水に住んで体内に概潮汐リズムを持つキタノメダカ個体群などは、繁殖地・生息地が奪われてしまう。

通し回遊魚の中でもカンキョウカジカやシマヨシノボリ、シマウキゴリなどは、仔魚が海へ降り、短期間を海で過ごした後に河川に遡上し、淵と礫底の瀬とが交代する中流的な環境に至ってそこで生活する。従って、海からほどなく中流にたどり着ける中小の河川でないと生息できず、流速が遅く、砂底の流れが長く続く大河川は生息に向かない。とりわけ、腹に吸盤を持たないカジカ類は、吸盤を持つハゼ類よりも遡上力が弱く、ちょっとした落差でも遡上が困難となる。大河川には生息せず中小規模の河川にしかいない魚種があることは認知度が低いうえ、一般に人々の関心は小

河川より大河川に向きやすい。これは河川の魚類の保護を考える際に見落としがちな視点である。

次に、溜池など湖沼が抱える問題を見ていこう。溜池ではコンクリート護岸による水草帯の消失が大きな問題である。水草帯は水質浄化や波浪の低減などの役割も持つが、多くの魚類にとっては産卵場所であると同時に、稚魚の生育地でもあり、その喪失は深刻な影響を引き起こす。これに溜池自体の減少や、水質悪化も重なって、止水環境は劣化しつつある。河川に比べて溜池は生物の調査自体が不十分であり、早急な調査研究が求められている。

最後に、水田・水路が直面しているのは、水田での水管理のあり方の変化という問題である。土の水路がコンクリート水路に改変され、水はけをよくするために水田と排水路とには大きな落差が設けられた。さらに、用水路でなく地下を通るパイプラインで給水されるタイプの水田が現在広がりつつある。これらに加えて、多くの水田では７月に、いったん水田の水を抜いて田面を乾燥させる中干しが行われており、以上をまとめると、「水管理のあり方の変化」ということができる。それらは様々な水田の動物の生息条件に深刻な変化をもたらしているが、魚類ではドジョウやキタドジョウ、キタノメダカには致命的である。コンクリート水路では草も生育しないので、キタノメダカでは卵を産み付ける基質が失われるうえ、増水時の逃げ場もなくなる。また水路と水田の間に大きな落差を設けることは魚の自由な移動を不可能にする。本来であれば水田にまで遡上して繁殖するナマズやギンブナなどの魚類も同じ問題に直面している。

以上すべての水環境に共通する問題として、国内外からの外来種問題があげられる。本来、淡水魚自身が水系を越えて生息域を広げることは稀であり、ほとんど全ての場合は人の手による移入である。これらの外来種は意図的に持ち込まれたものもあれば、アユやコイほかの放流に混じって意図せずに入りこんだものもある。問題になる外来種も、河川、湖沼、水田・水路では一部重複もあるが相違もある。河川ではオオクチバスなど、湖沼ではオオクチバスのほか、カムルチーやブルーギル、タイリクバラタナゴなど。水田・水路では近年とくに津軽平野で増えつつあるカラドジョウなど。以上は国外外来種であるが、国内外来種は枚挙にいとまがないうえ、年々、その種数は増えつつある。

外来種が在来種に及ぼす影響は大きく３つに分類される。まず在来種への直接の捕食、次いで在来種との競争、最後に交雑の問題がある。

乱獲の問題もある。とりわけ、キタノメダカやタナゴ類など、平地に生息して飼育も容易な小型淡水魚は人気が高く、人からの高い捕獲圧にさらされている。今後、何らかの規制が必要となってくる可能性もあるだろう。

本稿の終わりに、大規模な風力発電所や太陽光発電所、あるいは産業廃棄物処分場などの大規模な土地の改変に伴う濁水の発生・流入への懸念を指摘しておきたい。これらの大規模開発は、河川上流域を含む山地で行われることが多い。魚類の生息環境を守るにはたんに水中だけでなく、陸上生態系も含めた集水域全体に目を向ける必要がある。

なお、本稿での学名は基本的に2018年の環境省レッドリストに従った。

（佐原雄二）

②本文

サケ目　サケ科　　**ＥＸ**

和名　イトウ　　**環境省：絶滅危惧類ⅠＢ類**

学名　*Hucho perryi* (Brevoort)

［形態的特徴］　国内最大の淡水魚で、成長すると全長１ｍを超える個体もある。

［選定理由］　本種はかつて本県でも自然繁殖しており、小川原湖では漁獲の対象であったが（日下部, 1988, 1989）、現在では絶滅している。乱獲の指摘もあるが、絶滅の原因は必ずしも明らかでない。国外では沿海州やサハリン、千島に生息する。

［分布と生態の概要］　現在、国内では北海道の北部・東部に生息が限られているが、かつてはもっと広く分布していた。本種のアイヌ語名チライを冠した地名が北海道内に広く存在するのはその名残である。河川と、沿岸域や河口部とを往復する通し回遊魚で、移動を阻害する横断構造物が作られると大きな障害となる。緩い流れを好み、昆虫や小魚を食う動物食である。産卵は春季に行われる。

［特記事項］　ごくまれに川内川や大畑川に迷入・遡上することがある。学名は「ペリー来航」で知られるペリー提督にちなむ。　**（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **A**

和名　シナイモツゴ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**

学名　*Pseudorasbora pumila* Miyadi

［形態的特徴］　紡錘形の体を持ち、最大でも全長８㎝程度の小魚である。近縁種のモツゴ（*P. parva*）と比較して尾柄も太く、全体としてずんぐりした印象がある。モツゴとの決定的な違いは、本種はモツゴと異なって側線鱗が体の前方の、せいぜい２～３枚にしかないことである。繁殖期にはオスは体色が黒くなり、頭部に追星を生じる。

［選定理由］　本種は生息地が限られているうえ、生息を脅かす２つの主要因、つまり魚食性外来魚オオクチバスと国内外来種モツゴの分布の拡大が止まっていないことから、極めて危機的な状況下にある。前者は捕食により、後者は交雑によって本種を減少させている。

［分布と生態の概要］　日本固有種で、移入を除けば分布は東北地方に限定されている。県内では青森平野のいくつかの池で生息が確認されている。津軽平野でも過去に本種の記載があるが（青森県, 1978）、標本も写真も残っておらず、現在では生息していないようだ。雑食性で、繁殖期にオスは産卵基質となる石などの周囲になわばりをもつ。

［特記事項］　県内で本種が初確認されたのは1994年であるが、五十嵐（2016）は本種らしい魚を青森平野で1940年代に確認している。また Koga & Goto（2005）によれば、県内でも水系によって遺伝的な違いが認められる。　**（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **A**

和名　ヤリタナゴ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel)

［形態的特徴］　側扁した体を持ち、最大でも全長10㎝程度の小魚である。日本産タナゴ類の中では体高の低い方である。１対のヒゲを持つ。繁殖期にはオスの前半部が赤みを帯び、尻ビレ外縁も赤くなる。一方、腹部は黒くなる。

［選定理由］　本種は河川の緩流域や水路・溜池にすみ、かつては溜池の常連とも言える魚種であった。しかし溜池は魚食性外来魚の蔓延によって生息環境が悪化した。また国外・国内からの外来タナゴ類との競争もあるうえ、本種の生息・移動を阻害するような形状の水路も多くなった。

［分布と生態の概要］　国内では北海道と南九州を除く各地に分布し、県内での初記録は中村（1958）による。基本的に生息は津軽平野に限られる。繁殖のさいにはマツカサガイなど二枚貝が必要で、流れの中を移動する。　**（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **A**

和名　タナゴ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Acheilognathus melanogaster* Bleeker

［形態的特徴］　日本産タナゴ類の中では体高が低い。最大でも全長10㎝程度の小魚である。繁殖期にオスの腹は黒く、尻ビレの外縁は白くなる。

［選定理由］　本種の県内生息地は湖沼と河川緩流域であるが、もともと太平洋側には溜池の数は少ないうえ、多くの池にはオオクチバスなど魚食性外来魚が持ち込まれた。一方、河川改修によって生息環境が単調になることや、繁殖に必要な二枚貝類の生息が危うくなることも懸念される。

［分布と生態の概要］　日本固有種で関東以北の太平洋側に分布し、本県でも生息域は太平洋側の河川と湖沼に限られる（竹内ら, 1985）。タナゴ類のうちでは流水中に見られることが比較的多い。繁殖には二枚貝を必要とする。　**（佐原雄二）**

ナマズ目　ギギ科 **A**

和名　ギバチ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Tachysurus tokiensis* (Döderlein)

［形態的特徴］　全長で20㎝を超えることがある。８本の口ヒゲを持ち、ナマズに似るが、背ビレや尾ビレが発達している。近縁種のギギ（*T. nudiceps*）と違って、尾ビレ後縁の湾入はごく浅い。

［選定理由］　本県は分布北限で、県内でも分布はごく限られているうえ、個体数も多くなく、国土交通省の「水辺の国勢調査」でも、毎回（最近では2018年）確認されているが少数にとどまっている。

［分布と生態の概要］　日本固有種で、関東以北の本州に分布する。本県では馬淵川水系の中流域のみから知られる。清澄な水にすむ。動物食で夜間に活動する。汚濁や河川改修に弱い。

［特記事項］　本種に酷似した種にギギがあり、国内外来種として本県では岩木川水系にすでに定着している。今後、もし馬淵川水系に侵入すると本種の生息にとって大きな脅威になりえる。

（佐原雄二）

カサゴ目　カジカ科 **A**

和名　ハナカジカ **環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）**
学名　*Cottus nozawae* Snyder

［形態的特徴］　全長は最大15㎝程度で褐色の体に斑紋がある。腹ビレには数本の黒い横斑があり、同じく横斑を持つカンキョウカジカよりも顕著である。

［選定理由］　県内での生息域はごく限られている。本種の生息を脅かすのは河川改修と、生息地を取り巻く集水域の環境の大きな改変である。

［分布と生態の概要］　日本固有種で、北海道と北東北の一部に生息する。本種は海へは降りず、河川中で一生を送る。県内での分布はごく狭く、県南地方の一部の河川上流域に限られる。水生昆虫など動物質のエサをとる。

［特記事項］　県境付近はかつての廃棄物処分場のほか、近年は大規模な風力発電の計画が目白押しである。河川を取り巻く環境が激変すれば、本種の生息にも影響が及ぶことが懸念される。

（佐原雄二）

ウナギ目　ウナギ科 **A**

和名　ニホンウナギ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Anguilla japonica* Temminck et Schlegel

［形態的特徴］　細長い「ウナギ型」の体型を持つ。大きなものでは１ｍ近くなる。背中側は暗色で、腹側は白っぽい。降海が近くなると背は黒く、腹は銀白色になる。

［選定理由］　かつて小川原湖では大きな漁獲量を誇っていたが、近年は1979年のピーク時の1/100にまで激減している。小川原湖では放流も行われており、湖内での成長も確かめられている。他方、高瀬川の河口ではシラスウナギ（稚魚）の天然遡上も確認もされているが多くはない（2018年５月22日付東奥日報記事）。全国的な減少傾向も考え合わせて、新たに県レッドリストにカテゴリーＡとして記載する。

［分布と生態の概要］　ベトナム・中国南部から台湾・朝鮮半島・日本列島にまで分布する。本種は降河回遊魚で、繁殖の前に河川を下る。遠くマリアナ海嶺で産卵し、生まれた仔魚は暖流に乗り、成長しながら日本沿岸にたどり着くと河川を遡上して、以後は淡水で生活する。本県では高瀬川水系をはじめ太平洋側に流入する河川にのみ遡上する。動物食で夜行性である。なお、河川に遡上せず海で過ごす個体の存在も知られている。

［特記事項］　伝統的に日本人に親しまれている食用魚だが、全国的な減少から、2013年に環境省のレッドリストに絶滅危惧ⅠＢ類として記載された。減少の原因としては乱獲ほか様々な要因があげられているが、河川内の落差も指摘されており、環境省では移動を阻害しないよう河川内に大きな落差を設けないことを推奨している。

（佐原雄二）

和名　ニホンイトヨ　　**環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州）**
学名　*Gasterosteus nipponicus* Higuchi, Sakai et Goto

［形態的特徴］　全長せいぜい８㎝程度の小魚。尾柄は細く、体側の鱗板は連続する。背には３本のトゲが並ぶ。繁殖期のオスは背と眼が青く、腹は赤くなる。

［選定理由］　かつて県内での報告例は決して少なくなかった（竹内ら, 1985）。しかし近年の、国交省水辺の国勢調査ほかの諸報告ではまれになっている。

［分布と生態の概要］　国内では、九州から北海道までの日本海側、千葉県から北海道までの太平洋側と北海道オホーツク海側に分布する。国外では朝鮮半島東部、沿海州、サハリンに分布する（Higuchi *et al.*, 2014）。基本的に遡河回遊型の生活史を持ち、河川に遡上して下流域の流れの緩い場所で繁殖するが、このような場所は護岸など人の影響を受けやすい。なお、小川原湖に生息するものも同様の生活史を持つ（Katayama *et al.*, 2000）。動物食で水生昆虫などを食べる。繁殖期にオスが植物片を集めて巣を作り、メスが産卵した後もオスは孵化後しばらくまで保護する。

［特記事項］　本種は青森県レッドデータブック2010年改訂版でイトヨ（降海型）とされていたものであるが、その後ニホンイトヨとして新種記載された（Higuchi *et al.*, 2014）ことに基づく名称変更である。今回、状況の深刻さを考慮し、2010年改訂版からランクを変更した。　**（佐原雄二）**

ヤツメウナギ目　ヤツメウナギ科 **B**

和名　スナヤツメ類 **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Lethenteron* spp.

［形態的特徴］　全長20㎝程度の小型のヤツメウナギで、顎がなく吸盤状の口を持つ。幼生は成魚と異なり眼がなく口も吸盤状ではない。

［選定理由］　本種の生息には、流れの中で砂泥底の部分と礫底の部分とが近接してあることが必要である。河川改修で流れが単調になると生活しづらくなる上、繁殖時を除き夜行性で目立たず気づかれにくいことも不利に作用している。

［分布と生態の概要］　国内では、北方種は北海道から東北地方に分布し、南方種は本州から九州までに分布する。水のきれいな細流に生息し、海に下りず淡水中で一生を送る。生活史の大部分は砂泥底に潜って、夜間に水中に出て泥中の有機物を食べる。繁殖期には昼間に活動し、礫底で産卵する。

［特記事項］　以前、単に「スナヤツメ」とされていたが、現在ではスナヤツメ北方種とスナヤツメ南方種とに分けられている（Yamazaki & Goto, 1998）。両種の判別は形態的には困難である。地理的分布上、本県に生息するほとんどは北方種と思われるが、南方種の生息する可能性も否定できない。合わせて「スナヤツメ類」とした理由である。　**（佐原雄二）**

メダカ目　メダカ科 **B**

和名　キタノメダカ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Oryzias sakaizumii* Asai, Senou et Hosoya

［形態的特徴］　一生を淡水で送る日本産淡水魚のうち最小サイズで、最大でもせいぜい全長４㎝である。背は褐色で腹は銀白色であるが、背景に応じて体色を白っぽく、また黒っぽく変化させる。繁殖期にはオスの腹は黄色く、ヒレ特に腹ビレが黒くなる。一方、雌雄とも眼は青みを帯びる。

［選定理由］　主な生息場所は水田・水路や溜池、それに河口部を含む河川緩流域であるが、水田や水路は圃場整備や中干しが、溜池や河川緩流域ではオオクチバスなど魚食性外来魚の移入が、それぞれ深刻な危機要因となっている。さらに、ヒメダカなど他の地方起原のメダカ類が野外に放流されて本県のキタノメダカと交雑し、寒冷に適応できない雑種が生じると、本種には大きな打撃になりうる。

［分布と生態の概要］　本県は自然分布の北限で、南は日本海沿いに京都府まで分布する。暖かい季節の昼には水面を群泳する。雑食性で、口に入るサイズなら、動物性・植物性の双方のエサをとる。塩分耐性もあり、海水の混じる汽水域でみられることがある（畑山, 2017）。繁殖期が長く、本県では５月から８月まで産卵期が及び、この間に同じ個体が何度も繁殖する。卵塊はしばらくメスの腹部についているが、たいていは昼までに水草などに付着する。寿命は短く、野外ならせいぜい１年と２、３か月程度であるが、まれに２冬を越す個体もある。

［特記事項］　かつて日本産メダカは１種とされていたが、遺伝子的な違いから2011年にキタノメダカとミナミメダカの２種に分けられた（Asai *et al.*, 2011）。本種は以前に「メダカ北日本集団」（青森県レッドデータブック2010年改訂版）とされたものの、新種記載に伴う和名・学名変更である。種小名は新潟大学の酒泉満博士に由来する。　**（佐原雄二）**

トゲウオ目　トゲウオ科 **B**

和名　トミヨ属淡水型 **環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州）**
学名　*Pungitius* sp.1

［形態的特徴］　全長５㎝程度の小魚。背にはノコギリの歯状のトゲが並び、尾柄は細い。

［選定理由］　本種の主な生息地は小川原湖やため池などの止水、及び河川の緩流部であるが、ため池自体の減少や水質悪化、魚食性外来魚による食害などによる減少要因が懸念される。

［分布と生態の概要］　国内では新潟・岩手から北海道にまで分布する。動物食で、小さな水生昆虫などを食べる。繁殖期にオスは体色が黒くなり、植物片を集めて水草の間に小鳥の巣のような巣を作り、メスが産卵後も孵化まで保護する。

［特記事項］　本種はかつて、体側の鱗板の連続性に基づき、連続が完全なトミヨと、不完全なイバラトミヨ（別名キタノトミヨ）とに分けられていたが、現在は同じく「トミヨ属淡水型」とされている。県内には「トミヨ型」と「イバラトミヨ型」の双方が生息しており、海に近い場所に前者が、内陸に後者が分布する傾向がある（竹内ら, 1985）が、混生する場所もある。　**（佐原雄二）**

カサゴ目　カジカ科 **B**

和名　カジカ小卵型 **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Cottus reinii* Hilgendorf

［形態的特徴］　縦扁した形態を持ち、体側には暗色の斑紋がある。ハナカジカやカンキョウカジカとは異なり腹ビレに斑点はない。

［選定理由］　かつて「カジカ」とされていた魚種は、河川で一生を過ごすカジカ大卵型と、生活史の中で海と河川とを使い分ける中卵型及び小卵型とに分けられる。落差工や砂防堰堤などの河川内横断構造物によってとりわけ後者は移動を阻害され、深刻な悪影響を受ける。形態は似ているので、同じ河川に分布する場合、後者が姿を消しても気づかれにくい。

［分布と生態の概要］　日本固有種で、本県を含む本州・四国の太平洋側、及び琵琶湖に分布する。琵琶湖産を除き基本的に両側回遊魚で、降海した仔魚は短期間を過ごした後に河川に遡上して生活する。動物食で、水生昆虫などを食べる。　**（佐原雄二）**

カサゴ目　カジカ科 **B**

和名　カジカ中卵型 **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Cottus* sp.

［形態的特徴］　全長せいぜい15㎝程度。カジカ小卵型に酷似し、縦扁した形態を持つ。腹ビレに斑点はない。

［選定理由］　カジカ小卵型と同じく両側回遊魚である。したがって、移動を妨げる河川内横断構造物が造られると本種には大きな打撃となる。また、形態は類似するが降海しないカジカ大卵型が同じ水系に生息すると本種の減少は見過ごされやすい。

［分布と生態の概要］　日本固有種で、本州の日本海側や四国・九州に分布し、本県では日本海側、及び陸奥湾に流入する河川に分布する。両側回遊魚で、河川内で孵化した仔魚は海に流下し、短期間を海で過ごした後に河川に遡上する。動物食で水生昆虫などを食べる。　**（佐原雄二）**

ヤツメウナギ目　ヤツメウナギ科 **C**

和名　カワヤツメ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Lethenteron japonicum* (Martens)

全長50㎝に達するヤツメウナギで、顎がなく吸盤状の口を持つ。７対の鰓穴を眼に見立てて本当の眼と合わせ「八つ目」という。幼生はしばらく河川で過ごし、変態後に降海して海中で生活する。他の魚類に吸い付き栄養をとる。成魚になると河川に遡上する。河川内に横断構造物があると大きな障害となる。県内では主に日本海側に分布する。なお近年、海に降りない河川型の個体の存在することが分かってきた（Yamazaki *et al*., 2011）。 **（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **C**

和名　エゾウグイ **環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）**
学名　*Tribolodon sachalinensis* Nikolsky

ウグイによく似るが小型で、繁殖期に出現するオレンジ色の婚姻色もウグイに比べて地味である。もっとも顕著な違いは、ウグイでは尻ビレ外縁が内湾するのに本種ではそうならない。雑食性で河川の中・上流域で一生を送る。 **（佐原雄二）**

コイ目　フクドジョウ科 **C**

和名　エゾホトケドジョウ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Lefua nikkonis* (Jordan et Fowler)

口にひげ６本、鼻孔部に２本で合計８本ヒゲのドジョウである。オスは体長数㎝で側線上に１本の黒帯がある。メスは大きなものは10㎝程までになるが希である。尾柄部にくさび形の黒斑がある。水底に静止したり、物陰に潜むが、動くときは中水を普通の魚のように泳ぐ。湿地帯の水草の多い水路や細流や沼に見られる。素掘りの水田水路などにも見られる。分布はサハリンから北海道までという通説（後藤，1982；竹内・太田，1993）により2008年青森県外来種リストに載る。そのため国立環境研究所の侵入生物ＤＢで駆除すべき種として扱われている。2018年に遺伝子解析の結果、青森県のエゾホトケは在来であることが分かった（Ooyagi *et al*., 2018）。下北の生息地は確実に減っている。津軽地方では今も生息しているところはあるのか、分らないことが多い種である。**（大八木昭）**

スズキ目　ハゼ科 **C**

和名　シロウオ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Leucopsarion petersii* (Hilgendorf)

半透明の体を持ち、ハゼ類のうちでは遊泳性の強い生活を送る。基本的に海で生活し、繁殖期に河川に遡上する。河川下流部の、伏流のある礫底で産卵し、産卵後はオスが卵塊を守る。蟹田川、野内川、川内川などでの四つ手網漁がよく知られており、中村川のシロウオ漁は寛政９（1797）年に菅江真澄が記している（内田・宮本，1967）。年魚なので年ごとの個体数変動もあるが、平成元年から27年までの野内川における漁獲量変化では、減少傾向が顕著である。生息には河川と海の両方の環境が良好であることが必要である。 **（佐原雄二）**

スズキ目　ハゼ科 **C**

和名　ヒモハゼ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Eutaeniichthys gilli* (Jordan et Snyder)

全長４㎝程度の小さなハゼで体側に黒い帯がある。小さな頭部などハゼとしては変わった形態を持つ。汽水の砂底・砂泥底を好んで生息する。知られる限りでの国内生息北限は本県で、従来は高瀬川や田名部川、平内町浅所など、広い汽水域でのみ報告されていたが（塩垣ら, 2004）、ごく最近青森市の天田内川河口で少数が確認された。本種の住む砂底・砂泥底の汽水域は限られており、生息の基盤は脆弱である。 **（佐原雄二）**

スズキ目　ハゼ科 **C**

和名　ジュズカケハゼ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Gymnogobius castaneus* (O'Shaughnessy)

主に平地の湖沼や河川緩流域にすむ、小型のハゼである。繁殖期にはメスに濃い黄色と黒の婚姻色が現れる。かつては普通にみられ、溜池の、いわば常連の魚種であったが、近年は少なくなった。減少の主原因は、オオクチバスなど魚食性の外来魚の蔓延である。本種は幼魚の時期には水中をゆったり浮泳するが、この時期はとりわけ捕食を受けやすい。 **（佐原雄二）**

カサゴ目　カジカ科 **C**

和名　カンキョウカジカ **環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北・北陸地方）**
学名　*Cottus hangiongensis* Mori

両側回遊魚で、幼魚が海から河川に遡上したのち、浮き石の優占する川床で生活する。したがって砂底・砂泥底が長く続く、岩木川や馬淵川のような大河川には生活しづらく、河口からすぐに山地になるような中小規模の河川に分布する（竹内ら, 1985；安野, 2012）。カジカ類は腹に吸盤がないので、ハゼ類に比べて遡上力が弱い。概してこのような河川は大河川に比べて人からの関心も低く、気づかれないままに砂防堰堤などにより減少する事態を招きかねない。水生昆虫などを主食とする動物食である。 **（佐原雄二）**

カサゴ目　カジカ科 **C**

和名　カジカ大卵型 **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cottus pollux* Günther

腹ビレに横斑はない。体型も色彩もカジカ小卵型やカジカ中卵型に似るが生活史が異なる。河川の上流・中流域で一生を送り、降海することはない。主に夜間に活動し、水生昆虫などもっぱら動物質のエサをとる。河川改修で環境が単調になることや、とりわけ落差工によって移動ができなくなることは生息条件の悪化要因である。 **（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **D**

和名　キンブナ
学名　*Carassius buergeri* subsp. 2
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

フナ類の中では体高が低く、鱗の後端が明るく縁どられるなどの特徴がある。主に、山裾に近いため池や流れの緩い河川などに生息する。ギンブナに比べて数が少ないうえに、このような場所は外来性魚食魚が侵入しやすく、生息条件は悪化しつつある。　**（佐原雄二）**

コイ目　コイ科 **D**

和名　ジュウサンウグイ
学名　*Tribolodon brandtii brandtii* (Dybowski)
環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州）

ウグイ類の中では大きくなる種である。コイ科魚類の中では珍しく普段は海に生息し、繁殖時に河川に遡上する。かつてはマルタウグイと呼ばれていたが、近年ジュウサンウグイ型とマルタ型の２型に分けられた（天野・酒井, 2014）。本県に生息するのは分布域から考えてジュウサンウグイ型と思われ、この呼称を採用する。なお呼称は十三湖に由来する。　**（佐原雄二）**

コイ目　ドジョウ科 **D**

和名　キタドジョウ
学名　*Misgurnus* sp. (Clade A)
環境省：情報不足

口ひげ10本のいわゆるドジョウの遺伝子はクレードＢである。北海道のドジョウはクレードＡがほとんどである。東日本のドジョウにはクレードＢもＡも見られていた。青森県では今別町と東通村のものがクレードＢであることが判明していたが、2016年むつ市芦崎と大畑町恐山の個体群はクレードＡであることが分かり、東北地方に連続分布していることを確かめた。そこでクレードＡのものの和名をキタドジョウと提唱した（中島ら, 2017）。不明な点の多い種である。　**（大八木昭）**

スズキ目　ハゼ科 **D**

和名　アカオビシマハゼ
学名　*Tridentiger trigonocephalus* (Gill)
環境省：該当なし

尾ビレに赤い縞を持つハゼ。かなり塩分の高い汽水の、礫の多い場所を好んで生息する。県内では陸奥湾や日本海側の河口部で記録されている。なお、かつて本種と一緒に「シマハゼ」とされていた魚種にシモフリシマハゼがあるが、今のところ県内で確実とされる記録がなく、両種の生息状況の詳細はなお不明である。

（佐原雄二）

スズキ目　ハゼ科 **D**

和名　チチブ
学名　*Tridentiger obscurus* (Temminck et Schlegel)
環境省：該当なし

ずんぐりした体型のハゼで、大きな礫など隠れがの多い汽水域に住む。本県にはごく近縁のヌマチチブ（*T. brevispinis*）が同様な環境に広く分布しており個体数も多い。本種は陸奥湾東部の河口などに生息するが（安野, 2011）、詳細はなお不明である。小魚など動物質のエサをよくとるが雑食性である。　**（佐原雄二）**

カサゴ目　カジカ科 **D**

和名　カマキリ（別名アユカケ）
学名　*Cottus kazika* Jordan et Starks
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

東北地方では日本海側の河川に生息し、繁殖期に降海する降河回遊魚である。以前は北限が秋田県であったが、津梅川での報告（長崎ら, 1999）があって以来、日本海側の河川での報告事例が増えてきた（青森県鰺ヶ沢県土整備事務所, 2004；東ら, 2005）。しかし、県内で見つかる本種が再生産しているかは不明である。動物食で小魚などを捕食する。なお、2010年改訂版ではアユカケ（別名カマキリ）と表記したが、今回は環境省の表記にならってカマキリ（別名アユカケ）と表記する。　**（佐原雄二）**

ダツ目　サヨリ科　**D**

和名　**クルメサヨリ**
学名　*Hyporhamphus intermedius* (Cantor)
環境省：準絶滅危惧

汽水性の小型のサヨリ類で、下顎が突出する。サヨリ（*H. sajori*）とは違って、本種では下顎先端が黒っぽい。本県では小川原湖（建設省東北地方建設局高瀬川総合開発工事事務所, 1987）や十三湖（中村, 1958；2002から2012年度の国交省水辺の国勢調査）から報告があるが、生息状況の詳細はなお不明である。

（佐原雄二）

ニシン目　ニシン科　　**ＬＰ（尾駮沼系群）**

和名　ニシン　　**環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（本州太平洋側湖沼系群）**
学名　*Clupea pallasii* (Cuvier et Valenciennes)

［形態的特徴］　左右に側扁した体型を持つ。ニシンはなじみ深い有用魚であるが、尾駮沼系群については、頼（1978）が、セキツイ骨数や頭部の斑紋などに独自なものを有すると述べている。

［選定理由］　本系群を含めて、いわゆる湖沼ニシンはそれぞれに地域性が強い（小林ら, 1990）。本系群は周囲の環境の激変によって大きく減少したと考えられる。

［分布と生態の概要］　尾駮沼系群は尾駮沼で藻類などに産卵し、北海道の太平洋側で採餌しながら回遊する。冬季に尾駮沼に来遊する。

［生存に対する脅威と保存対策］　尾駮沼の周囲は核燃料サイクル関連施設の集中立地によって環境が激変した。現在また、周辺の陸上・洋上に多数の風力発電機の建設計画が進められており、影響が懸念される。

［特記事項］　むつ小川原開発に関連して尾駮沼は漁業権が消滅したが、現在も県の許可を得てニシン漁は行われている。近年の新聞記事には「昔はたくさん取れた」との漁協組合長の言葉がある（2017年３月２日付 東奥日報）。なお、尾駮沼のニシン漁について菅江真澄が寛政５（1793）年に記述している（内田・宮本, 1967）。　**（佐原雄二）**

サケ目　サケ科　　**ＬＰ（大畑川陸封個体群）**

和名　サクラマス（通称スギノコ）　　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Oncorhynchus masou masou* Brevoort

［形態的特徴］　頼（1982）によれば、本個体群は通常のヤマメに比べて青緑色を帯びるなど体色の違いのほか、幽門垂の数などにも違いが認められるという。

［選定理由］　生息地が限られており、学術的にも貴重である。

［分布と生態の概要］　サクラマスの河川陸封型は、降海前の個体も合わせてヤマメと呼ばれる。陸封されたヤマメは水系ごとに色彩や形態に微妙な違いがあり、大畑川の陸封個体は「スギノコ」と称されて色彩・形態も独自の性質を持つ。

［生存に対する脅威と保存対策］　本個体群は大畑川の上流の一部に生息する。流域全体を保全することが肝要であろう。　**（佐原雄二）**

コイ目　コイ科　　**ＬＰ（大和沢川透明鱗群）**

和名　アブラハヤ　　**環境省：該当なし**
学名　*Phoxinus lagowski steindachneri* Sauvage

［形態的特徴］　アブラハヤは全長せいぜい13㎝程度の小魚で、細かい鱗を有する。岩木川水系大和沢川に生息する個体は、かなりが通常の個体と異なって体表の黒色色素が少なく、鱗が透明で鰓蓋から鰓の赤い色が透けて見える。

［選定理由］　透明鱗のアブラハヤは珍しいうえに生息地が限られており、選定する。

［分布と生態の概要］　アブラハヤ自身は本県を国内分布の北限とし、北陸および中国地方にまで分布する。県内でも広く分布し、岩木川水系でも近年生息を広げている（佐原・福井, 2001）。雑食性で主に薄明薄暮時に活動する。群れを作る性質が強く、河川上・中流域の流れの緩いところを好む。

［生存に対する脅威と保存対策］　河川改修など河川内の工事が懸念要因である。　**（佐原雄二）**

和名　ウグイ　　環境省：該当なし
学名　*Tribolodon hakonensis* (Günther)

［形態的特徴］　ウグイは多くの河川に普通に見られる魚種で、全長30㎝に達する。本個体群はそこまで大きくはならないようだ。エラの塩類細胞がよく発達するなど特異な形質を持つ。

［選定理由］　宇曾利湖は酸性の湖で、pHは湖内の低い所では３に近い。このように極端な水質の中で生活する魚類は他に例がなく、貴重な例である（山本ら, 1969）。

［分布と生態の概要］　ウグイはほぼ国内全域に分布し、国外でもサハリンや沿海州、朝鮮半島に分布するが、本個体群は宇曾利湖にのみ生息する。流入河川を遡って産卵する。

［生存に対する脅威と保存対策］　宇曾利湖への流入河川や周囲の森林など、集水域の全体が保全されることが必要であろう。　**（佐原雄二）**

③引用文献

天野翔太・酒井治己　2014. 降海性コイ科魚類ウグイ属マルタ２型の形態的分化と地理的分布. Journal of National Fisheries University, 63：17-32.

安野　翔　2011. 下北半島陸奥湾流入河川におけるチチブ、ヌマチチブの記録. 青森自然誌研究, 16：55-56.

安野　翔　2012. 下北半島における両側回遊性ハゼ科及びカジカ科魚類７種の分布. 青森自然誌研究, 17：1-5.

青森県　1978. 第２回自然環境保全基礎調査　動物分布調査報告書（淡水魚類）. 57pp.

青森県　2010. レッドデータブック2010年改訂版.

青森県鰺ヶ沢県土整備事務所　2004. 磯崎川の生き物たち. 124+63pp.

Asai, T., H. Senou & K. Hosoya　2011. *Oryzias sakaizumii*, a new ricefish from northern Japan (Teleostei: Adrianichthyidae). Ichthyol. Explor. Freshwaters, 22：289-299.

東　信行・亀井陽太郎・齋藤　裕・泉　　完　2005. 岩木川における未記載魚種の採捕記録. 青森自然誌研究, 10：71-72.

後藤　晃　1982. 北海道の淡水魚相とその起源. 淡水魚, 8：19-26.

畑山敏昭　2017. 芦崎のメダカ. 芦崎の自然２－芦崎の自然調査特集（平成27年まで）－.（むつ市教育委員会編） pp.35-42.

Higuchi, M., H. Sakai & A. Goto　2014. A new threespine stickleback, *Gasterosteus nipponicus* sp. nov. (Teleostei : Gasterosteidae), from the Japan Sea region. Ichthyol. Res., 61：341-351.

五十嵐正俊 2016. 青森のシナイモツゴ. 里山・里地水辺のゆたかな自然を次世代へ.（水辺の自然再生共同シンポジウム実行委員会編）pp.10-14.

Katayama, S., Y. Hino & K. Iizuka　2000. Life history style of the threespine stickleback, Gasterosteus aculeatus (L.), in Lake Ogawara, Japan. Bull. Jpn. Soc. Fish. Oceanogr., 64：209-214.

建設省東北地方建設局高瀬川総合開発工事事務所　1987. 小川原湖の生き物たち. 146pp.

小林時正・岩田宗彦・沼知健一　1990. 日本の北部海域で産卵するニシン地域性集団間の遺伝的分化. 日本水産学会誌, 56：1045-1052.

Koga, K. & A. Goto　2005. Genetic structures of allopatric and sympatric populations in *Pseudorasbora pumila pumila* and *Pseudorasbora parva*. Ichthyol. Res., 52：243-250.

日下部元慰智　1988. 青森県さかな博物誌. 東奥日報社. 377pp.

日下部元慰智　1989. 明治期の青森県漁業.（青森県水産史編纂委員会編）青森県水産史. pp.75-263.

長崎勝康・佐原雄二・松宮隆志　1999. 津梅川で採集されたアユカケの記録. 青森自然誌研究, 4：34.

中島　淳・内山りゅう　2017. 日本のドジョウ　形態・生態・文化と図鑑. 山と渓谷社, 東京. 223pp.

中村守純　1958. 岩木川・十三湖水系の魚類調査報告. 17pp. 青森県.

Ooyagi, A., D.F. Mokodongan, J. Montenegro, I.F. Mandagi, N. Koizumi, Y. Machida, N. Inomata, S.V. Shedko, A.A. Hutama, R.K. Hadiaty & K. Yamahira.　2018. Phylogeography of the eight-barbel loach *Lefua nikkonis* (Cypriniformes : Nemacheilidae) : how important were straits in northern Japan as biogeographical barriers? Ichthyol. Res., 65：115-126.

頼　茂　1978. 尾駮沼鰊（湖沼性ニシン）について. 淡水魚, 4：82-87.

頼　茂　1982. 大畑川のスギノコ. 淡水魚増刊, pp.97-103.

佐原雄二・福井庸雄　2001. 土淵川の魚類－20年前との比較. 青森自然誌研究, 4：105-107.

塩垣　優・石戸芳男・野村義勝・杉本　匡　2004. 改訂青森県産魚類目録. 青森県水産総合研究センター研究報告, 4：39-80.

竹内　基・松宮隆志・佐原雄二・小川　隆・太田　隆　1985. 青森県の淡水魚類相について. 淡水魚, 11：117-133.

竹内　基・太田　隆　1993. 青森県におけるエゾホトケの分布および二, 三の生態的知見. 日本生物地理学会会報, 48(1)：73-80.

東奥日報　2017. 春告げる尾駮ニシン　漁解禁　陽光浴び銀りんキラリ. 東奥日報2017年３月２日掲載.

東奥日報　2018. ウナギ稚魚　今年も来た　３年連続　小川原湖で内水研確認. 東奥日報2018年５月22日掲載.

山本護太郎・樫村利道・吉田勝一・関野哲雄　1969. 下北半島における陸水生物学とくにプランクトンと魚類分布について. 日本生態学会誌, 19：246-254.

Yamazaki, Y. & A. Goto　1998. Genetic structure and differentiation of four *Lethenteron* taxa from the Far East, deduced from allozyme analysis. Env. Biol. Fishes, 52：149-161.

Yamazaki, Y., R. Yokoyama, T. Nagai & A. Goto　2011. Formation of a fluvial non-parasitic population of *Lethenteron camtschaticum* as the first step in petromyzontid speciation. J. Fish Biol., 79：2043-2059.

内田武志・宮本常一（編訳）　1967. 菅江真澄遊覧記３. 平凡社, 東京. 365pp.

（４）無脊椎動物

１）昆虫類

①概説

青森県の昆虫相に関する調査研究は、明治時代に入ってから当時の内務省勧農局や県の試験研究機関などによって、特に農業害虫に関連して進められた。また、青森博物研究会や青森県生物学会などを結成し、博物学的知見からの調査研究も併せて継続して行ってきた。この中で「青森県博物目録」第２巻昆虫編（石村・佐藤，1941）が発行され、青森県内に分布する昆虫目録がまとめられた。その後、昆虫類全目に関する目録はまとめられていない。

青森県の昆虫に北限種が多い大きな要因となっているのが津軽海峡の存在である。この生物地理学上の分布境界線の重要性から、青森県には古くから多くの昆虫研究者が訪れ調査研究を行い、学会誌、大学紀要などにその結果を公表しているが、調査場所も限られ、対象も特定の昆虫群に偏っており、まだ県内の昆虫相全体の解明には至っていない。

絶滅危惧種の選考に当たっては、前回の「青森県の希少な野生生物、改訂版」（2010）及び環境省「レッドリスト2018」、また国県内外の学会誌、研究会誌、同好会誌、高校生物部誌などの報告、よせられた意見などを参考に委員の再三に渡る協議を経て最終候補種案を決定し、パブリック・コメントを経て、選定種が最終的に決定された。なお、本改訂版のハチ目などについては、長年ハチ類について調査研究され情報蓄積していた山田雅輝氏が他界したため代わって山内が担当することとし、前回の改訂版（2010）などを参考に執筆した。

本書の目、科、種の配列は主に平嶋・森本・多田内（1989）、環境庁（1995）に依り、日本昆虫学会編の日本昆虫目録（2013－2017）や図説、図鑑及び目録などを参考に配列した。特にチョウ目では駒井・吉安・那須・齋藤（2011）、ハチ目は寺山（2016）を参考にし、できるだけ新しい分類体系を取り上げ、委員の協議により決定した。

また、本改訂版では、できるだけ今後の利用及び活用の面から、県内分布などについてはその出典を明示したが、その他については「青森県の希少な野生生物」（2000）及び改訂版（2010）の引用文献も参考になる。

青森県の絶滅危惧種（昆虫類）の選定種は、「青森県の希少な野生生物」（2000）での昆虫類はＥＸランク（絶滅野生生物）３種、Ａランク（最重要希少野生生物）29種、Ｂランク（重要希少野生生物）15種、Ｃランク（希少野生生物）54種、Ｄランク（要調査野生生物）116種、ＬＰランク（地域限定希少野生生物）２種の合計219種が選定された。10年後の「青森県の希少な野生生物、改訂版」（2010）ではＥＸランク３種、Ａランク23種、Ｂランク24種、Ｃランク93種、Ｄランク121種、ＬＰランク１種で46種類増えて265種類となった。更に10年後の今回の「青森県の希少な野生生物、改訂版」(2020)ではＥＸランク７種、Ａランク19種、Ｂランク34種、Ｃランク152種、Ｄランク108種、ＬＰランク０種で、55種類増えて320種類となった。

今回の改訂では、前回と比較しＥＸランクにＡランクから新たにカトリヤンマ、メガネサナエ、ヤマキチョウ、オオウラギンヒョウモンの４種が絶滅と指定変更され、合計７種類が青森県から絶滅したと確認された。また、ＡランクにはＣランクからマルコガタノゲンゴロウが指定変更された。ＢランクにはＡランクからウマノオバチが、Ｃランクからはホソハンミョウ、サロベツナガケシゲンゴロウ、オオシマゲンゴロウ、ゲンゴロウモドキ、Ｄランクからはクロスジカメノコハムシがランク変更になった、また選定種削除がクロヤガ、ムツチャバネコメツキの２種類、新選定種としてＢランクにコノシメトンボなど６種類が、Ｃランクには35種類、Ｄランクには17種類の合計58

種類が新たに加わった。ランク変更及び新指定種については巻末に理由を付記して一覧表で示したが、全体的に池沼及び湿地などに生息する種類が多くを占めており、湖沼群の自然環境の衰退が懸念される。

初回選定から20年後には選定種が101種類も増加している。特にＥＸランク（絶滅野生生物）に指定された種類が３種から７種と４種類も増加したことが特記される。レッドデータブックに対する関心と環境保全に対する関係機関の啓蒙活動が行われており、情報の収集と蓄積が図られてきたことも選定種の増加の要因となっている。本選定種の他にも環境の変化の大きい里山・湿地などに生息する昆虫など、今後注目するべき種類については次回改訂に向けて、今後とも情報を収集し蓄積することが肝要である。 **（山内智）**

②本文

トンボ目　ヤンマ科　　**ＥＸ**

和名　カトリヤンマ　　**環境省：該当なし**
学名　*Gynacantha japonica* Bartenef

［形態的特徴］　全長：70～74㎜。中型の細身のヤンマである。頭部と胸部は茶褐色と緑色からなる。腹部は黒色で、背面に細い青色斑、腹面に黄褐色斑がある。雄では第２腹節が鮮やかな水色となる。雌雄ともに尾部付属器が長く、第10腹節の３倍強である。

［選定理由］　1960年半ばまでは各地で発見・記録されていた（岡田, 1958；奈良岡, 1977）。しかし、その後は発見されなくなり、1973年に三戸町で得られた１雄（蹴揚ら, 1985）が最後の確認となっている。それ以降現在まで47年間、発見されていない。

［分布と生態の概要］　日本全国・台湾・中国に分布する。丘陵地や低山地の樹林のある池沼、湿地や水田に生息し、成虫は８～10月に見られる。黄昏活動性が強く、日の出や日没前後に活発に活動し、日中は暗がりの林の中などで静止して過ごす。雌は単独で土や朽木に産卵する。幼虫越冬し、翌年羽化する年一化性である。

［特記事項］　東北地方では福島県以外、ほとんどの県で発見されなくなっている。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　サナエトンボ科　　**ＥＸ**

和名　メガネサナエ　　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Stylurus oculatus* (Asahina)

［形態的特徴］　全長：59～64㎜。黒色の地に黄斑を有する中型のトンボ。腹部第７～９節が拡がっている。ミヤマサナエと酷似するが、腹部第８節に大きな３個の黄斑があること、後肢腿節が約１㎝と短いことなどで区別できる。

［選定理由］　1962年までは県内各地の河川で見られたが（奈良岡, 1977）、1963年以降河川改修などで少なくなり、その後発見されなくなった。1962年８月、青森市浪岡の十川で採集された５雄（奈良岡, 1977）が確実な最後の記録となる。その後58年間、確認されていない。

［分布と生態の概要］　日本特産種で、東北地方から近畿地方に分布する。平地の湖、河川の下流域に生息し、成虫は７～９月に見られる。雄は沼岸や川岸をパトロール飛翔する。雌は岸や砂地に静止して卵塊を出し、打水産卵する。幼虫は腹部第９節が著しく長く、川底の泥に潜って生活する。

［特記事項］　青森県教育委員会（1972）は六ヶ所村市柳沼で記録し、原子（1992）は十和田市で目撃しているが、いずれも具体的なデータ・写真・標本などの確証がない。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　エゾトンボ科　　**ＥＸ**

和名　トラフトンボ　　**環境省：該当なし**
学名　*Epitheca marginata* (Selys)

［形態的特徴］　全長：50～56㎜。黒褐色の地に黄色斑を有する。オオトラフトンボに似るが、雄の尾部付属器の形状の違い、腹部側面の黄色斑は各節の約1/2と短いこと、および、通常、雌の翅の前縁に黒褐色条があることなどで区別できる。

［選定理由］　1937年６月13日に青森市で２頭の雄が採集されている（Ishimura, 1938）。しかし、それ以降、現在まで83年間、県内では発見されず、生息が確認されていない。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、海外では朝鮮・中国に分布するが、東北地方では少ない。平地や丘陵地の池・沼に生息し、成虫は５～６月に出現する。水上で飛びながら５分から20分ほど交尾した後、雌は岸辺に止まって卵塊を放出し、飛び立って水面の浮遊植物に付着させる。卵塊は水の中でゼラチンの細長い卵紐となる。卵は20～30日で幼虫が孵化する。幼虫は秋迄に終齢となり、そのまま越冬して翌春羽化するという年１化性である。

［特記事項］　1930年代の県内の生息状況の記録が無く、分布状況は不明である。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科　　**ＥＸ**

和名　ムツアカネ　　**環境省：該当なし**
学名　*Sympetrum danae* (Sulzer)

［形態的特徴］　全長：30～33㎜。未熟虫は黄色の地に黒色斑を有するが、雄は成熟すると全体が黒くなる。雌も黒っぽくなり、翅の基部に橙色斑があり、産卵弁が下方に突き出ている。
［選定理由］　Oguma（1922）と奥村（1942）は「青森」を分布地とした。しかし、具体的なデータは記録されなかった。それ以降、少なくとも80年間は発見されず、生息が確認されていない。
［分布と生態の概要］　北方系のトンボで、岐阜県以北の本州高地の数ヵ所と北海道各地、国外ではヨーロッパからシベリア、カムチャッカを経て北アメリカに分布する。日当たりのよい湿原に生息し、成虫は７月～10月にかけて見られる。卵で冬を越し、翌年の５・６月に孵化して７月から９月にかけて羽化する年１化性である。雌雄連結で草上を飛びながら打泥・打水産卵をする。
［特記事項］　八幡平には現在も生息地があるので（尾園ら, 2013）、過去には八甲田山系の湿原に分布していた可能性もある。奈良岡（2004）は深浦町で１頭の雄を確認し写真撮影したが、中国大陸からの飛来個体の可能性が高く、青森県で発生したとは考えられていない。　**（奈良岡弘治）**

チョウ目　シロチョウ科　　**ＥＸ**

和名　ヤマキチョウ　　**環境省：絶滅危惧ＩＢ類**
学名　*Gonepteryx rhamni maxima* Butler

［形態的特徴］　雄の翅表は鮮やかな濃黄色で、雌は淡い黄白色。大型のシロチョウの仲間。
［選定理由］　本県が北限の希少種で1960年代まで県東南部で散発的に記録されていたが、以降の調査で確認されていない。1968年の記録（田子町、村上・佐藤, 1968）を最後に絶滅と判断した。
［分布と生態の概要］　本州の東北地方（本県・岩手県）と中部地方（長野・山梨県ほか）に限定された特異な分布域を示す。県内では東南部の特産種で、八戸市・十和田市・五戸町・階上町・田子町など、すべて合わせても10数頭の記録のみ。成虫は７月下旬から羽化し成虫で越冬。県内での生態的な知見は乏しいが、県外では、幼虫はクロウメモドキ科のクロツバラを食べる。
［特記事項］　記録がある地域の調査でクロツバラの自生は確認できなかった。この植物の生育環境は林縁から草原で、1960年代までは薪炭林としての雑木林や牛馬飼料の採草地としての草原に食餌植物を含む環境が保持されていたと考えられる。その後、林縁は伐採や道路の拡幅工事により、草原は灌木の侵入でブッシュ化し生息環境が消失した可能性がある。　**（室谷洋司）**

チョウ目　シジミチョウ科　　**ＥＸ**

和名　オオルリシジミ　　**環境省：絶滅危惧ＩＡ類**
学名　*Shijimiaeoides divinus barine* (Leech)

［形態的特徴］　大型のシジミチョウの仲間で、瑠璃色の羽を持つことからこの和名がつけられた。
［選定理由］　生息環境の悪化とともに激減し、1978年６月の１雌（岩木山麓）を最後に絶滅。
［分布と生態の概要］　本州（東北・中部地方）と九州の３地域に限られた特異な分布を示し、東北地方ではすべて絶滅（室谷, 2007）。県内では津軽地方に限られ、生息が確認されていたのは青森市三内・豆坂高原（現青森空港付近）・弘前市や五所川原市・鶴田町にまたがる岩木山麓など合わせて16か所。年１回の発生で、幼虫はマメ科のクララを食べ、蛹で越冬する。
［特記事項］　生息環境はアズマギク・オキナグサなど陽地性植物が多い草原で、その中にクララが繁茂する地域に限られていた。このような草原は労役用牛馬の飼料採草地で、1960年代までは良好な環境が各所に見られた。生息地は平坦な場所が多かったことから、開拓や開発の対象になりやすく、宅地・畑・果樹園・造林地・空港・ゴルフ場・公園・産廃処分地・墓地などに変貌し、1970年代までに生息地は順次消滅していった（室谷, 1989）。　**（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科　　**ＥＸ**

和名　オオウラギンヒョウモン　　**環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**

学名　*Fabriciana nerippe* (C. et R.Felder)

［形態的特徴］　前翅長は雄35㎜、雌40㎜前後で、雌はヒョウモンチョウ類で最も大型。

［選定理由］　本県が北限の生息地。県内各地で散在的に記録され個体数は少なくなかった。1970年代から数を減じ、県東南部地方を中心に集中的に調査したが確認できなかった（室谷, 1995）。1985年の田子町の記録（一戸, 1991）が最後。全国的にも多くが絶滅で、県内でも絶滅と判断した。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州に分布。東北地方では分布が広いが局地的。本県では、時としておびただしい個体数が発生することがあった（室谷・阿部, 1962）。成虫は７月下旬から出現し、年１回の発生。生息環境は平地から低山地までの日当たりの良い草原で、幼虫の食草であるスミレが多いこと、アザミ類など豊富な成虫の吸蜜源植物が必要とされる。

［特記事項］　本種が発生する草原は牛馬の飼料用採草地としてきたシバ草原が主なもので、農業近代化で牛馬を必要としなくなったことから、草原はススキや灌木の生い茂る密な植生へと変貌した。したがって、食草や吸蜜源の多い生息環境が消失し絶滅につながった。　**（室谷洋司）**

トンボ目　アオイトトンボ科 **A**

和名　コバネアオイトトンボ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Lestes japonicas* Selys

［形態的特徴］　全長：33～41㎜。体の背面は光沢のある金属緑色、腹面は淡黄色を呈する。近似種と紛らわしいが、成熟しても胸部に白粉を帯びないこと、頭部の後ろが黄白色であること、雄の尾部下付属器が短いこと、および、未熟雌の胸が橙褐色であることなどで区別できる。

［選定理由］　1960年代初めまでは県内各地で見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域で絶滅した。現在は青森市・五所川原市・深浦町・野辺地町の４か所に生息しているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数は極めて少なく、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国に分布する。平地や丘陵地の池・沼・湿地に生息し、成虫は７月から10月まで見られる。活動時間は午前と午後に分かれ、真昼頃は抑制される（奈良岡, 2007）。産卵は雌雄連結で比較的柔らかな植物の組織内に行う。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地の破壊と乾燥を防ぐとともに、水質汚染の防止。

［特記事項］　六ヶ所村の生息地は、湿地と沼が干上がり2010年に絶滅した。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　カワトンボ科 **A**

和名　アオハダトンボ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Calopteryx japonica* Selys

［形態的特徴］　全長：50～55㎜。雄は全体が金属緑色で、腹部第９・10節腹面は白い。雄の翅は青藍色に輝き、縁紋が無い。雌の翅は淡褐色で乳白色の偽縁紋がある。

［選定理由］　1960年代までは県内数か所で見られたが（奈良岡, 1977）、現在の生息地は八戸市・三戸町に限定される（奈良岡ら, 2018）。個体数も多くなく、河川改修などで絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本州と九州、国外では朝鮮・中国東北部・ロシアなどに分布する。平地や丘陵地の水生植物の豊富な河川の中流域に生息する。成虫は６～９月に出現する。雌は単独で水中の植物組織内に産卵する。潜水産卵も行われる。

［生存に対する脅威と保存対策］　河川改修と水質汚染が最も脅威であり、改修に当たっては十分注意する必要がある。

［特記事項］　ハグロトンボと似ており、同定には注意を要する。ハグロトンボでは翅が黒く、雌雄ともに縁紋が無いことと、雄の腹部先端腹面が白くないことで区別できる。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　イトトンボ科 **A**

和名　カラカネイトトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Nehalennia speciosa* (Charpentier)

［形態的特徴］　全長：23.5～30㎜。華奢で、若い成虫は胸部が金属緑色、腹部は赤銅色の美麗種。成熟するにつれて全体が茶褐色となる。

［選定理由］　1970年代までは津軽地方と下北半島の湿地に多かったが（奈良岡, 1977）、1980年代以降ほとんどの生息地で絶滅した。現在は青森市・五所川原市・三沢市・深浦町・野辺地町・六ヶ所村・および東通村の７か所で見られるに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数は著しく少なく、乾燥化などにより湿地が消滅しつつあり、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　北方系の種で関東北部から東北地方、北海道、国外では朝鮮・ロシア・ヨーロッパに分布する。スゲなど草丈の低い湿地に生息し、成虫は６～８月に見られる。交尾時間は、開始時刻に関係し、早朝の５時間から午後の30分位まで次第に短くなる。雌が単独で産卵する。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地である湿地の破壊と乾燥を防止することが最も優先される。また、なるべく生息地の撹乱をしないことが重要である。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　イトトンボ科 **A**

和名　オオセスジイトトンボ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Paracercion plagiosum* (Needham)

［形態的特徴］　全長：41～50㎜。大型のイトトンボで、黄緑色の地に黒斑を有する。胸部の肩の黒条に黄緑色の線が入り、セスジと言われる。雄は成熟すると全体が青色に変わる。

［選定理由］　つがる市屏風山地域と五所川原市の数か所にのみ生息する（奈良岡ら, 2018）。2003年頃までは多数見られたが、その後、生息する沼、および個体数が著しく減少した。現在は屏風山の冷水沼で割合多く見られるに過ぎない。今後、減少する恐れがあり、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　東北地方・新潟県・関東地方の数か所、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。ヨシなど抽水植物の多い池・沼に見られ、成虫は６～８月に出現する。連結ペアは朝５時過ぎから生じるが、交尾は気温が上がる７時頃まで見られない。産卵は雌雄連結で沼内の水面の植物に行い、９時過ぎから15時頃に見られる。

［特記事項］　外来種のウシガエルやオオクチバスなどの食害が考えられる。また、沼の環境破壊や水質汚染を防ぐことが重要である。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　ヤンマ科 **A**

和名　ヤブヤンマ **環境省：該当なし**
学名　*Polycanthagyna melanictera* (Selys)

［形態的特徴］　全長：80～87㎜。大型のヤンマで未熟虫は黄色の地に黒色斑がある。成熟雄では複眼がコバルトブルーに輝き、黄色斑が淡青色に変化する。雄の第10腹節背面に突起がある。雌では腹部先端下面に４本の針状突起がある。

［選定理由］　1950年代までは各地で見られたようであるが（岡田, 1952；岡田ら, 1953）、その後ほとんど発見されなくなった。最近では、2013年と2014年に弘前市で各１雌、2016年に六ヶ所村で１雌、青森市で１雄、2017年につがる市で１雌が確認されたに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州および南西諸島に広く産し、国外では朝鮮・台湾・中国に分布する。成虫は７～９月に出現し、平地～丘陵地の樹林に囲まれた池沼に見られる。黄昏活動性が強く、夕方や曇って照度が下がった時に飛翔することが多い。暗がりを求めて家屋内に浸入することがある。産卵は雌が単独で、あまり日の当たらない、水際の土やコケに行う。

［特記事項］　黄昏飛翔性のために、発見されることが少ないことも考えられる。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　サナエトンボ科 **A**

和名　ヒメサナエ **環境省：該当なし**
学名　*Sinogomphus flavolimbatus* (Matsumura in Oguma)

［形態的特徴］　全長：40～44.5㎜。小型のトンボで、胸部前面には「ハ」字型と「T」字型の黄条があり、側面の黒条は１本。腹部第３～７節に黄緑色の環状斑がある。雄の尾部上付属器は白い。

［選定理由］　外ヶ浜町（鈴樹ら, 1989）、深浦町（奈良岡, 1998）、および平川市碇ヶ関（高橋ら, 2005）で確認されているに過ぎない。いずれの生息地でも個体数が少なく、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　日本特産種で、本州・四国・九州に分布している。産地が局所的で、東北地方では少ない。山間の渓流や河川の上・中流域に生息する。成虫は６月下旬から７月の始めに羽化し、９月まで見られる夏型のサナエトンボである。成熟成虫は浅瀬の日当たりの石に止まり、雌の飛来を待つ。雌は水際の植物や石に止まるか、浅瀬をホバリングして卵を放出し、打水産卵する。幼虫は砂や石の下に潜っており、掴むと硬直して擬死を装う。

［特記事項］　県内に分布している小型のサナエトンボ類は色彩・形態が酷似しているので、同定には注意を要する。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　サナエトンボ科 **A**

和名　ホンサナエ **環境省：該当なし**
学名　*Shaogomphus postocularis* (Selys)

［形態的特徴］　全長：46～52㎜。胴体がずんぐりした中型のサナエトンボ。黒色の地に黄緑色斑紋がある。胸部前面に太い一対の「Z」字状紋を有する。腹部第７～９節はやや拡がる。雄の尾部上付属器は下方に湾曲する。下付属器の先端上方に１個の小さな棘がある。

［選定理由］　1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域で絶滅し、現在はむつ市・深浦町（鈴樹ら, 2006）、八戸市、おいらせ町、東通村に生息するだけである（奈良岡ら, 2018）。いずれの地域でも個体数が少なく、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　日本特産種で、北海道・本州・四国・九州に分布する。平地や丘陵地の小川や水路に生息する。成虫は５～６月に出現する。雌は交尾後に水辺の植物に止まって卵塊を放出し、それを打水産卵する。

［生存に対する脅威と保存対策］　小川や水路の乾燥・破壊が進むといなくなる。特に水田の休耕による用水路の廃棄の影響が大きい。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　エゾトンボ科 **A**

和名　ハネビロエゾトンボ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Somatochlora clavata* Oguma

［形態的特徴］　全長：51～64㎜。金属緑色の中型のトンボ。未熟成虫では胸部側面に２本の黄色条があるが、成熟すると消滅する。腹部第４節以降は黒く無斑である。翅の基部周辺が淡褐色となる。雄の尾部上付属器の下面中央部が下に膨らんでいる。雌の腹部第２、３節が胸部と同じ位か、より大きい。産卵弁は長く、三角状になめ下方に突出し、先端が前方に反る。

［選定理由］　1960年頃までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、最近はほとんど発見されず、2010年に１雌、2012年に１雄１雌が東通村で得られているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、朝鮮に分布する。丘陵地や低山地の湿地・湿原に生息し、成虫は７～９月に発見されている。未熟成虫は林間で生活するが、成熟雄は流水域をパトロールする。雌は単独で薄暗い小流のよどみに打水産卵する。幼虫は湿地の小流や湧水に生息する。

［生存に対する脅威と保存対策］　湿地や湿原の破壊と水質汚染を防止することが肝要である。

［特記事項］　同属のエゾトンボとの区別が難しいので注意を要する。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　エゾトンボ科 **A**

和名　モリトンボ　（キバネモリトンボ） **環境省：該当なし**
学名　*Somatochlora graeseri* Selys

［形態的特徴］　全長：51～57㎜。金属緑色の中型のトンボ。通常、翅の基部に黄褐色斑があるが稀に消失する個体もある。雌の産卵弁は四角で短い。

［選定理由］　県南の三八地方（岡田, 1966）と十和田市、六ヶ所村、東通村の数か所で確認されている（奈良岡ら, 2018）。いずれの生息地でも個体数が減少していて、最近は発見されないことが多く、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　以前は岩手県や新潟県でも確認されたが、現在は北海道と青森県、国外では朝鮮・ロシアに生息する。平地や丘陵地の池・沼、湿地に見られ、成虫は６～９月に出現する。雌は薄暗い沼岸の浅瀬などに打水産卵をする

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地の池・沼・湿地の破壊と汚染を防ぐことが肝要である。

［特記事項］　同属のタカネトンボでも翅の基部が黄褐色のものがある他、近似種との区別が難しく、注意を要する。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科　**A**

和名　ハッチョウトンボ　**環境省：該当なし**

学名　*Nannophya pygmaea* Rambur

［形態的特徴］　全長：17～21.5㎜。日本産トンボ類中、最小のトンボで、世界でも最小の部類に属する。未熟成虫は橙黄色であるが、成熟するとオスは全体が赤化し、雌ではやや黒っぽくなる。

［選定理由］　1970年頃までは県内各地に見られたが（奈良岡, 1977）、最近は生息地する湿原の埋め立て・乾燥などでほとんど絶滅した。現在、青森市と野辺地町などの数か所で生息が確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。今後も乾燥や開発などにより絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、国外では朝鮮・東南アジア・オセアニアなど、広範囲に分布する。平地から高地のモーセンゴケ・ワタスゲ・トキソウなどの繁茂する浅い湿地に生息し、成虫は５月から８月まで見られる。交尾時間は短く10秒前後で、雌は直ちに単独で打水産卵をする。雄がその周りで警護飛翔することがある。湿地の周辺で生活するが、稀に遠くまで移動し、休耕田に発生することか知られている。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地である湿地の乾燥と埋め立ての防止。　**（奈良岡弘治）**

カメムシ目　コオイムシ科　**A**

和名　タガメ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Lethocerus deyrolli* (Vuillefroy)

［形態的特徴］　国内最大の水生昆虫で体長は約50～60㎜。体は褐色で、前脚が太く捕獲脚となり、後脚は遊泳脚となる。

［選定理由］　国内では北海道・本州・四国・九州などに分布するが、局地的で個体数も少ない希少種である（環境省, 2006, 2015）。青森県内でも1978年平川市石郷、新郷村西越（阿部, 1980）以降の採集例はなく、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種の青森県内の産地はきわめて局限され、上記以外では1940年むつ市田名部（標本確認）、つがる市森田、黒石市（石村・佐藤, 1941）、1947年黒石市牡丹平（成田, 1989a）、1953年八戸市（福田, 1984）、1957年岩木川（西田, 1959）などの記録がある。本種は、水量が豊富で、水草の豊富な止水・静水域に生息する。走光性が強く、雄は卵塊を保護する行動が見られる。

［生存に対する脅威と保存対策］　青森県内では従来津軽地方を中心に、水田地帯に普通に見られていたが（阿部, 1980）、水田地帯での農薬散布や湖沼の水質汚濁などにより激減したと思われる。また、走光性の強い本種は外灯増設も脅威要因となっている（環境省, 2015）。

［特記事項］　灯火にも飛来することから（橋爪, 1994）、水域周辺部での灯火飛来個体にも注意が必要である。　**（山内智）**

コウチョウ目　ゲンゴロウ科 **A**

和名　マルコガタノゲンゴロウ **環境省：絶滅危惧ⅠA類**
学名　*Cybister lewisianus* Sharp

［形態的特徴］　体長21～26㎜。体型は卵形で、背面は緑色を帯びた黒色で、腹面は黄褐色で、全体に強い光沢がある。

［選定理由］　本種は、全国的にその分布は局地的で個体数は少なく、近年、池沼の開発、外来種の侵入、採集圧などから生息環境が悪化し、その生息地が激減している（環境省, 2006, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では、屏風山湖沼群での生息が確認されていたが、近年の採集例は全くなく、絶滅したと考えられる（永幡, 2016）。

［分布と生態の概要］　国内での分布は、現在は東北・北陸・九州の一部で数か所見られるだけである（環境省, 2015）。青森県内では、以前に屏風山湖沼群のつがる市袴形沼・平滝沼で生息が確認されていた（永幡, 2016）。本地域以外からの生息記録は報告されていない。水質の良好な水生植物の良く繁茂した池沼に生息する。肉食性で成虫越冬し、その寿命は２～３年と言われている（環境省, 2015）。

［生存に対する脅威と保存対策］　池沼への外来魚の放流による水草減少や環境悪化・開発による池沼の減少、過度な採集圧などが脅威要因となっている。湖沼の保全対策と採集自粛が必要である。

［特記事項］　屏風山地区の湖沼群及び湿地帯には、県内外の採集者が多く。池沼や湿地に無造作に入り込み、環境悪化の要因になっている。　**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科 **A**

和名　ナミルリモンハナバチ **環境省：情報不足**
学名　*Thyreus decorus* (Smith)

［形態的特徴］　体長は13～14㎜とミツバチ科の中では大形である。体色は黒色で、体に青緑色の毛の斑紋が見られる（平嶋・森本, 2008）。

［選定理由］　山田（2010, p.240）によると、県内では約80年前の八戸市沢里（石村・佐藤, 1941）と55年前の平川市唐竹（山田, 1999）などの記録があるが追加記録は見られない。本種の寄主であるコシブトハナバチ類も減少している。

［分布と生態の概要］　国内では本州・四国・九州・種子島・屋久島などに分布するが、国内では個体数減少し、生息地も限られる（環境省, 2015）。県内でも上記２地域以外の記録は見られない。山田（2010, p.240）によると平地から低地にかけて生息し、成虫は８～10月に出現しアザミなどの花から吸蜜する。Maeta *et al.*（1996）によるとシロスジコシブトハナバチとスジボソコシブトハナバチに労働寄生するが、本県では山田（2010, p.240）によると労働寄生は前種の１例の記録しかなく、後種も寄生事例は極めて少ない。

［生存に対する脅威と保存対策］　開発等による里山の環境悪化と衰退、それに伴う寄主の減少も脅威となる。

［特記事項］　別名ルリモンハナバチ　**（山内智）**

チョウ目　セセリチョウ科 **A**

和名　チャマダラセセリ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Pyrgus maculatus* (Bremer et Grey)

［形態的特徴］　黒褐色の地色に白点をちりばめた小型のセセリチョウで、他種との区別は容易。
［選定理由］　本県をはじめ県外生息地でも激減あるいは絶滅している。筆者らの調査では1990年代までは生息を確認できたが、個体数は極めて少なかった。
［分布と生態の概要］　北海道東部・本州中部以北・四国に分布。本県では津軽・下北両半島を除く県内各地で確認され（室谷・阿部, 1962）、生息環境は山地草原や山間の草地に限られる。日向を好む性質があり、幼虫はバラ科のキジムシロ・キンミズヒキなどを食べる。
［特記事項］　個体数は多くないが、1960年代前半までは毎年安定した発生をみせていた。生息地の多くは牛馬飼料の採草地としての半人為的草原で、食草が豊富で良好な環境が維持されていた。1960年代後半から農業の機械化で牛馬を必要としなくなり、採草が行われなくなった。草原は放置あるいは開拓・開発によって、畑・果樹園・造林地に変貌した。これを免れた小規模の草原もススキや灌木が繁茂し、もはや本種の生息環境として適さないものとなった。　**（室谷洋司）**

チョウ目　セセリチョウ科 **A**

和名　ホシチャバネセセリ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Aeromachus inachus* Ménétriès

［形態的特徴］　前翅長は11㎜前後で、本県産チョウ類の最小型種。
［選定理由］　本県が北限。1980年代まで確認されていたが、その後、記録が激減（室谷, 未発表）。
［分布と生態の概要］　本州と対馬のみに分布するが、各地域とも生息地は局所的。県内では太平洋側各地に偏った分布を示し、特に県東南部に生息地が多い。例外的に津軽地方の大鰐町と深浦町十二湖に各１頭の記録がある（山内・外崎, 1957）。全体的に個体数は多いものではなかったが、多産地も報告されている（室谷, 1993）。草原性であるが林縁・林間の草地や農道周辺にも見られる。幼虫の食餌植物はオオアブラススキが確認されている。
［特記事項］　本種のかつての生息地周辺で調査を行ったが（1997～1999年）、食餌植物のオオアブラススキが繁茂する草原は著しく減少。北限の記録地であるむつ市品ノ木付近は宅地や牧草地の造成が進み、個体数の多かった田子地方は耕地整理で生息環境が消失。新郷村各所では道路の拡幅工事・駐車場造成などで草地はアスファルト化していた（三浦, 2010）。　**（室谷洋司）**

チョウ目　シジミチョウ科 **A**

和名　クロシジミ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Niphanda fusca* (Bremer et Grey)

［形態的特徴］　雄の表面は光沢のある青紫色、雌では一様に褐色のシジミチョウの仲間。
［選定理由］　本県が北限の稀少種。1960年代前半に県東南部で散在的に記録されていたが、1967年以降、目撃・採集の報告がない（三浦, 2010）。他県でも多くの生息地で絶滅あるいは激減傾向にある。
［分布と生態の概要］　本州・四国・九州と国内の分布は広いが、生息地は局所的。県内では1963年の田子町が初記録（弘前高校生物クラブ, 1965）。その後、八戸市・三戸町・新郷村などで生息地が発見された。７月下旬～８月上旬の年１回の発生。他県の観察例では若齢幼虫はアブラムシ・キジラミ類の分泌物を吸汁し、その後、クロオオアリの巣中でアリから口移しで餌をもらって育つ。
［特記事項］　生息環境は、コナラ・クリなどの混じる雑木林の林縁やススキ・灌木が混じる草原。生息には他の昆虫との関わりなど、本種の特殊な生活様式をみたす環境が必要とされるが、これらは、雑木林の荒廃・草地のブッシュ化・道路拡張工事・開拓が進み、生息環境の悪化が激減の要因と考えられる。このような特殊な環境の調査が必須である。　**（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科 **A**

和名　ツマジロウラジャノメ **環境省：該当なし**

学名　*Lasiommata deidamia interrupta* (Fruhstorfer)

［形態的特徴］　眼状紋が前翅に１個、後翅に２個あり、前翅にはさらに白色紋が２個連なる。

［選定理由］　本県が本州亜種の北限。生息環境が凝灰岩などで構成された湿潤な断崖で、林道改修などで生息地が破壊され、現在は一部に確認されているが個体数は著しく減少している。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国に分布し、本州では東北地方から中部地方に分布。県内の生息地は局所的。そのうち、青森市周辺では1950年代前半まで、三戸・八戸地方では1960年代後半まで生息が確認され、以降の記録は無いあるいは激減した。岩木山・白神山地周辺では数か所の産地が確認されているが近年は急減。成虫は６月中・下旬と８月中～９月上旬の年２回の発生で、幼虫の食餌植物はヒメノガリヤス・ヌカボなどのイネ科植物。

［生存に対する脅威と保存対策］　発生地の条件は幼虫の食餌植物や成虫の吸蜜源植物の存在、陽光が一定時間当たり湿潤などの要素が必要。近年は、露岩地のコンクリート吹付・崩落防止金網・種子吹付工法が取られ生息地の多くが破壊されたが、残された場所の保全が必要である。

（室谷洋司）

チョウ目　ヤガ科 **A**

和名　ミツモンケンモン **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**

学名　*Cymatophoropsis trimaculata* (Bremer)

［形態的特徴］　開張30㎜内外。前翅は黒褐色で円形の３対の黄白色の丸紋を持つ。

［選定理由］　国内での分布は青森県の他に岩手県、栃木県、群馬県、長野県などから知られているが（枝ら, 2011）、極めて限られ希種である（環境省, 2006, 2015；岩手県, 2014）。青森県では1991年五戸町大字倉石石沢字駒袋（岸田, 1995）などの記録が報告されている。最近県内で再確認されている（環境省, 2015）。

［分布と生態の概要］　国内での産地は本州中北部から記録され、青森県内では上記の記録以外なく、詳しい分布は不明である。その産地のほとんどは果樹園や二次林等で本種は里山に生息すると思われる（環境省, 2006）。最近、本種の生活史が解明（高橋, 1999）された。食草はクロツバラ、クロウメモドキである（枝ら, 2011）。

［生存に対する脅威と保存対策］　青森県で確認された生息地は五戸町のみであるが、産地での食草クロツバラの衰退が本種の脅威となる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **A**

和名　ノシメコヤガ **環境省：絶滅危惧ⅠＡ類**

学名　*Sinocharis korbae* Püngeler

［形態的特徴］　開張40㎜内外。翅は白色で、前翅の翅底部と外縁部、後翅翅頂に褐色を帯びる。

［選定理由］　本種は、国内では青森県（板柳町・黒石市）と岩手県（野田村・盛岡市）などの数か所からの記録しかなく（井上ら, 1982；枝, 2011；岩手県, 2014）、確認された産地、個体数とも少なく、絶滅が危惧される（環境省, 2006,　2015）。

［分布と生態の概要］　国内での分布は本州北部の青森県と岩手県の２県である。青森県内では、1930年Aomori（Matsumura, 1931）、青森県（渡邊, 1934）、1952年黒石市砂森（斎藤・北畠, 1966）、板柳町（斎藤・北畠, 1966）、1975年黒石市境松（佐藤・葛西, 1978）、黒石市、板柳町（井上ら, 1982）などの記録がある。国内での食草などの詳しい生態は不明である。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の明細な生態は不明であるが、確認された産地などから考え、深山ではなく里や里山で確認されている。このことから開発などによる環境変化が衰退要因と思われる。本種の再発見と生態解明が保護対策を立てる上からも急務である。 **（山内智）**

トンボ目　イトトンボ科 **B**

和名　キイトトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Ceriagrion melanurum* Selys

［形態的特徴］　全長：36～44.5㎜。頭部と胸部は淡緑色で、腹部が黄色いトンボである。雌では腹部が淡緑色の個体もある。雄の腹部第７～10節の背面は黒い。

［選定理由］　1960年代迄は各地の水田・池・沼等に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少した。県内広く局地的に見られるが、個体数の多い所は少ない。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国に分布する。平地・丘陵地の池沼・湿地・水田に生息し、成虫は６月から９月まで見られる。雄は10㎝程飛んでは瞬間停止し、方向を変えて、また同じ飛翔と停止を繰り返す独特の飛び方をする。雌雄連結で水面や水中の植物組織内に産卵する。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地である池沼、湿地の破壊と乾燥を防止する必要がある。

［特記事項］　水田での農薬の使用、機械化による耕作法の変化などが本種の生存に強く影響し、減少したと思われる。

（奈良岡弘治）

トンボ目　サナエトンボ科 **B**

和名　ミヤマサナエ **環境省：該当なし**
学名　*Anisogomphus maacki* (Selys)

［形態的特徴］　全長：52～55㎜。黒地に黄色斑のある中型のトンボ。胸部前面に１対の「L」字紋がある。雄の腹部第７～９節が広まり、８節に１対の黄色斑がある。後肢が長く、前・中肢の２～３倍である。雄の尾部付属器は短く、上付属器の先端に針状突起を有する。

［選定理由］　1960年代までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少した。現在、八戸市、弘前市の数か所で確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシア・ネパールに分布する。河川の流れの緩やかな、砂利・砂・泥からなる中・下流に生息し、成虫は７～９月に見られる。羽化後、山地などで未熟期を過ごし、成熟してから河川に帰る。雌は川岸に止まって卵を放出し、流れに打水して産卵する。一世代は２～３年を要すると考えられる。

［生存に対する脅威と保存対策］　河川の改修による環境変化と水質汚染が脅威であり、それを防ぐ必要がある。

（奈良岡弘治）

トンボ目　ヤンマ科 **B**

和名　コシボソヤンマ **環境省：該当なし**
学名　*Boyeria maclachlani* (Selys)

［形態的特徴］　全長：78～83㎜。茶褐色の地に黄色斑を有する大型のヤンマ。胸部前面に黄色の「ハ」字状紋があるが、雌では消失することがある。腹部第３節は著しくくびれる。雄の翅端に小さな淡褐色斑がある。

［選定理由］　1960年代までは各地に見られたが（奈良岡, 1977）、現在は青森市・八戸市・外ヶ浜町・東通村で確認されているに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。どの地域でも個体数が減っている。

［分布と生態の概要］　全国各地、朝鮮に分布する。平地や低山地の木陰の多い、水のきれいな川に生息する。成虫は７～９月に見られる。黄昏飛翔性があるが、日中でも木陰の水面上をパトロールすることがある。雌は単独で水際の土や朽木に産卵する。幼虫は挺水植物の中で生活し、掴むと足を縮めて擬死を装う。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息河川の環境破壊と水質汚染が最も脅威であり、それを防止することが必要である。

（奈良岡弘治）

トンボ目　トンボ科 **B**

和名　コノシメトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Sympetrum baccha* Selys

［形態的特徴］　全長：36～43㎜。翅端に褐色斑のあるアカトンボである。未熟時は黄褐色であるが、雄は成熟すると全身が赤化する。胸部側面の中央の黒条は途中で分岐して、後方の黒条と融合する。雌には１対の眉状斑があり、腹部背面が赤くなる個体もいる。

［選定理由］　2010年頃までは県内各地で普通に見られていた。しかし、その後ほとんどの地域で見られなくなった。2017年には青森市・つがる市・深浦町・東通村・大間町、および八甲田山でそれぞれ１、２頭が発見されたに過ぎない（奈良岡ら, 2018）。最近は生息地・個体数ともに著しく少なくなっている。

［分布と生態の概要］　北海道から九州まで広く見られ、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。平地から山地の開放的な池・沼・水田地帯に生息し、成虫は７月から10月まで見られる。産卵は雌雄連結して打水して行う。幼虫越冬し、年１化性である。

［生存に対する脅威と保存対策］　池・沼の破壊と水質汚染の防止が必要である。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **B**

和名　マイコアカネ **環境省：該当なし**
学名　*Sympetrum kunckeli* (Selys)

［形態的特徴］　全長：30～37㎜。顔面が淡青白色の小型なアカトンボ。胸部側面に４本の細かい黒条斑がある。未熟成虫は橙色であるが、成熟すると雄は腹部が赤化し、雌は茶褐色、または赤化する。雌の翅に淡褐色斑があるものと無いものがあり、斑紋の大きさは連続的に変異する。

［選定理由］　1960年代までは県内至る所に見られたが（奈良岡, 1977）、その後少なくなり、ほとんどの地域で絶滅した。現在は十和田市・上北郡・下北郡、および津軽地方の一部の地域に生息しているが（奈良岡ら, 2018）、個体数の少なくなっている所が多い。

［分布と生態の概要］　北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地・丘陵地の池・沼・湿地に生息し、成虫は７月中旬から10月末まで見られる。雌雄連結で打泥産卵をする。年１化性である。

［生存に対する脅威と保存対策］　池・沼・湿地の破壊と水質汚染、また農薬汚染を起こさないようにするすることが重要である。　**（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **B**

和名　オオキトンボ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Sympetrum uniforme* (Selys)

［形態的特徴］　全長：44～52㎜。全体が橙黄色で斑紋を有しない大型のアカトンボ。成熟してもやや赤みを帯びる程度で、老熟した個体はくすんだ赤褐色となる。翅は一様に淡褐色である。

［選定理由］　局地的に分布し、現在、五所川原市・つがる市・三沢市・六ヶ所村にのみ知られる（奈良岡ら, 2018）。2000年頃までは個体数も多かったが、その後、いずれの地域でも少なくなり、最近は数頭が見られるだけのところが多い。

［分布と生態の概要］　本州・四国・九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地や丘陵地の抽水植物が繁茂した池・沼に生息し、成虫は８月に羽化して11月まで見られる。生殖活動は午前中に盛んで、午後２時以降はあまり見られない。雌雄連結で打水、または打泥産卵をする。年１化性である。

［特記事項］　生息地の環境は、見た目には変化が感じられないが、個体数は年々減っている。より小型のキトンボと似ているが、大きさと翅の褐色斑の違いで区別できる。　**（奈良岡弘治）**

カマキリ目　カマキリ科 **B**

和名　ウスバカマキリ **環境省：情報不足**
学名　*Mantis religiosa* (Linneus)

［形態的特徴］　体長50～65㎜程度の中型のカマキリで、緑色型と褐色型があり、いずれの場合も色彩は白色味を帯びており、他種より明らかに淡色である。前脚基節の基部内面に長円形の黒色の斑紋があり、腿節内面には黒色の斑紋を欠くことから、他種と区別できる。

［選定理由］　かつての主要生息環境であったと考えられる平地・低山地の草地や旧採草地からはほとんど確認できない。多くが資材置場、クロマツ植林地、大豆畑などとして改変されている。

［分布と生態の概要］　戦前の古い記録としてShiraki（1911）の青森（県か市か不明）、石村・佐藤（1941）のつがる市・八戸市、黒石市教育委員会（2001）のつがる市がある。以後50年以上文献上の記録はなく、1970年頃、市田忠夫が青森市の牧草地で、工藤忠が五所川原市の公園の草地で生息を確認している。戦後の文献上の確認例としては市田（1986）、市田（2000）の五所川原市と奈良岡（2005, 2009）のつがる市しかない。五所川原市では、2012、2013年にも確認されており、日本直翅類学会（2016）に標本が掲載されている。　**（市田忠夫）**

カメムシ目　タイコウチ科 **B**

和名　タイコウチ **環境省：該当なし**
学名　*Laccotrephes japonensis* Scott

［形態的特徴］　タガメに次いで大形の黒褐色の水生カメムシで、体長30～38㎜、体幅約10㎜で扁平し、体長とほぼ等しい呼吸管を尾端に備える。太く発達した前脚で水中の小動物を捕らえる。

［選定理由］　大形種であるものの水深の浅い池を好み、かつては水苗代等に生息していたものと想像される。1970年代初頭に板柳町の水田地帯に多産していたことを工藤忠が確認しているが、1980年代には全くみられなくなった。

［分布と生態の概要］　石村・佐藤（1941）では各地に産するとされているが、戦前の標本が確認された例は、市田（1989）による八戸市、黒石市教育委員会（2001）によるつがる市のみである。近年ではつがる市の湖沼群での目撃例が聞かれていたものの、正式に記録されることはなく、2008年になって大高らにより平滝沼・大滝沼・大沢辺沼からの確認記録が公表された。山形県でも準絶滅危惧種として扱われている。　**（市田忠夫）**

カメムシ目　マキバサシガメ科 **B**

和名　タイワンナガマキバサシガメ **環境省：該当なし**
学名　*Nabis sauteri* (Poppius)

［形態的特徴］　体長７～10㎜のやや細長いカメムシで、前翅が腹部の３分の２までしか達しないが、稀に長翅型も出現する。近縁種よりやや濃色である。

［選定理由］　六ヶ所村は本州唯一の本種の既知産地であるのみならず、複数個体が確認された生息地としては国内唯一の地点である。

［分布と生態の概要］　湖沼水際に生息する捕食性のカメムシで、日本での既知産地は北海道別海町（Kerzhner, 1979）、青森県六ヶ所村（市田, 1998aなど）のみである。国外での既知産地も台湾台南市、中国天津市北塘、北朝鮮南浦市・サハリン島南東部・色丹島（以上Kerzhner, 1988）のみで、大河川河口域または海岸に面した低湿地である。六ヶ所村では湖沼沼縁の最も開放水面に近い場所に局所的に発達するマツバイ型の植物群落に集中してみられ、他の植物上で発見されることは稀である。捕食性の種で生息密度が高いものの、環境に対する許容度は極端に低いといえる。六ヶ所村の湖沼群は極めて貴重な塩性湿原であり、早急な調査と保全が必要である。　**（市田忠夫）**

アミメカゲロウ目　ツノトンボ科 **B**

和名　キバネツノトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Libellioides ramburi* (MacLachlan)

［形態的特徴］　体長20㎜内外、前翅は透明で基部が黄色、後翅は灰褐色に黄色の斑紋がある。触角は長く先端が丸くなる。

［選定理由］　国内の産地は局地的であり（平嶋ら, 2008）、大変採集例の少ない珍しい種類で全国的に減少している。青森県での確認報告は少ない。生息に適した草地が消滅してきており生息が脅かされている。

［分布と生態の概要］　国内では本州・九州に分布している。青森県内では、青森、八戸（石村・佐藤, 1941）、1935年に八戸市（福田, 1984）などの記録がある。本種は草地に生息していて、成虫は日中活発に飛翔し、飛翔中の昆虫を捕食する。活動的であることから採集が難しい。

［生存に対する脅威と保存対策］本種の生息地である草むらが、開墾等により消滅することが脅威となっているが、青森県での調査は不十分で、今後保護対策を取るためにも草地調査や詳しい本種の分布や生態などの解明が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **B**

和名　マークオサムシ本州亜種 **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carabus maacki aquatilis* Bates

［形態的特徴］　体長30㎜内外。体は全体が黒色で、上翅に各３条の強い隆条がある。

［選定理由］　本亜種は、本州北東部に生息する日本固有亜種で、分布は局地的で、どの生息地でも開発・河川整備などで自然環境が劣化し、生息地・個体数とも減少している（井村・水沢, 2013；環境省, 2015）。

［分布と生態の概要］　本種は、泥炭地や湿地帯・河川敷などに見られる。青森県内ではつがる市柴田・林・中派立（山谷, 1939）、八戸市（石村・佐藤, 1941）、むつ市田名部（鈴木ら, 1951）、東通村小田野沢（外崎, 1952）、黒石市青荷（中根, 1955）、つがる市稲垣（斎藤, 1956）、つがる市舘岡（阿部, 1970；下山, 1978）、五戸町中市（下山, 1978）、つがる市森田・田光沼、五所川原市嘉瀬（阿部, 1980）、東通村尻屋（黒沢, 1982）、五所川原市嘉瀬（富岡, 1982）、つがる市下繁田・富菟、中泊町竹田（下山ら, 1982）、八戸市類家、上北町小川原、つがる市車力・繁田、五所川原市十三湖（山谷・草刈, 1982）、六戸町（福田, 1984）、つがる市出野里（山谷, 1989）、つがる市下車力（樋口・丸屋, 1995）、岩木川下流（工藤, 1995）、三沢市仏沼（ダム水源地環境整備センター , 1997；山内・宮, 2008）などから記録されている。古くは県内各地の湿地環境に見られたが、近年は岩木川沿い湿地、三沢市仏沼以外の記録は無く、ほぼ絶滅に瀕している。また、下山（1978）によると、つがる市舘岡ではサルケ（泥炭）、草刈りで積んだ草の下などから成虫を採集している。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種は、低湿地帯に生息しているが、開発や河川整備などで生息環境が悪化し減少している。また、岩木川流域は好採集地として広く知られており、青森県内外の採集者による数十頭に及ぶ記録もあり、乱獲も衰退の大きな原因となっている。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **B**

和名　イワキメクラチビゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Oroblemus caecus* S.Uéno et A.Yoshida

［形態的特徴］　体長３㎜内外。複眼と後翅は退化し、体は細長く短い細毛で覆われている。

［選定理由］　本種は地中に生息する希少な種類である。小形で、複眼・後翅が退化しており、広範囲での移動が困難である。本種は、岩木山で採集された資料によって新種記載（Uéno, S. & A.Yoshida, 1966）されたもので、岩木山以外では知られていない、岩木山固有種である。岩木山は津軽国定公園に指定されているが、登山者の増加等で主な生息地である錫杖清水から山頂にかけての裸地化と登山道沿いが踏み固められ、環境が悪化している。絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は岩木山からのみ知られている。詳しい生態については不明である。

［生存に対する脅威と保存対策］　登山者の増加等による生息地の裸地化が進んでおり、県をはじめ関係機関で山頂付近の裸地化防止対策、登山道以外の立入禁止などを行っている。生息地の土壌環境の悪化が、生存の脅威となる。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。また、岩木山には採集者も頻繁に入っており採集は慎むべきである。　**（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **B**

和名　カワラハンミョウ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Chaetodera laetescripta* (Motschulsky)

［形態的特徴］　体長15㎜内外。上翅は銅緑色で白色の斑紋が外縁に沿って発達している。

［選定理由］　本種は、海岸や河原の砂地に分布するが、沿岸部の開発、車両の砂浜への乗り入れなどにより生息場所が踏み荒らされ、生息環境が悪化し、激減している（大野, 2000；環境省, 2015）。2011年の東北地方太平洋沖地震の津波によって生息地が大きな被害を受け、生息に大きな影響をあたえている。

［分布と生態の概要］　国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、八戸市（福田・奈良, 1952）、八戸市湊（福田, 1969）、三沢市三川目・淋代・六川目・砂森・四川目、おいらせ町一川目・二川目（成田, 1988）、三沢市塩釜（成田, 1989b）、つがる市高山稲荷海岸（阿部, 2011）など砂浜のある海岸に記録が集中している。本種が生息する環境要因として、幼虫は草むらの空地に巣穴を作って生活していることから、砂礫の大きさ、砂地の状態、植物の定着が重要である（大野, 2000；環境省, 2015）。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生息地である砂浜に人や車両が入り込んで、砂地が踏み荒らされることで、幼虫が棲む場所を失うことになる。特に車両の立ち入りの自粛が求められる。太平洋側では東北地方太平洋沖地震の津波により生息地は大きな被害を受け、個体数が激減したが、今後、生息環境の回復による本種の動向の調査が望まれる。

［特記事項］　今後、更に日本海側に発達している砂原から確認される可能性がある。　**（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **B**

和名　ホソハンミョウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cylindera gracilis* (Pallas)

［形態的特徴］　体長10㎜内外。上翅の外縁中央、翅端に白斑紋を持つ。

［選定理由］　本種は、林や河川敷などの草地で見られるが、全国的に少なく稀種と言われている。開発や草地管理放棄などにより、草地の植生の遷移が進み、適した生息環境が衰退している（上野ら, 1985；環境省, 2015）。

［分布と生態の概要］　国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、つがる市森田（山谷, 1939；石村・佐藤, 1941）、弘前市笹森山・清水・相馬、むつ市恐山（福田・奈良, 1952）、弘前市笹森山（齋藤, 1956）、弘前市立構山、鶴田町廻堰（成田, 1988）、弘前市岳（成田, 1989b）、弘前市弥生（横山, 2002）などから記録されているが、その分布は局所的で、最近の記録は少ない。本種は、後翅が発達せず飛翔しないが、その動作は敏速である。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生息地は日当たりの良い草地であるが、開発などで適した環境が衰退し、消失傾向にある。生息地の環境保全と、生息地の再確認、特に記録が殆ど知られていない三八上北地方などの調査が望まれる。　**（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **B**

和名　ヒメハンミョウ海浜型 **環境省：該当なし**
学名　*Cylindera elisae* (Motschulsky)

［形態的特徴］　体長は雄10.5㎜内外、雌12㎜内外。内陸部に普通に見られる内陸型（雄10㎜内外、雌11㎜内外）とは、大型で横に広い体型を有し、上翅斑紋の幅が広いことで区別できる。

［選定理由］　海浜型は海岸の砂丘地帯に注ぐ河口部のみに生息し、幼虫は河川周辺の粘土質土壌の裸地にしか見られない。このような環境は非常に不安定で、護岸工事や河川改修によって容易に減少・絶滅するおそれがある。

［分布と生態の概要］　1980年以降、県内では日本海側の木造町（現つがる市）・陸奥湾内の野辺地町・太平洋側の東通村から百石町（現おいらせ町）の海岸部で記録されている（成田, 1988；成田, 1989b；櫛田, 1991；大八木, 2007；市川・吉川, 2012）。全国的にも産地が少なく、海岸部であっても内陸型しか見られない地域が多い。幼虫で越冬し、成虫は６～９月に見られる。

［特記事項］　産地内では内陸型と混棲する場合も多く、両者の中間型も見られるが、連続的ではない。海浜型と内陸型の関係は、今後明らかにしなければならない課題である。　**（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **B**

和名　サロベツナガケシゲンゴロウ **環境省：該当なし**
学名　*Hydroporus fuscipennis* Schaum

［形態的特徴］　体長3.7㎜前後。同所的に見られるナガケシゲンゴロウとは、前胸背側縁の形状や雄交尾器の形状で区別できる。

［選定理由］　本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内では近年、乾燥化が激しく、生息域が急激に狭められている。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。

［分布と生態の概要］　正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の湿原内の水溜まりや池塘に局所的に生息する（山本, 1996；池田・高橋, 2003）。成虫で越冬する。　**（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **B**

和名　エゾヒラタヒメゲンゴロウ **環境省：該当なし**
学名　*Colymbetes pseudostriatus* Nilsson

［形態的特徴］　体長18～20㎜。体形は長卵形でやや扁平、上翅全面に指紋状の横の縮刻を装う。

［選定理由］　本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内ではマルコガタノゲンゴロウなど（環境省編, 2015）と同様に、各地で侵略的外来種（オオクチバス・アメリカザリガニ・ウシガエル）の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。大型で産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。

［分布と生態の概要］　近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群の池沼や溜め池などに局所的に生息する（山崎・八木, 1992；丸屋, 1993；丸屋・樋口, 1993）。2000年代以降、急激に減少した。成虫で越冬する。　**（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **B**

和名　オオシマゲンゴロウ **環境省：該当なし**
学名　*Hydaticus aruspex* Clark

［形態的特徴］　体長14～15㎜。体形は長楕円形でやや扁平、雌雄で上翅の斑紋が異なる。

［選定理由］　本種は国内では北海道と本州北部（青森県）に分布し、県内ではマルコガタノゲンゴロウなど（環境省編, 2015）と同様に、各地で侵略的外来種（オオクチバス・アメリカザリガニ・ウシガエル）の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。中型で産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。

［分布と生態の概要］　近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域の池沼や溜め池などに局所的に生息する（山崎・八木, 1992；山本, 1996；田村, 2003；初宿, 2011）。2000年代以降、急激に減少した。2018年に、三沢市の湿原でも生息が確認された（岩田ら, 2019）。成虫で越冬する。　**（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **B**

和名　ゲンゴロウモドキ **環境省：該当なし**
学名　*Dytiscus dauricus* Gebler

［形態的特徴］　体長30～36㎜。同所的に見られるエゾゲンゴロウモドキとは、腹部の腹面暗色紋や後基節突起の形状、雄交尾器の形状で区別できる。

［選定理由］　本種は国内では北海道と本州北部（津軽半島中部）に分布し、県内では各地でウシガエルなどの侵略的外来種の侵入により減少している。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、容易に減少・絶滅するおそれがある。大型で産地も極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。

［分布と生態の概要］　近年、本種の生息域である平野部の池沼や溜め池などでもオオクチバスやウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、絶滅の危機にある。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域の池沼や溜め池などに局所的に生息する（松本ら, 1989；山崎・八木, 1992；樋口, 1993b；櫛田, 1995；山本, 1996；阿部ら, 2002；田村, 2003；鳥羽, 2011）。2000年代以降、急激に減少した。成虫で越冬する。　**（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ガムシ科 **B**

和名　ホソガムシ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Hydrochus aequalis* Sharp

［形態的特徴］　体長３㎜内外。背面は暗褐色で翅鞘の各条溝の点刻は深い（佐藤, 1978）。
［選定理由］　本種はガムシ科ホソガムシ亜科に属する水生昆虫で、希少種で近年青森県以外に採集例が殆どなく、湖沼・湿地などの環境劣化から絶滅が危惧される（環境省, 2015）。
［分布と生態の概要］　本種は、本州の京都府・大阪府の標本で1884年に新種記載され、その後青森県などから記録されている。前２府ではその後追加記録が無い（佐藤・吉富, 2005）。青森県内では1997年つがる市平滝沼で採集された（佐藤・吉富, 2005）。その他につがる市コケヤチ、東通村尻屋（阿部, 2013）からも記録されている。本種の生息地は水生植物の繁茂する湿地環境で、つがる市コケヤチでは湿地での草の踏み込みでできた水溜まりに浮かんできた本種を採集した（阿部, 2013）。
［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生息地は、開発・外来魚の移入などによって湿地帯の乾燥化、池沼の水質汚染、水生植物の消滅などが進んでおり、絶滅が危惧される。池沼の継続した管理による環境保全が望まれる。　**（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **B**

和名　クロスジカメノコハムシ **環境省：該当なし**
学名　*Cassida lineola* Creutzer

［形態的特徴］　ハムシという甲虫の仲間で体長は７㎜前後。背面は赤褐色で６個の黒紋がある。
［選定理由］　本州の青森・岩手・宮城県などで分布が確認されているがいずれも局所的で、本県では近年生息環境の悪化と個体数の減少が著しい。
［分布と生態の概要］　県内では2002年に黒石市黒森山、青森市合子沢・小館、平川市軍馬平などの低山地で相次いで生息が確認された（工藤, 2004）。生息環境は乾燥した草原で、幼虫・成虫の食餌植物となっているキク科のオトコヨモギの群落が密に存在する。越冬から目覚めた成虫は５月下旬～６月上旬に産卵し８月になって新成虫が羽化する。年１回の発生。
［生存に対する脅威と保存対策］　県内の生息調査で、生息地はこれまで６か所を数えたが、近年のモニタリングでは４か所の生息が確認されていない（室谷ら, 2017）。その要因は草原の植物遷移が進行し、ブッシュ化で食草が激減したことによるものと考えられる。生息に好適な環境を保全することが課題である。　**（工藤周二）**

コウチュウ目　ハムシ科 **B**

和名　イカリアオカメノコハムシ **環境省：該当なし**
学名　*Cassida stigmatica* Suffrian

［形態的特徴］　体長は６㎜前後。背面は美しい緑色で胸部には錨状の赤褐色の斑紋がある。
［選定理由］　本種の国内記録は本県の八戸市・階上町が最初で（1988年）、その後県内数か所で発見されたが、低地の産地はすべて失われた（安富・富岡, 1990；安富ら, 2011）。
［分布と生態の概要］　本州北部の青森・岩手県だけで記録されているが、本県では上記２か所のほか低地で六ヶ所村、高地の十和田市・青森市（いずれも八甲田山）の３か所で確認されている。生息環境は、食餌植物となっているキク科のミズギク群落がある湿原。高地環境における観察では、越冬した成虫は６月下旬に姿を現し産卵、新成虫は８～９月に羽化する。産卵時期にばらつきがあることから羽化期にも遅速がみられる（室谷ら, 2016）。
［生存に対する脅威と保存対策］　県内で確認された合わせて５か所の生息地のうち、低地の３か所は開発などで早い時期に失われた。ミズギクなど湿性植物を擁する湿原の生態系は脆弱で、その保全には多面的な施策が必要とされる。　**（室谷洋司）**

ハチ目　コマユバチ科　**B**

和名　ウマノオバチ　**環境省：準絶滅危惧**

学名　*Euurobracon yokahamae* (Dalla Torre)

［形態的特徴］　体長20㎜内外。雌は体長の７～９倍の長い産卵管を持つ。体は黄赤褐色で、翅には外縁に広い褐色帯がある。近似種のヒメウマオバチとは、後翅の翅脈、雌は産卵管の長さの違いなどから区別される（平嶋・森本, 2008）。

［選定理由］　本種は、南方系の希少な寄生蜂で、全国的にその生息地は局地的である。里山の開発等により生息に適した環境が衰退し、生息地・個体数共に減少している（環境省, 2015；山田, 2010, p.240）。

［分布と生態の概要］　本種は、国内では本州・四国・九州などの主に里山に分布している（平嶋・森本, 2008；環境省, 2015）。青森県内では古くから棲息が知られており、青森県（和田, 1933）、黒石市（鳴海, 1935）、青森（Watanabe, 1937）、八戸・黒石市（山形村）（石村・佐藤, 1941）から知られていた。また、つがる市森田、弘前市十腰内産の記録（黒石市教育委員会, 2001）も1930年代のものである。近年になって青森市浅虫（工藤, 2011, 2013）、青森市駒込（工藤, 2013）、青森市滝沢（上原, 2013）、青森市久栗坂（上原, 2016）などでミズナラ・コナラ・ヤマナシの樹幹にいた記録が報告されている。本種は短時間に発生樹木から連続脱出し直ぐに分散する。特に雄は高所から雌を探す行動が確認されている（井藤, 2018）。近年、隣接する青森市東部地区で相次いで確認されているが、この分散行動による可能性がある。

本種の生態については解明が進んでおり、産卵はカミキリムシなどが作った樹木の坑道から入って行う。本種の寄主については諸説があるが、寄主は一般にシロスジカミキリと言われていた。神奈川県内でクリ材での寄生木分解、工業用内視鏡での観察などから、本種は蛹に産卵することが確認された。シロスジカミキリ蛹期間は秋で、ウマノオバチ産卵時期は晩春～初夏であり、本種の産卵行動の時期と一致しないことから、シロスジカミキリには寄生しないと言われている。また、寄生木内の本種と同居状態のカミキリ幼虫の形態の明細な調査から青森県にも分布するミヤマカミキリが寄主の一種として確認された（加賀ら, 2018；加賀・刈部, 2019）。ミヤマカミキリも食樹としてミズナラ・コナラ・カシワ・クリなどが知られている（小島・中村, 1986）。

青森県内でもウマノオバチの確認と併せて、寄生木の坑道出口の形状ではなく、内部で本種と同居状態での寄主についての確認が望まれる。

［生存に対する脅威と保存対策］　開発等による里山の衰退、それに伴い寄生木や寄主が減少・消失し、本種の生息が危惧される。本種の生息する里山の環境保全が望まれる。　**（山内智）**

ハチ目　アナバチ科 **B**

和名　ヤマトルリジガバチ **環境省：該当なし**
学名　*Chalybion japonicum* (Gribodo)

［形態的特徴］　体長18㎜前後。腹柄節のある細長な体型で、体色は金属光沢のある濃い藍色である。

［選定理由］　本種は以前希少種ではなかったが、現在は非常に少なくなっていて、県内でも同様である（山田, 2010, p.249）。営巣場所や餌となるクモ類が減少するなど生息環境が悪化している。

［分布と生態の概要］　国内では本州・四国・九州・琉球・小笠原・対馬・屋久島などから知れている。青森県内からは、古くは黒石市山形、青森、八戸（石村・佐藤, 1941）、鶴田町（弘前高等学校生物クラブ, 1957）、十和田山地（常木・下山, 1963）、黒石市板留、青森市野内（山田, 1998）、つがる市森田（黒石教育委員会, 2001）などで記録されている。近年、中泊町小泊（山田, 2008）、深浦町大間越（山田・山田, 2016）でも数個体確認されている。本種は、アシや竹の筒、建物の隙間などに営巣し、コガネグモ科やヒメグモ科などのクモ類を狩って幼虫の餌とすることが知られている（山本, 1959：寺山・田埜, 2006）。特に人家や人工建造物に巣を作るオオヒメグモを好み、かやぶき屋根などの家屋内に侵入して薄暗い所でも巣を作るので、家蜂の仲間に分類されている（岩田, 1982：山田, 2010, p.249）。また、本種はセイボウ科のミドリセイボウ等に寄生されることが知られている。

［生存に対する脅威と保存対策］　人間の生活圏近くに生息するので人為的な影響を受けやすい種類で、近年の民家の構造の変化等から営巣環境が以前より悪くなっていると思われる（山田, 2010, p.249）。人間の生活環境の変化等による営巣地の衰退、餌となるクモ類の寄主の減少などが脅威となっている。本種の生息環境の保全が望まれる。

［特記事項］　和名を別名ルリジガバチとも呼ばれていた。 **（山内智）**

ハエ目　セダカバエ科 **B**

和名　フタイロオオメハシリバエ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Symballophthalmus speciosus* Saigusa

［形態的特徴］　体長2.5㎜内外。頭部は黒く、触角は黄色、腹部は黄褐色である（三枝, 2008）。

［選定理由］　本種は、ハシリバエ亜科アリガタハシリバエ族オオメハシリバエ属に属するが、国内では本属の唯一の種類である（三枝, 2008, 2014）。生息地は局地的で、極めて稀少な種類で、環境の劣化が絶滅に直結する（三枝, 2008；環境省, 2015）。

［分布と生態の概要］　本種は本州北部で確認されている。十和田市奥入瀬渓流石ケ戸から採集された資料によって新種記載された（Saigusa, 1963）。その後の記録は知られていない。生態については不明であるが、他の双翅目昆虫などを捕食しているものと思われる。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地の奥入瀬渓流は、観光地として著名で、車道・遊歩道の整備、マイカー交通規制期間をもうけるなど自然保全の啓蒙活動を官民一体となって取り組んでいる。観光客の遊歩道以外の立入、車両の違法駐車なども見られ環境に悪影響をあたえている。継続して環境保全することが、本種の保護につながる。

［特記事項］　本種はフタテンアシホソハシリバエと呼ばれていたが、三枝豊平（2008）によって現在使用の和名に改称された。 **（山内智）**

チョウ目　マダラガ科 **B**

和名　ルリハダホソクロバ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Rhagades pruni esmeralda* (Butler)

［形態的特徴］　マダラガ科に属し翅長24～26㎜。翅が濃青色に輝く美しい昼飛性のガ。

［選定理由］　本県では青森市高田朝日山・六ヶ所村尾駮・つがる市屏風山（佐藤, 2018）などの数か所で記録されているが、一部地域では近年の記録がない（古木, 2017）。

［分布と生態の概要］　本種は本州・九州などで局地的に記録されているだけである。県内の生息地はいずれも湿原で、幼虫の食餌植物はバラ科のナガボノシロワレモコウが確認されている。成虫は７月中旬～８月上旬に発生し、食草や近くのヨシなどの他物に産卵する。孵化した幼虫は中齢まで成長して越冬、翌春さらに成長して羽化に至る（古木, 2017）。

［生存に対する脅威と保存対策］　幼虫が依存するナガボノシロワレモコウは県内各地の湿原に普遍的に自生する普通種である。一方、本種の生息が極端に限定されている要因は未解明である。湿原の生態系は脆弱で、上記のように産地が一部失われ個体数が減じていることから、その実態解明と保全策の検討が望まれる。 **（古木誠）**

チョウ目　マダラガ科 **B**

和名　ベニモンマダラ道南亜種 **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Zygaena niphona hakodatensis* Inoue

［形態的特徴］　開長30㎜内外。前翅は黒地に紅色の斑紋で金属光沢が強い、美麗種である。

［選定理由］　ベニモンマダラの分布は、限られた地域で局地的である（大野, 1980）。青森県内でも食草の衰退の影響で生息地、個体数ともに減少している。

［分布と生態の概要］　ベニモンマダラの亜種は、本州の名義タイプ亜種、北海道に分布する道南亜種の２亜種がある。堀江（2013）は本州北部（青森県、岩手県）の個体群を函館周辺に分布する亜種に含めた（環境省, 2015）。青森県レッドデータブックでもこれに従う。

青森県内では、古くは八戸市、黒石市六郷（石村・佐藤, 1941）、1957年八戸市大須賀（山内, 2018）から記録されている。そのほかに、大間町（阿部ら, 1960）、八戸市大久保・新井田（富岡, 1974）、青森市朝日山（佐藤ら, 1975）、青森市稲山（三橋, 1979）、六ヶ所村尾駮、大間町高岩（菊池, 1983）、八戸市鮫（木俣, 1984）、八戸市南郷（青森県生物学会八戸支部, 1989）、岩木山（黒石市教育委員会, 2001）、青森市合子沢（国際芸術センター青森, 2004）、三沢市仏沼（安藤, 2012, 2013）、八戸市根城、六ヶ所村鷹架（山内, 2018）などから記録されている。近年も一部で生息が確認されているが、分布地は激減している。

昼飛性で草上を低く飛び、花に集まる（大野, 1980）。食草はクサフジ（環境省, 2006, 2015）、オオバクサフジ、ツルフジバカマ（岩手県, 2001）などが確認されている。

［生存に対する脅威と保存対策］　クサフジの自生する日当たりのよい草原は、開発等で年々少なくなってきている。草地の維持が必要である。また、必要以上の採集は慎むべきである。

［特記事項］　本亜種の和名は環境省レッドリスト2018に従い道南亜種とした。 **（山内智）**

チョウ目　セセリチョウ科 **B**

和名　ギンイチモンジセセリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Leptalina unicolor* (Bremer et Grey)

［形態的特徴］　前翅長は15㎜前後。翅表は黒いが、後翅裏面には銀色の一文字が目立つ。
［選定理由］　草丈の低い草原に生息し、近年このような環境が急減し個体数が著しく減少した。
［分布と生態の概要］　北海道から九州まで分布するが一般的に局所的。県内でも広く分布するが生息地は限られ、食餌植物のススキがあるシバなどが生えた日当たりの良い草地である。成虫は５月下旬～６月下旬に出現し、まれに８月中旬頃に２化が発生。地上すれすれに低く飛翔する。
［生存に対する脅威と保存対策］　1960年代まで牛馬飼料用の草刈場とされた里山は、適度な草丈の草原が保たれ本種が多産した（室谷・阿部, 1962）。同じ草原性のオオルリシジミ・オオウラギンヒョウモン（いずれもEXランク）が健在だったころは、草原を歩くと足元から湧き出るように沢山の個体が飛び立った。近年は農業の機械化が進み、草刈場は耕地整理で畑地・果樹園に転用された。現在は畑地の縁や放置されても条件の良い荒地などに細々と生息している。保存には、このような本種の生息に適した植生復元を念頭においた環境創出が必要である。　**（室谷洋司）**

チョウ目　アゲハチョウ科 **B**

和名　ヒメギフチョウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Luehdorfia puziloi inexpecta* Sheljuzhko

［形態的特徴］　黄と黒のだんだら模様で、カタクリなどに吸蜜する姿は春の女神と愛称される。
［選定理由］　本県が本州亜種の北限地。県内では生息地が非常に少なくなり、いずれも局所的で個体数とともに著しく減少傾向にある。
［分布と生態の概要］　青森市・平内町・黒石市・平川市・大鰐町・三戸町・田子町と白神山地周辺部の西目屋村・深浦町などに分布域を示すが、いずれの産地も離散的で狭い（棟方ら, 1986）。年１回４月中旬～５月上旬に発生し、卵は幼虫の食餌植物であるウマノスズクサ科のウスバサイシン・オクエゾサイシンに産み付けられ、幼虫期を経て６月下旬頃には蛹となり、そのまま越冬する。
［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生息環境は、広範囲にわたるミズナラなどが主体の二次林で、林床には適度な明るさと湿り気が保持され食餌植物や吸蜜源植物の群落が必要。1990年代以降、スギ植林の進行とその高木化で生息不適地が急増した。本種の保存策として、行政などが指定した自然公園内に生息地が存在する場合、従来の里山環境の維持手法が効果的である。
（室谷洋司）

チョウ目　シロチョウ科 **B**

和名　スジボソヤマキチョウ **環境省：該当なし**
学名　*Gonepteryx aspasia niphonica* Verity

［形態的特徴］　シロチョウ科の大形種で、雄の翅表は濃黄色、雌は黄白色。EXランクのヤマキチョウに似るが、翅脈が細いことや行動面で飛び方が緩やかなことなどから区別できる。
［選定理由］　本県が分布の北限である。幼虫はクロウメモドキの葉を食べるが、近年この植物を含む明るい雑木林や林縁・湿原環境が急減し、本種も著しく減少した。
［分布と生態の概要］　本州・四国に分布。1990年代までは、県内の低山地に広く分布し個体数も多かった。成虫は６月下旬～７月に出現し、盛夏に一時休眠し秋にふたたび現れ、成虫のまま越冬する。翌春、母チョウは食樹の新葉などに産卵し、孵化した幼虫は６月までに蛹化する。
［生存に対する脅威と保存対策］　本種が普通に見られたのは各所に生息環境が整っていた年代までで、1990年代頃から多くの産地が消滅した（室谷, 未発表）。近縁種のヤマキチョウが1960年代後半から記録がなく、本種の生存も心配される。要因は里山・湿地が管理されなくなり林縁も荒廃。明るい空間を好むクロウメモドキが衰退したことで、このような環境回復が保全面で必要である。
（室谷洋司）

チョウ目　シジミチョウ科 **B**

和名　キタアカシジミ（カシワアカシジミ） **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Japonica onoi onoi* Murayama

［形態的特徴］　アカシジミに極めて近縁で、1990年に隠蔽種として分離されるまでは混同されていた。交尾器はアカシジミと明確に異なるが、斑紋だけでの区別は容易でない。

［選定理由］　アカシジミは全国に広く分布するが、本種はごく限られた地域のカシワ林にのみ生息し、近年は減少が著しい。

［分布と生態の概要］　北海道と東北北部・福島県・広島県に分布し、北海道から東北北部に産する個体群は名義タイプ亜種*onoi*とされる。また、広島県産は1993年に亜種*mizobei*、福島県産は2018年に亜種*sakumai*として区別された。成虫は年１回６月下旬から７月に出現し、雄による活発な探雌飛翔は14～16時に観察される。産卵はカシワの若枝へ数卵まとめ産みすることが多く、卵越冬（厳密には卵内幼虫越冬）して翌春孵化。幼虫はカシワの新芽を食べて蛹となる。

［生存に対する脅威と保存対策］　自然度が高いカシワ林を好むため、伐採はもちろん、周辺環境の改変だけでも衰亡につながることが多い。

（工藤忠）

チョウ目　シジミチョウ科 **B**

和名　カバイロシジミ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Glaucopsyche lycormas* Butler

［形態的特徴］　雄翅表は淡青色で外縁部に細い黒帯を有する。雌翅表は黒褐色で基部寄りに青色鱗が出現するが、青色鱗の出現程度には個体差がある。種の特徴は翅裏面に顕著で、灰色地に黒点列が１列のみ縦走する。

［選定理由］　津軽・下北両半島の海岸部に局所的な生息地が点在するため、分布実態は破線的。

［分布と生態の概要］　北海道と本州が分布圏ながら、本州では津軽半島北部と下北半島西部の海崖斜面に限られ、ここに自生するヒロハノクサフジ群落でのみ発生する。成虫は５月下旬から８月まで出現し、雄は午前中に生息斜面を活発に飛翔する。

［生存に対する脅威と保存対策］　青森県の本種は、本州唯一の遺伝子集団として重要ながら、生息地は限られた地域の海岸線に点在し、極めて脆弱である。このため、下北半島西部や津軽半島北部において環境改変事業を実施する際には、本種の生息状況に影響を及ぼさないよう、特段の配慮が必要である。

（工藤忠）

チョウ目　シジミチョウ科 **B**

和名　オオゴマシジミ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Maculinea arionides takamukui* (Matsumura)

［形態的特徴］　前翅長は22㎜前後。翅表は青藍色、裏面は灰白色でいずれにも黒斑がある。

［選定理由］　県内分布は深山渓谷の一部に限られ、近年生息環境の悪化と個体数の減少が著しい。

［分布と生態の概要］　北海道と本州に分布。県内では十和田湖から八甲田山系の城ヶ倉・折紙山などの渓谷地と白神山地の一部が生息地で、いずれも急峻な崩壊地の周辺に限られる。年１回７月下旬～８月上旬の発生で、孵化した幼虫は４齢までシソ科のクロバナヒキオコシの花穂を食べる。その後、クシケアリ類によってアリの巣穴に運ばれ、アリの幼虫を食べて育つ。アリは本種幼虫が分泌する甘露をなめる。幼虫期に植物食から肉食に転ずるという特異な生態を持つ。

［生存に対する脅威と保存対策］　一般には生息地が深山のため生息環境に影響がないと考えられるが、幼虫の食餌植物・クロバナヒキオコシ群落は断崖の崩壊地に形成され、自然災害や伐採・林道建設などで失われる脆弱性をもつ。これにより本種は生息できなくなり、八甲田山・白神山地では多くの生息地が失われた。このような繊細な生態系への配慮を踏まえた保全策が望まれる。

（室谷洋司）

チョウ目　ヤガ科 **B**

和名　クビグロケンモン **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Acronicta digna* (Butler)

［形態的特徴］　開長43㎜内外。前翅は灰黒色、後翅中は春の個体は黄白色であるが、夏の個体は淡黄色である。

［選定理由］　国内での産地は湿地で、その分布は局地的で稀少な種類である（江崎ら, 1975；井上ら, 1982；枝ら, 2011；環境省, 2015）。食草はカキツバタやイタドリであるが、湿地開発や湿地の乾燥化などからこの群落も衰退し環境が悪化してきている。青森県内でも生息地及び記録ともに少ない。

［分布と生態の概要］　国内では北海道・本州・四国・九州・対馬に分布している。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983）、つがる市平滝沼、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1987）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）などの屏風山地区と小川原湖湖沼群地区から確認されている。

［生存に対する脅威と保存対策］　屏風山地区と小川原湖湖沼郡地区は開発、盗掘、心ない人の湿地帯への踏み込み等により、食草であるカキツバタ群落が衰退している。湿地帯の保全とカキツバタの保護対策が望まれる。　**（山内智）**

トンボ目　イトトンボ科 **C**

和名　ルリイトトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Enallagma circulatum* Selys

全長：32.5～38.5㎜。雄は瑠璃色の地に黒斑のある美麗種。雌は青色と黄緑色の２型がある。黒色斑は平地の個体では縮小し、高地や下北郡の個体では発達する傾向がある。

北方系の種で、岐阜県と福井県以北から北海道、国外では朝鮮・ロシアに分布する。県内では津軽地方・上北郡・下北郡・十和田市に生息するが（奈良岡ら, 2018）、局地的である。

成虫は６～９月に植生の豊かな池・沼に見られる。水面で産卵することは稀で、雌は単独で水中に逆さまに潜って産卵する。雄はその間、水面上で待機し、雌が浮上すると再連結することが多い。

最近は生息地・個体数共に減少し、多数見られる所が少なくなっている。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　イトトンボ科 **C**

和名　モートンイトトンボ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Mortonagrion selenion* (Ris)

全長：24.5～29.5㎜。小型のイトトンボで、頭部の上と胸の前面は黒色。胸の側面と腹部第１・２節は緑色で、雄の第３節以降はオレンジ色である。未熟雌は全体が橙黄色であるが、成熟すると黄緑色となる。水田・池・沼・湿地に見られ、成虫は６～８月に出現する。

朝早く日の出前後の４時頃から活動し、８時頃までの間に交尾する。雄はその後、摂食活動をするだけで、ほとんど静止して過ごす。雌は９～15時頃にかけて水面や水中の植物に産卵する。

1960年頃までは各地の水田で多数見られたが（奈良岡, 1977）、耕作法の変化や農薬の使用などでほとんどの水田で絶滅した。今後ますます少なくなることが予想される。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　カワトンボ科 **C**

和名　ハグロトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Atrocalopteryx atrata* Selys

全長：52～63㎜。雄の翅が黒く、胴体は金属緑色。雌の翅と胴体は黒褐色である。アオハダトンボに似るが、一回り大きく、雌雄ともに翅の色や縁紋はないことで区別できる。

本州・四国・九州、朝鮮・中国・ロシアに分布する。成虫は６～９月に出現し、雌は単独で水面の植物に産卵する。潜水産卵も行うことがある。

1970年代までは県内各地の水田・河川に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、生息地・個体数ともに減少し、1990年代には県内数か所に生息するだけとなった。2000年代になって、再び各地の河川で復活しているが（奈良岡ら, 2018）、個体数は必ずしも多くない。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　ヤンマ科 **C**

和名　サラサヤンマ **環境省：該当なし**
学名　*Sarasaaeschna pryeri* (Martin)

全長：55～63㎜。黒字に黄色斑のある小型のヤンマである。雄では成熟すると黄色斑が緑色に変わる。雌では翅の基部と先端付近が淡褐色となる個体がある。県内に広く分布するが、山地は局限的である。北海道・本州・四国・九州、国外では朝鮮に分布する。

樹林に囲まれた平地・丘陵地の低湿地に生息し、湿地の空間、小径上をホバリングしながら飛翔する。成虫は５月下旬～７月初めに出現する。雌は単独で湿った土やコケ、朽木などに産卵し、幼虫は落ち葉などに覆われた湿った地面や浅い滞水に住んでいる。幼虫期間は１～３年を要する。

生息地の湿地の破壊、埋め立てを避けることが望ましい。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　サナエトンボ科 **C**

和名　オナガサナエ **環境省：該当なし**
学名　*Melligomphus viridicostus* (Oguma)

全長：53～59.5㎜。中型のサナエトンボで、黒地に黄斑を有する。雄の尾部付属器が長いのが特徴で、下付属器は細長く左右に二又し、上方に湾曲する。

河川の上・中流域に生息し、成虫は７～９月に出現する。雄は流れの中の岩や石に止まってテリトリーを張る。雌は浅瀬の水面上でホバリングしながら卵塊を出し、水中に落下させる。

日本特産種で、本州・四国・九州に分布する。県内では局地的に見られ、八戸市の新井田川、弘前市の岩木川、平川市や大鰐町の平川で確認されている（奈良岡ら, 2018）。

2000年頃には多かったが、津軽地方では最近、個体数が減少している。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　サナエトンボ科 **C**

和名　ウチワヤンマ **環境省：該当なし**
学名　*Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius)

全長：76～83㎜。黒地に黄色斑を有する。腹部第８節がウチワ状に拡がり、その名がある。本州・四国・九州、国外では東南アジア・朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。池・沼・湖に生息し、成虫は６月から９月まで見られる。

羽化は夜半に行われ、羽化して間もなく暗闇の中を林に飛び立つ。産卵は雌が水面上でホバリングして卵を糸状に出し、腹端を打って水面の植物に付着させる。雄はその周りを警護飛翔することがある。前肢をたたみ、中・後肢の４本でヤジロベエ型に止まる特徴がある。

県内に広く生息するが、生息地・個体数ともに減少している。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　エゾトンボ科 **C**

和名　コヤマトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Macromia amphigena* Selys

全長：67～75㎜。やや大型のトンボで、黒地に黄斑を有する。同じ科のオオヤマトンボに酷似するが、一回り小さく、頭部前面の黄色条が１本であることなどで区別できる。

北海道から九州までの日本全土、朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から山地の河川・沼・湖に生息し、成虫は６月から９月にかけて見られる。雄は池や沼岸などをパトロール飛翔する。産卵は雌が単独で水面や湿った土に尾端を打ち付けて行う。

1960年代前半までは各地に普通だったが（奈良岡, 1977）、その後少なくなり、現在は人里を離れた地域に限られる傾向があり、生息地・個体数ともに減少している。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **C**

和名　ハラビロトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Lyriothemis pachygastra* (Selys)

全長：30.5～37.5㎜。小型の腹部が平べったいトンボである。雄の未熟個体と雌は黄褐色の地に黒斑がある。成熟した雄は胸部が黒色、腹部が青灰色となる。翅の基部は黄褐色である。

北海道南端から九州、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から丘陵地の湿地や水田に生息し、成虫は６月から９月まで見られる。雄は湿地に縄張りを形成する。雌は単独で打水産卵し、その近くをオスが警護飛翔する。

県内に広く分布するが、1980～1990年代に津軽地方を中心にほとんどいなくなった。2000年頃から復活したが、最近はまた見られなくなり、個体数の多い所は少ない。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **C**

和名　オオシオカラトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Orthetrum melania* (Selys)

全長：46.5～54.5㎜。未熟成虫は黄色の地に黒斑を有する。雄は成熟すると白粉を装い、全体が青灰色となる。雌の第９腹節は側片が膨れている。翅の基部と先端が黒褐色である。

日本全土、国外では朝鮮・台湾・中国・ロシアに分布する。平地から低山地の湿地・池・沼に見られ、成虫は７月から９月に出現する。雌は単独で打水産卵をする。この時にオスは近くを飛び警護する。シオカラトンボに似るが、やや太く黒っぽい。

1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後各地で少なくなり、最近では生息地・個体数ともに減少している。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **C**

和名　ショウジョウトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Crocothemis servilia* (Drury)

全長：41.5～48.5㎜。未熟成虫は橙黄色であるが、雄は成熟すると全体が赤くなり、雌は茶褐色となる。翅の基部に赤褐色斑がある。北海道南端から九州まで、国外では朝鮮・台湾・中国・東南アジア・アフリカに分布する。

成虫は６月から９月まで見られる。交尾は飛翔しつつ行い10秒ほどで短い。雌は単独で打水産卵をする。雄は産卵雌の近くを飛びまわり警護することがある。

1960年代までは県内各地に普通に見られたが（奈良岡, 1977）、その後、ほとんどの地域でいなくなった。2010年頃から各地で復活の傾向が見られるが、個体数は少ない。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **C**

和名　ヒメアカネ **環境省：該当なし**
学名　*Sympetrum parvulum* (Bartenef)

全長：27.5～34㎜。アカトンボ中で最も小さく、マユタテアカネに似るが、胸部前面中央の黒条が太く鮮明で、肩の黒条と上部で繋がることや、雌の産卵弁が腹端よりも長いことで区別できる。未熟成虫は黄褐色であるが、雄は成熟すると顔面が黄白色となり、腹部が赤化する。雌は橙褐色であるが、腹部が赤化するものもある。

日本全土に生息し、国外では朝鮮・中国・ロシアに分布する。平地から山地の湿地や休耕田などに生息し、成虫は７月から10月まで見られる。県内に広く分布するが、湿地の減少などで、生息地・個体数ともに著しく少なくなり、容易に発見できなくなっている。 **（奈良岡弘治）**

トンボ目　トンボ科 **C**

和名　カオジロトンボ **環境省：該当なし**
学名　*Leucorrhinia dubia* (Van der Linden)

全長：31.5～36㎜。小型のトンボで、黒地に黄褐色、または赤褐色の斑紋がある。頭部前面が乳白色で、翅の縁紋の外側が白い。成熟すると、雄では黄斑が赤化し、雌は黒味が増す。翅の基部に褐色斑がある。

北海道と本州山岳地帯、国外では朝鮮・中国・ロシア・ヨーロッパに分布する。青森県では八甲田山地域が唯一の産地である。湿地帯に生息し、６月下旬から８月末まで成虫が見られる。

生息地が国立公園の中にあるが、湿地の乾燥化や観光客の増加により個体数が減っている所もある。湿地帯の踏み荒らしなどによる、生息地の破壊を防ぐ必要がある。 **（奈良岡弘治）**

ゴキブリ目　ブラベルスゴキブリ科 **C**

和名　オオゴキブリ **環境省：該当なし**
学名　*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

本亜種は、国内では本州・四国・九州などに生息する森林性のゴキブリで、その生息環境は限定され局地的で、個体数は多くない（朝比奈, 1992；大野, 1993）。青森県内では深浦町十二湖（松野ら, 1966；朝比奈, 1988；福田ら, 1992；大野, 2002）、深浦町平沢川（工藤, 2019）などから記録されている。本種の生息地である十二湖ではブナの朽木の中に生息しているが、同じ朽木中に成虫と幼虫が混棲し（松野ら, 1966）、朽木の腐り加減や固さ・湿り具合に好みがあり、朽木は限定される（山内, 2014）。本生息地は白神山地の一部に属し、津軽国定公園に指定され保護されている。近年登山者・観光客が増加しており、登山道・遊歩道も整備され環境保全活動も活発に行われているが、写真撮影などのため林内・湖岸などへの立入が頻繁に見られ、環境の劣化が危惧される。林内の倒木・朽木などは撤去することなくそのままの自然状態に置くことが寛容である。マナー向上など継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

ナナフシ目　ヒゲボソナナフシ科 **C**

和名　ヤスマツトビナナフシ **環境省：該当なし**
学名　*Micadina yasumatsui* Shiraki

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布（市川, 2014）するが、北海道では、松前半島などの津軽海峡側からのみ確認されている（堀・栗林, 2017）。おもに低山地の古い広葉樹林に生息しているが、里山の開発で生息地が衰退しており、少なくなっている。青森県内では、八戸市（福田, 1990）、大鰐町蔵館（福田, 1990；山田, 2002）、青森市横内、外ヶ浜町袴越岳、弘前市相馬・百沢、階上町、十和田市、五所川原市飯詰（山田, 2002）、青森市月見野（山内, 2004）、田子町新田、深浦町蟶山（山田, 2010）、南部町名久井岳、深浦町十二湖（山田, 2010, p.255）などから記録されている。深浦町蟶山ではミズナラの樹上で採集されている（山田, 2010）。県内でもナラ類の生育している里山は、開発によって徐々に無くなってきており、本種の生息適地が衰退し、減少している。里山の環境保全に配慮が望まれる。 **（山内智）**

カメムシ目　ツノゼミ科 **C**

和名　ニトベツノゼミ **環境省：該当なし**
学名　*Centrotus nitobei* Matsumura

翅端までの全長が、10㎜前後と日本最大のツノゼミで、前胸背の角が後方に曲がる。本県では十和田市で採集されたタイプ標本１頭のみ記録されていた（Matsumura, 1912）。その後、関東地方などでは林縁のマユミやコブシで発生することが確認された（林ら, 1983など）。佐藤（2016）により本県における宿主植物はホオノキであり、2012年に複数の幼虫・成虫が青森市で発見され、その後西目屋村でも確認された。ホオノキは各地に個体数が多いが、発生しているのは高木に限られるため、調査自体が容易ではない。個々の発生地は孤立しているおそれがあり、伐採などの環境改変に脆弱と考えられる。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　コオイムシ科 **C**

和名　コオイムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Appasus japonicus* Vuillefroy

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などの、水田や池沼の開放的な止水域の清水に生息する。以前は全国的に普通に見られていたが、開発や水質汚染などから近年激減している（環境省, 2006, 2015；平嶋・森本, 2008）。青森県内では、石村・佐藤（1941）に黒石市浅瀬石、つがる市森田、八戸市に普通に分布とあり、古くから広域に分布していた。最近、深浦町赤石川（下山ら, 1991）、東通村荒沼（福田ら, 1997）、むつ市芦崎（むつ市教育委員会, 2002）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などからも記録された。県内でも、池沼の開発で本種の生息域である止水の池沼が減少し、水質汚染や外来魚放流など池沼を取り巻く環境も悪化してきており、生息地、個体数共に減少している。池沼や湿地環境の保全が望まれる。 **（山内智）**

カメムシ目　ミズムシ科 **C**

和名　ミズムシ **環境省：該当なし**
学名　*Hesperocorixa distanti distanti* (Kirkaldy)

本亜種には、名義タイプ亜種ミズムシと*H. d. hokkensis*ホッケミズムシの２亜種が知られているが、名義タイプ亜種は国内では北海道・本州（青森県）から知られている。山形以南・四国・九州には後者が分布している（日本昆虫学会, 2016）。本亜種は池沼に生息するが開発等で生息に適した池沼が衰退し、減少してきている。青森県内では、つがる市森田、黒石市山形（石村・佐藤, 1941）、東通村荒沼・タカ沼（福田ら, 1997）、つがる市冷水沼・ソリ沼・大滝沼・ベンセ沼・平滝沼（大高ら, 2008a, 2008）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。古くは県内でも各地の池沼に普通に見られていたと思うが、池沼の減少や水質汚染などによる環境の悪化から、生息地や個体数とも減少してきたと考えられる。 **（山内智）**

カメムシ目　カタビロアメンボ科 **C**

和名　エサキナガレカタビロアメンボ **環境省：該当なし**
学名　*Pseudovelia esakii* Miyamoto

本種は、本州北部（青森県・秋田県）の池沼の岸沿いの石下、倒木下に群生している。生息する場所が限られる。水質ばかりでなく湖岸の環境も劣悪になってきており、絶滅が危惧される（環境省, 2006；宮本, 2008；日本昆虫学会, 2016）。本種は十和田湖、むつ市宇曽利山湖で採集された標本によって、新種記載されたアメンボである（Miyamoto, 1959）。これらの地区では水質には大きな変化がないが、観光客は増加しており、一部の人が湖岸まで入り込み、踏み荒らしている。またむつ市宇曽利山湖湖岸では車両が乗り入れて環境が悪化してきている。湖岸周辺部も含めた環境保全と観光地でのマナーの啓蒙が望まれる。

和名はエサキカタビロアメンボ（宮本, 2008）の別名もあるが日本昆虫学会（2016）に従った。

（山内智）

カメムシ目　アメンボ科 **C**

和名　ババアメンボ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Gerris babai* Miyamoto

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。止水域の池沼で、水草の繁茂する水面に生息している。生息地はかなり局地的で少ない（環境省, 2015）。青森県内では弘前公園（日浦, 1967, 1968）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。

生息に適した湖沼が、開発や外来水生生物の放流などにより水質の悪化や水草減少などが進んでおり生息の脅威となっている。池沼の環境保全と本種の県内各湖沼群での調査が望まれる。

（山内智）

カメムシ目　アメンボ科 **C**

和名　キタヒメアメンボ **環境省：該当なし**
学名　*Gerris lacustris* (Linnaeus)

ヒメアメンボと混同されていたが、微翅型を高率で発現させることなどから、別種であることが判明した。交尾器や腹部腹板の構造によりヒメアメンボやババアメンボと区別される。

これまでのところ、北海道・本県・岩手県・福島県からのみ確認されている（Usui *et al.*, 1997；碓井, 1998；碓井・疋田, 2001）。本県からは十和田市のみから確認されている。碓井（1998）により、南八甲田山系の湖沼群の微翅型個体群がキタヒメアメンボであることが明らかにされ、普通のヒメアメンボと混生している。生息地では生息密度は高いものの、遊魚用としてニジマスなどの捕食性外来魚を放流している生息地もあり、捕食圧を受けているものと考えられる。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　ミズギワカメムシ科 **C**

和名　ヒメミズギワカメムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Micracanthia hasegawai* (Cobben)

３～3.5㎜の短翅（中翅）で卵形の種で、背面に細毛を密生する。

本県の恐山を原産地とする種で（Cobben, 1985）、八甲田山系でも確認されている（市田, 1991）。ミズゴケ上に生息する種で、７月頃に成虫となる。恐山では1988年と2007年に、八甲田山系では1989年と1997年に市田が実際に確認している。1998～1999年の八甲田山系での調査の際には、注意して探したが確認できなかった。成虫の出現期間が短いため確認されにくいということもあるだろうが、楽観のできる現状ではない。北海道（Cobben, 1985）、秋田県（林, 2003）からも確認されているが、既知産地は少ない。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　カスミカメムシ科 **C**

和名　モンキカスミカメ **環境省：該当なし**
学名　*Capsodes gothicus* (Linnaeus)

体長７㎜程度の中型で黒色のカスミカメムシで、小盾板・前胸側縁・前翅前縁・楔状部が黄色。雌は翅が短く飛翔できない。北海道と本県及び岩手県の海岸に分布し、風衝を受ける草地に生息する。安永ら（2001）で、クサフジが食餌植物であるとされ、本県でも幼虫がヒロハノクサフジから吸汁していることが確認された。市田（1988）で外ヶ浜町と中泊町から、富岡（1989）で八戸市から記録されている。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　マキバサシガメ科 **C**

和名　オオマキバサシガメ **環境省：該当なし**
学名　*Nabis ferus* (Linnaeus)

淡褐色のやや細長いカメムシで、触角や脚は細長い。水田などでも良く見られるハネナガマキバサシガメと似ているが、比べて見ると明らかに体幅が広いことから識別できる。従来、北海道と北陸地方から単発的に確認されていただけ（宮本, 1997）で、生息環境等は不詳であった。1998年に本県の下北半島太平洋側の砂浜海岸に広く生息していることが確認されたが、下北半島の津軽海峡側、陸奥湾沿岸、津軽半島日本海側の砂浜海岸からは全く発見できなかった（市田, 1999a, b）。東日本大震災後に八戸市からも確認された（野村・早坂, 2013）。震災後の防災工事などで、海岸への海砂供給が減少すれば、生息環境が悪化するおそれがある。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　マキバサシガメ科 **C**

和名　ツマグロマキバサシガメ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Stenonabis extremus* Kerzhner

体長7.5～9.5㎜の長翅のマキバサシガメで、普通のハネナガマキバサシガメに比べ、やや大きく体幅も広い。色彩は灰色味が強く、後腿節端が黒色になる。

日本では北海道遠軽町の１例のみが知られていた種であるが（Kerzhner, 1988）、その後本県のむつ市、西目屋村から確認され（市田, 1991）、宮城県でも発見された（市田, 1998b）。本州では河川敷・水田地帯の灯火へ飛来した個体が得られた例が多く、六ヶ所村で１例だけすくい採りで得られているが、生息する微環境は不明である。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　サシガメ科 **C**

和名　ゴミアシナガサシガメ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Myiophanes tipulina* Reuter

体長17㎜前後の一見ガガンボを思わせる細長いカメムシで、全身が長い毛で覆われる。

戦前の記録は石村・佐藤（1941）の黒石市しかなかったが、市田（1989）により弘前市の1961年の記録、黒石市教育委員会（2001）によりつがる市の1934年の記録が報告されている。以後65年以上確認されていない。家屋性で物置などの壁面にいて他虫を捕食していたようであり、家屋構造の近代化により全国的にも急激に衰退しているが、伝統的な構造の民家などでは生存している可能性がある。山形県では情報不足とされている。 **（市田忠夫）**

カメムシ目　ヒラタカメムシ科 **C**

和名　ヤセオオヒラタカメムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Mezira termulae* (Germer)

９～10㎜の扁平なカメムシで、黒褐色で全く艶がない。雄は他種にない下ぶくれ体型となる。

本種は枯倒木を豊富に有する老齢林の指標となる種で、全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでも準絶滅危惧とされている。本県では八甲田山系・白神山系・津軽山地から確認されているが、個体数は少ない（市田, 1991, 1993）。ヒラタカメムシは枯倒木を腐朽させる真菌類に寄生するもので、特に本種はブナ極相林の指標種となるものと考えられる。本県において自然度の高いブナ林は何らかの保全が図られており、差し迫った危機にはない。ただし、生息密度が低いため本種の発見は困難である。 **（市田忠夫）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　ナミハンミョウ **環境省：該当なし**
学名　*Cicindela japonica* Thunberg

本種は、本州・四国・九州などの、沢・小川や小水路沿いの未舗装の林道や裸地した場所が主な生息地で、幼虫は土壌に穴を掘って生息している。全国的に少なくなっている。青森県内では、八戸市（石村・佐藤, 1941；福田・奈良, 1952）、黒石市（石村・佐藤, 1941）、平川市津軽湯ノ沢（福田・奈良, 1952；佐藤ら, 1967）、平川市久吉（佐藤ら, 1967）、三戸町蛇沼・赤岩（山美ら, 1986）、南部町横沢（佐藤ら, 1987）、十和田市滝沢、南部町鳥舌内、五戸町浅水（成田, 1988）、南部町名久井岳・平川市古遠部（成田, 1989b）などから記録されている。青森県内での生息地は、主に秋田・岩手県の県境付近に集中しており、局地的である。以前は山麓の未舗装林道、壁土の切通しなどによく見られたが（福田, 1969a）、近年は林道や農道の整備、切土や盛土が崩壊しないよう法面や斜面の整備も進み、適した生息環境が少なくなり、生息地消失、個体数の減少などが見られる。県内の本種生息の調査が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　コハンミョウ **環境省：該当なし**
学名　*Myriochila speculiferis* (Chevrolat)

体長は雄13.5㎜、雌14㎜内外。本種は関東地方までは普通種であるが、本県は分布の北限に当たり産地数・個体数ともに少ない。県内では平地から低山地の池沼・溜め池・河川敷などの湿った場所に局所的に生息し、幼虫は湿地周辺の裸地に見られる。このような環境は不安定で、護岸工事や河川改修によって減少するおそれがある。幼虫で越冬し、成虫は６～９月に見られる。

1980年代以降、津軽地域では平賀町（現平川市）・弘前市・黒石市・木造町（現つがる市）・森田村（現つがる市）・金木町（現五所川原市）・青森市（以上、成田，1988；成田，1989b）の記録があり、2010年には鶴田町で生息を確認した。下北地域では恐山（北畠，1955）の古い記録しかなく調査不足と思われる。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　セアカオサムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Carabus tuberculosus* Dejean

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などの、草原や草地などに生息しているが、草地管理放棄、草地開発などによって生息地が減少してきている（環境省, 2015；井村・水沢, 2013）。青森県内では、黒石市山形、八戸市（石村・佐藤, 1941）、東通村尻屋（阿部, 1970；下山, 1978）、大間町（阿部, 1970）、階上町道仏、弘前市百沢（下山, 1978；山谷・草刈, 1982）、平川市大木平（下山, 1978；吉武ら, 2011）、黒石市田中・青荷、平川市葛川・温川（下山, 1978）、八戸市笹子・番屋、野辺地町、青森市野内、つがる市木造・出野里・林・森田・相野、五所川原市飯詰、鰺ヶ沢町長平、深浦町大戸瀬・松神、弘前市松原（山谷・草刈, 1982）、平川市平賀（吉武ら, 2011）など広域で生息が確認されているが、草地開発や河川敷の整備などにより、生息に適した環境が衰退してきており、生息地消失、個体数の減少などが見られる。継続した草原・草地の適切な管理と環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　ヒメクロオサムシ東北地方亜種 **環境省：該当なし**
学名　*Carabus opaculus shirahatai* Nakane

本亜種は、主に東北地方の亜高山・高山に生息し、山頂付近の石下などから採集される。青森県内では、青森市大岳（阿部, 1970, 1980；山谷・草刈, 1982）、岩木山（阿部, 1970；下山, 1978）、深浦町白神岳（阿部, 1970, 1980；山谷・草刈, 1982）、八甲田山（下山, 1978）、岩木山山頂（阿部, 1980）、弘前市岳、十和田市高田大岳（山谷・草刈, 1982）など、岩木山・八甲田山・白神岳の山地から記録されている。本生息地域の一部は、国立・国定公園、世界自然遺産登録地域で保護されている。しかし近年登山者が増加し、登山道以外の立入禁止やゴミ・糞尿の処理、裸地化などの対策も官民一体となって取り組んでいるが、生息に適した環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　アカガネオサムシ本州亜種 **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Carabus granulatus telluris* Bates

本亜種は、国内では本州中部から北東部の主に水辺の湿地帯を生息地としているが、その分布は局地的である。湿地帯の開発、河川敷湿地の整備、採集圧などにより全国的に生息地、個体数ともに減少してきている（環境省, 2015；井村・水沢, 2013）。青森県内では、十和田湖畔（石村・佐藤, 1941）、つがる市森田・稲垣（阿部, 1970）、つがる市緑川（下山, 1978）、つがる市柴田・繁田（下山, 1978；山谷・草刈, 1982）、つがる市車力・中派立・出野里・林、五所川原市十三湖（山谷・草刈, 1982）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）、六ヶ所村室ノ久保・鷹架（荒木, 2001）などから記録されている。特に、つがる市柴田では積んでいたサルケ（泥炭）から越冬個体を採集した（下山, 1978）。十和田湖湖畔からは近年の採集記録は知られていない。生息地の岩木川河川敷の湿地帯は好採集地として広く知られており、採集者も多く訪れ、湿地立入、トラップ設置、倒木・枯木の破壊などが生息環境に大きな影響を与えている。また河川敷の湿地帯では開発や河川整備も行われており生息を困難にしている。

青森県の個体については北海道亜種 *C. g. yezoensis* Bates（別名：エゾアカガネオサムシ）との類似性が議論され、下山（1978）ではエゾアカガネオサムシとして記録している。本レッドデータブックでは井村・水沢（2013）に従い本州亜種とした。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　ワタラセハンミョウモドキ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Elaphrus sugai* Nakane

本種は本州の茨城県・栃木県・青森県などの池沼・河川周辺のヨシ原の湿地に限られ生息し、その産地は大変局地的で希少種である。生息地周辺の湿地植生の遷移などにより、どこの生息地でも絶滅に瀕している（環境省, 2006, 2015）。青森県内では最近中泊町長泥のヨシ原で記録されている（横山, 2008）。生息地の岩木川河川敷のヨシ原は長年計画的に野焼きされ維持されてきたが、一部は開発や河川整備が行われ、ヨシ原に遷移が見られる。また、本種はオオハンミョウモドキ亜属のなかでも特に珍しい種類のため採集者による採集圧が絶滅の脅威となっている。生息地の環境保全と採集者のマナーの啓蒙が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　イワキナガチビゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Trechiama oreas* (Bates)

本種は、亜高山から高山帯に見られ東北地方北部などに分布している。土中に生息し、森林の渓流沿いの石下から採集される。体長６㎜内外と小さく後翅も退化して、移動力は低い。採集例の少ない種類である。本種は、岩木山から G. Lewis が1880年に採集した資料によって新種記載（Bates, 1883）された。青森県内では岩木山の他に横岳赤滝（八甲田山）（下山, 1978）などの高山帯からも記録された。生息地は国立（定）公園であり、登山道の整備、裸地化の改善、環境保全活動にも官民一体で取り組んでいるが、登山者も年々増えており、登山道以外の立入、山菜の採取などによる土壌環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　シラカミナガチビゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Trechiama albidivalis* S.Uéno

本種は、深浦町白神岳・天狗峠・一ツ森・青池、鰺ヶ沢町乱岩ノ森・二ツ森、そして秋田県の藤里町で採集された資料によって新種記載（S.Uéno, 1994）された、世界自然遺産「白神山地」及び周辺地域の固有種である。土中の浅層に生息している。体長６㎜内外と小さく、後翅が退化して、移動力が低い。環境の変化に大変敏感な種類である。白神山地及び周辺地域の環境が大変良好な状態で保たれてきた証拠となる種類で、近年登山者や観光客が増加しており、登山道や遊歩道も整備され環境保全活動も活発に行われているが、写真撮影などのため林内や湖岸などへの立入などが頻繁に見られ、土壌環境の劣化が危惧される。マナー向上など継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　シラカミメクラチビゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Oroblemus yamauchii* S.Uéno

本種は、深浦町白神岳で採集された標本によって新種記載（S.Uéno, 1993）されたが、個体数も少なく、世界自然遺産「白神山地」の固有種である。地中の浅層に生息し、体長3.3㎜内外で複眼と後翅は退化している。そのため移動範囲は大変に狭く、広範囲での移動は不可能であり、生息地は極端に限定される。白神山地の環境が大変良好な状態で保たれてきた証拠となる大変貴重な種類で希少種である（山内, 1996）。

本種は環境変化による土壌の乾燥などに大変弱く、環境悪化が起これば短期間で絶滅する可能性が高い。本生息地域は世界自然遺産登録地域で保護されている。しかし近年登山者が増加し、官民一体となって、登山道以外の立入禁止やゴミ・糞尿の処理に取り組んでいるが、土壌環境の悪化が危惧される。登山者のマナー向上など継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　オオワニメクラチビゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Kurasawatrechus nishikawai* S.Uéno

本種は、大鰐町十和田山で採集された標本によって新種記載された（S.Uéno, 1993）。個体数も少ない希少種である。地中に生息しており、複眼と後翅は退化して無く、移動力が低い種類である。本種は地上の環境変化に大変敏感で、土壌の乾燥に大変弱い種類である。環境が変化しても微小で複眼・後翅とも痕跡的にしか無いため、良好な環境を求めて移動することも出来ず、環境の変化によっては短期間で絶滅する可能性が高い。本地域の樹木伐採や水路の分断などの環境の変化が生息に大きな脅威となる。環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　オソレヤマミズギワゴミムシ **環境省：該当なし**
学名　*Bembidion negrei* Habu

本種は、国内では北海道・本州などに分布する。生息地は硫化水素の臭いのする温泉水の流れる水辺でのみ生息する（森田, 1984；山内, 1989；Morita, 2010）。生息環境が特殊なこともあり、本種が棲む生息地は局地的で少ない。本種は、むつ市恐山の宇曽利山湖湖畔で採集された資料によって新種記載された（Habu, 1958；森田誠司・山内智, 1986）。生息地は下北半島国定公園であり環境省の重要湿地にも指定され、観光客も年々増加している。生息地では湖畔まで人が入り込み、また車両が乗り入れられ、生息場所が踏み荒らされている。さらに継続した環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　スナハラゴミムシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Diplocheila elongate* (Bates)

本種は、国内では本州・四国・九州などの河川や溜池周辺の湿性草地に見られるが、その生息は局地的で全国的に少ないゴミムシである（環境省, 2015；森, 2018）。

青森県内では、つがる市高山稲荷（吉武ら, 2011）などから記録されているが、生息地周辺の草地環境は開発などで遷移しており、河川周辺の湿地草原の環境保全と県内での今後の調査が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　イグチケブカゴミムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Peronomerus auripilis* Bates

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。池沼や河川の水辺や湿地などの草地で見られるが、生息数は多くない。池沼や河川敷・湿地の整備等から、生息に適した環境が衰退し、全国的に生息が危惧されている（環境省, 2015；森, 2017）。

青森県内では三沢市八幡（山内, 1999）、三沢市仏沼・内沼（阿部ら, 2002）、つがる市森田、外ヶ浜町龍飛（吉武ら, 2011）などから記録されているが県内での記録は少なく希少種である。生息地では開発や整備が進んでおり、本種の生息適地が少なくなっている。水辺の環境保全が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　クマガイクロアオゴミムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Chlaenius gebleri* Ganglbauer

オサムシ類に共通の体形で、体色も黒色である。上翅の間室は光沢が鈍く、密生した暗色毛と金色の毛を交互に備えて縞模様になっている。同様の環境に生息するマークオサムシを小型にしたような種とも云える。青森県では岩木川河口部からの限定的な記録のみで（佐藤・尾崎, 2000）、北海道では多く、秋田県や関東からの記録もある。

生息域は、ヨシやイネ科等の水辺植物の生えた良好な環境であり、より水辺を好むと考えられることから、河川改修等でヨシ原の乾燥が進むと棲家も失われ、絶滅に追い込まれ易いと考えられる。

（佐藤隆志）

コウチュウ目　オサムシ科 **C**

和名　エチゴトックリゴミムシ **環境省：絶準滅危惧**
学名　*Oodes echigonus* Habu et Baba

本種は、本州・九州などの池沼周辺や湿地帯に生息する、好湿地性ゴミムシである。生息地は局地的で限られた環境に生息するが、全国的に池沼や湿地の開発などにより生息環境が劣化し、生息が危惧されている（森, 2011；藤本, 2013；環境省, 2015）。青森県内ではつがる市平滝沼（下山, 1979；吉武ら, 2011）などから記録されている。生息地は湿地草原が広がっているが、車両の立入や周辺では開発が進んで、生息に適した環境が失われつつある。池沼周辺の湿地草原の環境保全と県内での今後の調査が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　コツブゲンゴロウ科 **C**

和名　ヒゲブトコツブゲンゴロウ **環境省：該当なし**
学名　*Noterus angustulus* Zaitzev

体長4.0㎜前後。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では新潟県・福島県以北に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群（山崎・八木, 1992；山本, 1996；大高ら, 2008）、岩木川下流域（中根, 1993）、小川原湖湖沼群（堀, 2000；岩田ら, 2019）に局所的に生息する。同所的に見られ、平地から山地の池沼に普通なコツブゲンゴロウとは、雄では触角の形状で容易に区別できる。しかし、雌では体型がやや細い程度（体長は体幅の約２倍、コツブは２倍未満）で、区別は難しい。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　ヒメケシゲンゴロウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Hyphydrus laeviventris* Sharp

体長4.5～5.0㎜。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では北海道・本州・四国・九州に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群・岩木川下流域・小川原湖湖沼群の池沼や溜め池などに局所的に生息し（山崎・八木, 1992；中根, 1993；神奈川県立博物館編, 1995；林・初宿, 2003；山本, 1996；志賀ら, 2009；岩田ら, 2019）、個体数も少ない。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　ケシゲンゴロウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hyphydrus japonicus* Sharp

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。池沼・湿地帯などの止水域に見られるが生息地は局地的である。特に最近は池沼などの開発や水質汚染などで全国的に減少している（環境省, 2015）。青森県内からは古くは青森市・黒石市・八戸市などに普通に見られたが（石村・佐藤, 1941）、最近は深浦町十二湖（福田ら, 1995）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、つがる市冷水沼・ソリ沼・筒木坂５号溜池（大高ら, 2008）などから記録されているが、池沼周辺地の開発、水田放棄、外来魚の放流などによって、池沼の環境悪化や消失などから、個体数を減らしている。本種生息地の保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　ナガケシゲンゴロウ **環境省：該当なし**
学名　*Hydroporus uenoi* Nakane

体長3.5㎜前後。本種は本州（東北地方・中部地方）に分布し、本県は分布の北限に当たる。正式な報告例は少ないが、屏風山湖沼群と岩木川下流域・三沢市の湿原内の水溜まりや池塘に局所的に生息する（山崎・八木, 1992；Nilsson & Nakane, 1993；山本, 1996；池田・高橋, 2003；鳥羽, 2011；岩田ら, 2019）。近年、乾燥化が激しく、生息域が急激に狭められている。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、減少・絶滅するおそれがある。小型だが産地が極めて限定されることから人気が高く、採集による影響も大きい。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　コウベツブゲンゴロウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Laccophilus kobensis* Sharp

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布している。平野部の池沼・湿地帯などの止水域に見られるが生息地は局地的で、開発や水質汚染などから全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから最近記録されているが、池沼や湿地などの開発、整備、外来魚の放流などで、良好な水生植物群落が失われてきており、溜池などの維持管理と環境保全、県内各池沼などでの今後の調査が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　ルイスツブゲンゴロウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Laccophilus lewisius* Sharp

本種は、日本国内では本州・四国・九州などに分布する。平野部の水生植物が繁茂している池沼や湿地帯などに生息しているが、開発などで池沼環境が衰退し、全国的に分布は局地的で個体数が減少している（環境省, 2015；森・北山, 1993）。青森県内からは、青森市梵珠山滝巻沢（山内, 1996）、つがる市冷水沼・ソリ沼・筒木坂５号溜池（大高ら, 2008a, 2008）などから記録されている。生息地の屏風山地区も、池沼や湿地の開発や外来魚の放流などにより生息に適した環境が衰退してきており、個体数ともに減少してきている。溜池などの維持管理と環境保全、県内各池沼などでの今後の調査が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　キベリクロヒメゲンゴロウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ilybius apicalis* Sharp

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。丘陵地などの水生植物が生育している池沼などに生息しているが、開発などにより池沼が衰退して、全国的にやや局地的で個体数が減少している（環境省, 2015）。最近、青森県内では東通村小沼・荒沼（大高ら, 2008b；木村ら, 2018）、つがる市平滝沼（大高ら, 2008a, 2008）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されているが、池沼の減少と外来魚の放流などによる環境の悪化で、生息地・個体数ともに減少してきている。生息地の環境保全が必要である。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　シマゲンゴロウ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hydaticus bowringii* Clark

体長12～14.5㎜。平地から丘陵地の水生植物の豊富な浅い池沼や溜め池などに生息する。本種は国内では北海道から南西諸島まで分布し、県内でも、かつては山形村、黒石町（ともに現黒石市）（石村・佐藤, 1941）や森田村（現つがる市）（阿部, 2008）など、局所的だが広く分布していたようである。本種の記録は非常に少なく、正式な報告例は横浜町（1999年：阿部, 2008）と三戸町（1991～1993年：田沢, 2000）だけであったが、2019年に大鰐町で生息が確認された（渡辺・大庭, 2019）。現在生息している場所での土地開発（開墾・埋め立て）や水質汚染（農薬・廃液）、護岸工事が進めば、容易に減少・絶滅するおそれがある。成虫で越冬する。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　**マルガタゲンゴロウ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Graphoderus adamsii* (Clark)

体長12～14.5㎜。平地から丘陵地の水生植物の豊富な止水域に生息する。本種は国内では北海道・本州・四国・九州に分布し、県内では正式な報告例は少ないが、1990年代までは屏風山湖沼群や岩木川下流域などの平地から丘陵地の池沼や溜め池などに生息していた（山崎・八木, 1992；山本, 1996；初宿, 2011）。しかし、2000年代以降、急激に減少した。全国的にも減少が著しく、環境省編（2015）によれば、各地でアメリカザリガニ等の侵略的外来種の侵入により減少しているという。近年、本種の生息域である平地から丘陵地の池沼や溜め池などでもオオクチバスやアメリカザリガニ、ウシガエルが多く見られるようになったことから（青森県, 2006）、既に絶滅あるいは絶滅の危機にある場所も多い。 **（櫛田俊明）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　**クロゲンゴロウ** **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cybister brevis* Aubé

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布する。平地の水生植物が生育している池沼や水田・湿地などに生息しているが、やや局地的である。開発や整備・水質汚染などにより全国的に生息地及び個体数が少なくなっている（環境省, 2015）。青森県内では八甲田、八戸市（石村・佐藤, 1941）、つがる市コケヤチ（阿部, 2008）などから記録されているが、開発などによる池沼や湿地の減少と外来魚の放流などによる環境の悪化で、生息地・個体数ともに激減し絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼保全が必要である。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　**ゲンゴロウ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cybister chinensis* Motschulsky

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などで、山地から平野部まで広く分布している。本種は水生植物が生育している池沼や水田・湿地などを生息地とし、小魚や昆虫などを食べている。全国的に各地に普通であったが、池沼の農薬などによる水質汚染、外来魚の放流などによる環境の劣化などによって全国的に激減している（日本野生生物研究センター , 1980；環境省, 2006, 2015；森・北山, 1993）。青森県内では戦前は各地の池沼に普通であったが（石村・佐藤, 1941）、最近は三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）、東通村下小沼（木村ら, 2018）などから記録されている。生息地・個体数ともに激減し絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼の保全が必要である。 **（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **C**

和名　**エゾゲンゴロウモドキ** **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Dytiscus marginalis czerskii* Zaitzev

本亜種は、国内では北海道・本州中部以北の山間部の水のきれいな池沼に生息している。個体数は少なく環境の変化に弱い。本州の生息地は局地的である（環境省, 2006, 2015）。青森県内では、八戸市（中根, 1986）、むつ市川内（下山ら, 1986）、鰺ヶ沢町ノロ沼・青沼・乱岩ノ森、深浦町追良瀬川（阿部ら, 1987）、大鰐町十和田山（櫛田ら, 1990）、深浦町十二湖（森・北山, 1993）、十和田市蔦（櫛田, 1995）などから記録されている。近年、深浦町十二湖では心ない採集者の乱獲により、個体数が激減した。他地域でも乱獲や池沼への外来生物流入などにより環境が生息に適しなくなってきており、生息地や個体数が減少して絶滅が危惧される。生息に適した良好な環境の池沼の保全が必要である。 **（山内智）**

コウチュウ目　ミズスマシ科 **C**

和名　オオミズスマシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Dineutus orientalis* (Modeer)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。自然環境が残された池沼の止水域に生息するが、池沼の開発や整備・水質汚染などにより全国的に生息地及び個体数が少なくなっている（環境省, 2015）。青森県内では青森市横内、黒石市、八戸市（石村・佐藤, 1941）など各地に見られていた。最近はつがる市大滝沼・平滝沼（大高ら, 2008a）、東通村左京沼（大高ら, 2008b；木村ら, 2018）、つがる市大滝沼・ベンセ沼・筒木坂５号溜池（大高ら, 2008）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　ミズスマシ科 **C**

和名　ミズスマシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Gyrinus japonicus* Sharp

本種は、北海道・本州・四国・九州などに分布する。主に平野部にある良好な環境に残された池沼に見られる。本種は以前全国的に普通に見られる種類であったが、池沼の衰退や環境悪化などから絶滅が危惧されている（佐藤, 1977：環境省, 2015）。青森県内でも以前は各地に普通に生息していた（石村・佐藤, 1941）が、最近は深浦町赤石川（青森県立郷土館, 1988）、深浦町森山（福田ら, 1995）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　ミズスマシ科 **C**

和名　ヒメミズスマシ **環境省：絶滅危惧ⅠＢ類**
学名　*Gyrinus gestroi* Régimbart

本種は、本州・四国・九州などに分布している。池沼の良好な環境が残された止水域の水面を生活の場にしているがもともと個体数は少ない（佐藤, 1977）。開発や水質汚染などから水中・水面とも環境が悪化し、全国的に絶滅に瀕している（環境省, 2015）。青森県内でも以前各地に普通に生息していた（石村・佐藤, 1941）が、最近は深浦町赤石川（青森県立郷土館, 1988）、深浦町森山（福田ら, 1995）、つがる市冷水沼・出来島２号溜池・平滝沼（大高ら, 2008）、東通村左京沼（木村ら, 2018）、三沢市仏沼（岩田ら, 2019）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから他県同様その生息地及び個体数を減らしている。池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　ガムシ科 **C**

和名　ガムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hydrophilus acuminatus* Motschulsky

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布し、池沼などの止水域を主な生息地としている。開発などで全国的に生息に適した池沼などが減少し、本種の生息も衰退している（環境省, 2015）。青森県内でも以前は普通に見られたが（石村・佐藤, 1941）、池沼開発、水田整備、外来魚流入などからその生息地及び個体数を減らしている。最近は三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；岩田ら, 2019）、平川市、弘前市浜の町、西目屋村砂子瀬、つがる市コケヤチ、鶴田町胡桃舘（阿部, 2013）、弘前市弘前だんぶり池（木村ら, 2016）などから記録されている。本種は池沼や湿地の開発、水質汚濁、外来魚流入による捕食圧などから生息地及び個体数を減らしており、池沼の環境保全と本種の保護が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　ガムシ科 **C**

和名　エゾコガムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hydrochara libera* (Sharp)

ゲンゴロウ類と同様に扁平・楕円形で、水中生活に適応した形態を有し、県内では五所川原市十三湖鳥谷川河口、中泊町十三湖南岸、つがる市豊富・牛潟池・袴形池・平滝沼、東通村尻屋崎・荒沼、むつ市八忠沼での記録がある（林・八木, 2000；佐藤, 2006；吉冨ら, 2001）。

また、以前は北日本中心の記録であったが、近縁のコガムシとの再検討が進んだことで、近畿、広島県（秋山, 2004）・佐賀県でも分布することが確認された。

生息域は、津軽半島・下北半島の湿原地帯であり、水生植物が繁茂する良好な止水環境と考えられ、池の富栄養化に伴う水質悪化等により、種の維持が困難になり易いものと予想される。

（佐藤隆志）

コウチュウ目　オサシデムシ科 **C**

和名　ツガルホソシデムシ **環境省：該当なし**
学名　*Lyrosoma pallidum* (Eschsholtz)

本種は、国内では北海道・本州北部に分布している。青森県内からは外ヶ浜町龍飛崎の海岸の波際の石下（Mroczkowski, 1959；下山, 1978）、深浦町森山の海岸の砂浜（福田ら, 1994）などから記録された。いずれの生息地も海岸であり、生息地も局地的で個体数も少ない希少種である。青森県以外では、北海道（Shibata, 1969；吉田, 2014）と岩手県（中村, 1985）などの海岸からも記録されている。

生息地が海岸と言う特殊な場所であり、海岸の開発、車両立入などによる環境の衰退が生息に影響する。小石や礫が自然状態で堆積した部分を含めての砂浜の環境保全の配慮が必要である。

（山内智）

コウチュウ目　クワガタムシ科 **C**

和名　オオクワガタ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Dorcus hopei binodulosus* Waterhouse

本亜種は国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布している。山里の開発や採集圧等により全国的に生息地や個体数とも絶滅が危惧されている（環境省, 2015；岡島ら, 2012）。青森県内では主に環境の良いブナ林に生息しており個体数は少ない。十和田市蔦・青撫山（山谷, 1938）、青森県（山谷, 1938）、八甲田山（石村・佐藤, 1941）、十和田市宇樽部、新郷村迷ケ平、青森市酸ヶ湯（柏崎, 1974）、十和田市焼山・蔦（下山, 1985, 1988, 1989）などで朽木や灯火飛来した個体が記録されている。県内でも森林の開発や採集のための朽木の分解などの採集圧のため、生息に適した環境が失われてきており、生息地の環境保全と保護が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　コガネムシ科 **C**

和名　ダイコクコガネ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Copris ochus* (Motschulsky)

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。牧場などの獣糞にあつまり、灯火にもよく飛来する。酪農の放牧地や飼養頭数が飼養家の減少や飼養形態の変化などから減少しており、それに伴うように全国的に本種も生息地及び個体数とも激減している（川井ら, 2008；環境省, 2015）。青森県内では、東通村尻屋（山内, 1981；福田ら, 1998）、東通村下田代（山内, 1981）などで放牧場の牛糞から、東通村小田野沢、横浜町桧木（山内, 1983）では灯火に飛来した個体が記録されている。

青森県でも酪農家の高齢化や後継者の問題から、酪農家戸数、乳用牛・肉用牛の飼養頭数も年々減少している（青森県農林水産部畜産課, 2019）。本種の生息に適した環境も少なくなっている。今後、各地域の放牧地での詳しい調査が待たれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　コガネムシ科 **C**

和名　ミヤマダイコクコガネ **環境省：該当なし**
学名　*Copris pecuarius* Lewis

本種は国内では本州・四国・九州などに分布し、牛馬糞に集まることが多く、灯火にも飛来する（川井ら, 2008；岡島ら, 2012）。産地は限られ少ない。本種は高原の放牧地に見られることが多く、青森県内では、青森市田代平、平川市湯ノ沢（阿部, 1980）、むつ市大室平（斎藤, 1987）、青森市田代平・寒水沢・萱野茶屋、十和田市蔦・焼山（斎藤, 1993）などの記録がある。八甲田山地の高原に広がる放牧地に記録が集中している。

飼養形態の変化、また飼養戸数や放牧地の減少（青森県農林水産部畜産課, 2019）が生息に影響している。森林内の獣糞にも集まることから、明細な調査が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　コガネムシ科 **C**

和名　オオチャイロハナムグリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Osmoderma opicum* Lewis

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布し、自然度の高い地域に分布する希少種であるが、森林の伐採、林道整備などで絶滅が危惧されている（環境省, 2006, 2015）。幼虫は森林内の大径木の樹洞内に溜まったフレークを食べているが、ブナ・スギに多いと言う（大野, 1987）。青森県内では、十和田市蔦（古川, 1928）、十和田市十和田湖（平山, 1936）、十和田市奥入瀬（山谷, 1936）、三戸町（渡邊, 1937）、平川市御鼻部山（山谷, 1943）、むつ市恐山（鈴木ら, 1951）、平川市矢捨山、深浦町十二湖（五所川原農林高校自然科学部, 1966）、むつ市薬研（太田ら, 1970）、鰺ヶ沢町赤石川（櫛引, 1971）、弘前市中村川（阿部, 1972）、青森市野内川（木村, 1973）、中泊町七ツ滝（阿部・藤田, 1976）、十和田市青撫山（山谷, 1977）、田子町雷鉢森（漆館ら, 1978）、鰺ヶ沢町女行沢・乱岩森、深浦町追良瀬川、平川市滝ノ沢、青森市田代平（阿部, 1980）、中泊町折腰内、弘前市高岡、平川市尾崎山・温川、十和田市黄瀬川（成田, 1980）、弘前市湯口山（下山, 1989）、鰺ヶ沢町奥赤石（下山ら, 1991）、十和田市赤沼沢（山内, 1999）、七戸町大坪川（上原, 2007）などの自然林で確認されているが、どこでも確認個体数は少なく、継続した生息調査と樹洞を形成する巨木などのある自然林の環境保全が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　コメツキムシ科 **C**

和名　キベリマルヒサゴコメツキ本州亜種 **環境省：該当なし**
学名　*Hypolithus littoralis michinoku* Kishii

本亜種は、国内での分布は本州で、風間浦村蛇浦をタイプ産地に新亜種として記載された（Kishii, 2004）。その生息地は海岸で特殊な種類である（大平, 1963）。産地は局地的で、採集記録が少ない希少種である。青森県内では、他に、東通村野牛・岩屋、大間町大間平（荒木, 1995）などの下北半島の海浜で確認されている。

本亜種の生息地は海岸で特殊な環境であり、青森県内では下北半島の津軽海峡に面した地域で確認されている。海岸の環境保全と、記録がみられない太平洋沿岸、陸奥湾沿岸、日本海沿岸での分布の詳しい調査研究が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　コメツキムシ科 **C**

和名　シモヤマミヤマヒサゴコメツキ **環境省：該当なし**

学名　*Homotechnes motschulskyi shimoyamai* (Ôhira)

本亜種の属するミヤマヒサゴコメツキ類は、国内から多くの亜種が知られている。本亜種は、深浦町白神岳から採集された資料によって新亜種記載（大平・下山, 1984）された。この他深浦町笹内川（福田ら, 1993）などからの記録がある。白神山地固有種で、生息地が限定され、個体数の少ない希少種である。本亜種は白神岳を中心に生息するが、隣接する秋田県二ツ森、鰺ヶ沢町乱岩の森には別亜種トウホクミヤマヒサゴコメツキが生息する（Kishii, 1999）。白神山地の中で２亜種に分かれたのは赤石川・追良瀬川などの河川が関係している可能性がある（山内, 1994）。種の分化の問題からも貴重な種類である。

生息地は、世界自然遺産登録地域で保護されているが、近年、白神岳及び周辺地域への登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化が心配され、本種の生息が危惧される。

（山内智）

コウチュウ目　コメツキムシ科 **C**

和名　チビヒサゴコメツキ本州亜種 **環境省：該当なし**

学名　*Hypnoidus rivularius rivalis* (Lewis)

本種は、高山性で産地が局地的な希少種である。G. Lewisが1880年に岩木山山頂付近で採集した標本によって新種記載（Lewis, 1894）された。その後本州亜種となった。

本種は、青森県・秋田県・岩手県・山形県・福島県の東北地方などに分布（Kishii, 1999）するが、青森県内では岩木山（Lewis, 1894）、岩木山、八甲田山（Kishii, 1962）、十和田市黄瀬菟（青森県, 1993）、弘前市岩木山（大平・山内, 1994）、青森市大岳（大平・山内, 1997）などの記録がある。これら山頂付近の石下から発見されることが多い。県内の生息地は、国立（定）公園に指定され保護されているが、近年の登山者の増加により、環境が悪化しており、青森県が中心になって岩木山、八甲田山の両地域の山頂付近の表土の保全対策などを行っているが、本種の生息が危惧される。

（山内智）

コウチュウ目　コメツキムシ科 **C**

和名　ミチノクシモフリコメツキ **環境省：該当なし**

学名　*Actenicerus nempta* Kishii

本種は、青森県・岩手県などに分布（Kishii, 1999）する希少種である。本種は、青森市酸ヶ湯、十和田市谷地・猿倉と岩手県松尾村の資料に基づいて新種記載（Kishii, 1996）された。他に青森県内からは青森市毛無岱（大平・山内, 1997）、十和田市猿倉岳、平川市ズネカ森（大平・山内, 1998）などから記録されている。本種は、高層湿原の湿地内に残されたダケカンバやチシマザサなどの葉上から見出され、幼虫の生息場所は湿地性の傾向が強いと思われる（大平・山内, 1997）。生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で昆虫採集の禁止区域で保護されているが、成虫・幼虫の生息環境である湿地帯への入山者、山菜採取者の立入などにより環境が悪化し、本種の生息が危惧される。

（山内智）

コウチュウ目　コメツキムシ科 **C**

和名　エゾクロツヤミズギワコメツキ本州亜種 **環境省：該当なし**
学名　*Fleutiauxellus yezoensis tsugaru* Ôhira

本亜種は、青森市酸ヶ湯の山道の砂礫中から採集された資料を基に新種記載（大平, 1994）された。分布が局地的な希少種である。

本亜種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内で温泉地でもあり北八甲田の登山口にあたり、登山者や車両の出入りも多く、環境が悪化し、生息が危惧される。今後も継続した環境の保全活動が必要である。本亜種の分布や生態など不明な点もあり、今後の詳しい調査が待たれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ホタル科 **C**

和名　ゲンジボタル **環境省：該当なし**
学名　*Luciola cruciata cruciata* Motschulsky

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布し、国内の自然分布では青森県が分布の北限である。青森県内では弘前市、大鰐町、平川町、黒石市、西目屋村、青森市（阿部, 1980）、八戸市（福田, 1984, 1988）、むつ市新助川（下山ら, 1986）、青森市八甲田山鏡沼、十和田市蔦（中根, 1987）、東通村大沼（福田ら, 1997）、むつ市脇野沢（山内・三上, 1998）、中泊町下高根（山内, 2000）などから記録されている。十和田市などでは前胸の無紋型が確認されている（中根, 1987）。生息河川の水質汚染、護岸等で生息環境が悪化している。また本種には発光周期から東日本型と西日本型が知られ（大場, 2004）、遺伝的にも地域固有性が高いことが確かめられている（Suzuki *et al.*, 2002）。近年、他地域個体群の放飼が行われ、在来個体群との雑交により、遺伝子浸透や攪乱などから遺伝的固有種の絶滅が危惧されており、他地域からの放飼は慎むべきである（山内, 2007）。 **（山内智）**

コウチュウ目　テントウムシ科 **C**

和名　ルイヨウマダラテントウ **環境省：該当なし**
学名　*Henosepilachna yasutomii* Katakura

本種は、国内では北海道・本州中部以北などに分布するが、その分布は局地的で、県内での産地は食草であるルイヨウボタン群落とともに点在している（安富, 1973；富岡, 1983, 1986；山内, 1994, 1996）。本種は、十和田市蔦のルイヨウボタンを摂食していた個体によって新種記載（Katakura, 1981, 福田, 1970）された。本種は食性の地域分化が著しく、ルイヨウボタン・トチバニンジン・ジャガイモなどの食草によって、生育完了・羽化率・幼虫期間など地域によって違いが報告され、また本種が属するオオニジュウヤホシテントウ群のジャガイモへの害虫化について多くの研究が行われている（安富, 1974, 1976, 1977；片倉, 1988；山内, 1994）。

西津軽郡で確認された個体群では林内での食草の摂食衰退から、越冬個体がルイヨウボタンからトチバニンジンに移動し世代交代し、新成虫の一部が林内に食草がなくなると隣接するジャガイモ畑に移動した。翌年この越冬個体が林内のルイヨウボタンで再確認された。害虫化の一例が確認された（山内, 1994）。なお本個体群は青森県に分布しないヤマブキソウも好食するがタイプ産地の蔦個体群は食べない。なお、本個体群は環境の変化により現在は生息が衰退している。

本種の害虫化の研究上、タイプ産地である蔦個体群との食性の比較は研究上不可欠である。蔦個体群の生息地は十和田八幡平国立公園に指定され食草は保護されているが、昆虫採集は禁止されていない。環境変化がないのにタイプ産地での個体数が異常に減少し、まったく生息が確認できない年もあった。減少原因は明確でないが採集圧も原因の一因と思われる。タイプ産地の個体数は以前よりもかなり少なく回復はしていないが毎年見られる。本種は、主食草であるルイヨウボタン群落があっても生息しない群落もあり、森林開発などの環境変化で、短期間に衰退する。県内全域での生息環境の保全が強く望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ホクチチビハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Alosterna tabacicolor fusca* Matsushita

国内では北海道・本州・利尻島・佐渡などに分布しており、成虫は夏期にオオハナウド・ヤグルマソウ・ショウマ類など草本類の花から採集される。

北海道では普通であるが本州では個体数は少ない。青森県内での記録は深浦町（阿部, 1974）と中泊町小泊袰内、深浦町追良瀬川上流（下山ら, 1982）の記録がある。県内での詳しい分布や幼虫の寄主植物などの調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヒゲブトハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Pachypidonia bodemeyeri* (Pic)

本種は原生林の大木の樹洞内に生息するが個体数は少ない。樹洞を持つ大木の混在するような環境は限定され、ますます減少しつつあるように思われることから、生存が危惧される種類である。本種は、北海道・本州・四国・九州に分布するが、いずれの産地でも非常にまれである。幼虫はブナの樹洞内から発見され、成虫はノリウツギの花に来る。

青森県内での記録は1954.8の１個体（下山, 1964a）、1978.7の１雄（毛塚, 1982）、1987.8の１雄（三上隆司, 私信）で十和田湖周辺と弘前市相馬で採集されている。また、近年十和田市谷地（上原, 2011）でも記録されている。大径木を有する自然林の存続が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヤマトキモンハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Judolia japonica* (Tamanuki)

本種は個体によって斑紋（上翅黄紋）の変化の大きい種であり、北海道・本州・九州に分布しているが個体数は少ない。

青森県内では弘前市（鈴樹, 1986）、中泊町小泊（大西, 1992）、弘前市岩木（工藤周二, 私信）などの記録があり、クリの花上から採集されている。他県ではノリウツギやリョウブなどに訪花した成虫も得られている。保護対策のためには、訪花する樹木の混在する雑木林等の保全に配慮する必要がある。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　イガブチヒゲハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Stictoleptura igai* (Tamanuki)

国内では本州・四国・九州に分布しているが、その生息地は局地的で個体数も少ない。

青森県内では、弘前市相馬村で1981年～1998年にかけて数十頭の個体が記録されているが（三上・佐藤, 1981；三上隆司, 私信）、地理的にみて非常に特殊な分布のように思われる。他に1985年に大鰐町（工藤周二, 私信）、弘前市（鈴樹, 1988）で数個体記録されている。幼虫の食樹としてトウヒ、サワラが知られているが、本県ではヒバで確認された（三上, 1989）。

生息地は限られているが、上記地域以外のヒバ林での詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　オオハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Konoa granulate* (Bates)

国内では北海道・本州に分布するが、東北地方では非常にまれである。

青森県内では十和田でヤマアジサイの花やブナの朽木から採集された（下山, 1964a）。他に、八甲田山系（尾崎, 1988；尾崎・鈴樹, 1989）、七戸町大坪川（上原, 2009, 2012）、十和田市谷地1998.8.19の１雄（工藤周二, 私信）の記録がある。

幼虫の食樹としてブナ、ダケカンバ、モミが知られている。本県ではノリウツギに訪花中のものも得られており、またブナの立ち枯れ木に飛来することが知られている。さらに、寄主植物の分布する山間地での詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　コウヤホソハナカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Strangalia koyaensis* Matsushita

国内では本州・四国に分布するが、関東以北では非常にまれである。東北地方では青森県と秋田県で記録されているだけで、非常に特殊な分布をしている。

青森県内では弘前市相馬で数個体記録されており（三上・佐藤, 1981；三上, 1986）、ノリウツギの花から採集されている。また、幼虫の食樹としてスギやヒノキが知られているが、弘前市相馬ではヒバを食樹とすることが判明している（三上, 1989）。

県内の生息地は限定されているが、ヒバ林が分布する他地域での詳しい調査が望まれる。

（今純一）

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　オニホソコバネカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Necydalis gigantea gigantea* Kano

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、非常にまれである。他県ではクワ古木のコルク質部に幼虫が寄生するため、古木のある桑畑で採集される。しかし、桑畑は全国的に消滅しつつあり、今後さらに採集が困難になることが考えられる。

青森県内では、十和田市（三上, 1987）、五所川原市市浦（大西, 1992）、今別町（上原, 2012）で記録されているが、採集地での乱獲による生息環境の悪化から、生息の継続が危惧される。

保護対策から県内の上記以外の残されたクワ古木での調査が必要である。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヒゲシロホソコバネカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Necydalis odai* Hayashi

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、非常に稀である。

青森県内では、平川市大木平、十和田でミズナラの立木の枯死部から採集された記録（下山, 1964a）がある。この他に1996～1997年に中泊町小泊でミズナラの立ち枯れから十数頭採集されており（三上隆司, 私信）、近年、青森市田代平（上原ら, 2017）からも記録された。

幼虫の食樹であるミズナラは県内各地に見られることから、新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。また、ミズナラの生育する生息環境の保全が望まれる。

（今純一）

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヨコヤマヒメカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Ceresium holophaeum* Bates

国内では本州・四国・九州・南西諸島などに分布する。南西諸島では普通種であるが本土域では少なく、東北地方では非常に稀である。

青森県内では鰺ヶ沢町（三上, 1988）や中泊町三角山（大西, 1993）の海岸近くで記録されており、オオバクロモジ、イタヤカエデ、ヤブツバキなどの枯枝から脱出したものが得られている。

今後の調査で新産地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。また、寄主植物の分布する里山の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ツシマアメイロカミキリ本土亜種 **環境省：該当なし**
学名　*Obrium obscuripenne takakuwai* Niisato

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが少ない。本亜種はサドチビアメイロカミキリとも呼ばれていた。

青森県内では平川市大木平と大鰐町長峰でゴトウヅルの花から採集された記録がある（下山, 1964b）。他県では幼虫がオニグルミ、ケヤキ、ヤチダモ、アオダモを食樹とすることが判明している。

本種の寄主植物は里山に広範囲に分布しているので、今後新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Glaphyra nitida nitida* (Obika)

国内では本州・四国に分布するが、産地は局地的である。

青森県内では鰺ヶ沢町然ケ岳のエゾエノキの材から脱出した個体が得られている（三上, 1989）。本種はカエデ類の花に飛来することが知られており（大林ら, 1992）、寄主植物であるエゾエノキは県内各地に見られることから、今後、新しい生息地が確認される可能性があり、さらに詳しい調査が必要である。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　オダヒゲナガコバネカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Glaphyra gracilis* (Hayashi)

国内では本州・四国・九州に分布する。

青森県内では十和田市猿倉温泉付近でミズキの花から得られており（尾崎, 1986）、1997年にアオモリトドマツの材から脱出した記録がある（三上隆司, 私信）。さらに、青森市酸ヶ湯（上原, 2008, 2012）、十和田市谷地、青森市萱野高原（上原, 2013）で採集されている。

幼虫の食樹であるアオモリトドマツが分布する、上記産地以外での詳しい調査が望まれる。

（今純一）

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ムモンベニカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Amarysius sanguinipennis* (Blessig)

国内では本州・九州に分布するが少ない種である。

青森県内では階上町名久井岳（小倉, 1971）や弘前市相馬（三上・阿部, 1985）での記録があり、コナラやオオバクロモジの材から脱出したものが採集されている。本種の寄主植物は前記の他、ケヤキ、クリ、イタヤカエデなど多数確認されている（小島ら, 1986）。また、成虫がカシワの新葉を後食することが知られている（小島ら, 1986）。

これらの寄主植物は本県の里山や山間地に広く分布していることから、さらに詳しい調査が必要である。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ハセガワトラカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Teratoclytus plavilstshikovi* Zaitzev

国内では北海道・本州に分布するが、その産地は局地的で、個体数も少ない種である。

青森県内では佐井村の記録があり（斉藤, 1989）、幼虫はヤマブドウやノブドウに寄生することが知られている。成虫も山林のヤマブドウの枯蔓の叩き網などで採集される。

本県での記録は少ないが、寄主植物であるヤマブドウは里山や山間地の林縁部に広く分布していることから、さらに詳しい調査が望まれる。遷移の進行や山地開発などにより、本種の生息地は減少しているものと思われ、山間地の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　トウホクトラカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Chlorophorus tohokensis* Hayashi

国内では北海道・本州北部（東北地方）に分布するが、局地的で産地は少ない。

本種は、平川市温川の標本で新種記載された（Hayashi, 1968）。この他、青森県内では中泊町七ッ滝（下山ら, 1982）、弘前市藍内、むつ市湯ノ沢（尾崎, 1985）、十和田市宇樽部、横浜町八郎烏帽子（西沢, 1987）でノリウツギの花上から少数の個体が採集されている。また、1990・1995・1996年に中泊町小泊のヤマブドウの枯れ蔓から、多数の個体が脱出した記録がある（三上隆司, 私信）。寄主植物であるヤマブドウは里山や山間地の林縁部に広く分布していることから、さらに詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヒトオビチビカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Sybra unifasciata* Fujimura

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、全国的に少ない。

青森県内では弘前市座頭石・久渡寺山（佐藤, 1984）、深浦町森山（福田ら, 1996）で採集されている。また、弘前市相馬のマルバマンサク（三上, 1990）、五所川原市のエゴノキ（三上隆司氏, 私信）の材から成虫が脱出した記録がある。個体数は非常に少ない。本種の寄主植物は前記の他、オニグルミ、サワグルミ、コナラなど多数確認されている（大林ら, 1992）。広葉樹林での叩き網などで採集されているが、本種の生息地は減少しているものと思われ、寄主植物が生育している里山や山間地の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ケマダラカミキリ本州亜種 **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Agapanthia daurika sakaii* Hayashi

山地の草原に生息している種類であり、個体数は少ない。このような生息環境はもともと不安定で開発の影響も受けやすく、個体群を維持できるような地域は減少しているものと思われる。本亜種はミチノクケマダラカミキリとも呼ばれていた。

本亜種は本州北部に分布し、青森県内では五所川原市飯詰で1974.5.21に１雌採集されている（阿部・藤田, 1976）。成虫はヨモギやハンゴンソウなどの草本の葉や茎に見出され、幼虫はハンゴンソウの茎を食べる。

遷移の進行や山地開発により、本種の生息地は減少しているものと思われる。山間地の生息環境の保全が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　アカガネカミキリ本州亜種 **環境省：該当なし**
学名　*Plectrura metallica yoshihiroi* Takakuwa

本亜種は本州山地（中部山岳地帯東部・東北地方）に分布するが、個体数は少ない。成虫は登山道沿いの枯れ枝・枯葉などから見つかることがある。本亜種はホンドアカガネカミキリとも呼ばれていた。

青森県内では八甲田山系（尾崎, 1993；上原, 2009, 2011, 2012, 2013）、むつ市川内（下山ら, 1986）、岩木山周辺（三上隆司, 私信）で採集されており、青森市酸ケ湯のアオモリトドマツ（三上隆司, 私信）やコメツガ（三上, 1990）の材から成虫が脱出した記録がある。本種が生息する山間地の環境保全に配慮することが望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヒメビロウドカミキリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Acalolepta degener degener* (Bates)

本種は、個体数の少ない種類で低地の草原に生息する。このような生息環境は植生遷移や開発の影響を受けやすい。

本種は国内では本州・九州・対馬に局地的に分布し、東北地方では深浦町と秋田県八峰町（八森岩舘）、岩手県宮古市（新里）、宮城県白石市の記録がある。青森県内では、深浦町で1991.7.27に２個体（尾崎・一戸, 1992）、深浦町岩崎で1992.7.25～1992.8.29に数十個体（三上, 1993）、深浦町岩崎で1995.7.9に９個体（三上隆司, 私信）が海岸域で採集されている。成虫は草地のオトコヨモギやヨモギに集まり、幼虫はこの茎に穿入して加害する。護岸工事などにより、本種の生息地は減少しつつあり、海岸の自然草地の保全が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヨコヤマヒゲナガカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Dolichoprosopus yokoyamai* (Gressitt)

国内では本州・四国・九州に分布し、青森県が北限である。幼虫はブナの生木に寄生することが知られている。成虫は夏期に寄主植物であるブナ生木で見られるが、灯火にも飛来する（日本鞘翅目学会, 1984）。

青森県内では深浦町白神岳（長尾, 1984）、深浦町櫛石山、青森市梵珠山沢内沢（村上, 1993）、中泊町今泉（上原, 2008）、青森市下湯（上原, 2012）などで採集されているが、個体数は少ない。中泊町小泊では海岸近くにあるブナの大木から、一度に数十頭の個体が採集された記録がある（大西, 1994）。本県ではブナ林が山間地に広く分布していることから、新産地が確認される可能性があり、今後の調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　シロオビドイカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Mimectatina fuscoplagiata* (Breuning)

国内では、北海道・本州に分布する。本州では中部山岳地帯や青森県などで採集されているが、個体数は非常に少ない。

青森県内では、十和田市猿倉温泉付近で採取したアオモリトドマツの枯枝から脱出した２頭を記録している（三上, 1997）。本種の寄主植物に本県で普通に見られるオオカメノキ（日本鞘翅目学会, 1984）なども知られており、県内での詳しい分布や幼虫の寄主植物との関連の調査が望まれる。

山地開発などにより、本種の生息地は減少していると思われる。山間地の生息環境の保全に配慮することが望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　トホシカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Saperda alberti* Plavilstshikov

国内では北海道・本州に分布しているが、個体数は少ない。

成虫はヤナギ類の立ち枯れ木などに集まり、幼虫はドロノキやヤナギ類に寄生することが知られている。

青森県内では平川市滝ノ沢（下山, 1964c）で記録されている。県内での分布や生態については殆ど知られていないが、寄主植物であるドロノキは山間地の渓流沿いに多く分布していることから、山間地での詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　カミキリムシ科 **C**

和名　ヤツボシカミキリ **環境省：該当なし**
学名　*Saperda octomaculata* Bleesig

国内では北海道・本州に分布するが、個体数は少ない。本種はサクラやナナカマドなどの伐採木に集まり、アズキナシの葉を後食することが知られている。また、灯火にも飛来する。

青森県内では平川市大木平（下山, 1964c）、鰺ヶ沢町（鈴樹, 1991）で採集されており、また、青森市城ケ倉のナナカマドの材から成虫が脱出した記録がある（三上, 1990）。

幼虫の寄主植物であるナナカマドは県内の山間地に広範囲に分布することから、山間地の詳しい調査が望まれる。 **（今純一）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　オオヨモギハムシ **環境省：該当なし**
学名　*Chrysolina angusticollis* (Motschulsky)

本種の国内での分布は、北海道と本州北部の青森県・岩手県などである（木元・滝沢, 1994）。本種の後翅は退化して飛べなく、食草としてキク科植物が確認されている。生息地での個体数は少なく、分布は局地的である。

青森県内では、深浦町十二湖（五所川原農林高等学校自然科学部, 1966）、中泊町小泊（同, 1970）、岩木山、深浦町追良瀬川、鰺ヶ沢町真瀬岳（阿部, 1980）、中泊町冬部沢・袰内、外ヶ浜町算用師、金木町（下山ら, 1982）、東通村桑畑山（福田ら, 2001）などから記録されている。遺伝的な調査も行われており、生息地の環境保全と、今後の県内での記録蓄積が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　キアシネクイハムシ **環境省：該当なし**
学名　*Donacia bicoloricornis* Chen

本種の、国内での分布は関東以北の本州で、産地は局地的である（木元・滝沢, 1994；林, 2012）。青森県内では、三沢市仏沼、野辺地町巫子沼（野尻湖昆虫グループ, 1985）、深浦町追良瀬川（木元, 1989）、深浦町中山峠、鰺ヶ沢町中村川（富岡, 2000）などから記録されている。湿地帯のガマ類、ミクリ類を食べ、灯火にも飛来する（小宮ら, 1986；冨永, 1986；林, 2012）。

本種の生育に適した水草の繁茂した池沼が、開発や外来魚移入等のため水質環境が悪化し、水草が減少している。生息に適した池沼が少なくなっており、生息が危惧されている。 **（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　オオルリハムシ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Chrysolina virgate* (Motschulsky)

本種の国内での分布は九州・本州などの湿地帯で生息地は局地的である。全国的に湿地の環境の悪化と採集圧により、絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。本種については岩井ら（2003）が詳しくまとめている。それによると青森県内では文献記録も含め、つがる市平滝沼・牛滝沼、五所川原市十三、東通村下田代・野牛沼、野辺地町巫女沼、六ヶ所村市柳沼・鷹架沼・二又、三沢市仏沼、八戸市市川・桔梗野の地域を上げている。この他に六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）などから記録されており、概ね津軽半島の屏風山地区の湿地帯、下北半島から八戸にかけての湖沼地帯に見られる。

本種は、シロネ・ヒメシロネの食草が確認されているが（岩井ら, 2003）、このような植物が繁茂する湿地は減少してきており、湿地の保護対策が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　キイロカメノコハムシ **環境省：該当なし**
学名　*Cassida concha* Solsky

本種の国内での分布は、北海道・本州で、珍しい種類で、分布は局地的で希少種である（木元・滝沢, 1994；安富ら, 1997, 1999）。

青森県内では、八戸市白浜・種差～大久喜、階上町小舟渡・階上岳、黒石市黒森山（安富ら, 1997）、八戸市是川・新井田、東通村尻屋崎（安富ら, 1999）などから記録されている。本種の食草はフシグロセンノウ、カワラナデシコなどのナデシコ科である。

本種は、全国的に生息地が限られているが、園芸種のナデシコからも発見（安富ら, 1999）されていることから、今後の分布や生態などについて継続した調査が望まれる。 **（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　**ベニカメノコハムシ** **環境省：該当なし**
学名　*Cassida murraea* Linnaeus

本種は、国内では本州に分布する。生息地は局地的で希少種である（日本野生生物研究センター, 1980）。国内では、1933年十和田市猿倉温泉（渡邊, 1935）で初めて記録された（Kimoto, 1966）。近年は個体数が減少している。青森県内では、上記以外に八戸市（福田, 1956, 1969b）、十和田（Kimoto, 1966）、十和田市睡蓮沼（安富, 1991）などから記録されている。青森県内では八甲田山地での記録が多く、湿地帯のミズギクを食草（安富, 1991）としている。

本種の生息地の一つである八甲田山地は、十和田八幡平国立公園内で採集は禁止されているが、湿地への入山者立ち入りや採集者の乱獲によって絶滅が危惧される。 **（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **C**

和名　**スジキイロカメノコハムシ** **環境省：該当なし**
学名　*Cassida nobilis* Linnaeus

本種は、国内では青森県・山形県・群馬県・栃木県などに分布し、生息地は局地的で、国内では採集例、個体数とも大変少ない希少種である（木元・滝沢, 1994）。

青森県内からは、八戸市（福田, 1940）、八戸市大久保（安富・富岡, 1988）、八戸市湊高台、黒石市境松（富岡, 2000）などから記録されている。国内ではアカザが食草として確認されている（安富・富岡, 1988）。

八戸市で確認された生息地は、宅地化されており（安富・富岡, 1988）、生息地付近の食草が刈り取られることが生存の脅威となっている。今後の分布や生態についての継続した調査が望まれる。

（山内智）

ハチ目　オナガコバチ科 **C**

和名　**オナガアシブトコバチ** **環境省：該当なし**
学名　*Podagrion nipponicum* Habu

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。本種はカマキリ類の卵の寄生者として知られているが、寄主であるカマキリ類の生息できる環境が減少している。本種は青森県内からは八戸市（Habu, 1962）、つがる市平滝沼（田中, 1984）などから記録されている。石村・佐藤（1941）がカマキリコバチとして黒石町（現；黒石市）、山形村（現；黒石市山形）、八戸市を上げているが、本種のことであると考えられる（山田, 2010, p.267）。

山田（2010, p.267）によると、本種はオオカマキリの卵のう内で越冬し、６月頃になって寄主がふ化する前に羽化し、その後カマキリの産卵が行われる９月までの所在が不明で、これが低寄生率や個体数減少と関係ある可能性もあると述べている。

青森県レッドデータブックでＢランクに指定されているウスバカマキリも本種の寄主（岩崎, 2000）であり、本種と寄主のカマキリ類の両種の調査及び保全対策が必要である。 **（山内智）**

ハチ目　アリ科 **C**

和名　エゾアカヤマアリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ種**
学名　*Formica yessensis* Wheeler

国内では北海道・本州などに分布している。本種は開けた場所に針葉樹の落ち葉や枯れ草で大きな塚（営巣）をつくる。涼しい環境を好むが、生息適地の環境の悪化で全国的に営巣が少なくなってきている（寺山ら, 2014；環境省, 2015）。

本種は青森県（石村・佐藤, 1914；Japanese Ant Database Group, 2003）にも分布し、青森市萱野茶屋（加藤, 1939；青森市, 1994）、八甲田（Kato, 1939；Yasuno, 1963；福島, 1968）、弘前市久渡寺山（前川, 1978；山田, 2004）、弘前市百沢・岳・座頭石（前川, 1978）、青森市横内八重菊・雲谷（青森市, 1994）、深浦町見入山・白神山地（山田, 2009）などの主に八甲田山系・岩木山麓・白神山地から記録されているが、最近の記録はあまり見られない。近年の温暖化などの影響が生息に影響していることが示唆されているが（環境省, 2015）、継続した本種の記録の蓄積と、環境保全活動が必要である。

（山内智）

ハチ目　スズメバチ科 **C**

和名　モンスズメバチ **環境省：情報不足**
学名　*Vespa crabro* Linnaeus

国内では、北海道・本州・四国・九州などに分布する。本種は樹洞や住居の壁の隙間・軒下・天井裏・戸袋などに営巣するが、全国的に減少傾向にある（環境省, 2015）。主にセミを捕獲するが少ない時期はトンボも餌となる。攻撃性は強い（松浦, 1995）。

青森県内では、八甲田山（石村・佐藤, 1941）、八戸、大鰐町、弘前市・岳、大鰐町戸和田山（福田・山田, 1955）、十和田市蔦（青森県, 1993；山田, 1997）、十和田市猿倉（青森県, 1993）、青森市梵珠山（山内, 1996）、青森市田代平、弘前市文京町・新寺町・岳・大石・桜林（山田, 1996）、弘前市弘前公園・藤代・百沢・高岡、西目屋村大川、黒石市三島・大川原・厚目内・福民、平川市大落前、つがる市平滝沼（山田, 1997）、西目屋村暗門川（山田, 2008）、つがる市出来島（山田, 2013）などから記録されている。経年調査は行われておらず、近年の採集記録はあまり見られない。自然環境や住居環境の変貌から営巣に適した環境が衰退している。獲物であるセミも含め、今後の継続した調査が必要である。

（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科 **C**

和名　ニッポンハナダカバチ **環境省：絶滅危惧Ⅱ種**
学名　*Bembix niponica* Smith

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。本種の営巣は海岸、河川敷、湖岸の砂地であるが、開発等で適した生息環境の砂地が失われてきていることから、全国的に生息地・個体数とも減ってきている（環境省, 2015）。青森県内では東通村左京沼（弘前高等学校生物クラブ, 1953）、岩木川（弘前高等学校生物クラブ, 1957）、つがる市平滝沼（下山, 1967；山田, 1999）、東通村猿ケ森（山田, 1996）、五所川原市十三湖、深浦町大間越、三沢市天ケ森（山田, 1999）、中泊町小泊（山田, 2008）などの砂丘地から記録されている。山田（2010, p.267）によると、従前は内陸の岩木川など大きな川の河川敷にも普通に生息していたが、河川敷の生態系が激変し壊滅状態となった。

本種は幼虫の餌として大型のアブ類を狩るが、つがる市平滝沼では砂地に営巣しアブを抱えて巣に入った本種が観察されている（下山, 1967）。砂があまり移動せず、草も伸びないような適地には集団営巣地が形成されるが（山田, 2010, p.267）、そのような場所は開発等で少なくなった。

（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科 **C**

和名　シモヤマギングチ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ectemnius shimoyamai* (Tsuneki)

本種は、国内では青森県・栃木県・福井県・福島県などに分布（菊池, 2014）するが、採集記録の極めて稀少な狩り蜂である。生息地は限定されている（環境省, 2015）。本種は十和田をタイプ産地に新種記載されたギングチバチの仲間である（Tsuneki, 1958）。青森県内からは十和田山地（常木・下山, 1963；下山, 1980, 1987；Tsuneki, 1983）、平川市御鼻部山（阿部, 1980）、八甲田山地（山田, 1998, 1999）などから記録されている。

最初に十和田で採集された経緯については下山（1987）に詳しく、枯木のある林で採集している。枯木が残されている原生林が主な生息地となっているが（山田, 2010, p.267）、詳しい生態についてはまだ十分に解明されていない。 **（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科 **C**

和名　ササキリギングチ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Ectemnius furuichii* (Iwata)

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。全国的に少ない種類で、生息地は枯死樹が放置されるような原生林及びそれに近い広葉樹林に限定されている。青森県内からは十和田（下山, 1960, 1978）、十和田山地（常木・下山, 1963）、むつ市円山（下山ら, 1986）、鰺ヶ沢町乱岩ノ森・櫛石山（下山ら, 1991）、黒石市沖揚平、平川市滝ノ沢、西目屋村大川、深浦町笹内川・入良川、十和田市蔦、新郷村戸来岳（山田, 1999）などの良好な自然環境が残された十和田山地、八甲田山地・白神山地・恐山山地などから記録されている。

本種の生態について下山（1960）が十和田山地で詳しく観察している。それによると成虫は７月中旬から活動をはじめ、ブナ・カエデなどの立枯木で見られ、穿孔して複合分岐巣をつくりササキリを狩って１分岐巣あたり２～３匹を詰め込み幼虫の餌とする。

本種の生存にはササキリの生息も必須の条件であり、営巣素材と合わせ両者が共存するような森林の維持が重要である。 **（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科 **C**

和名　ニトベギングチ **環境省：情報不足**
学名　*Ectemnius nitobei* (Matsumura)

本種は、国内では本州などに分布している。全国的に希少な種であり、生息条件が自然度の高い森林に限定され、環境変化の影響を受けやすい狩り蜂である。本種は青森をタイプ産地に記載されたギングチバチの仲間である（松村, 1912）。本種は県内では青森県（田埜・常木, 1969；Tsuneki, 1990）、弘西林道（阿部, 1979；下山, 1987）、七戸町小坪川（下山, 1987）、鰺ヶ沢町乱岩ノ森（下山, 1987；下山ら, 1991；山田, 1999）、西目屋村大川（山内・阿部, 1989；下山ら, 1991）、西目屋村暗門川（山内・阿部, 1989）、深浦町追良瀬川（山内, 1990；山田, 1999）、鰺ヶ沢町櫛石山・赤石川（下山ら, 1991；山田, 1999）、弘前市相馬西又沢、西目屋村川原平、青森市横内、十和田市蔦、田子町黒森山（山田, 1999）、中泊町小泊（山田, 2008）などから記録されている。

本種の営巣について下山（1987）が白神山地で詳しく観察している。それによると成虫は７～９月に現れブナ、トチなどの枯木に穿孔して分岐した巣を作り、大型のヤガ科シタバガ亜科のゴマシオキシタバやオニベニシタバなどのガ類の成虫を狩って、その分岐した幼室に幼虫の餌として入れる。

山田（2010, p.268）によると、本種の生息地は広葉樹林が発達した山地で、適度に腐朽した太めの立ち枯れ樹が経年的に存在するところである。近年森林開発などで適地が少なくなってきている。

（山内智）

ハチ目　ミツバチ科 **C**

和名　エチゼンヒメハナバチ **環境省：該当なし**
学名　*Andrena echizenia* Hirashima

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。本種の営巣は河川敷の砂地に集団で作られる（羽田, 1989）。青森県内からは弘前市安東橋（山田, 1998）の岩木川河川敷で記録された。

山田（2010, p.268）によると生息地は河川改修のあまり行われていない極めて限定された地域で、成虫は４月下旬に出現して、ヤナギの花から花粉を集める。河川敷は河川改修などで、環境が改変されることが多く、不安定な場所であることから、生息適地は減少し、営巣の確認も少なくなっている。

（山内智）

ハチ目　ミツバチ科 **C**

和名　シロアシクサレダマバチ **環境省：該当なし**
学名　*Macropis tibialis* Yasumatsu et Hirashima

本種は、国内では北海道・本州などに分布している。青森県内からは弘前市百沢・湯段、平内町夏泊、鰺ヶ沢町菱喰山（山田, 1992）、西目屋村川原平（山田, 2008）、五所川原市十三潟（山田, 2012）などから記録されているが、各地とも生息は局地的で、個体数も少ない。

山田（2010, p.268）によると、成虫は７月下旬から８月にかけて活動し、クサレダマ、オカトラノオなどを訪れる。中でもクサレダマが花粉採集源として特に利用されている。営巣は穿孔して粘土質裸地に見られるが、粘土地のクサレダマ生育地は極めて限定された地域にしかなく、開発等で少なくなっている。

（山内智）

ハエ目　力科 **C**

和名　トワダオオカ **環境省：該当なし**
学名　*Toxorhynchites towadensis* (Matsumura)

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布している。産地が局地的で希少種である。また、自然度の高い樹林に生息することから、自然環境の指標昆虫の一つでもある（大野, 1989）。本種は十和田をタイプ産地に新種記載された蚊の仲間である（松村, 1916）。青森県内では、十和田（松村, 1916）、青森市梵珠山（石村, 1952）、黒石市浅瀬石川流域（内田, 1962）、十和田市焼山・休屋・御鼻部山・猿倉、平川市沖揚平（阿部, 1980）、むつ市川内（下山ら, 1986）、青森市酸ヶ湯、十和田市猿倉・蔦（大野, 1989）、西目屋村大川・湯ノ沢、鰺ヶ沢町櫛石山・赤石川（阿部・山内, 1989）、大鰐町虹貝沢、深浦町津梅川、中泊町冬部越林道（市田, 2002）、八戸市是川（市川, 2008）などからの記録がある。

本種は、吸血性ではなく、幼虫はブナ等の樹洞の中の水たまりに生息し他の蚊の幼虫を捕食する（石村, 1952）。生息地が開発等で良好な適地が少なくなってきている。今後の継続した調査が必要である。

（山内智）

チョウ目　マダラガ科 **C**

和名　ヤホシホソマダラ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Balataea octomaculata* (Bremer)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。河川敷や湿地などの明るい草地に局地的に見られ、採集例の少ない種類である（環境省, 2015）。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）、東北町上北（山内, 2018）、むつ市冷水峠（福田ら, 2001）などの記録が知られている。

本種の寄主はヌマガヤ、ササ類などのイネ科植物で、日中に草地で飛翔しているのが採集される。

草地の開墾や造成などの開発によって生息適地が少なくなっている。ヌマガヤなどの生育する湿地の環境保全が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　スカシバガ科 **C**

和名　ミチノクスカシバ **環境省：該当なし**
学名　*Nokona michinoku* Kishida, Kudo et Kudo

岩木山を模式産地として2014年に新種記載されたハチ擬態の昼行性蛾類。現在の知見では日本の固有種で、新種記載時までに判明した生息地は、本県の５市町村（青森市浅虫・弘前市百沢・西目屋村川原平・つがる市屏風山・深浦町松神）と岩手県の１市（宮古市川井）のみ（Kishida *et al*., 2014）。その後の調査で北海道が加わった（堀・櫻井, 2015）。

マント群落を形成するブドウ科 *Vitis* 属の蔓植物に産卵。幼虫は蔓内部へ穿孔し樹液由来物質を摂食。老熟幼虫で越冬し初夏羽化に至る。同群落は、景観整備でしばしば撤去対象となるが、そこに依存する動植物は少なくない。構成植物の中に、貴重生物と関わるものがないかを精査したうえでの整備が求められる。 **（工藤忠）**

チョウ目　ツトガ科 **C**

和名　ソトシロスジミズメイガ **環境省：該当なし**
学名　*Nymphula distinctalis* (Ragonot)

本種は、国内での分布は北海道や本州で北海道函館（Yosiyasu, 1985）、東通村大利（佐々木・葛西, 1994）、秋田県（田中, 2016）などが知られている。記録の少ない希少な種類である。

本種の日本における詳しい生態は不明であるが、ヨーロッパでは幼虫がコウホネ属・ミクリ属・ヒルムシロ属・スイレン属などを食草（井上ら, 1982）としていることから、東通村大利では食草となる水生植物の繁茂した湖沼に生息すると推定される。この湖沼は主に農業用水等に活用されているが、湖沼の環境が維持されることが望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ツトガ科 **C**

和名　ムナカタミズメイガ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Parapoynx ussuriensis* (Rebel)

本種は、国内では北海道・本州（新潟県以北）などに分布し、青森県内では、八戸市（石村・佐藤, 1941）、1935年八戸市糠塚（山内, 2018）、2002年つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003）と八戸市とつがる市などから記録されている。八戸市の記録は古く現地の環境が大きく変わっており、その後の追加記録は無い。

本種の食草はイネ・タヌキモ等（吉安, 2013）が知られているが、タヌキモは全国的に絶滅に瀕しており、青森県レッドデータブックでもＢランクに指定されている（青森県, 2010）。食草の減少に伴って本種も生息地・個体数ともに減少してきており、最近は屏風山地区以外記録されていない。タヌキモなどの生育する湿地の環境保全が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　セセリチョウ科 **C**

和名　アオバセセリ **環境省：該当なし**
学名　*Choaspes benjaminii* (Guérin-Méneville)

本州から東南アジアの赤道地帯にまで広く分布する熱帯系のセセリチョウ。本県は世界最北の生息地に当たり、熱帯系の本種が、本県の自然環境で安定的に発生していることは注目に値する。

青森県内では暖地性植物であるアワブキでのみ発生し、日本海側では深浦地方、太平洋側では名久井岳をはじめとした県南地方のアワブキ自生地にのみ生息する。

成虫は年２回の発生。夕刻に山の頂上で活発な占有飛翔を行う習性がある。強い飛翔力で拡散しアワブキが自生しない地域の山頂で飛来個体が発見されることがある。しかし、発生源であるアワブキの自生地は局所的で、食餌植物など発生源を含めた保全対策が求められる。 **（工藤忠）**

チョウ目　セセリチョウ科 **C**

和名　スジグロチャバネセセリ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Thymelicus leoninus* (Butler)

北海道南西部から九州まで広く生息するが、青森県における分布は限定的。成虫は年１回、夏に出現し、オカトラノオやヒメジョン、アザミ類といった各種の花に訪れる。

開放的な草原よりも、山間の疎林や林間の草地を好み、幼虫は林縁的な環境に自生するイネ科植物から見出される。

1980年代までは、局所的ながらいくつかの多産地が知られていたが、1990年頃から減少傾向が認められ、21世紀の青森県では稀な存在になってしまった。 **（工藤忠）**

チョウ目　セセリチョウ科 **C**

和名　オオチャバネセセリ **環境省：該当なし**
学名　*Polytremis pellucida* (Murray)

北海道から九州まで広く分布し、田畑周辺の明るい草原や雑木林の林縁に生息する。かつての青森県内では、夏から秋にかけて咲くキク類の花に、おびただしい数の本種成虫が吸蜜に訪れた。1990年代に入った頃から減少傾向が認められ、2000年代以降は稀な存在になってしまった。

幼虫は、雑木林の林床に密生するササ類を食べて成長する。幼虫にとって重要な食餌植物は、今日も豊富に存在しており、減少の理由は不明。衰亡の理由を強引に捻出することは避けたい。

（工藤忠）

チョウ目　セセリチョウ科 **C**

和名　ミヤマチャバネセセリ **環境省：該当なし**
学名　*Pelopidas jansonis* (Butler)

本州・四国・九州に広く分布し、本県がその北限。県内では平地から山地の草原に広く記録があるが、一般的に個体数は少なく散発的である。その中でも屏風山一帯（つがる市）に多産地があった。５月と８月を中心とした年２回の発生。幼虫の食餌植物はススキ類で、蛹で越冬する。

生息環境はススキ類を含む草原で近年、個体数の減少が顕著である。上記の多産した屏風山では1990年代以降、生息地そのものが耕地化などで失われた。一般に草原性チョウ類の衰退が目立っているが、それは幼虫の食餌植物だけの増減だけに起因するものではない。これらに共通した生息上の欠落要素は何かを調査し、保全策を考える必要がある。 **（室谷洋司）**

チョウ目　シロチョウ科 **C**

和名　ヒメシロチョウ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Leptidea amurensis* (Ménétriès)

国内では北海道・本州・九州に分布。日本列島全域で減少傾向が著しく、西日本ではすでに絶滅した地域個体群も報告されるようになった（矢後ら編, 2016；工藤, 2018）。

成虫は年３回、春・夏・秋に出現し、蛹で越冬。明るく草丈の低い草原環境を好み、幼虫はこうした環境に自生するツルフジバカマ（マメ科）のみを食べて成長する。

青森県はかつて、国内有数のヒメシロチョウ多産地域であったが、日本海側では2000年ころから急激に減少し、2010年代には危機的な状況に陥った。太平洋側における生息状況は日本海側に比べて良好であったものの、2011年の東日本大震災以降、生息草原の多くがソーラー施設に置き換わり、今後の衰亡が懸念される。 **（工藤忠）**

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ウラナミアカシジミ **環境省：該当なし**
学名　*Japonica saepestriata* (Hewitson)

国内では北海道・本州・四国に分布。本種はクヌギ（岩手県以南に自生するブナ科植物）に強く依存した樹上性のシジミチョウとして知られ、クヌギが自然分布しない青森県以北の個体群はコナラ（ブナ科）の若齢林に食性転換している点が注目される。

成虫は年１回、夏前半に出現し、里山的な明るい若齢林上空を夕刻に飛翔する。1970年代までは、県内各地のコナラを主体とした里山環境で普通に見られ、弘前城の外堀斜面にも多産した。こうした若齢林は、畑地転用で伐採され、あるいは管理されないまま老齢林となり、2000年以降の本種は危機的な存在となった。 **（工藤忠）**

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ウラジロミドリシジミ **環境省：該当なし**
学名　*Favonius saphirinus* (Staudinger)

北海道から九州まで分布し、県内でも広くみられる。幼虫の食餌植物は、ブナ科のカシワのみに依存しカシワ林のチョウとして知られる。年１回の発生で成虫期は７～８月。卵で越冬する。

食樹のカシワは主として海岸部に多く防風林の役割をにない、内陸部では乾燥した丘陵地に限られる。また、地形的に開発の対象となりやすく、耕地転用や空港など人工構築物の用地に変容してきた。これは1990年代から顕著になり発生地が急減。さらにかつての薪炭林としての活用がなくなったことから樹林が老齢化し環境が悪化した。以前は個体数が多かったが（室谷, 1962）、近年は減少傾向が著しい（室谷, 未発表）。残された発生地でのカシワ林の保全策が課題である。

（室谷洋司）

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ハヤシミドリシジミ **環境省：該当なし**
学名　*Favonius ultramarinus* (Fixsen)

北海道・本州・九州に分布し、県内でも広くみられる。幼虫の食餌植物がブナ科のカシワに依存しカシワ林のチョウとして知られる。年１回の発生で成虫期は７～８月。卵で越冬する。

カシワの分布は主として海岸部や内陸部の乾燥した丘陵地に限られる。本種の多産地だった屏風山（つがる市）一帯は広く畑作地帯に変えられ、青森市の西部低山地は空港・ゴルフ場に転用された。所々に小規模な樹林が残されているが、薪炭林として更新されず老木化が進行、本種の発生に不適となった。西部低山地は、以前は個体数が多かったが（室谷, 1962）、近年は減少傾向が著しい（室谷, 未発表）。残された発生地でのカシワ林の保全策が課題である。 **（室谷洋司）**

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ミヤマカラスシジミ　**環境省：該当なし**
学名　*Fixsenia mera* (Janson)

本州から九州まで広く分布するが、北海道では渡島半島に限定される。県内では各所に広く分布し、成虫は年１回７～８月に発生。生息地は明るい雑木林から林縁・湿原で、幼虫の食餌植物クロウメモドキの自生に制約される。普遍的な種ではないが、個体数は少ないものではなかった（室谷・阿部, 1962）。

同じ植物に依存するスジボソヤマキチョウと同じように1990年代後半から減少が顕著で、この植物を含む生息環境の悪化が主因である。クロウメモドキの実生は各所に多く見られるが、草刈などの管理がなされないことや、林床の暗化から極端に生長が阻害され減少している。このような観点から食餌植物の増殖など生息環境の創出が必要である。　**（室谷洋司）**

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ゴマシジミ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Maculinea teleius* (Bergsträsser)

幼虫時代の前期約１か月間はナガボノシロワレモコウ（バラ科）の花を食べ、中期以降の約９か月間はアリの巣の中でアリの幼虫を捕食するという特殊な生活史をおくるシジミチョウ。難解きわまりない生活史は、青森県人・石村清の手によって1952年に解明された。

国内では北海道・本州・九州に分布。全国的に減少が著しく、関東・中部地方における一部の個体群は環境省「種の保存法」、岩手県の個体群は「岩手県希少野生動植物の保護に関する条例」によって、捕獲や譲渡が禁止されている。

青森県は全国屈指のゴマシジミ多産地域として知られていたが、風力やソーラーといった新エネルギー施設の乱立によって生息草原そのものが失われつつある（工藤, 2016）。　**（工藤忠）**

チョウ目　シジミチョウ科 **C**

和名　ヒメシジミ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Plebejus argus* (Linnaeus)

国内では北海道・本州・九州に分布。北海道や中部山地以外の地域では生息地が限られ、減少傾向にある。九州ではすでに絶滅状態だという（矢後ら, 2016；工藤, 2018）。

成虫は年１回、平野部で６月後半、山間部では７月前半に出現。草丈の低い草原環境を好み、シロツメクサやミヤコグサなどの花を訪れる。幼虫の食餌植物として、ヨモギ、ナワシロイチゴ、マルバハギが確認されており、野焼きや河川氾濫の跡地に侵入したヨモギの若年株への嗜好性が高い（工藤, 1987）。青森県内での分布は限定的で、草原管理の放棄による減少が認められる。　**（工藤忠）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　テングチョウ　**環境省：該当なし**
学名　*Libythea celtis celtoides* Fruhstorfer

国内全域に分布するが、北海道ではまれな種。隣接の岩手県では生息地が広く個体数も多い。県内では普遍的ではないが八戸市・名川町・田子町・新郷村・階上町の県南地方に広く記録され（阿部, 1969）、津軽地方では青森市・平川市・黒石市・中泊町（旧小泊村）・深浦町に散発的な記録がある。発生は年１回で６月下旬に出現するが間もなく姿をかくし、そのまま越冬に入る。成虫は翌春４月上旬に再び姿を現す。

幼虫期の食餌植物はエゾエノキである。

1970年代までは県南地方各所で個体数も多く記録されていたが、近年は減少した。エゾエノキは里山の雑木林に多いが、伐採や老木化による枯死が進み環境の悪化が懸念される。　**（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　ヒョウモンチョウ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Brenthis daphne* (Denis et Schiffermuller)

本種は北海道・東北北部・中部山岳に分布するが、最近の研究では北海道から東北北部に生息する個体群と中部山岳の個体群とを別種とする見解がある（北原・黒田, 2017）。

成虫は年１回、夏の前半に出現し、低くゆるやかに飛翔しながら各種の花を訪れる。幼虫は渓流沿いのオニシモツケや湿性草原のワレモコウ類を食餌植物とするが、本県では平坦な湿性草原に自生するナガボノシロワレモコウのみでの発生が確認されている。しかし、こうした平坦地の生息環境は風力やソーラーといった新エネルギー施設用地として開発され易く、生息環境の減少が危惧される。 **（工藤忠）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　ウラギンスジヒョウモン **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Argyronome laodice japonica* (Ménétriès)

北海道から九州まで広く分布する。県内では平地から低山地の田畑周辺や林縁の草地に見られる。成虫は年１回７月から発生し、高温期には一時休眠し８月下旬～９月にかけて再び姿を現す。

幼虫の食餌植物はスミレ類で普遍的。したがって何処でも個体数が多い普通種であった。ところが2000年代以降、個体数に減少傾向が認められるようになった。継続調査により本種の産卵行動の観察から、近縁の他種に比べて日当たりのよい草地への嗜好性が強いことが分かった（室谷，未発表）。近年、生息地の草地は定期的な草刈などがなされなくなり地表の暗化が進行。日当たりのよい植生環境の減少が、本種の生息に負の影響を及ぼしているものと考えられる。 **（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　オオミスジ **環境省：該当なし**

学名　*Neptis alwina* (Bremer et Grey)

北海道・本州に分布する。本県では広くみられ７月から８月が成虫期である。幼虫の食餌植物はバラ科のウメ・アンズ・スモモなどで、このことから平地から低山地にかけての村落やその周辺に多くみられた（室谷・阿部, 1962；阿部, 1969）。しかし、これは1990年代までのことで、その後は、発生地・個体数の減少が顕著になっている（室谷, 未発表）。

以前は、幼虫の食樹は農村地帯の身近な果実として栽培が盛んだったが、近年は病虫害の防除態勢が整った果樹園で管理され、本種の生息が不適になった。現状は周辺にのこされた遺存木にかろうじて発生しているにすぎない。このことから保全策には困難がともなっている。 **（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　ホシミスジ **環境省：該当なし**

学名　*Neptis pryeri iwasei* Fujioka

本州・四国・九州に分布する。中部地方では分布域も広く各地に普通であるが、東北地方では局所的になり本県が北限。県内では県南地方の特産種で、1962年に八戸市是川で初記録がなされて以来、南部町・五戸町・三戸町・階上町などで生息地が確認。発生は６月中旬～８月下旬の年１回。

中部地方の多産地では、シモツケ類の自生する明るい疎林や林縁部に多く見られるが、県内の発生地の特徴は、一般の人家や畑地境界に植えられたユキヤナギ・コデマリなどの植栽植物に発生していることである。このような地域は常に宅地造成などの危機にさらされており（室谷, 2018）、北限の種を保存する意味からも、発生地の保全などの対策が必要である。 **（室谷洋司）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　オオムラサキ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Sasakia charonda* (Hewitson)

日本の国蝶として知られ、いわゆる里山環境で多く見られる。全国に広く分布するが、北海道での分布は極めて局地的。青森県内でも限られた地域にのみ生息し、里山環境の荒廃により減少傾向にある。

成虫は年１回、７月上旬～８月に出現し、ニレ類、ナラ類、ヤナギ類などの樹液に集まるほか、獣の排泄物や腐った果実でも吸汁する。幼虫はエノキ類の葉を食べて成長するが、青森県のエノキ類は大半がエゾエノキ（寒地性）で、深浦地方にのみ北限のエノキ（暖地性）が自生する。深浦地方では双方のエノキ類で発生するものの、エノキは海浜寄りに自生するために利用度が低く、主要な発生源はエゾエノキとなっている。 **（工藤忠）**

チョウ目　タテハチョウ科 **C**

和名　ヒカゲチョウ **環境省：該当なし**
学名　*Lethe sicelis* (Hewitson)

日本特産種で、本州・四国・九州に分布。本県は北限の生息地で非常にまれな種である。県内の記録は新郷村（千葉ら, 1966）と十和田市（三浦, 2002）などで、発生地は深山に局限されている。成虫の発生は、県外では５～６月と８～９月の年２回。県内の記録は７月下旬～８月上旬で年１回と判断される。幼虫の食餌植物はタケ科のクマイザサが確認されている。

暖かい地方では、一般に平野部を生息地としているが、県内では山地に限られることから生態など研究の余地が残されている。この北限の生息地付近にはゴルフ場など開発が進められるなど、十分な調査が行われないまま現在に至っており、生息環境が失われる危険性をはらんでいる。

（室谷洋司）

チョウ目　シャクガ科 **C**

和名　クロフカバシャク **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Archiearis notha okanoi* (Inoue)

本亜種は、岩手県繋温泉で採集された個体によって新亜種記載（Inoue, 1958）された。国内では青森県と岩手県などに分布（環境省, 2015）する。青森県内では平川市唐竹（菊池, 1981；松野, 1987）、弘前市和徳町（杉木, 1986）、黒石市虹の湖（工藤・工藤, 2017）、青森市下湯（上原, 2017）などで記録されているだけの希少種である。

本亜種の幼虫はヤマナラシ属を食するが、岩手県の産地では、ゴルフ場の造成により自然生育のヤマナラシ属が伐採され、植栽されたイタリアポプラに寄生していることが知られている（井上ら, 1982；環境省, 2006, 2015）。植栽したイタリアポプラが緊急避難的な食樹になるが、個体数や生息地が少ないだけに食草のヤマナラシの減少が脅威となる。 **（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **C**

和名　フチグロトゲエダシャク **環境省：該当なし**
学名　*Nyssiodes lefuarius* (Erschoff)

成虫は４～５月に出現し晴天の昼間活発に飛ぶ。雄の触角は特徴的な長い羽毛状、前翅は橙黄色で黒褐色の幅広い縁取りがあって美しいが、飛翔中は目立たない。雌は翅が退化しており広範囲の移動ができない特性がある。幼虫は多食性で、タデ科・バラ科・マメ科・キク科などの草本につく。

国内では北海道・本州・四国・九州に分布するが、いずれも産地が限られる。青森県内では現在のところ、岩木川下流の河川敷およびその周辺で見られる。このような環境は開発されやすく、すでに宮城県・茨城県・埼玉県・新潟県・高知県ではレッドリストに記載されている。 **（佐藤博）**

チョウ目　シャクガ科 **C**

和名　チャホシホソバナミシャク **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Brabira kasaii* Sato

本種は、国内では本州（青森県）などに分布している。1984年に東通村大利で採集された複数個体によって新種として記載された（佐藤, 1986）。同地での追加記録は知られていない。東通村をタイプ産地とするシャクガの仲間である。

その分布状況や生態などについては不明である（環境省, 2015）。今後の調査で本種の更なる生息地の確認とその生態の解明が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **C**

和名　エゾヤエナミシャク **環境省：該当なし**
学名　*Philereme corrugate* (Butler)

本種は、国内では北海道・本州・九州などに分布する。大変に珍しい希少種で産地も局地的である（中島・矢崎, 2011）。青森県内からは、つがる市高山稲荷（葛西・佐藤, 1977）、東通村大利（葛西, 1989a）などの記録が知られている。

本種の幼虫はクロウメモドキ科を食草とすることが知られている（井上ほか, 1982）。生息地が限定されるだけに、開発などによる生息地での食草の減少が脅威となる。 **（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **C**

和名　シロマダラカバナミシャク **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Eupithecia extensaria leuca* Dietze

本亜種の、国内での分布は北海道・本州などから記録されているが、分布も局地的で個体数も非常に少ない種類である（中島ら, 2011）。青森県内からは青森市大滝平（葛西・佐藤, 1977）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）などから記録されている。

幼虫は、ヨーロッパではヨモギ属を食草としているが国内での詳しい生態は不明であり、今後の調査が待たれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤママユガ科 **C**

和名　オナガミズアオ **環境省：準絶滅危惧類**
学名　*Actias gnoma* (Butler)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。個体数は少ない（江崎, 1975）。青森県内では東通村石持（大高, 1976）、十和田市蔦（佐藤・葛西, 1981）、八戸市南郷（青森県生物学会八戸支部, 1989）、東通村大沼（福田ら, 2001）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などから記録されているが多くはない。

本種の幼虫は、ハンノキやヤシャブシなどを食草としているが、ハンノキは低地や湿地、沼岸に自生し森林を形成する。湿地林の主要樹種である。近年の湿地林の開発などで樹林消失や乾燥化もありハンノキ林が減少し、生息環境が劣化しており、本種の生息衰退の原因となっている（環境省, 2015）。湿地林の保全に配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヒトリガ科 **C**

和名　シロホソバ **環境省：準絶滅危惧類**
学名　*Eilema degenerella* (Walker)

本種は、北海道・本州・四国・九州などに分布する日本固有種である。全国的に個体数が減少し、採集記録も少なくなっている（岸井, 2011）。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）などから希少種として記録されている。隣接する岩手県からも盛岡市と北上市から少数であるが記録されている（土井, 2005）。

本種は、平地に多く、幼虫は地衣類を食草としている。近年の開発等で食草の地衣類の衰退・減少が見られ、生息に適した環境が悪化し、生息地・個体数ともに激減している。地衣類の保全と併せて、本種の調査及び資料の収集に努める必要がある。 **（山内智）**

チョウ目　コブガ科 **C**

和名　ミカボコブガ **環境省：準絶滅危惧類**
学名　*"Meganola" mikabo* (Inoue)

本種は、国内では北海道・本州・九州などのカシワ林から記録されている。青森県内では深浦町十二湖（工藤, 1976）、青森市高田、つがる市屏風山・平滝沼（葛西, 1989）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003）などのカシワ林から記録されている。近年カシワ林が残されている屏風山地域で生息が確認された。

本種の幼虫はカシワを食草としており、近年の開発等によってカシワ林が消滅・衰退しており、生息環境が悪化し、生息地及び個体数とも減少している。青森県等が実施している屏風山地区の環境保全事業が本種の生息に一定の効果を上げている。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　カギモンハナオイアツバ **環境省：準絶滅危惧類**
学名　*Cidariplura signata* (Butler)

本種は、国内では本州・四国・九州などから記録されているが少ない（大和田, 2011）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985, 1988）などから記録されている。

本種の食草などの生態は不明で、雑木林縁・河川敷などで記録されているが（環境省, 2015）、開拓・開発等によって生息環境が悪化してきている。東通村以外でもさらに確認される可能性もあり、野外調査や資料収集に努める必要がある。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ヨスジカバイロアツバ **環境省：該当なし**
学名　*Herminia robiginosa* Staudinger

本種は、国内では北海道・東北地方北部などの湿地帯に分布する個体数の少ない種類である。青森県内からは、つがる市屏風山（工藤, 1985）、つがる市平滝沼（葛西, 1983, 1988b；亀田・山内, 2003）、東通村大利（葛西, 1988b）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2002）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2003, 2007）、つがる市筒木坂（亀田・山内, 2005）などの湿地草原から記録されている。

本種の日本における詳しい分布や生態は不明であるが、湿地草原に限って確認されている。湖沼群を含む湿地帯が開墾等で減少しており、環境保全に配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ミヤマキシタバ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Catocala ella* Butler

国内では北海道と本州に分布し、成虫は盛夏に出現する。幼虫の食餌植物としてはハンノキとヤマハンノキの記録があるが、ハンノキへの依存度が著しく高く、ヤマハンノキでの発生例は極めて少ない。

もとより希少な種であったが、自然度の高いハンノキ林が青森県内から激減。このため20年近く記録が途絶え、ようやく上原（2015）によって八甲田山と蓬田村から再発見された。その後、工藤ら（2017）は岩木山や十和田湖周辺にも生息することを確認し、成虫によるミズナラ樹液での吸汁行動、ハンノキ大木の樹幹亀裂部への産卵行動、幼虫はヤマハンノキよりもハンノキの若葉を好んで摂食したことなどを報告。 **（工藤忠）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ヒメシロシタバ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Catocala nagioides* Wileman

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などであるが、その分布はやや局地的である（井上ら, 1982；岸田ら, 2011）。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983；亀田・山内, 2003）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2002）、弘前市岳・悪戸（柳田, 2004）などから記録されている。

本種の幼虫はカシワを食草としており、近年の開発等によってカシワ林が消滅・衰退しており、生息環境が悪化し、生息地及び個体数とも減少している。つがる市屏風山一帯には大規模なカシワ林が残っているが近年少なくなっている。青森県等が実施している屏風山地区の環境保全事業の継続とカシワ林の保全、今後の詳しい本種の分布調査が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　マガリスジコヤガ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Protodeltote wiscotti* (Staudinger)

本種は、国内では北海道・本州の沼沢地に分布するが全国的に少ない種類である（岸田, 2011）。

青森県内では、つがる市平滝沼（葛西, 1983；亀田・山内, 2003）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2001, 2005）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2003, 2004）、鰺ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）などの湿地帯から記録されている。

本種の詳しい生態は不明であるが、沼沢地の湿地に限って確認されている。近年、湿地帯が開墾等によって生息地環境が悪化し、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。青森県では屏風山地域と小川原湖湖沼群地域から記録されているが、開発や整備によって生息に適した環境が狭まれており、環境保全に配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ウスジロケンモン **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Acronicta lutea* (Bremer et Grey)

本種は、国内では北海道・青森県・岩手県・秋田県・長野県などに局地的に分布している（枝ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では青森市高田（葛西, 1987）などから記録されている。

本種の食草はワレモコウで草原から生息が記録されている。近年、青森県内を含め全国的に草原などの開墾等で、ワレモコウの分布する地域が減少し、生息に適した環境が悪化してきている。開発等に環境保全の配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　オオチャバネヨトウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Nonagria puengeleri* (Schawerda)

開帳は35㎜～50㎜、前翅は暗褐色で目立つ斑紋はないが中室端に白点が１つあらわれる。後翅は淡い黄白色。成虫は７～８月に見られ、国内では北海道・本州・九州で局地的に記録されるが少ない種である。

青森県内では黒石市境松（1978年）・軍馬平（1985年）（佐藤, 1985）、ベンセ沼（2006年）・冷水沼（2012年）（佐藤, 未発表）で記録されている。幼虫はガマを食しており、近年全国で湿地環境が消失する傾向にあるため、レッドリスト種として抽出している県が多い。本県においてもガマなどの繁茂する環境は開発が懸念され、本種の生息を危ういものにする可能性がある。 **（佐藤博）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　キスジウスキヨトウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Capsula sparganii* (Esper)

本種は、国内では北海道・本州・四国・九州などに局地的に分布している（環境省, 2015）。青森県内では、つがる市牛潟池・大滝沼（工藤, 1983）、東通村大利（佐藤, 1985）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）、つがる市ベンセ沼・平滝沼（亀田・山内, 2002）、田子町花木（山内, 2011）などから記録されている。

本種の食草はガマやミクリなどの湿地性の植物が知られている。近年、青森県を含め全国的に湿地帯の開発等で生息環境が悪化してきており絶滅が危惧される。湿地環境の指標種となる種類である（枝ら, 2011）。湿地の開発等では環境保全の配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ガマヨトウ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Capsula aerate* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州などで、個体数は少ない（井上ら, 1982；環境省, 2015）。青森県内では、つがる市大滝沼・平滝沼（工藤, 1983）、東通村大利（佐藤, 1985）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）などの湿地帯から記録されている。

本種の食草はガマ等が知られている。湿地を生息地としており、湿地環境の指標種となる種類である（枝ら, 2011）。近年の湿地帯の開発等でその生息環境は劣化してきており絶滅が危惧される。開発等では環境保全の配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ウスミミモンキリガ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Eupsilia contracta* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などで局地的である（枝ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では、青森市大釈迦・眺望山・浪館・三本木（葛西・佐藤, 1979）、青森市梵珠山（葛西, 1984）などで記録されている。

本種の食草はハンノキで、生息地は湿地でハンノキ林が残されている地域である。湿地等は農耕地造成や整備などの開発により年々減少し、生息環境のハンノキ林が少なくなってきている。開発等では環境保全の配慮が必要である。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ミスジキリガ **環境省：準絶滅危惧**

学名　*Jodia sericea* (Butler)

本種の、国内での分布は北海道・本州・四国・九州などでやや局地的な種類である（井上ら, 1982；枝ら, 2011）。青森県内では、青森市大釈迦・高田・谷地山（葛西・佐藤, 1979）、青森市梵珠山・浅虫・大谷（葛西, 1984）などから記録されている。

本種の食草は、カシワが知られており、二次林のカシワ林で得られている（井上ら, 1982）。青森県内の生息もカシワ林で見られる。近年各地のカシワ林は開発などで減少してきており、開発等では環境保全の配慮が必要である。つがる市屏風山地区の広域にカシワ林が残っている地区でまだ確認されておらず詳しい調査が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　オイワケクロヨトウ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**

学名　*Lacanobia aliena amurensis* (Staudinger)

本亜種の、国内での分布は北海道・本州などであるが、生息地は局地的で大変少ない種類である（井上ら, 1982；吉松, 2011）。青森県内では平川市軍馬平（葛西・佐藤, 1980）、平川市平賀（井上ら, 1982）などの記録が知られている。

国内の分布地は青森県を含め、草原で記録されている（井上ら, 1982）。国内での詳しい生態は不明であるが、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **C**

和名　ダイセツヤガ **環境省：該当なし**

学名　*Xestia albuncula* (Eversmann)

本種の、国内での分布は北海道・本州の山岳地帯である。本種は高山帯に生息する高山蛾である（井上ら, 1982；小林, 2011）。青森県内では八甲田山（葛西, 1986）、青森市大岳（神保ら, 1991）などの記録があり、八甲田山系からのみ確認されている。

本種の食草は高山に見られるガンコウラン・コケモモ等である（小林, 2011）。高山の特殊な環境に好んで生活し、分布範囲は狭い。生息地の八甲田山は国立公園に指定され保護されているが、入山者の増加などにより一部裸地化しており、官民一体となって環境改善に取り組んでいる。環境の変化が脅威となる。 **（山内智）**

トビムシ目　シロトビムシ科　**D**

和名　**エビガラトビムシ**
学名　*Homaloproctus sauteri* Börner
環境省：該当なし

本種の体長は４～５㎜と大型種である。体色は黒褐色～黒紫色であり、眼がなく、PAO（触角後器）は小さい。跳躍器はやや発達し尾角はない。擬小眼が各体節表面に規則的に配列する。日本固有種で、国内では青森・山梨・福岡・大阪・京都・福井・富山・群馬などの各府県で採集され、青森県内では弘前市と黒石市青荷から雪上・コケ類中から採集されている（Uchida, 1953）。この他、弘前市岩木山（須摩・山内, 2006）から記録されている。　**（須摩靖彦）**

トビムシ目　イボトビムシ科　**D**

和名　**キボシアオイボトビムシ**
学名　*Morulina gilvipunctata gilvipunctata* (Uchida)
環境省：該当なし

本種の体長は２～３㎜で、各節に長い剛毛の生えた半球状イボがあり、腹部末部の節にはイボ２個の突起がある。体色は青黒色で黄色の斑紋があり、眼は小眼５個、PAO（触角後器）は楕円形で200余の副瘤がある。青森県内では黒石市中野山から採集し新種記載された（内田, 1938）。その後、黒石市中野神社（鳴海, 1938, 1951；田中, 2013）、むつ市恐山、黒石市青荷（鳴海, 1951）や秋田・山形県などでも採集された。北方系の種である。　**（須摩靖彦）**

トビムシ目　クモマルトビムシ科　**D**

和名　**ミツワマルトビムシ**
学名　*Ptenothrix tricycla* Uchida
環境省：該当なし

本種の体長は２㎜前後の球形で、体色は黄色の地色で、頭部は黒紫色、胴部の背面に二重の褐色の輪があり、その外の側板と肛生殖節に焦げ茶色の輪があり、全体で三重の同心円の輪を構成する美麗種である。分布は青森県のみで、黒石市青荷・山形の湿った落葉下、倒木樹皮やハイマツ樹皮から採集し、新種としで発表された（Uchida, 1953）。その後八甲田山地（Uchida, 1969など）、むつ市恐山山地（須摩ら, 2003）などから記録された。　**（須摩靖彦）**

トビムシ目　イボトビムシ科　**D**

和名　**エサキウミトビムシ**
学名　*Oudemansia esakii* (Kinoshita)
環境省：該当なし

本種は体長2.5㎜内外、体は細長く口が突出する。体色は黒藍色、環節や背板・腹板の所々に白条や白点がある。小眼は８個、PAO（触角後器）はなく、跳躍器は短い。長崎県対馬の海岸波打ち際で最初に発見、その後和歌山県瀬戸白浜・潮の岬で見つかった。青森県内では青森市浅虫の海岸の石下で発見され（内田, 1952）、その後、青森市奥内（須摩・山内, 2016）、むつ市芦崎、平内町浅所（須摩・山内, 2015）などの海岸から記録された。　**（須摩靖彦）**

トビムシ目　クモマルトビムシ科　**D**

和名　**コシダカマルトビムシ**
学名　*Gibberathrix tsugarensis* Uchida
環境省：該当なし

本種の体長は1.8㎜の球形で、胴部の背部が大きく上に突き出ているのが特徴である。体色は薄黄色の地色に紫色の模様がある。触角第３節の先端に指状突起があるのも特徴である。１属１種である。分布は青森県のみで、平川市竹館と黒石市青荷から湿った枯葉の下と湿った土から採集されたものを新種記載した（Uchida, 1952）。最近はむつ市北国山（須摩・山内, 1988）、佐井村磯谷（須摩・山内, 2013）から記録されている。　**（須摩靖彦）**

バッタ目　コオロギ科　**D**

和名　**エゾエンマコオロギ**
学名　*Teleogryllus yezoemma* (Ohmachi et Matsuura)
環境省：該当なし

河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。松浦（1981）の簡単な分布図では弘前と鰺ヶ沢の付近に点があるが、詳細及び根拠は不明で、正式な記録はないようである。2001年の国交省の河川水辺の国勢調査で、八戸市から確認されている。山形県でも準絶滅危惧とされている。
（市田忠夫）

バッタ目　マツムシ科　**D**

和名　カヤコオロギ
学名　*Euscyrtus japonicas* (Shiraki)
環境省：該当なし

草原性の小型コオロギで、草に登って生活し、鳴かない。かつては採草地などに生息していたと考えられるが、草原環境の衰退とともに減少しているようである。本県が北限とされる。土屋（1931）で弘前市、市田（1986）で五所川原市、黒石市教育委員会（2001）でつがる市（1934年の採集標本）から記録されている。五所川原市ではその後の度重なる調査でも再確認できない。
（市田忠夫）

バッタ目　ヒシバッタ科　**D**

和名　トゲヒシバッタ
学名　*Criotettix japonicus japonicas* (de Haan)
環境省：該当なし

翅端まで19～27㎜に達する大形のヒシバッタで、前胸背板測縁に顕著な棘を有する。

湿地に生息する種で、かつては水田畦畔などにもいたようである。県内では市田・市川がつがる市から2000年に初めて記録し（市田・市川, 2001）、2013年にも幼虫が採集されたが個体数は少ない。黒石市教育委員会（2001）により、つがる市と黒石市の古い標本の存在が確認された。
（市田忠夫）

バッタ目　バッタ科　**D**

和名　セグロバッタ
学名　*Shirakiacris shirakii* (Bolivar)
環境省：該当なし

やや湿度の高い草原に生息する種とされる。土屋（1931）により弘前市、石村・佐藤（1941）により黒石市、八戸市より記録されているが、県内では戦前の確認例しかなく、65年以上確認例が知られていない。本県が北限とされる。山形県で情報不足種。
（市田忠夫）

バッタ目　バッタ科　**D**

和名　ショウリョウバッタモドキ
学名　*Gionista bicolor* (de Haan)
環境省：該当なし

本県が北限の草原性のバッタで、かつては採草地などに生息していたと考えられ、草原環境の衰退とともに減少していると思われる。弘前市・黒石市・つがる市から戦前の記録があり（石村・佐藤, 1941）、三戸町の記録は1953年（故福田進私信）。過去50年以内では1991年のつがる市の記録しかない（市田, 1993）。岩手県で情報不足、山形県で準絶滅危惧。
（市田忠夫）

バッタ目　バッタ科　**D**

和名　カワラバッタ
学名　*Eusphingonotus japonicas* (Saussure)
環境省：該当なし

記録としては戦前の土屋（1931）による弘前市、石村・佐藤（1941）による黒石市しかない。河川敷の礫地に生息する種であるが、河川改修に伴い生息環境が悪化していると考えられる。市田が黒石市に赴任した当時（1983～85年頃）旧農業試験場構内で目撃しているが、その後浅瀬石川は河川改修され、浅瀬石橋より下流には礫の河原は存在しなくなった。本県が北限とされる。岩手県で準絶滅危惧相当。
（市田忠夫）

ガロアムシ目　ガロアムシ科　**D**

和名　ガロアムシ
学名　*Galloisiana nipponensis* (Gaudall et King)
環境省：該当なし

本種は無翅で、森林等の伏流水の流れるガレ場や土壌に潜んでいる。環境指標となる種類であり、稀少な種で、本州に分布している。本属の幼生の記録は多くあるが、本種と確定される記録は少ない（山田, 2001）。山田（1999）は成虫で記録された弘前市大和沢、大鰐町戸和田山の２か所を本種の確認された青森県内の生息地として上げている。地中生活するため、分布地の環境保全と、今後県内の成虫での確認の蓄積が望まれる。
（山内智）

カメムシ目　ミズムシ科 **D**

和名　ミゾナシミズムシ
学名　*Cymatia apparens* (Distant)
環境省：準絶滅危惧

本種は小型の水生昆虫で、池沼などの止水域に生息している。稀少な種類で、近年水質悪化、外来魚侵入などで、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。国内では北海道・本州・四国・九州などに分布するが、青森県内ではつがる市ベンセ沼（小笠原・鳥居, 2007：大高ら, 2008a, 2008）などから生息が確認されている。生息地は青森県で保全対策を行っているが、周辺地域の湿地開墾などの影響もあり、今後も継続した保全活動が必要である。県内の多数ある池沼での生息調査も望まれる。　**（山内智）**

カメムシ目　ツチカメムシ科 **D**

和名　シロヘリツチカメムシ
学名　*Canthophorus niveimarginatus* (Scott)
環境省：準絶滅危惧

市田（1989）は、1979年の弘前市と、1935年の八戸市での、それぞれ１頭の標本を紹介した。後者は石村・佐藤（1941）の三戸郡からの記録の根拠標本である。近年全国的に確認例が少なく、環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。半地下性のツチカメムシ類は、一般的な調査では検出しにくいが、寄主とされるススキに半寄生するカナビキソウの開花・結実期には、調査効率が良くなると考えられる。　**（市田忠夫）**

コウチュウ目　オサムシ科 **D**

和名　オオヒョウタンゴミムシ
学名　*Scarites sulcatus* Olivier
環境省：準絶滅危惧

本種は、主に海岸の砂地に生息している。海岸部の護岸や開発等から砂浜の衰退がみられ全国的に生息地が減少してきており、絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。国内で北海道・本州・四国・九州などに分布し、東北地方からは青森県と秋田県などから記録されている。青森県内では八戸市（石村・佐藤, 1941）、深浦町（阿部, 1976；下山, 1978）などから記録されているが、どの地域も、護岸工事、風力発電、車両進入等や、津波の自然災害によって、生息環境が変貌してきており、今後砂浜海岸の環境保全と生息調査が望まれる。
（山内智）

カメムシ目　ナガカメムシ科 **D**

和名　ハマベナガカメムシ
学名　*Peritrechus femaralis* Kerzhner
環境省：準絶滅危惧

市田（1988）がつがる市から記録した１例が知られるのみ。海浜に生息するカメムシで、近年全国的にもほとんど確認されていない。環境省の新レッドリストでは準絶滅危惧、山形県では情報不足とされている。海浜植物の根際で生活するという。地表性のものが多いナガカメムシ科は、植物が繁茂する夏期以降には発見がやや困難となるが、県内の海浜調査は高頻度であり、単に調査技術的な問題だけで本種の確認が少ないとは考えにくい。　**（市田忠夫）**

アミメカゲロウ目　センブリ科 **D**

和名　ウスバセンブリ
学名　*Sialis jezoensis jezoensis* Okamoto
環境省：該当なし

県内では、1987年のむつ市と1988年の青森市での採集記録がある（市田, 1992；Hayashi & Suda, 1995）。その後、2012年に青森市内の別の地点から発見されたが、既知産地からは直線距離で30㎞離れている。トウホククロセンブリと良く似ており、識別するには翅脈や交尾器を詳細に観察する必要がある。属名はセンブリ属に統合された（Liu *et al.*, 2015）。　**（市田忠夫）**

コウチュウ目　オサムシ科 **D**

和名　ミツメナガチビゴミムシ
学名　*Trechiama triops* S.Uéno
環境省：該当なし

本種は、体長６㎜内外と小さく後翅も退化して無く、広範囲で移動し分布を拡大することが困難な種類で、個体数も少ない。大鰐町十和田山から採集された資料によって新種記載（S.Uéno, 1994）された種類である。隣接する白神山地・岩木山からは同属の別種が生息している。本種は地表下で生活するため、生息地の開発などによる環境変化に生息が大きく左右される。生息地の環境が衰退してきており、環境保全と今後県内での更なる生息地の確認が望まれる。　**（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **D**

和名　シモキタメクラチビゴミムシ
学名　*Oroblemus sparsepilifer* S.Uéno
環境省：該当なし

本種は体長3.5㎜内外で、複眼と後翅は退化し地中を生息場所としている。生態については不明な点が多い。肢も非常に短く、広範囲での移動ができず、特定の地域に生息が限定される。本種は、むつ市北国山の個体で新種記載（S.Uéno, 1975）された。本属の分布範囲は大変狭いと考えられ、本生息地以外に記録がない。林道の拡張工事等で生息地の沢の一部が削られたが、隣接した山林の沢にも生息している可能性が高く、今後の生態及び生息調査が望まれる。
（山内智）

コウチュウ目　オサムシ科 **D**

和名　オオトックリゴミムシ
学名　*Oodes vicarius* Bates
環境省：準絶滅危惧

本種は、湿地、池沼、河川敷などの多少開けた水際に生息するが、越冬は成虫で水没する可能性のない土中で行われる（中根, 1986；須田, 1993；環境省, 2015）。近年の開発等によって本種に適した水辺環境が少なくなり、生息地が衰退し絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。日本固有種で本州・四国・九州などに分布するが、青森県内からはつがる市ベンセ沼（河上・林, 2008）などから記録されている。生息地は青森県で保全対策を行っているが、周辺地域の湿地開墾などの影響もあり、今後も継続した保全活動が必要であり、更に県内の多数の池沼及び湿地帯での本種の生息の調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　コガネムシ科 **D**

和名　アカマダラハナムグリ
学名　*Anthracophora rusticola* Burmeister
環境省：情報不足

本種は、体色が赤褐色で黒紋のまだら模様があり、里山のナラ類の樹液などに集まる。記録の少ない種類である。最近、その生態が解明され猛禽類（ハチクマ・クマタカなど）などの巣中で幼虫が堆積物を食べて成長することがわかった（槇原ら, 2004）。国内では北海道・本州・四国・九州などに分布し、青森県内では八甲田山（石村・佐藤, 1941）、五所川原市狼野長根（工藤, 1986）、平川市津軽湯の沢、弘前市沢部線林道（今, 1986）、弘前市天王沢（尾崎・永幡, 1997）、板柳町灰沼（工藤, 2002）などから記録されている。別名アカマダラコガネとも言う。**（山内智）**

コウチュウ目　オサムシ科 **D**

和名　フトクチヒゲヒラタゴミムシ
学名　*Parabroscus crassipalpis* (Bates)
環境省：該当なし

本種は、下唇ヒゲ末端節が肥大した特徴的な形態のヒラタゴミムシの仲間である。国内のどこの生息地とも個体数はまれである。国内では北海道・本州・四国・九州などの森林の林床に生息する。青森県内からは大鰐町早瀬野（山内, 1996）などから記録されている。県内の森林地帯から更に確認される可能性があり、継続した調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　ゲンゴロウ科 **D**

和名　ニセモンキマメゲンゴロウ
学名　*Platambus convexus* Okada
環境省：該当なし

体長８～９㎜。本種はOkada（2011）により記載された新種で、流水性の普通種であるモンキマメゲンゴロウに酷似する。モンキマメゲンゴロウとは、前胸腹板突起や雄交尾器の形状で区別できる。生息地では、両種は同所的に見られることから、過去のモンキマメゲンゴロウの記録は再検討（標本の確認）が必要である。現在のところ、県内では北野（2012）による五所川原市の河川での記録しか報告されていない。
（櫛田俊明）

コウチュウ目　コメツキムシ科 **D**

和名　ハヤチネベニコメツキ
学名　*Denticollis yasumii* Ôhira
環境省：該当なし

本種は、岩手県早地峯山と弘前市岩木町の資料で新種記載（Ohira, 1993）されたコメツキムシ類で、この他に宮城県七ヶ宿町でも記録されている（Kishi, 1999）。分布は局地的で希少種であり、上記各県ではレッドデータブック種に指定されている。本種の生息地域の岩木山地域は一部が津軽国定公園に指定されているが、近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入やゴミ・糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化で生息が危惧される。**（山内智）**

コウチュウ目　コメツキムシ科 **D**

和名　ババアカコメツキ
学名　*Ampedus babai* Kishii
環境省：該当なし

本種は、青森県と岩手県などに分布し（Kishii, 1999）、局地的で採集例の大変少ない希少種である。本種は十和田市猿倉温泉で採集された資料によって新種記載（Kishii, 1966）された。本種の生息地域は、十和田・八幡平国立公園内の温泉地で南八甲田山の登山口にあたり、登山者、車両の出入りも多く、今後も継続した保全活動が必要である。今後の詳しい本種の分布や生態の調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　コメツキムシ科 **D**

和名　トワダアカコメツキ
学名　*Ampedus towadensis* Kishii
環境省：該当なし

本種は、青森県・山形県・新潟県（Kishii, 1999）、秋田県（尾崎ら, 2006）などで記録がある。その分布も局地的で採集例の少ない希少種である。本種は、十和田市谷地温泉で採集された資料によって新種記載（Kishii, 1987）された。青森県内からは他にむつ市屏風山（大平・山内, 1991）などの記録がある。本種のタイプ産地は、十和田・八幡平国立公園内の温泉地で北八甲田の登山口にあたり、登山者・車両の出入りも多く、今後も継続した保全活動が必要であり、本種の分布や生態など不明な点が多く、今後の詳しい本種の分布や生態の調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　コメツキムシ科 **D**

和名　ツガルアカコメツキ
学名　*Ampedus tugaru* Kishii
環境省：該当なし

本種は、青森県、長野県（岸井, 2006）に分布し、局地的で採集例の少ない希少種である。本種は岩木山山頂で採集された資料によって新種記載（Kishii, 1992, 1999）された。生息地の岩木山山頂部付近は、津軽国定公園の特別保護地区に指定されており、動植物（昆虫も含め）の採集は全て禁止されており保護されている。しかし近年、登山者が増加し、官民一体となって登山道以外の立入禁止やゴミや糞尿処理などに取り組んでいるが、環境の悪化で本種の生息が危惧される。**（山内智）**

コウチュウ目　オオキノコムシ科 **D**

和名　カタアカチビオオキノコ
学名　*Tritoma kensakui* Chûjô
環境省：該当なし

本種は、本州などに分布する。青森県が分布北限で、局地的で少ない種類である。本種は平川市葛川・井戸沢・小木平で採集された資料にもとづいて新種記載（Chûjô, 1955）された。他に青森県内では、平川市温川・大木平・砂子沢（Chûjô, 1969）などから記録されている。本種は、ハチノスタケを寄食するが（下山, 1960）、その生態はまだ不明である。キノコの分布と関連する種であり、キノコが生育する環境の保全が必要であり、キノコと本種の分布調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　テントウムシ科 **D**

和名　ババヒメテントウ
学名　*Scymnus babai* Sasaji
環境省：該当なし

本種は、国内では本州・四国・九州などに分布（黒沢ら, 1985）している種類で、ヨシ湿原で見られるが少ないテントウムシである。青森県内では、西目屋村乳穂の滝、つがる市カクレ沼（山内, 1996）などから記録されている。ヨシが繁茂する湿地帯が開発等で衰退してきており、湿地帯の保全と青森県内全域の湿地帯での本種の調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　テントウムシ科 **D**

和名　ムナグロチャイロテントウ
学名　*Micraspis satoi* Miyatake
環境省：該当なし

本種は、本州に分布する。湿地性テントウムシの代表で、アシの繁茂している湿地に生息する（佐々治, 1982）が個体数は少ない。青森県内では、六ヶ所村尾駮沼（山内, 1996）の岸辺の湿地帯などから記録されている。各地の湿地帯が開発などで衰退してきており、生息に適した環境が少なくなっている。県内全域での湿地帯の保全と本種の調査が望まれる。**（山内智）**

コウチュウ目　ハムシ科 **D**

和名　**アカガネネクイハムシ**
学名　*Donacia hirtihumeralis* Komiya et Kubota
環境省：準絶滅危惧

本種は本州の青森県・岩手県・宮城県・栃木県・茨城県などで確認されている日本固有種で、分布は局地的で限られている（末長ら, 2009；林, 2012；環境省, 2015）。青森県内では、つがる市屏風山の沼（末長, 2009）などから記録されている。フトイなどを食草にしているが（林, 2004）、生息地の湿地帯は開発などで衰退してきており、生息に適した環境が減少している。県内全域での湿地帯の環境保全と本種の調査が望まれる。

（山内智）

コウチュウ目　ハムシ科 **D**

和名　**キンイロネクイハムシ**
学名　*Donacia japana* Chûjô et Goecke
環境省：準絶滅危惧

本種は北海道・本州・九州などに分布する日本固有種である。湿地のミクル類を後食することが知れているが、全国的に湿地の開発などで衰退しており、本種の絶滅が危惧される（林, 2004, 2012；環境省, 2015）。青森県内では、弘前市笹舘、六ヶ所村市柳沼（野尻湖昆虫グループ, 1985）、三沢市仏沼（野尻湖昆虫グループ, 1985；岩田ら, 2019）や鰺ヶ沢町中村川、深浦町十二湖・津梅川、階上町田代、三沢市谷地頭（林, 2006）などから記録されている。各生息地の湿地は乾燥化し衰退・消滅しており、県内全域での湿地帯の環境保全と本種の調査が望まれる。　**（山内智）**

ハチ目　ナギナタハバチ科 **D**

和名　**オオナギナタハバチ**
学名　*Megaxyela togashii* Shinohara
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内では北海道・本州・四国などに分布し、幼虫はクルミ類を食べるが、全国的に採集例の少ない極めてまれな種類で、森林開発などにより生息適地の自然林が無くなってきており、全国的に絶滅が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内では、十和田市蔦温泉付近で1999年に生息が確認され（山田, 2000）、その後、白神山地の西目屋村鬼川辺沢（山田, 2011）などで確認された。記録の少ない種である。本種は山地性で沢沿いに残されたサワグルミ等が生息地であるが、開発等で良好な生息環境が衰退している。　**（山内智）**

ハチ目　シリアゲコバチ科 **D**

和名　**オキナワシリアゲコバチ**
学名　*Leucospis sinensis* Walker
環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布している。青森県内では、八戸市と弘前市の市街地に近い平地で得られている（山田, 2000, 2010, p.284）。成虫は８月頃に見られる。成虫雌は腹部の中ほどに達する産卵管を背面に背負い、平地や住宅地の生け垣などで良く見られる。寄主であるコクロアナバチの巣筒の外側からこの産卵管を突き刺して中の幼虫に卵を産みつける（山田, 2000）。確認された生息地及び個体数は少ない。　**（山内智）**

ハチ目　セイボウ科 **D**

和名　**オオセイボウ**
学名　*Stilbum cyanurum* (Förster)
環境省：情報不足

国内では本州・四国・九州などに分布している。トックリバチ類などに寄生することが知られている。開発等により個体数の減少が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内では黒石市山形（鳴海, 1937；石村・佐藤, 1941）、鰺ヶ沢町大然（山田, 1997）などから記録されている。本種は暖地系の種で、暖地では少なくない（常木, 1970）。県内では寄主のスズバチは広く分布しているが、本種は極めて限定された地域でしか認められない（山田, 2010, p.285）。　**（山内智）**

ハチ目　セイボウカ科 **D**

和名　**ミヤマツヤセイボウ**
学名　*Philoctetes monticola* (Tsuneki)
環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している日本固有種で、希少種である。本種は開発などで国内では生息地、個体数ともに少ない。アリマキバチ類などを寄主としている（環境省, 2015）。青森県内からはむつ市釜臥山から採集されParatypeに指定されている（Tsuneki, 1975）。本生息地も林道造成等で生息環境が衰退しており、追加記録は見られない。埼玉県でクワキジラミの幼虫への産卵が観察されている（半田, 2017）が、まだ成育過程等の生態は不明な点が多い。　**（山内智）**

ハチ目　アリ科 **D**

和名　ツノアカヤマアリ
学名　*Formica fukaii* Wheeler
環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している。登山道や林道沿いの開けた明るい環境に、枯葉で小さい塚状の巣を作るが、道路の拡張・放棄等で生息に適した環境が衰退し、個体数が減少している（寺山ら, 2014；環境省, 2015）。青森県内では、青森市雲谷（石村・佐藤, 1941）、八甲田山（Yasuno, 1963）などが生息地として記録されている。今後の調査で八甲田山地以外からも確認される可能性がある。　**（山内智）**

ハチ目　アリ科 **D**

和名　ミヤマアメイロケアリ
学名　*Lasius hikosanus* Yamauchi
環境省：情報不足

国内では、本州・九州などに分布する日本固有種である。生息地は極めて限られ個体数も少なくまれである（環境省, 2015；寺山ら, 2014）。青森県内からは八甲田山（日本産アリ類データベースグループ, 2003）などから記録されている。本種は一時的な社会寄生種で、巣は森林内の立木根元に見られるが、森林の開発等により生息適地の環境が衰退している。今後の生態や分布の解明が急がれる。　**（山内智）**

ハチ目　クモバチ科 **D**

和名　フタモンクモバチ
学名　*Parabatozonus jankowskii* (Radoszkowski)
環境省：準絶滅危惧

国内では本州・四国・九州などに分布する。青森県内では青森市横内、黒石市山形（石村・佐藤, 1941）、八戸市根城（山田, 2000）、つがる市森田（黒石市教育委員会, 2001）などで記録されている。山田（2010, p.285）によると、本種は森林よりも平地の草地付近に生息し、成虫は年１回夏場に活動する。本種はオニグモの成熟メスを狩り、地中に穴を掘って運び入れ、産卵してから埋め戻しておくことが知られている。住宅地の造成や道路の拡張などで、営巣の適地が減り絶滅が危惧される。　**（山内智）**

ハチ目　アリ科 **D**

和名　テラニシクサアリ
学名　*Lasius orientalis* (Karawajew)
環境省：準絶滅危惧

国内では北海道・本州中部以北などに分布している。開発等にともない生息に適した環境が少なくなっており、生息地での個体数の減少が危惧されている（環境省, 2015）。青森県内でも生息が確認され（Japanese Ant Database Group, 2003）、深浦町吾妻川（山田, 2009）などから記録されている。本種は、草地に見られるキイロケアリの巣に一時的に社会寄生することが知られており（寺山ら, 2014）、本種と併せて生息の確認に注視が必要である。別名をテラニシケアリとも言う。　**（山内智）**

ハチ目　クモバチ科 **D**

和名　イワタツツクモバチ
学名　*Homonotus iwatai* Yasumatsu
環境省：該当なし

国内では本州などに分布する。青森県内での記録は少なく、青森市浅虫（大野, 1935）で記録されてからしばらく記録は無かったが、山田（2000）が岩木山山麓の弥生から記録した。本種はススキやアシなどの葉を折り曲げてチマキ状の巣を作るカバキコマチグモ（青森県内各地に記録）の成虫に体外寄生するツツクモバチの一種である（寺山・須田, 2016）。近年の草地などの開発から両種の生息に適した環境が衰退している。しかしカバキコマチグモの個体数減少は顕著でなく、今後の分布解明が急がれる。　**（山内智）**

ハチ目　スズメバチ科 **D**

和名　オオハムシドロバチ
学名　*Symmorphus captivus* (Smith)
環境省：情報不足

国内では本州・四国などに分布している。全国的に生息地は少なく限定され、確認個体数も少ない（環境省, 2015）。青森県内からは西目屋村大川原（山田, 1983）、弘前市座頭石（Yamane, 1990）、平川市唐竹（山田, 1997）などの低山地から記録されている。山田（2010, p.285）によると成虫は７～８月頃に発生し、枯れ茎の髄部などを利用した管住性で、ハムシの幼虫を狩って幼虫の餌とする。明細な生活史は不明であり、解明が望まれる。　**（山内智）**

ハチ目　アナバチ科　**D**

和名　ミカドジガバチ
学名　*Hoplammophila aemulans* (Kohl)
環境省：該当なし

国内では本州･四国･九州などに分布している。青森県内では鰺ヶ沢町乱岩ノ森・一ツ森、深浦町追良瀬川（阿部, 1980）、鰺ヶ沢町赤石川・櫛石山、西目屋村大川（下山ら, 1991）、青森市城ケ倉（青森県, 1993）、深浦町笹内川（福田ら, 1996）、十和田市蔦、西目屋村弘西林道（山田, 1998）、つがる市森田（黒石市教育委員会, 2001）などで記録されている。本種はシャチホコガ科幼虫を狩って幼虫の餌とする（寺山・田埜, 2006；寺山・須田, 2016）。朽木の坑を利用して営巣するため、本種の生存には太い立枯の樹が経年的に存在する原生林に近い森が必要である（山田, 2010, p.285）。しかし近年少なくなっている。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　ハクトウアワフキバチ
学名　*Gorytes neglectus* Handlirsch
環境省：該当なし

国内では北海道・本州に分布する。本州からは近年青森県から確認され（山田, 2010）、弘前市岳・岩木山・長慶森、黒石市田代山（山田, 1999）などから記録されている。山田（2010, p.287）によると、成虫は６月頃に活動し、土中に短い穴を掘り、ヤマトキタヨコバイなどの成虫を狩って幼虫の餌とすることが知られている。獲物や営巣場所との関連から、その生息場所は非常に限定されており、今後の調査で本種の生息地の確認が望まれる。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　ガロアギングチ
学名　*Crossocerus heydeni* Kohl
環境省：情報不足

国内では本州・四国などに分布する。キノコバエを狩る観察例があるが（寺山・須田, 2016）、生息地は限られ、個体数も少ない。開発等による環境の変貌で絶滅が危惧される（環境省, 2015）。青森県内からは平川市十和田山地（常木・下山, 1963）、青森市雲谷（青森市, 1994）、黒石市田代山、平川市滝ノ沢、青森市横内八重菊、中泊町権現崎、西目屋村弘西林道、深浦町十二湖（山田, 1999）などから記録されており、詳しい本種の生態解明と生息地の確認が望まれている。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　キユビギングチ
学名　*Crossocerus flavitarsus* (Tsuneki)
環境省：情報不足

国内では北海道・本州などに分布している。個体数が少なくまれな種類である（環境省, 2015）。青森県内では、平川市十和田山地（Tsuneki, 1959；常木・下山, 1963；田埜・常木, 1969）などから記録がある。南部（1973）によるとスギの枯木に穿孔して営巣し、その穴を塞ぐのにスギの樹脂を使う。獲物はハエ類の成虫を狩る。森林や土地の開発等によって営巣環境が衰退してきている。営巣地の環境保全が望まれる。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　アギトギングチ
学名　*Ectemnius martjanowi* (Morawitz)
環境省：情報不足

国内では本州などに分布している。山地性で個体数は少なく全国的に減少してきている（環境省, 2015；寺山・須田, 2016）。青森県内からは十和田市十和田湖温泉・宇樽部（田埜, 1984）などから記録されている。本種は北方系で本州とシベリア、サハリンなどで確認されているがまだ北海道からは発見されておらず、その分布は特異である（常木, 1956；山田, 2010, p.286）。なお詳しい生態についてはまだ不明である。

（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　キスケギングチ
学名　*Rhopalum guttatum* Tsuneki
環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布する。生息記録の少ない種類である。青森県内からは平川市葛川（田埜・常木, 1969）、弘前市岩木山（山田, 2006）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると、成虫は７～８月に活動し、萱葺き屋根などに巣を作り、ユスリカの仲間を狩って幼虫の餌とすることが知られている。営巣場所の一つである萱葺きの民家は殆どなくなり、営巣環境が衰退してきている。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**コシジロギングチ**
学名　*Rhopalum succineicollare* Tsuneki
環境省：該当なし

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布する。青森県内からは平川市温川（田埜・常木, 1969）、黒石市長坂山、青森市梵珠山、弘前市長慶森（山田, 1999）、弘前市岩木山（山田, 2006）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると低地・低山地から採集されているが個体数は少ない、また成虫は６～７月に活動し、古木などの甲虫脱出孔などを利用して巣を作り多数のチャタテムシを狩って幼虫の餌として貯えることが知られている。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**ヤマトコトガタバチ**
学名　*Lyroda nigra japonica* Iwata
環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布する。青森県内からはつがる市舘岡（Tsuneki, 1983）と、下山（1967）がミツメトガリアナバチとして記録したつがる市平滝沼の記録（山田, 2010, p.285）が知られており、いずれも砂丘地帯の屏風山地域から記録されている。個体数は少ない。山田（2010, p.285）によると成虫は７～８月に活動し、砂地に穿孔して巣を造り、ヒシバッタを狩って幼虫の餌とする。開発等により営巣に適した環境が変わり砂地が少なくなっている。
（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**コウノスジガバチモドキ**
学名　*Trypoxylon konosuense* Tsuneki
環境省：該当なし

国内では本州などに分布する。生息地も極めて限られたまれな種類である（寺山・須田, 2016）。青森県内からは、つがる市（旧、木造町）の標本がParatypeに指定されている（Tsuneki, 1968；常木, 1968）。山田（2010, p.286）によると成虫は８月に活動し、ススキの枯れ茎の髄内に営巣して、クモを狩ることが知れている。
（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**シモヤマジガバチモドキ**
学名　*Trypoxylon shimoyamai* Tsuneki
環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布している。北方系のハチであるが、確認されている生息地は限られ全国的にも個体数の少ない種である（山田, 2010, p.286）。本種は十和田をタイプ産地に記載されたギングチバチの仲間である（Tsuneki, 1956）。他に青森県内からは平川市十和田山地（常木・下山, 1963）、平川市滝ノ沢（阿部, 1980）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると、成虫は９月に活動し、竹筒などに巣を作り、オニグモ科やコガネグモ科などのクモを狩ることが知られている。　**（山内智）**

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**エゾアリマキバチ**
学名　*Pemphredon morio* Van der Linden
環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布し、本州では青森県などから確認されている。青森県内からは黒石市福民・境松（山田, 1998）などから記録されている。山田（2010, p.286）によると青森県では数少ない南限種で、低地に生息しており、記録は少ない。詳しい生態は不明であるが、本種が属するアリマキバチ属はアブラムシ類を狩り、朽木中に営巣することが知られている（寺山, 2012）。
（山内智）

ハチ目　ギングチバチ科　**D**

和名　**マエダテツチスガリ**
学名　*Cerceris pedetes* Kohl
環境省：準絶滅危惧

国内では北海道・本州などに分布するが、記録がある県は少ない。河川や海岸などの砂地などに営巣するが、護岸などで個体数が減少している（環境省, 2015）。青森県内からは平川市十和田山地（常木ら, 1964）、平川市温川（飯田, 1964）、大鰐町阿闍羅山（山田, 1996）、黒石市虹の湖、平川市大落前（山田, 1999）、西目屋村川原平（山田, 2010）などから記録されている。山田（2010, p.287）によると県内での分布域は狭く、個体数も非常に少ない。河川周辺の砂地に営巣しゾウムシ類を狩ることが知られている。　**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　ヤスマツコンボウハナバチ
学名　*Lipotriches yasumatsui* (Hirashima)
環境省：該当なし

国内では本州・九州などに分布している。青森県内では弘前市岩木山、平川市碇ヶ関、青森市稲山（山田, 1997）などから記録されているが、極めて個体数の少ない種である。山田（2010, p.287）によると成虫の発生時期は８月上旬から９月中旬で、地中に深く穴を掘って営巣する。ススキなどイネ科の花から花粉を集める。また雄はハッカの花からも採取することが知られている。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　シロスジフデアシハナバチ
学名　*Dasypoda japonica* Cockerell
環境省：該当なし

国内では北海道・本州・九州などに分布している。青森県内からは六ヶ所村尾鮫沼、五所川原市十三湖（山田, 1997）などから記録され、生息地は極めて限られている（山田, 2010, p.287）。本種は砂地に穴を掘って営巣するが、キク科植物に好んで訪れ、花粉を運んで花粉塊を作る。土地開発などで生息に適した環境が減ってきている。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　クズハキリバチ
学名　*Megachile pseudomonticola* Hedicke
環境省：情報不足

国内では本州・九州などに分布している。生息地も限られ個体数も減ってきている（環境省, 2015）。青森県内からは弘前市百沢、黒石市長崎（山田・棟方, 1996）などから記録されている。古木洞・竹筒やカミキリムシ等の脱出抗に営巣するが、育房の仕切りに切って運んだクズの葉を使う。山田（2010, p.287）によると、黒石市の事例では古いリンゴ樹の空洞部に貯まった虫糞などによる腐熟土中に、クズの葉片を運んで育房を造っていたのが観察された。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　カグヤキマダラハナバチ
学名　*Nomada kaguya* Hirashima
環境省：該当なし

国内では本州・四国・九州などに分布する。本種は青森県（Mitai & Tadauchi, 2007）にも分布し、弘前市岩木山（山田, 1999）などから記録されている。本種はヤスマツコンボウハナバチ（弘前市岩木山、平川市碇ヶ関、青森市稲山に分布記録）に労働寄生している（多田内・村尾, 2014）。森林よりも開けた草地に生息しているが、開墾などによって生息に適した環境が少なくなってきている。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　オカモトキマダラハナバチ
学名　*Nomada okamotonis* Matsumura
環境省：該当なし

国内では北海道・本州・九州などに分布している。青森県内からは弘前市茂森町・湯段（山田, 1999）、三沢市根井（山田, 2012）などから記録されているが生息地・個体数共に少ない。山田（2010, p.288）によると成虫は７～８月頃活動し、寄主は明るい草地に生息し、粘土質の裸地に穴を掘って巣を作ることが知られている。本種はヒロズキバナヒメハナバチ（県内では岩木山等各地に記録）に労働寄生する。草地や裸地の開発等から適した生息環境が少なくなってきている。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　ニセハイイロマルハナバチ
学名　*Bombus pseudobaicalensis* Vogt
環境省：該当なし

国内では北海道・本州北部などに分布している。北方系の種類で、北海道でも道東、道央などの低地などには多いが函館市は少ないという（松浦, 2004）。青森県内からは、Mt. kinashi（Ito & Munakata, 1979）、五戸町長下（山田, 2000）などから記録されている。日当たりの良い場所を好み、草地などの地中に営巣するが、県内で確認された生息地・個体数はともに少ない。農耕地などが放置され灌木が入り込んで、訪花植物が少なくなることが生息を脅かすことになる。**（山内智）**

ハチ目　ミツバチ科　**D**

和名　**ハイイロヒゲナガハナバチ**
学名　*Eucera sociabilis* Smith
環境省：該当なし

国内では北海道・本州などに分布している。青森県内からは深浦町（山田, 1999）などから記録されているが、生息記録は少ない。山田（2010, p.288）によると成虫は６～７月に現れ、グミ・クサフジなどの花を訪れ、地面に穴を掘って巣を作るが、詳しい生態は不明である。

アカクローバーの授粉を媒介する訪花蜂の一種でもある。今後の明細な生態解明が望まれる。

（山内智）

ハエ目　クロバエ科　**D**

和名　**カエルキンバエ**
学名　*Lucilia chini* Fan
環境省：情報不足

国内では青森から京都などにかけて、本州に分布している。生息地、個体数とも限られ少なくなっている（徳本, 2000；伊東・古田, 2009；環境省, 2015）。本種は水田や河岸で見つかっているが（Kano.R. & S.Shinonaga, 1968）、青森県内からも同様に中泊町岩木川、六ヶ所村高瀬川（小川原湖）などの河岸から記録されている（伊東・古田, 2009）。ヨーロッパではカエルの生体に寄生することが確認されているが、国内ではその明細な観察記録はされていない（徳本, 2000）。水田や河川整備・農薬散布などで生息環境が変わってきており、本種の生息に影響している。　**（山内智）**

チョウ目　ボクトウガ科　**D**

和名　**ハイイロボクトウ**
学名　*Pharagmataecia castaneae* (Hübner)
環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、湿地性の蛾でその分布は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では、黒石市（石村・佐藤, 1941）、つがる市富萢・五所川原市十三潟（下山ら, 1957）、つがる市平滝沼（工藤, 1983；亀田・山内, 2004）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2005）、つがる市ベンセン沼（亀田・山内, 2002, 2004）、三沢市小田内沼（阿部ら, 2004）、鰺ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）、東通村大利（亀田・山内, 2015）、東通村野牛（亀田・山内, 2016, 2019）などで記録されている。食草は湿地に繁茂するヨシで、湿地開発等で生息環境が悪化してきており、今後生息数の減少が危惧される。　**（山内智）**

チョウ目　ツトガ科　**D**

和名　**ヒメキテンシロツトガ**
学名　*Calamotropha fulvifusalis* (Hampson)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（東北・北陸地方など）の湿地で、少ない種類である。青森県内ではつがる市大滝沼（工藤, 1983）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、東通村大利（佐藤, 2018）などの湿地から記録されている。この他に青森県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の湿地保全と調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ツトガ科　**D**

和名　**モリオカツトガ**
学名　*Chrysoteuchia moriokensis* (Okano)
環境省：準絶滅危惧

国内では北海道南部・本州などの湿地に局地的に分布するが、生息地は少ない（環境省, 2015）。青森県内では東通村大利（佐々木, 1993）などから記録されている。湿地開発等で生息環境が悪化してきている。青森県内には多数の湿地帯が点在しており、今後更に生息地が確認される可能性が高く、今後の湿地保全と調査が望まれる。　**（山内智）**

チョウ目　カギバガ科　**D**

和名　**マンレイカギバ**
学名　*Microblepsis manleyi* (Leech)
環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布しているが、個体数は少ない。青森県内からは古くから知られていて八甲田山湯ノ澤（渡邊, 1935）、青森市駒込（石村・佐藤, 1941）から記録されていた。その他に深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1981）と生息確認地は少ない。本種は県内に広く分布しているカマツカを食草（井上ら, 1982；中島, 2011）としていることから、今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。

（山内智）

チョウ目　カギバガ科 **D**

和名　ナガトガリバ
学名　*Euparyphasma maxima* (Leech)
環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、東北地方では個体数が少ない（中島, 2011）。青森県内では南部町名久井岳、深浦町十二湖（佐藤・葛西, 1975）、田子町花木（山内, 2011）などから記録されている。本種は県内に広く分布しているヤマボウシやミズキを食草（井上ら, 1982；中島, 2011）にしており、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　ヒメウラベニエダシャク
学名　*Heterolocha laminaria sutschanska* Wehrli
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布し、本州では青森県、岩手県などで確認されている（土井, 2005；佐藤, 2011）。青森県内では、青森市茂木野・矢田（葛西・佐藤, 1980）、青森市高田・滝沢、東通村大利（葛西, 1988a）、青森市雲谷（亀田・山内, 2006）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）、東通村野牛（亀田・山内, 2018）などから記録されている。生態等は未知だが、今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。
（山内智）

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　ヨツモンマエジロアオシャク
学名　*Comibaena procumbaria* (Pryer)
環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、東北地方では生息地は少ない（井上ら, 1982；中島, 2011）。青森県内からは深浦町十二湖（葛西・佐藤, 1977）、野辺地町烏帽子岳（葛西, 1989c）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）などから記録されている。多くの食草が知られているが、県内での食草は確認されていない。今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。
（山内智）

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　シラナミナミシャク
学名　*Glaucorhoe unduliferaria* (Motschulsky)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布しているが、少ない種類である。青森県内では田子町白萩平（葛西, 1989a）などから採集されている。本種の詳しい生態等は未知であるが、今後の調査による本種の更なる生息地の確認とその生態の解明が望まれる。**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　ギフウスキナミシャク
学名　*Idiotephria debilitata* (Leech)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、生息地は限定される（井上ら, 1982；中島ら, 2011）。青森県内では、青森市朝日山（佐藤, 1970）、青森市高田・新城（葛西, 1989a）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2005）、青森市月見野（亀田・山内, 2006）、つがる市平滝沼（亀田・山内, 2007）などから記録されている。本種の食草はカシワ、コナラで、青森県内の生息地もカシワやコナラの林である。開発等では環境保全の配慮が必要である。**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　キジマソトグロナミシャク
学名　*Eulithis pyropata* (Hübner)
環境省：該当なし

本種の分布は国内では、北海道・本州・四国・九州などで、生息地は局地的で個体数も少ない（井上ら, 1982；中島ら, 2011）。青森県内では、鰺ヶ沢町二ツ森（高橋, 1988）、青森市滝沢、十和田市焼山・子ノ口（葛西, 1989a）などから記録されている。本種の食草はブナやミズナラの老木に着生するヤシャビシャク（中島ら, 2011）で、青森県レッドデータブック掲載種でもある。食草を含めた生息地の環境保全が必要である。**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　トビスジトガリナミシャク
学名　*Zola terranea* (Butler)
環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、採集記録は少ない。青森県内では、つがる市平滝沼(葛西, 1989a)などから記録されている。本種の食草はセンニンソウで、青森県内でも海岸近くの林に多い植物である。沿岸部の開発には環境保全の配慮が必要である。今後新たに生息地が確認される可能性がある。　**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　ホソスジハイイロナミシャク
学名　*Hydrelia gracilipennis* Inoue
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州の亜高山帯に生息する種類で、産地が限定される（中島ら, 2011）。青森県内では、十和田市睡蓮沼（山内・亀田, 1999）、青森市笠松峠（亀田・山内, 2010）などから記録されている。本種の詳しい生態等は未知である。八甲田山系地域からの更なる生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　シャクガ科 **D**

和名　カバシャク
学名　*Archiearis parthenias* (Linnaeus)
環境省：該当なし

褐色の地に白紋の前翅とオレンジ色の後翅を持つ。成虫は４月下旬～５月に姿を見せ、晴天の昼間活発に飛び、ヤナギ類の花などに吸蜜する。

県内では青森市田代高原（佐藤, 未発表）・大鰐町高野新田（横山, 2003）などの記録がある。幼虫はダケカンバなどのカバノキ類につく。本県での詳しい生活史の解明が待たれる。

（佐藤博）

チョウ目　スズメガ科 **D**

和名　コウチスズメ
学名　*Smerinthus tokyonis* Matsumura
環境省：該当なし

後翅に目立つ眼状紋がある小型のスズメガ。成虫は６月～８月に出現する。本州・四国・九州に分布する。

本県の記録は津軽湯の沢(佐藤・葛西, 1981)・蔦ダム（佐藤, 未発表）の記録があるが少ない種である。食樹はツツジ科が知られており、青森市街地の植栽のドウダンツツジで発生した例もある（佐藤, 未発表)。いずれにしても生息環境についての調査が必要である。　**（佐藤博）**

チョウ目　スズメガ科 **D**

和名　スキバホウジャク
学名　*Hemaris radians* (Walker)
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、各地で減少し生息地が局地的である(環境省, 2015)。青森県内では黒石市落合（齋藤, 1935)、青森県（山谷, 1939)、黒石市、三戸郡(石村・佐藤, 1941)、七戸町榎林（佐藤・葛西, 1981）などで記録されている。本種の食草は良く見かけるオトコエシ・アカネなどであるが開発等で生息環境が狭まれている。今後の調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　スズメガ科 **D**

和名　イブキスズメ
学名　*Hyles gallii* (Rottemburg)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などの高原で、生息地はきわめて局地的で少ない（井上ら, 1982；松浦, 1992)。青森県内では青森県（齋藤, 1935)、黒石市（石村・佐藤, 1941；佐藤・葛西, 1981a)、青森市朝日山（佐藤・葛西, 1975)、野辺地町烏帽子岳（佐藤・葛西, 1981）などが知られている。本種の食草はカワラマツバ、ヤナギランなどである（松浦, 1992)。今後の詳しい調査で更に生息地の確認が期待される。

（山内智）

チョウ目　スズメガ科 **D**

和名　ヒメスズメ
学名　*Deilephila askoldensis* (Oberthür)
環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・四国・九州などで、草原や河川敷などで見られるが、生息地は局地的である（矢野ら, 2011；環境省, 2015）。青森県内では青森市朝日山（佐藤, 1970）、八戸市八幡・田面木（富岡, 1974）、つがる市高山稲荷・屏風山、南部町名久井岳、平川市軍馬平（佐藤・葛西, 1981）、東通村尻労（福田ら, 2001）、つがる市ベンセ沼・大滝沼（亀田・山内, 2004）などで記録されている。食草はカワラアツバなどであるが、開発等で生息環境が悪化してきている。 **（山内智）**

チョウ目　スズメガ科 **D**

和名　ミスジビロードスズメ
学名　*Rhagastis trilineata* Matsumura
環境省：該当なし

本種は、本州・四国・九州などに分布しているが、生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内からは十和田市蔦（佐藤・葛西, 1981a）、鰺ヶ沢町二ツ森（下山ら, 1991）などで記録されている。本種はアジサイ科を食草としているが青森県内での幼虫の記録は無い。今後の調査で県内での食草の特定が望まれる。更に新しい生息地が確認される可能性もある。 **（山内智）**

チョウ目　シャチホコガ科 **D**

和名　ヘリスジシャチホコ
学名　*Neopheosia fasciata* (Moore)
環境省：該当なし

国内での分布は、本州・四国・九州などで、関東以北では少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985）などから記録されている。本種の食草はサクラ類・クリ等（小林, 2011）などである。盛岡市では多数確認されており（土井, 2005）、青森県でも今後の調査で更に生息地が確認される可能性がある。 **（山内智）**

チョウ目　シャチホコガ科 **D**

和名　アマギシャチホコ
学名　*Eriodonta amagisana* (Marumo)
環境省：該当なし

国内では、本州・四国・九州などに分布するが、少ない種類である。青森県内では十和田市蔦（佐藤・葛西, 1978）、新郷村迷ケ平（亀田・山内, 2006）などの八甲田山系から記録されている。本種の食草はブナで、早春にブナ林で成虫が見られることが知られている。青森県での生息地もブナ林であるが、白神山地、下北半島のブナ林では記録がなく、今後のブナ林での詳しい調査が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ドクガ科 **D**

和名　スゲドクガ
学名　*Laelia coenosa sangaica* Moore
環境省：準絶滅危惧

国内での分布は北海道・本州で、湿地に生息する蛾である。その生息地は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では、青森市、八戸市（石村・佐藤, 1941）、つがる市屏風山、東通村大利（佐藤, 1988）、三沢市仏沼（オオセッカの生態環境研究グループ, 1999）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2007）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などから記録されている。本亜種の食草はヨシ・ヒメガマなどの湿地に繁茂する植物である。湿地の開墾や造成などで、生息に適した環境が少なくなっている。 **（山内智）**

チョウ目　コブガ科 **D**

和名　キタオオコブガ
学名　*"Meganola" gigantula* (Staudinger)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などに分布するが、本州では青森県などから記録されている（佐々木, 2011）、少ない種類である。青森県内では青森市新城・滝沢・矢田（葛西, 1989b）などから記録されている。本種の詳しい生態などについては不明である。今後の詳しい調査で、本種の分布や生態などについての解明が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ウゴウンモンツマキリアツバ
学名　*Pangrapta suaveola* Staudinger
環境省：該当なし

国内では、東北地方などに分布しており、その生息地は局地的である（井上ら, 1982；岸田, 2011）。青森県内では、青森市新城・矢田、東通村大利（葛西, 1988a）、鰺ヶ沢町長沼（亀田・山内, 2005）、弘前市岩木山柴柄沢（亀田・山内, 2008）、弘前市瑞穂（亀田・山内, 2012）、田子町見附森（山内, 2014）などで記録されている。本種の詳しい生態などについては不明である。今後の詳しい調査で、本種の分布や生態などについての解明が望まれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　カサイヌマアツバ
学名　*Hypertrocon perfractalis* (Bryk)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道南部・本州北部などで、沼沢地や草原に分布する蛾である（大和田, 2011）。青森県内では1981・1982年につがる市平滝沼湖畔などで採集されているが（Owada, 1988, 1992）、同沼沢地以外の記録は見られない。本種の詳しい生態などについては不明であるが、青森県内各地には同様の沼沢地があり、更なる調査で生息地が確認される可能性があり、今後の調査が待たれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　アルプスギンウワバ
学名　*Syngrapha ottolenguii* (Dyar)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州などの高山地帯のハイマツ地帯に生息する種類で、高山蛾と呼ばれている。青森県内では八甲田山（神保, 1984）、八甲田山仙人岱（工藤, 1989）、八甲田山大岳（神保ら, 1991；葛西, 1986）などの八甲田山の高山帯から記録されている。本種の食草は高山に分布するコケモモ・ガンコウランである。八甲田山系以外では本種は確認されていない。青森県内の高山帯での分布調査が待たれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ハスオビアツバ
学名　*Traudinges obliqua* (Staudinger)
環境省：該当なし

国内では北海道・本州（中部地方以北）の湿地帯などに局地的に分布するが、本州での記録は少ない。青森県内ではつがる市平滝沼（葛西, 1983；亀田・山内, 2003）、つがる市屏風山（工藤, 1885）、東通村大利、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1988b）、三沢市仏沼（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999；阿部ら, 2001, 2005）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）、むつ市薬研（亀田・山内, 2017）の湿地帯などから確認されている。各地の湿地帯での調査で詳しい分布調査が待たれる。 **（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　フシキキシタバ
学名　*Catocala separans* Leech
環境省：該当なし

国内では本州・四国・対馬で得られているがいずれも産地は局地的。東北地方では岩手県盛岡市・福島県南会津町（旧舘岩村）などが産地として知られている。

本県では弘前市（旧岩木町百沢、松野, 未発表）・浪岡町大釈迦（工藤, 2016）の記録がある。食樹は一般にクヌギだが、クヌギが分布していない本県では何を食樹としているのか。いずれにしても個体数が少なく今後の情報収集が必要である。 **（佐藤博）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　オオモリケンモン
学名　*Acronicta omorii* (Matsumura)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州に分布するが、少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では、青森市朝日山（佐藤・葛西, 1975）などからの記録がある。本種の詳しい生態などについては不明であるが、隣接する岩手県では各地で記録されている（土井, 2005）。今後、青森県でも更に生息地が確認される可能性があり、里山などでの分布と生態の詳しい調査が待たれる。

（山内智）

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　タテスジケンモン
学名　*Simyra albovenosa* (Goeze)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などで、本州では青森県以外あまり知られていない（枝ら, 2011）。少ない種類である。青森県内では、小川原湖、下北半島（工藤, 1985）、東通村小田野沢・大利（葛西, 1985）、六ヶ所村鷹架沼（葛西, 1987）、東通村野牛（佐々木, 1993）、三沢市仏沼（オオセッカの生息環境研究グループ, 1999）、六ヶ所村内沼（阿部ら, 2004）などで記録されている。本種の食草はクサヨシなどが知られている。今後まだ確認されていない津軽半島などでの詳しい調査が待たれる。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ウスハイイロケンモン
学名　*Subleuconycta palshkovi* (Filipjev)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などで、本州では青森県以外あまり知られていない、採集例の大変少ない種類である（枝ら, 2011）。青森県内では十和田市焼山（葛西・佐藤, 1980）、十和田市十和田湖（枝ら, 2011）などで記録されている。本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布と生態などの詳しい解明が待たれる。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ネジロシマケンモン
学名　*Cranionycta oda* (Lattin)
環境省：該当なし

国内での分布は、本州などで、生息地は局地的で大変少ない種類である（枝ら, 2011；岩手県, 2014）。青森県内では十和田市焼山（葛西, 1987）などから記録されている。本種の生態などについては不明であるが、今後の調査による本種の分布とその詳しい生態の解明が待たれる。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ハマセダカモクメ
学名　*Cucullia scopariae* Dorfmeister
環境省：該当なし

国内での記録が少ない希少種である。国内では1977年８月に深浦町岩崎の海岸で採集（井上ら, 1982）されたのが最初の記録である。その後、北海道利尻島で記録されている（四方, 2011）。国内での生態等については不明である。採集記録から、本種は海岸地帯に局地的に生息すると推測される。各地海岸の調査で生息地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ギンモンセダカモクメ
学名　*Cucullia jankowskii* Oberthür
環境省：準絶滅危惧

国内での分布は、北海道・本州・九州などに生息しているが、生息地は局地的で少ない（井上ら, 1982；四方, 2011）。青森県内ではつがる市屏風山、七戸町榎林（佐藤・葛西, 1981b）などで記録されている。本種の食草はヨモギ、オオヨモギで河川敷や草原で生息が確認されている（環境省, 2015）。開発で生息環境が劣悪してきており、開発での適切な環境保全が望まれる。今後の調査で更に生息地が確認される可能性が高い。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ヘリボシキノコヨトウ
学名　*Stenoloba oculata* Draudt
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道南部・本州・九州などで、生息地は局地的で少ない種類である（井上ら, 1982）。青森県内では十和田市蔦（杉, 1974）、むつ市川内町家の辺（亀田・山内, 2018）、むつ市大畑町小目名（亀田・山内, 2019）などで記録されている。本種の食草は山地から高山で良く見られるシラカンバ、ダケカンバである。開発などで生息環境が悪化してきており、開発での適切な環境保全が望まれる。今後更に生息地が確認される可能性が高い。**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ヌマベウスキヨトウ
学名　*Chilodes pacificus* Sugi
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

本種は、北海道・本州の湿地帯に分布するが、その生息地は局地的である（環境省, 2015）。青森県内では東通村大利・小田野沢（葛西, 1988c）、三沢市仏沼（阿部ら, 2001）、つがる市ベンセ沼（亀田・山内, 2004）、つがる市大滝沼（亀田・山内, 2007）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などで記録されている。本種の生態などについては不明である。生息地である湿地の開発での適切な環境保全と、今後の調査による生態の詳しい解明が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ヒメシロテンアオヨトウ
学名　*Trachea melanospila* Kollar
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州・九州などで、その生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内では、八甲田山大岳（神保ら, 1991）、十和田市子ノ口（葛西, 1988c）から記録されている。本種の食草は逸出植物であるソバなどが知られている。隣接する岩手県では多くの産地が確認（土井, 2005）されており、青森県でも八甲田山系を中心に新産地が確認される可能性があり、今後の詳しい調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　セブトモクメヨトウ
学名　*Auchmis saga* (Butler)
環境省：該当なし

国内では北海道・本州・四国・九州などに分布しているが、その生息地は少ない（井上ら, 1982）。青森県内ではつがる市高山稲荷（葛西・佐藤, 1979）、野辺地町烏帽子岳（佐藤, 1985）などの記録が知られている。本種の食草としてメギが知られているが、青森県では希産種（細井, 2018）である。食草の分布とともに、県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。
（山内智）

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ウスクモヨトウ
学名　*Pabulatrix pabulatricula* (Brahm)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（青森県・岩手県・山梨県など）などであるが、北海道では普通見られるが本州での採集記録は少なく、隣接の岩手県でも 1 例の記録しか無い（土井, 2005；枝ら, 2011；岩手県, 2014）。青森県内では田子町白萩平（葛西・佐藤, 1980）などから記録されている。国内での生態は不明である。県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。
（山内智）

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　シロミミチビヨトウ
学名　*Oligia leuconephra* Hampson
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州（東北地方）などである。東北地方では青森県・岩手県・秋田県・宮城県・福島県などで確認されている（枝ら, 2011）。青森県内では、つがる市屏風山（佐藤, 1985）などから記録されている。国内での生態は不明である。県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ヨコスジヨトウ
学名　*Mesoligia furuncula* (Denis et Schiffermüller)
環境省：該当なし

国内での分布は北海道・本州で、北海道では普通にみられるが、本州では東北地方（青森県・秋田県・福島県など）などで見つかっているが少ないようである（井上ら, 1982；枝ら, 2011）。青森県内ではつがる市平滝沼（葛西, 1983）、つがる市屏風山（工藤, 1985）などで記録されている。本種の食草は海岸に見られるハマムギなどが知れており、青森県の生息地でも本種を食草としている可能が高い。ハマムギの生える海岸での今後の詳しい調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ウスキモンヨトウ
学名　*Photedes fluxa* (Hübner)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などであるが、本州では青森県以外あまり知られていない（枝ら, 2011）。生息地は湿地帯であるが、個体数は少ない種類である。青森県内では東通村小田野沢の湿地から記録されている（山内, 2000）。本種の詳しい分布や生態は不明であるが、県内には多くの湿地帯があり、県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　エゾスジヨトウ
学名　*Doerriesa striata* (Staudinger)
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

国内では、北海道・本州などの湿地帯に分布しているが、少ない種類である。湿地環境の指標種でもある（枝ら, 2011）。青森県内では東通村大利（葛西, 1985, 1988c；佐々木, 1993）、東通村野牛（亀田・山内, 2016）などで記録されている。本種の詳しい分布や生態は不明であるが、本州中部ではモウセンゴケが繁茂する低湿地でも見つかっている（工藤, 1985）。青森県内での低湿地帯での詳しい調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　シロオビヨトウ
学名　*Hadena compta* (Denis et Chiffermüller)
環境省：準絶滅危惧

前翅は灰黒色で中央に白色の帯を表す。成虫は８月に出現する。北海道・東北地方・新潟県および本州中部地方山地の高原地帯で採集されている。

本県では屏風山や鷹架沼などで採集されている。幼虫はカワラナデシコの花や種子を食べるが、この様な地域におけるナデシコ類の減少や、鷹架沼周辺の開発は生息環境改変の危険性を有している。　**（佐藤博）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ホソバウスキヨトウ
学名　*Longalatedes elymi* (Treitschke)
環境省：該当なし

国内での分布は、北海道・本州などで、本州では青森県以外あまり知られていない。本種の採集例は少なく生息地は局地的である（枝ら, 2011）。青森県内では東通村尻屋崎（杉山, 1986）などの記録がある。本種の食草は海岸のテンキグサ（ハマニンニク）が知られている。テンキグサは各地海岸に見られ、今後の調査で県内での生息地や生態などの詳しい調査が待たれる。
（山内智）

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　ハイイロヨトウ
学名　*Parastichtis suspecta* (Hübner)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州（青森県・岩手県など）などに分布しているが、少ない種類である（枝ら, 2011）。青森県内では青森市萱野茶屋、十和田市焼山、平川市軍馬平（葛西, 1983）、黒石市黒森山（葛西・佐藤, 1979）、青森市魔ノ岳（佐藤, 1985）などで記録されている。本種の国内での詳しい分布や生態は不明である。本県の採集地は山地の高原などであることから、県内での高原などでの分布調査が待たれる。　**（山内智）**

チョウ目　ヤガ科 **D**

和名　オオシラホシヤガ
学名　*Eurois occulta* (Linnaeus)
環境省：該当なし

国内では、北海道・本州中部地方以北などに分布する。特に本州での記録は少なくまれな種類である（井上ら, 1982；小林, 2011）。青森県内ではつがる市亀ケ岡で記録されている（松野, 1987）。本種の北海道での観察では、イネ科・広葉草本の雑草地から得られた幼虫が、タンポポ・白クローバをよく食べたという（鳥倉, 1985）。このことから青森県内の同様な植生の雑草地での詳しい調査で、更に生息地が確認される可能性がある。　**（山内智）**

③引用文献

阿部　東　1970. 青森県のオサムシ．Yamase（青森県立五所川原農林高等学校自然科学部），9：23-28.

阿部　東　1972. 岩木山．月刊むし，16：5-7.

阿部　東　1974. 青森県産天牛類の覚え書き，甲虫ニュース，31/32：13-14.

阿部　東　1976. 青森県におけるオオヒョウタンゴミムシの採集記録．Elytra，4(2)：35.

阿部　東　1979. ニトベギングチ．ケルクス，12：16-17.

阿部　東　1980. 青森県．日本の重要な昆虫類（環境庁）．pp.1-56.

阿部　東　2008. 青森県におけるゲンゴロウ類３種の採集記録．Celastrina，43：37.

阿部　東　2011. カワラハンミョウの日本海側の採集記録，Celastrina，46：46.

阿部　東　2013. 青森県産ホソガムシ科，ガムシ科の記録．Celastrina，48：26-27.

阿部　東・今　純一・三上春文・山内　智　2001. 小川原湖周辺の無脊椎動物(1)．青森県立郷土館調査研究年報，25：9-14.

阿部　東・今　純一・三上春文・山内　智　2002. 小川原湖周辺の無脊椎動物(2)．青森県立郷土館調査研究年報，26：67-70.

阿部　東・今　純一・三上春文・簗瀬友宏・山内　智　2004. 小川原湖周辺の無脊椎動物(4)．青森県立郷土館調査研究年報，28：39-46.

阿部　東・今　純一・三上春文・簗瀬友宏・山内　智　2005. 小川原湖周辺の無脊椎動物(5)．青森県立郷土館調査研究年報，29：11-18.

阿部　東・小田良孝・工藤貢次　2002. ゲンゴロウ科（Dytiscidae）３種の染色体．Jpn. J. Ent.（N.S.），5(4)：145-154.

阿部　東・藤田　宏　1976. 青森県下の興味深いカミキリ２種．Elytra，4(2)：39.

阿部　東・松井亀彦　1960. 下北半島動物採集目録．Praeda，1：34-50.

阿部　東・山内　智　1987. 昆虫．白神山地自然環境調査報告書（赤石川流域）．青森県．pp.104-187.

阿部　東・山内　智　1989. 昆虫．白神山地自然環境調査報告書（大川・暗門川流域）．青森県．pp.84-144.

阿部行伸　1969. 青森県東南部の蝶類．著者自刊．214pp.

秋山美文　2004. 広島県のエゾコガムシの記録．甲虫ニュース，145：19-20.

安藤一次　2012. 仏沼におけるベニモンマダラとルリハダホソクロバの記録．おおせっからんど年報，3：45-48.

安藤一次　2013. 青森県仏沼地域におけるベニモンマダラの記録．月刊むし，503：18-20.

青森県　2006. ウシガエル，オオクチバス，アメリカザリガニ．青森県外来種対策学術調査報告書―青森県外来種リスト―．p.57，p.58，p.86.

青森県　1993. 南八甲田山地総合学術調査報告書．238pp.

青森県　2010. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－．335pp.

青森県立郷土館　1988. 赤石川流域自然調査概要(2)．青森県立郷土館調査研究紀要，12：3-60.

青森県教育委員会　1972. むつ小川原開発地域天然記念物調査報告書．青森県天然記念物調査報告書第１集，61pp.

青森県農林水産部畜産課（編）　2019. 青森県の畜産．52pp.

青森県生物学会八戸支部編集部　1989. 笹原氏が南郷村に寄附した蛾の標本．青森県生物学会八戸支部会報，24：1-2.

青森市　1994. 青森市雲谷周辺の自然．295pp.

荒木　哲　1995. キベリマルヒサゴコメツキを本州北端で採集．月刊むし，287：37-38.

荒木　哲　2001. 六ヶ所村でのアカガネオサムシの記録．Celastrina，36：92.

朝比奈正二郎　1988. 日本産ゴキブリ分類ノートXⅦ．衛生動物，35(1)：53-62.

朝比奈正二郎　1992. 日本産ゴキブリ類．中山書店，東京．253pp.

Bates, H. W. 1883. Supplement to the geodephagous Coleoptera of Japan, chiefly from the collection of Mr. George Lewis, made during his second visit, from February, 1880 to September,1881. Trans. Ent. Soc. London, 1883：pp.205-290.
千葉瑞穂・村上直樹・佐藤　守　1966. 戸来の蝶相. 青森昆虫研究会, 42pp.
Chûjô, M. 1955. Erotylid-Beetle of Aomori Prefecture,collected by Mr.K.Shimoyama(Ⅲ). Entom. Rev. Japan, 6(6)：43-44.
Chûjô, M. 1969. Erotylidae. Fauna Japonica. Academic Press of Japan. 316pp.
Cobben, R. H. 1985. Additions to the Eurasian saldid fauna, with a description of fourteen new species (Heteroptera, Saldidae). Tijdschrift voor Entomologie 128(4)：215-270.
ダム水源地環境整備センター　1997. 陸上昆虫類調査. 平成８年度高瀬川水環境現況総合調査業務報告書Ⅱ, pp.311-321.
土井信夫　2005. 岩手県の大蛾類, 付蝶類リスト. 著者自刊. 240pp.
枝　恵太郎　2011. ヤガ科ノシメコヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑 Ⅱ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. p.303.
枝　恵太郎・柳田慶浩　2011. ヤガ科ケンモンヤガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. pp.295-303.
枝　恵太郎・四方圭一郎　2011. ヤガ科キリガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. pp.323-367.
遠藤俊二・林　正美　1987. ニトベツノゼミの新産地. Rostria, 38：570.
江崎悌三・一色周知・六浦　晃・井上　寛・岡垣　弘・緒方正美・黒子　浩　1975. 原色日本蛾類図鑑（下）改訂新版3刷. 保育社, 大阪. 304pp., pls 65-136.
江崎悌三　1975. ヤママユガ科. 原色日本蛾類図鑑(下)改訂新版３刷. 保育社, 大阪. pp.223-229.
藤本博文　2013. 福岡県におけるエチゴトックリゴミムシの記録. Sayabane, 10：27.
福田　彰　1940. 数種の日本産金花虫に就いて. 日本の甲虫, 3(2)：90-94.
福田　彰　1956. 青森県産ジンガサハムシ亜科について. 進化, 8(3/4)：9-11.
福田　彰　1969a. 三八地方の甲虫(1). 青森県生物学会八戸支部研究資料, 10：1-4.
福田　彰　1969b. 三八地方の甲虫(2). 青森県生物学会八戸支部研究資料, 12：1-4.
福田　彰　1970. ルイヨウボタンを食草とするオオニジュウヤホシテントウ群の未記録の一型について. Kontyû, 38(4)：348-352.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1992. 白神山地自然調査概要(2)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 16：21-36.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1993. 白神山地自然調査概要(3)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 17：34-56.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1994. 白神山地自然調査概要(4)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 18：15-25.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1995. 白神山地自然調査概要(5)昆虫・蜘蛛. 青森県立郷土館調査研究年報, 19：18-32.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1996. 昆虫・蜘蛛. 白神山地の自然. 青森県立郷土館. pp.53-103.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1997. 下北丘陵自然調査概要(2)無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 21：19-27.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　1998. 下北丘陵自然調査概要(3)無脊椎動物. 青森県立郷土館調査研究年報, 22：16-25.
福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・今　純一・山内　智　2001. 下北丘陵の無脊椎動物. 下北丘陵の自然. 青森県立郷土館. pp.73-100.
福田　彰・奈良典明　1952. 青森県産はんみょう科について－青森県の昆虫(1)－. 進化, 4(2)：11-15.

福田　彰・山田雅輝　1955. 青森県産スズメバチ科(1)について－青森県の昆虫(X)－. 進化, 7(3/4)：8-9.
福田　進　1984. 八戸と昆虫. 八戸市教育委員会. 56pp.
福田　進　1988. 根城の自然と虫たちの60年. わたしたちの根城（根城地区連合町内会編）. pp.52-54.
福田　進　1990. 青森県博物総目録昆虫編について(Ⅲ). Celastrina, 24：14-16.
福島正三　1968. ハエトリリボン，マレイズトラップおよびステッキーネット３法によって調査された八甲田山地域における昆虫相. 各種陸上生態系における二次生態構造の比較研究（昭和42年度研究報告）. pp.126-172.
古川晴男　1928. 昆虫夜話. 自然研究, 3：44-48.
古木　誠　2017. 写真で見る青森県におけるルリハダホソクロバの生態. 青森の蝶, 26：67-74.
五所川原農林高校自然科学部　1966. 十二湖昆虫採集記録. やませ, 6：9-66.
五所川原農林高校自然科学部　1970. 中山山脈昆虫リスト. Yamase, 9：40-55.
Habu, A. 1958. One new Bembidion-species from North Japan. Kontyû, 26：64-67.
Habu, A. 1962. Chalcididae, Leucospididae and Podagrionidae. Fauna Japonica. Academic Press of Japan. 244pp., 19pls.
半田宏伸　2017. 埼玉県内におけるミヤマツヤセイボウPhiloctetes monticola (Tsuneki,1975) の初記録と産卵に関する知見. 埼玉県立自然の博物館研究報告, 11：55-56.
羽田義任　1989. 福井県のハナバチ上科について(2). 福井虫報, 4：11-19.
原子　保　1992. 十和田市に棲息するコシアキトンボについて. Celastrina, 27：128.
Hasegawa, T. & K. Odagiri 2018. A new subspecies of *Japonica (Yuhbae) onoi* Murayama, 1953 (Lepidoptera: Lycaenidae) from Fukushima, Japan. Butterflies, 77：25-33.
Hayashi, F. & S. Suda 1995. Sialidae (Megaloptera) of Japan. Aquatic Insects, 17：1-15.
Hayashi, M 1968. Studies on Cerambycidae from Japan and its Adjacent Regions (Col.), XV. Ent. Rev. Japan, 10(1/2)：20-28.
林　文男　1995. センブリの分類を一段落させて. 兵庫陸水生物, 46：1-24.
林　成多　2004. 総説　日本のネクイハムシ亜科. ホシザキグリーン財団研究報告, 7：29-126.
林　成多　2006. 日本産ネクイハムシ亜科の分布記録(2), ネクイハムシ属・キイロンクイハムシ属. ホシザキグリーン財団研究報告, 9：151-192.
林　成多　2012. 日本のネクイハムシ. むし社, 東京. 94pp.
林　成多・初宿成彦　2003. 大阪市立自然史博物館所蔵のゲンゴロウ類標本, 特に希少種および絶滅危惧種について. 大阪市立自然史博物館研究報告, 57：11-20.
林　成多・八木　剛　2000. 日本におけるエゾコガムシの分布. 甲虫ニュース, 132：7-8.
林　正美　2003. ヒメミズギワカメムシの秋田県からの発見および長翅型の記録. Rostria, 51：21-23.
林　正美・遠藤俊二　1984. ニトベツノゼミについての新知見. Rostria, 36：487-493.
林　正美・遠藤俊二・関口　宏・岩間健一・中野雄一・佐竹謙太郎　1983. ニトベツノゼミの生態および脱皮殻. Rostria, 35：451-459.
橋爪秀博　1994. タガメのすべて－水生動物との共生を願って－. トンボ出版, 大阪. 32pp.
樋口　誠　1993. ゲンゴロウモドキ青森県の記録. 月刊むし, 264：38.
樋口　誠・丸山良博　1995. 猛暑で極端に減少・小型化したマークオサムシ. 月刊むし, 291：34.
平嶋義宏・森本　桂　2008. 新訂　原色昆虫大図鑑 Ⅲ. 北隆館, 東京. 654pp.
平嶋義宏・森本　桂・多田内　修　1989. 昆虫分類学. 川島書店, 東京. 597pp.
平山修次郎　1936. オオチャイロハナムグリ. 虫の世界, 1(5/6)：17.
弘前高等学校生物クラブ　1953. 昆虫. 青森県下北郡左京沼調査報告. Blakiston, 1(3)：12-14.
弘前高等学校生物クラブ　1957. 昆虫. 青森県岩木川生物調査報告. Blakiston, 7：18-23.
弘前高等学校生物クラブ　1965. 昭和38年度夏坂生物調査旅行報告. Blakiston, 11：3-10.

日浦　勇　1967. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅰ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 20：65-81.
日浦　勇　1968. 日本産水棲・半水棲半翅類の分布の研究Ⅱ. 大阪市立自然科学博物館研究報告, 21：13-17.
堀　繁久　2000. 日本新記録のアナバネコツブゲンゴロウ（新称）. 知床博物館研究報告, 21：33-38
堀　繁久・櫻井正俊　2015. 北海道の蝶と蛾. 北海道新聞社, 札幌. 422pp.
堀　繁久・栗林一寿　2017. 北海道におけるシラキトビナナフシとヤスマツトビナナフシの分布について. 北海道博物館研究紀要, 2：39-48.
堀江清史　2013. マダラ科マダラガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅲ（広渡俊哉・那須義次・坂巻祥孝・岸田泰則　編著）. 学研教育出版, 東京. p.331.
細井幸兵衛　2018. 新青森県植物目録. 弘前大学白神自然環境研究所. XXI + 115 + 40pp.
市田忠夫　1986. 津軽半島北部のウスバカマキリ・カヤコオロギ・その他若干の直翅類の記録. Celastrina, 17：25-26.
市田忠夫　1988. 青森県のカメムシ(Ⅰ). Celastrina, 20：113-145.
市田忠夫　1989. 青森県のカメムシ(Ⅱ). Celastrina, 22：29-38.
市田忠夫　1991. 青森県のカメムシ(Ⅲ). Celastrina, 26：44-54.
市田忠夫　1992. 青森県の脈翅類. Celastrina, 27：78-121.
市田忠夫　1993. 木造町でショウリョウバッタモドキ採集. Celastrina, 28：72.
市田忠夫　1998a. 本州から初めて記録されるタイワンナガマキバサシガメ. Rostria, 47：29-30.
市田忠夫　1998b. 北上川下流域の興味深いカメムシ類. インセクトマップオブ宮城, 9：25-27.
市田忠夫　1999a. 北日本のマキバサシガメ 湿地性種の棲み分けと翅型変異. インセクタリゥム, 12：336-342.
市田忠夫　1999b. オオマキバサシガメの生息環境と分布. かめむしニュース, 16：6-7.
市田忠夫　2000. その後のウスバカマキリ. Celastrina, 35：139.
市田忠夫　2002. 青森県と秋田県のトワダオオカ５新産地, Celastrina, 37：76-78.
市田忠夫・市川顕彦　2001. 青森県平滝沼でトゲヒシバッタを採集. 月刊むし, 364：49.
市川顕彦　2014. 日本産ナナフシ目の新知見. 月刊むし, 523：10-17.
市川裕二　2008. 八戸市のトワダオオカの追加記録. Celastrina, 43：88.
市川裕二・吉川克哉　2012. 津波で出来た池で見られたエリザハンミョウとトンボ類. Celastrina, 47：96-98.
一戸清志　1991. オオウラギンヒョウモンを田子町で採集. Celastrina, 26：71.
飯田忠嗣　1964. マエダテツチスガリを十和田で採集. 生物研究, 8(4)：52.
池田都志也・高橋　誠　2003. 青森県におけるサロベツナガケシゲンゴロウの記録. 月刊むし, 394：2.
井村有希・水沢清行　2013. 日本産オサムシ図説. 昆虫文献六本脚. 東京. 368pp.
Inoue, H. 1958. Descriptions and records of some Japanese Geometridae(Ⅱ). Tinea, 4(2)：241-256.
井上　寛・杉　繁郎・黒子　浩・森内　茂・川辺　湛　1982. 日本産蛾類大図鑑. 講談社, 東京. Vol.1：1-968, Vol.2：1-556, pls 1-392.
Ishimura, K. 1938. A list of Odonata from Aomori Pre,(Northern Honsyu). 青森博物研究会会報, 6：4-22.
石村　清　1952. トワダオオカの幼虫期について. 衛生動物, 3(1/2)：12-19.
石村　清・佐藤哲男　1941. 節足動物　昆虫編, 青森県博物総目録第２巻. 青森県博物研究会会報, 21：28-108.
Ito, M. & M. Munakata　1979. The bumblebees in southern Hokkaido and nothernmost Honsyu, with notes on Blakiston Zoogeographical line. Low Tem. Sci. Ser. B, 37：81-105.
伊東憲正・古田　治　2009. カエルキンバエ調査会報告ならびに既報の整理. はなあぶ, 27：58-61.
井藤竜大　2018. 矢田丘陵におけるウマノオバチ*Euurobracon yokahamae*(Dalla Torre,1898)（ハチ目：コマユバチ科）の記録と羽化脱出時についての知見. つねきばち, 32：49-50.

岩井大輔・八木　剛　2003. 日本におけるオオルリハムシの地理的分布．昆虫（ニューシリーズ），6⑵：105-110.
岩田久二雄　1982. 日本蜂類生態図鑑．講談社，東京．162pp.
岩田朋文・渡辺黎也・安藤一次　2019. 青森県三沢市仏沼の水生昆虫類目録．青森自然誌研究，24：17-21.
岩手県　2001. いわてレッドデータブック．614pp.
岩手県　2014. いわてレッドデータブック，岩手の希少な野生生物，www.fa0031@pref. iwate. jp（2018年５月６日確認）
岩崎　拓　2000. オナガアシブトコバチのオオカマキリとチョウセンカマキリ越冬卵嚢への寄生．昆虫（ニューシリーズ），3⑵：65-70.
Japanese Ant Database Group 2003. Ants of Japan. Gakken, Tokyo. 224pp.
神保一義　1984. 高山蛾－高山を舞う蛾たち．築地書館，東京．191pp.
神保一義・柳田慶浩・葛西　充　1991. 岩木山・八甲田山の高山帯の蛾類．蛾類通信，62：204-207.
加賀玲子・川島逸郎・刈部治紀　2018. ウマノオバチ*Euurobracon yokahamae*（Dalla Torre,1898）（Insecta：Hymenoptera：Braconidae）の生活史，特にその寄主について．Bull. Kanagawa prefect. Mus.（Nat. Sci.）, 47：59-66.
加賀玲子・刈部治紀　2019. ウマノオバチ*Euurobracon yokahamae*（Dalla Torre,1898）（Insecta: Hymenoptera: Braconidae）の生活史－工業用内視鏡を使った観察－．Bull. Kanagawa prefect. Mus.（Nat. Sci.）, 48：69-74.
亀田　満・山内　智　2002. 青森県屏風山周辺の蛾類(Ⅰ). 青森自然誌研究，7：53-58.
亀田　満・山内　智　2003. 青森県屏風山周辺の蛾類(Ⅱ). 青森自然誌研究，8：29-34.
亀田　満・山内　智　2004. 青森県屏風山周辺の蛾類(Ⅲ). 青森自然誌研究，9：53-60.
亀田　満・山内　智　2005. 青森県屏風山周辺の蛾類(Ⅳ). 青森自然誌研究，10：53-59.
亀田　満・山内　智　2006. 青森県八甲田山の蛾類(Ⅳ). 青森自然誌研究，11：33-34.
亀田　満・山内　智　2007. 青森県屏風山周辺の蛾類(Ⅴ). 青森自然誌研究，12：35-44.
亀田　満・山内　智　2008. 青森県岩木山の蛾類．青森自然誌研究，13：25-34.
亀田　満・山内　智　2010. 青森県八甲田山の蛾類(Ⅴ). 青森自然誌研究，15：1-8.
亀田　満・山内　智　2012. 青森県岩木山の蛾類(Ⅳ). 青森自然誌研究，17：71-78.
亀田　満・山内　智　2015. 青森県下北半島の蛾類(Ⅰ). 青森自然誌研究，20：15-26.
亀田　満・山内　智　2016. 青森県下北半島の蛾類(Ⅱ). 青森自然誌研究，21：55-64.
亀田　満・山内　智　2017. 青森県下北半島の蛾類(Ⅲ). 青森自然誌研究，22：55-66.
亀田　満・山内　智　2018. 青森県下北半島の蛾類(Ⅳ). 青森自然誌研究，23：73-88.
亀田　満・山内　智　2019. 青森県下北半島の蛾類(Ⅴ). 青森自然誌研究，24：1-13.
神奈川県立博物館（編）　1995. 阿部光典ゲンゴロウ類コレクション標本目録．神奈川県立博物館自然部門資料目録，8：1-66.
環境省　2006. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物，５．昆虫編．自然環境研究センター，東京．246pp.
環境省　2015. レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－５．昆虫類．ぎょうせい，東京．509pp.
環境庁　1995. 日本産野生生物目録－本邦産野生動植物の種の現状－，無脊椎動物編Ⅱ．自然環境研究センター，東京．　621pp.
Kano, R. & S. Shinonaga 1968. Calliphoridae. Fauna Japonica. Academic Press of Japan. 181pp.
葛西　充　1983. 青森県蛾想記その２．ハイイロキリガ．誘蛾燈，92：114-116.
葛西　充　1983. 青森県蛾想記その３．ヨスジカバイロアツバ．誘蛾燈，94：218-221.
葛西　充　1984. 青森県蛾想記その４．ミズジキリガ．誘蛾燈，96：100-103.
葛西　充　1985. 青森県蛾想記その６．エゾスジヨトウ．誘蛾燈，102：151-154.
葛西　充　1986. 青森県蛾想記その７．ダイセツヤガ．誘蛾燈，103：7-14.
葛西　充　1987. 青森県の蛾(Ⅷ). 誘蛾燈，109：81-85.

葛西　充　1988a．青森県の蛾(XI)．誘蛾燈，111：17-21.
葛西　充　1988b．青森県の蛾類(XII)．誘蛾燈，112：51-56.
葛西　充　1988c．青森県の蛾(VI)の追加記録．誘蛾燈，113：99-100.
葛西　充　1989a．青森県の蛾(XIII)．蛾類通信，151：5-12.
葛西　充　1989b．青森県の蛾(XIV)．誘蛾燈，115：35-37.
葛西　充　1989c．青森県の蛾(XV)．誘蛾燈，116：65-68.
葛西　充・佐藤　博　1977．青森県産シャクガ科の記録．誘蛾燈，67：4-8.
葛西　充・佐藤　博　1979．青森県の蛾(II)．誘蛾燈，75：4-7.
葛西　充・佐藤　博　1980．青森県から採集された注目すべき蛾．蛾類通信，106：83-84.
葛西　充・佐藤　博　1981．青森県の蛾(V)．誘蛾燈，86：125-128.
柏崎春生　1974．オオクワガタの採集．ビートル，3：22.
Katakura, H. 1981. Classification and Evolution of the Phytophagous Ladybirds Belonging to *Eenosepilachna vigintioctomaculata* Complex. Jour.Fac.Sci., Hokkaido Univ., Ser., Zool., 22(4)：301-378.
片倉晴雄　1988．オオニジュウヤホシテントウ．文一総合出版，東京．160pp.
加藤陸奥雄　1939．昆虫の日週活動と其の環境条件，八甲田山高原蟻塚の内部温度．昆虫，12(6)：205-207.
川井信矢・堀　繁久・河原正和・稲垣政志　2008．日本産コガネムシ上科図説．昆虫文献 六本脚．198pp.
河上康子・林　成多　2008．日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究(3)青森県津軽半島．ホシザキグリーン財団研究報告, 11：143-148.
蹴揚洋子・米田幸子・小池　忍　1985．三戸地方のトンボ．Paulownia，17：101-112.
Kerzhner, I. M. 1979. New Heteroptera from the Far East of the USSR. Trudy zool. Inst., 81：14-65.（in Russian)
Kerzhner, I. M. 1988. Family Nabidae, key to the Insects of Far East USSR. 2. pp.761-768.（in Russian）
木俣　繁　1984．故白畑孝太郎氏所蔵蛾類標本(1)．誘蛾燈，96：87-94.
Kimoto, S. 1966. The Chrysomelidae of Japan and the Ryukyu Islands. XⅠ. Jour. Fac.Agr., Kyushu Univ., 13(4)：635-671.
木元新作　1989．キアシネクイハムシの記録について．昆虫と自然，24(13)：5-6.
木元新作・滝沢春雄　1994．日本産ハムシ類幼虫・成虫分類図説．東海大学出版会，神奈川．530pp.
木村直哉・大高明史・小笠原崇輝・森下千尋・内藤久美子・三上浩子・阿倍　弘・野原精一・福原晴夫　2018．青森県下北湖沼群の動物プランクトンと底生動物相．青森自然誌研究，23：45-60.
木村直哉・小林　貞・倉西良一・嶋津　武・大高明史　2016．弘前だんぶり池の水生無脊椎動物．青森自然誌研究，21：43-54.
木村帝一　1973．野内川周辺の昆虫．やぶなべ，19：11-22.
菊池波輝　2014．福島県初記録のシモヤマギングチ*Ceratocrabro shimoyamai*（Tsuneki,1958)（ギングチバチ科：ギングチバチ亜科）．つねきばち，25：37-38.
菊池昭雄　1981．青森県でクロフカバシャクを採集．誘蛾燈，84：88.
菊池昭雄　1983．青森県のベニモンマダラ．Celastrina，12：17.
Kishida, Y., T. Kudo, & S. Kudo 2014. A new species of Nokona Matsumura from Japan(Lepidoptera, Sesiidae). Tinea, 23(1)：4-9.
岸田泰則　1995．ミツモンケンモン青森県に産す．蛾類通信，185：161.
岸田泰則（編）2011．日本産蛾類標準図鑑 Ⅱ．学研教育出版，東京．416pp.
岸田泰則　2011．カレハガ科．日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.317-321.
岸田泰則　2011．ヒトリガ科．日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.148-167.

岸田泰則　2011．ヤガ科スジコヤガ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.282-288.
岸田泰則　2011．ヤガ科ツマキリアツバ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.219-221.
岸田泰則・柳田慶浩・清野昭夫・石塚勝巳 2011．ヤガ科シタバガ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．　学研教育出版，東京．pp.244-264.
岸井　尚　2006．細川浩司氏蒐集の邦産コメツキムシ．地域甲虫自然史(2)．日本甲虫学会．89pp.
Kishii, T. 1962. Elateridae of Islands Rishiri-to, Rebun-to and Todo-jima“The Snappers of islands(Ⅲ)”. Bull. Heian high school, 7：1-31.
Kishii, T. 1966. Some new forms of Elateridae in Japan(Ⅳ). Bull. Heian high school, 10：1-11.
Kishii, T. 1987. Some new forms of Elateridae in Japan（ⅩⅨ）. Bull. Heian high school, 31：1-20.
Kishii, T. 1992. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent Area(11). Bull. Heian high school, 36：1-30.
Kishii, T. 1996. Notes on Elateridae from Japan and adjacent Area(14). Bull. Heian high school, 39：1-40.
Kishii, T. 1999. A check-list of the Family Elateridae from Japan（Coleoptera). Bull. Heian. high school, 42：1-144.
Kishii, T. 2004. Three new subspecies of the snbfamily Hyponidinae（Coleoptera: Elateridae) from Japan. Ent. Rev. Japan, 59(2)：161-165.
北畠　宏　1955．湯ノ股、恐山を歩いて．進化，7(3/4)：25-27.
北原　曜,・黒田　哲　2017．交配実験による日本産コヒョウモン属*Brenthis*の再検討．蝶と蛾，68(2)：73-78.
北野　忠　2012．青森県におけるニセモンキマメゲンゴロウの記録．さやばね（ニューシリーズ），5：27-28.
小林秀紀　2011．ヤガ科モンヤガ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.385-400.
小林秀紀　2011．シャチホコガ科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.115-138.
小島圭三・中村真吾　1986．日本産カミキリ食樹総目録．比婆科学教育振興会，広島．336pp.
国際芸術センター青森　2004．国際芸術センター青森の森環境調査報告書（青森市）．120pp.
駒井古実・吉安　裕・那須義次・齋藤寿久（編）　2011．日本の鱗翅類-系統と多様性．東海大学出版会，神奈川．1306pp.
小宮義璋・大桃定洋・高桑正敏　1986．ネクイハムシ類1985年の採集，観察記録．甲虫ニュース，71：5-6.
今　卓也　1986．青森県におけるアカマダラコガネの記録．Celastrina，18：34.
工藤広悦　1976．ミカボコブガ青森県に産す．蛾類通信，87：450.
工藤広悦　1983．青森県屏風山の蛾．誘蛾燈，91：33-39.
工藤広悦　1985．沼沢地の蛾．月刊むし，174：8-15.
工藤広悦　1989．穂高から八甲田－高山帯及び亜高山帯の蛾．誘蛾燈，115：19-21.
工藤誠也　2018．美しい日本の蝶図鑑．ナツメ社, 東京．336pp.
工藤誠也・工藤　忠　2017．東北地方におけるクロフカバシャクの再発見．やどりが，253：2-5.
工藤周二　2004．昆虫全般.「国際芸術センター青森の森」環境調査報告書．青森市．pp.77-79
工藤周二　2013．ウマノオバチの記録．Celastrina，48：34.
工藤　忠　1986．アカマダラコガネの青森県での記録．Celastrina，17：37.
工藤　忠　1987．下北半島でのヒメシジミの幼虫生態．Celastrina，19：21-23.
工藤　忠　1995．岩木川下流のアシ原に生息するマークオサムシについて．Celastrina，30：18-20.
工藤　忠　2002．春季におけるアカマダラハナムグリの採集例．Celastrina，37：104.
工藤　忠　2011．67年ぶりに青森県で得られたウマノオバチ．Celastrina，46：40.

工藤　忠　2013. 青森県におけるウマノオバチの観察記録. Celastrina, 48：4-5.
工藤　忠　2016. 青森県のフシキキシタバ. Celastrina, 51：54-57.
工藤　忠　2016. 東北地方におけるゴマシジミの衰亡と保護. 日本産チョウ類の衰亡と保護　第７集. 日本鱗翅学会,　東京. pp.33-36.
工藤　忠　2019. オオゴキブリ新成虫♂の青森県における記録. Celastrina, 53：51.
工藤　忠・工藤誠也　2017. 青森県におけるミヤマキシタバの記録地と生態的知見について. Celastrina, 52：35-36.
黒石市教育委員会　2001. 山谷文吾氏寄贈昆虫標本目録. 130pp.
黒沢良彦　1982. マークオサムシの分布北限. 甲虫ニュース, 56：8.
黒沢良彦・久松定成・佐々治寛之　1985. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ). 保育社, 大阪. 500pp.
櫛引顕弘　1971. 暗門川・赤石川昆虫リスト. やませ, 10：56-88.
櫛田俊明　1991. 青森県のハンミョウ類(Ⅲ). Celastrina, 26：55-67.
櫛田俊明　1995. 東北地方のゲンゴロウモドキ類. Celastrina, 30：75-87.
櫛田俊明・佐藤隆志　1990. 青森県のゲンゴロウモドキ類. Celastrina, 25：27-37.
Lewis, G.　1894. On the Elateridae of Japan. Annls. Mag. nat. Hist. Ser.6., 13：26-48, 182-201, 255-266, 311-320.
Liu, X., F. Hayashi & D. Yang　2015. Phylogeny of family Sialidae（Insecta: Megaroptera) inferred from morphological data, with implictions for generic classificasion and historical biogeografhy. Cladsitics, 31：18-49.
前川直樹　1978. 弘前周辺のアリ. Celastrina, 1：10-11.
Maeta, Y., K. Goukon, N. Sugiura & R. Miyanaga　1996. Host records of Cleptoparasitic bees in Japan. Jpn. J. Ent., 64(4)：830-842.
槇原　寛・阿部　學・新里達也・早川浩之・飯島一浩　2004. ワシタカ類の巣で生活するアカマダラハナムグリ. 甲虫ニュース, 148：21-23.
丸屋良博　1993. ヒラタヒメゲンゴロウ青森県の記録. 月刊むし, 263：36.
丸屋良博・樋口　誠　1993. ヒラタヒメゲンゴロウの採集について. 昆虫と自然, 28(8)：30-31.
Matsumura, S.　1912.　Die Cidadinen Japans Ⅱ. 日本動物学彙報, 8(1)：15-51.
Matsumura, S.　1931.　A new species and a new genus of Noctuidae from Japan. Ins. Mats., 5(4)：210-211.
松村松年　1912. ニトベギングチバチ. 続日本千虫図解(Ⅳ). 警醒社書店, 東京. pp.173-174.
松村松年　1916. 新日本千虫図解２. 警醒社書店, 東京. 474pp.
松野武敏　1987. 青森県のオオシラホシヤガ. 蛾類通信, 140：227.
松野武敏　1987. クロフカバシャクの採集例, Celastrina, 19：41.
松野武敏・唐牛良明・近藤格・斎藤光夫・須摩靖彦・斎藤和夫　1966. 十二湖のオオゴキブリ. 東北昆虫, 4：1-2.
松本英明・荒木　哲・森　正人　1989. 北海道のゲンゴロウモドキ類. 月刊むし, 225：19-25.
松浦寛子　1992. 日本の珍しい蛾8. イブキスズメ. やどりが, 148：14.
松浦一郎　1981. 珍説進化論(3)　翔んだ翔んだタマゴが翔んだ　エゾエンマ Teleogryllus yezoemma 分布の謎. ばったりぎす, 35：820-824.
松浦　誠　1995. 図説, 社会性カリバチの生態と進化. 北海道大学図書出版会, 札幌. 353pp.
松浦　誠　2004. 都市における社会性ハチの生態と防除, Ⅵ, マルハナバチの発生状況と都市への適応. ミツバチ科学, 25(3)：97-106.
三上隆司　1986. 青森県におけるコウヤホソハナカミキリの追加記録. 月刊むし, 190：30-31.
三上隆司　1987. 青森県でオニホソコバネカミキリを採集. 月刊むし, 195：38.
三上隆司　1988. ヨコヤマヒメカミキリ青森県の記録. 月刊むし, 214：28.
三上隆司　1989. 青森県津軽地方のカミキリムシ(1)食樹と生態について(上). Celastrina, 23：5-12.
三上隆司　1990. 青森県津軽地方のカミキリムシ(2)食樹と生態について(下). Celastrina, 24：17-24.

三上隆司　1993. 青森県西海岸におけるカミキリ３種の食樹観察．昆虫と自然，28(5)：18-24.
三上隆司　1997. シロオビドイカミキリを青森県にて採集．月刊むし，322：27.
三上隆司・阿部　東　1985. 青森県産カミキリムシ4種の寄生植物について．月刊むし，175：41-42.
三上隆司・佐藤　稔　1981. 青森県初記録のカミキリ3種．月刊むし，130：27.
Mitai, K. & O. Tadauchi　2007. Taxonomic study of the Japanese species of the *Nomada ruficornis* species group（Hymenoptera, Apidae) with remarks on Japanese fauna of the genus *Nomada*. Esakia, 47：25-167.
三橋　渡　1979. ベニモンマダラの産地．ケルクス，12：14.
三浦　博　2002. 蝶々の季節便り－ヒカゲチョウ．グラフ青森，281：17.
三浦　博　2010. ホシチャバネセセリ，クロシジミ．青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－．p.241,242.
Miyamoto, S.　1959. Veliidae of japan and adjacent territory Ⅲ. Kontyû, 27(1)：81-85.
宮本正一　1997. マキバサシガメ科の概要と日本産の属・亜族の検索表ならびに既知種目録. Rsotria，46：1-6.
宮本正一　2008. カタビロアメンボ科，新訂原色昆虫大図鑑第Ⅲ巻．北隆館，東京．p.172-173.
森　正人　2017. 兵庫県のトックリゴミムシ科．きべりはむし，34(1)：9-11.
森　正人　2017. 兵庫県のヨツボシゴミムシ亜科．きべりはむし，40(1)：61-33.
森　正人　2018. 兵庫県のスナハラゴミムシ亜科．きべりはむし，40(2)：20-22.
森　正人・北山　昭　1993. 日本のゲンゴロウ．文一総合出版，東京．217pp.
森田誠司　1984. 恐山のミズギワゴミムシ．甲虫ニュース，66：7.
森田誠司・山内　智　1986. 恐山のゴミムシ類．むつ市文化財調査報告書，12：76-86.
Morita, S.　2010. Notes on the Bembidiinae（Coleoptera,Carabidae)of Japan　X X Ⅲ. *Bembidion*（*Ocydromus*）*negrei* Habu and its new relatives, found on the habitats of hot springs. Jpn. J. syst. Ent. 16(1)：13-21.
Mroczkowski, M.　1959. *Lyrosoma chujoi* sp.n. from Japan. Entom. Rev. Japan, 10(2)：49-50.
棟方　堯・伊賀武夫・千葉瑞穂・菊池幸夫・小舘昭示・三浦　博・村上俊昭・長尾勝幸・中井保夫・佐藤　博・佐藤　光政・白山一訓　1986. 青森県におけるヒメギフチョウの分布．青森の蝶，9(4)：18-56.
村上義千代　1993. ヨコヤマヒゲナガカミキリを採集．Celastrina，28：74.
村上直樹・佐藤　守　1968. 三戸郡及び八戸市を主とした青森県東南部の蝶採集報告(1)．寄生木，7：5-34.
室谷洋司　1962. 青森市の蝶相(4)朝日山・豆坂カシワ林のゼフィルス．青森の蝶，4(1)：2-6.
室谷洋司　1989. 青森県におけるオオルリシジミの衰亡．日本産蝶類の衰亡と保護 Ⅰ．日本鱗翅学会・日本自然保護協会．pp. 90-97.
室谷洋司　1993. 日本産蝶類県別レッドデータ・リスト（1992年），東北地区２青森県．日本産蝶類の衰亡と保護Ⅱ．日本鱗翅学会・日本自然保護協会．pp.24-26.
室谷洋司　1995. 青森県東南部のオオウラギンヒョウモン．やどりが，164：3.
室谷洋司　2007. 東北地方のオオルリシジミ－発見から分布解明、そして絶滅までの経過. Butterflies，44：2-19.
室谷洋司　2018. 青森県階上町のホシミスジの記録．青森の蝶，28：39.
室谷洋司・阿部　東　1962. 青森県の蝶類．青森蝶同好会，296pp.
室谷洋司・古木　誠・富岡康浩・安富和男　2016. 写真で見る八甲田山におけるイカリアオカメノコハムシの生態．青森の蝶，25：46-59.
室谷洋司・古木　誠・富岡康浩・安富和男　2017. クロスジカメノコハムシの生態と生息地の変遷．青森の蝶，26：1-12.
むつ市教育委員会　2002. 芦崎の自然．100pp.
永幡壽之　2016. マルコガタノゲンゴロウをとりまく諸問題．昆虫と自然，51(7)：9-14.
長尾　康　1984. ヨコヤマヒゲナガカミキリの青森県における記録．月刊むし，166：3.

中根猛彦　1955. 原色日本昆虫図鑑(上). 保育社, 大阪. 274pp.
中根猛彦　1986. 日本の甲虫⒀. 昆虫と自然, 21⑷：18-24.
中根猛彦　1986. 北日本のゲンゴロウ類同定についての覚え書. 東北の自然, 22：16-19.
中根猛彦　1987. 日本の雑甲虫覚え書１. 北九州の昆虫, 34⑶：173.
中根猛彦　1993. 日本の雑甲虫覚え書10. 北九州の昆虫, 40⑴：1-8, pl.1.
中村裕之　1985. 岩手県のツガルホソシデムシの記録. 月刊むし, 174：41.
中島秀雄　2011. カギバガ科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. pp.112-126.
中島秀雄　2011. シャクガ科アオシャク亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. pp.205-224.
中島秀雄・矢崎克己　2011. シャクガ科ナミシャク亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著). 学研教育出版, 東京. pp.248-316.
南部敏明　1973. 樹脂を使用するキュビギングチバチの習性. 生物研究, 17(3/4)：55-60.
奈良岡弘治　1977. 青森県のトンボ’77. 著者自刊. 120pp.（孔版）
奈良岡弘治　1998. 深浦町のヒメサナエ. Celastrina, 33：57.
奈良岡弘治　2004. 青森県におけるムツアカネの再発見. 青森自然誌研究, 9：31.
奈良岡弘治　2007. コバネアオイトトンボ*Lestes japonicus* Selysの生殖行動と他のLestes属との比較. Tombo, 50(1/4)：59-64.
奈良岡弘治・高橋克成・松尾芳樹　2018. 青森県津軽地方, 上北郡, 下北郡, および十和田市で2015～2017年に確認したトンボ類. 青森自然誌研究, 23：95-109.
奈良岡弘治　2009. つがる市車力町のウスバカマキリ. Celastrina, 44：48.
成田俊明　1980. 青森県におけるオオチャイロハナムグリの記録. Celastrina, 4：16-18.
成田俊明　1988. 青森県のハンミョウ類. Celastrina, 20：61-112.
成田俊明　1989a. 黒石市におけるタガメの古い記録. Celastrina, 22：44.
成田俊明　1989b. 青森県のハンミョウ類(Ⅱ). Celastrina, 23：31-44.
鳴海良平　1935. 1935年度決算膜翅目の部. テレアコ, 1⑿：11-13.
鳴海良平　1937. 青蜂. テレアコ, 3(2/3)：9-13.
鳴海良平　1938. 黒石市と山形村の粘管目. テレアコ, 4⑴：7-9.
鳴海良平　1951. 津軽産粘管目目録. 進化, 3⑶：8-10.
日本直翅類学会　2016. ウスバカマキリ. 日本産直翅類標準図鑑. 学研教育出版, 東京. pp.47-48.（図版）, 201（本文）.
日本昆虫学会　2013. 日本昆虫目録第７巻第１号, 鱗翅目, セセリチョウ上科-アゲハチョウ上科. 櫂歌書房, 福岡. 94pp.
日本昆虫学会　2014. 日本昆虫目録第８巻第１部, 双翅目, 長角亜目－短角亜目無額嚢節. 櫂歌書房, 福岡. 539pp.
日本昆虫学会　2014. 日本昆虫目録第８巻第２部, 双翅目, 短角亜目無額嚢節. 櫂歌書房, 福岡. 1101pp.
日本昆虫学会　2016. 日本昆虫目録第４巻, 準新翅類. 櫂歌書房, 福岡. 629pp.
日本昆虫学会　2017. 日本昆虫目録第２巻, 旧翅類. 櫂歌書房, 福岡. 94pp.
日本産アリ類データベースグループ　2003. 日本産アリ類全種図鑑. 学研教育出版, 東京. 196pp.
日本チョウ類保全協会編　2019. フィールドガイド増補改訂版, 日本のチョウ. 誠文堂新光社, 東京. 343pp.
日本鞘翅目学会　1984. 日本産カミキリ大図鑑. 講談社, 東京. 565pp.
日本野生生物研究センター　1980. 第２回自然環境保全基礎調査, 動物分布調査報告書（昆虫類). 267pp.
Nilsson A. N. & T. Nakane　1993. A revision of the *Hydroporus* species（Coleoptera: Dytiscidae)of Japan, the Kuril Islands and Sakhalin. Ent. Scand., 23：419-428.
西田鉄郎　1959. 岩木川生物調査報告, 昆虫班. Blakiston, 6⑴：11-16.

西沢登志樹　1987．トウホクトラカミキリの採集２例．Celastrina，19：44.
野尻湖昆虫グループ　1985．アトラス　日本のネクイハムシ－化石同定への手引き－．182pp.
野村拓志・早坂大亮　2013．青森県大須賀海岸におけるオオマキバサシガメの採集記録．Rostria，55：33-36.
Oguma, K.　1922．The Japanese Dragonflies Fauna of the family Libellulidae. Deutsch. Entomol., Feitschr., 1922：12-19.
小倉住夫　1971．名久井岳に於いてムモンベニカミキリを採集．月刊むし，5：36.
大平仁夫　1963．キベリマルコメツキについて．Kontyû，31：79-83.
Ôhira, H.　1993．New or Little-known Elateridae（Coleoptera）from Japan, ＸＸⅧ. Elytra, 21(2)：249-254.
大平仁夫　1994．エゾクロツヤミズギワコメツキの形態について．Elytra，22(1)：153-157.
大平仁夫・下山健作　1984．青森県のコメツキムシ若干種について．青森県立郷土館調査研究年報，9：53-61.
大平仁夫・山内　智　1991．下北半島のコメツキムシ類について．青森県立郷土館調査研究年報，15：11-25.
大平仁夫・山内　智　1994．岩木山のコメツキムシ類について(1)．青森県立郷土館調査研究年報，18：77-90.
大平仁夫・山内　智　1997．八甲田山のコメツキムシ類について(1)．青森県立郷土館調査研究年報，21：73-81.
大平仁夫・山内　智　1998．八甲田山のコメツキムシ類について(2)．青森県立郷土館調査研究年報，22：51-59.
小笠原嵩輝・鳥居高明　2007．青森県における水生半翅類ヒメマルミズムシ（マルミズムシ科）とミゾナシミズムシ（ミズムシ科）の初記録．Celastrina，42：45-48.
岡田一二三　1952．弘前市のヤブヤンマ．進化，4(1)：15.
岡田一二三　1958．青森県産の蜻蛉数種について．進化，10(3/4)：7-8.
岡田一二三　1966．三八地方を中心としたトンボ数種について．青森県生物学会八戸市部例会発表会要旨．3pp.
岡田一二三・成田伝蔵　1953．青森県の蜻蛉目について（２．不均翅亜目，その１）．進化，5(1)：11-15.
Okada, R.　2011．A new species of the genus *Platambus*（Coleoptera, Dytiscidae）from Hokkaido, Japan, Elytra, Tokyo, New Series, 1(1)：31-38.
岡島秀治・荒谷邦雄　2012．日本産コガネムシ上科標準図鑑．学研教育出版，東京．444pp.
奥村定一　1942．千島の蜻蛉類(Ⅱ)．昆虫，16(1)：12-19.
大場信義（編）　2004．ホタルの点滅の不思議．横須賀市自然・人文博物館．200pp.
大林延夫・佐藤正孝・小島圭三　1992．日本産カミキリムシ検索図説．東海大学出版会，神奈川．696pp.
大野善右衛門　1935．*Homonotus iwatai* Yasumatsu の生態に就いて．関西昆虫学会会報，4：60-72.
大野正男　1980．日本産主要動物の種別文献目録(6)べにもんまだら．東洋大学紀要教養課程篇（自然科学），23：51-55.
大野正男　1987．日本産主要動物の種別文献目録(19)オオチャイロハナムグリ(1)．東洋大学紀要教養課程篇（自然科学然），31：145-179.
大野正男　1989．トワダオオカの分布総説．日本の生物，3(12)：48-51.
大野正男　1993．オオゴキブリの分布．月刊むし，263：29.
大野正男　2000．日本産主要動物の種別文献目録(57)カワラハンミョウ(1)．東洋大学紀要教養課程篇（自然科学），44：163-201.
大野正男　2002．日本産主要動物の種別知見総覧(56)オオゴキブリ(1)．東洋大宇紀要自然科学篇，46：85-141.
大西伸一　1992．津軽半島北西部のカミキリ(Ⅰ)．Celastrina，27：65-75.

大西伸一　1993. 津軽半島北西部のカミキリ(Ⅱ). Celastrina, 28：17-26.
大西伸一　1994. 津軽半島北西部のカミキリ(Ⅲ). Celastrina, 29：35-44.
オオセッカの生息環境研究グループ　1999. 昆虫調査. 北国の草原湿地帯のシンボルであるオオセッカの好む環境に関する研究―三沢市仏沼―. pp.49-65.
尾園　暁・川島逸郎・二橋　亮　2012. ネイチャーガイド・日本のトンボ. 文一総合出版, 東京. 531pp.
太田祐司・井辻一雅・白根敬児　1970. 下北半島薬研・奥薬研の採集記録. エゾシロ, 42：8-9.
大高一浩　1976. 下北半島の蛾類(2). よし, 8(4)：13-14.
大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・小林　貞・谷田一三・上西　実・安倍　弘　2008a. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. 急務となっている砂丘湖の生物多様性保全に関する研究. pp.239-274.
大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・森下千尋・関久美子・福士浩子・安倍　弘・野原精一・戸田任重・福原晴夫　2008b. 青森県・下北湖沼群の陸水生物学的予備調査. 急務となっている砂丘湖の生物多様性保全に関する研究. pp.277-303.
大高明史・小笠原崇輝・木村直哉・小林　貞・谷田一三・上西　実・阿倍　弘・富川　光・櫛田俊明 2008, 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. Celastrina, 43：49-78.
尾崎俊寛　1985. トウホクトラカミキリ雑記. Celastrina, 15：2-7.
尾崎俊寛　1986. 青森県未記録のカミキリムシ２種について. Celastrina, 15：2-7.
尾崎俊寛　1988. 市田忠夫氏採集の青森県産カミキリムシ(1). Celastrina, 21：25-34.
尾崎俊寛　1993. コウチュウ目. 南八甲田山地総合学術調査報告書, 青森県. pp.105-185.
尾崎俊寛・一戸清志　1992. 東北地方未記録のヒメビロウドカミキリについて. Celastrina, 27：63-64.
尾崎俊寛・永幡嘉之　1997. 青森県, 秋田県及び山形県の食葉性コガネムシ若干種について. Celastrina, 32：25-36.
尾崎俊寛・佐藤福男・沼田仁・加納彦一　2006. 秋田県のコメツキ. 秋田自然史研究会. 75pp.
尾崎俊寛・鈴樹亨純　1989. 青森県におけるオオハナカミキリの追加記録. Celastrina, 22：45-46.
Owada, M. 1988. On the herminiine moth *Zanclognatha perfractalis* (Noctuidae) discovered in Aomori Prefecture, northern Honshu, Japan. Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo, 21：137-143.
Owada, M. 1992. Synonymic notes on the herminiine moths (Noctuidae) of Japan, with desctrions of three new species. TINEA, 13(18)：183-203.
大和田　守　2011. ヤガ科クルマアツバ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）. 学研教育出版, 東京. pp.221-235.
大八木昭　2007. ヒメハンミョウ. 北のフィールドノート（2007年７月24日）. http://snowmelt.exblog.jp/6156011/（2007年７月24日確認）
三枝豊平　2008. オドリバエ科. 訂新原色昆虫大図鑑第Ⅲ巻. 北隆館, 東京. pp.405-434.
三枝豊平　2014. セダカバエ科. 日本昆虫目録第３巻第１部. 日本昆虫学会. pp.433-438.
斎藤和夫　1956. 全国採集地案内, 青森. 新昆虫, 9(6)：12-13.
斎藤和夫・北畠　宏　1966. 青森県のノシメコヤガ. 蛾類通信, 42：387-388.
斉藤仁志　1987. 下北半島の食糞性コゲネムシ類(1). Celastrina, 19：25-26.
斉藤仁志　1989. 下北半島でのカミキリムシ３種の記録. Celastrina, 23：48.
斉藤仁志　1993. 青森県の食糞性コゲネムシ類. Celastrina, 28：47-60.
佐々木明夫・葛西　充　1994. 日本産ソトシロスジミズメイガについて. 蛾類通信, 181：87-89.
佐々木明夫　1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈, 134：89-91.
佐々木明夫　2011. コブガ科コブガ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）. 学研教育出版, 東京. pp.170-181.
佐々木明夫　1993. 青森県下北で得た蛾数種. 誘蛾燈, 134：89-91.
佐藤　博　1970. 青森市街の*Orthosia*の採集記録. 蛾類通信, 63：44-45.
佐藤　博　1985. 青森県の蛾(Ⅵ). 誘蛾燈, 101：117-124.

佐藤　博　1988. 青森県の蛾(X). 青森の蝶，10(1)：151-154.
佐藤　博　2018. 青森県蛾類採集目録Ⅰ小蛾類. 青森の蝶，27：1-95.
佐藤　博・葛西　充　1975. 青森県の蛾類. 蛾類通信，84：402-403.
佐藤　博・葛西　充　1978. 青森県でノシメコヤガ再発見. 蛾類通信，98：634.
佐藤　博・葛西　充　1978. 青森県の蛾(Ⅰ). 誘蛾燈，72：33-39.
佐藤　博・葛西　充　1981a. 青森県の蛾(Ⅳ). 誘蛾燈，84：55-60.
佐藤　博・葛西　充　1981b. 青森県の蛾(Ⅰ)及び(Ⅱ)の追加記録. 誘蛾燈，84：60.
佐藤　臨　2016. およそ100年ぶりに確認された青森県のニトベツノゼミ. Celastrina, 51：50-52.
佐藤正孝　1977. 日本産ミズスマシ科概説(2). 甲虫ニュース，39：1-4.
佐藤正孝　1978. 日本産ホソガムシ科概説. 甲虫ニュース，40：1-3.
佐藤正孝　2006. 準絶滅危惧コウチュウ. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物５. 昆虫類（環境省編）. p.183.
佐藤正孝・吉富博之　2005. 日本産水棲甲虫類の分類学的覚え書Ⅳ. 甲虫ニース，151：1-6.
佐藤光雄・白岩康夫・手代木渉・奈良典明・室谷洋司　1967. 青森県動物誌. 東奥日報社，青森. 361pp.
佐藤光昭・袴田裕国・渡部悟司・諏訪内　敬・藤田弘昭　1987. 名川町の昆虫1986. Paulownia, 19：41-49.
佐藤力夫　1986. 日本産Brabira属の１新種とホソバナミシャク奄美大島亜種の記載. 蛾類通信，134：129-313.
佐藤力夫　2011. シャクガ科エダシャク亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著）. 学研教育出版，東京. pp.132-200.
佐藤隆志　1984. 久渡寺・座頭石のカミキリ(5). Celastrina，13：18-50.
佐藤隆志・尾崎俊寛　2000. 青森県におけるクマガイクロアオゴミムシの採集例. Celastrina，35：23-24.
Shibata, T. 1969. Some reports on the burying beetles from Japan Ⅰ. Ent. Rev. Japan, 21：47-54.
志賀　隆・寺田　玲・松浦宜弘・松崎妙子　2009. 青森で自然観察を楽しんできました！～「西津軽合宿」報告～. Nature Study，55(10)：7-8.
四方圭一郎　2011. ヤガ科セダカモクメ亜科. 日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）. 学研教育出版，東京. pp.303-304.
下山健作　1960. ササキリギングチバチについて. 生物研究，4(1)：11-12.
下山健作　1960. 十和田湖周辺のオオキノコムシ類. 昆虫学評論，11(2)：49-58.
下山健作　1964a. 青森県，特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(1). 昆虫学評論，16(2)：67-76.
下山健作　1964b. 青森県，特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(2). 昆虫学評論，17(1)：28-38.
下山健作　1964c. 青森県，特に十和田湖周辺のカミキリムシの生態(3). 昆虫学評論，17(2)：77-84.
下山健作　1967. 青森県西津軽郡平滝沼採集記. 生物研究，11(3/4)：52-55.
下山健作　1978. 青森県の歩行虫類Ⅰ. 昆虫学評論，32(1/2)：135-150.
下山健作　1978. 青森県のシデムシ科目録. さやばね，4：7-10.
下山健作　1978. ササキリギングチバチ. 平賀町資料館だより，1：4.
下山健作　1979. 青森県の歩行虫科，２. 昆虫学評論，33(1/2)：121-137.
下山健作　1980. 採集記, 15. シモヤマギングチバチ. 陸奥新報，11916号.
下山健作　1985. 昆虫. 平賀町誌. 平賀町. pp.115-150.
下山健作　1987. 青森県のニトベギングチバチ採集・巣の観察. 蜂友通信，27：46-57.
下山健作　1987. 蜂採りになった話(1). 青森県生物学会誌，24：5-7.
下山健作　1988. 青森県のクワガタムシ科. 青森県生物学会誌，25：6-9.
下山健作　1989. 青森県のコガネムシ類数種. Saikaku，7：31-32.
下山健作・福田　彰・阿部　東・菊池幸夫　1982. 昆虫. 津軽半島の自然. 青森県立郷土館. pp.107-453.

下山健作・福田　彰・阿部　東・菊池幸夫,・山内　智　1986. 昆虫・蜘蛛. 下北半島の自然. 青森県立郷土館. pp.84-142.
下山健作・福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・山内　智　1990. 昆虫類. 赤石川流域自然調査概要(4). 青森県立郷土館調査研究年報, 14：12-59.
下山健作・福田　彰・阿部　東・菊池幸夫・山内　智　1991. 昆虫・蜘蛛. 赤石川の自然. 青森県立郷土館. pp.71-176.
下山揚功・佐々木勝男　1957. 昆虫. 青森県岩木川生物調査. Blakiston, 5(1)：18-23.
Shiraki, T. 1911. Phasmiden und Mantiden japans. Annot. zool. Jap., 7 ：291-331.
初宿成彦　2011. ゲンゴロウ上科. 初宿成彦編, 大阪市立自然史博物館所蔵　甲虫類目録(1), 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 43：3-28.
外崎　誠　1952. 下北地方昆虫覚え書. Blakiston, 1(1)：28-30.
須田　亨　1993. トックリゴミムシ類の越冬習性について. 昆虫と自然, 28(8)：35.
末長春輝・山下大輔　2009. 青森県におけるアカガネネクイハムシの記録. 月刊むし, 457：44.
杉　繁郎　1974. ヘリボシキノコヨトウを青森県で採集. 蛾類通信, 80：331.
杉山澈朗　1986. ホソバスキヨトウを青森県尻屋崎で採集. 誘蛾燈, 106：141.
須摩靖彦・山内　智　1988. 釜臥山周辺のトビムシ相. むつ市文化財調査報告, 14：163-178.
須摩靖彦・山内　智　2006. 岩木山のトビムシ類, 特にトビムシ類の垂直分布について. 青森自然誌研究, 11：49-58.
須摩靖彦・山内　智　2013. 下北半島（大間町・佐井村）のトビムシ類, 特に漂着海草から広葉樹林までのトビムシ類の変化. 青森自然誌研究, 18：51-60.
須摩靖彦・山内　智　2015. 下北半島のトビムシ類(Ⅲ), 特に陸奥湾沿岸部の海浜性トビムシ. 青森自然誌研究, 20：39-47.
須摩靖彦・山内　智　2016. 津軽半島沿岸部のトビムシ類(Ⅰ), 浅虫沿岸部から津軽半島竜飛岬までの海浜性トビムシ. 青森自然誌研究, 21：65-71.
須摩靖彦・山内　智・野田坂佳伸　2003. 青森県恐山山地のトビムシ類, 特にカバイロユキノミの多型について. 青森自然誌研究, 8：19-24.
杉木　隆　1986. 青森県のクロフカバシャク. 青森の蝶, 9(2/3)：31.
鈴樹亨純　1986. 弘前市でヤマトキモンハナカミキリを採集. Celastrina, 18：32.
鈴樹亨純　1988. 久渡寺・座頭石のカミキリムシ(6). Celastrina, 21：2-10.
鈴樹亨純　1991. 岩木山で採集したヤツボシカミキリとジュウニキボシカミキリ. Celastrina, 26：72.
鈴木正雄・木村忠良・奈良典明・蛇川輝男・武田浩一・高橋英二・山内博尚・棟方　研・松野武敏・工藤昭三　1951. 青森県下北郡恐山地方生物調査記(2). 進化, 3(2)：1-7.
鈴樹亨純・奈良岡弘治　1989. 青森県のヒメサナエ. Celastrina, 23：13-14.
鈴樹亨純・奈良岡弘治　2006. 再発見されたホンサナエ. Celastrina, 41：1-3.
Suzuki, H., Y. Sato & N. Ohba 2002. Gene diversity and geographic differentiation in mitochondrial DNA of the Genji firefly, *Luciola cruciata*（Coleoptera; Lampyridae）. Mol. Phylogenet. Evol., 22：193-205.
多田内　修・村尾竜起　2014. 日本産ハナバチ図鑑. 文一総合出版, 東京. 477pp.
高橋克成・村上義千代　2005. 碇ヶ関村津刈川で発見されたオナガサナエとヒメサナエ. Celastrina, 40：3-4.
高橋雅彌　1988. 青秋林道周辺の蛾類. 秋田自然史研究, 23：7-14.
高橋　滋　1999. 日本でもミツモンケンモンの生活史. 蛾類通信, 203：43-46.
田村隆宏　2003. 青森県車力村で採集したゲンゴロウ類. 月刊むし, 386：45-46.
田中一裕　1984. カマキリの卵のう寄生蜂 オナガアシブトコバチについて. Celastrina, 13：21-23.
田中真悟　2013. アオイボトビムシ属の採集記録と分布. 比婆科学, 247：13-25.
田中政行　2016. ソトシロスジミズメイガ秋田県２例目の記録. 秋田自然史研究, 70：6.
田埜　正・常木勝次　1969. 日本産ギングチバチ族の分布. 生物研究, 13(1/2)：29-35.

田埜　正　1984. 青森県の蜂．蜂友通信，18：15.
田埜　正・常木勝次　1969. 日本産ギングチバチ族の分布．生物研究，13(1/2)：29-35.
田沢治美　2000. シマゲンゴロウの記録．黒蜆，2：2.
寺山　守　2012. 日本産有剣膜翅類検索表 12. アリマキバチ亜科（Pemphredoninae）アリマキバチ族（Pemphredonini）の種の検索，つねきばち，22：1-31.
寺山　守　2016. 日本産有剣膜翅類目録（2016年版）．https://terayama.jimdo.com/日本産有剣膜翅類目録/（2018.12.1確認）
寺山　守・木原　章　1994. 日本産アリ類の県別分布図．日本蟻類研究会．63pp.
寺山　守・久保田敏・江口克之　2014. 日本産アリ類図鑑．朝倉書店，東京．276pp.
寺山　守・須田博久　2016. 日本産有剣ハチ類図鑑．東海大学出版部，神奈川．735pp.
寺山　守・田埜　正　2006. 日本産有剣膜翅類検索表５．セナガアナバチ科（Ampulicidae），アナバチ科（Sphecidae）の検索，つねきばち，7：1-17.
手塚尚利　1982. ヒゲブトハナカミキリを青森県で採集．月刊むし，136：34.
鳥羽明彦　2011. 日本のゲンゴロウモドキ採集の思い出．西多摩昆虫同好会採集記シリーズ９，16pp.
徳本　洋　2000. カエルキンバエを探そう－研究史と種の特性解説－．はなあぶ，10：35-41.
冨永　修　1986. 東北地方のネクイハムシ，アトラス以後．東北の自然，7：4-7.
富岡康浩　1974. 八戸近傍で採集されたスズメガ．ビートル，3：26-29.
富岡康浩　1974. 八戸市で採集されたベニモンマダラ，ケルクス，4：7-8.
富岡康浩　1982. ほこりまみれの気になる記録．おとしぶみ，7：4-5.
富岡康浩　1983. ルイヨウマダラテントウとオオニジュウヤホシテントウの産卵時期ならびに卵塊卵粒数について．Celastrina，11：6-12.
富岡康浩　1986.「東京西郊型エピラクナ」の起源およびルイヨウマダラテントウの食性の地理的変異についてⅡ．昆虫と自然，21⑾：18-21.
富岡康浩　1989. 三八地方のカメムシ．Ladybird，3：9-45.
富岡康浩　2000. 青森県のハムシ類．Celastrina，35：25-60.
鳥倉英徳　1985. 雑草地で越冬するヤガ科幼虫３種．誘蛾燈，99：16-18.
土屋正雄　1931. 青森県の直翅目．自刊，弘前市，49pp.
常木勝次・下山健作　1963. 十和田山アナバチ科・セイボウ科．生物研究，7(3/4)：46-50.
Tsuneki, K. 1956. Die Trypoxylon der nordostlichen Gebiete Asiens（Hymenoptera, Sphedidae Trypoxyloninae). Mem. Fac. Lib. Arts, Fukui Univ., SerⅡ Nat. Sci., 6：1-42.
Tsuneki, K. 1958. On the discovery of *Nesocrabro* in Japan, with the description of a new species. Kontyû, 26(4)：197-199.
Tsuneki, K. 1959. Une nouvelle espece du Crabronien du Japan. Akitu, 8：83-84.
Tsuneki, K. 1968. Descriptions and records of some Fossoril wasps in Japan（Hymenoptera Sphecidae) 2. *Trypoxylon konosuense* sp. nov. Etizenia, 27：3-5.
Tsuneki, K. 1975. New cukoo wasp（Hymenoptera Chrysididae) found in Japan. Kontyû, 43(1)：29-35.
Tsuneki, K. 1983. Discovery of the male of *Ceratocrabro shimoyamai*（Tsuneki). SPJHA, 27：29-32.
Tsuneki, K. 1983. Revision of the holotype of *Odontolarra*（=*Lyroda*）*nigra* Cameron, with remarks on its subspecies and the description of a closely related new species from Japan. SPJHA, 25：57-62.
Tsuneki, K. 1990. A new generic stutus of *Crabro nitobei* Matsumura, 1912, with the review of its biology genus *Spadicocrabro* gen. nov. SPJHA, 36：100-101.
常木勝次　1956. アギトギングチバチの種名，分布及び雄の多形等について．昆虫，24⑶：128-132.
常木勝次　1968. 蜂類研究手引㉔数種アナバチ科の紹介．生物研究，12(3/4)：65-68.
常木勝次　1970. 蜂類研究手引㉕セイボウ科Ⅱ．生物研究，14(3/4)：66-70.
常木勝次・下山健作　1963. 十和田山アナバチ科・セイボウ科．生物研究，7(3/4)：46-50.

常木勝次・平井博政・飯田忠嗣・佐飛邦雄　1964. 十和田山の穴蜂科・青蜂科追加. 生物研究, 87(4)：60.
内田　一　1938. 日本産跳虫二新種クロマルトビムシとキボシアオイボトビムシ. 動物学雑誌, 50(3)：132-134.
内田　一　1952. 無翅昆虫雑記(I). 進化, 10：31-34.
内田　一　1953. トビムシモドキ科（昆虫, 粘管目）の３属*Tetrodontophora*, *Lophognathella*, *Homaloproctus* 間の関係について. 動物学雑誌, 62(2)：25-28.
Uchida, H. 1952. A new genus of Sminthuridae from Japan（Collembola). Mushi, 24(1)：1-4.
Uchida, H. 1953. On three new species and a new from of Japanese Sminthuridae, with special reference to the dentalsetae. Annot. Zoo. Jap., 26(1)：1-13.
Uchida, H. 1969. Studies on the arboreal Collembola I. Results of faunal survey of Mt. Hakkoda area, IBM main area. Sci. Rep. Hirosaki Univ., 16(1/2)：19-29.
上原一恭　2007. オオチャイロハナムグリを七戸町大坪川で採集. Celastrina, 42：54.
上原一恭　2008. 青森県におけるカミキリムシの記録. Celastrina, 43：25-36.
上原一恭　2009. 青森県におけるカミキリムシの記録(2). Celastrina, 44：40-44.
上原一恭　2011. 青森県におけるカミキリムシの記録(4). Celastrina, 46：13-16.
上原一恭　2012. 青森県におけるカミキリムシの記録(5). Celastrina, 47：77-83.
上原一恭　2013. 青森県におけるカミキリムシの記録(6). Celastrina, 48：51-56.
上原一恭　2013. 青森市におけるウマノオバチの記録. Celastrina, 48：50.
上原一恭　2015. 青森県におけるミヤマキシタバの記録. Celastrina, 50：25.
上原一恭　2016. 青森市でのウマノオバチの記録. Celastrina, 51：10.
上原一恭　2017. 青森市におけるクロフカバシャクの記録. Celastriua, 52：31.
上原一恭・上原康己　2017. 八甲田山におけるヒゲジロホソコバネカミキリの記録. Celastrina, 52：29-30.
Uéno, S. 1975. Occurrence of a new endogean trechine beetle in the Shimokita peninsula, northern Japan. Bull. Natn. Sci. Mus. Ser A.（Zool.), 1(2)：115-118.
Uéno, S. 1993. Two new Endogean Trechines（Coleoptera,Trechinae）from the Shirakami Mountains, Northeast Japan. Elytra, 21(1)：179-186.
Uéno, S. 1994. New Oculate *Trechiama*（Coleoptera,Trechinae）Mainly from Non-volcanic Mountains of Northern Honshu, Northeast Japan. Elytra, 22(1)：23-44.
Uéno, S. & A. Yoshida 1966. A presumptive prototype of the *Trechoblemus* Complex. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo, 9(2)：76-83.
上野俊一・黒沢良彦・佐藤正孝　1985. 原色日本甲虫図鑑(II). 保育社, 大阪. 514pp.
漆館智恵子・久保　瞳・中島晶子・戸花　豊・水梨勝広　1978. 昆虫班活動報. Paulownia, 11：44-66.
碓井　徹　1998. *Gerris* (*Gerris*) *lacustris* キタヒメアメンボ（新称）の本州北部からの発見. Rostria, 47：43-44.
碓井　徹・疋田直之　2001. キタヒメアメンボの本州における新産地. Rostria, 50：37-39.
Usui, T., S. Miyamoto & M. Hayashi 1997. Occurence of *Gerris* (*Gerris*) *lacustris* (Heteroptera., Gerridae) in Hokkaido, Japan. Jpn. J. Ent., 65：217-218.
和田干蔵　1933. 我が郷土のブラキストン線. 青森師範学校郷土号, 1：161-178.
Watanabe, C. 1937. A contribution to the knowledge of the braconid fauna of the Empire of Japan. Jour. Facul. Agric. Hokkaido Imp. Univ., 42：1-188.
渡邊福壽　1934. 青森県特産の昆虫類(1). 青森博物研究会時報, 1(2)：1-7.
渡邊福壽　1935. 十和田八甲田の動物. 青森営林局. 114pp.
渡邊福壽　1937. 其一鞘翅目金亀子科. 青森営林局. 森林動物相調査報告第一輯, 101pp.
渡辺黎也・大庭伸也　2019. 青森県大鰐町におけるシマゲンゴロウの記録. 月刊むし, 586：48.

矢後勝也・平井規央・神保宇嗣（編） 2016. 日本産チョウ類の衰亡と保護　第７集. 日本鱗翅学会, 東京. 352pp.
山田雅輝　1983. 青森県のスズメバチ上科. 青森県生物学会誌, 21：1-5.
山田雅輝　1992. 青森県のケアシハナバチ科. 東北昆虫, 30：1-3.
山田雅輝　1996. 故福士襄博士採集による北奥羽の有剣膜翅類. Celastrina, 31：31-40.
山田雅輝　1997. 青森県の有剣蜂相, ２. セイボウ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 2：31-34.
山田雅輝　1997. 青森県の有剣蜂相, ３. ドロバチ科・スズメバチ科の分布補遺. Celastrina, 32：37-46.
山田雅輝　1997. 青森県産ヤスマツフシダカコンボウハナバチ. Celastrina, 32：46.
山田雅輝　1997. シロスジフデアシハナバチの初記録. 青森自然誌研究, 2：35.
山田雅輝　1998. 青森県の有剣蜂相, ４. ヒメハナバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 3：41-49.
山田雅輝　1998. 青森県の有剣蜂相, ５. アナバチ科の種類と分布(1). Celastrina, 33：37-51.
山田雅輝　1998. ハエを狩るシモヤマギングチ. 東北昆虫, 36：14.
山田雅輝　1999. 青森県産ガロアムシの成虫について. 青森自然誌研究, 4：48.
山田雅輝　1999. 青森県の有剣蜂相, ６. コシブトハナバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 4：39-47.
山田雅輝　1999. 青森県の有剣蜂相, ７. アナバチ科の種類と分布(2). Celastrina, 34：27-44.
山田雅輝　2000. 青森県の有剣蜂相, ８. ミツバチ科及びヤドリコハナバチ類の種類と分布. 青森自然誌研究, 5：55-59.
山田雅輝　2000. 青森県の有剣蜂相, ９. ベッコウバチ科の種類と分布. Celastrina, 34：93-102.
山田雅輝　2000. 青森県から初めて記録するハバチ亜目の10種. 青森自然誌研究, 5：53-54.
山田雅輝　2000. 昆虫類（ハチ類）. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－. pp.182-276.
山田雅輝　2001. 青森県のガロアムシとナナフシに関する知見. 青森昆虫談話会講演資料. 2pp.
山田雅輝　2002. 青森県のナナフシ科に関する知見. Celastrina, 37：79-80.
山田雅輝　2004. 弘前市久渡寺山のアリ相. 青森自然誌研究, 9：49-51.
山田雅輝　2006. 筒トラップによる岩木山麓並びに久渡寺・座頭石山地における借坑性ハチ類の調査. 青森自然誌研究, 11：11-17.
山田雅輝　2008. 白神山地の有剣ハチ類, ２. 一般採集による種類と分布. 青森自然誌研究, 13：11-16.
山田雅輝　2008. 小泊でコイケアワフキバチを発見. 青森自然誌研究, 13：18.
山田雅輝　2009. 白神山地の有剣ハチ類, ３. アリ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 14：11-13.
山田雅輝　2010. 昆虫類（ハチ類）. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. pp.234-304.
山田雅輝　2010. 白神山地の有剣ハチ類, ４. 一般採集による種類と分布調査. 青森自然誌研究, 15：11-17.
山田雅輝　2010. トビナナフシ２種の新しい産地. 青森自然誌研究, 15：18.
山田雅輝　2010. ヤスマツトビナナフシ. 青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－. p.255.
山田雅輝　2011. 白神山地でオオナギナタハバチを確認. 青森自然誌研究, 16：36.
山田雅輝　2012. 青森県産ハナバチ類５種の新産地. 青森自然誌研究, 17：67-68.
山田雅輝　2013. スズメバチが好むケヤマウコギの花. 青森自然誌研究, 18：35.
山田雅輝・棟方明陽　1996. 青森県の有剣蜂相, １. ハキリバチ科の種類と分布. 青森自然誌研究, 1：3-7.
山田雅輝・山田奈緒子　2016. 西津軽海沿い地域の有剣蜂類調査, ３. 南部及び北部における筒トラップによる調査. 青森自然誌研究, 21：130-132.
山美幸子・船場善幸・袴田裕国・米内祐逸・佐藤光昭　1986. 三戸町西部方面の昆虫1985. Paulownia, 18：34-45.

山本大二郎　1959. 青色のハチ，ルリジガバチの生活．日本昆虫記Ⅰ．講談社，東京．p.7-77.
山本直樹　1996. 1995年ゲンゴロウ類採集記．越虫，26：13-25.
Yamane, S. 1990. A revision of the Japanese Eumenidae (Hymenoptera, Vespoidea). Insecta Matsumurana, 43: 1-189.
山内博尚・外崎　誠　1957. 青森県産蝶目録．Larva，9：1-16.
山内　智　1981. ダイコクコガネの記録．よし，44：17.
山内　智　1983. ダイコクコガネの採集記録．よし，47：7.
山内　智　1989. むつ市の昆虫類．むつ市史自然編．pp.284-328.
山内　智　1990. 昆虫・蜘蛛．白神山地自然環境調査報告書（追良瀬川流域）．青森県．pp.80-141.
山内　智　1994. 昆虫類．白神山地の自然．青森県．pp.91-105.
山内　智　1994. 青森県西津軽郡におけるルイヨウマダラテントウの食性とジャガイモ畑への侵入．日本応用動物昆虫学会誌，38(3)：191-193.
山内　智　1996. 青森県のテントウムシ科．青森自然誌研究，1：17-23.
山内　智　1996. フトクチヒゲヒラタゴミムシの産地について．青森自然誌研究，1：24.
山内　智　1996. 昆虫調査．県民の森梵珠山自然環境調査報告書．青森県．pp.69-118.
山内　智　1996. 世界遺産白神山地考察(26)白神山地の固有種．れぢおん青森，210：53.
山内　智　1999. イグチケブカゴミムシの記録．青森自然誌研究，4：50.
山内　智　1999. オオチャイロハナムグリの記録．青森自然誌研究，4：58.
山内　智　2000. 昆虫類（蛾類），青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック－．pp.182-276.
山内　智　2000. 中里町のゲンジボタルの記録．青森自然誌研究，5：8.
山内　智　2004. 青森市のヤスマツトビナナフシの記録．青森自然誌研究，9：38.
山内　智　2007. ゲンジボタルの生態と保全．希少野生生物保護・保全対策報告書．青森県．pp.29-30.
山内　智　2011. 青森県南部の蛾(Ⅱ)．青森県立郷土館研究紀要，35：23-30.
山内　智　2014. 青森県南部の蛾(Ⅴ)．青森県立郷土館研究紀要，38：9-14.
山内　智　2014. オオゴキブリ．ふるさとの宝物67．東奥日報．44274号.
山内　智　2018. 青森県南部の蛾類(Ⅸ)－福田進コレクション－．青森県立郷土館研究紀要，42：1-12.
山内　智・阿部　東　1989. 昆虫類．白神山地自然環境調査報告（大川・暗門川流域）．青森県．pp.84-144.
山内　智・亀田　満　1999. 青森県八甲田山の蛾類．青森自然誌研究，4：35-38.
山内　智・三上春文　1998. 下北郡のゲンジボタルの新生息地について．青森自然誌研究，3：59.
山内　智・宮　彰男　2008. 青森県三沢市仏沼のマークオサムシの記録．青森自然誌研究，13：66.
山谷文仁　1936. 十和田昆虫採集旅行記．昆虫界，4：811-817.
山谷文仁　1938. 青森県産昆虫目録（承前）．昆虫世界，42(5)：17-20.
山谷文仁　1938. 青森県産鍬形虫科に就いて．虫の世界，2(7/8)：19-21.
山谷文仁　1939. 青森県産昆虫目録（承前）．昆虫世界，43(8)：13-16.
山谷文仁　1939. 泥炭より採集せるオサムシに就いて．関西昆虫雑誌，5(3)：8-11.
山谷文仁　1939. 青森県産ハンミョウ科目録．虫の世界，3(3/4)：11-14.
山谷文仁　1943. 青森県の昆虫採集案内．昆虫世界，47：141-142.
山谷文仁　1977. オオチャイロハムグリとオニホソコバネカミキリの話．Coreana，17：18-20.
山谷文仁　1989. マークオサムシ．東日本のオサムシ．東日本オサムシ研究会．pp.61-71.
山谷文仁・草刈広一　1982. 東日本のオサムシ分布地点表(1)青森県．東日本オサムシ研究会連絡誌，2：18-23.
山崎一夫・八木　剛　1992. 青森＜津軽／下北＞のゲンゴロウ類，ガムシ類～夏合宿，追跡調査の成果～．うんころがし，(61)：3-7.

矢野高広・岸田泰則　2011．スズメガ科．日本産蛾類標準図鑑Ⅰ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.327-339．
安永智秀・高井幹夫・川澤哲夫・中谷至伸　2001．日本原色カメムシ図鑑第２巻．全国農村教育協会出版社，東京，351pp.
Yasuno, M. 1963. The study of ant population in the grassland at Mt. Hakkoda. 1. The distribution and nest abundance of ants in the grassland. Ecological review, 16(1)：83-91.
安富和男　1973．オオニジュウヤホシテントウ群をめぐる最近の諸問題．昆虫と自然，8(6)：2-8.
安富和男　1974．オオニジュウヤホシテントウ群の問題点．動物分類学会会報，47：1-4.
安富和男　1976．東京西郊Epilachnaの分布地域と食性について．Kontyû，44(1)：111-114．
安富和男　1977．オオニジュウヤホシテントウ群に関する問題点をめぐって．昆虫と自然，2(11)：14-19.
安富和男　1991．カメノコハムシ類に関する思い出と諸問題．青森の蝶，10(2)：114-123.
安富和男・富岡康浩　1988．スジキイロカメノコハムシ記録と食草．昆虫と自然，23(13)：8.
安富和男・富岡康浩　1990．青森県で発見された未記録のカメノコハムシ*Cassida stigmatica*について．昆虫と自然，25(6)：23-24.
安富和男・富岡康浩・後藤純子　2011．希少種イカリアオカメノコハムシの分布，形態と食性．岩手虫乃會會報，38：1-2.
安富和男・富岡康浩・蒔田増美　1997．キイロカメノコハムシに関する知見．昆虫と自然，32(6)：31-34.
安富和男・富岡康浩・蒔田増美　1999．キイロカメノコハムシに関する知見（第２報）．昆虫と自然，34(10)：32-34.
横山裕正　2002．岩木山弥生でのホソハンミョウ・マガタマハンミョウの採集記録．Celastrina，37：102.
横山裕正　2003．青森県におけるカバシャクの採集記録．Celastrina，38：10.
横山裕正　2008．ワタラセハンミョウモドキのテネラル個体採集例．Celastrina，43：86.
吉田正隆　2014．利尻島北部の海岸からツガルホソシデムシ．利尻研究，33：65-66.
吉松慎一　2011．ヤガ科ヨトウガ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅱ（岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.368-384.
吉武　啓・栗原　隆・吉松慎一・中谷至伸・安田耕司　2011．農業環境技術研究所所蔵の土生昶申コレクション（昆虫綱：コウチュウ目：オサムシ科）標本目録．農業環境技術研究所報告，28：1-327.
吉冨博之・松井英司・堀　繁久・秋田勝巳・山川雄大　2001．レッドデータ水生昆虫類の分布記録Ⅰ．エゾコガムシの分布記録のまとめ．甲虫ニュース，135：7-9.
Yoshiyasu, Y., 1985. A systematic Study of the Nymphulinae and the Musotiminae of Japan. Scient. Rep. Kyuto prefect. Univ. (Agric.), 37：1-162.
吉安　裕　2013．ツトガ科ミズノメイガ亜科．日本産蛾類標準図鑑Ⅳ（那須義次・広渡俊哉・岸田泰則　編著）．学研教育出版，東京．pp.400-408.

２）昆虫類以外の無脊椎動物

①概説

昆虫以外の無脊椎動物には極めて多様な生物種が含まれる。鳥獣や大型植物に比べて情報量が少なく、また分類群による解明度の差も大きいため、選定基準の統一的な設定が難しく、ランクの設定にも恣意的な要素が入りこみやすい。こうした点を回避し、できるだけ客観的な判断をするために、昆虫類を含めた無脊椎動物の選定にあたっては、候補種ごとに分布の現状や変化の情報を盛り込んだチェックシートを作成し、これをもとに委員全員の合議で選定やランクを決定した。

結果として、青森県レッドデータブック2020年版では、昆虫以外の無脊椎動物として53種を選定した。前回の2010年版の38種と比べると、２種を除外し17種を新たに加えたため、15種の増加となった。高次分類群も、前回の2010年版で取り上げた扁形動物、軟体動物、環形動物、節足動物甲殻類およびクモガタ類に、新たに、刺胞動物、星口動物、棘皮動物および半索動物が加わった。前回の2010年版で取り上げた種類の変更は、削除したイツマデガイとブドウマイマイ、およびLPランクからCランクにしたヤマトオサガニの３種だけである。

今回追加した17種のうち半数以上の11種は干潟に住む動物である。Aランクのタカホコシラトリやキタホウネンエビなど、継続して選定されている種類にも干潟や湿地に生息する種類が多数含まれている。三方を海に囲まれる青森県には、日本海側の屏風山湖沼群や太平洋側の小川原湖湖沼群をはじめとして規模の大きな湿地が各所に分布するほか、陸奥湾には浅所海岸や芦崎などの干潟もみられる。これらの陸上と水域の移行帯（エコトーン）は複合的な生態系を形成し、生物多様性が非常に高いことが知られているが、同時に、農地開発や都市化などに伴う開発の対象地域となりやすいため、生物の消失が急速に進んでいる場所でもある。近年は、風力発電施設の過剰な造成による影響が目立つ。干潟や浅海域は水産上有用な生物種を多数育み、私たちの食生活を直接支えているほか、仔稚魚の養育場、あるいは渡り鳥の“国際空港”としての役割も担っている（逸見, 2012）。こうした重要な役割を持つ干潟では, 生態系を支えている小型の生物種にも注目する必要がある。

今回選定された種類は、いずれも移動能力が低く環境変化に敏感なことから、今後とも分布の縮小や絶滅が危惧される。前回から引き継いだ36種のうちの35種でランクの変更がないことからも推測されるように、青森県における陸域や淡水域、汽水域を取り巻く環境は基本的に改善されていない。今回新たな種類が追加されたとはいえ、実際に県内に分布すると思われる無脊椎動物の数に比べると依然としてごくわずかにとどまっている。多様性の保全にあたっては、分類や分布に関する基礎的な情報の蓄積を進める必要がある。存在すら知られていない膨大な種類の無脊椎動物が県内に分布していることを考慮すると、保全にあたっては、引き続き、生息環境そのものを保全するという意識が必要である。

（大高明史・大八木昭）

②本文

マイマイ目　オナジマイマイ科 **A**

和名　エゾマイマイ **環境省：該当なし**
学名　*Ezohelix gainesi* (PILSBRY)

［形態的特徴］　北海道のエゾマイマイは殻の30～40㎜のものが多いが、より小さく軟体のまだら模様が透けているタイプがいる。このタイプのエゾマイマイが青森県にいる。このタイプには色帯はない。老成すると唇縁がわずかにひろがり反転するというが、老成しても大きくならず反転も見られない。

［選定理由］　北海道以外では青森と秋田にしか見られず、知られた産地も極めて少ないので選定した。八甲田山のエゾマイマイは国立公園内でもあり環境変化が少ないと思われるが、下北半島のエゾマイマイに対しては消失が危惧される。

［分布と生態の概要］　南八甲田と北八甲田のコバイケイソウなどについていることがある。下北半島のものは、海岸よりそれほど遠くないところに礫の中や地面で見られることが多い。北海道では成貝が植物についているのは普通だが、下北では植物についているのは幼貝しか見ていない。

［特記事項］　南八甲田山のものはブドウマイマイと同定されていたが、近年の状況ではブドウマイマイとは淡い黒緑～濃い黒緑色のものをいうので、本県のものは下北のを含めてエゾマイマイと判断する。　**（大八木昭）**

イシガイ目　カワシンジュ科 **A**

和名　コガタカワシンジュガイ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Margaritifera togakushiensis* (Kondo et Kobayashi)

［形態的特徴］　殻は長卵形で、通常10㎝を越えない。前閉殻筋痕は尖った耳状である（近藤, 2008）。下北上北郡に生息する８河川を調査したところ、９㎝を越えるカワシンジュガイ類では閉殻筋痕の特徴はコガタカワシンジュに該当するものは見られず、全てカワシンジュガイであった。９㎝以内の個体については前閉殻筋痕がカワシンジュガイに該当するもの、コガタカワシンジュガイに該当するもの、そして判別不能のものが見られた。判別不能のものが見られたところは、両種が生息する河川であり、雑種ではないかと考えられた。稚貝では外形で区別がつくと考えられた（大八木・粟倉, 未発表）。

［選定理由］　青森県レッドデータブック2010でＣランクにしていたカワシンジュガイの一部が、2005年にコガタカワシンジュガイとして別種になった。カワシンジュガイ類生息域の限られた最上流部の細流域にしか見られないことと森林伐採や道路工事等での河床の流失例が現在も見られることで絶滅が危惧される。たとえば、佐井村の個体群は道路拡幅工事に伴い約70ｍに集中していたコロニーを上流部へ移植させたが、蛇行していた部分をショートカットし直線的なコンクリートコルゲートにした影響が佐井の個体群にどう影響を与えるかはまだ不明である。他地区でも水深変化と河床の流失が見られ絶滅のおそれがあるので、カワシンジュガイとは別に選定した。

［分布と生態の概要］　本種は、北海道に分布するほか、本州では長野・岩手・青森で確認されている（近藤, 2008）。本県では佐井村・むつ市・東通村・横浜町・六ヶ所村・東北町の河川に分布している。北海道ではカワシンジュガイとコガタカワシンジュガイが同所で混生しているところも多いという。カワシンジュガイのグロキジウム幼生はヤマメの鰓に付着したもののみ生育し、分離した後に河床で稚貝となるようである。両種のグロキジウム幼生はヤマメやイワナどちらの魚種にも付着はするようである。礫～砂底に殻の半分を川底から突出して直立している。殆どコロニー的にかたまって生息している。

［特記事項］　本種は、カワシンジュガイに含まれていたが新種として長野県のものが2005年に記載された（Kondo & Kobayashi, 2005）。本種のグロキジウム幼生はイワナの鰓に付着したもののみ生育し、分離した後に河床で稚貝となるようである（近藤, 2008）。　**（大八木昭）**

マルスダレガイ目　ニッコウガイ科　A

和名　タカホコシラトリ　**環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Macoma takahokoensis* Yamamoto et Habe

［形態的特徴］　殻長15㎜、殻幅６㎜、殻高11㎜ほどの丸味を帯びた三角形の小さな二枚貝である。貝殻は薄く、くすんだ白色から淡い紅色である。

［選定理由］　1953年、山本護太郎による鷹架沼の底生動物の生態学的研究により得られた標本をもとに新種として記載された（Yamamoto & Habe, 1959）。模式産地である鷹架沼では淡水化事業のために消失した（佐藤, 2001）。2001～2003年の調査では尾駮沼には広く分布することが確認されており（植田ら, 2005）、また小川原湖の小湿地にも生息するという（加藤・福田, 1996）。2002～2004年に行った干潟の底生生物調査（鈴木, 2007）では尾駮沼および小川原湖の河口では見つからなかった。

［分布と生態の概要］　浅い湖底の砂や泥の中に潜り込んで生活しており、人目につくことは少ない。

［特記事項］　バルチックシラトリガイ*Macoma baltica*（Linnaeus）の亜種として扱われたこともあるが、現在は下北半島の固有種とされる。

（武田哲）

ヒルミミズ目　ヒルミミズ科　A

和名　ツガルザリガニミミズ　**環境省：絶滅危惧Ⅰ類**
学名　*Cirrodrilus tsugarensis* Gelder et Ohtaka

［形態的特徴］　体は円筒形で長さ１～２㎜。前端の口節背側に11本の短い指状突起を持つ。顎板が背腹とも同形で、それぞれ、大きな１本の中央歯と小さな３対の側歯を持つ。

［選定理由］　極めて限られた地域に生息するニホンザリガニだけに共生しているため、宿主（ニホンザリガニ）の消失に伴って絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　これまでに知られている産地は、津軽半島北部に位置する小規模な３河川のみである（大高, 2014；大高, 未発表）。ニホンザリガニの体表に共生し、尺取り虫のような動きで体表を移動する。一生の全てを宿主の体表で送るが，詳しい生態はわかっていない。

［生存に対する脅威と保存対策］　生息地やその周辺の河川では護岸や堰堤の建設が進んでおり、宿主のニホンザリガニの生息範囲は次第に狭くなっている。分布域で宿主のニホンザリガニの生息を保証することが最も重要な課題である。生息環境が重複する外来のウチダザリガニが本種の生息域に入り込んだ場合、ウチダザリガニに共生する外来ヒルミミズ類との競合も危惧される。

（大高明史）

ホウネンエビ目　ホウネンエビ科　A

和名　キタホウネンエビ　**環境省：情報不足**
学名　*Eubranchipus uchidai* (Kikuchi)

［形態的特徴］　体長20㎜前後の、腹部にある11対の遊泳脚で腹部を上にして水平に泳ぐやや遊泳力のある大型プランクトンで、大型鰓脚類に分類されている。雄の第２触角は大きく体色は一様である。雌腰部の卵嚢部は青みを帯びており、雌の方が雄より色鮮やかである。

［選定理由］　日本固有種で、北海道石狩海岸地域の数地点とむつ市に一つ、東通村に二つ、（大八木未発表）だけが知られているが、約50年間で３か所しか見つからないので新たな産地が増える可能性が小さい。大量の積雪がないと水滞が出来ずに発生することが出来ないか、卵を残さず死滅することがある。近年、積雪量が少ないことがしばしば続くので絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　春になって積雪が溶けて水が大きく溜まるような窪地や湿地に発生する。背泳ぎでゆっくりと泳ぐ。１ヶ月弱の間に成体となって交尾する。水たまりは遅くて初夏までには干上がり成体は死ぬ。卵が残って休眠し次の大量の雪解け水がたまるまでは発生しない。

［特記事項］　多くの積雪量がないと生きて行けない。むつ市の場所は周りの杉林が大きくなって、地上斜面の積雪が減少したことも原因で水滞が出来にくい。万が一の場合、両地区とも積雪量の確保、または短期的にでも水量の確保や補給するなどの対策も必要になるのではないかと考えられる。

（大八木昭）

イソギンチャク目　ホウザワイソギンチャク科　B

和名　ホウザワイソギンチャク　**環境省：該当なし**
学名　*Synandwakia hozawai* (Uchida)

［形態的特徴］　伸張時の体は黒っぽい円筒状で、長さ５～６㎝、幅（直径）１㎝ほどである。頭部に60～80本の触手がある。本種は砂泥底の中に潜り込んで、底質表面に触手を広げて生活している。体の下方末端は底球と呼ばれ、膨らんで底質中に体を固定する役割を持つ。

［選定理由］　1926年に平内町浅所で採集された個体に基づいて新種記載がなされた（Uchida, 1932, 1938）。1959年と1968年にも記録されたが（Uchida & Uchida, 1969）、その後報告はなかった（鈴木, 2007；柳ら, 2007）。しかし、1999年（武田, 未発表）、および2006年と2007年（柳ら, 2007）に陸奥湾内の２か所の砂浜で記録された。現在も安定的に生息している場所は１か所のみである。

［分布と生態の概要］　近年得られているのは蓬田村郷沢とむつ市大湊芦崎の砂浜である。郷沢では1999年に一度得られただけである。

［特記事項］　本種は砂の中に埋もれて生活をし、体色も底質に似ているので、本種を採集するという目的を持って探さなければ発見は困難である。　**（武田哲）**

カサガイ目　ユキノカサガイ科　B

和名　ツボミガイ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Patelloida conulus* (Dunker)

［形態的特徴］　高い円錐形の貝殻を持つ巻貝の１種である。殻径は最大１㎝ほど、殻頂は中央に位置する。一般に褐色の地色に殻頂から白色の線状の模様が走る。

［選定理由］　陸奥湾内の１か所の干潟のみで見られる。本種は巻貝の１種ウミニナが生息する干潟に生息する。ウミニナは平内町浅所やその周辺で大きな個体群が確認されているが、本種は確認されていない（鈴木, 2007；金谷, 2011）。宿主ウミニナは全国的に大きく減少しており（福田・木村, 2012：環境省準絶滅危惧種 NT）、ウミニナ個体群の消滅とともに本種も消失する可能性がある。

［分布と生態の概要］　むつ市大湊芦崎の干潟で確認されている（鈴木, 2007；金谷, 2011）。本個体群は最北のもので、本県ではここでしか見られない貴重なものである。芦崎ではウミニナやその近縁種であるホソウミニナの貝殻、あるいは付近の礫の上でも見つかる。

［特記事項］　本種は近年ヒメコザラガイ *Patelloida pygmaea* の亜種から種に格上げされた（Nakano & Ozawa, 2005；Nakai *et al.*, 2006）。　**（武田哲）**

中腹足目　クビキレガイ科　B

和名　クビキレガイモドキ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Cecina manchurica* A.Adams

［形態的特徴］　殻高７㎜前後の暗黄褐色の巻き貝であるが、殻頂が折れてなくなるので、クビキレの名がついている。

［選定理由］　全国的にも多いものではなく、分布が限られたものになってきた。アマモなどの打ちうげられた残骸などゴモの多い芦崎には集中して沢山いたが、そこにも多くは見られなくなってきている。

［分布と生態の概要］　北陸以北北海道の函館から稚内などの海岸に打ち上げられた海藻類下などに見られる。河川や海岸線の改修にともなう海岸環境の変化と、漁網の利用で打ち上げられる海藻などの減少が生息に影響を与えたものと思われる。

［特記事項］　東北地方で、少数ではあるがいつでも見られるところは陸奥湾の芦崎ぐらいのものとなってきた。　**（大八木昭）**

吸腔目　ハナゴウナ科 **B**

和名　トクナガヤドリニナ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Hypermastus tokunagai* (Yokoyama)

［形態的特徴］　長さ７～８㎜ほどの細く尖った円錐形の巻貝である。殻口寄りは白色、殻頂寄り半分は黒っぽく、宿主ハスノハカシパンの濃紫色の体表上ではよく目立つ。

［選定理由］　東北帝国大学の1924年の陸奥湾生物相調査では、宿主ハスノハカシパンは記録されているが（Mortensen, 1929）、本種は記録されていない。現在よりも生物相が豊富であったので、当初から稀な種であったと考えられる。1997～1998年に行った宿主ハスノハカシパンの生態調査で得られた約3000個体の宿主から本種が数個体得られた（武田, 未発表）。その後の2000年の調査では得られていない。

［分布と生態の概要］　ハスノハカシパンは陸奥湾の多くの砂浜で見られるが、本種が得られたのは１か所の砂浜だけである。本種は不正形ウニの１種ハスノハカシパンの体表に寄生する（Matsuda *et al*., 2008）。

［特記事項］　本国では太平洋側の和歌山県・徳島県・山口県、日本海側の石川県で記録されている（福田, 2012）。陸奥湾の記録は最北にあたる貴重なものである。　**（武田哲）**

盤足目　イツマデガイ科 **B**

和名　オカマメタニシ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Blanfoldia japonica bensoni* (A.Adamus)

［形態的特徴］　殻高10㎜、殻径５㎜前後の陸産巻貝で臍孔は明らかである。触角は真っ直ぐ伸びることはない。殻色はやや黄みを帯びた明褐色である。

［選定理由］　北海道から福井県までの日本海側に見られるが、本県では恐山と佐井村でしか確認されていない。希少なものである。

［分布と生態の概要］　恐山ではブナの倒木上、および草本スゲ類の根元で、佐井村では細礫土壌上と落葉下に生息していた。詳しい情報はない。

［特記事項］　イツマデガイ科のシモキタシブキツボとならび積雪地域で水生のものから陸域に進出したイツマデガイ科の進化の証となり得るかもしれない。その２種とも生息するのは日本で本県だけなのでその点でも貴重であると考える。　**（大八木昭）**

マルスダレガイ目　マルスダレガイ科 **B**

和名　ハマグリ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Meretrix lusoria* (Roding)

［形態的特徴］　殻長８㎝、殻幅3.5㎝、殻高6.5㎝ほどの丸味を帯びた三角形の二枚貝である。殻表は平滑で、色彩は白の地色にわずかに褐色の模様を持つものから全面褐色まで変異に富む。

［選定理由］　Yamamoto & Habe（1959）による陸奥湾の海岸34か所、海底24か所の調査では各地で記録された。青森市油川、青森市浅虫、平内町浅所、野辺地町、むつ市大湊、さらに夏泊半島と下北半島との中間の陸奥湾の深場からも得られている。現在も生息しているのは大湊のみであるが、地域住民の採集圧にさらされている。全国的に減少しており、東日本では1970年代まで大きな個体群があった仙台湾や東京湾でもほとんど見られなくなった（山下, 2012）。

［分布と生態の概要］　むつ市新田名部川河口周辺の砂浜の潮下帯でのみ得られている。

［特記事項］　本種は陸奥湾から九州まで分布しており、大湊の個体群は孤立した最北のものであり、貴重である。加藤（2007）は最も近い生息地として宮城県松島湾と鳥の海を挙げている。

（武田哲）

ヒルミミズ目　ヒルミミズ科 **B**

和名　アオモリザリガニミミズ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cirrodrilus aomorensis* (Yamaguchi)

［形態的特徴］　外形はツガルザリガニミミズと似るが、口節背唇に長短が交互に並ぶ７本の指状突起を持ち、顎板の大きさが背腹で異なることで明瞭に区別される。

［選定理由］　宿主が本州のニホンザリガニに限られている。宿主の分布消失に伴って絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　ツガルザリガニミミズよりも分布が広く、青森県に生息するニホンザリガニにはほぼ例外なく見られるほか、秋田県大館市や岩手県二戸市のニホンザリガニからも確認されている（Gelder & Ohtaka, 2000；大高, 2004, 2010）。一生の全てを宿主の体表で送るが、詳しい生態はわかっていない。

［生存に対する脅威と保存対策］　宿主であるニホンザリガニの生息を保証する清流の保全が望まれる。ツガルザリガニミミズやイワキザリガニミミズと同様に、外来ザリガニの侵入に伴う外来ヒルミミズ類との競合も危惧される。

［特記事項］　七戸町と女鹿沢（現青森市）産の個体によって記載された種類で（Yamaguchi, 1934）、記載に使われたと思われる標本も見つかっている（Gelder & Ohtaka, 2002）。　**（大高明史）**

ヒルミミズ目　ヒルミミズ科 **B**

和名　イワキザリガニミミズ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cirrodrilus iwakiensis* Ohtaka et Gelder

［形態的特徴］　アオモリザリガニミミズよりもやや大型で，口節に長短が交互に並ぶ15本の指状突起を持ち、背側の顎板が左右に翼状の張り出しを持つ点で，同属の他種と区別される。

［選定理由］　八甲田山以西の青森県に分布するニホンザリガニの体表に共生する。宿主の分布消失に伴って絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　八甲田山よりも東側や下北半島に生息するニホンザリガニには見られない（大高, 2010；Ohtaka & Gelder, 2015）。津軽地方ではアオモリザリガニミミズと共存する場合が多いが、個体数はアオモリザリガニミミズよりもずっと少ない。一生の全てを宿主の体表で送るが、詳しい生態はよくわかっていない。

［生存に対する脅威と保存対策］　宿主であるニホンザリガニの保全が最も重要である。他の在来ヒルミミズ類と同様に、外来ザリガニの侵入に伴う外来ヒルミミズ類との競合も危惧される。

［特記事項］　本種の生息は以前から知られていたが（大高・向山, 1998；大高, 2010）、種名が確定したのは2015年である（Ohtaka & Gelder, 2015）。タイプ産地は岩木山である。　**（大高明史）**

エビ目　アメリカザリガニ科　B

和名　ニホンザリガニ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Cambaroides japonicus* (de Haan)

［形態的特徴］　清流に住む褐色ないし黒褐色のずんぐりとしたザリガニで、体長は40～60㎜、まれに70㎜を越える。頭胸甲は円筒形で額角は幅広く短い三角形。

［選定理由］　生息地の減少は顕著で、近年は山間の小河川や湧水地に離散的に見られるようになっている。青森県レッドデータブック（2010年改訂版）の出版以降に消失した生息地も多い。

［分布と生態の概要］　北海道と東北北部に生息する日本固有種で、本州での分布域は大部分が県内である。産卵は早春に行われ、抱卵期間は３～４か月に及ぶ。産卵するまで５年以上かかり、他のザリガニ類に比べると卵数が極めて少ない（川井・中田, 2001；Nakata *et al*., 2002；川井, 2007）。本州のニホンザリガニは北海道とは異なった遺伝子組成を持つことが知られている（Koizumi *et al*., 2012）。

［生存に対する脅威と保存対策］　過去には薬や食料として乱獲された経緯がある。現在は、森林伐採や河川改修等に伴う生息地の改変、ペットとしての乱獲、汚濁水や農薬の流入などによる水質環境の悪化、ザリガニカビ病への罹患が主たる脅威となっている。本県ではまだ確認されていないが、生息場所が重複するウチダザリガニとの競合も危惧される。　**（大高明史）**

エビ目　スナガニ科　B

和名　コメツキガニ　**環境省：該当なし**
学名　*Scopimera globosa* De Haan

［形態的特徴］　ほぼ球形の、砂粒をちりばめたような紋様の甲羅を持つかにで、甲幅は最大で13㎜になる。４対の歩脚の長節のクチクラは空気呼吸のために薄くなっており、ティンパナと呼ばれる（Matsumasa *et al*., 2001）。

［選定理由］　県内では陸奥湾の２か所に限産する。生息地の１か所ではその生息範囲が狭小化し、2007年には10㎡を下回ったことが報告されている（Yokoya, 1928；平井, 1989；鈴木, 2011）。現在の生息地は自衛隊の構内という特殊な立地条件下にある干潟１か所と見なせる。地球温暖化に伴う海水面上昇などにより干潟ごと消失しまう可能性がある。

［分布と生態の概要］　本種は砂質干潟に生息し、県内ではむつ市大湊芦崎と田名部川河口の２か所の干潟で確認されている。芦崎では砂嘴の砂質干潟に生息している。

［特記事項］　北限の個体群は北海道有珠湾の湧水周辺の砂質干潟に生息している（東ら, 2006）。むつ市の個体群は北東北地方で見られる唯一の個体群であり、最も近い生息地は約300㎞南下した宮城県の北上川河口である。　**（武田哲）**

エビ目　イワガニ科　B

和名　アシハラガニ　**環境省：該当なし**
学名　*Helice tridens* (De Haan)

［形態的特徴］　やや横長のくすんだ青色の甲羅を持つかにで、その幅は最大40㎜ほどの大型種である。左右の鋏脚は大きく、黄色味を帯びる。

［選定理由］　現在、県内では陸奥湾の１か所でのみ確認されている。過去には平内町浅所（土屋, 1982）と五所川原市十三湖（大高・佐原, 2003）でも記録されていたが、2002～2004年に行った干潟の底生生物調査では見つからなかった（鈴木, 2007）。現在確認されている生息地は極めて狭く、個体群サイズは小さいとされる（平井, 1989；鈴木, 2011）。本種は砂質干潟の上部に生育するヨシ原に生息しているので、地球温暖化に伴う海水面上昇などにより生息地ごと消失しまう可能性がある。

［分布と生態の概要］　県内ではむつ市大湊芦崎の自衛隊構内の砂嘴に生息している。春から秋の活動期にかけて干潟を徘徊することも多い。

［特記事項］　本県が分布の北限である。むつ市の個体群は北東北地方で見られる唯一の個体群であり、最も近い生息地は約300㎞南下した宮城県気仙沼市谷津川河口である。　**（武田哲）**

クモ目　コモリグモ科 **B**

和名　イソコモリグモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Lycosa ishikariana* (Saito)

［形態的特徴］　体長は雄が20㎜前後、雌は15㎜前後で、背甲には一対の黒点がある。脚の跗節先端は堅く数本の爪を持つ。腹面は黒色である（田中, 2009）。

［選定理由］　本種の生息域は海岸の砂浜に限られる。全国的に生息地及び個体数とも減少しているが、青森県も同様に開発等による砂浜の生息環境が狭まれており、絶滅が危惧される。

［分布と生態の概要］　本種は、北海道・本州に分布するが、本州では日本海側は青森県から島根県まで、太平洋側では青森県から茨城県までの砂浜に生息が確認されている（Suzuki *et al*., 2006）。青森県では鰺ヶ沢町～つがる市七里長浜・赤石海岸・八戸海岸（水木, 1990）、つがる市高山稲荷海岸・つがる市大滝沼海岸（西川, 2010）、つがる市牛潟町鷲ノ沢、横浜町吹越、六ヶ所村出戸岡畑（谷川, 2015；Tanikawa *et al*., 2018）から記録されている。

本種の生息地は砂浜海岸沿いの海浜植物帯で、植物の根元や流木の傍らに穴を掘って棲家としている。夜行性で夜間に穴から出てその周辺で小動物を捕食する（水木, 2010）。

［生存に対する脅威と保存対策］　本種の生息地である砂浜海岸沿いの海浜植物帯は、近年の防波堤建設や油汚染、ゴミ等の漂流物の堆積、自動車等の乗り入れなどで減少してきており、適した生存環境が失われつつある。海浜植物帯の保存の配慮が望まれる。　**（山内智）**

クモ目　ミズグモ科 **B**

和名　ミズグモ **環境省：絶滅危惧Ⅱ類**

学名　*Argyroneta aquatica* (Clerck)

［形態的特徴］　体長は10㎜前後で、頭胸部は暗褐色から黒色、腹部は灰褐色または淡褐色。水中では、頭胸部はオレンジ色、腹部は空気に覆われて銀色に見える。

［選定理由］　自然度の高い池沼が生息の条件で，全国的に確認事例が少ない。

［分布と生態の概要］　水中生活をする唯一のクモで、ヨーロッパからシベリア・東アジアにかけての冷涼な地域の池沼に分布する。生息場所の多くは泥炭地の池沼である。空気室の素材には、タヌキモなどの柔らかい葉が糸状に密生した水草が使われる。水生の小動物を捕らえて空気室の中で食べる。県内では、1977年につがる市（旧車力村）で初めて発見されて以来（西川ら, 1977）、長く記録がなかったが、2005年につがる市で再確認され（工藤, 2005）、下北半島でも生息地が見つかっている（木下, 2007）。国内では他に、北海道・京都府・大分県・鹿児島県からの記録がある。

［生存に対する脅威と保存対策］　水草が豊富で自然状態がよく保たれた湿原や池沼が生息の条件で､魚類による捕食も大きな脅威になると考えられる。湿地環境の保全が急務である。**（大高明史）**

ウズムシ綱三岐腸目　ヒラタウズムシ科 **C**

和名　**トウホクコガタウズムシ**　**環境省：該当なし**
学名　*Phagocata teshirogii* Ichikawa et Kawakatsu

本種は、弘前市の“御前水”で発見された日本固有種で、弘前市が模式産地となっている学術的にも貴重な種である。青森県以外では、山形県新庄市で記録されている（新村, 1988）のみである。発見された“御前水”では、近年生息が確認されず、2018年11月の調査でも発見されなかった（石田, 未発表）。現在生息を確認しているのは、弘前市内の湧水一か所のみであり、2015～2017年にかけて数回調査した時には、数が少なかったが、2018年の９月に調査した時にはある程度の数を確認出来たので、回復傾向にあるようである（石田, 未発表）。しかし、今後湧水の枯渇、汚濁などが生ずると生存が危惧される。手代木（1974）によると、津軽半島・下北半島・八甲田にも局所的に低密度で分布しているが、近年再調査はされていない。**（石田幸子）**

ウズムシ綱三岐腸目　オオウズムシ科 **C**

和名　**キタシロウズムシ**　**環境省：該当なし**
学名　*Dendrocoelopsis lactea* Ichikawa et Okugawa

本種は、青森県が分布南限の日本固有種である。青森県以外では、北海道全域に分布していると報告されており（Kawakatsu, 1969）、県には地質時代に北海道から移動してきたと考えられている（手代木, 1974）。黒石市六万平一帯の小流に生息しているが、近年水枯れや工事によって分布がせばめられ数も減ってきている。2016年～2017年の調査でも、2016年に生息を確かめていた小流の一つが工事によって翌年には消失していた（石田, 未発表）。手代木（1974）によると、本種は、津軽半島（小泊付近・梵珠山付近）・下北半島（湯野川温泉付近）にも局所的に低密度で分布しているが、近年本格的な再調査はされていない。2018年９月に梵珠山付近の一つの川の一部だけは調べてみたが、その時は発見されなかった（石田, 未発表）。**（石田幸子）**

原始腹足目（オキナエビス目）　ヤマキサゴ科 **C**

和名　**ハコダテヤマキサゴ**　**環境省：絶滅のおそれのある地域個体群（東北地方）**
学名　*Hemipoma hakodadiense* (Hartmann)

本種は、殻径５㎜前後のそろばん玉に似た形をした蓋をもつ小形の陸貝で、北海道および本県と秋田県の高山に分布する北方系のものであると考えられている。環境省は、下北半島に生息するものを絶滅のおそれのある地域個体群LPとしていた。下北半島東通村の石灰岩山地の桑畑山には以前はよく見られたが、環境変化により近年はあまりよく見られない。下北半島のブナ林の林床にも生息していたがなかなか見ることはできない。環境調査会社でも、本種を注意して調査されているところもあるが下北半島頸部で見つかったことはない。津軽半島北部外ヶ浜町平館の山中で２個体見つけた（大八木, 未発表）ので詳しく探せば産地が増す可能性はある。**（大八木昭）**

柄眼目　キセルガイ科 **C**

和名　**エゾコギセル**　**環境省：該当なし**
学名　*Pictophaedusa monelasmus* (Pilsblry)

本種は、北海道を分布の主とする意味で蝦夷の小さなキセルガイという名がついており、煙草を吸うときにつかったキセルに見たてている。青森県では、下北半島北部に分布することが知られていたが、下北半島頸部に、津軽半島北部に、八甲田蔦付近に、赤石川流域山中にとそれぞれにいずれも少数分布していた（大八木, 未発表）。太い広葉樹があるところでないと見つかることはなかった。樹皮上や樹皮下やコケの表面などで見つかるだけである。北方系で北海道から青森県に分布を自然に広げてきたとすれば、北海道と本州には地質年代に陸橋があって、それもイタヤ・トチ・センノキ・ブナなど幹の大きな樹がある程度つながった陸橋を考えざるを得ないが、本県と秋田県のエゾコギセルが自然分布かどうかはまだ不明である。**（大八木昭）**

柄眼目　オナジマイマイ科 **C**

和名　ミチノクマイマイ **環境省：準絶滅危惧**
学名　*Euhadra grata gratoides* Kira

殻の尖った方を上にして殻の開口部を見たとき、殻口が左側にくるのを左巻というが、殻径24㎜前後の左巻のマイマイで、白地に無帯のものと白地に茶褐色の色帯があるものがある。ヒダリマキマイマイ種群は近畿東部より北に分布しているが、その中でも最西北端に生息する種である。秋田県から本県の日本海側および竜飛近辺まで見られる。内陸部にはあまり入り込まないと思われているが、岩木山や梵珠山にも点在して生息する。死殻だけが見つかり生貝の全く見つからないところもしばしばあり、減少傾向が懸念される。日本海岸から津軽半島の中山山脈までの地域に生息しているのかも不明である。 **（大八木昭）**

異歯目　カワシンジュガイ科 **C**

和名　カワシンジュガイ **環境省：絶滅危惧ⅠB類**
学名　*Margaritifera laevis* (Hass)

本県では佐井村・むつ市・東通村・横浜町・六ヶ所村・東北町の河川の礫～砂地あるいは泥の川底に、突っ立った状態で生息する。殻は長卵形で大型の二枚貝であるが、殻長は15㎝を越えない。殻長約５㎝で性成熟する（近藤, 2008）。普通の個体には真珠はできない。コガタカワシンジュガイが新種として記載されたが、下北では８㎝を越えるコガタカワシンジュガイは見つかっていないので余裕をみて９㎝をこえるものはカワシンジュガイと推測できる。しかし、前閉殻筋痕の形を見なければ同定出来ないのが現状である。グロキディウム幼生はヤマメに寄生すれば生育し、脱落して分布を広げて稚貝として育つ。ヤマメ域は上流のイワナ域よりも広範囲とみられるように、カワシンジュガイの分布域は割合広範囲にわたる。ダムや農業堰堤などでヤマメの遡上が止められた場合は再生産は不可能となるので、コロニーの消滅に繋がることになるが、そのような地域が２か所は知られている。 **（大八木昭）**

スジホシムシ目　スジホシムシ科 **C**

和名　スジホシムシ **環境省：該当なし**
学名　*Sipunculus nudus* Linnaeus

全長20㎝ほどの長虫状の蠕虫である。体表は肌色で金属光沢を帯び、縦横に走る溝で格子状に区切られる。次種スジホシムシモドキとは横の溝を有することで区別される。陸奥湾では東北帝国大学による1924年の生物相調査により平内町茂浦の砂浜（Sato, 1930）で記録されてから、1977年に青森市浅虫（Tsuchiya, 1979）、1991～1993年に平内町土屋（武田, 1997）で、さらに青森市浅虫の人工砂浜では現在（2018年）も稀ながら記録されている（武田, 未発表）。茂浦と土屋の砂浜は埋め立てられた。陸奥湾内に広く分布している可能性はあるが、安定して得られるような生息地は知られていない。 **（武田哲）**

スジホシムシ目　スジホシムシ科 **C**

和名　スジホシムシモドキ **環境省：該当なし**
学名　*Siphonosoma cumanense* (Keferstein)

全長40㎝ほどに達する長虫状の蠕虫である。1977年に青森市浅虫で行われた潮間帯の生物調査で初めて記録された（Tsuchiya, 1979）。平内町土屋の砂浜で1991年11月～1993年１月まで行ったおよそ10回の調査で１、２個体ずつ（武田, 1997）、また青森市浅虫の人工砂浜では現在（2018年）まで、何度か記録されている（武田, 未発表）。むつ市大湊芦崎の干潟でも2006年４月の調査で得られたが、その後見つかっていない（鈴木, 2017）。前種および本種は潮間帯から潮下帯の砂質干潟の底質表層近くに体を埋めて生活しているので、目視調査で確認されることはない。野外調査中に、偶然採集されることが多い。 **（武田哲）**

エビ目　ヌマエビ科 **C**

和名　ヌカエビ **環境省：該当なし**
学名　*Paratya compressa improvisa* Kemp

中部以北の本州の池沼や河川に広く分布する淡水エビ類の一種で、青森県が分布の北限にあたる。かつては県内のため池や流れの緩い河川などに広く、かつ豊富にみられたが、近年は分布も密度も急激に減少している。県内の約300ヶ所のため池で行われた2017年の調査によると、ヌカエビが見られたため池は全体の15%にすぎず、生息地は平地や山間などの立地や地形，水質環境を問わず、人為的影響をほとんど受けていないか、外来魚の放流が行われていない場所に限られている傾向があった（大高・木村, 2018）。青森県でヌカエビの減少が始まったと推測される2000年代の初頭は、県内でオオクチバスの分布が拡大した時期に対応する。これらの点から、近年のヌカエビの急激な減少をもたらした大きな要因のひとつとして、外来魚の高い捕食圧による可能性が考えられる。また、同じヌマエビ科で生息環境がヌカエビと重複する外来のカワリヌマエビ属（*Neocaridina* spp.）との競合も懸念される。 **（大高明史）**

エビ目　サワガニ科 **C**

和名　サワガニ **環境省：該当なし**
学名　*Geothelphusa dehaani* (White)

甲幅が２～３㎝の純淡水産のカニで、本県が分布の北限にあたる。県内での密度は、南西日本に比べてもともと少ない。分布域は県内のほぼ全域にわたるが、下北半島での記録はごくわずかである。主に河川上流の礫や小石の多い清流に生息するが、海岸近くの勾配が急な小河川でも見られ、さらに湿地や湖沼沿岸部に生息する場合もある。都市化や河川工事等に伴う生息地の改変や、水質の悪化により生息地は近年急速に減少している。

本種は地域集団間で体色の違いや遺伝的分化が認められている（Ikeda *et al.*, 1998；小林, 2000；瀬川, 2011）。青森県に分布する個体群の体色は、甲皮・鉗脚・歩脚ともに黒褐色か暗緑色または暗紫色のタイプである（一寸木, 1980）。食性は雑食性で、最大寿命は４～５年程度といわれている（小林, 2000）。 **（大高明史）**

エビ目　オサガニ科 **C**

和名　ヤマトオサガニ **環境省：該当なし**
学名　*Macrophthalmus japonicus* (De Haan)

横長の黒っぽい甲羅を持つかにで、その幅は最大で40㎜ほどになる大型種である。現在は平内町浅所とむつ市芦崎の汽水域の泥質干潟でのみ見られる（土屋, 1982；鈴木, 2007, 2011）。むつ市大湊芦崎の個体群は最北の個体群であり、貴重なものである。冠水時は干潟の泥の中に形成した中空の巣穴の中で過ごす。生息地が干上がると底質表面に出て、底質表面に堆積した微細な有機物を鋏脚でつまんで泥とともに食べる。繁殖期は夏期で、鋏脚を上下に振って求愛行動をする。浅所では松島に伸びる橋の上から底質表面で活動する個体を観察することができる。 **（武田哲）**

カニムシ目　コケカニムシ科 **C**

和名　ウミカニムシ **環境省：該当なし**

学名　*Halobisium orientale japonicum* Morikawa

本亜種は、体長が約５㎜前後で、触手は大きく体形はほぼ円筒状で、生息地及び個体数とも局地的で大変少ない。北海道厚岸海岸の潮汐線の礫下から採集された資料によって新亜種記載された（Morikawa, 1958；森川, 1965）。この他に北海道内（Morikawa, 1960）に分布し、利尻島の海岸では高潮線上の打上海藻下（澤田, 1995）から採集された。本州では宮城県などに分布が知られている。青森県ではむつ市芦崎で、他産地同様に潮の満干によって海水で洗われるような砂礫に潜んでいるのを複数個体採集した（山内, 2007）。県内では同様な環境に生息するイソカニムシは良く見られるが、本亜種の記録はむつ市以外無い。

海岸の砂礫が海水に洗われるような特殊な環境に生息しており、近年の海岸部の開発等により生息に適した環境は少なくなってきており、沿岸の環境保全に配慮が必要である。 **（山内智）**

ギボシムシ目　ギボシムシ科 **C**

和名　ミサキギボシムシ **環境省：該当なし**

学名　*Balanoglossus misakiensis* Kuwano

全長30㎝ほどに達する長虫状の橙黄色の蠕虫である。東北帝国大学が1924年に行った陸奥湾の生物相調査では記録されていない。当時は現在よりも生物相が豊富であったので、当初から稀な種であったと考えられる。2009年に青森市浅虫の人工砂浜で生息が初めて確認され（阿部ら, 2012）、密度は低いながら現在（2018年）も安定的に生息している。これまで本種の体の一部が平内町土屋（武田, 未発表；阿部ら, 2012）と蓬田村郷沢（阿部ら, 2012）で得られており、陸奥湾内の複数の砂浜に生息している可能性がある。砂浜の潮下帯の底質表層近くに体を埋めているので、目視調査で確認されることはない。 **（武田哲）**

中腹足目（ニナ目）　エゾマメタニシ科　**D**

和名　エゾマメタニシ
学名　*Bithynia moltschanovi* Lindholm
環境省：準絶滅危惧

殻高８㎜殻径６㎜前後の小さなタニシ形で、北海道東部の釧路湿原や塘路湖あたりで記録されているようであるが、北海道十勝の旧河川域で採集したこともある。海外ではシベリアあたりに生息し、北方系の淡水貝類と考えられている。青森県の小川原湖にも生息する。小川原湖のものが自然分布かどうかはわかっていない。

（大八木昭）

中腹足目（ニナ目）　ミズシタダミ科　**D**

和名　ニホンミズシタダミ
学名　*Cincinna japonica* (Martens)
環境省：該当なし

殻径７㎜前後の、やや厚みのある淡水平巻貝で北方系依存種である。北海道・本州の神奈川県での記録がある。本県では小川原湖岸近くでも生息が確認されている。神奈川県の芦ノ湖では水深25～30mの深場にも生息するといわれているので、本県でも小川原湖のみならず精査の必要性があると考えられる。　**（大八木昭）**

基眼目（モノアラガイ目）　モノアラガイ科　**D**

和名　コシタカヒメモノアラガイ
学名　*Galba truncatula* (Müller)
環境省：情報不足

殻高11㎜前後でモノアラガイに比べるとかなりの小形種である。ヨーロッパ原産の外来種と考えられると言うが、在来種説も否定できないのではないかという種である。むつ市川内と脇野沢の山中で、雪解け水のたまるところや、湧水にすむ例をみれば、これらのコシタカヒメモノアラガイは外来種とは考えにくい。しかし、いつもその場所で見ることは出来ないので、判断が難解となる。個体数は多くはない。

（大八木昭）

中腹足目　ミズシタダミ科　**D**

和名　ミズシタダミ
学名　*Valvata hokkaidoensis* Miyadi
環境省：該当なし

殻高3.5㎜前後の厚みのある平巻状の淡水貝で、シベリア・中国北部・北海道・青森県などに分布する北方系の種である。本州では下北半島東通村の砂丘地帯の長沼で最初発見され、その後むつ市陸奥湾岸の長沼で見つかった。この２か所は漁業などの立ち入りもないところであり自然分布と見なすことができる。小川原湖でも見つかったがここは自然分布なのかは不明である。水の流入あるいは流出入の乏しい浅い沼なので周辺から供給される水質水量の変化が懸念されていた。2008年にむつ市の長沼に流入していた水路を側溝排水対策として流入水をコンクリート水路で迂回させたため長沼は干上がり水生生態系は本種とともに全滅した。　**（大八木昭）**

中腹足目（ニナ目）　ミズゴマツボ科　**D**

和名　エゾミズゴマツボ
学名　*Stenothyra recondita* Lindholm
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

殻高５㎜前後の卵形の淡水巻貝で、朝鮮半島や北海道に分布する北方系のゴマツボである。県内では鷹架沼の湖岸などで確認されている。どこも湖水等の放出域はやや汽水的な環境にあるが、そこからは離れたいつも淡水と思われるところに見いだされた。地上排水の入り込むところなので環境悪化が懸念される。　**（大八木昭）**

基眼目（モノアラガイ目）　ヒラマキガイ科　**D**

和名　ヒダリマキモノアラガイ
学名　*Culmenella rezuoji* (Lindholm)
環境省：絶滅危惧Ⅰ類

殻高６㎜前後の左巻の微小な淡水貝で、本県や長崎県など数件にしか生息が知られていない。本県では、津軽半島の山中の沼、下北半島の数か所の沼や水路などに生息している。水底の堆積した落ち葉などに付着している。津軽半島の沼は県の自然環境保全地域に指定されているが、金魚などが持ち込まれており、生息環境が変化してきている。この種は生息地から突然消滅する傾向があると言われている。小川原湖近辺の沼にも生息しているが、ここは生息が持続しそうである。　**（大八木昭）**

基眼目（モノアラガイ目）　ヒラマキガイ科　**D**

和名　カワネジガイ
学名　*Camptoceras hirasei* Walker
環境省：絶滅危惧ⅠＡ類

殻高６㎜前後で10㎜に達する。殻は左巻でゆるく巻き、細長いねじれた角笛のようであるが、ヒラマキガイ科である。本州では６県に部布していたようであるが、各地で姿を消している。むつ市の水田用水路で確認されていたが、水田もなくなり、水路壁のコンクリート化がすすんだせいなのか探しても見つからないようになった。小さいこともあり見つかりにくいのであるが、水質悪化のない、コンクリート化されていない素掘り水路で見いだされるのでないかと思われる。青森県に素掘り水路がなくなったときは生息は望めないであろう。　**（大八木昭）**

基眼目モノアラガイ目　ヒラマキガイ科　**D**

和名　ミズコハクガイ
学名　*Gyraulus soritai* Habe
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

殻径４㎜前後の平巻の淡水貝で浅いところでは水底の枯れ葉などに付いていたり、スゲ科の植物に付いていたりすることが多い。関東や北陸以西に分布するといわれていたがむつ市芦崎や東通村などで生息が確認されている。しかし、探しても定常的に見ることの出来ない極めて生息の不安定さを感じさせる種である。芦崎などは20年にわたり、毎年調査しているが、確認できた年は３年のみである。現在（2018年）確認できていないし、東通村の１か所は、環境はそう変化しているようには見えないが探しても全く確認できないことが続いている。　**（大八木昭）**

柄眼目（マイマイ目）　キバサナギガイ科　**D**

和名　ナガナタネガイ
学名　*Columella edentula* (Draparnaud)
環境省：該当なし

殻高2.1㎜、殻径0.6㎜くらいのやや細長い巻貝である。北海道や兵庫県で記録されているが、本県ではむつ市、東通村の山中、横浜町の平地で確認されている。個体数は多いとは考えられないが、小さいので見つからないと言うことも充分考えられる。今後の精査を期待する。環境省のレッドリストでは東北地方以南のナガナタネガイは絶滅のおそれのある地域個体群LPに掲載されている。　**（大八木昭）**

柄眼目（マイマイ目）　キバサナギガイ科　**D**

和名　ナタネキバサナギガイ
学名　*Vertigo eogea* Pilsbry
環境省：絶滅危惧Ⅱ類

殻高３㎜、殻径1.8㎜前後のよくふくらんだ陸産貝類である。口に牙状の突起がある。湿地性の草本についているが、小さくて、また、季節によっては姿が全く見えず、極めて探し出しにくい種である。個体の小ささなどから、生息していても気づかない事が充分考えられるが、個体数も多いとは思われない。青森県では東通村の１つの沼の岸辺で確認されただけである。今後の他地区での調査が待たれる。　**（大八木昭）**

マルスダレガイ目　ドブシジミ科　**D**

和名　エゾドブシジミ
学名　*Sphaerium miyadii* Mori
環境省：該当なし

殻長10㎜前後の小さな汚白色の二枚貝で、殻頂部（胎殻）は特に大きく膨れ上がって他の部分とは明らかに区別出来るのが特徴である。北海道に生息する北方系の種であるが、青森県では東通村の牧場内の浅い泥池沼で記録されているのみである。そこは環境変化の著しいところなので（大八木・波部, 1984）、生息が危ぶまれている。　**（大八木昭）**

エビ目　スナガニ科　**D**

和名　アリアケモドキ
学名　*Deiratonotus cristatus* De Man
環境省：該当なし

本種は少し横長の甲羅を持ち、その幅は最大で15㎜ほどの小さなかにである。県内では、むつ市芦崎、六ヶ所村鷹架沼と高瀬川河口、平内町浅所で得られているにすぎない（鈴木, 2007）。河口域の海水と淡水が混じる汽水域の冠水している浅い泥や砂泥の表面で生活し、底質表面に堆積した有機物を餌としている。体色は黄土色で、また危険を感じるとすぐに泥の中に潜ってしまうので、観察は難しい。　**（武田哲）**

エビ目　キタクダヒゲガニ科　**D**

和名　キタクダヒゲガニ
学名　*Lophomastix japonica* (Durufle)
環境省：該当なし

本種は縦長の赤みを帯びた甲羅を持ち、その長さは最大で30㎜ほどのやどかり（異尾下目）の仲間である。平内町土屋の砂浜で1991～1993年の間に行われた約10回の調査で、潮間帯下部の砂の中から数個体が得られている（武田, 未発表）。この砂浜はバイパス工事のために埋め立てられた。その後、1995年から1999年に行った陸奥湾内10か所の砂浜の底生動物調査では得られていない。　**（武田哲）**

ザトウムシ目　カワザトウムシ科　**D**

和名　ヒトハリザトウムシ
学名　*Psathyropus tenuipes* L.Koch
環境省：準絶滅危惧

体長約６㎜で腹部第２背板に短い棘がある。日本全土の海岸と河川感潮域に生息。東北地方以北では内陸にも出現する。青森県では奥入瀬・酸ヶ湯・浅虫・恐山・むつ市田名部川河口で確認されているが、海岸の生息地は河川改修等で減少しているおそれがある。県内の集団は未調査だがＢ染色体という特殊な染色体の数が地理的に変異する（Tsurusaki & Shimada, 2004）。年１化卵越冬で成体は７～10月頃にみられる。　**（鶴崎展巨）**

触手動物門　アユミコケムシ科　**D**

和名　アユミコケムシ
学名　*Cristatella mucedo* Cuvier
環境省：情報不足

長さが数cmから十数cm、幅が５㎜程度の細長い群体を作り、ゆっくりと移動する。北半球の寒冷地に広く分布し、国内では本州中部以北で記録されているが、いずれの生息地でも近年は減少している。本県では、過去につがる市（旧森田村）の狄ヶ舘溜池からの記録がある（Toriumi, 1941）。狄ヶ舘溜池に近い屏風山湖沼群では、2006年に冷水沼で（大高ら, 2008）、2016年に平滝沼で（大高, 未発表）本種の休芽が見つかっているが、生体はいまだに確認されていない。
（大高明史）

ザトウムシ目　カワザトウムシ科　**D**

和名　オオナガザトウムシ
学名　*Melanopa grandis* Roewer
環境省：該当なし

体長10㎜内外。体は全体が黒褐色で長め。腹部第２背板に１本の棘がある。国内では対馬・九州北部・四国西部・本州の日本海側から北海道函館まで確認されているが外部形態に地理変異が著しい。東北地方での生息は希薄で・青森県では浅虫近辺の２か所で確認されているのみ（本州型に属するがやや小型）（Suzuki & Tsurusaki, 1985）。年１化卵越冬で成体は７～10月にみられる。　**（鶴崎展巨）**

ザトウムシ目　カワザトウムシ科　**D**

和名　フタコブザトウムシ
学名　*Paraumbogrella pumilio* (Karsch)
環境省：該当なし

体長３㎜内外。体は茶～黒褐色で腹部第１、２背板にこぶ状突起がある。日本固有種で鳥取県以北の本州と北海道に分布。青森県内ではむつ市恐山で確認されているのみ。河川敷・草地・二次林の道路沿いなど、比較的明るい環境の地表に生息。５月頃にふ化した幼体は、夏の終わりに成体となりそのまま越冬する。越冬成体は夏頃頃まで生き残るので成体はほぼ周年みられる（Tsurusaki, 2003）。　**（鶴崎展巨）**

無足目　イカリナマコ科　**D**

和名　ウチワイカリナマコ
学名　*Oestergrenia variabilis* (Théel)
環境省：該当なし

全長10cmほどの透明感のある長虫状の蠕虫である。陸奥湾では砂浜や転石浜の潮下帯上部に生息している。青森市浅虫では1960年代には一晩で70個体以上（Hoshiai, 1963）、1980年代までは数個体が燈火採集で得られていたが、1990年代には得られていない（武田, 未発表）。直近（2007年）の記録としてむつ市大湊芦崎干潟がある（鈴木, 2017）。　**（武田哲）**

中腹足目（ニナ目）　イツマデガイ科（カタヤマガイ科）　**ＬＰ（下北半島）**

和名　シモキタシブキツボ　**環境省：絶滅危惧Ⅱ類**
学名　*Fukuia ooyagii* Minato

［形態的特徴］　殻径６㎜前後の暗緑褐色の巻き貝である。臍孔は閉じる。口縁は黒く縁取られる。触角は陸では垂れ下がるが、水中では直線的に伸ばしている。

［選定理由］　日本で未だに下北でしか見いだされていないこと。Fukuia属は陸生であるが、シモキタシブキツボは現在はFukuia属に属しているが水生と見なされることなどから、いまだ分類が確定していない。細流にすむことで、環境変化の影響を受けやすく生息地が減少していることから選定した。

［分布と生態の概要］　主な生息場所は下北半島の山地で湧水や、細流の流れ出るところなどである。ただし、今のところ１か所ほどは海岸直近まで生息しているところがある。水中の石の表面にお椀状の膜内に卵を１個ずつ産むので水生と見なされた。落ち葉などや腐食植物を食べる。詳細はわかっていない。

［特記事項］　東通村では村の北部にしか見いだされていないが、そのものを新亜種として記載した（Minato, 1982）。その後、水生であることなどから亜種から種へと変更された。近似種となるニクイロシブキツボは福井県・新潟県・秋田県に生息するが青森県には生息せず、シモキタシブキツボは本県のみの生息である。　**（大八木昭）**

柄眼目（マイマイ目）　オナジマイマイ科　**ＬＰ（下北半島）**

和名　ナンブマイマイ　**環境省：準絶滅危惧**
学名　*Euhadra decorata diminuta* Toba et kuroda

［形態的特徴］　殻高19㎜、殻径30㎜前後の丈夫な殻で、殻表面のすじの美しい左巻きのマイマイである。

［選定理由］　左巻のマイマイは東日本にしかいない。そのうち東北地方のムツヒダリマキマイマイ種群の中で最東北端に生息する種であること、青森県と岩手県にまれに生息するとされていることなどから選定した。

［分布と生態の概要］　本県のものはやや扁平で、東通村の石灰岩地帯の林床部に生息しているが、その中でも分布範囲は限られている。アオモリマイマイの見られるところには分布していないと思われる。

［特記事項］　イワデマイマイなどがムツヒダリマキマイマイに統合されている中で、ナンブマイマイは統合されずに残されている。ナンブヒダリマキマイマイとも呼ばれる。　**（大八木昭）**

柄眼目（マイマイ目）　オナジマイマイ科　**ＬＰ（八甲田山）**

和名　ササミケマイマイ　**環境省：情報不足**
学名　*Aegista kunimiensis* M.Azumma et Y.Azuma

［形態的特徴］　殻径９㎜前後のマイマイで茶褐色の殻の表面に鱗状の毛羽立ちがある仲間の一種なのでケマイマイと呼んでいる。

［選定理由］　日本でも分布がきわめて限られて点在している上、最北に分布することなどから選定した。

［分布と生態の概要］　岩手県の国見温泉のササのはえたところから発見されたのでこのような名前になっている。県内では南八甲田や北八甲田のブナなど広葉樹林内のササ藪にある半腐食風倒木やその地上で確認されている。

［特記事項］　秋田県で記載されてから青森県では八甲田山で確認され、その後、福島県・茨城県でも確認されている。八甲田山での確認場所は三地点であるが、北八甲田の確認場所は人為的環境変化により生息が危惧される。しかし全般的に精査を要するものと考える。　**（大八木昭）**

和名　トウホクスベザトウムシ　　**環境省：該当なし**
学名　*Leiobunum tohokuense* Suzuki

［形態的特徴］　体長約６㎜内外。体は黄橙色～橙色。とくに雄は全体が橙色でよく目立つ。

［選定理由］　県内に交尾器や染色体数の異なる２地理型が見られ、移行帯が存在する。

［分布と生態の概要］　栃木県北部以北の本州の固有種。青森県内では低地から山地まで広範囲の森林に生息する。雄交尾器形態や染色体数に地理的分化があり青森県では南西部（岩木山・暗門滝・十和田湖）には十和田型（2n＝20）、北東部（津軽半島・浅虫・下北半島・八甲田山萱野茶屋）には浅虫型（2n＝22）がみられる（Tsurusaki, 1990；鶴崎, 未発表）。弘前市藍内では2n＝21の個体が見つかっており、染色体数についてはこの周辺に交雑帯があると考えられる。年１化卵越冬で、成体は７月初旬から10月上旬くらいまで、林内の樹幹や灌木上にみられる。

［生存に対する脅威と保存対策］　ブナなどの自然林やスギ・アスナロなどの人工林に生息する。青森県内での正確な位置はまだ不明だが、浅虫型と十和田型の接触域にあると予想される交雑帯（通常、幅は数km以内）は貴重なので、生息地となる樹林地の保全に配慮が望まれる。

（鶴崎展巨）

③引用文献

阿部広和・鷲尾正彦・山嵜敦子・美濃川拓也・西川輝昭　2012．青森県陸奥湾における半索動物ミサキギボシムシ*Balanoglossus misakiensis* Kuwano, 1902の初記録．青森自然誌研究，17：25-27.

東　正雄　1995．原色日本陸産貝類図鑑．株式会社保育社，大阪．343pp.

東　幸兵・佐々木潤・酒井勇一　2006．北限のコメツキガニの分布状況．第44回日本甲殻類学会大会講演要旨集，p.6.

一寸木肇　1980．本州北部におけるサワガニ *Geothelphusa dehaani* (White) の体色変異について．甲殻類の研究，10：57-60.

福田　宏　2012．トクナガヤドリニナ．日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑．東海大学出版会，秦野，p.64.

福田　宏・木村昭一　2012．ツボミ．日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑．東海大学出版会, 秦野，p.16.

Gelder, S. R. & A. Ohtaka　2000．Description of a new species and a redescription of *Cirrodrilus aomorensis* (Yamaguchi, 1934) with a detailed distribution of the branchiobdellidans (Annelida: Clitellata) in northern Honshu, Japan. Proceedings of the Biological Society of Washington, 113：633-645.

Gelder, S. R. & A. Ohtaka　2002．A review of the oriental branchiobdellidans (Annelida: Clitellata) with reference to the rediscovered slide collection of Prof. Hideji Yamaguchi. Species Diversity, 7：333-344.

平井正和　1989．海の生物．むつ市史　自然編．むつ市史編纂委員会，むつ市．pp.508-616.

Hoshiai, T.　1963．Some observations on the swimming of *Labidoplax dubia* (Semper). Bulletin of the Marine Biological Station of Asamushi, 11：167-170.

Ikeda, M., T. Suzuki & Y. Fujio　1998．Genetic differentiation among populations of Japanese freshwater crab, *Geotheiphusa dehaani* White), withreference to the body color variation. Benthos Research, 53：47-52.

逸見泰久　2012．日本の干潟の現状．日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑．東海大学出版会，秦野，pp.1-6.

Kameda,Y. & M. Kato　2011．Terrestrial invasion of pomatiopsid gastropods in the heavy-snow region of the Japanese Archipelago. BMC Evolutionary Biology, 11：118.

金谷　弦　2011．芦崎干潟におけるツボミガイの生息状況．むつ市文化財調査報告書（むつ市教育委員会），40：77-83.

加藤　真　2007．軟体動物門．第７回自然環境保全基礎調査　浅海域生態系調査（干潟調査）報告書．環境省自然環境局，生物多様性センター，pp.162-171.

加藤　真・福田　宏　1996．二枚貝綱．日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状．WWF Japanサイエンスレポート，3：65-73.

川井唯史　2007．ザリガニの博物誌．里川学入門．東海大学出版会，秦野．166pp.

川井唯史・中田和義　2001．ニホンザリガニの生態（総説）．青森自然誌研究，6：1-8.

Kawakatsu, M.　1969．An illustrated list of Japanese freshwater planarians in color. Bulletin of Fuji Women's College, 7，Ser. Ⅱ：45-91.

木下哲夫　2007．ミズグモの話．下北半島・自然観察ノート．自然学校エコーロッジ．むつ市．pp.76-77.

小林　哲　2000．河川環境におけるカニ類の分布様式と生態 －生態系における役割と現状－．応用生態工学，3：113-130.

Koizumi, I., N.Usio, T. Kawai, N. Azuma & R. Masuda　2012．Loss of genetic diversity means loss of geological information: the endangered Japanese crayfish exhibits remarkable historical footprints. PLoS ONE, 7(3)：e33986.

近藤高貴　2008．コガタカワシンジュガイ．日本産イシガイ目貝類図譜．日本貝類学会特別出版物(3)，pp.17-18.

Kondo, T. & O. Kobayashi 2005. Revision of the genus Margaritifera (Bivalvia: Margaritifeidae) of Japan,with description of a new species. Venus, 64：135-140.
工藤周二　2005. ミズグモの記録．Celastrina，40：32.
増田　修・内山りゅう　2004．日本産淡水貝類図鑑②　汽水域を含む全国の淡水貝類．株式会社ピーシーズ，東京．240pp.
Matsuda, H., T. Hamano, K. Yamamoto & S. Hori　2008. Ecological study of *Hypermastus tokunagai* (Gastropoda; Eulimidae), parasitic on the sand dollar *Scaphechinus mirabilis* (Echinoidea: Irregularia). Venus, 66：205-216.
Matsumasa, M., S. Kikuchi, S. Takeda, S. Poovachiranon, H. S. Yong & M. Murai　2001. Blood osmoregulation and ultrastructure of the gas windows ('Tympana') of intertidal ocypodid crabs: *Dotilla* vs. *Scopimera*. Benthos Research, 56：47-55.
湊　宏　1982．青森県下北半島産シモキタシブキツボ（新亜種）．Venus，41：162-163.
水木隆治　1990．青森県のクモたち．著者自刊．78pp.
水木隆治　2010．イソコモリグモ．青森県の希少な野生生物－青森県レッドデータブック（2010年改訂版）－．青森県．p.308.
Morikawa,K.　1958. Maritime Pseudoscorpions from Japan. Mem. Ehime Univ., Sect.Ⅱ. (Sci.), Ser. B (Biol.), 3(1)：5-11.
Morikawa,K.　1960. Systematic studies of Japanese Pseudoscorpions. Mem. Ehime Univ., Sect.Ⅱ. (Sci.), Ser. B (Biol.), 4(1)：85-172.
森川国康（1965）うみかにむし．新日本動物図鑑(中)（岡田要・内田清之助・内田亨　編者）．北隆館，東京．p.344.
Mortensen, T.　1929. Report of the biological survey of Mutsu Bay. 13. Echinoidea. Science Reports, Tohoku Imperial University, 4th Series (Biology), 4：473-479, pl. XIX.
Nakai, S., O. Miura, M. Maki & S. Chiba 2006. Morphological and habitat divergence in the intertidal limpet *Patelloida pygmaea*. Marine Biology, 149：515-523.
Nakano, N. & T. Ozawa　2005. Systematic revision of *Patelloida pygmaea* (Dunker, 1860) (Gastropoda: Lottiidae), with a description of a new species. Journal of Molluscan Studies, 71：357-370.
Nakata, K., T. Hamano, K. Hayashi & T. Kawai　2002. Lethal limits of high temperature for two crayfishes, the native species *Cambaroides japonicus* and the alien species *Pacifastacus leniusculus* in Japan. Fisheries Science, 68：763-767.
長縄秀俊　2001．現世の「大型鰓脚類」の分類．陸水学雑誌，62：75-86.
新村文男　1988．淡水生プラナリア，トウホクコガタウズムシ*Phagocata teshirogii* の新生息地について．信濃生物会会報，信濃路．45：5-7.
西川喜朗　2010．青森県のクモ採集記録．くものいと，43：33-36.
西川喜朗・桂 考次郎・道盛正樹　1977．ミズグモ青森県に健在．Atypus，70：13-14.
大高明史　2003．北限の淡水カニ．青森県史　自然編　生物．青森県史編纂自然誌部会，青森県，pp.544-545.
大高明史　2004．ザリガニの体表で暮らすヒルミミズ－その分布と生態．うみうし通信，42：2-4.
大高明史　2010．第Ⅴ部　保全学，第３章　群集生物保全．ザリガニの生物学（川井唯史・高畑雅一編著）．北海道大学出版会，札幌．pp.445-475.
大高明史　2014．環形動物門蛭綱ヒルミミズ目ヒルミミズ科．p.9（ツガルザリガニミミズ），pp.27-28（その他の11種）．環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編集）レッドデータブック2014－日本の絶滅のおそれのある野生生物－７．その他無脊椎動物（クモ形類・甲殻類等）．ぎょうせい，東京．
大高明史・木村直哉　2018．青森県におけるヌカエビ（ヌマエビ科）とスジエビ（テナガエビ科）の分布の現状．陸水生物学報，33：1-8.
大高明史・向山　満　1998．本州北部におけるヒルミミズ類の分布について（予報）．青森自然誌研究，3：33-36.

大高明史・小笠原嵩輝・木村直哉・小林　貞・谷田一三・上西　実・安倍　弘・富川　光・櫛田俊明 2008. 青森県・屏風山湖沼群の底生無脊椎動物相. Celastrina, 43：49-78.
Ohtaka, A. & S. R. Gelder 2015. Description of a new species of Branchiobdellida (Annelida: Clitellata) and comparison with other Cirrodrilus Species in northern Honshu, Japan. Species Diversity, 20：67-71.
大八木昭　1996. キタホウネンエビ *Euburanchipus uchidai* Kikuchi の新生息地と生態. 青森自然誌研究, 1：25-30.
Sato, H. 1930. Report of the biological survey of Mutsu Bay. 15. Sipunculoidea. Science Reports, Tohoku Imperial University, 4th Series (Biology), 5：1-40, pls. Ⅰ-Ⅲ.
佐藤慎一　2001. 東北地方の汽水湖に見られる希少な二枚貝類. 日本ベントス学会誌, 56：58.
澤田高平　1995. カニムシ目. 原色検索日本海岸動物図鑑２（西村三郎編著）保育社, 東京. pp.8-11.
瀬川涼子　2011. サワガニ類の分子系統学的研究. エビ・カニ・ザリガニ　淡水甲殻類の保全と生物学. 生物研究社, 東京. pp.103-114.
Suzuki, S. & N. Tsurusaki 1983. Opilionid fauna of Hokkaido and its adjacent areas. Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Series VI, Zoology, 23：195-243.
Suzuki, S., N. Tsurusaki & Y. Kodama 2006. Distribution of an endangered burrowing spider *Lycosa ishikariana* in the San' in Coast of Honshu, Japan (Araneae: Lycosidae). Acta Arachnologica, 55：76-86.
鈴木孝男　2007. 青森県沿岸域. 第７回自然環境保全基礎調査　浅海域生態系調査（干潟調査）報告書. 環境省自然環境局, 生物多様性センター, pp.24-27.
鈴木孝男　2011. むつ市芦崎干潟のカニ類について. むつ市文化財調査報告, 39：68-73.
鈴木孝男　2017. 芦崎の自然２. 干潟の底生動物群集. むつ市文化財調査報告, 45：85-100.
武田　哲　1997. 陸奥湾の生物相. 海洋生物の絶滅と多様性の保全の研究（日産学術振興財団助成金による研究成果, 代表　向井　宏), 51pp.
田中穂積　2009. コモリグモ科. 日本産クモ類（小野展嗣　編著). 東海大学出版会. 神奈川. pp.222-248.
谷川明男　2015. 磯や浜辺のクモ. クモの科学最前線（宮下直　編者). 北隆館, 東京. pp.122-138
Tanikawa, A., A.Shinkai, H. Tatsuta & T. Miyashita 2018. Highly diversified population structure of the spider *Lycosa ishikariana* inhabiting sandy beach habitats. Conservation Genetics, 19：255-263.
Takahashi, N., T. Kitano, Y. Hatanaka, Y. Nagahata, Y. A. Tshistjakov, M. Hamasaki, H. Moriya, K. Igarashi & K. Umetsu. 2018. Three new species of the fairy shrimp Eubranchips Verill,1870 (Branchiopoda:Anostraca) from northern Japan and far Eastern Russia. BMC Zoology, 3：5.
Toriumi, M. 1941. Studies on freshwater Bryozoa of Japan. I. Science Reports of the Tohoku University. Fourth series, (Biology), 16：193-215.
手代木　渉　1974. ブラキストン線とプラナリア. 動物と自然, 4(3,4)：2-7.
Tsuchiya, M. 1979. Quantitative survey of intertidal organism on rocky shores in Mutsu Bay, with special reference to the influence of wave action. Bulletin of the Marine Biological Station of Asamushi, 16：69-86.
土屋　誠　1982. 海辺の動物. 青森市の自然　－水中編－. 青森県教育委員会社会教育課, pp.165-181.
Tsurusaki, N. 1990. Taxonomic revision of the *Leiobunum curvipalpe* group (Arachnida, Opiliones, Phalangiidae), Ⅲ. *Leiobunum curvipalpe* subgroup. Japanese Journal of Entomology, 58：761-780.
Tsurusaki, N. 2003. Phenology and biology of harvestmen in and near Sapporo, Hokkaido, Japan, with some taxonomical notes on *Nelima suzukii* n. sp. and allies (Arachnida: Opiliones). Acta Arachnologica, 52：5-24.

Tsurusaki, N. & T. Shimada 2004. Geographic and seasonal variations of the number of B chromosomes and external morphology in *Psathyropus tenuipes* (Arachnida: Opiliones). Cytogenetic and Genome Research, 106：365-375.

Uchida, T. 1932. Description of a new actinian, *Andwakia hozawai* n. sp. Proceedings of the Imperial Academy, 8：394-396.

Uchida, T. 1938. Report of the biological survey of Mutsu Bay. 33. Actiniaria of Mutsu Bay. Tohoku Imperial University, 4th Series (Biology), 13：281-317, pl.Ⅺ.

Uchida, T. & H. Uchida 1969. On the peculiar actinian, *Synandwakia hozawai* (Uchida). Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Series 6th (Zoology), 17：1-5.

植田真司・築地由貴・近藤邦男・山室真澄 2005. 青森県汽水湖尾駮沼におけるベントスの種構成およびその歴史的変遷. 陸水学雑誌, 66：197-206.

Yamaguchi, H. 1934. Studies on Japanese Branchiobdellidae with some revisions on the classification. Journal of the Faculty of Science, Hokkaido University, Series Ⅵ, Zoology, 3：177-219.

Yamamoto, G. & T. Habe 1959. Fauna of shell-bearing mollusks in Mutsu Bay. Lamellibranchia (2). Bulletin of the Marine Biological Station of Asamushi, 9：85-122, pls.Ⅵ-ⅩⅣ.

山下博由 2012. ハマグリ. 日本ベントス学会（編）干潟の絶滅危惧動物図鑑. 東海大学出版会, 秦野, p.150.

山内 智 2007. むつ市芦崎のウミカニムシの記録. むつ市文化財調査報告, 35：60-61.

柳 研介・鈴木孝男・佐藤正典・内野 敬・五十嵐健志 2007. 陸奥湾芦崎干潟で発見されたホウザワイソギンチャク *Synandwakia hozawai*（花虫綱：イソギンチャク目）について. 日本ベントス学会・日本プランクトン学会合同大会講演要旨集, p.121.

Yokoya, Y. 1928. Report of the biological survey of Mutsu Bay. 10. Brachyura and crab-shaped anomura. Science Reports, Tohoku Imperial University, 4th Series (Biology), 3：757-784.

（5）青森県レッドデータブック（2010年改訂版）からの変更点一覧

総括表

変　更　内　容		種　数
新　規　追　加		135種
カテゴリー変更	ランク上昇	69種
	ランク下降	33種
	合　計	102種
分　類　変　更		5種
削　　除		19種

1）植物

〔維管束植物〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ヒメヒゴタイ	カテゴリー変更	ＥＸ	A	生息情報なし
ガシャモク	新規追加	A	－	新規検討
アオバスゲ	新規追加	A	－	新規検討
イトナルコスゲ	カテゴリー変更	A	D	個体数極少、分布限定
ザラツキヒナガリヤス	カテゴリー変更	A	D	個体数極少
アイナエ	カテゴリー変更	A	B	個体数減少
キクモ	カテゴリー変更	A	B	生息環境悪化、個体数減少
ヒシモドキ	カテゴリー変更	A	ＥＸ	生息情報増加
フサタヌキモ	カテゴリー変更	A	ＥＸ	生息情報増加
ハゴロモニワトコ	新規追加	A	－	新規検討
ムツトウヒレン	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
ハチノヘトウヒレン	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
カノコソウ	カテゴリー変更	B	C	個体数減少、分布限定
エビネ	カテゴリー変更	C	B	個体数増加、生息環境改善
アリアケスミレ	カテゴリー変更	C	B	個体数増加、分布拡大
ハマウツボ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
シテンクモキリ	新規追加	D	－	新規検討
ミズアオイ	カテゴリー変更	D	C	個体数増加、分布拡大
ザリコミ	新規追加	D	－	新規検討

〔維管束植物以外の植物〕

・蘚苔類

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ハッコウダゴケ	カテゴリー変更	A	D	個体数減少、分布限定
コマチゴケ	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
ニセヤハズゴケ	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
シフネルゴケ	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
コムチゴケ	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
カサゴケモドキ	新規追加	C	－	新規検討
コシノヤバネゴケ	カテゴリー変更	C	B	分布拡大、生息情報増加
ウキウキゴケ	カテゴリー変更	D	B	情報不足
トワダツボミゴケ	新規追加	D	－	生息情報減少、情報不足
マルバツボミゴケ	新規追加	D	－	個体数減少
コロンビアミズゼニゴケ	新規追加	ＬＰ	－	分布限定

・淡水藻類

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
マリモ（ヒメマリモ型、フジマリモ型を含む）	分類変更	A	A	マリモ（ヒメマリモを含む）から分類変更
オトメフラスコモ	新規追加	D	－	新規検討
ホソカワモズク	新規追加	D	－	新規検討
チャイロカワモズク	新規追加	D	－	新規検討
オオイシソウ	新規追加	D	－	新規検討

・地衣類

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
フクレセンシゴケ	削除	－	C	誤同定の可能性あり
クロイボゴケモドキ	削除	－	D	誤同定
ヒメジョウゴゴケ	削除	－	D	普通種

・菌類

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
アカハナビラタケ	新規追加	A	－	個体数減少、生息地消滅
タネサシヒメシロウラベニタケ	新規追加	A	－	個体数減少、生息環境悪化
ナガミノクロサラタケ	新規追加	B	－	生息地消滅
オオミノミミブサタケ	カテゴリー変更	B	C	生息環境悪化
イボセイヨウショウロ	新規追加	B	－	個体数減少、生息環境悪化
イマイオオボタンタケ	新規追加	B	－	個体数減少、生息環境悪化
ナナイロヌメリタケ	カテゴリー変更	B	D	個体数減少、生息環境悪化
ミヤマシメジ	カテゴリー変更	B	D	個体数減少、生息環境悪化
トガリフカアミガサタケ	カテゴリー変更	C	B	分布拡大
スナヤマチャワンタケ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ミミブサタケ	新規追加	C	－	生息情報減少
キツネノサカズキ	カテゴリー変更	C	B	生息情報増加
シワカラカサモドキ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
コササクレシロオニタケ	カテゴリー変更	C	B	分布拡大
アケボノタケ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
トガリワカクサタケ	新規追加	C	－	生息情報減少
ホンシメジ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
ヒメムラサキシメジ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
キノボリツエタケ	新規追加	C	－	生息情報減少
キヌオオフクロタケ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
バカマツタケ	カテゴリー変更	C	B	分布拡大
アカジコウ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
アカエノキンチャヤマイグチ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
キヌメリイグチ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ホウキタケ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少、生息環境悪化
ニクウスキコブタケ	新規追加	C	－	生息情報減少
アカダマキヌガサタケ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ツガノマンネンタケ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
ニオイカワキタケ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
シロキクラゲ	カテゴリー変更	C	D	生息情報減少
クロカワ	新規追加	D	－	新規検討
クビナガクチキムシタケ	新規追加	D	－	新規検討
トワダミドリクチキムシタケ	新規追加	D	－	新規検討
カブラテングタケ	新規追加	D	－	新規検討

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
カワリワカクサタケ	新規追加	D	－	新規検討
ナガエノヤグラタケ	新規追加	D	－	新規検討
ヌメリツバタケ	新規追加	D	－	新規検討
スギノタマバリタケ	新規追加	D	－	新規検討
アラゲカワキタケ	新規追加	D	－	新規検討
シモコシ	新規追加	D	－	新規検討
マツタケ	新規追加	D	－	新規検討
シロマツタケモドキ	新規追加	D	－	新規検討
マツタケモドキ	新規追加	D	－	新規検討
アシナガイグチ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
ホンショウロ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
アミハナイグチ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
アクイロウスタケ	新規追加	D	－	新規検討
ツヤナシマンネンタケ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
シロマイタケ	カテゴリー変更	D	B	情報不足
ダイダイヒメアミタケ	新規追加	D	－	新規検討
タマチョレイタケ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
アカハツモドキ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
ウスベニオシロイタケ	新規追加	D	－	新規検討
マツバハリタケ	新規追加	D	－	新規検討
シシタケ	新規追加	D	－	新規検討
ムカシオオミダレタケ	削除	－	C	分布拡大
クチキトサカタケ	削除	－	C	分布拡大
ヤチナラタケ	削除	－	D	分布拡大
ツチヒラタケ	削除	－	D	標本なし、生態不明
ヒメムキタケ	削除	－	D	種の実体不明
エツキヒメサカズキタケ	削除	－	D	標本なし、種の特定困難
ヒトクチタケ	削除	－	D	分布拡大

２）脊椎動物

〔哺乳類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
イノシシ	カテゴリー変更	D	ＥＸ	生息情報増加
ニホンジカ	カテゴリー変更	D	ＥＸ	生息情報増加
ミズラモグラ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
カワネズミ	カテゴリー変更	D	ＬＰ(津軽山地)	情報不足
オコジョ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
イイズナ	カテゴリー変更	D	ＬＰ(南部地方)	情報不足
ニホンモモンガ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
チチブコウモリ	新規追加	D	－	情報不足
ニホンアシカ	削除	－	ＥＸ	海域での調査不能
ヤマネ	削除	－	C	生息情報増加

〔鳥類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
トキ	新規追加	ＥＸ	－	新規検討
タンチョウ	新規追加	ＥＸ	－	新規検討
オジロワシ	カテゴリー変更	A	B	生息情報増加

〔爬虫類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
タカチホヘビ	カテゴリー変更	D	A	情報不足
ヒバカリ	カテゴリー変更	D	B	情報不足
シロマダラ	カテゴリー変更	D	B	情報不足
クサガメ	削除	－	D	生息情報不確実

〔両生類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ツチガエル	新規追加	C	－	生息環境悪化
トノサマガエル	新規追加	C	－	生息環境悪化
カジカガエル	削除	－	D	生息環境改善

〔汽水・淡水魚類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ニホンウナギ	新規追加	A	－	個体数減少、生息環境悪化
ニホンイトヨ	カテゴリー変更	A	B	生息環境悪化
スナヤツメ類	分類変更	B	B	スナヤツメ北方種から分類変更
キタノメダカ	分類変更	B	B	メダカ北日本集団から分類変更
ジュズカケハゼ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
エゾホトケドジョウ	新規追加	C	－	分布限定
ジュウサンウグイ	分類変更	D	D	マルタウグイから分類変更
キタドジョウ	新規追加	D	－	生息環境悪化
クルメサヨリ	新規追加	D	－	生息情報減少

３）無脊椎動物

〔昆虫類〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
カトリヤンマ	カテゴリー変更	ＥＸ	Ａ	生息情報なし
メガネサナエ	カテゴリー変更	ＥＸ	Ａ	生息情報なし
ヤマキチョウ	カテゴリー変更	ＥＸ	Ａ	生息情報なし
オオウラギンヒョウモン	カテゴリー変更	ＥＸ	Ａ	生息情報なし
マルコガタノゲンゴロウ	カテゴリー変更	Ａ	Ｃ	生息環境悪化、生息情報減少
コノシメトンボ	新規追加	Ｂ	－	個体数減少、生息情報減少
ホソハンミョウ	カテゴリー変更	Ｂ	Ｃ	生息環境悪化
サロベツナガケシゲンゴロウ	カテゴリー変更	Ｂ	Ｃ	生息環境悪化、生息情報減少
エゾヒラタヒメゲンゴロウ	新規追加	Ｂ	－	個体数減少、分布限定
オオシマゲンゴロウ	カテゴリー変更	Ｂ	Ｃ	生息環境悪化、生息情報減少
ゲンゴロウモドキ	カテゴリー変更	Ｂ	Ｃ	生息環境悪化、生息情報減少
ホソガムシ	新規追加	Ｂ	－	生息環境悪化
クロスジカメノコハムシ	カテゴリー変更	Ｂ	Ｄ	個体数減少、生息環境悪化
イカリアオカメノコハムシ	新規追加	Ｂ	－	生息環境悪化
ウマノオバチ	カテゴリー変更	Ｂ	Ａ	生息情報増加
フタイロオオメハシリバエ	新規追加	Ｂ	－	生息環境悪化
ルリハダホソクロバ	新規追加	Ｂ	－	分布限定、生息環境悪化
サラサヤンマ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｂ	個体数増加、分布拡大
ニトベツノゼミ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	個体数減少
オオマキバサシガメ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
セアカオサムシ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化、生息情報減少
ヒメクロオサムシ東北地方亜種	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	生息環境悪化
アカガネオサムシ本州亜種	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
ワタラセハンミョウモドキ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
イワキナガチビゴミムシ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	生息環境悪化
シラカミナガチビゴミムシ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	生息環境悪化
スナハラゴミムシ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
イグチケブカゴミムシ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
クマガイクロアオゴミムシ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	分布限定
エチゴトックリゴミムシ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
ヒゲブトコツブゲンゴロウ	カテゴリー変更	Ｃ	Ｄ	分布限定
ケシゲンゴロウ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化
コウベツブゲンゴロウ	新規追加	Ｃ	－	生息環境悪化

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ルイスツブゲンゴロウ	新規追加	C	－	生息環境悪化
キベリクロヒメゲンゴロウ	新規追加	C	－	生息環境悪化
シマゲンゴロウ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少、生息環境悪化
マルガタゲンゴロウ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
クロゲンゴロウ	新規追加	C	－	生息環境悪化
オオミズスマシ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ミズスマシ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ヒメミズスマシ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ガムシ	新規追加	C	－	生息環境悪化
オオクワガタ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
ミヤマダイコクコガネ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
ルイヨウマダラテントウ	新規追加	C	－	生息環境悪化、個体数減少
ホクチチビハナカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ヤマトキモンハナカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
イガブチヒゲハナカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
オオハナカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
コウヤホソハナカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
オニホソコバネカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少、生息環境悪化
ヒゲシロホソコバネカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ヨコヤマヒメカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ツシマアメイロカミキリ本土亜種	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
オダヒゲナガコバネカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ムモンベニカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ハセガワトラカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
トウホクトラカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ヒトオビチビカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
アカガネカミキリ本州亜種	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ヨコヤマヒゲナガカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
シロオビドイカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
トホシカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
ヤツボシカミキリ	カテゴリー変更	C	D	個体数減少
オオヨモギハムシ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
エゾアカヤマアリ	新規追加	C	－	生息環境悪化
モンスズメバチ	新規追加	C	－	生息環境悪化

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ヤホシホソマダラ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ミチノクスカシバ	新規追加	C	－	分布限定、生息環境悪化
ムナカタミズメイガ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ウラジロミドリシジミ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
ハヤシミドリシジミ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
オオミスジ	新規追加	C	－	個体数減少、生息環境悪化
チャホシホソバナミシャク	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
オナガミズアオ	新規追加	C	－	生息環境悪化
シロホソバ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ミカボコブガ	新規追加	C	－	生息環境悪化
カギモンハナオイアツバ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ミヤマキシタバ	新規追加	C	－	分布限定、生息環境悪化
ヒメシロシタバ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
マガリスジコヤガ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ウスジロケンモン	新規追加	C	－	生息環境悪化
キスジウスキヨトウ	新規追加	C	－	生息環境悪化
ウスミミモンキリガ	新規追加	C	－	生息環境悪化
オイワケクロヨトウ	カテゴリー変更	C	D	生息環境悪化
ミゾナシミズムシ	新規追加	D	－	生息環境悪化
シモキタメクラチビゴミムシ	カテゴリー変更	D	B	情報不足
オオトックリゴミムシ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ニセモンキマメゲンゴロウ	新規追加	D	－	新規検討
アカマダラハナムグリ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ハヤチネベニコメツキ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
ババアカコメツキ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
トワダアカコメツキ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
ツガルアカコメツキ	カテゴリー変更	D	C	情報不足
アカガネネクイハムシ	新規追加	D	－	生息環境悪化
キンイロネクイハムシ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ミヤマツヤセイボウ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ツノアカヤマアリ	新規追加	D	－	生息環境悪化
テラニシクサアリ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ミヤマアメイロケアリ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ガロアギングチ	新規追加	D	－	生息環境悪化
カエルキンバエ	新規追加	D	－	生息環境悪化

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
ハイイロボクトウ	新規追加	D	－	生息環境悪化
スキバホウジャク	新規追加	D	－	生息環境悪化
ヒメスズメ	新規追加	D	－	生息環境悪化
スゲドクガ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ヌマベウスキヨトウ	新規追加	D	－	生息環境悪化
ムツチャバネコメツキ	削除	－	C	生息情報不足
クロヤガ	削除	－	D	キタクロヤガとの識別困難
十和田市蔦のルイヨウマダラテントウ個体群	削除	－	ＬＰ（十和田市蔦）	地域ではなく全県の状況により判定（Ｃランク）

〔昆虫類以外の無脊椎動物〕

種　名	変 更 内 容	県ＲＤＢ（2020）	県ＲＤＢ（2010）	変 更 理 由
エゾマイマイ	新規追加	A	－	分布限定
コガタカワシンジュガイ	新規追加・分類変更	A	－	分布限定、カワシンジュガイから分類変更
ホウザワイソギンチャク	新規追加	B	－	分布限定
ツボミガイ	新規追加	B	－	分布限定
トクナガヤドリニナ	新規追加	B	－	生息情報減少
オカマメタニシ	新規追加	B	－	分布限定
ハマグリ	新規追加	B	－	個体数減少、分布限定
イワキザリガニミミズ	新規追加	B	－	分布限定
コメツキガニ	新規追加	B	－	分布限定
アシハラガニ	新規追加	B	－	分布限定
スジホシムシ	新規追加	C	－	新規検討
スジホシムシモドキ	新規追加	C	－	新規検討
ヌカエビ	新規追加	C	－	個体数減少
ヤマトオサガニ	カテゴリー変更	C	ＬＰ(平内町)	分布限定、生息環境悪化
ウミカニムシ	新規追加	C	－	分布限定
ミサキギボシムシ	新規追加	C	－	新規検討
キタクダヒゲガニ	新規追加	D	－	新規検討
ウチワイカリナマコ	新規追加	D	－	個体数減少、分布限定
イツマデガイ	削除	－	D	記録誤り
ブドウマイマイ	削除	－	D	エゾマイマイに含める

（6）青森県レッドデータブック（2010年改訂版）からの和名変更一覧

1）植物

〔蘚苔類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
ウキウキゴケ	ウキゴケ

〔淡水藻類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
マリモ（ヒメマリモ型、フジマリモ型を含む）	マリモ（ヒメマリモを含む）
イシカワモズク	ヒメカワモズク

〔菌類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
カバノアナタケ	カバアナタケ

2）脊椎動物

〔哺乳類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
オオカミ	ニホンオオカミ
カワウソ	ニホンカワウソ
ノレンコウモリ	ホンドノレンコウモリ
コテングコウモリ	ニホンコテングコウモリ
ムササビ	ニッコウムササビ
イノシシ	ニホンイノシシ
ニホンジカ	ホンシュウジカ
オコジョ	ホンドオコジョ
イイズナ	ニホンイイズナ
ニホンモモンガ	ホンドモモンガ
ニホンザル　［ＬＰ（下北半島）］	ホンドザル　［ＬＰ（下北半島）］
ニホンザル　［ＬＰ（津軽半島）］	ホンドザル　［ＬＰ（津軽半島）］
ツキノワグマ	ニホンツキノワグマ

〔汽水・淡水魚類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
ニホンイトヨ	イトヨ
スナヤツメ類	スナヤツメ北方種
キタノメダカ	メダカ北日本集団
ジュウサンウグイ	マルタウグイ
カマキリ	アユカケ

３）無脊椎動物

〔昆虫類〕

変更後（県ＲＤＢ2020）	変更前（県ＲＤＢ2010）
モリトンボ	キバネモリトンボ
ナミルリモンハナバチ	ルリモンハナバチ
マークオサムシ本州亜種	マークオサムシ
ヤマトルリジガバチ	ルリジガバチ
ベニモンマダラ道南亜種	ベニモンマダラ
ナミハンミョウ	ハンミョウ
ヒメクロオサムシ東北地方亜種	チョウカイヒメクロオサムシ
ヒメケシゲンゴロウ	ヒメケシゲンゴロウ北日本亜種
キベリマルヒサゴコメツキ本州亜種	キベリマルヒサゴコメツキ
シモヤマミヤマヒサゴコメツキ	シモヤマヒサゴコメツキ
チビヒサゴコメツキ本州亜種	チビヒサゴコメツキ
ツシマアメイロカミキリ本土亜種	サドチビアメイロカミキリ
ケマダラカミキリ本州亜種	ミチノクケマダラカミキリ
アカガネカミキリ本州亜種	ホンドアカガネカミキリ
エゾクロツヤミズギワコメツキ本州亜種	ツガルクロミズギワコメツキ
カタアカチビオオキノコ	カタアカチビオオキノコムシ
オオナギナタハバチ	トガシオオナギナタハバチ
イワタツツクモバチ	イワタツツベッコウ
フタモンクモバチ	フタモンベッコウ
ヤスマツコンボウハナバチ	ヤスマツフシダカコンボウハナバチ

３　索　　引

青森県レッドデータブック（2020年版）選定種一覧
（網掛けは「青森県レッドデータブック（2010年改訂版）」後の新規追加）

植物

アイゾメイグチ(C) ……164
アイナエ(A) ……54
アイヌタチツボスミレ(B) ……87
アオカワモズク(D) ……137
アオキノリ(D) ……148
アオゴケ(C) ……125
アオバスゲ(A) ……36
アオモリカギハイゴケ(B) ……122
アオモリマンテマ(B) ……89
アオモリミミナグサ(C) ……109
アカエノキンチャヤマイグチ(C) ……163
アカジコウ(C) ……163
アカダマキヌガサタケ(C) ……165
アカツメゴケ(D) ……147
アカハツモドキ(D) ……172
アカハナビラタケ(A) ……151
アカハナワラビ(A) ……23
アカミノルイヨウショウマ(D) ……115
アカモミタケ(D) ……172
アギナシ(B) ……67
アキノハハコグサ(A) ……62
アクイロウスタケ(D) ……171
アケボノタケ(C) ……160
アサギリソウ(B) ……97
アサザ(B) ……97
アシナガイグチ(D) ……170
アシボソアカバナ(A) ……47
アズマツメクサ(A) ……44
アズマレイジンソウ(B) ……79
アツモリソウ(A) ……30
アナマスミレ(B) ……87
アミハナイグチ(D) ……171
アラゲカワキタケ(D) ……169
アリアケスミレ(C) ……107
イイギリ(B) ……86
イイヌマムカゴ(A) ……33
イシカワモズク(D) ……137
イソスミレ(C) ……107
イチョウウキゴケ(B) ……123
イチョウシダ(B) ……66
イッポンスゲ(A) ……38
イトイバラモ(B) ……68
イトクズモ(B) ……69
イトトリゲモ(A) ……25
イトナルコスゲ(A) ……37
イトハコベ(A) ……50
イトモ(B) ……68
イヌタヌキモ(C) ……112
イヌニガクサ(A) ……59
イブリハナワラビ(A) ……22
イボセイヨウショウロ(B) ……154
イマイオオボタンタケ(B) ……155
イモタケ(D) ……167
イワカラマツ(B) ……81
イワタケ(B) ……143
イワヒバ(C) ……101
ウイットロキエラサリナ(LP) ……139
ウキウキゴケ(D) ……129
ウコンウツギ(B) ……99
ウシオスゲ(A) ……38
ウスベニオシロイタケ(D) ……172
ウスムラサキガサ(C) ……159
ウスユキソウ(B) ……98
ウチキウメノキゴケ(D) ……146
ウチョウラン(B) ……74
ウラゲキヌガサソウ(A) ……27
エイザンスミレ(A) ……46
エゾイヌナズナ(B) ……88
エゾオトギリ(C) ……108
エゾカモジグサ(A) ……40
エゾキケマン(A) ……41
エゾサワスゲ(C) ……104
エゾシモツケ(A) ……45
エゾトウヒレン(A) ……63
エゾナミキソウ(A) ……59
エゾノウワミズザクラ(A) ……44
エゾノツガザクラ(A) ……52
エゾノリュウキンカ(B) ……80
エゾハコベ(A) ……51
エゾハナシノブ(A) ……51
エゾヒョウタンボク(A) ……63
エゾホシクサ(B) ……76
エゾミクリ(B) ……75
エチゴトラノオ(B) ……93
エビネ(C) ……102
エンビセンノウ(A) ……50
オオイシソウ(D) ……138
オオイワブスマ(B) ……143
オオウマノアシガタ(C) ……104
オオウメガサソウ(C) ……110
オオウラヒダイワタケ(A) ……142
オオエゾデンダ(B) ……66
オオクグ(B) ……77
オオサクラソウ(B) ……90
オオサナダゴケ(D) ……129
オオサビイボゴケ(C) ……144
オオシバナ(C) ……102
オオズキンカブリ(C) ……157
オオタカネバラ(B) ……84
オオタヌキモ(A) ……60
オオツガタケ(D) ……168
オオトボシガラ(A) ……41
オオトリゲモ(D) ……114
オオニガナ(C) ……113

オオバタチツボスミレ(B) ……86
オオバヨモギ(C) ……113
オオヒモゴケ(C) ……126
オオマルバノホロシ(C) ……111
オオミズゴケ(B) ……121
オオミズトンボ(D) ……115
オオミノミミブサタケ(B) ……154
オオモミタケ(D) ……168
オオユリワサビ(C) ……109
オオレイジンソウ(B) ……79
オキナグサ(A) ……42
オクタマツリスゲ(A) ……35
オサバグサ(A) ……41
オソレヤマヤバネゴケ(D) ……129
オドタケ(C) ……161
オトメフラスコモ(D) ……136
オニオトコヨモギ(B) ……97
オニシオガマ(B) ……95
オニテングタケ(D) ……168
カイジンドウ(A) ……58
カエンタケ(C) ……158
カキツバタ(B) ……74
カサゴケ(C) ……126
カサゴケモドキ(C) ……126
ガシャモク(A) ……25
カタシャジクモ(D) ……136
ガッサンチドリ(B) ……73
カノコソウ(B) ……100
カバノアナタケ(B) ……156
カブラテングタケ(D) ……168
カラフトイチヤクソウ(A) ……53
カラフトダイコンソウ(B) ……84
カラフトホシクサ(A) ……34
カワキタケ(D) ……172
カワゴケ(B) ……121
カワツルモ(A) ……26
カワホリゴケ(D) ……148
カワモズク(D) ……137
カワリワカクサタケ(D) ……169
カンエンガヤツリ(EX) ……20
カンゾウタケ(D) ……168
カンバタケ(C) ……165
キキョウ(B) ……96
キクモ(A) ……56
キゴケ(D) ……147
キジノオシダ(A) ……23
キセワタ(B) ……94
キタノコギリソウ(C) ……112
キツネノサカズキ(C) ……158
キヌオオフクロタケ(C) ……162
キヌメリイグチ(C) ……164
キノボリツエタケ(C) ……161
キバナシャクナゲ(A) ……53
キバナノコマノツメ(A) ……46
キンセイラン(B) ……70
キンラン(B) ……71
クグスゲ(A) ……37
クゲヌマラン(B) ……71
クジュウツリスゲ(A) ……36
クシロチドリ(A) ……31
クシロワチガイソウ(A) ……49
クビナガクチキムシタケ(D) ……167
クマガイソウ(B) ……72
クモマニガナ(B) ……98
クリイロスゲ(A) ……35
クロカワ(D) ……167
クロカワゴケ(B) ……121
クロキツネタケ(D) ……168
クロツリバナ(B) ……85
クロビイタヤ(A) ……48
クロミノコジマエンレイソウ(A) ……27
クロムラサキハナビラタケ(B) ……154
クワガタソウ(A) ……57
ケゴンアカバナ(A) ……47
ケスジヤバネゴケ(D) ……129
ケナガシャジクモ(D) ……136
ケヨノミ(A) ……64
ゲンジスミレ(C) ……108
コアツモリソウ(B) ……72
コアニチドリ(B) ……70
コアマモ(B) ……68
コウヤクゴケ(C) ……145
コウライイヌワラビ(C) ……101
コオニタビラコ(D) ……116
コガネイチゴ(C) ……106
コガネギシギシ(A) ……49
コカモメヅル(A) ……55
コカンバタケ(A) ……152
コキツネノボタン(B) ……81
コゲチャヒロハアンズタケ(D) ……170
コササクレシロオニタケ(C) ……159
コシノヤバネゴケ(C) ……127
コバノヒルムシロ(B) ……69
コマチゴケ(B) ……123
コムチゴケ(B) ……124
コモチレンゲ(C) ……105
コロンビアミズゼニゴケ(LP) ……131
サカネラン(A) ……32
サクラソウ(A) ……52
ササエビモ(A) ……26
ササオカゴケ(B) ……122
ササバゴケ(C) ……127
ザラツキヒナガリヤス(A) ……40
ザリコミ(D) ……115
サルメンエビネ(A) ……28
サワラン(B) ……72
サンショウモ(B) ……65
シコタンキンポウゲ(A) ……42
シコタンソウ(B) ……82
シシタケ(D) ……173
シテンクモキリ(D) ……115
シナノウメノキゴケ(D) ……146
シナノタイゲキ(C) ……107
シバナ(C) ……102

シフネルゴケ(B) ……124
シマオバナゴケ(D) ……129
シモコシ(D) ……170
シャジクモ(D) ……136
ジョウロウスゲ(A) ……35
シラオイエンレイソウ(D) ……115
シラガミクワガタ(B) ……93
シロウマアサツキ(A) ……33
シロキクラゲ(C) ……166
シロキツネノサカズキ(C) ……158
シロシラガゴケ(C) ……125
シロタモギタケ(C) ……160
シロバナノヘビイチゴ(B) ……83
シロマイタケ(D) ……171
シロマツタケモドキ(D) ……170
シワイワタケ(B) ……143
シワカラカサモドキ(C) ……159
スギナモ(A) ……56
スギノタマバリタケ(D) ……169
スギラン(A) ……22
スゲアマモ(D) ……114
スジヌマハリイ(A) ……40
スズサイコ(B) ……92
スズメウリ(A) ……46
スナヤマチャワンタケ(C) ……157
セキショウイ(C) ……103
センウズモドキ(B) ……79
ダイダイヌメリガサ(C) ……160
ダイダイヒメアミタケ(D) ……171
タカサゴソウ(B) ……98
タカサブロウ(D) ……116
タカネクロスゲ(B) ……78
タカネグンバイ(A) ……48
タカネトンボ(A) ……32
タコノアシ(C) ……105
タチアマモ(D) ……114
タチイチゴツナギ(A) ……41
タチガシワ(C) ……111
タチガヤツリ(EX) ……20
タチハコベ(C) ……109
タチフウロ(B) ……87
タチモ(C) ……106
タヌキモ(B) ……95
タネサシヒメシロウラベニタケ(A) ……151
タマチョレイタケ(D) ……172
タマミクリ(B) ……75
タルマイスゲ(A) ……34
チシマツガザクラ(A) ……52
チシマツメクサ(A) ……50
チシマヒカゲノカズラ(A) ……22
チシマフウロ(C) ……108
チシママツバイ(A) ……39
チチッパベンケイソウ(A) ……43
チヂレウラミゴケ(C) ……145
チトセバイカモ(A) ……42
チャイロカワモズク(D) ……137
チャザクロゴケ(D) ……146
チャセンシダ(A) ……23
チャボイ(A) ……39
チョウジソウ(B) ……92
チョレイマイタケ(B) ……153
ツガノマンネンタケ(C) ……166
ツガルミセバヤ(B) ……83
ツツイトモ(A) ……26
ツヅレカラタチゴケモドキ(D) ……146
ツノシメジ(C) ……162
ツバキキンカクチャワンタケ(C) ……157
ツバヒラタケ(C) ……162
ツヤナシマンネンタケ(D) ……171
ツルカノコソウ(B) ……100
ツルカメバソウ(A) ……55
ツルキジムシロ(C) ……106
テイネニガクサ(C) ……111
デワノタツナミソウ(B) ……95
テンガイカブリ(D) ……167
デンジソウ(B) ……65
トウゴクヘラオモダカ(EX) ……20
トガクシソウ(B) ……78
トガリカイガラゴケ(B) ……122
トガリフカアミガサタケ(C) ……157
トガリワカクサタケ(C) ……160
トキソウ(B) ……74
ドクヤマドリ(B) ……156
トゲホコリタケ(D) ……167
トケンラン(A) ……29
トチカガミ(A) ……24
トワダツボミゴケ(D) ……130
トワダミドリクチキムシタケ(D) ……167
ナガエノヤグラタケ(D) ……169
ナガエミクリ(C) ……103
ナガスジハリゴケ(C) ……128
ナガバキタアザミ(A) ……62
ナガバツガザクラ(B) ……91
ナガバツメクサ(C) ……110
ナガミノクロサラタケ(B) ……153
ナツエビネ(B) ……70
ナナイロヌメリタケ(B) ……155
ナンブソウ(B) ……78
ニオイカワキタケ(C) ……166
ニカワウロコタケ(C) ……159
ニクウスキコブタケ(C) ……165
ニセカラタチゴケ(D) ……146
ニセシジミタケ(D) ……169
ニセチャハシゴケ(D) ……147
ニセヤハズゴケ(B) ……123
ニンギョウタケ(C) ……166
ヌイオスゲ(B) ……77
ヌカボタデ(B) ……89
ヌメリツバタケ(D) ……169
ネジリカワツルモ(D) ……114
ネズミサシ(B) ……66
ネムロコウホネ(A) ……24
ネムロスゲ(B) ……77
ネムロホシクサ(B) ……76

ノウルシ(C) ……107
ノカラマツ(B) ……82
ノカンゾウ(C) ……103
ノダイオウ(C) ……109
バアソブ(A) ……61
バイカツツジ(A) ……53
ハイハマボッス(C) ……110
バカマツタケ(C) ……163
ハクウンラン(C) ……102
ハクサンサイコ(C) ……113
ハクサンハタザオ(C) ……108
ハコダテキリンソウ(C) ……105
ハゴロモニワトコ(A) ……63
バシクルモン(A) ……54
ハダシシャジクモ(D) ……136
ハタベスゲ(A) ……36
ハチノヘトウヒレン(B) ……99
ハッコウダゴケ(A) ……120
ハナビゼリ(B) ……100
ハナヒョウタンボク(EX) ……21
ハマウツボ(C) ……112
ハマカキラン(B) ……73
ハマゴウ(C) ……112
ハンゲショウ(B) ……66
ハンショウヅル(B) ……81
バンダイキノリ(C) ……144
ヒオウギ(A) ……33
ヒゲヌマハリイ(A) ……40
ヒシモドキ(A) ……57
ヒナザクラ(B) ……91
ヒナノウスツボ(A) ……57
ヒメアカバナ(A) ……48
ヒメウシオスゲ(A) ……39
ヒメカイウ(B) ……67
ヒメガンクビソウ(A) ……62
ヒメキンポウゲ(C) ……104
ヒメタヌキモ(B) ……96
ヒメヌメリイグチ(C) ……164
ヒメハッカ(A) ……59
ヒメヒゴタイ(EX) ……21
ヒメフラスコモ(D) ……136
ヒメホテイラン(A) ……29
ヒメマリモ(A) ……135
ヒメミクリ(B) ……76
ヒメミズトンボ(A) ……31
ヒメミズニラ(C) ……101
ヒメムラサキシメジ(C) ……161
ヒメユリ(A) ……27
ヒメワタスゲ(A) ……40
ヒヨドリジョウゴ(B) ……93
ビロードトラノオ(C) ……111
ヒロスジツリバリゴケ(C) ……125
ヒロハツリシュスラン(A) ……30
ヒロハトリゲモ(D) ……114
ヒロハノカワラサイコ(C) ……106
ヒンジモ(A) ……24
フォーリザクロゴケ(D) ……146
フガクスズムシソウ(A) ……31
フクジュソウ(B) ……80
フサクギタケ(C) ……164
フサタヌキモ(A) ……60
フサハリタケ(B) ……153
フジカンゾウ(B) ……83
フジチドリ(A) ……28
フジマリモ(A) ……135
フタバムグラ(B) ……91
フナバラソウ(C) ……110
ベニシュスラン(A) ……30
ベニバナヒョウタンボク(A) ……64
ベニバナヤマシャクヤク(A) ……43
ヘリトリツメゴケ(C) ……145
ホウキタケ(C) ……165
ホザキシモツケ(A) ……45
ホザキナナカマド(B) ……85
ホシアンズタケ(C) ……162
ホソカワモズク(D) ……137
ホソバアカバナ(B) ……88
ホソバオゼヌマスゲ(A) ……37
ホソバゴケ(C) ……126
ホソバツヤゴケ(C) ……128
ホソバツルリンドウ(B) ……92
ホソバノアマナ(B) ……70
ホソバノシバナ(A) ……25
ホソベリミズゴケ(D) ……129
ホロマンノコギリソウ(C) ……112
ホロムイイチゴ(A) ……45
ホロムイクグ(B) ……77
ホンシメジ(C) ……161
ホンショウロ(D) ……171
マキバエイランタイ(C) ……144
マシケスゲモドキ(A) ……38
マッカリタケナガゴケ(B) ……122
マツタケ(D) ……170
マツタケモドキ(D) ……170
マツバニンジン(A) ……47
マツバハリタケ(D) ……172
マツムシソウ(A) ……64
マユハケゴケ(C) ……125
マリモ(A) ……135
マルバオモダカ(B) ……67
マルバツボミゴケ(D) ……130
マルバノサワトウガラシ(A) ……56
マルミスブタ(D) ……114
マルミノウルシ(B) ……85
ミクリ(C) ……103
ミクリゼキショウ(A) ……34
ミズアオイ(D) ……115
ミズキカシグサ(D) ……116
ミスズラン(A) ……28
ミズトンボ(B) ……73
ミズニラ(C) ……101
ミチノクコザクラ(B) ……89
ミチノクサイシン(C) ……102
ミチノクナシ(B) ……84

ミチノクフクジュソウ(B) ……80
ミチノクホタルイ(C) ……104
ミチノクヤマタバコ(C) ……113
ミドリアカザ(A) ……51
ミミカキグサ(A) ……60
ミミブサタケ(C) ……158
ミヤマウツボグサ(B) ……94
ミヤマクグラ(C) ……144
ミヤマシメジ(B) ……155
ミヤマダイコンソウ(A) ……44
ミヤマツチトリモチ(B) ……88
ミヤマミズゼニゴケ(C) ……128
ムカシヨモギ(A) ……62
ムクムクキゴケモドキ(D) ……147
ムシャリンドウ(A) ……58
ムツトウヒレン(B) ……98
ムラサキ(A) ……55
ムラサキセンブリ(A) ……54
ムラサキミミカキグサ(B) ……96
ムラサキヤマドリタケ(C) ……163
モイワシャジン(A) ……61
モイワラン(A) ……29
モクズゴケ(D) ……147
モミシノブゴケ(C) ……127
ヤシャビシャク(C) ……105
ヤスデゴケモドキ(C) ……145
ヤチコタヌキモ(A) ……61
ヤチヒロヒダタケ(A) ……151
ヤチラン(A) ……32
ヤナギタウコギ(EX) ……21
ヤナギヌカボ(A) ……49
ヤマアイ(B) ……86
ヤマジソ(B) ……94
ヤマシャクヤク(B) ……82
ヤマトカワホリゴケ(D) ……148
ヤマトキゴケ(D) ……147
ヤマトミクリ(B) ……75
ヤマドリタケ(B) ……156
ヤマホロシ(D) ……116
ヤリノホゴケ(C) ……127
ユウシュンラン(B) ……71
ユキワリコザクラ(B) ……90
ユキワリソウ(B) ……90
ユタカカワモズク(D) ……137
リシリシノブ(B) ……65
リュウノヒゲモ(B) ……69
リンネソウ(B) ……99
ルリハッカ(A) ……58
レブンイワレンゲ(A) ……43

脊椎動物

アオシギ(B) ……204
アオバズク(B) ……210
アオバト(C) ……215
アカアシシギ(B) ……205
アカオビシマハゼ(D) ……244
アカショウビン(B) ……210
アカハライモリ(C) ……231
アカモズ(A) ……199
アブラハヤ(LP) ……246
アユカケ(D) ……244
アリスイ(C) ……219
イイズナ(D) ……185
イカルチドリ(B) ……203
イスカ(D) ……224
イトウ(EX) ……236
イヌワシ(A) ……198
イノシシ(D) ……184
ウグイ(LP) ……247
ウズラ(A) ……194
ウズラシギ(C) ……218
エゾウグイ(C) ……242
エゾホトケドジョウ(C) ……242
オオアカゲラ(C) ……220
オオカミ(EX) ……177
オオコノハズク(B) ……209
オオジシギ(B) ……204
オオジュリン(B) ……212
オオセッカ(A) ……200
オオタカ(B) ……208
オオヒシクイ(C) ……213
オオヨシゴイ(A) ……195
オオワシ(B) ……207
オカヨシガモ(C) ……218
オグロシギ(C) ……216
オコジョ(D) ……185
オジロトウネン(C) ……217
オジロワシ(A) ……197
オバシギ(C) ……217
カグヤコウモリ(B) ……180
カジカ小卵型(B) ……241
カジカ大卵型(C) ……243
カジカ中卵型(B) ……241
カマキリ(D) ……244
カヤクグリ(C) ……222
カワウソ(EX) ……177
カワネズミ(D) ……184
カワヤツメ(C) ……242
カンキョウカジカ(C) ……243
カンムリカイツブリ(C) ……215
キタドジョウ(D) ……244
キタノメダカ(B) ……240
キバシリ(C) ……221
ギバチ(A) ……238
キリアイ(B) ……206
キンブナ(D) ……244
クイナ(B) ……202
クマゲラ(A) ……199
クマタカ(A) ……198
クルメサヨリ(D) ……245
クロオオアブラコウモリ(D) ……185
クロサギ(B) ……201
クロサンショウウオ(C) ……231
クロジ(C) ……223

クロホオヒゲコウモリ(A) ……178
クロツグミ(C) ……221
ケアシノスリ(B) ……209
ケイマフリ(A) ……197
ケリ(B) ……202
コアジサシ(A) ……197
コオバシギ(C) ……217
コオリガモ(C) ……214
コクガン(C) ……215
コシジロウミツバメ(A) ……194
コジュリン(B) ……212
コチョウゲンボウ(C) ……220
コテングコウモリ(C) ……183
コノハズク(A) ……198
コマドリ(C) ……222
コヤマコウモリ(A) ……179
サクラマス(LP) ……246
サシバ(B) ……209
サルハマシギ(B) ……205
サンカノゴイ(A) ……194
サンコウチョウ(B) ……211
サンショウクイ(B) ……211
シナイモツゴ(A) ……237
シノリガモ(B) ……201
シマアオジ(D) ……224
シマアジ(C) ……214
シマクイナ(A) ……195
ジュウイチ(C) ……216
ジュウサンウグイ(D) ……244
ジュズカケハゼ(C) ……243
シロウオ(C) ……242
シロマダラ(D) ……227
スギノコ(LP) ……246
スナヤツメ類(B) ……240
セイタカシギ(B) ……203
セグロセキレイ(C) ……222
セッカ(D) ……224
ソリハシシギ(C) ……217
ダイシャクシギ(B) ……204
タカチホヘビ(D) ……227
タゲリ(C) ……216
タナゴ(A) ……237
タンチョウ(EX) ……193
チゴハヤブサ(C) ……220
チゴモズ(A) ……199
チチブ(D) ……244
チチブコウモリ(D) ……186
チュウヒ(B) ……207
チョウゲンボウ(C) ……220
ツキノワグマ(LP) ……187
ツチガエル(C) ……232
ツバメチドリ(B) ……206
ツミ(B) ……208
テングコウモリ(B) ……182
トウホクサンショウウオ(C) ……231
トキ(EX) ……193
トノサマガエル(C) ……232
トミヨ属淡水型(B) ……241
トモエガモ(C) ……214
トラフズク(C) ……219
ニシン(LP) ……246
ニホンイトヨ(A) ……239
ニホンウサギコウモリ(B) ……181
ニホンウナギ(A) ……238
ニホンザル下北半島(LP) ……187
ニホンザル津軽半島(LP) ……187
ニホンジカ(D) ……184
ニホンモモンガ(D) ……185
ノジコ(C) ……223
ノレンコウモリ(A) ……178
ハイイロチュウヒ(B) ……207
ハイタカ(B) ……208
ハシビロガモ(C) ……214
ハチクマ(C) ……218
ハナカジカ(A) ……238
ハヤブサ(B) ……211
バン(C) ……216
ヒクイナ(A) ……196
ヒシクイ(C) ……213
ヒナコウモリ(B) ……181
ヒバカリ(D) ……227
ヒバリシギ(C) ……218
ヒメウ(D) ……224
ヒメクイナ(A) ……196
ヒメヒナコウモリ(D) ……186
ヒメホオヒゲコウモリ(B) ……180
ヒモハゼ(C) ……243
ビロードキンクロ(C) ……222
フクロウ(C) ……219
フジホオヒゲコウモリ(B) ……180
ブッポウソウ(B) ……210
ヘラシギ(A) ……196
ホウロクシギ(B) ……205
ホシガラス(C) ……221
マガン(C) ……215
マミジロ(C) ……221
ミサゴ(B) ……206
ミズラモグラ(D) ……184
ミゾゴイ(A) ……195
ムササビ(C) ……183
モリアブラコウモリ(A) ……178
ヤマコウモリ(B) ……180
ヤマシギ(B) ……203
ヤマセミ(C) ……219
ヤマドリ(C) ……213
ヤリタナゴ(A) ……237
ユビナガコウモリ(B) ……181
ヨシガモ(C) ……213
ヨシゴイ(B) ……201
ヨタカ(B) ……202

無脊椎動物

アオバセセリ(C) ……307
アオハダトンボ(A) ……255

アオモリザリガニミミズ(B) ……359
アカガネオサムシ本州亜種(C) ……284
アカガネカミキリ本州亜種(C) ……299
アカガネネクイハムシ(D) ……322
アカマダラハナムグリ(D) ……320
アギトギングチ(D) ……324
アシハラガニ(B) ……360
アマギシャチホコ(D) ……330
アユミコケムシ(D) ……368
アリアケモドキ(D) ……367
アルプスギンウワバ(D) ……331
イガブチヒゲハナカミキリ(C) ……295
イカリアオカメノコハムシ(B) ……269
イグチケブカゴミムシ(C) ……286
イソコモリグモ(B) ……361
イブキスズメ(D) ……329
イワキザリガニミミズ(B) ……359
イワキナガチビゴミムシ(C) ……284
イワキメクラチビゴミムシ(B) ……266
イワタツツクモバチ(D) ……323
ウゴウンモンツマキリアツバ(D) ……331
ウスキモンヨトウ(D) ……334
ウスクモヨトウ(D) ……333
ウスジロケンモン(C) ……314
ウスハイイロケンモン(D) ……332
ウスバカマキリ(B) ……264
ウスバセンブリ(D) ……319
ウスミミモンキリガ(C) ……315
ウチワイカリナマコ(D) ……368
ウチワヤンマ(C) ……277
ウマノオバチ(B) ……270
ウミカニムシ(C) ……365
ウラギンスジヒョウモン(C) ……310
ウラジロミドリシジミ(C) ……308
ウラナミアカシジミ(C) ……308
エサキウミトビムシ(D) ……317
エサキナガレカタビロアメンボ(C) ……280
エゾアカヤマアリ(C) ……303
エゾアリマキバチ(D) ……325
エゾエンマコオロギ(D) ……317
エゾクロツヤミズギワコメツキ本州亜種(C) ……294
エゾゲンゴロウモドキ(C) ……289
エゾコガムシ(C) ……291
エゾコギセル(C) ……362
エゾスジヨトウ(D) ……334
エゾドブシジミ(D) ……367
エゾヒラタヒメゲンゴロウ(B) ……268
エゾマイマイ(A) ……355
エゾマメタニシ(D) ……366
エゾミズゴマツボ(D) ……366
エゾヤエナミシャク(C) ……312
エチゴトックリゴミムシ(C) ……286
エチゼンヒメハナバチ(C) ……305
エビガラトビムシ(D) ……317
オイワケクロヨトウ(C) ……316
オオウラギンヒョウモン(EX) ……254
オオキトンボ(B) ……263
オオクワガタ(C) ……291
オオゴキブリ(C) ……279
オオゴマシジミ(B) ……274
オオシオカラトンボ(C) ……278
オオシマゲンゴロウ(B) ……268
オオシラホシヤガ(D) ……334
オオセイボウ(D) ……322
オオセスジイトトンボ(A) ……256
オオチャイロハナムグリ(C) ……292
オオチャバネセセリ(C) ……307
オオチャバネヨトウ(C) ……315
オオトックリゴミムシ(D) ……320
オオナガザトウムシ(D) ……368
オオナギナタハバチ(D) ……322
オオハナカミキリ(C) ……296
オオハムシドロバチ(D) ……323
オオヒョウタンゴミムシ(D) ……319
オオマキバサシガメ(C) ……281
オオミスジ(C) ……310
オオミズスマシ(C) ……290
オオムラサキ(C) ……311
オオモリケンモン(D) ……331
オオヨモギハムシ(C) ……301
オオルリシジミ(EX) ……253
オオルリハムシ(C) ……301
オオワニメクラチビゴミムシ(C) ……285
オカマメタニシ(B) ……358
オカモトキマダラハナバチ(D) ……326
オキナワシリアゲコバチ(D) ……322
オソレヤマミズギワゴミムシ(C) ……285
オダヒゲナガコバネカミキリ(C) ……297
オナガアシブトコバチ(C) ……302
オナガサナエ(C) ……277
オナガミズアオ(C) ……312
オニホソコバネカミキリ(C) ……296
カエルキンバエ(D) ……327
カオジロトンボ(C) ……278
カギモンハナオイアツバ(C) ……313
カグヤキマダラハナバチ(D) ……326
カサイヌマアツバ(D) ……331
カシワアカシジミ(B) ……274
カタアカチビオオキノコ(D) ……321
カトリヤンマ(EX) ……252
カバイロシジミ(B) ……274
カバシャク(D) ……329
ガマヨトウ(C) ……315
ガムシ(C) ……290
カヤコオロギ(D) ……318
カラカネイトトンボ(A) ……255
ガロアギングチ(D) ……324
ガロアムシ(D) ……318
カワシンジュガイ(C) ……363
カワネジガイ(D) ……367
カワラバッタ(D) ……318
カワラハンミョウ(B) ……266
キアシネクイハムシ(C) ……301
キイトトンボ(B) ……262

キイロカメノコハムシ(C) ……301
キジマソトグロナミシャク(D) ……328
キスケギングチ(D) ……324
キスジウスキヨトウ(C) ……315
キタアカシジミ(B) ……274
キタオオコブガ(D) ……330
キタクダヒゲガニ(D) ……368
キタシロウズムシ(C) ……362
キタヒメアメンボ(C) ……281
キタホウネンエビ(A) ……356
キバネツノトンボ(B) ……265
キバネモリトンボ(A) ……257
ギフウスキナミシャク(D) ……328
キベリクロヒメゲンゴロウ(C) ……288
キベリマルヒサゴコメツキ本州亜種(C) ……292
キボシアオイボトビムシ(D) ……317
キユビギングチ(D) ……324
ギンイチモンジセセリ(B) ……273
キンイロネクイハムシ(D) ……322
ギンモンセダカモクメ(D) ……332
クズハキリバチ(D) ……326
クビキレガイモドキ(B) ……357
クビグロケンモン(B) ……275
クマガイクロアオゴミムシ(C) ……286
クロゲンゴロウ(C) ……289
クロシジミ(A) ……260
クロスジカメノコハムシ(B) ……269
クロフカバシャク(C) ……311
ケシゲンゴロウ(C) ……287
ケマダラカミキリ本州亜種(C) ……299
ゲンゴロウ(C) ……289
ゲンゴロウモドキ(B) ……268
ゲンジボタル(C) ……294
コウチスズメ(D) ……329
コウノスジガバチモドキ(D) ……325
コウベツブゲンゴロウ(C) ……288
コウヤホソハナカミキリ(C) ……296
コオイムシ(C) ……280
コガタカワシンジュガイ(A) ……355
コシジロギングチ(D) ……325
コシタカヒメモノアラガイ(D) ……366
コシダカマルトビムシ(D) ……317
コシボソヤンマ(B) ……262
コノシメトンボ(B) ……263
コバネアオイトトンボ(A) ……255
コハンミョウ(C) ……283
ゴマシジミ(C) ……309
ゴミアシナガサシガメ(C) ……282
コメツキガニ(B) ……360
コヤマトンボ(C) ……277
ササキリギングチ(C) ……304
ササミケマイマイ(LP) ……369
サラサヤンマ(C) ……276
サロベツナガケシゲンゴロウ(B) ……267
サワガニ(C) ……364
シマゲンゴロウ(C) ……288
シモキタシブキツボ(LP) ……369
シモキタメクラチビゴミムシ(D) ……320
シモヤマギングチ(C) ……304
シモヤマジガバチモドキ(D) ……325
シモヤマミヤマヒサゴコメツキ(C) ……293
ショウジョウトンボ(C) ……278
ショウリョウバッタモドキ(D) ……318
シラカミナガチビゴミムシ(C) ……285
シラカミメクラチビゴミムシ(C) ……285
シラナミナミシャク(D) ……328
シロアシクサレダマバチ(C) ……305
シロオビドイカミキリ(C) ……300
シロオビヨトウ(D) ……334
シロスジフデアシハナバチ(D) ……326
シロヘリツチカメムシ(D) ……319
シロホソバ(C) ……313
シロマダラカバナミシャク(C) ……312
シロミミチビヨトウ(D) ……333
スキバホウジャク(D) ……329
スゲドクガ(D) ……330
スジキイロカメノコハムシ(C) ……302
スジグロチャバネセセリ(C) ……307
スジホシムシ(C) ……363
スジホシムシモドキ(C) ……363
スジボソヤマキチョウ(B) ……273
スナハラゴミムシ(C) ……286
セアカオサムシ(C) ……283
セグロバッタ(D) ……318
セブトモクメヨトウ(D) ……333
ソトシロスジミズメイガ(C) ……306
タイコウチ(B) ……264
ダイコクコガネ(C) ……291
ダイセツヤガ(C) ……316
タイワンナガマキバサシガメ(B) ……264
タカホコシラトリ(A) ……356
タガメ(A) ……258
タテスジケンモン(D) ……332
チビヒサゴコメツキ本州亜種(C) ……293
チャホシホソバナミシャク(C) ……312
チャマダラセセリ(A) ……260
ツガルアカコメツキ(D) ……321
ツガルザリガニミミズ(A) ……356
ツガルホソシデムシ(C) ……291
ツシマアメイロカミキリ本土亜種(C) ……297
ツノアカヤマアリ(D) ……323
ツボミガイ(B) ……357
ツマグロマキバサシガメ(C) ……282
ツマジロウラジャノメ(A) ……261
テラニシクサアリ(D) ……323
テングチョウ(C) ……309
トウホクコガタウズムシ(C) ……362
トウホクスベザトウムシ(LP) ……370
トウホクトラカミキリ(C) ……298
トクナガヤドリニナ(B) ……358
トゲヒシバッタ(D) ……318
トビスジトガリナミシャク(D) ……329
トホシカミキリ(C) ……300
トラフトンボ(EX) ……252

トワダアカコメツキ(D) ……321
トワダオオカ(C) ……305
ナガケシゲンゴロウ(C) ……287
ナガトガリバ(D) ……328
ナガナタネガイ(D) ……367
ナタネキバサナギガイ(D) ……367
ナミハンミョウ(C) ……282
ナミルリモンハナバチ(A) ……259
ナンブマイマイ(LP) ……369
ニセハイイロマルハナバチ(D) ……326
ニセモンキマメゲンゴロウ(D) ……320
ニッポンハナダカバチ(C) ……303
ニトベギングチ(C) ……304
ニトベツノゼミ(C) ……279
ニホンザリガニ(B) ……360
ニホンミズシタダミ(D) ……366
ヌカエビ(C) ……364
ヌマベウスキヨトウ(D) ……333
ネジロシマケンモン(D) ……332
ノシメコヤガ(A) ……261
ハイイロヒゲナガハナバチ(D) ……327
ハイイロボクトウ(D) ……327
ハイイロヨトウ(D) ……334
ハクトウアワフキバチ(D) ……324
ハグロトンボ(C) ……276
ハコダテヤマキサゴ(C) ……362
ハスオビアツバ(D) ……331
ハセガワトラカミキリ(C) ……298
ハッチョウトンボ(A) ……258
ハネビロエゾトンボ(A) ……257
ババアカコメツキ(D) ……321
ババアメンボ(C) ……280
ババヒメテントウ(D) ……321
ハマグリ(B) ……358
ハマセダカモクメ(D) ……332
ハマベナガカメムシ(D) ……319
ハヤシミドリシジミ(C) ……308
ハヤチネベニコメツキ(D) ……320
ハラビロトンボ(C) ……277
ヒカゲチョウ(C) ……311
ヒゲシロホソコバネカミキリ(C) ……296
ヒゲブトコツブゲンゴロウ(C) ……287
ヒゲブトハナカミキリ(C) ……295
ヒダリマキモノアラガイ(D) ……366
ヒトオビチビカミキリ(C) ……298
ヒトハリザトウムシ(D) ……368
ヒメアカネ(C) ……278
ヒメウラベニエダシャク(D) ……328
ヒメキテンシロツトガ(D) ……327
ヒメギフチョウ(B) ……273
ヒメクロオサムシ東北地方亜種(C) ……283
ヒメケシゲンゴロウ(C) ……287
ヒメサナエ(A) ……256
ヒメシジミ(C) ……309
ヒメシロシタバ(C) ……314
ヒメシロチョウ(C) ……308
ヒメシロテンアオヨトウ(D) ……333
ヒメスズメ(D) ……330
ヒメハンミョウ海浜型(B) ……267
ヒメビロウドカミキリ(C) ……299
ヒメミズギワカメムシ(C) ……281
ヒメミズスマシ(C) ……290
ヒョウモンチョウ(C) ……310
フシキキシタバ(D) ……331
フタイロオオメハシリバエ(B) ……271
フタコブザトウムシ(D) ……368
フタモンクモバチ(D) ……323
フチグロトゲエダシャク(C) ……311
フトクチヒゲヒラタゴミムシ(D) ……320
ベニカメノコハムシ(C) ……302
ベニモンマダラ道南亜種(B) ……272
ヘリスジシャチホコ(D) ……330
ヘリボシキノコヨトウ(D) ……332
ホウザワイソギンチャク(B) ……357
ホクチチビハナカミキリ(C) ……295
ホシチャバネセセリ(A) ……260
ホシミスジ(C) ……310
ホソガムシ(B) ……269
ホソスジハイイロナミシャク(D) ……329
ホソツヤヒゲナガコバネカミキリ(C) ……297
ホソバウスキヨトウ(D) ……334
ホソハンミョウ(B) ……267
ホンサナエ(A) ……257
マークオサムシ本州亜種(B) ……265
マイコアカネ(B) ……263
マエダテツチスガリ(D) ……325
マガリスジコヤガ(C) ……314
マルガタゲンゴロウ(C) ……289
マルコガタノゲンゴロウ(A) ……259
マンレイカギバ(D) ……327
ミカドジガバチ(D) ……324
ミカボコブガ(C) ……313
ミサキギボシムシ(C) ……365
ミズグモ(B) ……361
ミズコハクガイ(D) ……367
ミスジキリガ(C) ……316
ミズシタダミ(D) ……366
ミスジビロードスズメ(D) ……330
ミズスマシ(C) ……290
ミズムシ(C) ……280
ミゾナシミズムシ(D) ……319
ミチノクシモフリコメツキ(C) ……293
ミチノクスカシバ(C) ……306
ミチノクマイマイ(C) ……363
ミツメナガチビゴミムシ(D) ……319
ミツモンケンモン(A) ……261
ミツワマルトビムシ(D) ……317
ミヤマアメイロケアリ(D) ……323
ミヤマカラスシジミ(C) ……309
ミヤマキシタバ(C) ……314
ミヤマサナエ(B) ……262
ミヤマダイコクコガネ(C) ……292
ミヤマチャバネセセリ(C) ……307
ミヤマツヤセイボウ(D) ……322

ムツアカネ(EX) ……253
ムナカタミズメイガ(C) ……306
ムナグロチャイロテントウ(D) ……321
ムモンベニカミキリ(C) ……298
メガネサナエ(EX) ……252
モートンイトトンボ(C) ……276
モリオカツトガ(D) ……327
モリトンボ(A) ……257
モンキカスミカメ(C) ……281
モンスズメバチ(C) ……303
ヤスマツコンボウハナバチ(D) ……326
ヤスマツトビナナフシ(C) ……279
ヤセオオヒラタカメムシ(C) ……282
ヤツボシカミキリ(C) ……300
ヤブヤンマ(A) ……256
ヤホシホソマダラ(C) ……306
ヤマキチョウ(EX) ……253
ヤマトオサガニ(C) ……364
ヤマトコトガタバチ(D) ……325
ヤマトキモンハナカミキリ(C) ……295
ヤマトルリジガバチ(B) ……271
ヨコスジヨトウ(D) ……333
ヨコヤマヒゲナガカミキリ(C) ……300
ヨコヤマヒメカミキリ(C) ……297
ヨスジカバイロアツバ(C) ……313
ヨツモンマエジロアオシャク(D) ……328
ルイスツブゲンゴロウ(C) ……288
ルイヨウマダラテントウ(C) ……294
ルリイトトンボ(C) ……276
ルリハダホソクロバ(B) ……272
ワタラセハンミョウモドキ(C) ……284

あ　と　が　き

本書の作成にあたっては、青森県レッドデータブック改訂検討会の委員及び執筆協力者のほか、多数の方々の御協力がありました。ここに御協力いただいた方々のお名前を掲げて感謝の意を表します。

飛鳥　和弘	五十嵐正俊	市川　裕二	一戸　清志	江口　一雄
大瀬　将司	大村　嘉人	小原　良孝	小山　信之	亀田　　満
木村　直哉	工藤　誠也	工藤　大祐	小関　真弓	牛腸奈緒子
笹　　孝	澤田　　満	鈴木まほろ	高橋　克成	田埜　　正
土屋　　慧	成田　一哉	根市　益三	古木　達郎	松尾　芳樹
松原　一男	三上　隆司	三上　春文	宮　　彰男	山口　典昭
山崎　竹春	山田　兼博	幸田　洋平	湯口　竹幸	横沢　利昭
渡邊　仁咲				

（五十音順、敬称略）

本書は、平成22年に発行した「青森県の希少な野生生物―青森県レッドデータブック（2010年改訂版）―」の掲載内容について、選定種の見直しや絶滅の危険度を示すカテゴリーの再評価を実施し、解説を加え取りまとめたものです。

希少野生生物を含む自然環境や生態系は、私たちの生活に密接に関連しており、一度壊されてしまうと元に戻すことは困難です。

本書が本県の希少な野生生物に対する県民の理解促進に役立ち、自然環境や生態系の保全につながることを心から期待しております。

2020年３月

青森県環境生活部長　三浦　朋子

青森県の希少な野生生物

－青森県レッドデータブック（2020年版）－

令和２年（2020年）３月発行

編　　集　青森県レッドデータブック改訂検討会
　　青森県環境生活部自然保護課
　　青森市長島一丁目１番１号
発　　行　青森県
印　　刷　青森コロニー印刷
　　青森市幸畑字松元６２の３

■許可なく転載、複製することを禁じます。

AOMORI RED DATA BOOK2020

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。
VEGETABLE OIL INK 植物性インキを使用
「この印刷物は500部作成し、印刷経費は1部当たり1,650円です。」